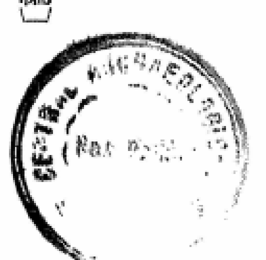
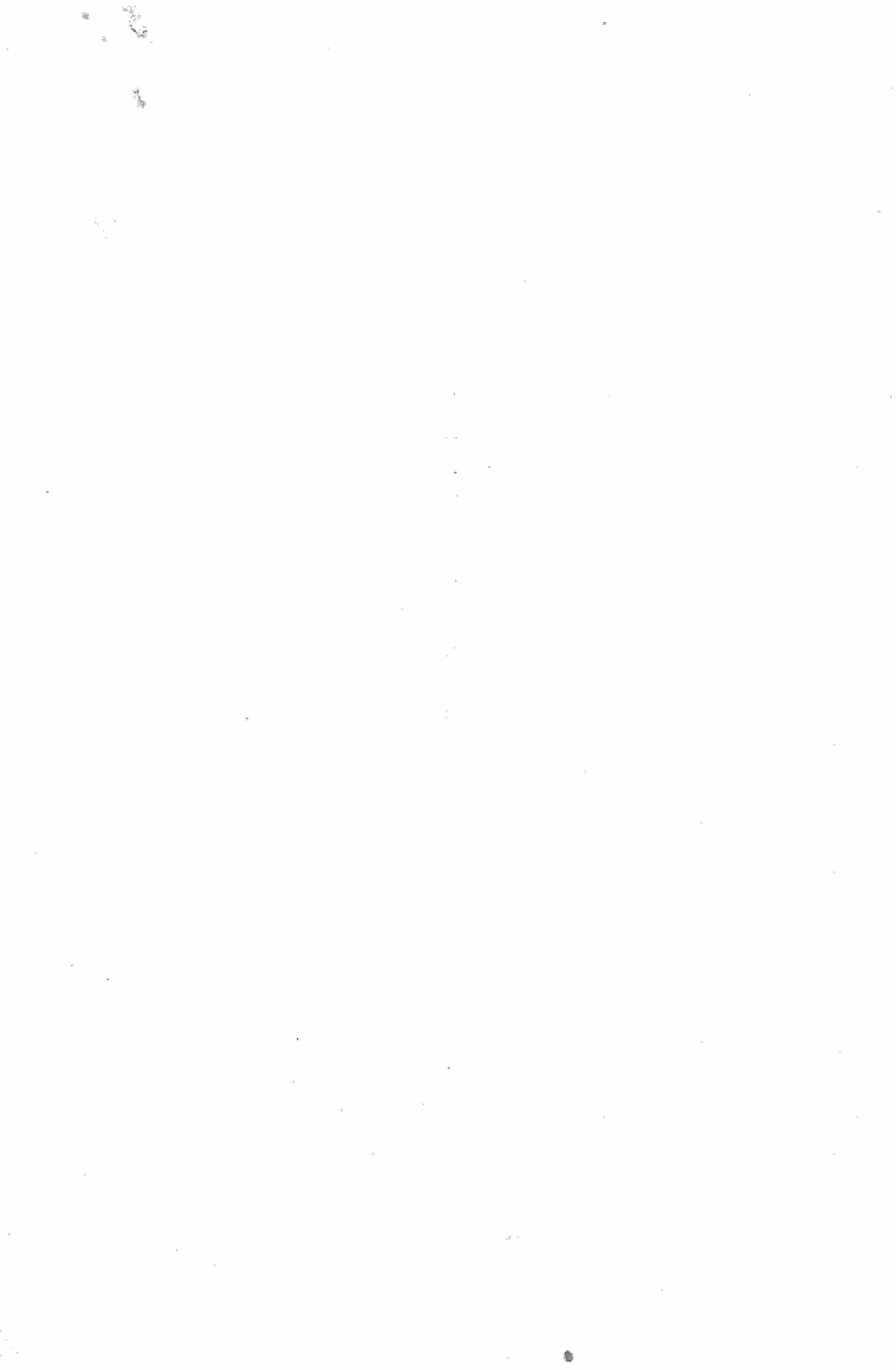
東京灣に注ぐ主要溪谷の貝塚に於ける

繩紋式石器時代の編年學的研究豫報〔第一編〕

大山史前學研究所





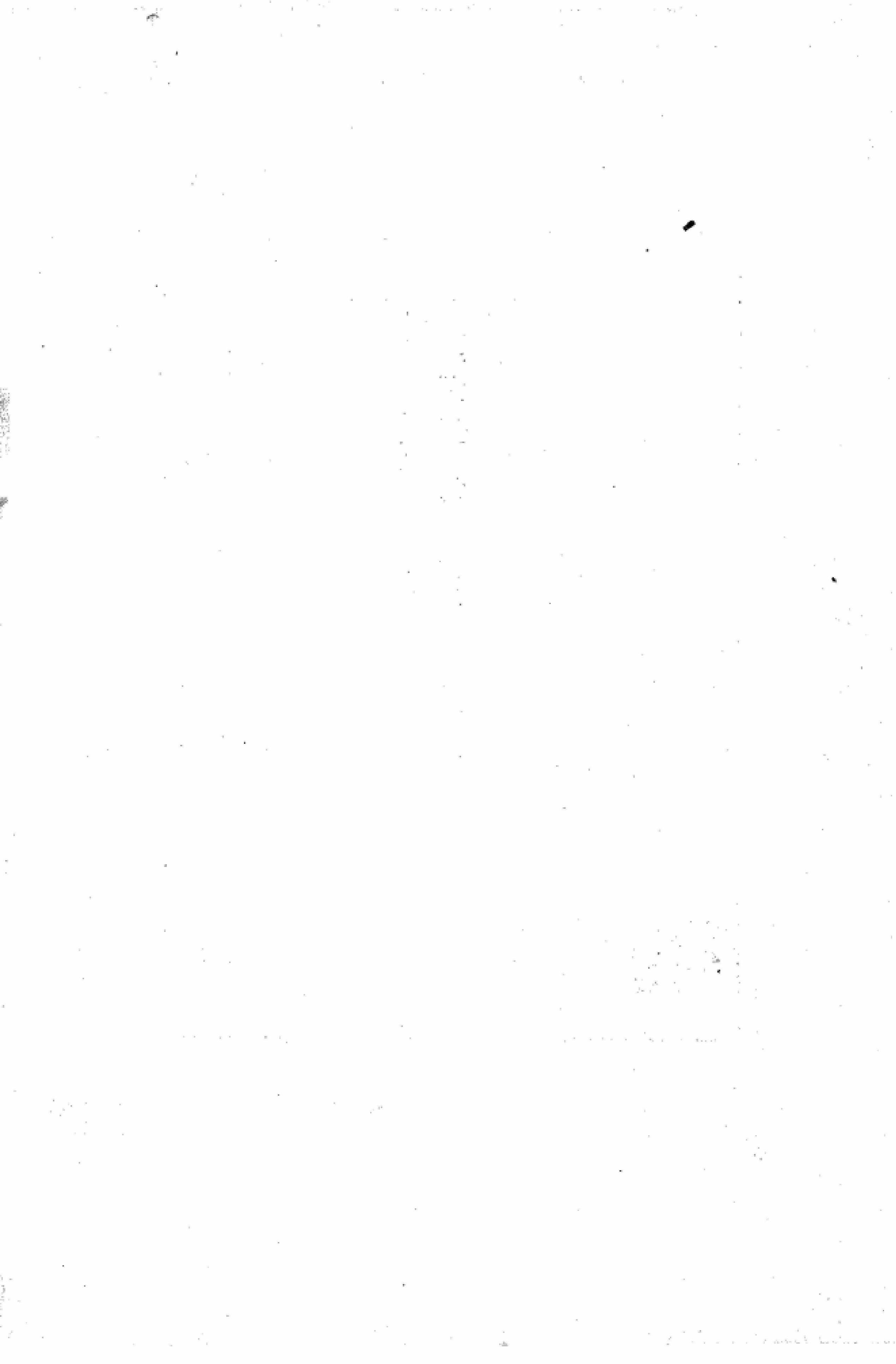
大山柏
宮坂光次
池上啓介

東京灣に注ぐ主要溪谷の貝塚に於ける

繩紋式石器時代の編年學的研究豫報（第一編）

史前學會刊行

史前學雜誌
第三卷第六號代册



神奈川縣橘樹郡日吉村矢上谷戸貝塚貝層斷面（約三分ノ一）

目次

第一章　總説

第二章　編年學的研究の方法

第三章　調査地域に於ける一般狀態

挿圖目次

東京灣に注ぐ主要溪谷の貝塚に於ける繩紋式石器時代の編年學的研究豫報（第一編）

大山柏
宮坂光次
池上啓介

第一章　總說

一。はしがき

本研究は表題の如く、東京灣に注ぐ主要諸溪谷に於ける繩紋式石器時代の諸貝塚に對し、豫め其方法とこれに伴ふ實施計畫とを定め、これに基いて編年學的研究を試みんとしたものであり、昭和二年九月、神奈川縣・日吉村・矢上・谷戸貝塚を實査して以來、こゝに五年の星霜を閲みしたに拘はらず、諸種の事情に基き其實施遲延し今日未だ當初の計畫に基く、豫定調査地域の全部を盡すに至つて居らない。最早や其大部を終了し、目下餘す所幾何もないけれども、尚一通り豫定調査を完了するまでには、相應の日子を要し、且つこれ等の各地實査終了後に

於て、其全地域に對し、夫々調査上の不備不足を補ひ、又これ等よりの發掘遺物を整備して、全般に亘る研究を完了して、これが精査報告を發表するまでには、更に多くの時日を費す可きを慮り、こゝに簡單に豫報して、以て精査報告の遲くるゝに備へると共に、先づ其結果を學界に報告して其批判を仰ぐものである。

この實地調査に當つては、私共研究所同人等の參加は申すまでもない所ではあるが、今日の結果までに到達し得たことに就ては、小金井良精博士、田澤金吾氏、杉山壽榮男氏、佐野淡一氏、松本與三郎氏等の直接參加幇助を得たるに止まらず、多くの先輩、同志の鞭達助力、並に各遺跡の地主、耕作者及び地方各位の厚誼に浴した結果に外ならない。其個々に受けた所の厚意に對しては、更に將來精査報告に於て、夫々感謝の意を表するけれども、取り敢へず、玆に謝意を表するものである。

二。研究の動機

私共が相集り、貧しいながら研究所として、互に一團となつて働く以上、我が國史前文化研究に對しても、何等か其方針を樹立し且つ私共の一團として相應しき研究に從事したい爲、これに關し色々協議の結果、我が國史前文化研究の現況に鑑み、從來幾多の先學によつて、築きあげられた、今日の分野を基礎として、其將來に遺された部分に向ふのが、私共として進む可き道であると信じ、其研究方向に就て審議した。其結果、今日我が國には繩紋式石器時代研究に於て、未だ確乎たる編年學的研究が成立して居らない故、この研究に向うて進むことと定めた。然しながら、我が國に於ける繩紋式全部に對し、一時にこれを遂行し得ざる可きを慮り、この第一步として、先づ關東地方に於てこれを試み、其成果に鑑み以て、繩紋式文化全般の編年學的研究に對する一標準尺を

創設し、これに立脚して、第二次以下、漸次、其研究範圍の擴大を期したのである。本表題の如き研究は、この編年學的研究の基礎をなすものであり、これを第一次計畫として、以下豫報して居る如き研究に從事した次第である。

この編年學的研究の必要であり、今日我が國の研究に於て、進まねばならない一方向であることは、玆に改めて云ふを要しない。又これが事實に於ても、一言にして、我が國に於ける石器時代と云ふても、其當初と終末との間には、相應なる時的經過の存し得べきことは、由それが同一文化階梯に屬する、新石文化内に在つても、存在し得べきことが考へらるゝ。如何となれば、我が日本諸島の様な、東北より西南に狹く延び、其中央には骨幹山系を見て、陸上交通の、大陸平地地方などとは、自づと異る地形的環境にあつて、從來發見せられた、石器時代遺物發見地數の萬餘に達し、且つ地方によつて其發見地の密度濃淡の存するものがあるにしても、殆んど全日本群島に亘つて、其分布を見て居る所からしても、我が國石器時代文化が、各地一様に發生し、又同時に消滅したものとは考へられない。そこに文化存在の遲速に對する、時的經過があつてもよい。この時的經過が、如何様にあつたかは詳でないとしても、其存在が肯定せらるゝ以上、これに對し、編年學的研究を行い得る餘地を存することが、考へらるゝ。

今日、我が國石器時代文化に於て、先學の研鑽によつて、繩紋式文化と、彌生式文化とが、見らるゝことは、周知の事實である。この二大文化に對し、これが相關々係は勿論、兩文化、夫々に就ても、猶研究すべき多くを存するが、今回私共の研究した所は、繩紋式文化内に止まり、彌生式それ自身は勿論、これとの關係に就ては、一切觸れては居らない。これとて、私共に於て、其必要は痛感するものゝ、今回の研究をして、複雜ならしめざ

る爲、かくこの方面方面を除いた次第である。

我が國に於ける縄紋式文化に於ても、其分布が殆んど全日本諸島に及んで居り、且つ地方によつては、相應な所謂地方的色彩も見らるゝのであるから、これを同時に其全般に亘つて、編年學的研究を行ふにしては、獨り其對象地域の廣さに過ぎるばかりに止まず、各種資料の豐富に過ぎる結果は、反つて研究を複雜過重ならしむることを恐れ、先づ其地域を私共として手近にあり、且つ縄紋式文化としても、一大文化中樞を形作つて居る、關東地方を對象として研究することゝ定めたのである。

この關東地方は、申すまでもなく、縄紋式文化に於ては、東北地方と相待つて、其遺跡の分布密度も濃厚であり、特に貝塚の如きは、他に見ることが出來ない程、多くが發見せられて居る。又本地方に於ては、同じく縄紋式文化内に於て、其土器の示す形式に於て、從來より呼び慣はされて居る、所謂厚手式＝私共はこれを勝坂式と呼ぶことにした＝なるものと、所謂薄手式＝私共はこれを大森式と云ふ＝なる形式[1]との存することは、既に古くより唱道もせられて居り、[2]中には其編年學的關係に就ても、論及を見ては居つたが、未だ定説を生むに至らずに終つた。其後に榊原氏、[3]大場氏等[4]によつて、本地方に於ても、從來よりの所謂厚手、薄手に兩形式以外に、諸磯式なる一形式の存在を高唱せられ、且つこれと、前兩者に對する、編年學的位置に就て、諸論を見たが、これ亦定論を見ずして終つたのは、遺憾であつた。

この樣に同じく本地方に於ける縄紋式文化内に於ても夫々特徴の存する土器群が存在し、且つ夫々の分布地域に就て、多少の相異が存するものがあるにしても、これ等を出土せしむる諸遺跡は、互に近く相複在するものがあり、中には往々一遺跡にして、これ等の二種以上の出土を見るものが存する以上、これ等の諸形式が生る可き

動機に就て、何等かの理由があらねばならない。從つて、もしこれ等の成生が、或は共存在の一場合として、時的關係に基いて居るなれば、三者に對する編年學的研究も、全く同一形式のみであつて手掛りの無い場合と比すれば、より容易でもあり得る。卽ち豫め知り得ないにしても、この三者が編年學的關係に存在するか否かの、調査研究が、編年學的研究の一手掛りとなるのである。換言すれば、編年學的研究の端緖も、この三者相關々係によつて導かれ得可くんば、共の結果をも生じ得る。

以上の如き現況に對し、幸にして編年學的研究が成立したとすれば、新に編年の準據が出來る以上、これに基いて、第二次、第三次と、各方向に向つて研究が可能であるだけ、それだけ、この當初に生る可き標準編年は、確實であらねばならない。萬一にも、本編年に於て、誤りあるに於ては、これに基礎づけられた第二次以下の研究は、悉く過誤を根柢とすることになる。それ故此の如き編年學的研究には、共確からしさに對し、特に嚴密なる吟味を必要とする。以上の如き事態をも辨へ、私共としては、充分なる確信のもとに、本報告を發表して居るもの丶、上述の主旨に基き我學界に於ては、これに對し嚴格なる批判を試み、且つ忌憚なき推敲をお願するものである。勿論今回の報告は、共名の如く、豫報に過ぎないのであるから、個々の問題に就ては、多く述べても居らないし、共主眼として居る所は、以下述べて居る所の、この編年學的研究方法、共實査の概況と、共結果の要旨とに過ぎない。從つて總て盡さぬ所も多いとは考へるが、これは漸次增補訂正の上、精査報告に於て萬全を期し、今回は單に一般大局上から、これを見て戴き度のである。

（1）不用意に行はる丶新術語の增加並に改正は、研究を複雜ならしむる故、悦ばしきことではない。それ故、能ふ可くんば、從來の慣例に從ふ可きである。只他の一面から見れば、學術の進運に比例してそこに、從來に見て居らない新しい現象を取り扱ふ樣な場合には、新術語

の作出も亦止むを得ない。或は從來の用語に、不充分の點、特に其意義が明確でない樣な場合に、これを限定する必要からも、一部の改正も行ふ可く餘義なくせらるゝこともある。それ故、以上の如き場合を考慮した上で、新術語や改正用語等の出來てくることは、學術進展上、止むを得ないことゝ考へる。

今回私共の研究に於ても、屢々この問題に就ては論義した。が、新に術語も作り、改名もして居る。其一例とも見る可きは、こゝに從來よりの慣例に於て、厚手式、薄手式等と呼ばれて居るものに對し、其意義をより明確にする爲、特に其相違が單に形式上の相違に止まらず、編年學上の夫々一階梯であることを明にすべく、夫々其代表的と考へる遺跡に基きかく改名したものである。卽ち文化階梯上に於ける勝坂式、大森式等であるとの意義を明にした。而して夫々の特徴に就ては後述し、其内容を明にする。

又これ等は、日々變り行く世相に基き、用語としても、新時代に添ふ可く、これに適應した術語の生る可き場合もあり、新興の科學として、慣例に從はない樹立をも見ることもあるが、私共今回の術語の新設改正等は、多く此樣な考に基いたものではない。

（2）古く厚手式と薄手式の間に於ける區別に就ては、大山柏、神奈縣下新磯村字勝坂遺物包含地調査報告、（昭和二年）に若干は觸れて居るから、玆に新に記さない。同書、註、（2）（32）等參照。

（3）榊原政職。相摸國諸磯石器時代遺跡調査報告。考雜。十一の八。（以下雜誌略號は、昭和五（六）年、史前學年報に從ふ）

（4）谷川磐雄（現大場氏）。諸磯式土器の研究。考雜。十四の九。十五の一。等參照。

第二章　編年學的研究の方法

第一節　編年學的研究一般

三。總　　說

編年學的研究としては、豫めこれを豫期しない場合に於ても調査研究上、多くが其結果として、編年學的研究可能の場合に遭遇することもあり得る。例へば、明確なる層位的發見の如きが、こゝに其一例として擧げ得る。もし最初より編年學的研究を試みんとする場合に於ては、何等か其目的達成の方法は、豫め樹立せられねばならない。私共の試みたものは、この後者に屬する。

又從來既に、確乎たる編年が設定せられて居る場合は、これより第二次以下、研究を誘導することも出來るが、未だこれを見ない場合は、更に其設定方法が確立せられねばならない。一般石器時代の編年學的研究方法なるものは、必ずしも夫々の場合に共通し得るものではない。多くが其對象たる石器時代の性質に基き、夫々の方法が成立する。玆に述べて居る東京灣沿岸主要溪谷に於ける縄紋式文化の編年學的研究の如きは、申すまでもなく、空間的に東京灣沿岸主要溪谷と限定せられた地域に於て而も遺跡として、貝塚に限り試みらるゝものであり、且

つこれ等は相對的な編年設定で、更にこれを文化階梯上から見れば、同一階梯に屬する新石文化內に於ける編年學的研究なのである。從つて、其結果に於て、夫々編年階梯の設定を見ても、夫々の編年階梯間に存する時的經過の差異—以上これを、編年時差と略稱する—及び、編年せられた各階梯相互間に於ける文化上の差異—これを階梯文化差異と略稱—にしても、大きな隔ての生じ得るものではない。編年時差としても、これを舊石各期相互間に見る樣な、悠久なものでもなく、又舊、中、新石文化の相互間に於て見らるゝ樣な、階梯文化差異も存す可きではない。從つて、この場合は、編年時差も、階梯文化差異も少なきものに對しての編年學的研究方法であらねばならない。これに對し、過古に於て、先學の示された編年學的研究方法に於ても、今回の企圖に對しては私共の不學の故か、不幸にして、取つて以て、直に私共の試みんとする研究の範例たるもの見出しては居らない。それ故、この目的達成の爲には、其執る可き方法が、創造せねばならなかつたので、後述して居る方法にまで到達した經路として、こゝに普遍的に用いられて居る一二を吟味して、行く。

四。層位學的方法 (Stratigraphische Methode) に基く編年學的研究

この層位學的研究は、其正確なる層位發見に基けば、其層位成生なる自然原則の動かざる以上、比較的容易に且つ確からしさも多く、勞少なく効大なるものゝ存する。從つて、其發見は望ましきことではあるが、尙吟味を要すべき件々がある。

第一には、今回私共の企圖した樣な場合、果してよく確然たる層位を構成するだけの、編年時差が存したか否か。特に前述の如く、編年時差の大きくない、場合に於ける研究である以上、豫めこれに對し、大なる期待が出

來ない。勿論、遺跡に於て二種以上の形式を有する土器が出土する場合の如きは、特に其層位構成に注目すべきものではあるが、それとて其混在事實たるや、果して明確なる層位をなすか否かは、豫見し得ない。

猶この層位的存在なるものは、各層間に於て、明確に其層位が、判別し得なければ、危險も伴ふことがある。〔1〕又文北修行があつても、これが漸進的に行はるゝ場合には、層位明確を期し得ないことが多い。從つて第一の層位成生後に於て、若干なりとも、人爲關係の層位構成休止、即ちこれを層位學的立場より見れば、所謂間層の成生があれば、上下兩層の區分はより明瞭とはなる。但しこの間層の存在は、其構成期間だけの文化內容が、不明となるものであるから、理論上、間層の構成期間に比例して、上下の文化層間の中間に文化上の溝渠も生じ得ることゝなり、兩者相關々係が、より不明確にもなつて行く。更に層位を明確に見らるゝ爲には、第一の層位構成後に於て、これと異る層位が構成せらるゝ樣な、層位構成の要素に變化があれば、層位相互間の區分明瞭とはなる。例へば、人爲現象に於ても第一の層位構成の時代には、貝類多食の結果、所謂貝層を形成したが、生活樣式の變化等の原因から、最早や貝類捕食が行はれなくなり、これが爲、其文化層の構成が、第一の層位に對し、明に區別し得る、第二の層位を構成する樣な、場合であれば、層位の區別はより明ともなるが、此の事情が、存在し得るか否かは、現實に出會せぬ以前には全く不明に屬する。

第二には、よしそれが層位學的研究によつて、編年學的研究が成立し得るとしても、私共の企圖したものに於ては、現實に於て前述の如く、關東に於ける繩紋式文化には、所謂、厚手式(勝取式)薄手式(大森式)及び若干の諸礒式なる三形式の土器を伴ふ文化群が知られて居つた故、これを層位學的事實に照し、三者の相關々係を律する爲には、少なくとも一地に於て、夫々を含む、三層位を發見するか、さなくんば、夫々二者包含の層位を有する

二箇所以上の層位存在の遺跡を發見せなければ、總てを盡すことにはならない。もしこれ等三者相互の關係を律し得べき層位發見を見なければ、この方法によつて、或は三者共存と認むる樣な場合も出來てこないとも限らない。

第三には、層位の存在すべき遺跡の種類に就て見るに、關東地方に於て主要なるものは、貝塚と所謂遺物包含地とであつて、其他は顯著でない。從つてこの兩者の中に於て、層位的發見の可能性が多いものと見なければならない。然るにこの兩者共に所謂野外構築住居跡であるから、其の占む可き位置に就ては、石器時代人として、大約の條件があるにしても、必ずしも層位が成生する如く、前の住居者の占位した直上に、或る年月を經てから後の往居者が占位しなければならない程、それ程嚴格なる條件が存したものとも考へられない。居住に良好なる條件が具備せられた所であるなれば、大約の位置は、上下重複はするとしても、それが層位を形作る程、正しく重複するかは、一定し得ない。特に前住居者と、後住居者との間に、土器等の形式が變化する程の或る年月を經た後に、野外に於て重層占位が、行はるかは忖り難い。又貝塚等に於て往々住居跡の重層するものを見るけれども、果して文化階梯を異にする程、それ程相互間に時的經過が存するものか疑い深い。寧ろ其住居地存續中の一現象となる可き場合が多いと考へる。卽ち時的經過が近か過ぎても、文化差異は見出し得ないことも出來る。これが洞窟、岩陰等の如き、所謂制限範圍を有するものであるなれば、其占位條件には、地域の限定がある以上、前後の時差の大小に拘はらず、洞窟等の形貌に變化を見ざる限り、層位的成生の公算は、大なるものと認め得るけれども、單なる野外住居に於ては、前述の如く、或る年代を經過した後に於ける、其重層占位の公算はこれに比してより少ない。而して關東地方には、洞窟、岩陰等は存在しても、中心地方に對し偏在もして居る。(3) それ故、洞窟、岩陰等の調査も一方法とは認めらるゝが、他の野外に於ける層位的存在の可能性に就ては、豫め朴し得なか

つた所である。

第四には、以上述べ來つた層位學的方法の公算如何は暫く別として見ても、私共の當初に企圖した編年學的研究に對し、其層位を明に示して居る樣な、層位存在の遺跡を、如何にして知り得るかの問題に到達する。この層位の存在すべき遺跡に就ては、過古先學によつて報告せられた結果に基くか、或は異形式土器等混在の有無等を聞知するにしても、層位存在の遺跡を適確に搜出し得べきかは、大なる疑問に屬する。卽ちこの存在を新に豫見すべき方法なるものが、不幸にして無い。關東地方に於て、層位を確認し得べき顯著なる記錄は、私共は僅少のものしか見出して居らないし、(3)又新に聞知し得なかつた。この樣な事情であつた故、層位的存在に就ては、偶然の發見を期待する外は、なかつたのである。從つて、この一事のみに於ても、豫め最初より意識的研究の方法としてとり得なかつたものである。勿論この層位學的方法を否定するのではない。寧ろこの方法たるや、常に其事實の發見が先行し、これに基いて、この方法によつて研究せらるゝものと考へる。それ故、この事實を發見した以上は、これに依る可きは、云ふをまたない。又私共に於ても、埼玉縣下慈恩寺村・花積貝塚に於て、これに出會し、所謂層位的發掘調査も行ふたのであるが、豫めこれを花積貝塚に存するかは、全く知らなかつたのである。これを要するに、層位的研究の價値は認め得ても、當初より意識して撰ぶことが出來得なかつた。從つて更にこれに代る可き他の方法を考出しなくてはならなかつたのである。

五。其他の編年學的方法

層位學的方法によらずして、編年學的研究を試みんとするには、私共の如く、關東地方に限つた場合に於ても

尙多くが案出せられ得、必ずしも私共の試みた方法のみとは限らない。要は何れの方法にせよ、確からしさが、多ければよい。これに對し、出土遺物の研究を主體として、編年的結果に誘導せんとするが如き、所謂遺物編年學とでも稱す可き、方法があり、よく行はれても居る。然しこの方法たるや、其内容に於て、多くが所謂形態學的方法を採用して居る。もし單なる形態學的研究のみであるなれば、如何に其前提が充實して居つても、推論たるを免れない所であるから、他に確乎たる公算を有するものとは、自づと其立場を異にするものがある。且つ往々研究者の主觀の混入も亦止むを得ざるものがある故、公算低下もこれに伴ふ場合を生ずる。それ故、單なる形態學的方法に何等か、他の有力なる現象と結合せしむるか、さなくんば、寧ろ編年設定後に於て、其根柢を編設せられた階梯上に求めて、更に第二次的以降の研究に最もよく其成果を發揚し得るものと考へる。未だ編年學的研究を見ない最初の場合には、果して其成果が如何なるものか、これが確からしさの批判も、なし得ない、公算上、二分の一にある場合も容易に起り得る。

又前述して居る如く、旣に文化階梯の明確であるものに立脚して、それより出發して漸次編年設定を進むるのも、一方法であるが、前者と同樣今回の場合には、適應して居らない。

更に他に、何等か時に關した自然法則と結び、これに基いて、今回企圖した樣な、文化上の編年設定をなし得る如き方法もある。且つ其結ばれた自然法則なるものが動かぬ以上、これが確からしさも亦、これと比例すべきものである。但しこの時に關した自然法則たるや、其時的推移に從つて、其變化の狀態が顯著に見られないと、文化上の編年も亦不明確となり、且つこの自然法則たるや、これが意識的搜出も、比較的容易であり、文化研究と連絡も存して居らねばならない。

この方法の一例としては、層位學的方法も其一つではあるが、前述した故これを略し、他にこれを例出するなれば動物群乃至植物群等に於ける夫々の時的變化に基く編年設定に結合して、文化上の編年設定を試みんとする方法も存して居る。只今日我が國に於ては、未だ私共の研究に結合せられるゝ如き、これ等夫々に於ける編年設定がない。從つて、これ亦採用し得なかつた所である。

更に尙、考出して見るなれば、自然作用に基く編年も尙多くがあらうが、私共が、今回の編年にまで到達したのは、主として以上述べた如き方法の採用し得なかつた爲、これに代る可きものを求め、且つ只今述べた所の、何等かの時に關する自然法則に結ばんとした結果に外ならない。

第二節　貝塚貝類の習性に基く編年方法

六。本方法の一般

この方法は、今日私共のとつた所であり、これを全稱的に云へば、『同一溪谷內に存在する諸貝塚に於て、其包含する貝類の淡鹹に對する習性に從つて、夫々個々の貝塚に包含する貝類の淡鹹の程度を決定し、これに基いて、夫々の史前海岸線を想定し、其の海岸線に對する夫々貝塚の占むる位置に從つて、其貝塚構成時代の新舊を朴せんとするもの』である。

以上の方法に就ては、既に私共同人の甲野勇、埼玉縣柏崎村・眞福寺貝塚調査報告【史前學會小報第二號、昭

和三年】に於て、發表して居る。只、同報告に於ては、單に眞福寺貝塚を包含する綾瀬川溪谷のみに就て、これが適用を見、其結果として、同報告の所謂黑谷系の諸貝塚と、眞福寺貝塚との間に於ける相對的編年の成立を見たのである。それ故、以上の方法一般に就ては、一通り同書に於てなされても居るけれども、私共今回調査の基本ともなることであるから、こゝに重複を厭はず、說述するものである。

七。貝類の淡鹹に對する習性

本方法を說明するに當つて、先づ述べねばならぬものは、貝塚に發見せらるゝ貝類の有する淡鹹に對する習性である。特に私共の硏究上の對象として居る、東京灣に臨む各貝塚に於ては、其出土する貝類は、其種に於て餘り富んで居らないに拘はらず、はまぐりの如きを主體とした鹹水產の貝類のみより成る貝塚もあれば、しゞみの樣な淡水產に富むものも存する等、必ずしも一樣ではない。これ等貝塚に存する貝類に對し、例へばはまぐり、さるぼう、はいがい、かゞみがい、まて、あかにし、つめたがい、ばい、きさご等の如き鹹水性の强き貝類を主體とする貝塚を鹹水貝塚とし、しゞみ、いしがい、かはにな、たにし等の如き淡水性のものより成る貝塚を淡水貝塚となし、其出土の程度に從つて、大約次の五種に其標準を定めた。

一。純鹹貝塚。全く鹹水產貝類より成り淡水產を含まない。

二。主鹹貝塚。若干の淡水產貝類を含むも、其主要貝類は、鹹水產よりなるもの。

三。淡鹹貝塚。鹹水、淡水產、略相半ばするもの。

四。主淡貝塚。若干鹹水產貝類を含むも、其主要貝類は、淡水產よりなるもの。

五。純淡貝塚。全く鹹水產貝類を含まざるもの。

備考 1 本標準は、主として私共の發掘調査の結果に於て定むるものではあるが、後述して居る如く、貝塚全地域に對しては其發掘調査の範圍は狹いから、他に如何なる部分の存するかは、勿論不明には屬する。然し大約其貝塚に於ける貝類の狀態を判斷することは出來ると信ずる。

2 この標準の決定は、表面に於ける狀態、貝層に於ける貝類に對し、主として各調査者の觀察を綜合するものであるが、屢々發掘せる貝層の中央附近に於て、體積十五糎立方に於ける含有貝量に基く百分率をも併せ、其標準を決定して居る。

3 この標準決定に當り、各標準に對し、其程度に著しい偏りを見る場合には、更に「純淡に近き主淡」、「鹹水の稍々優れる淡鹹」等の如く、より細示する方が、明瞭となる場合もある。

4 發掘部分によつて、貝類の程度が夫々相異る結果を生ずる如き場合は、夫々其部分に於ける程度を指し、强いて全般に亘つて、其程度を決定するにも及ばぬものと考へるが、此の如き場合は、多く鹹水產の部分、淡水產の部分と分れるのが通常であるから、一種の淡鹹貝塚と見、其部分に於ける相違を明記することにした。

5 場合により、一、二の貝塚を單に鹹水貝塚、四、五を同樣に淡水貝塚と稱する。

勿論この標準は、概括的のものであり、理論的に極論すれば、一貝塚に於ける全含有貝類の調査に基き、確乎たる決定を見る可きものではあるが、本標準が全然用をなさざる程度にまで覆ることゝも思はれない。要は其精度にあるが、本研究としては、この標準を以て足れるものがありと信ずる。更に本標準をして、確からしさを增大せしむるものは、貝類以外の水產生物の出土である。水產植物の如きは、通常の場合其殘存を期待し得ないものがあるが、水產動物、特に魚類遺骨によつては、貝類と同樣に、淡鹹の習性に基き、標準となし得るものが存する。故に本研究に於ては、特に魚骨に注意し、貝類と併せ見ることにしたが、事實に於て、魚骨に富み、其種類の判斷を下し得るものもあつたが、又全く出土を見ないものも亦、多數に存し、又出土を見ても、其特徵を示す部分なく、或は私共のこれに對する知識不足に基く等、貝類と同樣には、取扱ひ得なかつた。

八。本方法の説明

貝塚に存する貝類の淡鹹に基く習性が、上述の如く五標準に區分し得らるゝものとして、各溪谷に存する諸貝塚を見る。今こゝに一溪谷内に於て、淡鹹の程度を異にする二貝塚が、互に近く存在し、一つは鹹水產の貝類より成る貝塚――單に略して鹹水貝塚と云ふ。――であり、他は淡水貝塚―前者と同樣義に用ふ―でありと假定する。然る時は特別の事情なき限り、この兩貝塚は、同一溪谷内に存する以上、同時共存が出來ない。もし海岸線が深く谷内に入つて、そこに鹹水產貝類の獲得が行はるゝ場合同時にそこに淡水產貝類は成育し得ない。他より搬入等そこに特別な事情を見ない限りは、鹹水の時代があり、又淡水の時代が存したと判斷するを妥當とする。即ちこゝに、兩者の間に時的相違が認めらるゝ。而して少なくとも關東地方に於ては、一般的に史前時代に於て、海岸線が今日に比し深く只今の陸地内に灣入して居つたことは、多くの鹹水產貝塚の、今日の海岸線に比して、遠く現陸地内に發見せらるゝことによつても、容易に考へらるゝ。今こゝに其一例を擧げて見るならば、元利根溪谷に於ける、純鹹貝塚である、千葉縣關宿町・元町貝塚の如き、現東京灣最近海岸線まで約五十粁弱隔つる有樣であり、獨り此の如き多くの純鹹貝塚を見るに止まらず、海產哺乳類と覺しき遺骨(6)や、海產魚類の遺骨の出土(7)からしても、通常の場合は、海岸線が漸次後退するものと考へらるゝ。さすれば、前述の如き、一溪谷内に、淡鹹の差ある二貝塚を認めた場合、もし鹹水貝塚の方が、淡水貝塚に比し、より谷奥に位置するなれば、其鹹水貝塚の方が、淡水貝塚に比して、其成生の時代が、より古いと云はねばならない。同時共存を許さず、一般に海岸線が後退するものであり、且つ其位置に於て谷奧に存する以上、その附近乃至はそれ以上に、海岸線が進入して居つ

た時代でなければ、この鹹水貝塚は出來ない。而して海岸線が漸次後退して、其淡水貝塚の位置以下に退いた後に於て始めて成生を見る可き淡水貝塚よりは、より古いことが肯定せられ得る。この原則に立脚して、進むなれば次の如き第二の原則が生れ得る。

選ばれたる一溪谷に於て、淡鹹の程度を異にする多くの貝塚を見る場合、其最も谷奥に位置する鹹水貝塚は、其溪谷内に於て、他のより谷口に近く位置する淡水貝塚に比しては、より舊く成立を見たものと考へらるゝ。繰り回すまでもなく、其溪谷として、海岸線が少なくとも其鹹水貝塚の附近乃至それ以上に進入して居つた時代の所産である以上、それが舊き貝塚であることが肯定せらるゝ。かくして、其溪谷としては、舊き貝塚を發見することが出來る。

此際、この舊き貝塚と同様なる他の鹹水貝塚が、より谷口に近き位置に存在したからとて、この舊き貝塚を決定する場合に支障は起らない。同様に最も谷奥に位置する鹹水貝塚、即ち其溪谷に於ける舊き貝塚より、更に谷奥深き位置に、淡鹹貝塚乃至は、淡水貝塚等の存在を見ても、これ亦支障はない。これ等は暫く除外して、其溪谷としては、後述して居る如き、新しき貝塚を決定して後、其除外してあつた貝塚の有する文化相を明にし、これを新舊兩貝塚と比較を試むる。もし新舊何れかと、文化上平行關係を認めらるゝものは、夫々其編年上に於ける位置は容易に決定することが出來る。それ以外の場合に就ては更に後に説明をする。

この舊貝塚の決定に對し、これと同一溪谷内に於て、最も谷口に近き位置にある淡水貝塚は、其溪谷としてはより新しき貝塚と肯定することが出來る。今述べてきた如く、海岸線が漸次後退して、其谷口に近く位置する淡水貝塚附近乃至は、より以上に後退した後でなければ、其淡水貝塚の成立を見ない。それ故、其溪谷としては、

新しき貝塚であると認むることが出きる。かくして其溪谷としては、淡鹹の程度を異にする諸貝塚が存する以上、其程度と其占位する位置との相關々係から、新舊の兩貝塚が相對的に決定せられ、而して兩者間には、大約其最低限に於て舊貝塚附近より、新貝塚附近にまで、海岸線の後退に要した時的經過だけの、編年時差が存するものである。

この新舊兩貝塚の決定を見たならば、これに基いて夫々の貝塚に於ける文化上特殊性を研究する。特に其土器の示す性質を探究して、其選ばれたる溪谷内に於ける新舊の文化相を決定する。此の如き方法に基く研究の一例とすべきが、前出した綾瀨溪谷に於ける諸貝塚の研究であつて、其より谷奥に位置する純鹹貝塚である深作貝塚はより谷口に近く占位する主淡貝塚である眞福寺貝塚に對し、より古く、前者は研究當時、所謂黑谷系の土器＝關東前期繩紋式土器の一部＝を有する文化を見、後者は當時所謂薄手式＝關東後期繩紋式土器＝大森式土器＝の文化を示したのである。

この様にして、同一溪谷内に於ける、諸貝塚に對し、其新舊の文化相が研究せられた上は、この新舊兩文化相に基いて、他の諸貝塚と對比を試み、新舊兩文化相の何れかに平行關係を認め得るものは、平行文化として編年階梯が決定せらるゝ。然る時は、其溪谷の諸貝塚に於て、新舊何れにも屬せざるものが、取り殘さるゝ。この取り殘された諸貝塚に對しては、これ等の有する淡鹹の標準に基き、其位置に從つてこれと新舊兩貝塚と對比を試みる。卽ち當初に述べた原則により、其近く位置する新舊何れかの己知貝塚と淡鹹の程度と其位置とによる對比の結果、何れかに對し、新舊の關係が生れ出づればこれに基いて、相對的に編年上の位置が決定せられ得る。勿論必ずしも決定し得ない場合も生じ得るけれども、都合よく貝塚淡鹹の程度と位置とが存すれば、決定は容易で

ある。此樣にして、生れ得べくんば、最初に新舊兩貝塚を決定し、其後に中間に位置すべき諸貝塚の、編年位置をも決定して、一溪谷中に於ける貝塚の編年學的研究をなすことが出來る。

九。本方法成立の條件

本方法は以上の如くにして編年學的研究が行はれ得るけれども、無條件で成立するのではない。そこに成立の條件が多く存する。

第一には、對象とすべき一溪谷に於て、多くの貝塚が存在して居らねば、研究は出來ない。それが溪谷をなさない所、或は溪谷内にあつても、單獨では比較の標準が立たない。これに對しては、關東地方、特に私共の對象とした、東京灣に注ぐ主要溪谷は、貝塚に富んで居る故、この第一の條件には適合し、且つ私共の選んだ以外にもこの條件に適するものは存する。

第二には、同一溪谷内に多數貝塚を存しても、これ等貝塚の貝類に、淡鹹の變化が無く、或は少なく、前述した樣な、淡鹹の標準に示して居る樣な差違がない場合には、本方法は成立し得ないか、或は成立困難ともなる。例へば、同一溪谷に於て、諸貝塚悉くが一樣に、鹹水貝塚である場合には、新舊の相違を見出されない。又若干の差はあつても、諸貝塚が等しく淡鹹貝塚のみである場合の如き、其差が顯著でなく、從つて淡鹹の標準決定如何によつても、多少の變差を生じ得るのであるから、其差違が明確に認る得る程度以下であるなれば、其方法を以てしては、好果を齎し得ない。換言すれば、淡鹹貝類の相違が大であれば、あるに從つて、本方法に基く編年學的研究の結果が明瞭となり得る。

第三には、貝類に基く貝塚の新舊は認識し得ても、夫々其新舊貝塚に於ける文化相にも、明瞭なる相違が認められなければ、編年設定せられて見ても、其階梯文化差違も亦、これに比例して漠然たるものになる。從つて文化上に於ける差違、卽ち階梯文化差違も、より大であればあるに從つて、編年設定は明確となり得る。但し萬一にも貝類に基けば、貝塚の新舊はよく認め得ても、文化上に何等の相違を認知し得ない結果を見たとしても、其時的經過期間に於て、何等の文化進展を見なかつたと云ふ結果は、これより竄し得ることは出來る。

第四には、本方法は一溪谷内に於ける貝塚間に於ける相對的研究である以上、夫々其新舊貝塚の決定も其溪谷に限らるゝものであるから、一溪谷の結果のみを以て、總てを律し得るかは、一つに其溪谷内に於ける各貝塚の性質によつて決定せらるゝ。今回企圖した如く關東地方に於て知られて居る各種形式の土器群が、悉く其溪谷内に於ける貝塚に包含せられ、且つ夫々の形式の土器を有すを貝塚の貝類にして、如上の原則に照して、夫々其新舊の關係が朴し得るゝならば、一溪谷に於てのみでも、其結果は求め得る。もし以上の如き溪谷を見ないなれば、少なくとも、夫々二つ以上の形式の土器を含む貝塚を有する數溪谷に於て、夫々の相關々係を朴し得るまで、多くの溪谷の調査を必要とする。萬一にも、調査區域内に於ける貝塚中に、上述した三種の形式を有する土器中の何れかを缺く場合には、其缺けたる形式に對する關係は認知することが出來ない。これを認知せんとせるなれば、この種土器を包含する貝塚に出會するまで、多くの溪谷を調査する必要も生じてくる。

第五には、本方法の根本をなすものは、これ等諸貝塚構成時代に於ては、海岸線が順當なる後退を行ふものとして成立して居る。もしこの期間に於て、溪谷奥に於ける沈降作用、乃至は谷口に近く其外側隆起作用等の特異な諸現象を見るに於ては、本方法の逆現象すら起り得る。それ故本方法を試むるにしても、この樣な特異現象の

有無に就ては、豫め考慮せられねばならない。今これに就て見るに、萬一にも逆現象を見たとしても、それは一時期間のみであつて、其後に於て今日の如き地形に到達すべく更に順當なる海岸線の後退を見なければならないのであるから、其場合には海岸線の前進と後退との兩現象が見らるゝ可きである。これが有無に關する地質學上の研究は、暫く控置して、單なる史前學上から見ても、冲積地に存する諸貝塚、[8]乃至は冲積地に於ける泥炭遺物層の存在[9]其他[10]によつても、逆現象を見得ないことが、證明せらるゝ。更に本調査の結果に於て、前述した花積貝塚に於ける層位的存在の事實は、本方法によつて編年せられた結果に一致を見たのであるから、これよりしても其逆現象の發生を否定する一證據とすることが出來る。

十。本方法の公算及び調査溪谷の決定

本方法が成立するとしても、上述の條件が伴ふ故、簡單に且つ僅少の類例のみの結果によつては、或はそれ以外の地域に於て、如何なる狀態を見るや計り知り難いものが存する。それ故なる可く取り纏つた地方に於て、遺漏なく多くの溪谷調査を必要とし、且つこの個々に於ける各溪谷の結果が一致すれば、するに從つて、本方法の公算は增大を見る。

この主旨に基き私共は、今回の調査を先づ東京灣に注く主要六溪谷を主體と定めたものであつて、これ等は互に近く相存するに止まらず、溪谷深く多くの貝塚を存し且つ等しく東京灣に注いで居り、實地調査にも便である爲、これを主要調査溪谷と定めたものである。但し東京市街地に存する、大井川、目黑川、溜池、神田川、不忍池―西原、板橋等の諸溪谷には、貝塚の存するものがあるが、發掘調査の不可能に近きものがあり、舊形の遺存

に就ても疑存する故、これ等は本調査より省いた次第である。同様に大なる溪谷内になき、所謂外貝塚と稱せらるゝ如きものや、或は溪谷内に單獨所在の如きもの除き、主として谷長大なる溪谷に於て、多數貝塚を存する溪谷を選んだ爲、後述して居る如く、西南に於て鶴見川を境とし、東南に於ては、元利根溪谷以西を主要調査地域と定めたのであつて、貝塚に富む國府臺より千葉附近に亘る丘陵地方の如きは、千葉溪谷を除いては、谷長、大でない故、主要調査地域に編入しなかつたのである。

更に上述の主旨により、主要溪谷に於ける結果を吟味すべく、今日の利根川溪谷の一部分である、中利根溪谷（關宿附近─木下町附近）及び當初より東京灣外に注ぐ、今日利根川の一支溪谷である、飯沼溪谷に於ける調査をも併せ行ふことゝなし、既にこれ等一部の調査の終了を見、其成果を得尙將來に於ては、更に鬼怒溪谷の實査をも希望して居る次第である。

十一。本方法と關東地方一般との關係

本方法は貝塚に於ける研究であるから、貝塚以外の諸遺跡には觸れて居らない。從つて實際に於ても貝塚以外の所謂遺物包含地其他の調査は、殆んど行ふても居らない。これを關東地方全般から見れば、全く貝塚に偏した研究と云ふことが出來る。其結果として貝塚以外の諸遺跡に於て、或は私共の調査した諸貝塚に於て見た、文化相、特に其土器の形式に於て、それ以外のものが存するか否かは、全く未知に屬する。卽ち本研究の結果が必ずしも關東全般に亘り、且つ總てを盡した編年であるとは斷じ得ない。然しながら、從來に於て知られて居る範圍内に於ては、關東地方に於て、私共の調査した以外の諸遺跡の示す文化相の過半は、今回私共の樹立した各編年階梯

の何れにか屬すべき性質のものであり、特に私共の大森式（關東後期繩紋式）か勝坂式（關東中期繩紋式）と編年して居る兩者何れかに屬すべきものが其大部分を占めて居る。それ故、嚴密なる理論上から關東全般の編年とこそ云い得ないけれども、事實に於ては、これに近きものであると信ずる。勿論以上は、發見の現況に對してゞあつて、將來までも保證するものではない。特に考ふ可きことは、よく今回の編年が確認せらるゝとしても、私共の關東前期繩紋式卽ち關東としては前期であるにしても、關東以外を含む全繩紋式文化に於て、必ずしも其前期に位置すべきかは、全く未知に屬する。而して我が繩紋式文化全般に就て見るに、今日知り得て居る以上に、必ずより原的である文化祖原がなくてはならない。其所と文化階梯とは今日の處、全く不明であるにしても、將來に於ては今日迄に知り得たる文化より、より原的である文化にも到達し得ることを考慮して見れば、今回の編年上最も古い階梯である前期のそれに比し、更により古き階梯の存在し得べきことは、豫め辨へなくてはならぬ所であると共に、今回の編年なるものが、現況に對しての編年であることを明にして置く。但し將來に於て、今回編年した以外の階梯に出會したからとて、多少の校正は見ることがあるとしても、今回の編年全般に亘つて、編年設定を悉く改むる樣な結果に到達する迄のことはなく、少なくとも今回の編年に於ける大局上の階梯順次には、變化なきものと考へる。

十二。本方法に基く、編年學的研究實施計畫

本方法が、其要求して居る各條件を滿し得る狀態にありとしても、其成否は一つに事實の調査に依つて決せらるゝ。今日までに於て關東地方、特に東京灣に注ぐ諸溪谷に於ける貝塚に關する文獻資料は、私共の企圖を滿し

得るものが、殆んどない。從つてこれ等に就いては、寧ろ其勞を厭はざるに於ては、獨り研究の確實を期し得るに止まらず、この實地踏査の上に於て、私共自身に於て、期待しなかつた收獲までも、體得するものがあり、必すやこの勞に報いらるゝものがあると信じ、こゝに其主要溪谷と考定したものゝ有する全部の貝塚に就て、其實査を企圖したのである。其主要六溪谷を列記すれば次の通りである。

一。鶴見溪谷

二。多摩溪谷

三。入間溪谷

四。綾瀨溪谷

五。元荒川溪谷

六。古利根溪谷

備考　この主要六溪谷以外に於て、中利根溪谷、飯沼溪谷の二溪谷を併せ實査して居る。（六の5參照）

以上の諸溪谷に含まるゝ貝塚は、概算百餘を算するのであるから、單に個々の貝塚を概見するにしても、これが實査には多大の日子を要す可きことを慮り、豫め次の樣な實施計畫を樹立し、これに基いて實査に着手したものである。

1　調査方法。個々の貝塚に於て、其性質を先づ概察し成る可く速に、豫定地域に於ける全部を通覽する爲、一日一貝塚の發掘調査を立前として、每週一回施行（後述第一期間は每週二回）。

發掘は夫々の貝塚に於て、成る可く貝殼集積の多き部分に於て、一日に發掘し得べき範圍（五―十平方米）

の發掘。但しこの發掘は、其貝塚に於ける包含貝類の狀態、文化遺物、特に其土器樣式の決定等を主眼とし、併せて一般狀態に就ても、成し得る限りの研究を行ふ。此場合、一日にして不充分と認めたる時は、引き續き、同一貝塚を調査。又一貝塚と稱せらるゝものにして、貝殼の集積地、斷絕して個々に集積地域はを有するもの＝これを貝塚群と稱する＝にあつては、成し得る限り、夫々個々に就て、各一個所發掘。或一貝塚にして、貝の種類特に其淡鹹の習性を異にするものが、地域を異にして集積せらるゝ場合には、夫々個々の發掘。同樣に一地に貝殼集積するも、淡鹹の習性を異にするものが、層位的に集積を見る場合は、層位的發掘の要領に基いて調査を行ふ。

2 調査範圍。前述主要六溪谷。現利根川溪谷に屬する二溪谷。及び成し得る限り、この研究地域內に存する他の諸貝塚（特に沖積地貝塚を含む）。研究を擴大する場合は鬼怒溪谷等に及ぶ。

3 調査期間。昭和二年九月より、昭和五年に至る、約三ヶ年。

4 調査者。大山史前學研究所員一同を主とし、同志の援助を受く。但し地方的に各自分擔することなく、一同、同一箇所を調査するを立前とする。

5 調査區分。調査を次の四期に分つ。

A 第一期。諸溪谷に於ける上流地區に存する鹹水貝塚の調査。

夫々の溪谷に於て、谷奧に位置する、鹹水貝塚を搜索調査、卽ち舊貝塚の研究を試みる。この場合夫々の溪谷最奧に位置する貝塚より開始し、谷口に向つて調査を行い、鹹水貝塚を發見するまで谷口に下る。

B 第二期。諸溪谷に於ける下流地區に存する淡水貝塚の調査。

夫々の溪谷に於ける谷口に近く位置する淡水貝塚の搜索調査、卽ち新貝塚の研究。最も谷口に近き貝塚より始め、淡水貝塚を發見するまで、谷奥に向つて調査。

C 第三期。諸溪谷に於ける中間地區に存する貝塚の調査。

第一期第二期調査に、取り殘されたる中間地域に存する貝塚を調査。この際夫々の溪谷に於ける本支總ての溪谷に含まるゝ貝塚を調査して、夫々の溪谷內に於て、未調査貝塚なきことを期する。

D 第四期。當初の計畫に基く調査終了後に於て、調査地域の擴大。當初の計畫實施に於て、不充分と認めたる貝塚の再調。特に文化研究上、必要と認めたる貝塚の、稍々其規模を大にせる發掘。研究地域內に於ける沖積地所在其の他の諸貝塚の調査。本研究上必要を認めたる、貝塚以外の遺跡の調査。

E 第五期。發掘遺物の整備。綜合報告の發表。

以上の計畫に基いて、昭和二年九月以降、これが實施に着手したのであるが、諸種の事情に遭遇し、實施の甚だ遲延するものがあり、今日猶其豫定の全部を終了するに至つて居らない。この計畫から云へば、第三期の半ばに達し、昭和六年秋までに於て、約九十餘の貝塚を調査し、第三期の殘りは、僅々十餘箇所に過ぎないのではあるけれども、更に第四期に於て、本研究をより完ふする爲、多くの課題が殘置せられても居る。これが今日までの實施概況、並に本方法に基く結果の要旨に就ては、以下夫々其分擔に於て、述ぶる所がある。(以上、大山)

(1) 私共の層位と稱して居るのは、史前學上に於て、主として、文化遺物を包含する地層に於けるそれを指して居る。
この層位は、往々にして、局部的には層位の如く見えるが、他に於ては全く一致して、これを認め得ない樣な、所謂疑層の存在することは、私共の屢々經驗して居る所である。(大山柏、東京府下調布村千鳥窪貝塚所見。人類。四一の十一。第五一四項參照)

(2) 大山は、關東地方の石器時代關係の洞窟に就て特に研究したことはないが、關東地方と云ふことも、洪積層や沖積層の發育して居る、所謂平地地方では、自然洞窟は見られない。從來報告せられて居る洞窟としては、山崎直方。上總守谷洞窟に於ける史前時代の遺跡に就いて。人類第四〇の三。(但し其土器は彌生式と報ぜられて居る。又同報告中には、辨天崎洞窟の記述を見るが、これ亦彌生式である。)八幡一郎。安房國安房郡神戸村の古人骨埋沒地。人類。第四〇の三。(この埋沒地は洞窟であるが、所謂岩陰(Abri)であるか、大山には明でない。又こゝよりは貝器等の外、土器に就いて報ぜられてない。

猶この外、幾何の洞窟調査報告が存するか、未詳ではあるが、存在するとしても、中心地外である。又獨り房總方面に止まらず、武甲國境方面、秩谷方面其他所謂山寄りの地方には、現在調査報告せらてなくとも、洞窟、岩陰等の存在は可能ではあるが、何れも關東としては、外周的である。

(3) 關東地方に於て、層位的存在を確認せらるゝ顯著なものは、山崎直方、八幡一郎、中谷治宇二郎、相模國中郡旭村萬田貝殼坂遺跡。=層位的に時代別を示す石器時代遺跡=人類。四〇の五。に發表せられたものがあり、私共同人の多くも參加したのであつたが、其結果に於て、重要なる編年學的資料の提出を見たに拘はらず、この研究が持續せられなかつたことは、遺憾である。今回私共の研究に當つては、其地域の關係上、本遺跡には觸れなかつたけれども、關東全般の研究に於ては、見て置かなければならない遺跡であるとは、考へて居る。

(4) 史前學上に關係ある動物編年の一例は、舊石時代に就ては、大山、歐洲舊石器時代(考古學講座)第一編第二章第三節其一。動物。參照。中石時代に就いては、大山、北歐に於ける中石時代、マグレモージアン文化概說。史前雜。第三の二・三。其二の五。動物編年。參照。又新石時代に於ける動物編年の適例は、未だ見出して居らない。但し新石時代に於ても、其動物群の一部に於て、絕滅移動等の諸現象からも、或る編年的結果に誘導し得る場合も存するとは考へるが、今回はこれ等の内容には觸れないことゝする。

(5) 史前學上に關係ある植物編年に於て、舊石關係の適例は乏しいが、中石時代に關聯せるものは、大山、前揭、マグレモージアン文化概說。其二の六。植物編年參照。新石時代に就ては、局部的に行はれ、スヰス杙上生活系の一部に對する研究等これを見るけれども、範例的にまで、顯著とも思はれない。私共に於ても、植物編年の一部である泥炭編年に就いては、既に着意して調査もしたが、好果を齎し得なか

つたことを遺憾とする。

（6）海產哺乳類の遺骨と覺しきものは、今回の調査に於て、元荒川溪谷及び古利根溪谷等の數貝塚より出土を見たが、これ等個々に就いては精査報告に讓ることゝする。其一例は第三章（7）參照。

（7）海產魚類の遺骨を出土した貝塚は相應に多い。これ亦、其個々に關しては畧する。其種類に於ても全く鹹水產のもの、ぼら、すゝき等の淡鹹に亘つて棲息するもの、乃至は、こひの如く淡水產のもの等が存し、貝塚の貝類との比較の對照ともなるが、今日未だ充分な研究を行うて居らないから、他日に讓ることゝする。

（8）私共の調査地域附近に於ける沖積地所在の貝塚に就いては、既に古くより知られて居るものもあり、例へば府下瀧野川町中里貝塚の如き、白井光太郎、人類、一の六三（明治十九年）に報ぜられ、其後佐藤傳藏、鳥居龍藏、人類、九の二九四、三五（明治二六、二八年等）多くの報告がある。又最近報告せられた一例は、關口竹治、東京府下岩淵町袋窪田の彌生式土器及び縄紋式土器。史前雜。第二の一。に報ぜられ、同報告に從へば、縄紋式土器を出土する所は、貝塚であり、又この貝塚に就いては、調査者の一人である樋口清之氏よりも聞知した所ではある。

　この沖積地貝塚に就いては、昭和六年秋まで未だ私共として實査して居らない。而してこの種貝塚中には獨り縄紋式所產に止まらず、彌生式の貝塚の存することも知られて居るけれども、こゝでは、沖積地に貝塚の存在によつて、其土地が早くより沖積せられ、先住民が居住し得るまでに到達して居つたことが、證明せらるれば足るのであつて、これは獨り貝塚のみによるものでなく、他の同樣の遺跡の所在に於ても、同じく證據とするに足るものとは考へるが、これ等の事實に就ても亦、未だ研究しては居らない。更にこの沖積地所在の諸遺跡に對しても、尙細部に攻究を要すべきものがあるけれども、實査の上に於て更に發表したいと考へて居る。

（9）關東地方に於ける泥炭遺物層は、既に大正十五年十一月私共は、埼玉縣柏崎村眞福寺に於て、同地貝塚に接續せる位置にあるものゝ發掘を行ふて居る。この發掘の結果は、諸種の事情で未だ發表してない。更にこの外、關東地方に於て、眞福寺と同樣な泥炭遺物層と認めらるゝ一二を撿出しては居るが、未だ發掘調査を行ふては居らない。これ亦こゝでは、泥炭成生の一部が、貝塚構成の一部と其時代が合致して居ることを認めらるればよい。而して申すまでもなく、泥炭の成生は、淡水に聯關せる所深いのである。而して直接史前文化に關係のない、關東に於ける泥炭の分布は、意外に廣く、私共の調査した各主要溪谷の殆んど全部に亘つてこれを見らるゝ樣である。從つて將來、泥炭研究の專門家によつて、或は編年研究をも見られ得ることもあると考へるし、其成生が明になれば、更に海岸線後退の事情が明

になることゝも考へる。

(10) 逆現象を見ない例證としては、以上の外、繩紋式文化を見た以降に於ける、他の諸遺跡が、沖積地に於て、見る場合は、其附近が早くより沖積せられたことが認められ、引いて順當なる經過があつたか否かの判定資料ともなる。これ等に就ても氣付かぬことはないが、(大山、東京府下調布村千鳥窪貝塚所見。人類。第四一の十一。附錄。川崎平地の成生に就て。參照) これ亦、尙足らざるものが多いから將來に譲る。又この研究は、單なる史前學上の問題に止まらず、多くが地質學上に其根柢を發して居る。それ故、これに對しても、專門の地質學方面よりの研究に待つ處も多い。これ等二三に就ては、私共の研究上、觸れざるを得ざるものに就ては、觸れても居るけれども、更に將來地質學的研究の進捗に從つて、より明なる結果も齎し得ることゝは信じて居る。

第三章　調査地域に於ける一般狀態

十三。概　說

前章に述べた方法に基き、實査を試む可き範圍は、百餘の貝塚を含む。九溪谷（今日迄に調査したのは、鬼怒溪谷を除く八溪谷）であり、これを順次に漏なく實査して行くのであるが、この豫定全地域に對し、已往に遡つて、我れ等の方法に對する參考とすべき文獻は、殆んどない。只石器時代遺物發見地名表（以下地名表と略稱）に基き、其全部に對し實査の計劃を立案したのであり、特に我等の知らんとする諸貝塚に於ける貝類の種類の如きは、記錄上全く不明であつた。現實の資料に於ても僅に我研究所で發掘調査した、武藏・眞福寺貝塚及び其四周の概察並(1)に大正十五年九月に調査した府下調布村・千鳥久保貝塚等(2)に就て、現地調査と其發掘資料とを有したに過ぎない有樣であつた。其外、計畫地域外の關東地方の研究資料としても、研究所の創立日淺く、大なる參考資料として所藏するものなく(3)、殆んど白紙に近き狀態より本研究に着手したものである。

以上の有樣であつたから、現地の事情に就ても、全く知るものなく、從つて其各個の調査に當つても、貝塚に到達するまでに、多くの苦心を要し又時間を空費したことも少なくはなかつた。且つ現地に於ては、往々地名表記載と一致せざるもの、又は新發見等も加はり、研究實施の意外に遲延をも生じたのである。今これ等の細部研

Fig. 1. 調査地方溪谷一般圖

究を述ぶるに先つて、豫め其外劃を紹介して、讀者の了解に備へて置く。

十四。調査地域一般

調査地域として定めた範圍は、已述の東京灣に注ぐ、六溪谷を主要調査區域とし、我等の方法が果してこの區域外に於ても適用し得るか、否かを檢する目的を以て現霞浦へ注入する三溪谷を副地域として決定したのであるが、これ等の總地域は所謂關東平地の一部に過ぎないが、綜括的に洪積丘陵が發育し、今日では丘陵間は槪ね沖積平地を以て滿されて居り、そこにはこれ等沖積作用を營む源泉たる大小の諸河川で注入して居る。

洪積丘陵は槪ね西北より東南に向つた方向に發育し、且つ標高は餘り高くない。其多くが最低十二米内外より最高三十米内外の間にあるが、勿論各丘陵によつて、夫々相異るものがあり、多摩丘陵、卽ち多摩川の右岸の丘陵の如きは、他に比してより高く標高九十米に達する所も少なくない。特に留意すべきは、埼玉丘陵（第一圖參照）の如き谷奥の貝塚附近では、標高十三―十六米内外であるに對し、沖積地も高く十一―十二米にある關係上比高は僅々三四米に過ぎない有樣で、更に其上限方向卽ち、西北に遡れば沖積地の比高増大して、十三米を越へ、爲に丘陵との比高が近接し、終に相互間の區分甚だ不明確となり、一面丘陵たるの性質を失ふことゝなる點であつて、特にこの現象の甚しきが古利根溪谷の西北地方卽ち埼玉丘陵の北側附近である。而して此の如き比高少なき地方には、所謂遺物包含地は存するものがあるが貝塚を殆んど發見して居らない所は、著目に價する。

沖積地としても、其高さは一樣でない。一般的に見て谷奥貝塚附近は高く、前述の如く十乃至十二米を算するが、谷口方面へ下ると、漸次低下し、七乃至八米となり更に現海岸線に近くに從つて、五米を下つて居る。この

景況よりしても、海岸線が今日に至る或る經過を想像せしむるものがある。

これ等溪谷を流るゝ諸河川に就ても、考ふ可き多くを藏するが、詳細は後日に讓り、只溪谷稱呼に就て、萬一の誤解に供へる事とする。鶴見、多摩兩溪谷に就ては説明すべきものはないが、現荒川の流域に對し、特に入間溪谷と稱したのは、荒川なるものが後世人工的に開鑿せられ、今日の流路をとるに至つたもの故、史前當時、主要なる河川は入間川に在つたと判定した結果、入間溪谷と名づけたものである。綾瀨、元荒川に就ては説明を要しないが、古利根溪谷なるものも、當時東京灣に流下し、德川時代に、屢々改修變更せられた結果、今日の流路をとつて、霞浦方向に流下したのであるから、[3]かく古利根溪谷と稱し、現利根川の流下する溪谷上部を中利根溪谷として區別したのである(第一圖參照)。且つこの古利根溪谷には、現時も古利根川なる河川の流るゝものがあり、元荒川と同じく往昔の或るものを物語つて居る。又この古利根溪谷に於ては、其北端に見得る如く、比高少なき地帶(第一圖上點線を以て示す。この地帶を流路開放地帶と稱する。現時の幸手町西南端附近より須賀村上野田附近迄の間を指す。五萬分一。久喜參照)を經て、灣狀をなせる廣き沖積地に達する。この流路開放地帶には貝塚なく、廣き沖積地の周圍にこれを見る故、溪谷と稱するには廣きに失する樣ではあるが便宜上この廣き沖積地を古利根溪谷とし、更にこの沖積地は、東西兩方向より洪積丘陵の突出し且つ縊れある部分を境とし、(現粕壁町を東西に連ぬる線)それ以下には、元荒川、綾瀨、入間の諸川が流入して居る故、これを現況と照し、奧東京灣と稱したのである。但し研究上の便宜の爲、奧東京灣も古利根溪谷の一部として、取扱つて居る。

同樣に丘陵の稱呼に就ても、幅廣きものには武藏野臺、下總臺の如く呼び、各丘陵には總括的な稱呼を與へて、指示を容易にしたが、更に一丘陵の某部を限る場合には鶴見支丘、鳩ヶ谷支丘等と内分を行ふた。

今以上の溪谷と丘陵別とによつて、夫々の地形概念を逃べ、後章に於て説述する調査經過乃至は、文化遺物等の記述を簡易明瞭にする目的を以て順序を追ふて記する。

十五。鶴見溪谷

本溪谷は、元々標高百米に滿たざる多摩丘陵を母丘とし、且つ海岸に近接せる關係上、同溪谷の主谷を流下する鶴見川は、流長、流幅共に大でないのも當然であり、從つて同川によつて營まるゝ沖積作用も、大なるものとは考へられない。又本溪谷の一支溪谷に早淵川溪谷なるものが存するが、これ亦小なもので、兩者が谷口に近く相合して居るから、當時は別々の溪谷であり、共に谷奥には鹹水貝塚を見て居る。又鶴見主溪谷の谷口に近き右岸丘陵は多摩丘陵の一支丘に過ぎないが、貝塚に富む故、特にこれを鶴見支丘を稱して置く。

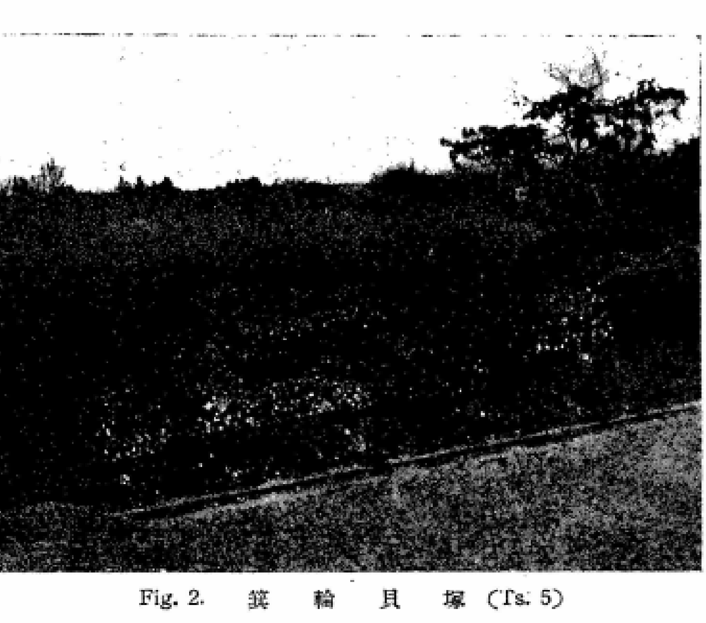


Fig. 2.　箕　輪　貝　塚（Ts. 5）

十六。多摩溪谷

本溪谷は鶴見溪谷に比すれば、流長、流幅共に大であり、秩父、西多摩山地に源を發し、右岸は多摩丘陵、左岸は武藏野臺である。溪谷幅も本溪谷谷奥貝塚である高津村久本貝塚（二子附近）では概ね四粁内外を有する。

Fig. 3.　白子貝塚遠景　(Ir. 3)

只本溪谷の現況を見るに、多摩川の流速は、他の諸河川に比し、より大であつて、今日矢口附近、即ち谷口附近より下流、六郷川に於て流速の減ずるものがある。換言すれば、兩洪積臺間は流速大でそれ以外の沖積地で始めて流速を減じて居る點は沖積作用研究上一顧すべき所と考へる。

本溪谷兩岸の景況は、略鶴見川溪谷と同様、比高比較的高く、諸貝塚はこの高き丘陵上にある。又沖積平地の標高は、上述久本貝塚の約四百米南方に於て、獨立標高十四・八米を見、これが下方二粁半を隔つる橘村・子母口貝塚附近で標高十米に下り、谷口千鳥久保貝塚附近では、標高は五米に低下する有様である。

十七。入間溪谷

本溪谷の右岸武藏野、左岸に埼玉丘陵がある。其上流地域にはより長い部分を有するが、本研究に直接必要な所は、武藏野臺西北凸端（現川越市附近）以降の地域であつて、同臺方面では赤羽凸端間を、埼玉丘陵側では、川越凸端に對應する平方村附近より、鳩谷支丘南端附近までの間を、入間溪谷として研究する。

本溪谷の谷幅は、調査せる八溪谷中、最大のものであり、川越附近でも五

粁强、谷口近くでは七、八粁を算する。この谷幅に對し、前述の如き入間川を主體として流下するものであれば、其沖積作用に於ても、他とは相異る現象を見ても、敢て異とするには足りない。

Fig. 4.　別所貝塚遠望 (Ir. 12)

右岸武藏野臺の狀態は、略多摩溪谷に面せる同臺の狀態と同様であつて、比高も大きい。これも川越附近は、標高二十米内外であるが、漸次高く、白子貝塚附近では三十米に近く、それより又低く赤羽凸端附近では、二十五米内外であり、多くの貝塚は、この臺上にあるが、中に丘脚の低い所にも一二の貝塚が見らるゝ。

左岸谷奥方面は、比高小で最奥の西方村貝塚の附近は標高十五六米、比高五六米に過ぎない。これが下つて大宮支丘附近を經て鳩ヶ谷支丘に至る間も畧同様で幾分か高いに過ぎないが、沖積地標高が、谷奥附近で九―十米、大宮支丘南方で六米、赤羽凸端北方約一粁半では僅に四米に過ぎないから、沖積地間の比高も開きが大きい。

十八。綾瀬溪谷

本溪谷は埼玉丘陵内を貫通する一小溪谷であつて、右岸谷奥附近より中部には、原市支丘、それ以降谷口まで

は鳰谷支丘が存する。左岸は岩槻支丘である。谷奥左岸にある綾瀬村・上潤戸(ウルイド)・栗崎貝塚、乃至は同じく右岸にある小室村・小貝戸貝塚附近では、谷幅漸く六七百米、本谷中央にある春岡村・深作貝塚以降、谷口までは稍々廣きも、

Fig. 5.　坂堂貝塚遠望 (Ay. 5)

大約一粁强に過ぎない。且つ谷奥方面は兩岸共に、標高低く十三—十六米で、沖積地は十—十一米を算するから、比高は僅かに四—五米に過ぎず、加ふるに丘陵斜面の寛なる部分を存するから、更に比高少なき感を催さしむる。兩岸の各支丘共略同一狀態にあつて、標高高き十三—十六米の間にある。沖積地も谷口に近き浮谷貝塚南方では、七米、谷口外谷口より約一粁の地點では五米に低下して居る。

十九。元荒川溪谷

本溪谷も綾瀬溪谷と同樣埼玉丘陵を縱貫する一小溪谷があるが、往昔荒川の流下したものと考へらるゝ。其右岸は狹長な岩槻丘陵があるが、左岸は谷奥方面に黑濱支丘を見、其東側に一支溪谷の灣入するものがあり=これを日川支谷と假稱する=谷口方面の慈恩寺支丘とで谷壁を形成して居る。

右岸丘陵たる岩槻支丘は、前述の如くで、左岸に於ける黑濱、慈恩寺兩支丘共、大約岩槻支丘と同一狀態にあ

る。只其谷奥貝塚たる右岸の綾瀬村・貝塚、左岸白岡貝塚附近より其以奥及び日川支谷に於ける谷奥貝塚たる黒濱村・江ヶ崎貝塚以奥は共に丘陵と沖積地互に近接す狀態にあること綾瀬川のそれと同一である。

谷幅も元荒川主溪谷に於ては、略綾瀬川と同一景況にあり、沖積地標高も亦、同谷と大差なく、谷奥貝塚附近では、十一米、谷外約一粁强の地點で六米七に低下して居る。



Fig. 6.　古ヶ場貝塚遺留 (M. A. 17)

二〇。古利根溪谷

本溪谷の一般に就ては、前述した如く、全く他の諸溪谷と相異るものがある。元來利根川の放下した地域ではあるが、洪積標高低く、沖積間の比高少なるなる爲、所謂溪谷と稱し、兩岸に溢水し得ざる谷壁を形成する樣な景況にはない。特に上述した流路開放地帶以奥に於て、この現象の著しきものを見て居る。從つてこの地方に於ける史前時代の主要流路が何處に存して居つたか不明である。現狀より察すれば流路は屢々變換せられ、且つ分散し總合する等多くの變化を想起せしむるものがある。

又上述の如く同地帶には、未だ貝塚の發見せられるものなく、遙に上流二十粁を隔て比高高き洪積丘陵に存する、藤岡町、海老瀬村等に貝塚を見るが、兩者共に縣假指定地の故を以て、研究を許されず且つ明確なる記錄も聞知

しない。外見した所では前者は淡水產、後者は淡鹹貝類より成り、土器は兩者共に後述してゐる蓮田式を出土する。この兩者は暫く除外して見るも、同地方以南、流路開放地帶間は其後に於ける水路開鑿等の人工も加はり、容易に詳細を研究し得ない。且つこれ等の研究が我等の研究に及ぼす所多きは認め得るも、直接舊流路を對象としての理地調査は史前學的研究の範圍を超越するものがあり、寧ろ地理學的研究に待つ所多き故、我等としては積極的に舊流域に關し研究は行ふては居らない。只附近貝塚捜索に當つて、知り得た事項は、果して我等の研究してる石器時代の當時に該當するか如何は別としても、本地帶に近き五霞支丘乃至は葛飾丘陵起部等に純鹹貝塚を見る所よりして、利根川の流口がこの流路開放地帶に存したことを、想定するものであり、且つ同地帶に見らるゝ半月形に島狀をなせる閉鎖曲線地の如き（第一圖參照）は河口時代に於ける三角州たりしものと想察するものである。



Fig. 7.　小手指貝塚遠望　(F.T. 1)

　この流路開放地帶より東南に丘陵に圍まれ廣く灣狀をなせる部分卽ち、利根溪谷と更に其南方の奥東京灣とが貝塚の主要分布地帶である。同溪谷は東西約十粁、南北は十三四粁を算し、其西北端の流路開放地帶の東北には五霞支丘を見、西より西南は五霞支丘に續いて葛飾丘陵を見

る。更に奥東京灣に下ると右岸には北より慈恩寺、岩槻、鳩谷等の各支丘を見て武藏野東端に盡き、右岸は葛飾丘陵に連つて下總臺の一部分たる國府臺に南下終了して居る。



Fig. 8.　金岡貝塚遠望　(N.T. 1)

利根溪谷に於ける冲積地標高は、同溪谷略中央に於て約八米、奥東京灣北部で六米、更に下つて南方は、現草加町で、四米弱に下れる狀態である。斯の如く廣き冲積地と雖も他と同樣に標高漸下して居る。

二十一。霞浦系統の兩溪谷

本系統に屬し、我等の調査したのは、中利根並に飯沼の兩溪谷であり、最初より現霞浦に(8)流下するものであるが、兩者一般の狀態も、東京灣方面に變りはない。

1　中利根溪谷

右岸は五霞支丘と葛飾丘陵とにより、東京灣方面と分水せられ、左岸上部は主として北方より南下する多くの支溪谷を併せ、且これ等の溪谷中には大山沼、釋迦沼、長井戸沼の如き沼澤地を有するに止まらず、諸所に水潤地の現存するものがあつて、冲積地生成に尙日若きものあるを思はしむる。左岸中部以降にも、諸所に支谷の深く北方に凹入せ

るものあるも、猿島丘陵により谷壁が形成せられ其突端取手町附近に於て鬼怒溪谷と相合して、下利根溪谷を形造つて居る。



Fig. 9　百戸貝塚遠望（N.T. 3）

2 飯沼溪谷

中利根溪谷の東側にあつて、略相並行する、鬼怒溪谷の一大支谷をなし、右岸は猿島丘陵によつて、中利根溪谷と隔て、左岸は結城丘陵によつて鬼怒溪谷と界し、同丘陵南端豐岡村附近で鬼怒溪谷と合して居る。本溪谷に於ける兩岸丘陵は他に比し、稍々高く二十米内外で谷底沖積地は九―十米を算するも、現飯沼川流域直側には、水潤地、深田等を見これ亦中利根溪谷の如く沖積生成の日淺きを想はしむるものがある。

二十二。調査地域一般に對する綜括所見

以上概述した八溪谷各地方は、今日悉くが陸地深き位置にあり、其内に多くの鹹水産より成る諸貝塚の存在することが、關東平地に親しみの少ない讀者には、或は不可思議に思はるゝ程度に考へらるゝかも知れない。我等の實査に當つた際ですら、こんな所迄も鹹水貝塚のあつたの

かと驚いたことは、一二に止まらなかつた。それ故、發堀に當つても、獨り貝類に止まらず、特に魚骨にも注意を怠らなかつた。而して一二貝塚に於て其魚類習性の全く貝類と一致するものがあり、(6)意を强ふしたことも亦特筆す可きであり、史前海岸線が深く今日の陸地內に侵入して居つたことを確信したものである。又奧東京灣に面せる一二貝塚の如きは、鯨骨の出土を見、(7)益々所信を高め今迄各個に述べてきた沖積平地標高の谷奧より漸下せる景況にしても、沖積地生成の順當なる經過を踏んで、今日に及んだことが想定せらるゝのである。

此の如く、史前海岸線が復原せらるゝこととして、諸溪谷を顧みれば多くが狹く深くそこに海水の灣入せるものであれば、洪積丘陵上の陸產と併せて、理想の生活を營み得た地域と考へられ、貝塚數の意外に多いことも、以上からして容易に肯定し得る所と考へらるゝ。又最初に本計畫を立案せられた、一理由としてこれ等諸貝塚の經營と雖も、必ずしも各貝塚同時に、始められ又同時に終止したとは考へられない、そこに遲速が存す可きであると共に、時の經過は正しく且つ規則的に進むに從つて、諸河川の齎らす沖積作用も概ね、これに從つて增大し、海岸線の後退を强いた結果は、鹹水、淡水、淡鹹等の各種貝塚を生むに至つたものである。

之を要するに、吾等の調査地域は關東平地の一部にして、山岳等の大きな起伏するものなく、只洪積丘陵の發育して、而も各丘陵は變化に富んでゐる。而して深く海水の浸入せる時代に於いては、史前民の漁撈生活に最も安易であつた結果、かく多くの貝塚を遺した事を研究の對象として、上述の方法に基き實査を行ふたものである。

（池上）

（1）前掲。甲野勇。眞福寺貝塚報告參照

（2）大山柏。東京府下調布村千鳥久保貝塚所見（人類、四一の二、大正十五、十一參照）

（3）本研究以前に於ける本研究所の關東地方に於ける調査（眞福寺、千鳥久保貝塚を除く）は次の如し。

1. 神奈川縣新磯村勝坂遺物包含地、大正十五年十月三日調査（大山柏、史前研究會小報第一號參照）

2. 茨城縣小文間村中妻貝塚大正十五年十月二十四日第一回發掘
昭和二年五月十五日第二回發掘（甲野勇、史前學雜誌一ノ一、昭和四年三月參照）

3. 神奈川縣諸磯貝塚　昭和二年九月五日

（4）利根川の治水に伴ふ流路變換の詳細に就ては、將來闡陳する機があると信じ、こゝに多くを述べない。この一般に就ては、吉田東伍、利根治水考。其他參照。

（5）現霞浦へ鹹水の湛へた事實に就ては、拙稿「廣畑貝塚」史前學雜誌五ノ五、昭和八年九月參照。

（6）拙稿、常陸、麻生大宮臺貝塚調査報告（史前學雜誌第三卷五號參照）

（7）本調査地域にして、鯨骨出土を見たのは、拙稿「鯨骨を出土せる關東貝塚」史前學雜誌五ノ三、昭和八年五月參照。

第四章　調査經過の概要

二十三。經過の一般

第二章に於て述べた如き方法を以て行はれた、東京灣に注入する主要河川沿岸貝塚の調査は、今日未だ全く予定を完了するに至らないが、昭和二年九月此調査を開始して以來、同六年七月末に至る三ヶ年十ヶ月間に實査した貝塚の數は、鶴見、多摩、入間、綾瀬、元荒川、古利根及び奥東京灣の沿岸に於て、既に九十五箇所を算し、(1)其結果は大體豫期した成績を擧げている。尙本編年方法の成果を檢すべく、直接今回の目的とする、東京灣に臨む溪谷の範圍外に出で丶、現霞浦へ向開して居る、中利根、飯沼の兩溪谷にも調査を及ぼし、併せて其結果の信ずべきものあるを思い、未尙若干調査の遺せるものを存するけれども、これ等は後續の報告に讓り、玆には既に調査せられた貝塚によつて、其要旨を最も簡單に報ずる次第である。

二十四。貝類の習性に基く貝塚區分の成果一般

第二章の方法に基く編年學的研究に於て、果して現實に幾何まで貝類習性に基く貝塚區分が成立するか否かに就ては、現地調査を開始する以前には、殆んど知る所がなかつた。只僅に局部的に二三貝塚に就て其一部を知つ

て居つたに過ぎなかつた。從つて、この點に就ては、或る信念は有したもの丶、其成果が果して豫期せる如き結果を見得るや否やに就ては、內心に於ける或る不安は、存するものがあつた。これに伴ひ、豫め貝塚貝類の鑑別に就ても、其一通りを研究し、且つ其習性に基く淡鹹の判定に當り、正鵠を失はざることを期し、其實査を開始したのである。



Fig. 10. 慈恩寺支丘，月讀社貝塚（O.T.—3）
純鹹貝層（カキ集在）の狀態

然るにこれが實査の進めば、進むに從つて、其淡鹹度の判別は、中に往々不明瞭なものも存したが、大部分は判別容易で、全般的には豫想以上の好果を齎し得たことは、大なる收獲であつた。これ等淡鹹習性の基礎をなす個々の貝類に於ても、其實査に際して並に於てこそ、蟲々たるものを見るけれども、其種には決して富んでは居らない。これ等は從來關東に於て普遍的に出土する貝類が最も多い。今夫々個々に就ては、こゝに述ぶるの紙數を有せず、これが詳細は後日に讓るけれども、槪ね一貝塚に包含せらるゝ貝類は、本調査地方に於ては、通常一五―二五種の間にあり、中にはそれ以下のものすら、往々出會し、一貝塚にして三十種を越ゆるもの丶如きは、稀に見る所である。勿論今回の發掘調査は、前述の如く豫定溪谷に於ける百餘の諸貝塚に對し、悉くを一通り豫察

的發掘調査を行ひ、且つこれを成る可く速に完了するにある以上、各貝塚個々の調査容積は、甚だ狹からざるを得ないのであるから、從つて其出土貝類と雖も、其個々に於て大なる發掘調査に比すれば、若干の不足は存することゝ考へるが、これとて根本的に其習性上の鹹度判斷を改むる程度の相違は無いと信ずる。



Fig. 11.　黒濱支丘，長崎貝塚　(M.A.—15)
淡水產卷貝層の狀態

全般的に實査各貝塚に於て、其貝類習性上、特異的現象として擧ぐ可きものは殆んどなく、往々鹹水性と淡水性とが、其集積位置を異にするもの、或は某一種の貝に限り、比較的密在するも、乃至は一般に比し、特異な貝類と思はれる貝類が、意外に多かつたもの等は存したが、こゝに取りたてゝ述べることもない。而して全實査地域の鹹水、淡水、陸產の諸貝類を總合し、其稀れなるものを含めても、五十種内外に過ぎず、多くの場合は三十種内外しか出會して居らない。

第一節　第一期調査經過概要

第二章第二節十二の5Aの計畫に從つて、各溪谷に於ける谷奥に位置する鹹水貝塚、即ち最も古くあり得べき貝塚を捜索調査したもので、昭和二年九月以降同三年十一月に至る一ヶ年二ヶ月を費し、漸く其豫定を終り六十

四貝塚を實査したものである。今夫々各溪谷實査の一般を述べる。

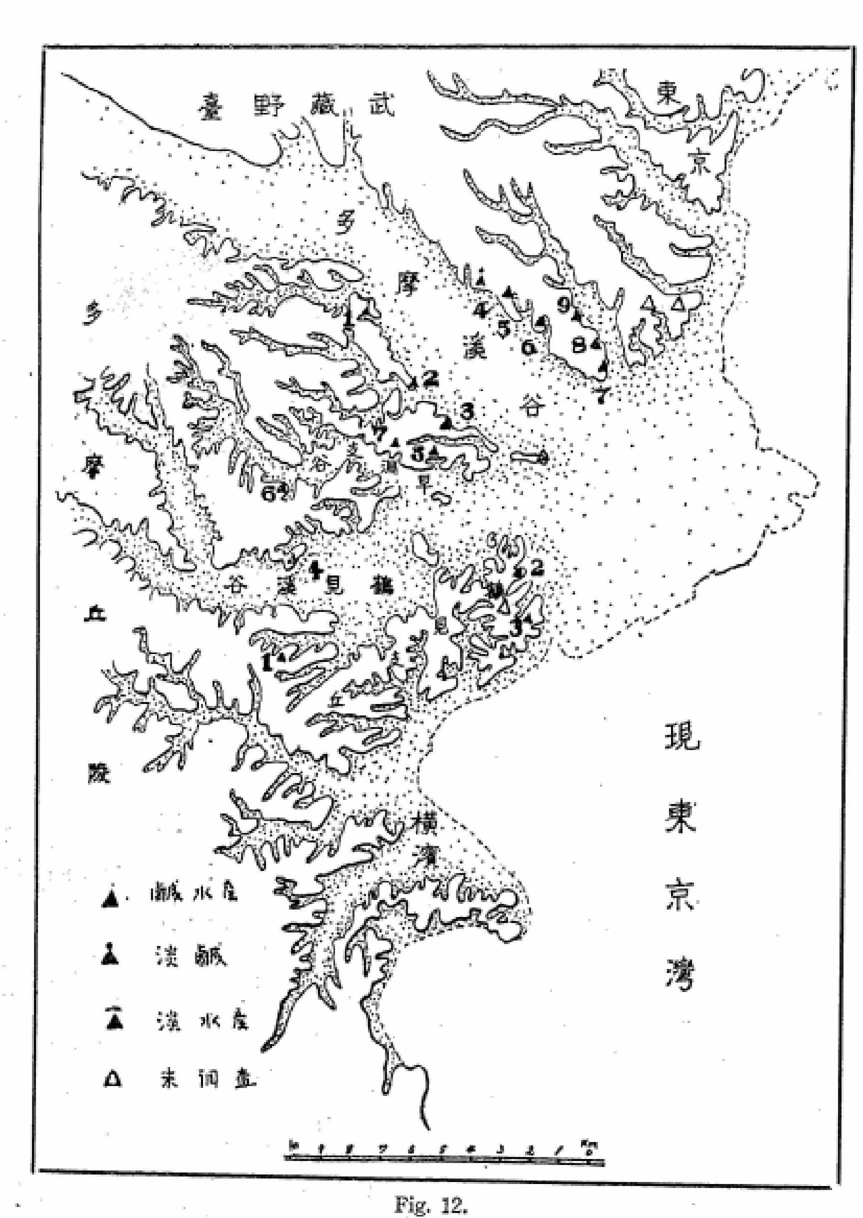


Fig. 12.

鶴見及び多摩兩溪谷の狀態

（番號は溪谷別番號の冠名を除けるもの）

二十五。鶴見溪谷（第十二圖）

昭和二年九月以降同秋に於て、多摩溪谷一部の調査と相互して、鶴見本溪谷並に早淵川支溪谷に亘つて五貝塚（第三表、Ts. 1. 4—7）を調査し、且つ早淵川支溪谷左岸、新田村・高田（第三表、Ts. 7）に於ては二種の土器混出するを發見し、これが層位的存在の有無を再調した外、豫定調査以外の研究も此間に行ふ等、(3)調査の進捗意外に遲延した。

本溪谷の諸貝塚は、何れも鹹度高く、主溪谷左岸最奥の折本貝塚（Ts. 4）（第十三圖）早淵川支溪谷最奥の茅崎貝塚（Ts. 6）の如き、共に純鹹貝塚であつた。其土器の示す文化內容は、其當時五者悉く諸磯式のみであつて、高田に勝坂式の混出を見たのを異としたが、(3)此の如く諸磯式に富んだ點は、調査當時全く豫想しなかつた所で、爲に色々の豫想をば生み、且つ比較し得る程度の鹹度を異にする貝塚もなかつたけれども、前述の方法上、諸磯式が古き所產であり得ることを想定したのであつた。



Fig. 13.　鶴見溪谷，折本貝塚　(Ts.—4) の發掘

二十六。多摩溪谷（第十二圖）

多摩溪谷の調査は、本研究當初に行ふた、昭和二年九月十二日、右岸、多摩丘陵上の日吉村・矢上・谷戸（Ta. 3）（第十四圖）に始まり、同月二十七日、小金井博士の共働のもとに、同じく右岸、橘村・子母口（Ta. 2）の第一回調査、十一月に同岸谷奥、久本（Ta. 1）の三貝塚を調査し、翌昭和三年春に入り、同溪谷左岸、武藏野臺側に侈り、谷奥玉川村・六所東(Ta.4)(佐野氏新發見)以下上沼部(Ta.5)下沼部(Ta. 6)を順序に調査し、本計畫前調査せる調布町・千鳥窪（Ta. 7）と調査聯絡を見、これと合せて、七貝塚を實査したものである。

本溪谷谷奥貝塚である右岸久本、左岸六所東兩貝塚共に淡鹹貝塚であつて、淡水產と鹹水產の貝類が、夫々多少相片寄つて集積して居る狀態が、兩貝塚互に共通せるのみならず、（第十五圖）同じく諸磯式土器が出土して居る。主鹹貝塚として最も谷奥に位置するものは、右岸では子母口、左岸では上沼部貝塚であつたが、淡水貝塚には未だ出會して居らない。

これ等諸貝塚の有する文化內容は右岸、久本（Ta. 1）谷戸（Ta. 3）左岸六所東（Ta. 4）の三貝塚が諸磯式であり、同式貝塚數の增大を見た。左岸谷奥主鹹貝塚たる上沼部が大森式土器を出土するに對し、右岸谷奥子母口のみが、特異と思はるゝ土器片を出土せるも、何分破片到

Fig. 14. 多摩溪谷, 谷戸貝塚 (Ta. 3) 遠望

つて小、量も少なく其後兩回の再調を試み、漸く一部の判斷資料を整へ得たが、第一回當時は、大約諸磯式と見て居つた。これを要するに本溪谷の貝塚に於ては、貝類習性上よりの編年方法としては、子母口、上沼部は互に地形的に相對立するに拘はらず、共出土土器を異にし、判定に困む結果を生じたのであるが、一面に於ては本溪谷の地形的特異性を知ると共に、他の一面に於て諸磯式貝塚の增大は、從來吾人等の抱いて居つた、關東繩紋式土器に對し、それが觀察の餘りに單純であつた感を催さしめ、且つ諸種の疑惑を生ずるに至つたのである。

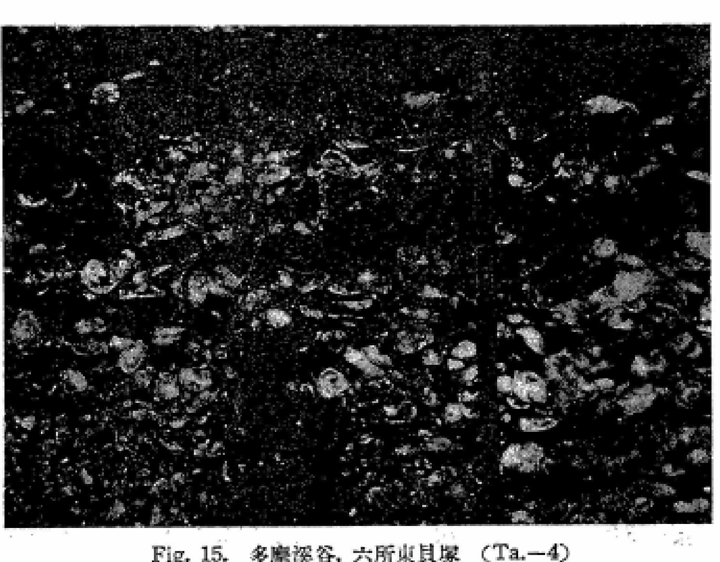


Fig. 15.　多摩溪谷，六所東貝塚　(Ta.—4)
貝層（上方鹹水，下方淡水貝類）

二十七。入間溪谷（第十六圖）

本溪谷右岸武藏野臺の調査は、昭和三年四月十六日福岡村・川崎（第三表。Ir. 1）に始まり、主鹹貝塚發見まで順位を追ふて、谷口に下れるも、これを發見せず。爲に同臺の殆んど全部を調査し、同年五月三日、谷口に最も近き志村・小豆澤（Ir. 5）の調査まで五貝塚を實査して左岸に侈つた。左岸埼玉丘陵に於ては、右岸調査に引き續き谷奥、平方村・南（Ir. 6）（研究所新發見）より逐次谷口に下り、同年六月までに谷田村・太田窪に至る十六貝塚を調査した。

貝塚は右岸武藏野では、最奧は川崎（Ir. 1.）で川越町北端に近い小仙波貝塚なるものは、發見し得なかつた。(4)

Fig. 16.
入間溪谷に於ける調査諸貝塚
（他溪谷の分を除き第一第二期調査を含む）

川崎の次位にある鶴瀬村・鶴間・貝塚山（Ir. 2）は、共に純淡貝塚で、兩者共に夫々特異相がある。これが下つ

て次の白子村・城山（Ir.3）になると主淡貝塚となり幾分鹹水產貝類が共出し、より谷口に下り、志村・中臺(Ir.4)同村・小豆澤（Ir. 5）になると、更に鹹度を增し兩者淡鹹貝塚となつて居る。卽ち谷奧より漸次谷口に向つて鹹度を增して居る現象は、面白くも見らるゝけれども、吾人等の編年方法には、直接當て嵌まらない。

左岸埼玉丘陵に於ては、谷奧、平方村・南（Ir. 6）及び同村・西貝塚（Ir. 7）（第十七圖）は共に主淡であり、以下個々の貝塚に就て、多少の差はあるものゝ、遙に下つて六辻村・白幡(Ir.13)の淡鹹に到達するまでは、概ね同樣で鹹度に變化なく、白幡に最も近い同村・文藏（Ir. 14）（研究所新發見）（第十八圖）が、漸く鹹度幾分が强く、主鹹と認め得る程度であつたが、それより谷口に近い、芝村・小谷場(Ir. 15)、谷田村・大田窪（Ir. 16)（研究所新發見）等に於ては、再び淡鹹貝塚に出會して居る。この經過を見ると、右岸に對しては、より遠くまで鹹水貝類を見、且つ鹹度に大なる變化に乏しく、これ亦右岸と同樣、吾人等の編年方法としては、希望を滿し得るものなく、一失敗例を增加した結果となつた。

Fig. 17.　入間淡谷左岸，西貝塚（Ir.－6）發掘の狀態

これ等諸貝塚に於ける出土文化遺物は、其土器に於てこの當時諸磯式と概言せられた種に富んだことは、前述

の鶴見、多摩諸溪谷と變りがなかつた。其出土狀態に於ても、これ等諸遺物は他の諸溪谷と同樣、甚だ僅少であつて、しかも土器片以外の人工遺物の如き、甚だ稀なる狀態にあつた。特に川崎（Ir. 1）鶴間貝塚山（Ir. 2）城山（Ir. 3）の如きは、微少破片のみで、其所屬文化すら確認し得ざる程であつた。更に指扇（Ir.8）に於ては、同じく土器片の出土、甚だ僅少なる上、其土器片たるや、大森、勝坂等の諸樣式に比すれば諸磯式に近きも、同式と全く同一に取り扱い得ざる程度にあり、其後に纖維土器と稱せられた或るものであり、後に研究所に於て協議の上、これを指扇式と命名した。

Fig. 18. 入間溪谷左岸，文藏貝塚 (Ir.—14)
貝層下部に於ける土器包含の狀態

二十八。綾瀨溪谷（第十九圖）

本溪谷の調査は、既に大正十五年、本計畫以前に眞福寺貝塚（Ay. 8）を中心として、附近貝塚を一巡し僅少なる資料を收藏し、且つ其調査報告の如きは、既に昭和三年六月に發表して居る。而して今次の計畫に基いて調査を開始したのは、入間溪谷に引續き、昭和三年六七月の間に於て、右岸原市支丘に於ける谷奧貝塚たる小室村・小貝戶（Ay. 1）溪谷中部にある春岡村・深作（Ay. 2）より左岸岩槻支丘基部に於ける谷奧の綾瀨村・栗崎（Ay. 3）以下、同村の關山

(Ay.4)坂堂(Ay.5)の兩貝塚を含む、左右兩岸五貝塚を發掘研究して、以前實視の谷口に近き、左岸、岩槻丘陵上の加倉(Ay.6)柏崎(Ay.7)眞福寺(Ay.8)浮谷(Ay.9)の四貝塚を加へた九貝塚を以て、一通り本溪谷奥より谷口までの調査を終了した。

Fig. 19.
綾瀨，元荒川兩溪谷並に奥東京灣右岸の諸貝塚
(他溪谷を除く)

右岸谷奥の小貝戸(Ay.1)同じく左岸の栗崎(Ay.3)は共に主淡であつたが右岸深作(Ay.2)の如きは、第一第二次の兩調査に於て、全く淡水產の混入なき純鹹貝塚であり、又關山(Ay.4)の如きは主鹹ではあるが、吾人等の發掘部分に於ては、殆んどハイガイのみより成る貝層部分を發見し、他に全く此の如き類例を見たことがなかつた(第二十圖)。更に谷口方面に於ては、加倉(Ay.6)柏崎(Ay.7)浮谷(Ay.9)等の主鹹を見ると共に、眞福寺(Ay.8)の如き主淡を存し、淡鹹の

開きを見、研究上に甚だ有利であつた。

これ等諸貝塚出土の文化遺物の内、關山、坂堂は從來に比し、より多くの土器を出土せるのみならず、特に坂堂に於ては、荒地の土取り穴に接して居つた故、發掘容易であつた故か、從來多くが複原し得るに至らない破片のみを採集し得たに過ぎなかつたに對し、全形を複原し得るもの及び大形破片を得た。この結果、出土土器の特徵も資料類加と共に明瞭となり、從來諸磯式と稱せられたものに、近緣を有するに拘はらず、尚若干の相違を見、入間溪谷に於ける指扇式とも亦、隔ての存する所から、同人等協議の上、關山、坂堂の綜合地名に因み、これを蓮田式と命名するに至つたが、三者相互に近緣を有すると云ふ形態學的見地の外、相互間に於て時間的關係を以て律し得るか否かに就ては、未だ知る事が出來なかつた。



Fig. 20. 綾瀨溪谷，關山貝塚 (Ay—4) はいがひ層の狀態

以上の外、眞福寺(Ay. 8)は明に大森式であり、小報に於て報告した深作(Ay. 2)等の外、栗崎(Ay. 3)關山(Ay. 4)坂堂(Ay.5)等の蓮田式は、大森式に比し、より古くあり得ると云ふ結果を確認し得たのである。

二十九。元荒川溪谷

本溪谷は昭和三年六、七月、上述綾瀨溪谷の調査と相前後して、右岸谷奧綾瀨村・貝塚貝塚(M.A.1)同左岸谷

奥篠津村・白岡正福院貝塚（M.A. 3）を調査し續いて七月九日、黒濱村の養蜂家高木長三郎氏の東導によつて、同村の貝塚群を豫察せる所、同村内に於て互に近く、約十箇所を算する一大貝塚群を發見し、これを一通り發堀調査する爲、同月十一日より十六日まで高木氏方に幕營し、日川支溪谷に臨む三貝塚を含み貝塚群中の八貝塚及び黒濱支丘の對岸、卽ち岩槻支丘の河合村掛貝塚（M.A.2）其他を調査し、本溪谷に於ける十一貝塚を實査して夏季に入り休止し、同年秋には更に慈恩寺支丘の調査に着手し、九月二十日以降同地に滯在して、本溪谷に臨む五貝塚（奥東京灣に面せる五調査も同時調査せるも別記す）の發堀を行ふたが、同丘陵突端にある花積貝塚（M.A.12）に於て、偶々層位的に貝層の複在する事實を發見し、これを確認する爲、同年十月一日より五日に亘つて、同貝塚を掘廢し略其事實を明確に肯定することを得て、本溪谷の調査を一先づ終了した。卽ち本溪谷にあつては、谷奥より谷口までの間、合計十七調査を實査し、谷口に近き、奥東京灣に面せる岩槻支丘の太田、木曾良、黒谷等大正十五年に概見した諸貝塚と調査連絡が出來た。

　本溪谷右岸谷奥の綾瀬村・貝塚貝塚（M.A.1）同中部の掛（M.A.2）の兩貝塚は共に淡鹹であり、左岸谷奥の白岡（M.A.3）はより淡度高く主淡であつたが、黒濱貝塚群の多くが純鹹であつた點は、以外とした所である。又日川支谷右岸たる黒濱支丘西北部にあつて、其谷奥貝塚たる黒濱村、江ヶ崎（M.A.13）は純鹹なるに拘はらず、同字内に於て同貝塚より谷口に近く、僅に一高地を隔つる同字中貝塚（M.A.14）は、全く「しじみ」より成る純淡貝塚であり、前者より蓮田、諸磯の兩式を混出するに對し、後者よりは勝坂式の出土を見、吾人等の方法として最も明確なる兩式間の時的間隔を認知したのである。更にこの日川支溪谷内に於て、最も支谷口に近き、長崎貝塚（M.A.15）は、一小貝塚に過ぎなかつたが、其貝塚は「かはにな」「しじみ」を主體とせる純淡であり、特に「か

はにな」等の巻貝が主體をなせる貝塚は、本調査を通じて唯一例であつた（第十一圖参照）。而してこの貝塚出土の土器も亦、勝坂式であつたから、上述の中貝塚と共に、吾人等の方法に、更に確實性を增大した結果を齎し得た。

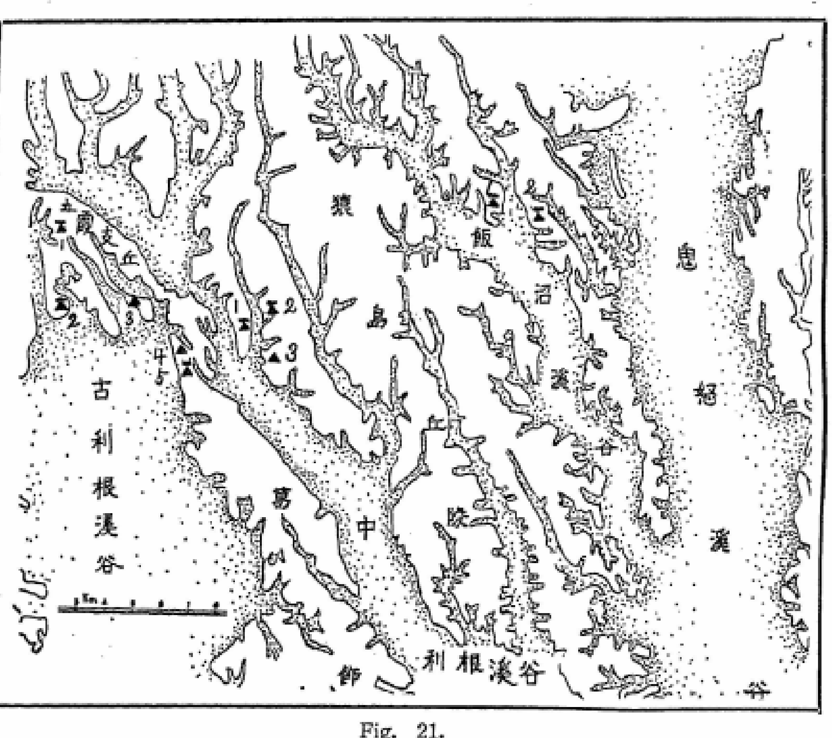


Fig. 21.

古利根溪谷左岸，中利根並に飯沼溪谷の一般（奥東京灣を除く）

日川支谷の左岸、慈恩寺支丘に於ては、谷奥の慈恩寺村鹿室（M.A.16）は主鹹、同村・古ヶ場（M.A.17）は純鹹で、以下主溪谷を合した谷口に近い同村・南（M.A.11）同村・花積（M.A.12）も亦純鹹であつた。

こゝに特筆すべきは、花積貝塚の層位學的事實である。同貝塚は互に連絡なき數ヶ所の貝塚より成り、其内里道によつて、貝層一部が切斷露出せられた貝塚を、A點と假稱し、これを發掘した結果、貝層は上下に重複し、且つ相互貝層間には何等の連絡なきのみならず、中間には三〇—四〇糎の中間土層によつて、互に隔絶せらるゝ状態にあつた。これが

詳細は後報に譲るも、其結果、兩層共に純鹹で鹹度の開きは認め得なかつたが、其出土土器に於て、上層は勝坂式、下層は破片のみではあるが蓮田式を出土した。即ち層位學的事實に於ても、蓮田式の古く、勝坂式は新しいことを示し、吾人等の方法の結果と全く一致を見た。

本溪谷に於ける諸貝塚の文化內容は、其土器の示す所に從へば、上述特記した諸貝塚に勝坂式を見た外は、悉くが蓮田式を主とせるもので、これより見れば、黑濱、慈恩寺兩支丘より其對岸岩槻支丘等に亙つては、蓮田式文化の一大中心地を見ることが出來る。



Fig. 22.　古利根溪谷，五霞支丘，土塔貝塚　(FT.—3)

三〇。古利根溪谷（奥東京灣を含む）

（右岸第十九圖、北奥及左岸第二十一圖）

古利根溪谷は、前章に於て本研究より刪除せざるを得ないことを述べた、谷奥にある藤岡、海老瀬の兩貝塚を除く、古利根溪谷北奥、五霞支丘の實査は昭和三年十月以降に行ひ、同支丘に於て五霞村の小手指（F.T.1）冬木（F.T.2）江川・土塔（F.T.3）（第二十二圖）の三貝塚を發掘し引續き、左岸葛飾丘陵に侈り、境町に滯在して、關宿町・元町・恩國寺裏（F.T.4）並に其南方、同町・篠台（F.T.5）の實査を以て、本溪谷に於ける第一期調査を終了した。

此調査に於て、土塔(F.T.3)(第二十二圖)恩國寺裏(F.T.4)の兩貝塚の純鹹に遭遇し、この廣く灣狀をなせる本溪谷に於ても他の小溪谷と同樣に、嘗て海水の汀であつたことを知ると共に、同じ關宿町・元町にありて恩國寺



Fig. 23. 慈恩寺支丘，野中貝塚 (O.T.—2) 土器出土狀態

裏に比し、より谷口に近く南方にあり且つ僅に五百米を隔つる篠台貝塚の純淡であり、前者の蓮田式、後者の大森式を出土する事實に出會した。こゝにも吾人等の方法として、蓮田式の大森式に比し、より古いと云ふ、明確な編年的一例證を加へ得た。

奥東京灣の調査は、第一期の予定ではないが、元荒川、綾瀨溪谷等の調査に當つて併せ行ふたものに、慈恩寺支丘東側諸貝塚があり、慈恩寺村・下手耕地・野中（O.T.2）（第二十三圖）以下同村に於て、五貝塚（O.T.1—5）(其内同村・上野(O.T.5)は丘陵中部の人家中にあり、奥東京灣に接海せるか、元荒川溪谷に臨むか、未詳の所あるも、こゝに假入し、將來再調の上、決定を期する）を實査し、大正十五年概調した、岩槻支丘東側の岩槻町・太田（O.T.6）柏崎村・木曾良、(O.T.7)和土村・黑谷（O.T.8）の三貝塚を含め、右岸に合計八貝塚を調査し、左岸葛飾丘陵に於ける梅郷村・山崎貝塚(O.T.14)は昭和二年十月人類學會遠足會に參加して概見し、これを併せて古利根及奥東京灣に於て合計十四貝塚

を調査した。

これ等奥東京灣に於ける諸貝塚に就ては、特筆すべきものがない。この内、山崎貝塚（O.T.14）は第二期調査に再調して居るから、後節に譲り、其他を概言すれば、慈恩寺支丘の裏慈恩寺貝塚(O.T.1)の純淡であり且つ夥しい獸骨、特に鹿角骨を出土し、(第二十四圖）其土器は大森式であつた外、多くの貝塚が蓮田式を見て居る。(第三表參照）



Fig. 24.　慈恩寺支丘，裏慈恩寺貝塚（O.T—1）
貝層下部骨·角片出土狀態

三十一。中利根溪谷（第二十一圖）

本溪谷は昭和三年十、十一月間に於て、境町を根據地として捜索調査したものであるが、漸く左岸猿島丘陵上にして一ノ谷支谷（現一ノ谷沼ある溪谷）附近に於て、猿島村、金岡(N.T.1)、森戸村・百戸・間田貝塚（N.T.3)、同村伏木・青木貝塚（N.T.2）(研究所新發見）の三貝塚を發掘調査したに過ぎず、地名表記載の靜村塚崎、[5]猿島村浦向[6]の兩貝塚は、實査せるも前者は石器時代の貝塚と認め難く、後者は殆んど痕跡を止めざる有り様にて、兩者を除外し、僅に三貝塚を發掘せるに過ぎない。

この三貝塚は、一ノ谷支谷に面し、互に近きも夫々鹹度を異にし、金岡は主淡、間田は純鹹、青木は純淡であ

り其出土土器は、金岡は大森式、問田は蓮田・諸磯兩式、青木は勝坂式であつたが、其位置の配位上、谷奥には淡水、谷口に鹹水貝塚があつた故、本法方上からは、其結果を求め得なかつたが、一小地域に各鹹度を異にした、三様式の土器を出土することは、面白き配合であり、又前諸例に徴すれば、或るものを物語つても居る。

三十二。飯沼溪谷（第二十一圖）

本溪谷の調査も中利根溪谷に引續き、昭和三年十一月に行ふたが、本溪谷の最谷奥と考へらるゝ地名表記載の八俣村・長左衛門新田・北山貝塚は、發見せずに終り、[7] 僅に本溪谷左岸結城丘陵上の飯沼村・鴻野山・貝殼坂（Ii. 2）貝塚（第二十五圖）同村・崎房（Ii. 1）の二貝塚を調査したのみである。

貝類は崎房の純淡、貝殼坂の主淡を示し、大なる開きがなく、且つ共土器に於て、兩者共に蓮田式であり、これ亦、本法方としては何等の成果は得て居らない。

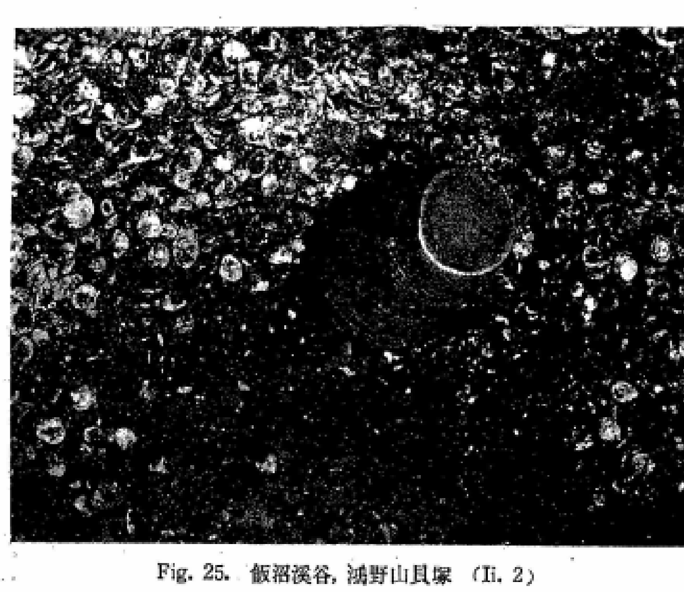


Fig. 25. 飯沼溪谷, 鴻野山貝塚 (Ii. 2)
蓮田式土器出土狀態

三十三。第一期調査綜括。

以上の經過の如く、第一期としての主要調査は、昭和二年九月以降、同三年十一月に至る一ケ年二ケ月を費し

漸く第一表記載の如き、六十四貝塚を實地發掘し、これと計劃外の九貝塚とを併せ、總計七十三貝塚に就て、其一通の内容を知ることが出來た。

此結果に就ては、其詳細は後報に讓るも、これが主要なるものは既に夫々溪ごとに概述した如く、吾人等の方法により、諸磯式、蓮田式及び指扇式の如き、互に近緣を形態學的に認めらるゝ一群が、第一期調査上、最も古くあり得、これに對し勝坂式、大森式は、より新しいと事實に到達したのである。勿論、夫々の細部に就ては、尚不明の所もあるが、第一期の調査目的上、最も古くあり得べき貝塚、卽ち舊貝塚搜出の結果、上述三式が、これに當該したのである。而してこの三式相互間の時間的、空間的の關係に就ては、形態學的見地より見た外、未だ知ることを得ないが、これを取り纏めて、關東前期縄紋式土器と稱し、勝坂或は大森式と區別して置く。又前述の如く、花積貝塚（M.A.12）に於て正確なる層位的事實は、[8]蓮田式古く、勝坂式新しいことを示し、吾人等の方法と一致して居る。

又第一期の調査が舊貝塚の搜出である以上、これを豫定の如く搜出し得れば足るのであつて、より若き勝坂、大森兩式間に於ける相關々係まで究明し得なくとも、第一期の目的は充分に達成し得たと信ずる。且つ從來多くを知られて居らなかつた、前期文化所產貝塚の、以外に多數を發見し得たことも、全く實査の賜であり、且つ前期文化の諸貝塚にあつては、其出土人工遺物は常に甚だ少なく、其研究資料に於て甚だ惠まれないものがあつたにせよ、兎に角、今後に於ける研究の根柢を樹立し得たことは、吾人等の前途に光明を與へたものであつた。

第一表。第一期主要調査貝塚數一覽表

溪谷別	主要調査期間	調査貝塚數	計畫外實査貝塚	合計
鶴見溪谷	自昭和二年九月 至同年十二月	五	○	五
多摩溪谷	自昭和二年十二月 至三年三月	六	一	七
入間溪谷	自昭和三年四月 至同年六月	十六	○	十六
綾瀨溪谷	自昭和三年六月 至同年七月	五	四	九
元荒川溪谷	昭和三年六・七月 同年九・十月	十七	○	十七
古利根溪谷(含奥東京灣)	昭和三年十月	十	四	十四
中利根溪谷	自昭和三年十月 至同年十一月	三	○	三
飯沼溪谷	昭和三年十一月	二	○	二
計	自昭和二年九月 至同三年十一月	六四	九	七三
備考	一、二回以上調査せるものも、一貝塚と數ふ。 二、發見し得ざりしものを除く。			

第二節　第二期調査經過概要

第二期の調査は第二章、第二節、十二。5。B。の計畫に基き、各溪谷に於ける最も谷口に近き淡水貝塚の調出し、其最も若くあり得る貝塚の有する文化內容を究明する目的を以て、昭和四年六月[9]よりこれを開始し、昭和六年七月末日までに、略其予定地域を實査した。此計畫に於ても第一期と同様の順序を以て、各溪谷を實査したのであるが、旣に第一期に於て、略其調査を終了した、綾瀨、元荒川の兩溪谷を除き、鶴見溪谷より開始し、昭和六年七月末日までには、東京灣方面は終つたが、末だ中利根、飯沼兩溪谷は調査して居らない。今これが經過を追ふて概說する。

三十四。鶴　見　溪　谷

昭和四年六月二十六日、右岸鶴見支丘の梼（Ts.2）同年七月十日、同岸同丘の駒岡（Ts.3）を實査したに止まり、同丘に於て更に他の一二貝塚を見るが、學術以外の關係上、これ等の調査は、第三期以降に遺した。

梼貝塚は純鹹であつたが、一行四名が終日貝層の中心と覺しき部分を發掘せるに拘はらず、一片の土器片だに得ることなく、何等の人工遺物を得なかつたことは、本調査に於ける唯一の特例であつた。駒岡亦純鹹で諸磯式土器を出土した。結局兩者共に鹹度高く、本方法上よりは何等の結果も齎し得なかつた。

三十五。多 摩 溪 谷

本溪谷に於ける調査も亦簡略に行ふたに過ぎない。昭和四年七月十八日に左岸の武藏野台上に於ける、池上町・久ヶ原（Ta.8）、同町・雪ヶ谷（Ta.9）の兩貝塚を調査したのみである。

兩貝塚共に主鹹であり、前者は資料不充分で其文化を明にし得なかつたが、後者は諸礒式土器を出土したが、これ亦兩者間に鹹度に隔てなく、本方法をしては其結果を得るに至らなかつた。而してこの附近に於ても尙一二未調査貝塚の存するものがあり、中には多摩谷口よりより離れ、寧ろ武藏野臺の一角と、鶴見支丘の一部とが相抱く、所謂川崎灣の諸貝塚として見る可きものを存し、これ亦將來に讓つた。

三十六。入 間 溪 谷

本溪谷の調査は更に遲れて、漸く昭和五年四月より開始した。[10] 右岸武藏野台は既に第一期に其一般を終了した故、左岸埼玉丘陵に於て、本溪谷として最も谷口に近き鳩谷支丘に於ける新鄕村・東貝塚（Ir. 19）、同村・東本鄕（Ir.18）[11]、神根村・荒井宿（Ir.17）[12]の三貝塚を調査した。

東、東本鄕の兩貝塚は淡鹹、神根村・新井宿がより淡度高く、主淡を示したが、本溪谷としては、第一期調査の結果、全般的に淡度高く、右岸に於ては谷奥方面より谷口に向つて漸進的に鹹度增大の景況を見るも、左岸埼玉丘陵に於ては、より變化に乏しきものがあり、第二期調査を加へて、益々其結果を裏書し、吾人等の方法として、結果を得るに至らない。然しこの第二期調査の三貝塚は、大森式であつて、全局上、大森式に出會する機會は增してきた。

三十七。奧東京灣

綾瀨、元荒川の二溪谷は殆んど第一期に谷口まで調査し、古利根に於ても、左岸葛飾丘陵に若干を餘すも、奧

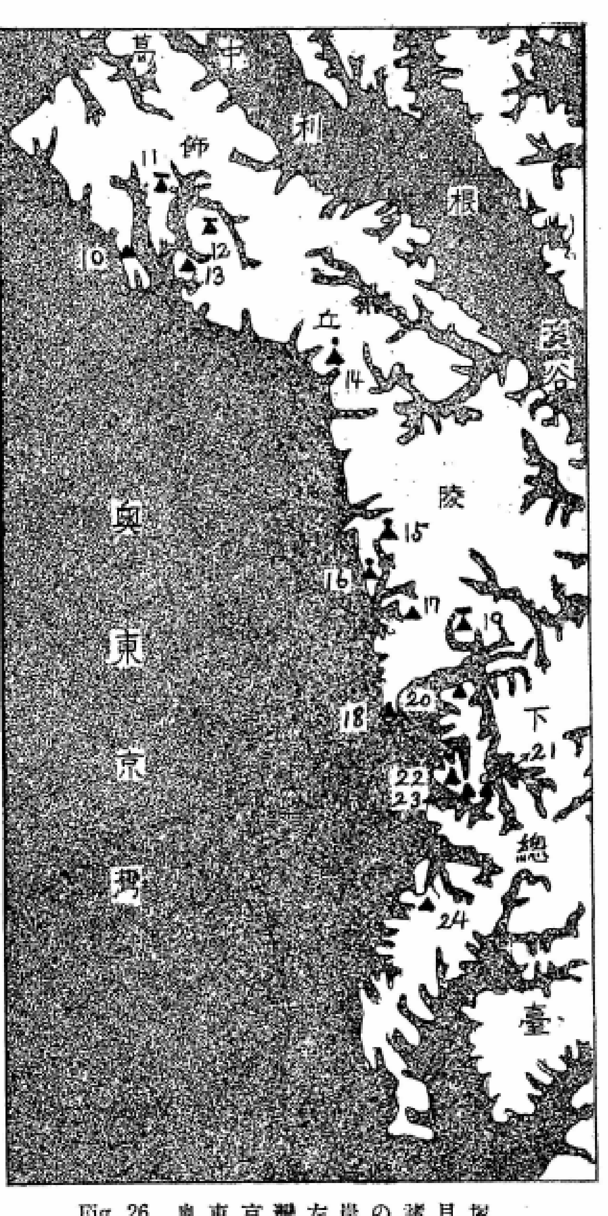


Fig. 26. 奧東京灣左岸の諸貝塚

東京灣とを併せ見れば、これ等が中部に存すること丶なる故、第三期に遺し、奧東京灣に於ける最南、卽ち現海岸線に最も近き方面より始むること丶し、其右岸武藏台方面は赤羽突端より上野公園に亘る間は、市街にして調査の意を得ざるものある爲、これを割愛し、左岸下總台の最南より開始した。卽ち昭和五年六月十二日を以て左

岸谷口の明村・上本郷（O.T.24）の實査を行ひ、以後順次左岸を遡つて、同台の五貝塚（O.T.20—24）を發掘調査し、同年十月より葛飾丘陵に侈り、鰭崎（O.T.18）屋敷（O.T.19）山崎（O.T.14）の三貝塚を調査して冬季休止



Fig. 27. 奥東京灣左岸，下總臺，幸田貝塚（O.T.—20）の發掘

に入り、昭和六年春より再びこの調査を續行して、同年七月までに金杉村・築比地・榮光院貝塚（O.T.10）（研究所新發見）に至る十貝塚の現地調査を以て、一先づ第二期調査を打ち切つた。更に本灣としては、昭和五年五月入間溪谷調査に際して、實査した本灣右岸鳩谷支丘の安行村・領家・猿貝を加へ、合計十五貝塚（山崎貝塚は第一期計畫外に算入したればこれを除く）を發掘調査したのである。

本灣特に其左岸に於ては、淡鹹の開き著しきものを見た。卽ち現海岸線に近き下總台の五貝塚(O.T.20—24)は悉とが純鹹であり、其土器の示す文化は、上本郷（O.T.24）の勝坂式、新井（O.T.23）貝の鼻（O.T.21）の大森式、北道合（O.T.22）、幸田（O.T.20）(第二十七圖)の蓮田式なる文化を見るに拘はらず、其文化如何に關せず其悉くが一様に純鹹である所を見ると、これ等各様式土器の示す文化が、時的經過によつて成立するものなれば、其經過期間、この附近は維然海水の湛ふる所であつたと認めらるゝ。これが葛飾丘陵に入り、灣奥に向つて遡るに從つて、淡度を増し、上貝塚(O.T.16)上

新宿(O.T.15)の如き淡鹹貝塚を見、更に上方、現野田町附近に於て清水(O.T.12)(第二十八圖)岩名(O.T.11)の如きは、主淡となつて居る。



Fig. 28.　奥東京灣左岸，葛飾丘陵，清水貝塚（O.T.12）の發掘

其土器の示す文化に於て、北道合(O.T.22)幸田(O.T.20)等の蓮田式は暫く除外し、本期調査の目的たる若き貝塚の決定に就て見るに、上本郷(O.T.24)並に中野台(O.T.13)の如き勝坂式は共に純鹹であり、特に中野台の如きは、本灣として、比較的灣奥の位置にあつても鹹度高きに對し、大森式の諸貝塚中には、新井(O.T.23)貝の鼻(O.T.21)等下總台に純鹹を見るけれども、清水(O.T.12)岩名(O.T.11)上新宿(O.T.15)上貝塚(O.T.16)等の諸貝塚は、概ね鹹度弱く、全般的に相互間の時的關係に對し、一資料を與へて居る。更に山崎(O.T.14)にては貝類の淡鹹混出を見ると共に、其土器に於ても勝坂、大森兩式並に兩者の中間的と覺しき樣式をも出土するのみならず、貝塚出土の狀態に於て、部分により、淡水、鹹水産の集積相異るものがあり、概ね淡水産多き所より大森式、鹹水産集在する所に勝坂式を出土するの景況を呈した。この狀態から見れば、古く鹹水産多き時代に勝坂式、若く淡水産に富む頃に大森式を見た結果は、兩者の時的經過上の相違を示す事實であり、前述した勝坂式の鹹度高きことゝ一致す

るものがあり、こゝに兩者の時的關係に就て、略其新古を判定し得たのである。

三十八。第二期調査綜括

第二期調査に於て實査した貝塚數は、第一期に比の漸く其三分一に過ぎないに反し、より多くの日子を費したことは、實地研究の累加は、各方面に及ぼす所多く、漸次進捗の遲緩を生ずるに至つたのは遺憾ではあるが、兎に角豫定の東京灣注入六溪谷を概察し得た。

其目的として、新しくあり得べき貝塚、即ち最も谷口に近き淡水貝塚の搜出に基く其文化內容の認識は、第一期の如く明確なる結果には到達し得なかつたが、前述の如く奥東京灣左岸に於て、大森、勝坂兩式間に於ける時的相違を發見し得たことにより、不充分ながらこの目的を達したのである。只本調査に於て純然たる勝坂式なる文化を有する貝塚が、以外に少なく僅に奥東京灣左岸に於ける上本郷(O.T.24)中野台(O.T.13)の二貝塚に過ぎず、爲めに比較の根柢に不足を生じたことも、現實上致し方がなかつた。漸く山崎貝塚(O.T.14)で如上の結果を得たことにより辛じて報いらるゝものを見たが、この結果に就ては更に第三期以降の調査に於て、何等かより確固たる例證を發見することに努力したいと考へて居る。今この第二期調査の一般を次の如く一覽として、綜括する。

第二表。第二期主要調査貝塚數一覽表

溪谷別	主要調査期間	實査貝塚數	計畫外實査	合計
鶴見溪谷	昭和四年六・七月	二	〇	二
多摩溪谷	昭和四年七月	二	〇	二
入間溪谷	昭和五年四・五月	三	〇	三
奥東京灣	自昭和五年六月 至同年七月	一五	〇	一五
計	自昭和四年六月 至昭和六年七月	二二	〇	二二

第三節　調査經過綜括

三十九。調査地域

第一、第二期を合せ、今回調査した地域を見るに、夫々溪谷ごとに未だ若干の調査漏れは、あると考へるが、綜括的に鶴見、多摩、入間、綾瀬、元荒川の五溪谷は、一通り谷奥より谷口に亘つて、調査を終了した。昭和六年七月までに未だ調査を終了しない部分は、主として古利根溪谷に於ける左岸、葛飾丘陵の南半部を主とし、同様に岩槻支丘の東側に於て、本計畫前の調査にかゝる 大田 (O.T.6) 木曾良 (O.T.7) 黒谷 (O.T.8) 等の再調未

了、及び鳩谷支丘の領家・猿貝（O.T.9）以北の二三貝塚、或は埼玉丘陵の中に於て鳩谷支丘と大宮支丘とを分つ惡水支谷に於ける貝塚の存否研究等東京灣方面に於ても、第三期計畫に待つ可き部分がある。又霞浦方面に於ては、中利根、飯沼兩溪谷は僅に其第一期の實査を行ふたに過ぎず、且つ鬼怒溪谷の如きは、未だ全く着手して居らない。これ等の調査殘漏の地域は、最初に於ける計畫上、第一期は谷奥、第二期は谷口方面と、夫々立案した通り實施した結果、生じた所の空隙で、第三期にこれを滿さる可きである。只霞浦方面は、より取り殘し多いのは、吾人等の努力の不足に基く所多く、甚だ遺憾にたへない。只幸にして、第一第二期を合せ、九十五貝塚實査の結果として、其前期に指扇、蓮田、諸磯の各式を、中期に勝坂式、後期に大森式と編年し得るに至つたことは、實査の努力に報いらるゝものを見たのは、忻幸にたへざる所であつた。

四十。貝塚概覽

貝塚を概覽するに、從來何れも齊しく貝塚なる稱呼のもとに、取扱つてきたが、さてこれを什細に見て行くと決して一樣ではない。これが詳細に就ては後報に讓る所あるも、獨り本方法上、特に留意した出土貝類鹹度の相違に止まらない。其容積に於ても廣大なる清水（O.T.12）の如きもあれば、所謂一住居一貝塚とも稱し得べき、小貝塚も少なくない。其存在位置に就ても、其殆んどが台上乃至斜面に亘るものを見るが、こゝにも種々相が見らるゝ。其包含文化遺物量に於ても大差を見、吾人等の一日發掘實施により、文化遺物皆無の椿（Ts.2）の如き、或は微少土器片のみの川崎（Ir.1）等は例外として暫く除外しても、一日僅々一袋にも滿たざる土器破片のみの出土と、四五名の背嚢に入れ得ざる大量出土と、兩者の開きの大なる所は、全く豫想外の結果であつた。

これ等を上述した編年過程に於て、綜合して見ると、前期に屬する諸式を出土する貝塚は、其個々に於て甚だ狹少であり、且つ多くが個々の離れ離れの貝塚が、二乃至四箇所にある。卽ち貝塚群をなし、其出土文化遺物量は概ね僅少で、中にも指扇式最も尠なく、蓮田、諸磯の順に其出土量を增して居る。中期乃ち勝坂式に於ては、貝塚の大さは前期に比すれば、より大であり、群をなすことも少ないか、これを後期に比すれば、より狹少である。其出土文化遺物量も、土器片に於ては中量出土を見るも、それ以外の人工遺物出土は未だ僅少である。後期たる大森式になると、中に狹少な貝塚もあるけれども、槪して大きく、中には廣大なものを存し、其出土文化遺物に於て獨り多大の土器を出土するに止まらず、各種の人工遺物を包含し、從來人口に膾炙せらるゝ珍品多出の諸貝塚の如き、其殆んどが本式である。

此の如き相違も槪括的ではあるが、各編年期間に見られ、且つ尙夫々個々に就ても、硏究すべき多くを存するが、こゝには單に、編年成立を見ると共に、其貝塚に現れたる一二事實に於ても、以上の如き相違の相互間に存する點を申し加へて、夫々編年期に對する認識の一助となして置く。

四十一。經過綜括

こゝに述べ來つた、昭和二年九月以降、同六年七月までの間に於て、第一第二期を併せ、九十五貝塚實査の槪要經過は、これを全計畫より見ると、尙これが仲ばに過ぎないが、一先づこれを取纏めて、次表を作製し、參考に備へる。更に昭和六年七月以降に於ても、第三期計畫一部の實施を見、近く本豫報に引續いて、これが經過を報告する豫定ではあるが、其全計畫を終了するには、更に數ヶ年の日子と努力とを必要とするのである。從つて

これが研究を完了するまでは、從來の如き、概ね一日一貝塚の若干部分發掘の結果を以て、滿足せざるを得ない狀態にあり、爲に研究資料、特に文化遺物の著しき不足も亦、忍ばざるを得ない。前述した如く、前期文化に於て、其文化遺物出土量の意外に僅少なる事實は、一層文化內容の鮮明に對する資料を缺くも、これが充實を見るの日は、尙將來にある。それ故、目下はこの不實の資料に基き、後篇に於て、夫々の文化內容に就て、一通りは說明もし、又今後夫々に於ける資料の充實にも努力はするが、玆に本計畫第二期を終了し、上述の如き編年結果を見たのであるから、一先づ豫報としてこれを公開し、本豫報發表後、引續き夫々の部分に就ても、公表して行くことを申し添へて、本報の綜括として置く。

（宮坂の未完稿を參照し、大山本稿を執筆す）

（1）貝塚なるもの丶箇數算定に就ても、必ずしも一樣でない。貝塚には、貝殼集積する所が一箇所のみなもの丶外、數箇所に散在するものが尠なくない。從つてこの後者を夫々一個に數ふれば、其數も數倍に達する。こゝでは相近く存在し、其鹹度、文化內容が一致する場合これを一貝塚群と見、一箇に取纏めて報告して居る。これ等に就ては、更に研究を要す可き點もあるが、總ては後續報告に讓る。

（2）昭和二年十月一日より四月に亘り、研究所一同は千葉縣良文村有志の依賴により、同村阿玉臺、同貝塚等の發掘調査を行ふて居る。

（3）當時の高田貝塚の調査に於ては、これが層位的存在の事實にまで到達し得なかつたが、更に調査を行い得る餘地は大きい。

（4）小仙波貝塚は、昭和三年四月十八日現地調査を試みたが、地名に貝塚なるものがあり、涌水があつて、傍には表面土器小破片の點在するものを見たが、貝殼はなく二三試掘し、又土地人にも聞知したが何れも貝塚は發見し得なかつた。所謂遺物包含地ではあるらしいが、地名な貝塚と俚稱せられて居る故、かく一應點檢したもので、其結果地名表記述の通りであることを認知した。

（5）靜村塚崎は、昭和三年十月二十日これを實査したが、表面に貝殼散布せる所あり、一見貝塚の樣であつたが、發掘の結果、貝層は混土し、其中より近世の陶土片、鐵片等を多く出土し、石器時代の土器を發見せず、貝類も「はまぐり」最多「しじみ」「あさり」の小粒な交ふるのみで、卷貝等を含まない有り樣であつたから、終に後世所產と判定の上、發掘を中止した。

(6) 猿島村浦向は昭和三年十一月二日現地を捜索したが發見せず、土地人は等しく近き金岡を指す有り樣にて、同字内に於て、地表に若干の土器片の散在する所あり、そこを表面捜索の結果、しじみを三個程發見、刺棒を以て、貝層を探査せるも出合せず、終に斷念したものである。

(7) 八俣村長左衛門新田北山の調査は、昭和三年十一月三日現地を調査せるも、終にこれを發見するに至らずに止んだ。

(8) 史前學上に於ける層位的事實と云ふとも、人々の考へ方により、大きな開きが見らるゝ。中には果して時の隔ての結果、新舊兩層が生じたものか、疑はしき程度のものもあり、一概に層位的事實と云ふことも無條件で承認し得ないものもある。特に發掘に際し部分により疑層を生じたり、又は場合によつては新舊逆に堆積することすらある。花積に於ける層位に對しては、これ等の諸件を研究した上、最も確實と信ずる程度にあると考へて居るが、これが詳細は後報する。

(9) 第一期の調査は昭和三年十一月に一先終了し、冬季實査休止期に入り、翌昭和四年二・三月には本史前學會を創設、本誌の發刊を見る等多忙なるものがあり、四月には、青森縣下、是川の發掘調査に出張し、且つ同年六月十九日には、多摩溪谷右岸の子母口貝塚の再調を行ふた爲、第二期計畫實施の遲るゝものがあつた。

(10) 昭和四年九月には、千葉縣良文村・貝塚（貝塚）の發掘調査を行ひ、直に其出土遺物を整理研究して、これを本誌一の五號（十一月）に發表した爲、この間現地調査を行はなかつた。又其翌五年三月には、多摩溪谷、子母口貝塚第三回の發掘調査を行ふた爲、四月より本計畫の調査を行ふに至つた。

(11) 本貝塚は地名表の新郷村・前野宿貝塚に當るものの樣であるが、詳細は後報する。

(12) 神根村新井宿貝塚は、近く相近接する三群より成り一つは本字に、他は夫々赤山、石神の字内にあるも、貝類、文化遺物略相等しい故、これを一貝塚群と認めて別記しないことにした。從つて地名表記載の三貝塚に當つて居る。

第三表第一第二期調査貝塚一覽表

溪谷別番號	細位番號	調査年月日	所在地	貝塚の狀態	天然遺物 貝類鹹度	天然遺物 其他	文化遺物 土器	文化遺物 其他	備考
I 鶴見溪谷 (Tsurumi—Tal = Ts—T)									
1 同主溪谷 (Tsurumi-Hauptal = Ts-H.T)									
1) 同右岸 (鶴見支丘) (Ts-H.T-R)									
Ts. 1.	Ts-H.T-R.1	昭和二年十二月十五日	神奈川縣横濱市神奈川區下菅田町	台端及び斜面上にあり。面積小。	純鹹		諸磯式		
Ts. 2.	Ts-H.T-R.2	昭和四年六月二十六日	同縣同市同區樽町	斜面脚にあり。面積小。	純鹹		未詳	文化遺物未發見	純貝層あり
Ts. 3.	Ts-H.T-R.3	昭和四年七月十日	同縣同市同區駒岡町	台上、四ケ所に點在。各貝塚面積小。	純鹹	僅少の魚骨	諸磯式	石製裝飾品礫器	完形土器二個出土
2) 同左岸 (Ts-H.T-L)									
Ts. 4.	Ts-H.T-L.1	昭和二年十一月一日	神奈川縣都筑郡新田村折本	台上數ケ所に點在。各面積小。	純鹹		諸磯式	礫器、黑燿石塊、石錐	
Ts. 5.	Ts-H.T-L.2	昭和二年十二月十二日	同縣橘樹郡日吉村箕輪	台上及び斜面にあり。面積小。	主鹹		蓮田式 諸磯式		住宅區畫地域内にあり
2 早淵川支溪谷 (Hayafuchi-Nebental = Ts-Ha-N.T)									
1) 同右岸 (Ts-Ha-N.T-R)									

Ts. 6.	Ts-Ha-N.T-R. 1	昭和二年十月十八日	神奈川縣都筑郡中川村茅ケ崎貝塚	台上及び斜面にあり。面積小。	純鹹		諸磯式		若干の蓮田式を混入
2) 同左岸									
Ts. 7.	Ts-Ha-N.T-L. 1	昭和二年九月二十日 同 年十二月二十三日	神奈川縣都筑郡新田村高田	台上及び斜面に數ケ所。各面積小。	主鹹	たにしの密集せる所あり	諸磯式 勝坂式	石鏃、骨角器牙製裝飾品	未だ明確なる層位を發見せず

II 多摩溪谷 (Tama—Tal = Ta—T)

1) 同右岸 (多摩丘陵) (Ta-R)									
Ta. 1.	Ta-R. 1	昭和二年十一月八日	神奈川縣橘樹郡高津村久本	斜面上にあり。面積小。	淡鹹		諸磯式	石鏃	淡鹹產部分により、夫々集積する所あり
Ta. 2.	Ta-R. 2	昭和二年九月二十七日 同四年六月十九日 同五年三月二十七日	同縣同郡橘村子母口	台上及斜面に約三ケ所。各面積小。	主鹹	人骨破片	指扇式	打石斧	佐野氏骨針を出土す(同氏藏)
Ta. 3.	Ta-R. 3	昭和二年九月十二日 同 年十二月十一日	同縣同郡日吉村矢上、谷戸	台上及斜面にあり。面積小。	主鹹	子兒人骨	諸磯式	骨針	
2) 同左岸 (武藏野台) (Ta-L)									
Ta. 4.	Ta-L. 1	昭和三年四月十二日	東京府荏原郡玉川村六所東	台上にあり。面積小。	淡鹹	僅少魚骨	蓮田式 諸磯式		淡鹹部分の稍々相異る所あり
Ta. 5.	Ta-L. 2	同 年三月二十七日	同府同郡調布町上沼部	台上及斜面にあり。	主鹹	魚骨あり獸骨より多し	大森式	土器脚、打石斧	人家となり面積未詳土器片多
Ta. 6.	Ta-L. 3	同 年同月同日	同府同郡同町下沼部	台端にあり。	主鹹		大森式		人家にて面積未詳發掘部分狹少
Ta. 7.	Ta-L. 4	大正十五年九月二十九日 同 年十一月六日	同府同郡同町嶺千鳥窪	台上及斜面數ケ所にあり。面積中。	主鹹	小兒人骨獸魚骨あり	勝坂式 大森式	打石斧	完形土器注口土器
Ta. 8.	Ta-L. 5	昭和四年七月十八日	同府同郡上町久ケ原	斜面に一部殘存	主鹹		不明		資料不充分

Ta. 9.	Ta-L. 6	同年同月同日	同府同郡同町雪ケ谷	台上二ケ所。各面積小。	主鹹		諸磯式	凹石	
III 入間溪谷 (Iruma—Tal = Ir—T)									
1) 同右岸（武藏野台）(Ir—R)									
Ir. 1.	Ir-R. 1	昭和三年四月十六日	埼玉縣入間郡福岡村川崎	台地脚。	純淡		不明		資料不充分
Ir. 2.	Ir-R. 2	同年同月同日	埼玉縣入間郡鶴瀬村鶴間貝塚山	台上にあり。貝塚の上に古墳の存せし疑あり。	純淡		不明		資料不充分
Ir. 3.	Ir-R. 3	同年同月十八日	同縣北足立郡白子村城山	台上數ケ所。各面積小。	主淡		蓮田式		資料不充分
Ir. 4.	Ir-R. 4	同年同月二十五日	東京府北豐嶋郡志村中台	台上。面積小。	淡鹹		蓮田式 諸磯式 大森式	土製耳飾片	未だ明確なる層位を發見せず
Ir. 5.	Ir-R. 5	同年五月三日	同府同郡同村小豆澤	台上。面積中。	淡鹹	獸骨あり魚骨甚だ多し	大森式	角器	土器片多
2) 同左岸（埼玉丘陵）(Ir—L)									
Ir. 6.	Ir-L. 1	同年同月七日	埼玉縣北足立郡平方村南	斜面脚。面積小。	主淡（純淡に近し）		指扇式		資料不充分
Ir. 7.	Ir-L. 2	同年同月同日	同縣同郡同村西貝塚	台上。面積小。	主淡（純淡にし）		指扇式		資料不充分
Ir. 8.	Ir-L. 3	同年同月十一日	同縣同郡指扇村五味貝戸貝殼山	台上及斜面。面積小。	主淡（純淡に近し）	大形かき多し	指扇式		土器片僅少
Ir. 9.	Ir-L. 4	同年同月十四日 同年同月十八日	同縣同郡三橋村並木	低台上。面積小。	主淡		指扇式 蓮田式 大森式	打石斧	附近に包含地あるが如し。各式混在し層位を發見せず
Ir. 10.	Ir-L. 5	同年同月十四日	同縣同郡同村側ケ谷戸	台上數ケ所。各面積小。	主淡		蓮田式		

Ir. 11.	Ir-L. 6	昭和三年同月二十一日	埼玉縣北足立郡与野町大戸	台上。面積小。	主淡		諸磯式		
Ir. 12.	Ir-L. 7	同年同月二十五日	同縣同郡六辻村別所眞福寺	台上及斜面。面積小。	主淡（淡鹹に近し）		蓮田式		表面に彌生式あり
Ir. 13.	Ir-L. 8	同年同月二十八日	同縣同郡同村白幡	台上二ヶ所。各面積小、	淡鹹		蓮田式		資料不充分
Ir. 14.	Ir-L. 9	同年同月同日 同年六月一日	同縣同郡同村文藏	台上數ヶ所。各面積小。	主鹹	僅少の獸魚骨	蓮田式	打石斧	完形土器一個出土
Ir. 15.	Ir-L. 10	同年同月四日	同縣同郡芝村小谷場貝殼坂	台上及斜面脚に三ヶ所。各面積小。	淡鹹		蓮田式		斜面脚は低地に貝層あり出水す
Ir. 16.	Ir-L. 11	同年同月八日	同縣同郡谷田村太田窪下	台上。面積小。	淡鹹		蓮田式		
Ir. 17.	Ir-L. 12	昭和五年五月二十二日 同年同月二十六日	同縣北足立郡神根村荒井宿	台上及斜面に三ヶ所。各面積小。	主淡	獸魚骨出土	大森式	異形土器、牙垂飾、骨角器、耳飾	土器片多
Ir. 18.	Ir-L. 13	同年四月十七日	同縣同郡新郷村東本郷	台上に馬蹄形をなす。面積稍大。	淡鹹		大森式	土製耳飾、骨銛、石皿片	土器片多
Ir. 19.	Ir-L. 14	同年同月五日	同縣同郡同村東貝塚	台端に馬蹄形をなす。面積稍大。	淡鹹	獸魚骨多し	大森式	土偶貝輪、骨角器、牙垂飾	土器片多

IV 綾瀬溪谷 (Ayase Tal = Ay—T)

1) 同右岸（原市支丘）(Ay-R.)

Ay. 1.	Ay-R.I. 1	昭和三年七月二日	埼玉縣北足立郡小室村小貝戸	低台地上四ヶ所。各面積小。	主淡		諸磯式		
Ay. 2.	Ay-R.I. 2	大正十五年十一月 昭和三年七月十五日	同縣同郡春岡村深作	斜面上。面積小。	純鹹		蓮田式		

2) 同左岸（岩槻支丘）(Ay-L)

Ay. 3.	Ay-R.II. 1	昭和三年六月十五日	埼玉縣南埼玉郡綾瀬村栗崎	低台上。面積小。	主 淡		蓮田式	石鏃、注口土器	農家の庭にあり
Ay. 4.	Ay-R.II. 2	同　年七月六日	同縣同郡同村蓮田閑山	斜面中に二ケ所。各面積小。	主 鹹	はいがいを主とせる貝層あり	蓮田式	磨石斧	完形土器出土
Ay. 5.	Ay-R.II. 3	同　年同月同日 同　年同月十六日	同縣同郡同村蓮田坂堂	斜面脚。面積小。	淡 鹹		蓮田式		完形土器出土
Ay. 6.	Ay-R.II. 4	大正十五年十一月十七日	同縣同郡柏崎村加倉	台上及斜面。面積小なるが如し。	主 鹹		不明		資料不充分
Ay. 7.	Ay-R.II. 5	同　年同月同日	同縣同郡同村柏崎	台上。面積小なるが如し。	主 鹹		諸磯式		資料不充分
Ay. 8.	Ay-R.II. 6	大正十五年十月十九日 同　年十一月十四日 昭和二年十一月八日	同縣同郡同村眞福寺	台上及斜面。面積大。	主 淡		大森式	文化遺物多數出土	史前學會小報第二號參照
Ay. 9.	Ay-R.II. 7	大正十五年十一月十六日	同縣同郡同村浮谷	台上及斜面。面積未詳。	主 鹹		勝坂式		若干諸磯式混入（資料不充分）

V　元荒川溪谷 (Moto-Arakawa Tal = M.A—T)

1　同主溪谷 (Moto-Arakawa Haupttal=M.A-H.T)

1　同右岸（岩槻支丘）(M. A—H. T—R)

M.A 1.	M.A-H.T-R. 1	昭和三年六月十一日	埼玉縣南埼玉郡綾瀬村貝塚	低台上三ケ所。各面積小。	淡 鹹（主淡に近し）		蓮田式		
M.A 2.	M.A-H.T-R. 2	同　年七月十五日	同縣同郡河合村掛峡田	台上。面積小。	淡 鹹		蓮田式		

2　同左岸 其一、（黒濱支丘）(M.A-H.T-L.I)

M.A 3.	M.A-H.T-L.I. 1	昭和三年六月十五日	埼玉縣南埼玉郡篠津村白岡正福院	台端。面積小。	主 淡		蓮田式諸磯式		一部は墓地となり發掘困難

M.A 4.	M.A-H.T-L.I. 2	昭和三年七月十一日	埼玉縣南埼玉郡黒濱村炭釜屋敷	台上四ヶ所。各面積小。	純鹹		蓮田式		村落内にあり
M.A 5.	M.A-H.T-L.I. 3	同 年同月同日	同縣同郡同村宿裏	台上數ヶ所。各面積。	純鹹		蓮田式		村落内にあり若干の諸磯式混在
M.A 6.	M.A-H.T-L.I. 4	同 年七月十四日	同縣同郡同村宿	台上數ヶ所。各面積小。	純礁		蓮田式	打石斧片、搔き石片、	村落内にあり
M.A 7.	M.A-H.T-L.I. 5	同 年同月同日	同縣同郡同村馬場	台上。面積小。	純鹹		蓮田式	土製圓板	諸磯式に近似形式を有す
M.A 8.	M.A-H.T-L.I. 6	同 年同月同日	同縣同郡同村新井	台上。面積小。	純鹹		蓮田式		村落内にあり
M.A 9.	M.A-H.T-L.I. 7	同 年同月九日	同縣同郡同村新井耕地	台上。面積小。	純鹹		蓮田式		
3 同左岸 共二ヽ(慈恩寺支丘) (M.A-H.T-L.II)									
M.A 10.	M.A-H.T-L.II. 1	昭和三年九月廿二日	埼玉縣南埼玉郡慈恩寺村櫻山	台上三ヶ所。各面積小。	純鹹		蓮田式	磨石斧	
M.A 11.	M.A-H.T-L.II. 2	同 年同月同日	同縣同郡同村南	台上二ヶ所。各面積小。	純鹹		蓮田式	貝製裝飾品注口土器片	
M.A 12.	M.A-H.T-L.II. 3	同 年同月廿三日 同 年十月十五日	同縣同郡豐春村花積	台上及台端數ヶ所。各面積小。	純鹹	A'點、上層人骨	上層、勝坂式 下層、蓮田式	上層、石鏃 下層、打石斧、磨石斧	層位をなす
2 日川支渓谷 (Nikkawa Nebental=M.A-Ni-NT)									
1 同右岸(黒濱支丘) (M.A-Ni-N.T-R)									
M.A 13.	M.A-Ni-N.T-R. 1	昭和三年七月十二日	埼玉縣南埼玉郡黒濱村江ケ崎	台上二ヶ所。各面積小。	純鹹		蓮田式諸磯式	磨石斧	
M.A 14.	M.A-Ni-N.T-R. 2	同 年同月十三日	同縣同郡同村江ケ崎中	斜面上。面積小。	純淡		勝坂式		
M.A 15.	M.A-Ni-N.T-R. 3	同 年同月同日	同縣同郡同村長崎	台端。面積甚小。	純淡	こじみ、巻貝の貝層	勝坂式		殆んど全掘

2 同 左岸（慈恩寺支丘）(M.A-Ni-N.T-L)									
M.A 16.	M.A-Ni-N.T-L.	昭和三年九月二十三日	埼玉縣南埼玉郡慈恩寺村鹿室	台上。面積小。	主鹹		蓮田式		
M.A 17.	M.A-Ni-N.T-L. 2	同 年同月廿二日	同縣同郡同村古ケ場	台上數ケ所。各面積小。	純鹹		蓮田式		
VI A 古利根溪谷 (Furu-Tone Tal = F.T-T)									
1 同 北奥（五霞支丘）(F.T-N)									
F.T. 1.	F.T-N. 1	昭和三年十月十一日	茨木縣猿島郡五霞村小手指	低台上。	主淡	獸魚骨出土	勝坂式	打石斧破片	
F.T. 2.	F.T-N. 2	同 年同月十七日	同縣同郡同村冬木	低台上。	主淡		大森式		
F.T 3.	F.T-N. 3	同 年十一月一日	同縣同郡同村土塔	台端。面積小。	純鹹		蓮田式		
2 同 左岸（葛飾支丘）(F.T-L)									
F.T 4.	F.T-L. 1	昭和三年十月二十五日	千葉縣東葛飾郡關宿町元町（慈恩寺裏）	台上。面積小。	純鹹		蓮田式		諸磯式の大形土器片出土
F.T 5.	F.T-L. 2	同 年同月二十六日	同縣同郡同町元町篠台	台端。面積中。	純淡	若干の鹹水產貝類あり	大森式	打石斧、完全土器	氾濫の被水部分を見る土器片多

VI B 奥東京灣 (Oku-Tokio Bucht = O.T-B)

1 同 右岸 其一（慈恩寺支丘）(O.T-R.I)

O.T 1.	O.T-R.I. 1	昭和三年九月二十一日	埼玉縣南埼玉郡慈恩寺村裏慈恩寺貝塚	斜面上。面積小。	純 淡	獸骨夥多	大森式		土器片多
O.T 2.	O.T-R.I. 2	同 年同月同日	同縣同郡同村下手耕地野中	台端。面積小。	純 鹹		諸磯式		
O.T 3.	O.T-R.I. 3	同 年同月二十日	同縣同郡同村裏慈恩寺月讀社	台上。	純 鹹		蓮田式		
O.T 4.	O.T-R.I. 4	同 年同月同日	埼玉縣南埼玉郡慈恩寺村裏慈恩寺椿木	台端。	純 鹹		蓮田式		學外目的にて發掘せられたることあり
O.T 5.	O.T-R.I. 5	同 年同月二十三日	同縣同郡同村上野	台上。	純 鹹		蓮田式		人家中にあり

2 同右岸 共二（岩槻支丘）（O.T-R.II）

O.T 6.	O.T-R.II. 1	大正十五年十二月十六日	埼玉縣南埼玉郡岩槻町太田	台上。	主 鹹		不明	磨石器表面採集	資料不充分
O.T 7.	O.T-R.II. 2	同 年同月同日。	同縣同郡和土村木曾良	台上。	主 鹹		蓮田式	角器	村落内にあり
O.T 8.	O.T-R.II. 3	同 年同月同日	同縣同郡同村黒谷	台上數ケ所。各面積小。	主 鹹		蓮田式 諸磯式		

3 同右岸 共三（鳩谷支丘）（O.T-R.III）

O.T. 9.	O.T-R.III. 1	昭和五年五月八日	埼玉縣北足立郡安行村領家猿貝	台上三ケ所。各面積稍小。	主 淡	人骨破片	大森式		土器片多

5 同左岸 共一（葛飾丘陵）（O.T-L.I）

O.T 10.	O.T-L.I. 1	昭和六年七月三日	千葉縣東葛飾郡金杉村築比地榮光院	台上及斜面。面積稍大。	主 鹹	魚骨稍多	大森式	骨器	土器片多
O.T 11.	O.T-L.I. 2	同 年六月五日	同縣同郡七福村岩名	台上。面積大。	主 淡	獸魚骨多	大森式	朱塗土製耳飾	土器片多
O.T 12.	O.T-L.I. 3	同 年五月八日 同 年同月二十九日	同縣同郡野田町清水	台上。面積廣大。	主 淡	人齒、獸魚骨	大森式	骨角牙器、土偶耳飾、	土器片多

O.T 13.	O.T-L.I. 4	同　年五月八日 同　年同月十五日	千葉縣東葛飾郡野田中野臺	台上。面積中。	純鹹（若干の淡水產あり）	僅少の魚骨	主として勝坂式	土器片利用錘三箇	下層より僅少の諸磯式を出土す
O.T 14.	O.T-L.I. 5	同　二年十月二十四日 同　五年十二月十三日	同縣同郡梅里村山崎	台上及斜面。面積大。	主鹹 主淡	人骨部分、獸骨	勝坂式 大森式	淡水貝より骨器	淡鹹集積地を異にす
O.T 15.	O.T-L.I. 6	同　六年四月二十八日	同縣同郡新川村上新宿	台上及斜四、四ヶ所。各面積中。	淡鹹		大森式	土偶、曲玉、骨製凹石、浮[illegible]牙器	土器片夥多
O.T 16.	O.T-L.I. 7	同　年同月二十四日	同縣同郡同村上貝塚	台上及斜面に馬蹄形をなす。面積大。	淡鹹	獸魚骨小	大森式	木兎土偶頭胴片、石皿片	概して貝層下部に鹹水產を見る
O.T 17.	O.T-L.I. 8	同　年同月十七日	同縣同郡流山町三輪野山	台上及斜面、四ヶ所。各面積中。	主鹹	獸魚骨小	大森式	石棒破片、打石斧	土器片多
O.T 18.	O.T-L.I. 9	同　五年十月二日	同縣同郡同村鰭ヶ崎	台上二ヶ所。各面積中。	純鹹	獸魚骨小	大森式		
O.T 19.	O.T-L.I. 10	同　年十一月六日	同縣同郡八木村野々下屋敷	台上四ヶ所。各面積中。	主淡	獸魚骨小	大森式	朱塗耳飾	土器片多

6　同左岸　其二（下總臺）(O.T-L.II)

O.T 20.	O.T-L.II. 1	昭和五年七月三日	同縣同郡小金町幸田	台上五ヶ所。各面積小。	純鹹	獸魚骨稍多	蓮田式	小形磨石斧	一部は人家中にあり
O.T 21.	O.T-L.II. 2	同　年六月二十五日	同縣同郡高木村八ヶ崎貝ノ鼻	台上。	純鹹	獸骨小、魚骨多	大森式		森林內
O.T 22.	O.T-L.II. 3	同　年同月同日	同縣同郡同村八ヶ崎北道合	台上四ヶ所。各面積小	純鹹		蓮田式		
O.T 23.	O.T-L.II. 4	同　年同月十九日	同縣同郡同村新井	斜面上。面積甚小	純鹹		大森式		急斜面上に一部の殘存せるものの如し
O.T 24.	O.T-L.II. 5	同　年同月十二日	千葉縣東葛飾郡明村上本鄉	台上。	純鹹	獸魚骨小	勝坂式	骨器、土製錘	明治神社の內外に亙る

VII　中利根溪谷 (Naka-Tone Tal = N.T-T)

1 同左岸（猿島丘陵）（N.T–L）

N.T 1.	N.T–L. 1	昭和三年十一月二日	茨木縣猿島郡猿島町金岡	台上。面積小。	主淡	獸魚骨多	大森式	石皿片	
N.T 2.	N.T–L. 2	同　年同月二十九日	同縣同郡森戸村伏木・青木	台上及斜面に繼續す。面積大。	純淡		勝坂式	打石斧	
N.T 3.	N.T–L. 3	同　年同月二十八日	同縣同郡同村百戸・岡田	台上台端。三ヶ所。各面積小。	純鹹		蓮田式 諸磯式		出土文化遺物僅少

VIII 飯沼溪谷 (Iinuma Tal = Ii–T)

1 同左岸（結城丘陵）（Ii–L）

Ii. 1.	Ii–L. 1	昭和三年十二月三十日	茨木縣結城郡飯沼村崎房	台上三ヶ所。各面積小。	純淡		蓮田式		カルシユームにより貝殼密着せる所あり
Ii. 2.	Ii–L. 2	同　年同月同日	同縣同郡同村鴻ノ山貝塚坂	台端及斜面	主淡	獸骨多き部分あり	蓮田式	打石斧 磨石器片	

備考

1. 貝塚を發見せず、又は貝塚にあらざりしものを除く。
2. 純然たる彌生式遺跡を含ます。
3. 昭和六年七月以降の調査により、增補せらるゝ貝塚の溪谷別番號は本表番號の次數より始め、番號を變更せず。細位番號は谷奥より谷口に向つて、其都度夫々其番號を改む。

史前學會々則

一　本會ヲ史前學會ト名付ケル

二　本會ノ目的ハ史前學研究ヲ主體トシ、併セテコレニ關連スル諸學ヲ考究普及スルニアル

三　本會ノ事業ハ左記ノ通リデアル
　研究小報及パンフレツトノ發行
　史前學雜誌(年六回隔月發行)及年報ノ發行
　調査並ニ研究旅行、随時講演會並ニ展覽會ヲ催ス

四　會員
　本會ノ趣旨ニ賛成シ年額金五圓ヲ前納スル者ヲ以テ會員トシ金貳百圓以上ヲ一時ニ納ムル者ヲ以テ終身會員トスル
　特ニ本會ニ貢獻シタル會員ヲ名譽會員ニ推選シ、終身會員ニ準ズル

五　本會員ハ隔月發行ノ史前學雜誌並ニ毎年一回發行スル年報ノ配布ヲ受ケルモノトスル(但海外在留者ハ別ニ遞送料ヲ要スル)

六　會員特典
　本會々員ハ大山史前學研究所ニ於テ研究ノ便宜ヲ受ケ其研究ヲ雜誌ニ於テ發表スルコトヲ得ル
　本會ノ調査並ニ研究旅行、講演會及展覽會ニ出席シ、本會所藏ノ資料圖書等ヲ使用閲覽スルコトヲ得ル

七　本會ニ數名ノ幹事ヲ置キ、本會ノ會務ヲ執ル(將來必要ニ應ジテ本會々則ヲ變更スルコトヲ得ル)

八　本會ハ事務所ヲ左記ノ所ニ置ク

東京市澁谷區穩田町九
大山史前學研究所内　史前學會
電話青山一二五番

投稿規定

寄稿の範圍は史前學研究を主體とし、之に關連する諸學を包括す。寄稿者は會員並に會員の紹介ある者に限る

原稿は返還せず、但し寫眞、圖表等は豫め申出であるものに限り之を返還す

原稿掲載の先後は編輯者に一任されたし

寄稿者の希望に依りては內容に關し相談に應ずることあるべし

寄稿の別刷は豫め申込みある場合に限り、當分所要部數の實費及び送料を申受け候に應ず

昭和八年九月二十五日印刷
昭和八年十月一日發行
第三卷第六號代冊
定價一圓五十錢

編輯者　東京市澁谷區穩田一丁目九番地　大山柏
發行者　東京市澁谷區穩田一丁目九番地　岡田義一
印刷者　東京市神田區表猿樂町二　株式會社開明堂東京營業所　中村修二

發行所　東京市澁谷區穩田一丁目九大山史前學研究所内　史前學會
電話青山一二五番　振替東京五八九六九番

發賣所　東京市神田區駿河臺町一ノ八　岡書院
電話神田二七七五番　振替東京六七六一九番

VORLÄUFIGER BERICHT UEBER DIE CHRONOLOGIE DER JÔMON-KULTUR DER STEINZEIT IM KWANTÔ (MITTEL-JAPAN.)

TEIL I (auf japanisch)

von

Kashiwa Ohyama

Mitsuji Miyasaka

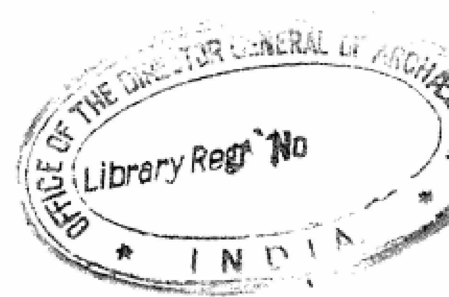
Keisuke Ikegami

Ich habe diese Arbeit bei dem Congrès des Préhistoriens d'Extrême-Orient, 1932. Hanoi (Französisch Indo-China) im deutschen Sprache veröffentlicht. Daher gebe ich hier kein Résumé; aber dieser japanische Bericht ist ausführlicher als der in Hanoi veröffentlichte. In diesem Heft berichte ich mit meinen Assistenten zusammen nur den ersten Teil, der vor allem aus Einleitung, Methode und Verlauf und Ergebnissen der Untersuchung besteht. Den übrigen Teil, nämlich Kultur-Merkmale wird I. Kohno im 5 Band Heft 6 (November, 1933) dieser Zeitschrift veröffentlichen. Nach Kohnos Veröffentlichung werde ich beide Teile stark vermehrt unter dem Titel "Ergänzter vorläufiger Bericht übor die Chronologie der Jômon-Kultur des Neolithikum im Kwantô (Mittel-Japan)" auf deutsch wahrscheinlich im nächsten Jahre veröffentlichen. (K. Ohyama)

....

ANMERKUNG

Diese Heft gehört zum 3. Band (1931). Wir haben seiner Zeit nur 5 Hefte herausgegeben und ein Heft für eine chronologische Arbeit reserviert. Mit diesem Heft ist also der 3. Band abgeschlossen.



Satzungen der Gesellschaft.

1. Der Name der Gesellschaft ist "Shizengaku-Kwai" (Praehistorische Gesellschaft)
2. Der Zweck der Gesellschaft ist das Studium der Praehistorie und ihrer Grenzgebiete und dessen Popularisierung
3. Die Tätigkeit der Gesellschaft erstreckt sich auf
   - A Herausgabe kleiner Mitteilungen und Schriften
   - B Herausgabe der Shizengaku-Zasshi (Zeitschrift für Praehistorie) (Zweimonatlich) und des Jahresberichts.
   - C Veranstaltung von Forschungs-und Studienreisen
   - D Veranstaltung von Vorträgen und Ausstellungen
4. Mitglieder

   Die Mitgliedschaft wird erworben durch jährliche Vorauszahlung eines Beitrags von 5 Yen. Personen welche einen einmaligen Beitrag von 200 Yen oder mehr zahlen, werden lebenslängliche Mitglieder. Personen welche sich um die Gesellschaft besonders verdient gemacht haben, können Ehrenmitglieder werden und haben damit die Stellung der lebenslänglichen Mitglieder
5. Die Mitglieder erhalten die Zeitschrift und den Jahresbericht frei, jedoch wird für Zusendung nach dem Ausland das Porto berechnet
6. Rechte der Mitglieder

   Die Mitglieder haben das Recht, die Einrichtungen des Ohyama Instituts für Praehistorie zu benutzen

   Die Arbeiten der Mitglieder sollen in der Praehistorischen Zeitschrift veröffentlicht werden

   Ferner haben die Mitglieder das Recht, an den Forschungs- und Studienreisen der Gesellschaft teil zu nehmen, die Vorträgen und Ausstellungen zu besuchen, sowie die Sammlungen und die Bibliothek der Gesellschaft zu benutzen
7. Ein aus mehreren Mitgliedern, bestehender Vorstand führt die Geschäfte der Gesellschaft
8. Wenn es sich als notwendig herausstellt, können diese Satzungen später geändert werden
9. Das Büro der Gesellschaft befindet sich:

   9, Onden Aoyama Tokio
   Ohyama Institut für Praehistorie
   (Ohyama Shizengaku-Kenkyujo)

für den Vorstand

Fürst Kashiwa Ohyama — Sueo Sugiyama
Isamu Kohno — Kingo Tazawa
Keisuke Ikegami

Sonderausgabe

VON

Zeitschrift für Praehistorie

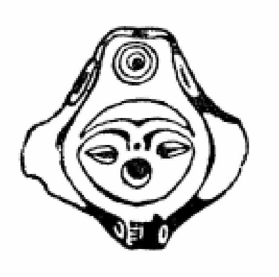
(SHIZENGAKU-ZASSHI)

3 BAND 6 HEFT 1931

VORLÄUFIGER BERICHT ÜBER DIE CHRONOLOGIE DER JÔMON-KULTUR DER STEINZEIT IM KWANTÔ (MITTEL-JAPAN)

VON

KASHIWA OHYAMA
MITSUJI MIYASAKA
KEISUKE IKEGAMI



Oktober 1933

TOKIO

Japanische praehistorische Gesellschaft

(SHIZENGAKU--KWAI)

9. Onden, Aoyama Tokio.



史前學雜誌

第三卷　第五號

昭和六年九月十五日發行

史前學會

史前學會々則

一　本會ヲ史前學會ト名付ケル

二　本會ノ目的ハ史前學研究ヲ主體トシ、併セテコレニ關連スル諸學ヲ考究普及スルニアル

三　本會ノ事業ハ左記ノ通リデアル
　研究小報及パンフレツトノ發行
　史前學雜誌(年六回隔月發行)及年報ノ發行
　調査並ニ研究旅行、臨時講演會並ニ展覽會ヲ催ス

四　會員
　本會ノ趣旨ニ贊成シ年額金五圓ヲ前納スル者ヲ以テ會員トシ金貳百圓以上ヲ一時ニ納ムル者ヲ以テ終身會員トスル
　特ニ本會ニ貢獻シタル會員ヲ名譽會員ニ推選シ、終身會員ニ準ズル

五　本會員ハ隔月發行ノ史前學雜誌並ニ毎年一回發行スル年報ノ配布ヲ受ケルモノトスル（但海外在留者ハ別ニ遞送料ヲ要スル）

六　會員特典
　本會々員ハ大山史前學研究所ニ於テ研究ノ便宜ヲ受ケ其研究ヲ雜誌ニ於テ發表スルコトヲ得ル
　本會ノ調査並ニ研究旅行、講演會及展覽會ニ出席シ、本會所藏ノ資料圖書等ヲ使用閲覽スルコトヲ得ル

七　本會ニ數名ノ幹事ヲ置キ、本會ノ會務ヲ執ル（將來必要ニ應ジテ本會々則ヲ變更スルコトヲ得ル）

八　本會ハ事務所ヲ左記ノ所ニ置ク
　東京府豐多摩郡千駄ケ谷町穏田九
　大山史前學研究所內　史前學會　電話青山一一二五番

幹事　大山柏　甲野勇　宮坂光次　北條憲政　杉山壽榮男　田澤金吾
會計　岡田淺一

投稿規定

寄稿の範圍は史前學研究を主體とし、之に關連する諸學を包括す。寄稿者は會員並に會員の紹介ある者に限る

原稿は返還せず、但し寫眞、圖表等は豫め申出であるものに限り之を返還す

原稿揭載の先後は編輯者に一任されたし

寄稿者の希望に依りては內容に關し相談に應ずることあるべし

寄稿の別刷は豫め申込みある場合に限り、當分所要部數の實費及び送料を申受け需に應ず

昭和六年十二月十二日印刷
昭和六年十二月十五日發行

定價一冊一圓郵稅四錢

編輯者　東京府豐多摩郡千駄ケ谷町穏田九番地　大山柏
發行者　東京府豐多摩郡千駄ケ谷町穏田九番地　岡田義一
印刷者　東京市神田區表猿樂町二　中村修二
株式會社開明堂東京營業所

發行所　東京府豐多摩郡千駄ケ谷穏田九大山史前學研究所內　史前學會
電話青山一一二五番　振替東京五八九六九番

發賣所　東京市神田區北甲賀町四番地　岡書院
電話神田二七七五番　振替東京六七六一九番

史前學雜誌

第三卷 第五號

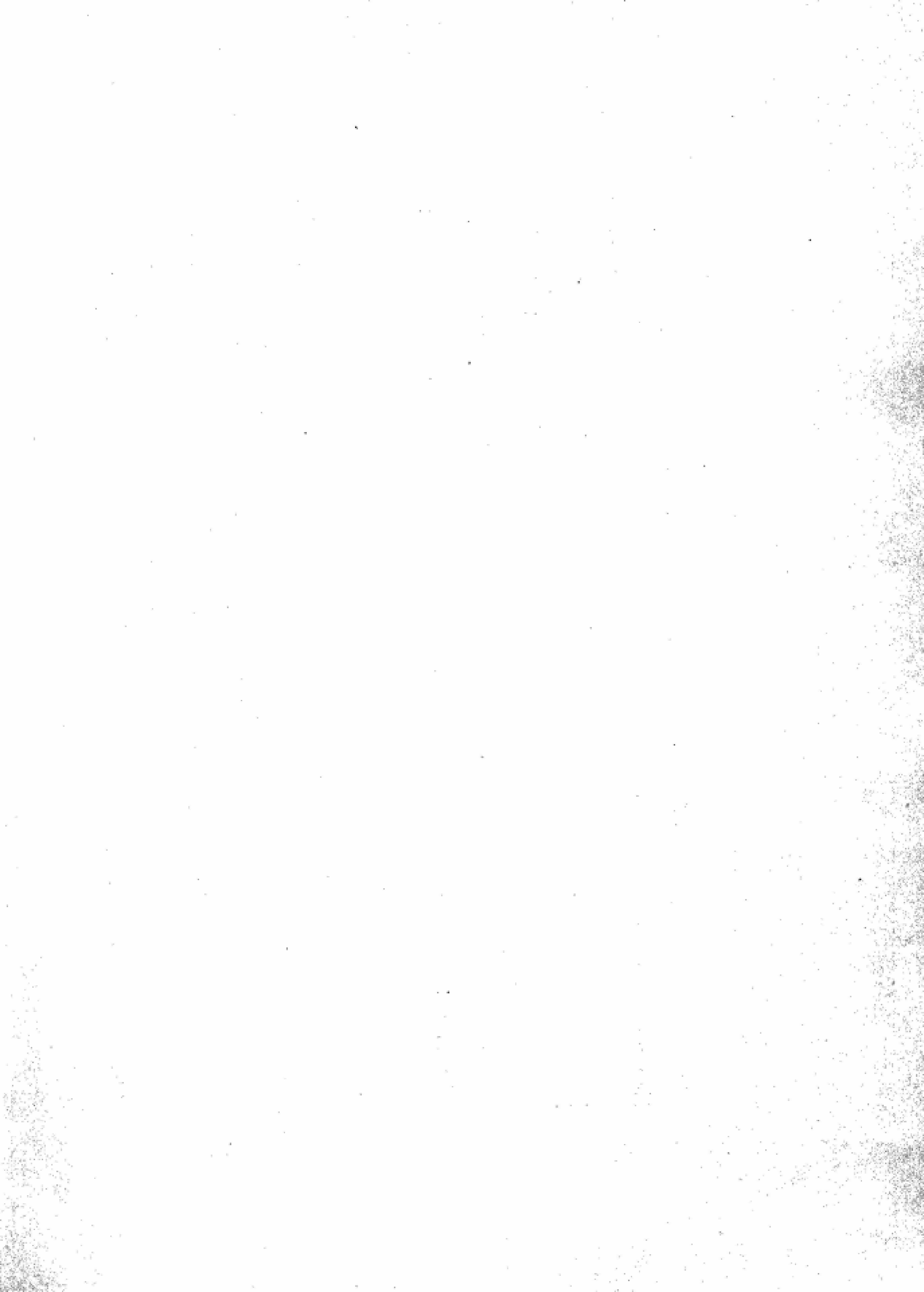
目次

圖版第一二　下總國東金野井貝塚出土　注口土器

資料

會報

餘白録





下總國東金野井貝塚出土注口土器

Ausgussware aus dem Muschelhaufen von Higashi-Kanenoi beim Dorf Kawana, Prov. Chiba.(I.Kohno.S.241)



關東に於ける奥羽薄手式土器（上）

大場磐雄

一　現在に於ける關東出土の奥羽薄手式土器論概要

關東地方に於ける或る時期の石器時代遺跡から、東北地方に最も發達し分布せられた縄文土器に酷似した物を發見せらるゝ事は明かな事實である。この現象を如何に解釋すべきかは日本の縄文土器研究上輕々に附する事の出來ぬ問題であらう。故に先人の之に對する管見亦夙に存してゐるが、就中鳥居博士の所論は頗る明快であつて、卽ち奥羽薄手式土器の關東地方進出とせられてゐる。爾後縄文土器の研究漸次精緻を見るに至り、最近に於ける新進研究家の所説は左の域に迄進歩を見るに至つた。

(a)甲野勇氏は昭和三年六月發刊の史前學會小報第二號「埼玉縣柏崎村眞福寺貝塚調査報告」中に於て、同貝塚から發見せられた若干の奥羽薄手式土器に對して、同貝塚發見の多數土器片と比較し、紋樣其他に於て類似を認め得るが、なほその間甚しいギャップの存在する點と、又奥羽薄手式土器への過渡的作品の發見せられない事、及び該土器が紋樣のみは奥羽薄手式であつても土質は疎鬆であり縄紋も亦粗大な點等から、此等の作品は既成文化所産品の摸倣とすべきが妥當であらうと述べ、更に同書「結言」條には右の事實から當時東北地方に於て發展した奥羽式文化の影響が本貝塚に波及したであらうとし、本貝塚積成期は奥羽式文化の或る階梯と平衡すると説かれてゐる。卽ち奥羽薄手式土器の存在を奥羽文化の影響によつて生じた一の文化現象であるとせらるゝのである。

(b)八幡一郎氏は昭和五年一月發刊の雜誌「考古學」第一卷第一號誌上より引續き同誌第三號に亙つて「奥羽文化南漸資料」と題し、この問題に對する研究方針及びその方法を説いた。氏は奥羽地方石器時代の一時期に於ける文化が奥羽薄手式土器及之に伴ふ諸種遺物に依つて示現せらるゝから之を特に奥羽文化と略稱し、それは終始奥羽地方を中心として推移し、その隣接地に

は單なる緣邊的波及を見たに過ぎないから、それが奥羽地方から關東地方又は中部地方へ多少滲透した意味を以て「南漸」と名づけたと述べ、その資料として關東地方及び中部地方の各遺跡より斷片的に發見せられた土器及土偶の個々に就き詳細な說明と、それが奥羽式遺物との類似點を究明に列擧せられた。不幸にして未だ完結を見ず、資料論も土器と土偶のみであり、又最初に示されたプランによると、なほ「諸資料を出す遺跡の性質」「關係文獻」「諸資料の有つ意義」等の最も重要な部分が殘されてゐるのは甚だ遺憾である。然し大體の所說は前述の序說に於て窺ひ得らるゝ樣である。即ち關東及中部地方に於ける奥羽薄手式土器及之に伴ふ同種遺品は、奥羽に中心を有した一文化の南漸滲透による現象とせらるゝものであらう。

(c)山內清男氏は昭和五年五月發刊の雜誌「考古學」第一卷第三號に「所謂龜ヶ岡式土器の分布と繩文式土器の終末」と題する長論文を掲げられてその管見を披攊されてゐる。氏は所謂龜ヶ岡式土器の本態は如何なる物かを詳述され、製作・形態・裝飾等の變遷から六型式に分類されるとし、次に關東及び中部地方に出土する同式土器の個々に就いて比較した結果、關東地方出土の物は何れも奥羽に於ける龜ヶ岡式土器の前半期に位する物のみであり、中部地方の物には同式土器後半期に當る物の存在を認めると說き最後にその現象の由因に就いては、龜ヶ岡式土器が奥羽に於て行はれつゝあつたと略同じ頃に於ける關東及中部地方の土器型式を示すものであつて、直ちに之を奥羽文化南漸の如き一方向的影響とのみ解すべきではないとせらるゝのである。即ち氏の所說は奥羽も關東又は中部地方も同一時期に於ける同一現象の示現であるとせらるゝ樣である。

以上の外にも右に對する所論を提唱せらるゝ方々は多數に存在する樣であるが、その多くは如上の三說中に屬し又はそれと大同小異であり、或は未發表の物であるから、私は右三說を現在に於ける關東地方出土の奥羽薄手式土器問題の代表的論篇としたいと考へてゐる。

さて上述の三說即ち甲野氏の奥羽文化模倣說と八幡氏の同文化南漸說及び山內氏の同文化併行說は、何れも確固たる基礎の上に立つた精緻周到な所說であつて、自分は何れも之に對して同樣に敬服の念を有してはゐるが、同時に又同樣に疑惑をも禁じ得ないのである。それは如上專門家の所述が何れも同樣な資料に基き、相當の點迄共通點を有して居られながら結論に於て相容れない物の存する事實であつて、そこになほ攷究すべき餘地が存するのではあるまいか。即ち敢て過言を顧ないならば以上の三說には共通する缺陷の存在を有するものではあるまいかと考へるのである。故に私は全く別な立場からその驥尾に附して愚論を開陳し、些か參

考の一端に資したいと思ふに至つたのである。

二　東北地方に於ける奥羽薄手式土器

東北地方に存する奥羽薄手式土器は、確かに一時期を劃して發達を遂げてゐる。然し突如として同地方に發源した物でない事は言ふ迄もない。既に松本博士並に前述山内氏によつて詳細な編年が試みられてゐる。即ち形態・文様・製作等の點から數型式に分類せられてゐる。私の具有する貧しい資料によつてもその大體は朧氣ながら窺ひ知られるのである。その詳細は前述専門家の說かれた所に讓つて省略するが、一言にしていへばその相對的年代の古い物は製作・文様概して精密、形狀亦婉曲不規であるが、終末に近づくに從つて製作文様何れも粗にして簡、形狀亦形式に陷する傾向がある。而して之を遺跡の垂直的觀察に徵すれば、その一部の遺跡に於ては明かに層位的に變遷の跡を辿り得らるゝ個所があつて、その遺跡自身に於いて漸遷した事實を舉げる事が出來るが、又之を水平的觀察によれば、該式土器出土遺跡の分布が、奥羽地方に於いても南部に薄く北部に濃く、又北部津輕方面に至るに從つてその極盛期から終末期に亘る物を出土する遺跡が多い樣である。例へば關東に最も近い宮城縣方面の遺跡は、關東方面に見る薄手式土器及び厚手式土器を出土する遺跡が相當に多いが、岩手縣に入るとそれ等は漸次減じて青森縣に入れば愈々僅少となり、之に對して奥羽薄手式土器出土遺跡が反對の分布狀態を見るのである。即ち奥羽薄手式土器の遺跡は大體の傾向として南から北へ進んで多く分布し、その變遷も亦同樣の狀態を示す事がほゞ推察し得らるゝのである。因みにそれは更に北進して北海道にも存在するが、現在に於てはそれ程深く侵入した事實が認められぬから該式土器遺跡は津輕から北海道の南部附近に於て終末を遂げた如き感を呈してゐる。勿論千島・樺太にも又海を越えて西比利亞方面にも現在に於ては連絡すべき遺物に接しない。故に重ねて奥羽薄手式土器は奥羽地方に於いて南方から北方に漸進しつゝ獨自の發達を遂げた石器時代の一時期に於ける繩文土器と言ひ得ると思ふ。

次に日本石器時代に於ける奥羽薄手式土器の位置はどうであらう。何人も指摘する如く、その形態・文様等から繩文土器の最極盛期から終末期の狀態を示してゐる。即ち關東地方に於いて盛行した薄手式土器と對比するならば、その形態に於て小形且つ婉曲であり、鉢よりも壺及び皿が著しく發達し、圓底が屢々現はるゝに至り、又文様に於てもその器形に相應して横に連續する物を主とし、且つ局蹐せられた器面に洗練せられた文様を盛つた爲に、文様の壓縮が見られるに至り、且つ薄手式土器に多く見られない底

面全體に文様を施す事も行はれた。朱の塗附も屢々用ゐられ朱を以て文様を描いた所謂彩文土器も決して稀ではなく、或物に於ては漆の如き塗料を施して、質の堅硬と器面の光澤とを圖つた物すら存する。卽ち土器全體を通じて甚しく華美の感を懷かしめ、中には實用を離れた品の存在をさへ起させる物が多い。故にそれ等の事實は繩文土器の極度に發達を遂げた時期に於ける作品であつて、その背後には終末が近づきつゝある狀態を示す事を意味する。事實に於て是等奧羽薄手式土器は漸次退歩し、形式化さるゝ道程が土器自身の變遷によつても明かに窺ひ知られるのである。右の現象を綜合するならば、奧羽薄手式土器が繩文土器の編年上に於いて占むる位置は自ら想像に難くない。卽ち薄手式土器其他に比して相當に相對的年代の下降する物である事は殆んど否定し難い觀察であらう。なほ之を他の方面から見てもその推定は同樣な結果を見る。最近多數の木器漆器等を出土して顯著な遺跡の一に數へらるゝ靑森縣三戸郡是川村中居の遺跡に於いて、明かに鐵器の斷片が發見され又その木製品中には確實に金屬器を使用して製作された種々の事例が存し、又その他の遺跡にも斷片的ながら金屬器の存在を認め得らるゝ事實に遭遇してゐるから、奧羽薄手式土器主體の遺跡の或物は純然たる石器時代のみでなく、所謂金石併用時代以降の物であつたとの憶測は甚しき誤りがあるまいと考へ得られる。

如上の諸點が奧羽薄手式土器及び之を伴ふ遺跡の特徴として大體承認せられる。要約すれば土器それ自身に於ては繩文土器の極盛期から終末期の狀態を示し、遺跡が南から北へと漸進的に分布し、且つ津輕海峽の前後に於て終末を遂げて居り、之に類似の遺品を他に見ない等であつて、そこに奧羽薄手式土器及び之を伴ふ遺跡の文化的性質を暗示する物ではあるまいか。しかし私はこの問題の解決に先立つて關東地方の奧羽薄手式土器に對して瞥見しよう。

三　關東地方に於ける奧羽薄手式土器

關東地方に於ける奧羽薄手式土器の發見は相當の量に達してゐる。しかしそれ等は何れも薄手式土器に混在して發見せらるゝのであつて、未だ奧羽地方に於ける如きそれのみの土器を主體とする單獨の遺跡としての存在は認められない。而して關東に於いて奧羽薄手式土器を伴出する遺跡は、殆んど薄手式土器を主體とする遺跡であるが、等しく薄手式土器と稱せらるゝ物も、最近に於ては數型式に分類せられて、恰も前述山内氏の龜ケ岡式土器の變遷に於けると同樣な狀態が認め得られるのである。近來薄手式土

器に堀内式とか安行式とか呼ばれるのはそれ等の事實から起つた便宜的假稱である。その詳細は前述諸氏の精緻な研究に全部讓るが、極めて粗雜に之を要約すれば、薄手式土器と呼ばるゝ物の中には形態・文樣等になほ重厚な感を有し、一面厚手式土器の臭味を漂はしてゐる物と、更にそれが洗練せられ薄手式として獨自の發達を示す物と、次に一層の變化を來してその製作技術に於ては進步を來し、文樣に於てはやゝ簡單化せらるゝに至る物とが存してゐる。武藏國横濱市下末吉貝塚や三澤貝塚出土の土器等は第一類に、常陸國稻敷郡椎塚貝塚及び福田貝塚等の土器は第二類、武藏國北足立郡安行貝塚や南埼玉郡眞福寺貝塚等出土の土器は第三類に相當する。而してそれは又ほゞ相對的年代順をも示してゐると考へられる。奥羽薄手式土器出土の遺跡は右の中第二、第三類に屬する土器を主體とする遺跡に伴出し、殊に最後の第三類に伴出する例が多い。卽ち關東に於ける奥羽薄手式土器は相對的年代に於て下降する薄手式土器と伴出する事がほゞ斷言し得られるのである。次に之を水平的觀察に徵すると、以上の薄手式土器主體遺跡はその分布圏内を東京灣附近から東北にかけて有して居り、殊に武藏・下總・常陸地方がその最も濃密な地域であり、更に一方上野方面への連絡が認められる。從つて奥羽薄手式土器の伴出も同一の地域内に限られて居つて、多摩川以西に於ては薄手式土器は存在するが奥羽薄手式土器の伴出は極めて少ない。卽ち薄手式土器の最も盛行した地方に於てのみ之を見られる樣である。故に關東に於ける奥羽薄手式土器は大體多摩以東より北方にかけて存在せらるゝ事をほゞ推察し得るのである。

次に關東に於ける奥羽薄手式土器と、奥羽に於ける該式土器とはいかなる類似と差異を有するであらうか。この點については已に甲野氏も指摘せられた如く、關東の奥羽薄手式土器は奥羽地方の奥羽薄手式土器と全く同一な物は殆んどなく、文樣に於ても形態に於ても素地に於ても若干の隔りを有してゐる。又文樣に於て殆んど同一であつても素地の粗鬆な場合や、形態に於て殆んど近い物でも文樣に於て差異を認むる物が多い。卽ち關東の奥羽薄手式土器は奥羽の奥羽薄手式土器と酷似又は類似を有するといふべきである。又之を前述奥羽に於ける奥羽薄手式土器の型式と對比する時は、山内氏の說かるゝ如く關東出土の奥羽薄手式土器は形態・文樣等から主として奥羽地方に於ける奥羽薄手式土器の前半期の型式に相當する物のみである。以上の諸事實から關東に於ける奥羽薄手式土器の有する特質を列擧すると、

(イ) 關東の奥羽薄手式土器は必ず薄手式土器と伴出する。それのみの單獨遺跡がない。

(ロ) 奥羽薄手式土器伴出の薄手式土器は、相對的年代に於て中期以後の物である。

(ハ)　その分布は多摩川以西より東北にかけて存在する。

(ニ)　關東の奥羽薄手式土器は奥羽の奥羽薄手式土器に全く同一ではなく酷似又は類似してゐる。

(ホ)　關東の奥羽薄手式土器はその型式が奥羽の奥羽薄手式土器の前半期の物と一致する。

更に右の特徴を基本として私は關東の奥羽薄手式土器の本質を窺ふならば、(イ)からはそれが關東に於て獨自の發達を遂げた物でない事が推定され、(ニ)からは奥羽よりそのまゝ關東へ將來せられた物でない事、(ロ)及び(ホ)から奥羽に於ける奥羽薄手式土器のある時期と關東薄手式土器のある時期とがほゞ接近した時期にある事、(ハ)からそれが地理的にも接近を認めらるゝ事等である。果して然らばこれ等の諸點は如何なる理由の下に起つた現象であらうか。（未完）

所謂龜ケ岡式土器の名稱

所謂「奥羽薄手式土器」の名稱に就いては、從來諸先輩間に各種の假稱が與へられ、初學者をして迷はしめる點が少なくない。今大體現在迄に提唱せられた該式土器に對する名稱を舉げて參考に供しよう。先づ古くより「龜ケ岡」「陸奥式」「奥州式」「奥羽式」等と稱せられたが、近來特に這種土器を研究せられてゐる諸士の間には鳥居博士の用ゐらるゝ「出奥式」喜田博士の「津輕式」、又松本博士は「獺澤式」及び「宮戸式」と稱し、八幡一郎氏及び甲野勇氏等は「陸奥式」を踏襲され、山内清男氏は「龜ケ岡」に從ひ更に之を「大洞式」ＡＢ等々に細別して居られる。なほ「奥羽薄手式」の名稱も既に一部の人には稱へられてゐるが、自分は現在の所說に對し該式土器の性質上この「羽奥薄手式土器」なる稱呼が最も穩當と考へるので之を用ゐる事とした。（大場）

下總香取郡神里村の貝塚

大山柏

一　白井大宮臺貝塚（シラヰオホミヤダイ）

本貝塚は昭和二年十月四日に調査したものであつて、當時私共史前學研究所一行により、最初に良文村阿玉臺貝塚の調査を試みて居る際、一日を後述の木内明神貝塚と共に、宮坂・廣瀨・大山の三名が概査したもので、ほんの試掘壕を掘つた程度に過ぎないのであるけれども、兎に角一記錄として、本貝塚の一般を紹介し一つには「ノート」の整理にもと思ふて概述して置く。

本貝塚附近一般の地形に就ては、旣に良文村貝塚區貝塚（本誌、一の五）に於て略述してあるから省き、本貝塚附近に就てのみ見れば、其位置は利根川右岸の沖積地にある小見川町の西南約四粁にある。同町を中心として形成せらるゝ小見川沖積地を包む一洪積臺上にあり、一小溪谷の稍々錯雜せるものを隔てゝ南方二粁に木内貝塚を見、又小見川沖積地約五粁を距てゝ、東北に當る對岸臺上には阿玉臺の諸貝塚を望んで居る。本貝塚は、白井の部落南側に迫る獨立標高四四・八の存する臺上にあつて、西、北、南の三方向より各小溪谷の谷頭が夫々貝塚に近く存し一種の鞍部を形成して居る（第一圖）。

地表面並に道路によつて作られた斷面から見ると、西南側と北側の兩者に多くの貝殼集積せる部分を認めたけれども、土地の人々の話によると、表土の甚だ深い部分があり、深い所では、六乃至八尺の表土下に貝層の存する由であるから、表面や一部斷面のみではこの全般を推察し得ない。又人々の話では、從來研究的に發掘せられたと云ふ記憶はないが、工事用として屢々貝殼の採集をしたことがある由であるから、一部は更に攪拌を受け、或は所謂見掛け倒しかも知れないが、私共の見た所では猶多くの貝層を存する樣に思はれる。從つてこの全面積に關しては、單に此種貝塚としては相應な面積があるものと云ふより申し樣がない。又この地形が述べた樣な鞍部狀をなして居るから貝層の一部も斜面上に存する關係上、土地の人々の云はれる樣な、表土の深い部分が生じても不思議はない。ましてこの貝

塚と思はれる總てが、畑地であるから耕作によつても斜面、特に表土の狀態にも及ぼす所があるものと考へらるゝ。

私共はこの貝塚の南側斜面に於て、稍貝層の整然たる部分と認めらるゝ所に於て、約一米平方程の試掘壕を穿つ見てた。ここは表土は約一九度程傾いて居つたが、約五〇糎にして、泥土貝層に達し、漸次貝殼を增し、終に整然たる貝層に達した。この間約一五糎。整然たる貝層は柔く崩れ易く、發掘中屢々崩落し、或る時は壕中に作業して居る一人が半身埋沒した樣な程である。

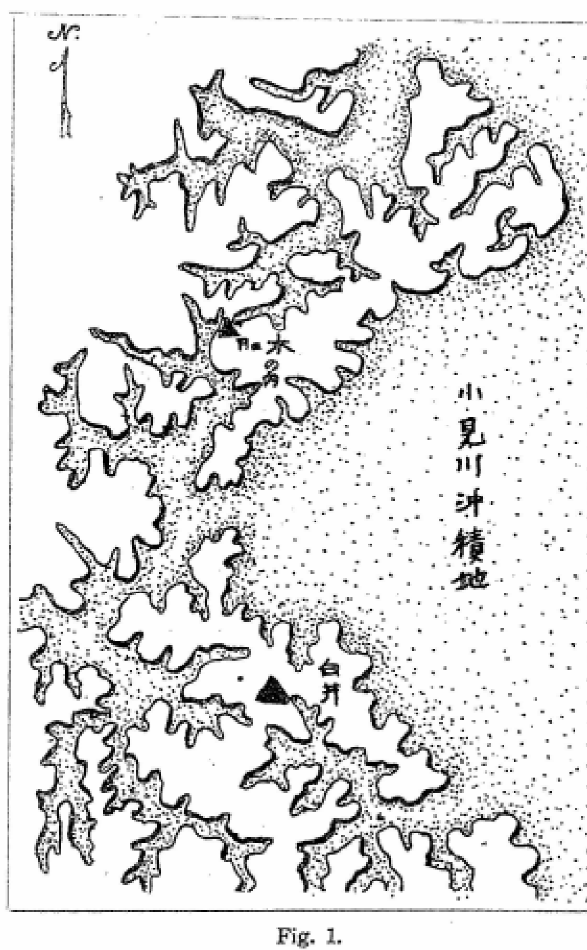


Fig. 1.

而して漸く八五糎の純貝層を掘つて下はロームを認め得た。

この試掘に際し特に氣付いたことは、貝層中に比較的多くの自然石や石片などが泥在して居ることで、この地方は一般的に、この樣な石塊が少ないに拘はらず、貝層より比較的多く出土することは、一度人爲に採集せられたものゝ殘骸とも思はれるが、加工の痕迹は無いものが多かつた。其他の出土物としては、貝及び、骨類の自然遺物の外、人工遺物としては單に土器のみであり、これとて破片のみである。

自然遺物中、獸魚骨は比較的少ない。又嚴重な比較を試みたのではないが、南北兩斜面に於ては、出土の狀態も內容も大なる差が見られなかつた。特に貝類と土器に於て然りである。採集せる貝類に關しては本誌資料欄中に表示してある如く私共の試掘點に於ては、純然たる鹹水產のみである。卽ち純鹹貝塚である。ハマグリ・シホフキが主體をなし、カガミガヒが相應に多く、殆んどこの三者によつて堆積を見るのである。勿論場所によつては、若干の相違もあり、廣く發掘して見るなれば、別項に表示して居る樣な十三種に止

まらず、より多く發見も可能ではあるが、一般的に純鹹貝塚たるものと認められ、これに基いて考へれば、今日の小見川沖積地は猶出來て居らず、海岸線はこの白井附近に深く灣入して、容易に如上の貝類が採集し得たものと思はれる。特にこの小見川町今日の標高が僅々一米二七に過ぎず、利根溪谷上流地方に於て沖積標高八米内外に於てすら鹹水貝塚の存する所は、前述良文村貝塚報告中にも述べて置いたが、繰り返して當時の海岸線の狀態復原に資して置く。



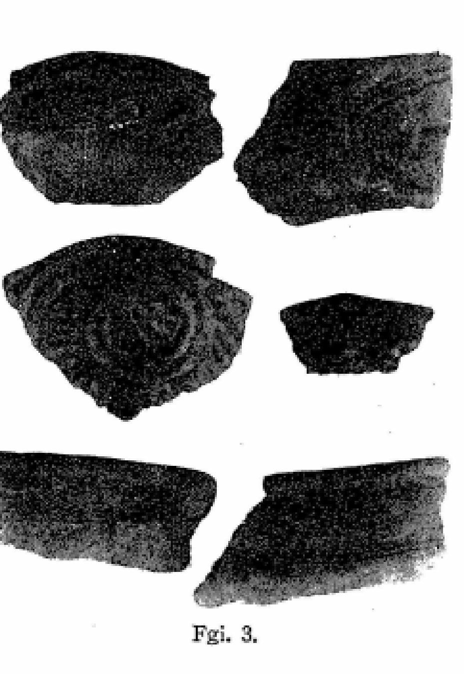
Fig. 2.

土器は破片のみであるが、表面にも随分大形片があり朱塗りの一破片をも得た。これを一言にして云へば、關東縄紋式に於ける編年中期である勝坂式である。勿論大きく發掘したならば他階梯土器も存するかも知れないが、私共の小試掘に際しては層位的の變化もなく、表面採集と併せ見ると、少なくとも其主體は勝坂式のみである。又この土器の示す特徴も、勝坂式のそれを發揮して居る。一例を擧げたなら、浮紋がよく發育し、大形な把手と共に人目をひき、紋様分子には渦卷其他の曲線紋と共に幾何紋をも認められ、且つ廣義の所謂爪形紋も見らるゝ外、縄紋は粗で粒子大である。形は餘り變化あるものとも思はれないが、破片のみで充分に知るを得ない。製作は所謂厚手であり、雲母の混入するものがある。燒は稍々堅く、色は黒褐に赤褐を交へて居る。尙この土器に就ても更に細部研究を行ふならば、色々あると共に同じ勝坂式と稱しても、そこに細分の餘地が存する以上、關東地方として一般的にこれ等の内容が整備せらるゝに於て、始めて本土器に就ても、細論の適確なるものを生ずるのであるから、この所暫くは單に如上の如き勝坂式に屬するものであると云ふに止めて置かう（第二圖）。

要するに本貝塚は其位置より見れば臺上貝塚であり、又一種の鞍部貝塚である。貝類の有性より云へば、純鹹貝塚であると共に、又土器よりすれば關東編年中期である勝坂式に屬する貝塚である。

二　木内明神貝塚（ヤノウチミヤウジン）

本貝塚も亦、昭和二年十月四日、前揭の白井貝塚調査の午後より概査したもので、こゝでは試掘溝すら完全に發掘することが出來ず殆んど表面調査に過ぎない程度であつた。



Fgi. 3.

本貝塚附近の地形は、第一圖に概示した如く、白井貝塚と同様入り込んだ地形の稍々錯雜した所にある。この貝塚は白井貝塚からより以上に明に鞍部の臺上に位置して居り、東北方及び西方の二方から二つの溪谷が奥入してきて居る中間にある。こゝは木の内明神社の西北側に當る故、この貝塚は搜出には便である。但しこの明神社西北側の臺上畑地には、表面殆んど貝殻の散布するものなく、混土貝層露出部は、北方斜面の雜草中に見られる。土地人の話によれば、こゝも亦家作の爲に貝を採集したことがある由であるから、若干の攪拌は受けたとするも、白井貝塚同様、猶多くの處女層の存するものがあると考へる。而して目下貝層を認め得る所は北斜面であるが、この斜面はかなり急であるから、これが爲め臺上ではかなり深く表土を生じ、表面に認め得ない所もあるものと考へる。西斜面にも貝殻の散布する所があり、これも土地人の話では家作に採集して居る由である。地主不在の畑地であつた爲め、掘ることが出來ずに終つた。この兩側の貝層が果して臺上で相接して居るとも思はれないが、兎に角、この兩者を併せて見れば、この貝塚も相應な廣さを有するものと認めらるゝ。

この貝塚で採集したものは表面採集が主であるが、一部は北斜面の露出した混土貝層よりも得て居る。自然遺物としては貝類の外、若干の獸骨を得たのみである。一部表面には土器の破片を得たが、白井貝塚ほどの大形片もない。人工遺物としては石斧の頭部破片一個と土器片のみで、白井貝塚程も採集することが出來なかつた。

貝類は、白井貝塚と同じで、露出貝層に於て、ハマグリ・シホフキが最も多く、カガミガヒこれにつぎ主體をなして居るから、これから見れば海岸線の狀態も全く白井貝塚と同一條件のもと

に成立した時代と考へられ、これ亦純鹹貝塚である。土器も亦白井貝塚と同じく、勝坂式であつて、私共の採集した一袋程の破片中には、他の形式のものと認め得る顯著なものがない(第三圖)。この結果から云へば、勝坂式の階梯に於ける一貝塚である。これを要するに、本貝塚は殆んど總てが白井貝塚と同一條件を備へて居る。其位置、貝類、土器に於ても一致を見るのであるから、私共の得た結果よりすれば、本貝塚は白井貝塚と同時代に併立して居つたもの〻様に考へらる〻。

(九月二十七日)

アトランチスの行方

プラトンによつて始めて稱へられた、この數奇の運命に捉へられたアトランチスの王國は何處にあるのか、果して實在したのであるなれば何れに存したものか、其傳ふる所の如く天災のまゝに深く水底に沒し去つたとしても何處かの水底に、恰も龍宮の廢墟でも見る樣に魚介の棲家と變り果てゝ悠久な眠りについて居るに相違ない。この存否論、肯定者のその處在地に就いても區々である。獨り好事家の穿鑿に止まらず、古くから多くの學者によつても亦研究と捜索とのあとは斷たない。特に一部の考古學者は、シユリーマンのトロヤ發掘に刺激もせられて眞面目な研究も續けられては居るが、未だトロヤの樣に誰れもが等しく認める樣な發見はない。西アフリカ、コンゴー附近の探險で有名な獨逸のフロベニウスは、コンゴー附近と考へるかと思へば、他にアメリカやスカンジナビア論もあればカナリー島說なども中々有力である樣で、今日の所は全く見當がつかない。只人々から好奇の話題として論議せらるゝのみである。其一例とすべきが本年八月のウヲッヘ(Die Woche Hft. 35, VIII・1931.)であつて、全號アトランチス研究號として居る。勿論純なる學術雜誌ではない。然し著名な研究者の一二が短かいながら執筆もして居り、肩がこらないで面白く且つ獵奇的に內容が見られる。　(大山)

霞ヶ浦行

田澤金吾

私は八月下旬の數日間、甲野勇君を始め池上啓介・竹下次作の兩君と共に、その昔江見水陰氏によつて石器時代のエルサレムと呼ばれた、霞ケ浦西浦の沿岸阿波村附近にある諸貝塚の調査旅行を試みた。

嘗ては考古學の搖籃期に多數の人々によつて夥多の珍品が採掘せられ最も注目せられてゐたこの地方の遺跡も、今日では最早それ等の遺跡が遺跡の遺跡として顧られない感がないでもない。とは云へあまりにも著名であつた遺跡に比べて、遺跡自體の持つ正確なる內容は明示されてならぬ。遺物の抽出的研究は從來相當遂げられてゐるにかゝわらず、遺跡は畢竟遺物の出土地たるに止まつてゐたに過ぎない。これ等の遺跡が今日果して眞に全滅の姿を示せるか否かは踏査の上でなければ明白にされぬ。若しこれ等の內から僅少なりとも舊態を存せる遺跡を探索し調査を試み得るならば、その結果は單に私共に或種の滿足を與へるに止まらないであらう。

この調査の主なるものに就いては目下整理攷究中で、他日同行の諸氏と共にその結果を發表する機會があるであらう。よつて今ここには不用意の間に、時々見聞の次第や種々なる印象、或は思ひつき等を書き連られるに過ぎない。云はゞ一種の備忘錄である。

一

八月廿二日朝九時過ぎ兩國驛を出發してから約二時間餘を經て佐倉線郡驛に下車した。驛頭から乘合自動車で神崎附近の利根川岸に至つて下利根川を渡船で越える。川幅が頗る狹くて漸く隅田川の半にも及ばない程であつたのには全く意想外と云ふ他はなかつた。遠く上毛の奧地から流れ來て渡瀨・鬼怒・小貝等の大河を合せた大利根の流として、私は遙かに對岸を見はるかすひろき川幅と、悠々として瀲み流るる大河川の貌相を描いてゐたが全く豫想外であつた。しかし現實は正しく狹まい。あまり奇異に感じられたので地圖を展いて見ると、私達は下利根の流域中特別に川幅の狹少な地點を渡船したのであつた。榎ノ浦の流海と稱へられて潮音騷ぎ立つた和銅の昔は姑く措いて、徳川時代にも猶相當の川幅があつたらしく、神崎明神社のある山丘の麓を川流が屈曲して激しい水勢をなして流れてゐたが爲

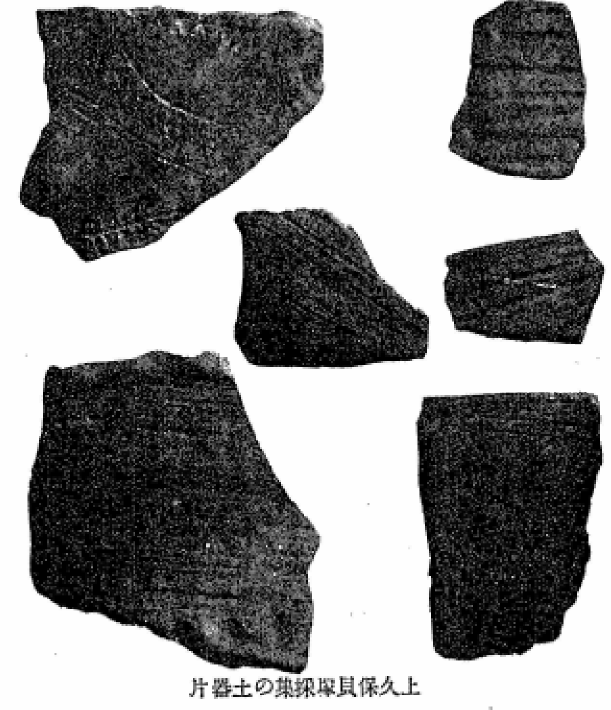
め、こゝを上下する船が頗る難澁をきはめた處であつたことが赤松宗旦の「利根川圖志」に記されてゐる。又この香取・稻敷兩郡間の低濕地が陸地と化したのは、慶長元和以來諸處に堤防を築き治水の功を修めて多くの墾田を開いた結果に外ならないと云はれてゐる。

此處から再び乘合自動車で阿波村に至る。途中前方に起伏せる丘陵上にある福田貝塚の所在地を指しつゝ正午過ぎ阿波村大杉明神社々頭の龜屋旅館に着く。兩國驛出發以來三時間許りであつた。大正十一年に清野・川上兩博士がこの地に旅行せられた時は、上野驛から約六時間を費したと「日本原人の研究」に記されてゐる。思へば便利になつたものである。龜屋旅館の主人平山徹治氏のことは同書に面白く語られてゐるが、私達も同氏の案內によつて上久保・龍貝・石神下等の諸貝塚を歷巡することが出來た。

二

利根川渡船場で烈しい驟雨に遭遇したが龜屋に着いて間もなく再び降雨がある。霽れ間を待つて大杉神社に參拜し、次いで貝塚巡りを始める。社の東側から左へ坂路を下り途中右に折れて上久保貝塚に至る。

上久保貝塚（カミクボ）　丘陵の付根の邊にあつて北側斜面の中腹に十數坪許り貝殼が露出してゐる。丘陵の上部は民家が建並び、左右の斜面は木立の下に雜草が繁茂して今は遺跡の全貌を究め難い。この貝殼露出の大部分が嘗て清野博士等の發掘調査された地域であると平山氏から敎へられた。貝殼が傾斜地に投棄さ



上久保貝塚採集の土器片

れた貝塚の特長として、その垂直厚は厚く一丈五尺にも及んでゐるが、直角の厚は五尺前後を算へるに過ぎないと云ふことである。ハマグリ・シホフキ・サルボウ・アカニシ等を主としてその他十數種の鹹水產貝類の殼が遺存してゐる。表面に散布せ

る土器破片は海手に屬するものが多い。

龍貝貝塚（リユウガヒ）　上久保貝塚の所在する丘陵は同貝塚から數十間の處で屈折して正東に向つてゐる。この屈曲地點附近の北側斜面上端部と更にその處から十數間進んだ側斜面の中腹邊に貝殼が散亂してゐる。卽ち此處が龍貝貝塚と稱へられる遺跡である。この遺跡からの眺望は前面が遙かに開けて水田の彼方に浮島の綠影が俯觀せられ甚だ風光明美であつて關東地方一帶に見るやうな暗澹に近い感じがしない。この貝塚の現狀は地表に露はれた貝殼幷に土器片等の散布區域は狹少であつて、且つ斜面の上半が雜草に覆はれてゐる爲めに遺跡の全域を明白に看取し難いが、恐らく小貝塚の點在するものらしく推察される。土器類は上久保貝塚出土のそれに類するものであつて貝殼の種類亦同樣である。

龍貝彌生式遺跡と古墳群　龍貝貝塚直上の丘陵平坦部分には何故か繩紋式土器の破片を見ることが稀有であるにかゝわらず素文の彌生式土器片が點々として散布してゐる。猶丘陵上同貝塚のある反對側卽ち南側斜面の上端に三基の古墳があり、更に丘陵の尖端附近にも一基を遺してゐる。これ等の古墳は何れも直徑數間高さ二間餘前後の小圓墳であつて、多くは外部裝飾の何物をも有しない制式に屬してゐるが內一基には空濠を存してゐる。

石神下貝塚（イシガミシタ）　龍貝古墳群の西方約一町、丘陵の南側斜面の上端附近に石神大明神と呼ばるゝ小祠がある。高さ約一尺五寸徑五寸餘りの極めて寫實的に作られた石製リンガが二本石祠內に祀られ、又木製の一尺許りのリンガが四五本奉納されてある。性病平癒祈願の爲めに性器を奉祀するものとして別に目新しい譯ではないが、此種の信仰が今猶當地方に行はれてゐると云ふ一例として記して置く。



石　神　祠

この石祠は僅かに殘された貝塚の上部に祀られてあつて、小祠の右側民家との間の崖に貝層の斷面を見ることが出來る。猶通路や小祠右方に極めて小區域ながら貝殼の露出せる箇所がある。この貝塚は附近に民屋が建てられてかなりの人爲的變化を蒙つた爲めに舊態を詳になし難いが、前記龍貝・上久保等の貝

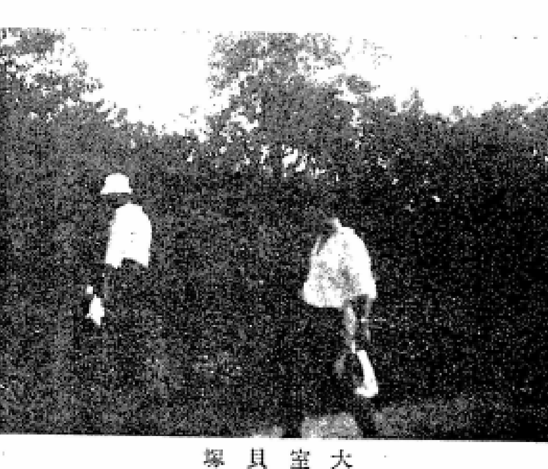
塚に類似するものであつたらしい。土器その他遺物の種類等も亦殆んど前者と同一の系統に屬するものである。

扨て上記の諸貝塚は何れも阿波村聚落の東南方に突出した狹長な一小丘陵の側斜面部に點在集積されてゐるもので、しかも諸貝塚は出土遺物に徴すると略同一文化期に屬したらしく推察せられ、これを各貝塚が個々に獨立して存在した遺跡と考へるにはあまりに近距離に過ぎる。各貝塚を抱括する面積は聚落遺跡としては過大でない。のみならず遺存狀態や位置、地域等からしてこれを個々に切離して獨立した小居住遺跡の相近接するものと考ふるよりは、寧ろ一聚落遺跡としての群集貝塚と看做す方が穩當である。これ等の諸貝塚を歴巡した私は淸野博士がよく遺跡の性狀を洞察せられて、從來漫然と諸貝塚を獨立的遺跡と考へてゐたに對して、上述の見解を提唱された犀利なる觀察とその高見に推服した次第であつた。

因みにこの種小貝塚の點在せる遺跡は、關東地方に於ける貝塚を伴ふ繩紋土器使用民遺跡中の一形式として類例が乏しくなく、遂一これを例示するの繁に堪えない程であるが、これを個々の獨立した遺跡の如く誤認されてゐるものも亦尠くない。「日本石器時代遺物地名表第五版」に於ても當時未だこの種遺跡に對する認識不足の結果、一つの遺跡が二ヶ所以上に看做されて誤り記されてゐる箇所が稀れでない。例へば下總國東葛飾郡明村大字上本郷明治神社附近にある遺跡の如きは四五の小貝塚が僅々一町前後の地域内に點在せるものであるが、同地名表追補の部にはこれを上本郷・明治神社附近及び戸張の三貝塚として記載されてゐるなどその著しい誤りの一つであらう。

又この丘陵上の平坦部はその東半が阿波村聚落の一部となつて民家が建並んでゐる爲めに舊態を知り難いが、畑地となつてゐる西半部には繩紋式土器片を初めその他遺物が殆んど遺存せぬと云つてよい。しかるに彌生式土器片が散在する事實はかなり注目に値する。この丘陵斜面部に遺跡の特徴が著しくて上部の平坦部にそれ等の證徴を認め難いことは阿波村附近の諸貝塚に於て稀に見る現象ではない。寧ろこの地方にある貝塚を伴ふ遺跡の一特質として擧ぐべきであつて、後述の同村大字四箇の大門・大室・所作等の如き皆等しくこの種の形式に屬した遺跡である。淸野博士はこの點に注目せられて平坦部に於て農耕を營んだと說いてをられる。果して農耕を營んだと云ふ明徴が伴はぬ以上直ちにこれに賛意を表し難いが、常識的には一の推論として肯首し得ぬでもない。さりながら平坦なる上部を捨てゝ殊更に急斜面を撰んで居住したとの見解を下すことはその事由の說明に至難である。地形上限られた地域に占居せし結果止むを得ず貝殼堆積趾の上に住居を營む場合、或は屋舍の廢趾に貝殼その他の堆積さるゝ場合は往々にして存在する。しかしそれ

はこの地方のものに比して著しく地形的に拘束せられた遺跡に限られて、自由に居住するによりよき地形を必然的に伴なはぬ場合が多い。少くとも阿波村聚落附近の諸貝塚群にあつては、貝殼の堆積された斜面の直上に當る丘陵上邊附近に居住したと解するのが妥當である。唯それ等の箇所と覺しき部分の地表面に何等の遺跡的證徴を遺してをらない點である。多くの場合かゝる地點には土器片その他遺物が散布せるを常例とするにもかゝわらず、茲にはそれを伴はぬ。しかも却つて彌生式土器片の散在する箇所が稀でない點である。



大室貝塚

これ等の疑問に就いては各種貝塚を伴ふ遺跡（それは出土遺物に種々の變化を存しその文化樣式に差違あると同じく、亦生活の環境樣式內容等の變遷に應じて種別を生じてゐる。他日論

述する機會あるべし。）の研究結果類推され得るか、或は今後この遺跡の大規模な組織的發掘の結果に俟つより途がない。一遺跡內に於ける貝殼堆積地域が全遺跡に對して如何なる關係を示すかは猶多分に未知の問題を有する。ともあれ一聚落遺跡內に殘された貝塚の位置に關する一形式として、この地方の遺跡に一大特徵の存することを指摘して置かう。

三

阿波村大字四箇（シカ）の素封家で貝塚に緣の深い坂本福晃氏を龜屋主人の紹介で訪ねた。夏蠶が家の土間一杯にところ狹く飼はれてゐる。忙しさうであつたが來意を聽いて快よく四箇の諸貝塚を案內された。

大室（オホムロ）貝塚　大杉神社後方の坂道を下ると霞ケ浦から深く灣入した入江が今は水田となつてゐる。水田を北に越えて丘陵の麓から左へ斜に丘を上ると路傍に柿樹畑や桑畑があつて白く貝殼が散亂してゐる。即ち大室貝塚である。こゝは東方に向つた小丘陵の側斜面の中腹で丘陵の上端より中腹に亙つて幾十坪かの廣さに土器片や鹹水產貝類の殼が散布してゐる。猶この丘陵上には土器片その他遺物の散布すること極めて稀れであるが、こゝを越えた反對側の斜面に同じく貝殼が散布して小貝塚をなしてゐる。淸野博士に從へばこの遺蹟出土の土器は、此地方厚

手土器中最も裝飾技術に傑れ且つ精巧を極めたもので、霞ヶ浦地方に於ける厚手土器出土の代表的貝塚であると云ふことである。私達は厚手の外に薄手系の土器片を採集した。貝殼の集積が丘陵の兩側にある故、厚手薄手の兩種の土器が如何なる關係にあるかは、遺憾ながら表面觀察ではこれを確めることが出



所作貝塚

來なかつた。又遺跡は丘陵の斜面部の上半に貝殼を集積し、上方の平坦部に遺跡的證徴の乏しい點は阿波の貝塚に近似してゐる。けれども丘陵の上緣附近に於ては多少の土器片を散存することによると、屋舍は丘陵上の比較的緣に近く營まれたかの如く推測される。

所作(トコロサク)滑石製摸造品遺跡と貝塚　　大室貝塚の傍から古渡(フツト)村飯(イヽ)出(デ)に通ずる間道を進む事約五町許りで四箇の滿光院所屬の墓地がある。東南へ向つた小丘陵の尾根の平坦部にあつて、この邊一體が小松や雜木の雜草が繁茂して所々に僅かづゝの赤土の地肌が露はれてゐる。方一町餘で隨所に彌生式土器片や滑石の小破片等が散布してゐる。又墓地の南に接して松林があつてこゝは以前畑地であつた際多數の滑石製摸造品が發見されたことがある。鏡・劍・平玉・子持勾玉等の類が出土してゐる。これ等の遺物發見狀態は嘗て破壞された古墳墓の趾と察せられる證迹はなく、抑つて他の類例に從つて上代の祭祀に頗る關係の深いものと謂ふべき遺跡である。

　墓地の西方丘陵傾斜面の中腹が貝殼の集積地域であるが、今は雜草や灌木が密生して表面からこれを觀ることが頗る至難であつて、從前發掘の趾に殘る僅かの凹所に貝層の一部を窺ひ知り得るに止まつてゐる。主として諸磯系の繩紋式土器を出土し、殊に貝層中から往々にして鐵鉾が發見さると云ふ。果してこれ等の共存が層位的に確認せらるゝとするならば寔に興味ある事實で、石製摸造品遺跡との脈絡并に關東特に霞ヶ浦沿岸地方に於ける繩紋式土器使用民の上級文化接觸時期卽ち我が上代文化の東國への浸潤時期、或は我が上代に於ける東國地方土民の文化相の研究に關して或種の强い暗示を與へるであらう。注目すべき遺跡である。

大門(オホモン)貝塚　　四箇部落の東方に小支谷を距てゝ南北に橫たは

る丘陵がある。東面は浮島の西方から灣入したひろい入江があつて今は水田と化して綠にかゞやいてゐる。南方から斗出した阿波崎の半島が遠く入江の外側を圍つてゐる。その尖端の邊には延元三年北畠親房が義良親王を奉じて顯家等と共に奧州に下らんとして、時に海上暴風の危に遭ひ親房は親王・顯家等と相



大門貝塚採集土器片

失ふて霞ケ浦の東條浦卽ち今の阿波・古渡・伊崎村附近の海邊に漂着し、阿波崎・神宮寺の二城に據つて義兵を擧げられたと云ふ、南朝の遺蹟として有名な阿波崎城阯が望見せられる。更にその北方に浮島の島影を眺み、霞ケ浦は模糊として遙か烟霧の裡にある。丘陵上からの眺望は寔にうるはしい。

丘陵は上部中央一二町許り平坦部を存し今は桑園となつてゐる。その西側の全斜面に亙つて上緣より中腹に至る間殆んど全部貝類が堆積散亂してあり、東側斜面中央部の中腹以上に數十坪ばかり貝殼が散布して厚き貝層を露出せる箇所もある。又北方斜面中央の上緣附近にも露出せる貝層や集積せる貝殼がある。何れも鹹水產の貝殼からなりハマグリ・アカニシ・シホフキ・サルボウ等が主躰をなしてその他種々の貝殼が遺存する。表面採集の土器片によると何れも繩紋式土器であるが厚手に屬するものを主とし、薄手系がこれに次ぎ更に諸磯系の土器を伴ふてゐる。これ等各種の土器類が層位的に如何なる關係を示すか、或は各貝殼集積部に於て如何なる狀態を現はすかに就いては發掘精査に俟たねばならぬが、兎もかく遺跡の重なりと長期に亙る居住とを思はしめるものがある。丘陵上部平坦部は周緣附近に遺跡的證徵を認め得るも中央邊には何等遺物の散存するを見ない。出土土器の變化に富めると遺跡の廣大且つ交錯せる點に於て、阿波附近にある貝塚を伴ふ遺蹟中注意を要すべきものゝ一つであらう。

四

廣畑貝塚調査の爲め自動車を傭つて阿波村から木原へ通ずる縣道を西進して飯出に向ふ。南朝の遺跡として著名な神宮寺城

阯のある神宮寺の部落を通り抜けて松林の間を快走する。やがて道は丘陵を下る。古渡（フット）の入江が見える。長々と家並を揃へた古渡の街を七八町許り進んで右折する。道は俄に狹く凹凸が甚しい。古渡村役場の傍から水田の間に出る。右手は丘陵が打連り左方は水田の彼方に霞ヶ浦の湖面が白く陽に輝いてゐる。安中村の丘陵が湖中に突出で丶遙か彼方に筑波山が見える。湖岸にはポプラが點々と樹ち並んでゐる。寔に和やかな景觀でこ丶ろよい。古渡から半里ばかりで飯出須賀（スカ）の部落を抜けると。直ぐ前方に右方から迫つた丘陵の麓に高く繁つた一とむらの杜が見える。「地底探検記」に出てゐる廣畑貝塚のスケッチが想起される。この杜が膽應明神社の社叢であるのは謂ふ迄もない。遺跡は神社の北側に連る沙洲にあつて水田から僅か小高くなつてゐる。

飯出廣畑貝塚（イヽデヒロバタ）　この遺跡は古くから著名であつて殊に江見水陰氏の「地底探検記」に精詳しい記載がある。清野博士も曾て大規模に發掘せられて「日本原人の研究」に遺跡の詳しい狀態を述べてをられる。上方に彌生式土器を包藏し下方から繩紋式土器を出土する。關東地方では比較的珍らしい遺跡であつて、殊に兩氏共彌生式・繩紋式兩者中間型の土器を出すと述べられてゐる。霞ヶ浦地方に於ける彌生式土器と繩紋式土器との關係を知る上に見逃すことの出來ない遺跡である。江見氏が發掘された頃からは既に二十數年を經過してゐる。その後幾多の人々が探訪したであらう。遺跡は最早全滅の姿であるのか、それとも猶發掘調査の餘地を存してゐるであらうか、早速遺跡の全般に亙つて踏査する。幸にして中央部に荒撫地があつてその内には既往人爲的擾亂の形迹を見ないと推察さ丶る箇所があつた。よつてこの地域内に發掘地點を撰定することに定めた。

發掘地域は日數の關係から僅かに東西十五尺南北十尺餘の狹少な地域を發掘し得たに過ぎなかつた。深さは七尺を算ふに至つた。發掘面積は五立坪である。曾て江見氏も經驗されたやうに六尺數寸で水が湧出したが、略貝層の底部の邊であつたから作業には些程の困難を伴はなかつた。日數は僅かに二日を費したのみで中止した。天候に惠まれず發掘中屢々驟雨の襲來をうけた。第二日の午後からは益々險惡な天候を示しつ丶あつたので充分精細に發掘調査を繼續することが出來なくなつたのは遺憾であつた。

發掘の結果に就いては出土遺物等の整理攷究を俟つて同行の諸氏と共に報告を草する豫定である。よつて玆には遺跡に對する二三の感想を記するに止めて置かう。

遺跡の存する地點は丘陵の根に發達した沙洲であつてこの地方に斯くの如き沙洲は所々にある。後述の四箇（シカ）古墳所在地等はその一例で、浮島には殊に顯著なものがあつて同じく繩紋式土

器を出土する遺跡を存してゐる。遺跡は脇鷹明神社傍の洲にあるものが從來から注意されてゐるが、更にその東方に近接する寄洲にも小貝塚を伴ふ遺跡があつて散布せる土器片は前者と同一で、亦同じく彌生式土器を共存する。この兩者は全く一つの遺跡の連なりである。



廣畑貝塚遠望

發掘の結果によると先づ有機質を多分に含んだ黒色砂土を混入せる貝層を最上層とし、次いで不連續の薄き灰層、更に黒褐色砂土を少量混入せる貝層があり、その下方は破碎せる貝層を存し黒褐色の砂土層がその下底にあつて以下は黄褐色を呈せる砂土の地盤に達する間五層から成つてゐるが、この堆積された貝殼等は、相當の期日繼續占居した結果に基くらしく考へらるゝ狀態を示してゐた。

卽ち遺物の主として發見せられる箇所は、最下底砂土上の破碎貝層上部附近と、中央部にある不連續灰層の邊涯に貝層の最上邊附近に夥大である。この事實はこれ等の三階程に區分せられる各部の面が曾て或期間地表面をなした時が推想される。殊に第三の面は當時浪打際に近かつたらしく、出土土器破片はその各面が甚しく磨滅して、恰も今日海岸にて屢々目擊する陶土器の殘片と同一の狀態を呈してゐるものが稀れでなかつた。この第三の面には土器破片の他數個の完形土器が一群をなして上部土壓によつて破碎したまゝ遺存してゐた。この遺存狀態によるとこれ等一群の土器は或る種の行動に基く結果殊更に使用後完全品をその儘投棄したものらしく、これが遺された箇所は當時の地表面であつたと云ふの他、何等かの仕設を推想せしめる證徵を看取し得なかつた。第二の面は出土遺物の種類に富み土器片の他土偶・骨角器等を多量に存し、第一の面に遺存した土器片は文樣が下方のそれと比較してより裝飾的の變化に富めるものを多く出し且つ彌生式土器片が混在する。淸野博士や江見氏に從へば更にその上方に彌生式土器を包藏する黒土層の存在するものがあるが、今次の發掘地域はこの層を缺いだ地點であつた。又兩氏は彌生式と繩紋式との中間樣式土器の存在を指摘されてゐるが、今回の發掘土器片中には斯く斷ずべき種類と認めらるゝ土器殘片は絕えてこれを發見しない。この中間土器と稱

へらる、種類が果して如何なるものであるか知りたく思つてゐる。

彌生式土器と縄紋土器との遺存狀態は淸野博士が指摘されたやうに備中津雲貝塚遺跡と極めて類似してゐる。又これ等彌生式土器包藏地域と縄紋式土器包含地區（縄紋土器の遺存する地域は貝層中のみでない。）とは猶精査を要する點があつて適確にこれを指示する能はぬが、表面観察によると彌生式土器がよりひろく散布して、殊に貝殼の散亂しない地區に於てこの傾向が著しいことは、遺跡の重複を想ぜしめる點がないとは云ひ得ぬが、一方上部貝層中にこれを共存する事實によると、更により存續時期の長きとその文化的變化を思はしめるものがある。猶遺物は土器の他骨角器を主とし土偶が尠くない。又裝身具等を出土する。縄紋式土器は關東薄手系に屬してゐるが、多少の變化を見受けられる。これ等の個々の詳細は遺跡との綜合的考察と共に、後の報告に讓ることゝしてこゝにはすべてを省略する。

五

四箇(シカ)の古墳群と滑石製摸造品

飯出貝塚へ至るに阿波村から東方丘陵下の低地を迂廻して、須賀津(スカツ)・下馬渡(シモマワタシ)・上馬渡及び三次(ミツギ)を經て飯出に達する順路を撰んだ時があつた。この沿道には古墳の散在するものが多い。阿波村の聚落から浮島渡船場のある下馬渡に通ずる道路を進むこと數町の處、左側に近接せる丘陵の上方に四五の小圓墳が並列してゐる。更にその前方數町の箇所阿波村大字四箇に屬する丘陵上から丘陵の根に發達せる沙洲に亙つて多數の古墳が點在する。沙洲の最低地にあるものを兜塚(カブト)・鎧塚(ヨロヒ)と呼び兩者略同大形の圓墳である、嘗て前者の封土の頂部を削平した際に刀子・鏡・斧頭等の滑石製摸造品が彌生式系土器幷に祝部土器に伴つて出土してゐる。これ等の出土品は大杉神社に保管されてをつたと云ふが同社々務所災禍の時烏有に歸したのは惜むべきである。この遺物の出土狀態に關しては從來古墳の內部に副葬品として納められたものとして異まなかつたが、封土の上方を削平して種々滑石製摸造品の出土した狀態は、一般古墳內部の遺物存置狀態に徵してかなり注意を要するものがある。古墳の封土中と通例の內部構造中に納置された場合とは明かに區分せらるべきで漫然と兩者を混同して封土中に遺存したものを普通の古墳內部の副葬品と速斷してはならぬ。殊にこれ等滑石製摸造品は祭祀關係の遺品と目さるべきものであつて發見狀態は墳墓の純正なる副葬品としてゞなく、特殊の狀態を現はす場合が多い。この地方に於ても上記の所作彌生式系遺跡或は椎塚貝塚遺跡の丘陵上の平坦部等に於て發見されてゐる。兜塚に於けるものゝ如きはその遺存狀態は同種石製摸造品の本質を明徵するに資すべき興味ある事例なるにかゝ

わらず、これを精査し得なかつたのは地方民の偶然の發見にかかる爲めに他ならぬので寔に惜むべきであるが、か丶る場合に於ては遺物の出土狀態は封土或は内部構造と相俟つて特殊なる觀察を必要とする。今猶存する同古墳の内部發掘調査によつて或はこれ等の關係を多少共闡明し得るかも知れぬ。



人形送り

人形送り

下馬渡部落西端道路の曲り角の傍に眞菰で作られた稚拙な人形が竹の尖に立てたものや或は倒れてゐるものなど一群があつた。舊暦七月七日頃に行はれる人形送りと云ふ霞ケ浦地方特有の年中行事であつて、武者人形と食糧(餅)を負つた侍者との二人を一組として村中の子供が「鹿島香取大戸の明神、戰に捷つたミサイナ」と唱へながら一組づ丶村界に樹てる。その日取りは村から村へと順次に異つてゐる。この邊では大戸

の明神が除かれて「鹿島香取の大明神、戰に捷つたミサイナ」と唱へられるさうである。一種の厄送りの慣習だと說明されてゐるが、それは兎もかくとしてこうした習俗は寔にうるほひのあるもので牧歌的の情趣をそ丶ることが夥しい。

六

歸京の日は陰天で雲行悪しく小雨が降りしきつてゐた。霞ケ浦西浦沿岸の地勢を概觀する爲に雨中自動車を驅つて土浦に向ひ同地から汽車に乘ることゝした。坦々たる縣道を自動車は疾走する。昔への信太(シダ)の流海を横切つて安中村の丘陵を右に眺めつゝ、なだらかに起伏せる丘を縫ふて木原に向ふ。有名な陸平貝塚は丘陵の彼方にあつて指顧の裡に入らぬ。やがて老杉亭々たる楯縫(タテヌヒ)神社の社頭を經て木原の街を過ぎる。こゝから道は湖岸に近い水田の間を行く。右に湖水を眺め左に長く横はる丘陵を見る。その丘陵上竹來(タカク)の里には普都大神を祀る有名な阿彌(アミ)神社がある。さうして祭神に關する說話、即ち天地の始め草木語ふの時この地方平定の爲め普都大神が天降りせられ、業を遂げ給ふて後昇還に際して兵器その他を高來（竹來）の地に留め置かれたと「常陸風土記」に記されてゐる、物語の暗示的描寫の内容に想ひが馳せる。

再び湖岸を見渡すとリンデイ機の訪日を迎へる阿見の海軍飛

行場が眞近にある。建並んだ格納庫は閉ざされて機影もなければ人影もない。只明日にせまる歡迎の装ひがこの附近の店頭を飾つてゐる。やがて土浦に入る。遠古の遺跡に親みなかば原始化して暫し味つた田園の靜さも、たちまちにして街頭の騒音が私達をその巷裡に甦らしめた。（九・一五）

圖版說明

本號卷頭圖版に示す注口土器は、千葉縣東葛飾郡川間村東金野井貝塚より同地の遠藤新太郎氏が發見された物である。此の土器は口徑六糎、高さ一四五糎、底徑七糎、全體黑褐色を呈し、器面は當時に於ては相當よく研磨されて居たらしいが、現在では局部的に稍磨滅して居る。注口部先端を多少缺損するのみで他は全く完全である。口緣部より肩部にかけて前後各一個の橋狀把手が附されその兩側に各一對の渦紋があり、更に注口部の下とその反對の側、及び左右兩側面の中央下端—紋樣帶の最下部—に一個づゝの渦紋が施されて居る。此等上下各四個の渦紋の間は一種の帶狀繩紋を以て連結され、この帶狀繩紋間の間隙は沈線に依つて充塡される。出土地は前記東金野井貝塚上にある八幡社境内と附近畑地との境界部であるとの事。

尙同氏は他に一個の安山岩質、小石棒狀石器をもこの地より發見されて居る。此の石器は無頭石棒狀を呈する磨製品で、長さ一〇・八糎中央最大周一四・四糎を兩端は中央に比して稍細い。これ等の遺物は昭和六年十月九日同貝塚調査の際、採集者遠藤氏から史前學研究所に寄贈せられた物である。此處に記して氏の厚志に對し深謝する次第である。因に發掘の結果同貝塚は勝坂より眞福寺（安行）に及ぶ各文化期に屬する土器を出す事が明かにされた。（甲野）

史前學雜誌　第三卷　第五號

貝塚瑣談

甲野勇

肥前國南高來郡加津佐町永瀬貝塚



Fig. 1.

永瀬貝塚の發見は比較的近年に屬する爲め、其名は未だ「日本石器時代遺物發見地名表」にも登載されて居ない。僕が始めて此の貝塚の存在を知つたのは、昭和五年八月に、慶應大學學生背崎三文氏から同地採集の土器、獸骨、貝殼等を史前學研究所に寄送された時であつた。其の土器は以前濱田博士、島田、小牧兩氏の發掘調査された肥前有喜貝塚出土品の或物と軌を一にし、かつ其地の位置が島原半島の最南端に近く、更に肥後八代灣沿岸貝塚群と有喜貝塚の中間に位する爲め非常に興味を感じた。其後背崎氏に御目に掛つて御話を伺ふと、永瀬貝塚は氏の郷里水月の町の東南方約一粁の所にあり、同氏の叔父君に當る山崎重長氏が其地の發掘權を獲て居られるとの事であつた。今夏、僕は島原半島周遊の途次加津佐を訪ひ、背崎氏の御案内に依つて此の永瀬貝塚を見學する事が出來た。只日程に限りある旅の事とて、僅々數時間を遺蹟の踏査に費したのみで發掘の如きは全く行ふ事を得なかつたのは非常に殘念であつた。然し山崎氏は以前發掘された遺物の總てを久留米醫學專門學校の八重津教授の許に送られてその研究を委ねられ、又八重津氏も既に此地を實際に調査されたとの事であるから必ず近き將來に於て完備した報告が發表されるであらう。

加津佐町永瀬貝塚は口之津鐵道の終點、加津佐驛より線路に伴ふて西南に行くこと一粁、第三紀層より成る丘陵の西方に突出し、海に迫る部分を線路工事の際、開鑿した崖の端の部分にある。(第一圖及第二圖) それ故貝塚の一部分は此の鐵道工事の際既に切り取られて了つたのであるが、一方この工事によつて此地に貝塚の存在する事が瞭かになつたのだそうである。最初に發見された方は前記山崎重長氏である。

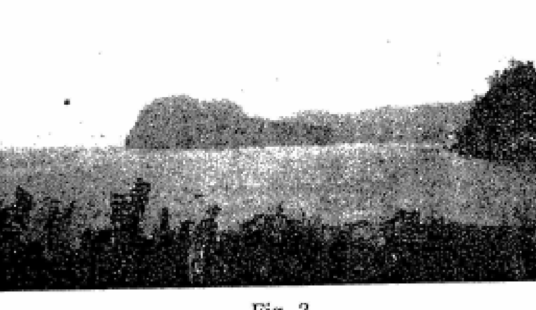


Fig. 2.

現存する貝塚の面積は餘り廣くなく、其の表面に散布する土器破片の量は極めて僅少である。貝塚を構成する貝類は、ハマグリ、オキシジミ、オキアサリ、カキ(以上二枚貝)サヾエ、スガヒ、イシダヽミ、クボガヒ、カニモリガヒ、レイシ(以上卷貝)等で貝塚表面に於ける觀察の結果では卷貝は二枚貝に比し量に於ても種に於てもより豐富である。又、ウニの殻及び棘も相等發見され、魚骨としてはサメの椎骨が見出されて居る。獸骨片は比較的多く出土して居るが、何れも四肢骨の細片なる爲め其の種名を明かにせず、僅かにイルカの椎骨らしきもの一個を檢出し得たのみである。

Fig. 3.

石器には錘石、打製石斧等がある。錘石は大形品と小形品とがあり、前者は長徑四糎内外、後者は六糎内外の楕圓形偏平の自然石(主として砂岩)の兩端を打ち缺いた粗製品である。打製石斧と推定されるものは刄部破片で硬砂岩を稍綿密に打製したものである。此等の外石屑に混じて黒曜石の細片が屢々見受けられる。

土器は細片のみであつて形態を知り得る物はない。現在我々の手許には僅か十數個の少破片があるに過ぎない故、今は其の代表的なる物を圖示するに止めやう。第三圖1は口緣部外反する鉢形?土器の破片、口唇上緣には一條の凹線が引かれ頸部より胴部にかけて帶狀繩紋が施されて居る。同圖2・3も1と大略同系統の紋様に屬するもの。又、同圖4は繩紋こそ押してないけれども紋様の構成より見れば矢張り前者に屬せしむ可きものらしい。同圖5は一沈線を有し表面平滑なる土器破片。同圖6は土器の表裏に刷毛目の如き條痕の見られる物で此の種類の土器が比較的多量存在するらしい。

扨1—4圖の如き土器は殆んど土質が割合によく、紋様も入念に作られ器面は篦磨きせられて多少光澤を有する例が多い。この系統の土器は九州に於て肥前有喜、薩摩市來、同出水、豐後森等の諸貝塚からも多少出土して居て、何れも東北日本に於ける繩紋式文化期の比較的後期に屬する所産品の流れをくむものと考へられる。

終りに本貝塚の見學に對して便宜を計られた山崎重長氏及び菅崎三文氏に對し心からなる感謝の意を表する。

折本貝塚に於ける竪穴の發見

武藏國都築郡都田村折本貝塚は古くから學界に知られて居た遺跡で、從來大場磐雄氏、八幡一郎氏、其他の人々によつて調査せられた所である。史前學研究所に於ても先年此地を發掘し、諸磯式土器、石鏃、黑曜石原石等を採集し、貝層下に厚い灰・燒土層を發見した事があつた。去る十月二十五日八幡一郎氏は坂口保次氏と協力し、平等通昭氏の援助のもとに此地を發掘され、貝層下に竪穴の一部と思しき所を見出され、續いて十一日より三日間發掘を繼續し、遂にその竪穴を全掘された。發掘の結果この竪穴は平面形態正方形を呈し、一片の長さ四・二米、中に數個の柱穴を有し、爐は中央に位せず、壁よりの一隅に存在して居たとの事である。貝層は此の竪穴を全く被ひ、その中より數個の完全土器、打製石斧及び有孔角器・針狀骨器、鳥骨製骨管等が見出された。諸磯式土器を出す遺跡より竪穴の發見・及び斯く多種の遺物を出土せる事はこの發掘を以て嚆矢とすべく、何れ遠からず兩氏によつて此等に關する精細な研究が發表せられるであらう。（I・K）

横濱市神奈川區篠原貝塚調査小報

松　下　胤　信

昭和四年秋期に於ける調査を基礎として、其後の補加を合し、本小編を學界に贈る。幸ひにして本編が多少なりとも、我横濱先史文化の一端を傳ふるとせば、報者の望外の榮とする所である。起筆に臨み絶えざる助力と深き友情を示された學友黒田善次氏の芳恩を銘記して、心からなる感謝の意を表したい。

Fig. 1.

一　篠原（北）貝塚

貝塚の位置と其狀態。　鶴見川の流程が、新羽菊名附近に於いて、大曲流を成す邊、多くの枝溪谷を兩岸丘陵背部に向つて屈入せしめて居る。本貝塚は其等の中、南岸丘岡に屬する一枝谷の、南方に灣入して菊名池を作る谷路の緣端近くに位する（第一圖△印）。

貝塚は主として、現在東横電鐵の所謂菊名住宅地の一部に屬するので、其工事の際削平された個所頗る多いが、其副産物として、諸處貝層斷面を露出する。今其等の貝層露出及び其散在狀態よりして、貝塚地區を想示するならば、住宅經營地の一部竝びに、其に續く東南方の山林畠地に及ぶ。貝層を被覆する黒土層は約八十糎より一米に達し、其下部は赤褐色層を形成する。

第二圖右は主として、貝塚東方の貝層露頭狀態を示し、第二圖左は其れに續く、北方約四十米の同一層中に於ける凹字形を成す竪穴の斷面を寫したのである。此竪穴下底部の試掘の結果は、燒灰に混じて火燒を蒙むつたハイガヒを多量檢出せしに止る。尚貝塚東北部に位する、住宅地番號一八四號一八五號一八六號の、表土層を削失し地磐たる赤褐色層を出した地點に於ける、小試掘の成績は基盤深く、稍大なる自然石の配置を見、そ

れに伴ひ少からざる土器片が包含されて居る。

貝類は凡そ次の如き種目より成る。此中最も多く出土するのは、ハイガヒ、ハマグリ、サルボウで、然してアカガヒは只一個發見されたのみである。

ハイガヒ、オホノガヒ、ハマグリ、アカガヒ、サルボウ、アカニシ、アサリ、ツメタガヒ、オキシジミ、カキ、シホフキ、レイシ、カガミガヒ。

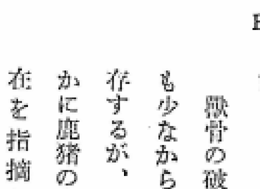



Fig. 2.

獸骨の破片も少なからず存するが、僅かに鹿猪の存在を指摘して、他のものに對する推斷的記述を避ける。

石屑類。石器の發見は調査不充分の爲、此を後日に期せねばならないが、加工竝びに其の道程中に屬する石片類は多量に採集して居る。

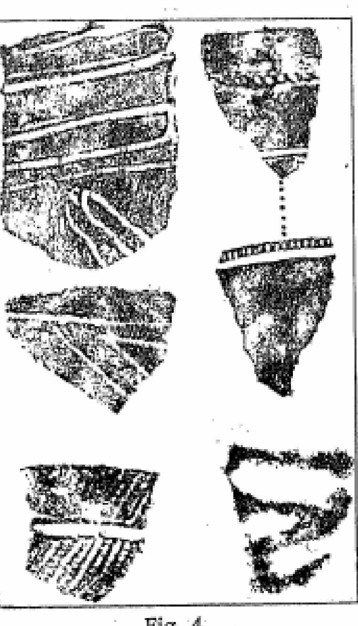
石材は主として硬砂岩砂岩等を選擇して居るが、石鏃資材として認め得べき、黒燿石片の碎片は少くない。

土器。分つて諸磯式の他薄手厚手兩式とする。諸磯式は紋様要素よりして、縄目縄蓆紋（往々撚絲の走るを見る）爪形紋・竹管紋・並行紋・箆目紋其他曲直斜線及び其等の變化形式より成る。器形は主として、甕形壺形等の如きものであるが、此等の緣端は、往々突狀を形成し上方に直立し、又屢々貧少なる瘤狀の小把手を成す。底部は平底を成形し、網代紋の押型を伴ふ。次に土器燒成製作は、赤黒褐色粗雜概して

Fig. 3.

古拙なる感觸を多分に持つて居る。（第三圖參照）

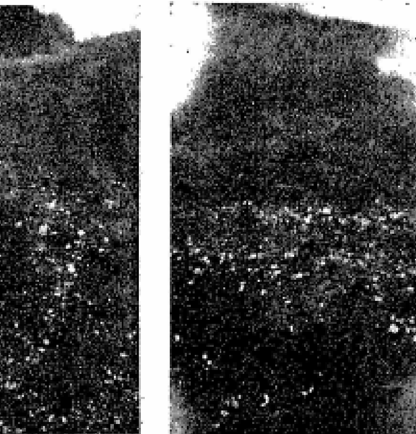
薄手土器は、黒赤褐色繩蓆紋或ひは直線重方形等、極めて洗練された表現法を示し、其製法に於いても、前者より技工的に進歩の形跡顯著なるを知得せしむる。此等以外に彌生式に近似する器片を舉示するが、單なる提示に止めて後考に委ねる。（第四圖參照）薄手に次いで少量ながらも厚手の器片を見出し得る。其の有する態様に關しては、玆に論ずる迄もないが、浮紋の傾向を有するものを若干檢出し得る。（第四圖下段參照）


Fig. 4.

總括。叙上の如く、本貝塚は諸磯式を以つて主體とし、加ふるに小數の厚手薄手兩式を伴存する 然して自然遺物、殊に貝類中ハイガヒの包含稍多量にして、遙か下流たる生麥の岸貝塚のそれと、極めて著明なる對立を示して居る。更に再顧するならば、鶴見川流域に於ける他の諸磯式遺跡との關係は素より、進みて帷子溪谷存在のこの種遺跡遺物と、極めて近接的連關を示現するを得る。

二　篠原（南）貝塚

貝塚の位置と其狀態。前述篠原（北）貝塚と僅かに約二百米南方に位し、同一丘陵中に本貝塚は存在する。（第一圖〇印）貝殼の散布は、比較的僅少であるが、遺跡の中央にある古墳（富士塚と稱す）を中心とて墳側に沿うて走る里道の西部貝層露出區（第五圖）と南部貝層露出區とする。其他東北部の斜面に部分的の貝殼の散布を見る。


Fig. 5.

貝類。多くの遺漏は免れ難いと思ふが、知り得たものを列擧すれば左の如きである。

シホフキ、カガミガヒ、シジミ、レイシ、ハマグリ、アカニシ、アサリ、テングニシ、サルボウ、ツメタガヒ、キサゴ。

石屑類。石片石屑類の碎片散亂は、其多くを認むるも、石器の採見を徴し得なかつた。依つて後日の調査に期待して其實を果したいと希求して居る。

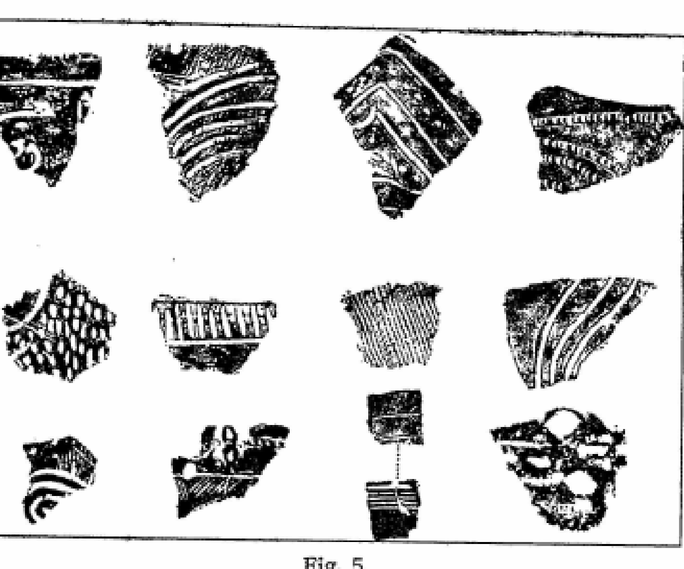


Fig. 5.

石製品。貝塚東北部より多くの土器片と混在して耳飾殘缺を發見して居るが、其詳細は別稿を以つて本誌に寄せて居るので、茲には其の記述を略する。

土器。大別して所謂厚手式及び薄手式とする。前者は燒法製作粗雜、後者は緻密精巧、色調兩者とも赤黒褐色を呈する。二者の紋樣要素は、細帶・平行縄目・同心圓・擬爪形・櫛齒連點の諸紋、其他曲直紐線の應用になるもの等、頗る變化に富んで居る(第五圖)。紋樣表出法は、大體沈紋を主とするが、厚手形把手には、立體的に浮動せんとするものを見るも、後者には、內面に紋樣を押捺せるものも存する(第九圖)。土器形式は大體、甕形壺形等を推知せしむるも、土器底部に至りては平底を主とする。

土錘。赤褐色長さ四・二糎を測有する燒成稍堅硬なる細長錘形を呈する普通品である。

總括。最後に單簡な總括を試みる。先づ自然遺物に於いて、本貝塚が前述北貝塚と大きな差異を持つのは、ハイガヒの存在皆無なる事である。勿論平面的觀測に立つ限り、此等の事實は、軈て來るべき日に於いて補正され得べき機もあらうが、現在資料の提示は全的に見て其稀少なるを語らしめて居る。次に土器に於いて、所謂厚薄二樣式を共存し、其示現する所、既述北貝塚諸磯群より洗練且樣式化の傾向濃厚である。更に擬爪形紋(第五圖右端) 及び耳飾の存在を舉示し得るならば、後者に於いて、此種土器類に伴存せる確證を把握せしめ、前者にては、兩貝塚接觸を想定せしむる有力なる示徵を寄與した。

(昭和六年十月九日稿)

佛領印度支那の石器時代（第二回）

——マンスイ氏、ロングソン及びテウエンカン附近の史前遺跡——

H. Mansuy ; Gisements préhistoriques des environs de Lang-son et de Tuyên-quang Tonkin.

エム・アグノーエル氏述

アグノーエル氏の第一回に引續き譯述せられたものであるが、種々の關係から多少省略を行つた事を豫め讀者並びに譯述せられた同氏の御了解を願つて置き度い。從つて、本文に於ける文責は私にある。（池上啓介）

一、Lang-son 附近の遺跡

Mai-pha 洞窟

印度支那ハノイ線に沿ふ Mai-pha 村の西南に石灰質の大きな岩が孤立して居る。この岩の中に洞窟あり即ち Lang-son から東南方一六〇〇米の地點にある。

遺物は總て佛人 M. Rétif の發掘によるもので、現在印度支那地質局の所藏である。遺物は灰色の輕質土々層中に石灰質の落磐と共に出土した。

土器片に籠目が明らかに見られる。即ち poterie faite au panier 籠製土器である。これ等の所謂 Mai-pha 式土器は形は美しく釣整がとれてゐる。土質は粗にして石英を混じ堅牢である。而して所謂薄手にして模樣には簡單な沈線紋がある。土器の燒成から云へば進んでるが紋樣は比較的發達してゐない。

（第四圖一）

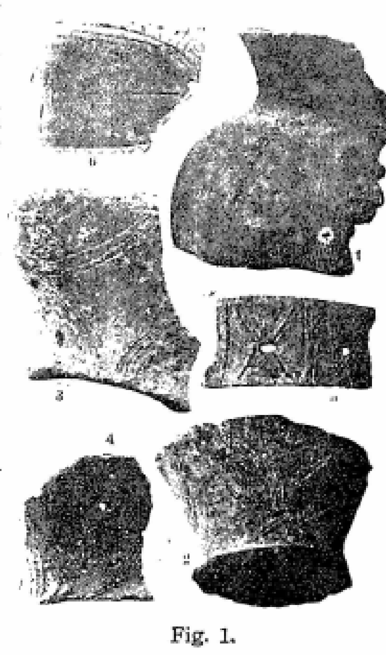
第一圖一は球形にして口部の頸れが深い。第三圖一は把手を有し小形なるも極めて堅牢である。厚さ五粍、直徑百五十粍、深さ五十二粍、底部の厚さ四粍ある。第四圖二・第二圖一は何れも把手を有し、中央に小孔あり。此の孔は紐を通して蓋を締める爲めのものかも知れないが、釣る爲のものと考察するが至當である。

第三圖二は corne の型をしたもので、高さ六十七粍、上の直徑八十二粍、下の直徑五十三粍あり、裝飾はない。

第一圖二・三・四・五、第二圖二・三・四は孔を有する土器にして、口部に於ける直徑は底部の直徑の倍以上になるものが

多い。裝飾は平行線及び曲線より成り、孔は模樣の中心にある。卽ち孔は意識して作られてゐる事は明である。

私は（Mansuy）東洋に此の形式の土器は見られないものであり、特にその孔に注目すべきであつて此れに就て考察を行へば、食物の容器でなく燒いたり煮たりする物でもなく、多分通氣孔あり炭の殘りが土器の内面にある所から香のある植物を燒く一種の香爐と考へられる。又宗教的のものかとも思はれる。然しながら土器片は日用土器多く有孔ある土器は極めて少ない。


Fig. 1.

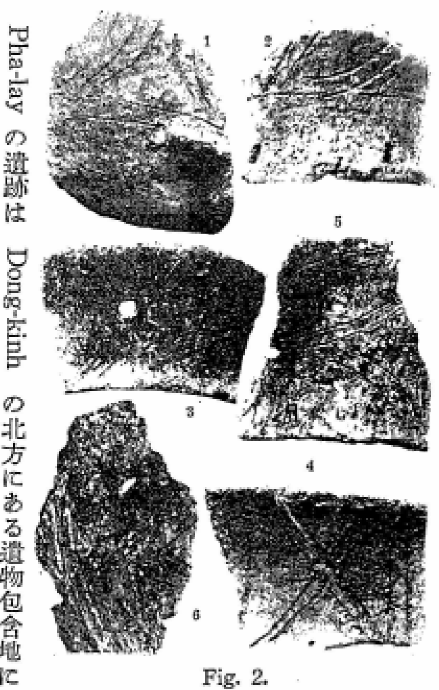
石器としては石斧が舉げられる刃部の鋭いものである。（第三圖三）。

Van-Méou 洞窟

Lang-son より南方一粁の地點に Van-méou に洞窟あり、たまたま、燐酸鹽を洞窟より採掘の際土器を出土した。土器は Mai-pha 式土器に近似してゐる。卽ち土質は粗にして、石英を混じてゐる。

Dong-kinh 及び Pha-lay の遺跡

Dong-kinh 村は Lang-son の西北五百米の附近にあり、岩壁の小穴から黑雲母を含む花崗岩質の石斧を發見したが此の石は現在 Lang-son 附近には、産出しない。


Fig. 2.

Pha-lay の遺跡は Dong-kinh の北方にある遺物包含地にして Mélanie と稱する貝殼を多量に發見した。而も貝殼は何れも同じところを割つて居る。又同遺跡に於て頭骨片を得た。

二、Tuyên-quang 附近の遺跡

Binh-ca の遺物包含地

Binh-ca の遺跡は 東京の Tuyên-quang の東南六粁の地點

にある。佛人 Gage氏に依つて發掘せられたもので、遺物はこれ又印度支那地質局の所藏である。從つて遺跡の狀態並びに遺物出土狀態も不明である。此れより以前に醫師の Rèvière 氏が同遺跡附近で石器其他の遺物を獲た由だがこれに關する報告はない。

土　器

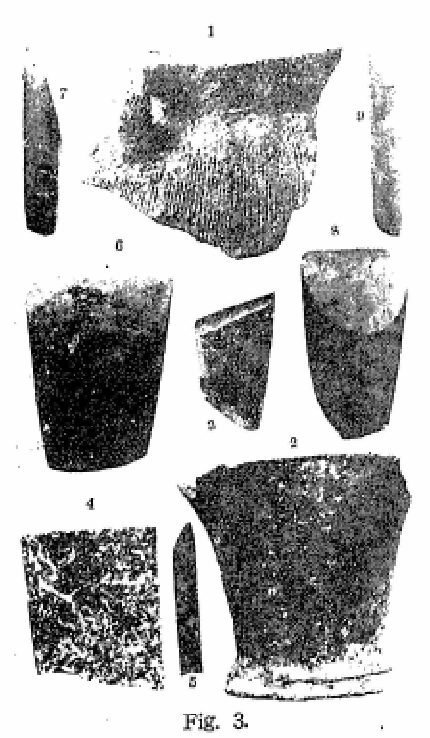


Fig. 3.

第五圖二・三・四・五は特徴ある土器にして一側に把手を有す。直徑五十五粍、下方に少し廣がり、壺の型をなし底は圓筒型をなし底部の直徑は百五粍ある。底部は燒成前に編物の跡を附し所謂あがり底(convexe)である。把手の下部は抉られてゐる。之れは目方と握り方を考慮に入れた結果であらう。把手の上部は少しく廣がり氣味であるが、破損して不明である。多分七十粍——八十五粍であらう。把手の長さは五十粍あり底部と同じく編物の跡がある。猶興味あるは土器の中心に上から下まで、小さい矩形の孔が貫通してゐる事である。孔は多分小さい木片を製作上から入れたものが殘つた結果であらう。用途を考察するに土製であるから打擊用のものでない事は明である。多分安定性のある底の大なる點等から考へるとランプであらうと思はれる。一般に新石器時代の土器は小さいコップの形をしてゐるが、斯の如く大きな把手を有するものがない所から見るとこれは該土器の一特徴である。

Binh-ca の他の多くの土器片は何れも編物の跡を有するが、何れも小破片にして、土器の型や大きさは不明である。厚さは Lang-son のものより厚い。

石　斧

石斧は何れも磨製にして三個ある。其内二個は片刄 biseau simple である。注意すべきは刄部 biseau が幾分圓味を帶びてゐる事である。石質はフタニットである。（第三圖六・八・九）

石　槍

石斧の他に片岩質の投槍（sagaie）の槍先きを若干出土してゐる。槍先きは長く薄く尖銳にして其の斷面は菱形をなす物又、兩側に刄を有する物、中央に稜なく偏平にして銳利なもの等があり、又第四圖四の如き有柄 tenon d'emmanchment の

ものがある。石質は石盤狀片岩にして頗る精巧である。これは槍か投槍に用ひたものか頗る疑問のものであるが、多分輕く美麗な點からして投槍用のものでなく、短かい棒先きに附して手にて剌す近距離用のものであらう。

裝飾品

第五圖一に見る如き象牙製の薄き腕輪である。直徑五十三粍厚さ五粍の精巧なるものであるが、他の遺物と同時代のものであるか全く不明である。

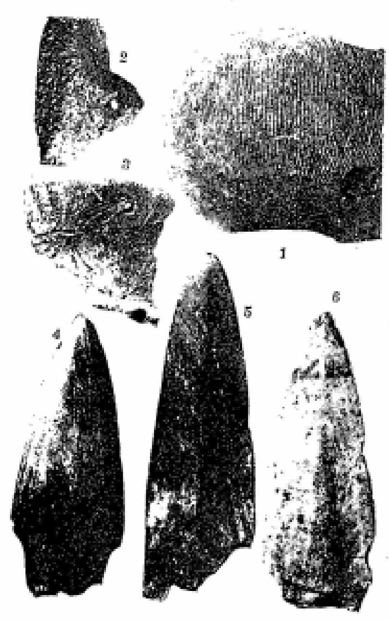


Fig. 4.

獸骨（水牛）

水牛の臼齒及び門齒の fossil 狀をなしたものが發見されてゐて B. cf. palaeokerabau dub. du Néogène de Lang-son なる學名を附されてゐる。此等は現在の水牛よりも四分の一大きい。

結語

終りに Mai-pha と Binh-ca との比較研究を行へば、兩遺跡とも遺物は甚だ少ない。然しながら遺物を用途上より又製作上より見れば兩者の一致を見ない。即ち Mai-pha には日用品と考へらる土器が多く性質は薄手である。Binh-ca は土器少なく性質は粗惡である。特にランプの發見があるが製作は極めて粗雜である。前者には有孔土器を發見するも後者にはない。又兩者とも biseau (片刃)を有する石斧を發見するが、之れは一般に南東洋式の石斧である。然し前者は後者に見る如き片岩質の槍先きを發見しない。印度支那の史前時代は未だ不明である。東洋にも西洋に於ける如く、先史、原史の二時代に區別して chronologie を作る事が出來よう。されば今後西洋と比較研究を行ふ事に依つて種々なる問題が解決せられるであらう。

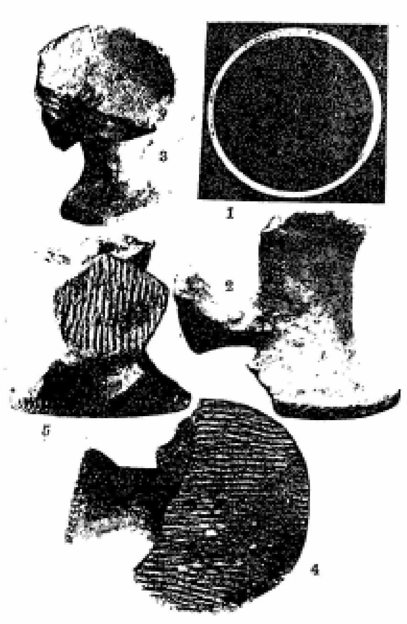


Fig. 5.

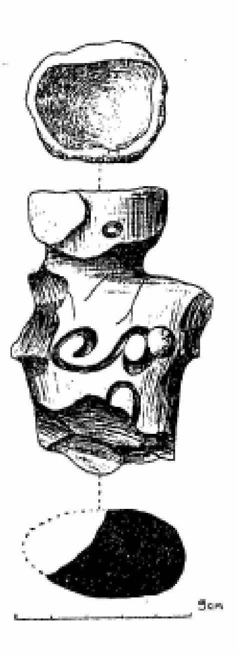
資料

羽前國出土の一土偶

樋口清之

羽前國東田川郡泉村字村杉の遺蹟は古く故高野榮明氏によつて調査された遺蹟であつて、石器土器の外に多數の硬玉製勾玉小玉、臼玉やその原料及び珍らしい事には、製玉砥石を出土して居つて、東北地方に於ける石器時代硬玉加工遺蹟として、しかもその遺物によつてその加工法が全く出雲國八束郡玉湯村玉造に於けるが如きものであつた事が知り得る點に於て最も注意すべき遺跡の一である。

その詳細はいづれ近く他の遺物と共に發表し得ると考へる故今はこの遺蹟より出土した土偶に就いてこれを紹介したい。



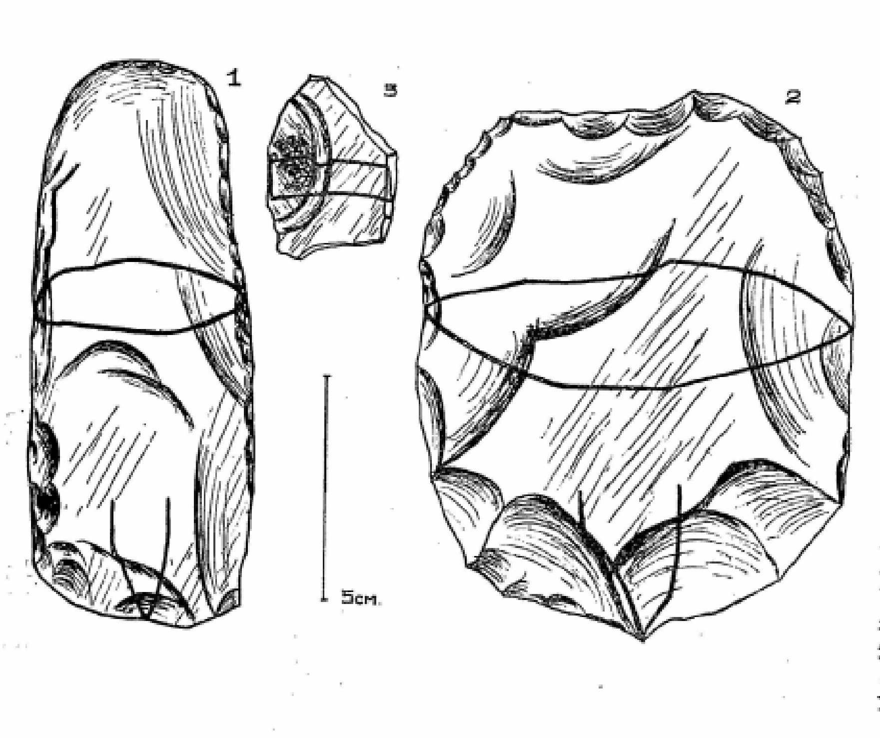
本品は、分布上特殊な位置を示すのみならずその形態に於ても注意すべきものがある。その大さは全長現存にて約八糎胴巾最小四・三糎、厚最大二・二糎、頭部巾四糎、同高一・八糎を有する。本品の特色はその頭部が一種の坏狀をなして居つて、中央凹み、その高さ著しく小にして、顏面のオルガンの表現がないことゝ、その坏狀頭部の一方（乳頭より考へて正面）にあたかも坏狀の底より外に通ずる五ミリ位の小孔を有し、胴部は中實であつて、その一面には乳頭突起を遺存し、前後胴部表面にはS字形の刻紋を相互連絡なく散在させてゐる點である。土質は惡く、石英砂の大きな粒等を所々に含有し、堅密で黑褐色の燒成をなし、その表面はほゞ平滑である。現在胴下部以下破碎してゐるが、兩上肢は明かに存した樣である。

伊豫國に於ける新發見の石器時代遺物

樋口清之

伊豫國喜多郡大洲村徳之森、同郡南久米村北只の二遺跡は、あたかも、四國の西方に長く突出する佐田岬半島の基部、瀬戸

內海に注ぐ肱川の流域、大洲盆地の沖積層に接する洪積丘陵上に低く位するものであつて、前者は敷地神社の下方、後者は大



元神社の境內に屬してゐる。前者からは挿入圖の2に示す如き輝石片麻岩の灰綠色を呈する圓形に近き打製石斧が發見され、なほ附近にはかつて彌生式土器破片や、蛤刃綠泥片岩の磨製石斧が發見された事がある。後者には同じく挿入圖1に示す如き短冊形打製石斧と、圖3に示す如き微小な紅褐色、吸水性大な繩紋系統の土器片及び其他多數の彌生式土器破片が遺存し、充分な發掘は行はれなかつたが、多數の遺物を包藏するもの﹅樣である。元來伊豫國に於てもこの地方の遺跡はあまり知られて居らず、その遺物に就いては全く明かでなかつたので、簡略ながら報告する次第である。

北九州石蓋式土壙に關する一資料

森　貞次郎

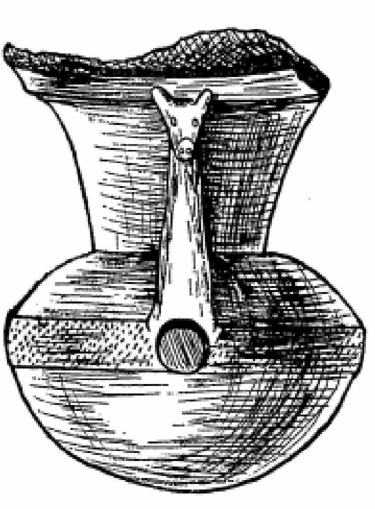
北部九州地方に於て彌生式との關係を保有する原始墳墓の一形式としての石蓋式土壙の大部分が遺物を出土せぬのに對し、彌生式土器の多量を遺存する類似の土壙を擧げて先學の敎示を乞ふ事は蓋し石蓋式土壙との、又は石蓋式土壙それ自身の時容關係の考察に價値あることかと思ふのである。右は福岡縣の東端なる築上郡築城村船迫部落の北端、地形は名殘川的侵蝕面の小丘の東斜面、地質は新洪積層のロームである。遺跡は地下げの爲に發見されたものである。縱一米四十糎、横一米で、深さは

約七十糎と想像され、長軸はほゞ南北に向ひ、東壁面のみは底面と凡そ百十度の鈍角をなしてゐた様である。四圍の內壁には極疎らに河原石がはめ込まれてゐたが、別に塗料は見られなかつた。この土壙の內部は表土下十糎以下は黑土中に泥在する彌生式土器の無數の破片と少數の石礫によりて埋もれ、その間には木炭の細片が混入し、表土に近く表土上に顯はれて三個の小自然石が鼎立してゐたものであり、その土器の大部分は當時建築中の傍の納屋の厚い壁に補强の爲に少片になして塗り込まれた。昭和六年三月筆者の自ら發掘したのはその時の殘部で新らしい地表下に殘された厚さ廿糎の底部である。前記と同樣に底に接する迄無數の土器片を得たが完形の存するものはなかつた。木炭の混在は底の方が比較的多く、底の粘土層に接して酸化鐵の薄層の介在を見た。土器の形態につき圖示すれば、A類は口縁部で、用土精良、技工も精巧で、就中比較的厚手の方は比較的薄手のものに比すれば燒成も粗鬆で吸水性も大で黄色を帶び口縁尖端はV字形である。之に反し後者は表面黄褐色で中にはやゝ帶黑色の光澤を有するものがあり、この方は口縁部がU字形である。筆者の採集したもののみでも九種あり、直徑はほゞ同じく、卅一・五糎から廿八糎までの間で平均三十糎であり、口縁部の厚さは一糎より二耗迄の間で平均五耗である。B類の高杯臺部は直徑最狹部で約四糎、C類底部も比較的堅緻な燒成である。上述の土器には酸化鐵の附着せるものと、しないものとあり、殊に口縁部の內面に多くの酸化鐵の塗布を見た。土器の示す特徵は金屬器の影響を受けたものとなす可く、從つて金石併用期以後のものたるは言を俟たず、更にこの地方の甕棺との關係にも興味深きものがあると思ふ。

裝飾付𤭯の一新例

樋口清之

圖示の祝部土器𤭯は大和國南葛城郡忍海（オシミ）村字山口千塚山古墳群より出土した物であつて、現今は縣史蹟調査委員安井芳太郎氏の所藏に歸してゐる。口緣部を缺いてゐるが現存の高さ約四寸五分内外に及び、𤭯としては口の大な低型の物に屬してゐる。



全體精巧な轆轤による整形によつて薄手に出來、無形の胴部一側中央に一孔を有してゐる、この孔の存在箇所に、斜行櫛齒擬繩紋帶を廻し又この孔上より發した把手狀の附加物は途中器體と觸れずに口緣下方に及んで始めてこゝに固定し、本土器の持つ最大の特色を表現してゐる。

この附加物は大體に於て頭部とそれに續く頸部（或は胴部）に分れ、頭部は下に至つてその太さを增し大體に於て斷面圓形を呈してゐる。頭部は頸部の上に續いて一の動物の頭部狀を呈し、細長く突出した顏面は先に至つて二小凹點の横並より成る鼻部に終り、その基部に左右二本の角狀（或は耳狀）突起を有し、又その突起の基部に一對の目らしき小凹點を有してゐる。その全體より受ける感は全く一種の鹿・馬等の哺乳動物の頭部を聯想させるものであつて、或はそれ等をモデルにして作られたものであるかも知れない。全く極めて簡單な工作によつて作り出したこの巧な表現は、南朝鮮慶州附近の例の裝飾付土器を想ひ出させるものである。燒成又至つて堅密、所々吹出釉藥の附着を見る、色は灰黑色である。

白井貝塚採集の貝類

大山柏

白井貝塚に就ては、別稿に木内貝塚と共に紹介して居るが其時採集し得た貝類名を、次に一覽表として揭出する。

1 はまぐり　（最多）
2 しおふき　（〃）
3 かゞみがひ　（多）
4 あさり　（中）
5 あかにし　（〃）

6 つめたがひ　（〃）
7 かき　（小）
8 おきしじみ　（小）
9 さるぼう　（〃）
10 はいがひ　（稀）
11 ばい　（〃）
12 おほのがひ　（〃）
13 ながにし　（一個）

以上は別稿に於ても、御斷りしてある如く、僅々一米平方の試掘の結果に過ぎないのであるから、かく種が少ないので、良文村貝塚の二十三種出土と比較して見るなれば直に首肯することが出來よう。それにしても、本貝塚を構成する主要なる貝類は、一通りこの表中にあるものと私は考へて居る。

（九月二十四日）

木内明神貝塚採集の貝類

大　山　　柏

本號別稿に概述した木内明神貝塚で採集した貝類は、甚だ少なく漸く次の十三種を得て居る。

1 はまぐり　（多）
2 しおふき　（多）
3 あさり　（多）
4 かがみがひ　（多）
5 あかにし　（中）
6 かき　（中）
7 おきしじみ　（中）
8 つめたがひ　（中）
9 さるぼう　（小）
10 きさご　（小）
11 おほのがひ　（稀）
12 ばい　（稀）
13 ながにし　（一個）

但しこれ等の貝類は北側貝層中より得たものに、表面採集を加へたものであるから、單に一般的に本貝塚貝類として、參考資料となるに過ぎない。發掘して見たなら其種類の多寡にも多少の變化を生ずることがあると考へる點だけは附記して置く。

（九月二十七日）

哺乳動物齒牙の變異に就いて
―貝塚出土の馬の齒牙の變異に就いて―

永　澤　讓　次

地層中より發見せらるゝ哺乳動物の化石齒牙を鑑定するに際

し最も必要なるは齒牙變異の領域に關する觀念である。

余は二三の化石哺乳動物學者が發表せる哺乳動物齒牙の形態上の變異に就きて數例を玆に紹介し且余の檢せる鹿齒の形態上著しき變異に關して少しく述べんと欲す。



Fig. 1（上二段）　Fig. 2（下段）

L. Bolk は古生物學上單一齒牙に依りて其の種名及系統を決定するは一般に極めて困難なりと述べ且其の鑑定に際しては單一の特徴を捕ふるよりも全體的特徴に依りてなさる可きものなりと謂へり。蓋し齒牙以外の他の點に於て相當に差異ある別種の哺乳類も各々其の單一齒牙の比較に於ては甚しき類似を呈せる事あり又同一種の哺乳類も其の單一齒牙の比較に於ては時に甚しき變異を示す事あればなり。前者に關しては例へば鹿及羚羊の或る單一齒

牙の比較に際し兩者を區別する事稍々容易ならざるが如く、又 W. Flower の言に依れば Rhinoceros unicornis と R. sondaicus とは他の點に於ては甚しく類似すれども其の上顎大臼齒を比較するときは甚しき差異の認めらるゝものありと謂ふ。而して同樣なる關係は R. simus と R. bicornis との間にも存すと謂へり。又後者に關し、同氏は大英博物館に於ける R. simus の頭骨二個に就きて觀察せるに、其中の一個に於ては上顎臼齒の Crochet と Crista とが兩側の總ての前臼齒及大臼齒を通じて結合せるに、他の一個に於ては Crochet と Crista は左の第二前臼齒及兩側の第三前臼齒及兩側の第一大臼齒及右側の第三大臼齒のみに結合認めらると謂へり。而して同氏は、絶滅種に於ては齒牙の性質が甚しく特徴とされ居れども、齒牙のみより觀たる Affinity は決して良法にあらずと謂へり。然るに H. Osborn は、前記 Crista, Crochet 及 Antecrochet に非常に大なる種的價値を置いてゐる。

次に同一個體に於ても隣接せる二個の齒牙が甚しく形態を類似せる場合あり。人類の上顎第一小臼齒と第二小臼齒は異なれる個人に於ては兩者を區別する事殆ど不可能なりと謂はる。

齒牙の鑑定に際し有力なる手掛りと思考せらるゝ Cingulum なるものが齒冠基部の周邊に屢々發達する事あり。H. Osborn は Aceratherium tridactylum の齒に就きて論ぜる際、該齒に

發育せる Cingulum は不易ならずと述べたり。又 Bohlin は Honanotherium schlosseri の齒牙に於て或一個體は Palaeomeryx-fold 微弱に發育せるものあり又他の個體に於ては其の部分が單に微弱なる線狀を呈し居ること竝に第三大臼齒內側面に不易に Cingulum 發達する旨を述べたり。而て該 Cingulum は、他の麒麟類中にては不易ならずと謂ふ。此の Cingulum なるものは曾て余が日本鹿系に特有ならんと推測せしものにして本邦貝塚出土の鹿に於ては或る割合を以て出現し居る事を確めたり。即ち往々退化消失し居るものあり。

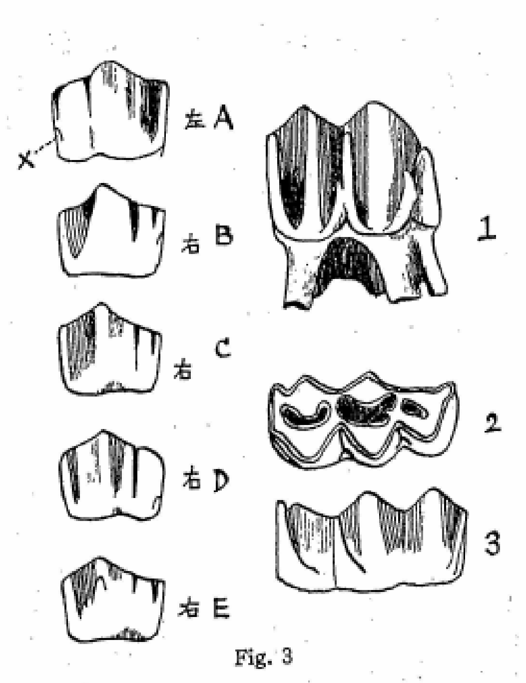


Fig. 3

又鹿、羚羊、麒麟等の上顎大臼齒に發育せる所謂 Spur なるものは化石の鹿を取扱ひし O. Zdansky に依れば同一種の個體に於て一或は二個に變ずる事ありと述べ R. Lydekker は Camelopardalis sivalensis, Falc. & Caut. の上顎臼齒に就きて論ぜる際恐らく同一種と認めらるゝ個體に於て所謂 Projecting process は屢々缺く事ある旨を記せり。本邦貝塚出土の日本鹿中同一種と認め得らるゝ下顎骨を檢せるに、第二大臼齒の後葉の谷に Spur の存在せるものと然らざるものとあり。

齒冠結節は人類齒牙に於ては各個人に於て屢々其の數を變じ又齒根も其の數を變ず。

今双生兒の齒牙に於て是等が如何なる程度迄に近似し居るかを觀るに、岡田滿氏に依れば、各同名齒牙の形態は同性双生兒にありては殆ど同一なるも各部分的の比較に於ては必ずしも然らず。即ち咬頭の高さ、咀嚼面積、咀嚼面溝の數と方向竝に長さ等に極めて僅少の差を見る場合あり。而して此差は恰も指紋の酷似程度以上の相似價を示すものなり。之に反し異性双生兒間に於ては同型同大のものなく、從つて部分的にも可なりの差異を示し、其程度は兄弟姉妹間のそれ又はそれ以上なりと。

左に一二の著者に依りて發表せられたる臼齒及前臼齒の變異に就て述べん。支那產化石の麒麟類の統一せる B. Bohlin は Samotherium bossieri の下顎第三前臼齒の變異形として第一圖の如き例を擧げたり。又同氏は Palaeotragus decipiens の

下顎第三前臼齒の變異形として第三圖の如きを示せり。

支那の猪化石を研究せる H. Pearson は上顎の最初の三個の前臼齒に發達せる talon は同一種の異なれる個體に依りて種々發育度を異にし上顎第四前臼齒の Paracone と Metacone は普通は明に區別し得れども時として兩者を區別し能はざる事もありと謂ふ。又下顎第四前臼齒の主結節は一の溝に依りて二個の結節に分割し居れども一個體に於ては此の溝の發育殆ど認められざる程度のものありと云ふ。又上顎第三大臼齒の talon は大なる變異を示し又下顎第三大臼齒の talonid も變異大なりと謂ふ。

次に、同一種のものと雖も地層の新古に依りて異なる可し。H. Osborn は Aceratherium occidental の上顎第四前臼齒に就きて斯かる例を擧げたり。卽ち Protoloph の內先端の後方進出 Metaloph の外方への退却を觀る。然れども大臼齒に於ては其の特徴遙かに不易なりと謂ふ。

終りに余が本邦貝塚出土の多數の日本鹿の齒牙中より檢出せし著しき齒牙變異に就きて一言せん。

第三圖1は北海道本輪西貝塚出土の一個の上顎大臼齒にして其後葉の Posterior fold は異常に發育して根を備へたり。又同圖2は同貝塚出土の下顎第三大臼齒にして其の第二葉の谷の中に一個の Spur 發達せるは珍奇なり。同圖3は同齒牙の內側面にして第一葉の Posterior fold は發育せず且第一葉と第二葉との間の溝は發育せずして該部は平滑なり。同圖AよりE迄は上から北海道本輪西貝塚出土。同所出土。薩摩國の某貝塚出土。陸前大洞貝塚出土。陸前大木貝塚出土の鹿の下顎第四前臼齒の內側面觀を示し本邦貝塚出土の鹿の下顎第四前臼齒の變異型は以上で略ぼ盡きたりと云ふを得可し。右の中A型が最も多く觀察さる。因みにA圖に於て、×印を以て示せる小結節は北海道より九州に至る多數の貝塚出土鹿を檢せるに六十五個中該結節を有せざるもの僅に十七個にして其の發現率七十四%なれば該結節の存在は無視す可きものにあらず、然れども右に述べしが如く往々消失する性質のものなるを知る。

（一九三一、九、七）

武藏小豆澤貝塚表面採集の馬齒

直良信夫

大正十三年十一月に、私の採集したものである。今、齒冠上部を失してゐる。保存は良好ではない。齒冠の屈曲度可成强く、偏平であつて、右側下顎第四乃至第五臼齒と推定せらる。齒冠咀嚼面は破損してゐるから、今たしかな事はわからないけれども、復原してみた結果からすれば、現生の Equus Caballus Linné

の夫よりは、少し、その鏃に單的な處があるやうに思はれるが、勿論新種ではない。化石化の程度甚しく、今黄灰色を呈する。齒根は二基、その形狀は略圓である。現高五十六粍。

日本新石器時代當時に棲息してゐた馬に就いては、既に、自然科學的には長谷部博士の評論がある。文化史的には、私も曾つて論じた事がある。馬が、日本に棲息してゐたのは、貝塚集積當時を以て、その始原とするものではない。それ以前から、野馬として處々に彷徨してゐたものであらう。しかし、純然たる家畜の一員となつたのは、こゝで論ずる迄もなく、後の文化人によつてである。馬は文化と不可分の位置に存する。馬齒、馬骨、御發見の方は御教示にあづかりたい。

武藏小豆澤貝塚
（馬臼齒）

有孔猪牙の土俗品

樋口清之

往々石器時代の遺蹟から出土する猪牙に孔を穿つて裝身具としたと考へられる物と同一の型態をした物が、未だ、我國のしかも青森縣下に保存され土俗品として使用されてゐる。本品は圖に示す如く猪牙の骨質部に銳利な金屬器で巧妙に穿孔した物であつて、全長六・二糎を示し孔は徑四・五ミリの直通孔である。手ずれのため平滑となり、全體やゝ黄色を帶びた美しい物である。所藏者青森市佐藤蔀氏の談話によると、同地方でイサゴ又はエビスカデと云はれてゐる一種の巫子が、之を連珠と共に通してそれを兩手ですり合せて招魂や、病身平癒の祈禱等を行ふのに用ふるさうである。その行事の性質と共に我々考古學に志す者に興味深い土俗品と云はなければならない。

會　報

訃　報

ヨゼフ・バイヤー　Josef Bayer 1882—1931

オーストリーのウヰーン自然史博物館、人類學部及び史前學部部長であるバイヤー氏の訃報を圖らずも『獨逸上代通報』（Nachrichtenblatt für Deutsche Vorzeit. 7. J.G. H. 8. 1931.）に見た時には暫く茫然たるものがあつた。氏はまだ働き盛りの五十歳であり、自然史博物館として、史前及び人類學部の全く獨立的に他學部と並立的の位置を得たのも、一九二四年のことであり、これに導き得たことは、同氏の奮闘の賜であつたに拘はらず、同學部長の位置について漸く七年、本年七月十日膵臓癌？（Carzinom des Pankreas）の施術の結果終に逝去されたのである。

氏の史前學上に於ける立場に就ては、私は屢々紹介して居ることは、讀者の記憶に存する所と考へる。現に本年の本誌四號に於ても、其一著述に就いて評論も試みて居る。只この機會に同氏に對する追懷を併せて追悼の意を表したい。氏は屢々述べて居る如く、歐洲に於ける舊石史前學の研究者としては、一權威であり、且つ其持論の構成、特に氷河問題、其內でも黃土成生（Lössbildung）に關しては、所謂佛國學派に對抗して、一自說を有して、今日までも、其所信に猛進せられたのである。勿論これが是非に就ては、尙多くの研究を必要とし、今日に決定を見る可きまでに、立ち到つては居らず、尙多くの考說も存して居るものゝ、舊石研究としては、兎に角、同氏の所說も一通り辨へねばならぬ所である。

私の同氏と昵近したのは、私の滯獨中、しかも一九二三年八月南獨チューリンゲンで開かれた、獨逸史前學大會に於てゞあつた。當時、私や同氏なども、所謂外國人扱ひとも云ふた丁重な待遇を得た爲、特に同氏とは、心安い間となり、續いて一九二四年六月、ウヰーンに於て、スエーデンのアルネ氏が支那彩色土器に就いて講演ありとの同氏よりの勸誘があり、シュミット博士の慫慂もあつて、同氏主催の講演に參加の爲、私はウヰーンに同氏を訪ふたのである。其後も文通を續け先年は、墺國アルプス寄りの舊石一遺跡發掘參加の勸誘まで受けたのであるが、勿論果して居らない。この樣に私としては、歐洲に於て、數少ない昵近者として、特に中歐方面の事情に對する有力なる鍵でもある同氏の逝去に對しては、獨り個人としての友誼に止まらず、學界に於ける一大損害を想はざるを得ない。

同氏の學業に對しては、旣に本年四號の評論で充分であると思ふから、重ねて述べないが、只心掛りとなるのは、同氏の「氷河時代の人類」（Der Mensch im Eiszeitalter. Teil I. II. 1927）が第一第二部のみであり第三部が出來て居るのか如何にある。それにしても、中歐方面の一大闘將を失ふたことが學界に寂寥の感を深ふするものがあると共に、心から其逝去を惜んで已まぬものがある。茲に記して謹に弔意を捧げるものである。（昭和六、九、二〇）（大山柏）

下　出　隼　吉氏

本會々員下出氏は兼てから病氣療養中のところ、去る五月十五日遂に永眠された。氏は大正十二年東大文學部社會學科を、昭和五年經濟學科を卒業、文學部副手、日本社會學會理事として學界に貢獻するところあり、又人類學・民族學等の方面にも趣味を有した少壯學者である。今氏

の訃報に接し其長逝を痛む次第である。

丸山熊治郎氏
前田　惇氏

本會々員丸山・前田兩氏は、病氣の爲め永眠された。茲に弔意を表する。

轉居

東京府下荏原郡世田ヶ谷町代田鶴岡六三二　齋藤　弘
神戸市大塚町二丁目一六　楠目勝俊
東京市外下澁谷町永住町二七番地　小林幹生
福島縣雙葉郡請戸村請戸　渡部晴雄
東京府下杉並町馬橋二九八　齋藤房太郎
東京市芝區三田四國町七ノ一　菅崎三文
東京市外高井戸町大宮前四ノ四　田澤金吾
東京市本郷區元町二ノ六六第一清輝館内　坂口保治

入會々員氏名

和歌山縣西牟婁郡三栖村　細尾榮一
東京市外落合町上落合五三五石崎方　高島徳三郎
東京市外世田ヶ谷町豪徳寺前一〇九五　横山健堂
東京市外澁谷町若木九番地國學院大學　三木文雄
〃　丸茂武重
〃　佐野又治

退會

山下　弘　吉原良三　森本六爾
入田整三　成瀬　賢　水野久直
三好好毅　中村　光　天利秀雄
木佐紀久　有住敎久

編輯後記

本來ならば九月中に發行されなければならない本誌第五號が、漸く年末に際して配本を見るやうな甚しい遲延を致した編者の怠慢を御詫びします。これに就きましては編纂の都合上本年度はこの第五號を以て終刊と致しまして、來春は卷を改めて第四卷の初號を刊行することゝ致します。さりながら本年度の第六號分と致しましては、これに代へて史前學研究所が去る昭和二年九月以來專念研究を續行し又更に繼續中であります『東京灣に注ぐ主要溪谷の貝塚に於ける編年學的研究』に關する今日迄に得た結果の概要を目下起草中であります故、これを上梓して第六號に充てたいと存じます。本號が從來のものに較べて頁數を減じてゐることも亦畢竟この別冊の研究報告書が相當の頁數を必要とする結果に外ならぬのであります。而してこの書の起稿は研究所員がその要目に從つて各自分擔致してゐるのでありまして、また相當の時日を費さればならぬのであります。從つて多少の延引も止むを得ないかと存じます。幸に讀者諸賢の御諒承を得たいと存じます。

猶來年度に於ては本誌の別冊として、甲野田澤兩氏等が研究されてをります、霞ケ浦西浦沿岸の廣畑貝塚調査報告書を刊行する用意がありますことを豫め御知らせ致します。又年報は前例に從つて來春第四卷初號と前後して發行致します。

INHALT

TAFELN

Satzungen der Gesellschaft.

1. Der Name der Gesellschaft ist "Shizengaku-Kwai" (Praehistorische Gesell schaft)
2. Der Zweck der Gesellschaft ist das Studium der Praehistorie und ihrer Grenzgebiete und dessen Popularisierung
3. Die Tätigkeit der Gesellschaft erstreckt sich auf
   A Herausgabe kleiner Mitteilungen und Schriften
   B Herausgabe der Shizengaku-Zasshi (Zeitschrift für Praehistorie) (Zweimonatlich) und des Jahresberichts.
   C Veranstaltung von Forschungs-und Studienreisen
   D Veranstaltung von Vorträgen und Ausstellungen
4. Mitglieder
   Die Mitgliedschaft wird erworben durch jährliche Vorauszahlung eines Beitrags von 5 Yen. Personen welche einen einmaligen Beitrag von 200 Yen oder mehr zahlen, werden lebenslängliche Mitglieder. Personen welche sich um die Gesellschaft besonders verdient gemacht haben, können Ehrenmitglieder werden und haben damit die Stellung der lebenslänglichen Mitglieder
5. Die Mitglieder erhalten die Zeitschrift und den Jahresbericht frei, jedoch wird für Zusendung nach dem Ausland das Porto berechnet
6. Rechte der Mitglieder
   Die Mitglieder haben das Recht, die Einrichtungen des Ohyama Instituts für Praehistorie zu benutzen
   Die Arbeiten der Mitglieder sollen in der Praehistorischen Zeitschrift veröffentlicht werden
   Ferner haben die Mitglieder das Recht, an den Forschungs- und Studienreisen der Gesellschaft teil zu nehmen, die Vorträgen und Ausstellungen zu besuchen, sowie die Sammlungen und die Bibliothek der Gesellschaft zu benutzen
7. Ein aus mehreren Mitgliedern, bestehender Vorstand führt die Geschäfte der Gesellschaft
8. Wenn es sich als notwendig herausstellt, können diese Satzungen später geändert werden
9. Das Büro der Gesellschaft befindet sich:

   9, Onden Aoyama Tokio
   Ohyama Institut für Praehistorie
   (Ohyama Shizengaku-Kenkyujo)

für den Vorstand

Fürst Kashiwa Ohyama	Kensei Hohjoh
Isamu Kohno	Sueo Sugiyama
Mitsuji Miyasaka	Kingo Tazawa

ZEITSCHRIFT

FÜR

PRAEHISTORIE

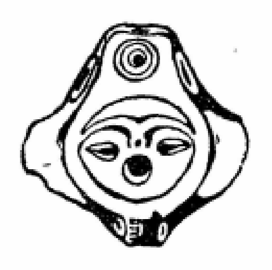
(SHIZENGAKU-ZASSHI)

Organ der Japanischen praehistorischen Gesellschaft

Herausgegeben

von

KASHIWA OHYAMA



3. BAND 5. HEFT

TOKIO

September 1931

Japanische praehistorische Gesellschaft

(SHIZENGAKU-KWAI)

9, Onden, Aoyama, Tokio.



史前學雜誌

第三卷　第四號

昭和九年九月十五日發行

史前學會

史前學會々則

一 本會ヲ史前學會ト名付ケル

二 本會ノ目的ハ史前學研究ヲ主體トシ、併セテコレニ關連スル諸學ヲ考究普及スルニアル

三 本會ノ事業ハ左記ノ通リデアル
研究小報及パンフレツトノ發行
史前學雜誌(年六回隔月發行)及年報ノ發行
調査竝ニ研究旅行、臨時講演會竝ニ展覽會ヲ催ス

四 會員
本會ノ趣旨ニ賛成シ年額金五圓ヲ前納スル者ヲ以テ會員トシ金貳百圓以上ヲ一時ニ納ムル者ヲ以テ終身會員トスル
特ニ本會ニ貢獻シタル會員ヲ名譽會員ニ推選シ、終身會員ニ準ズル

五 本會員ハ隔月發行ノ史前學雜誌竝ニ毎年一回發行スル年報ノ配布ヲ受ケルモノトスル(但海外在留者ハ別ニ遞送料ヲ要スル)

六 會員特典
本會々員ハ大山史前學研究所ニ於テ研究ノ便宜ヲ受ケ其研究ヲ雜誌ニ於テ發表スルコトヲ得ル
本會ノ調査竝ニ研究旅行、講演會及展覽會ニ出席シ、本會所藏ノ資料圖書等ヲ使用閲覽スルコトヲ得ル

七 本會ニ數名ノ幹事ヲ置キ、本會ノ會務ヲ執ル(將來必要ニ應ジテ本會々則ヲ變更スルコトヲ得ル)

八 本會ハ事務所ヲ左記ノ所ニ置ク

東京府豐多摩郡千駄ケ谷町穩田九
大山史前學研究所內 **史前學會** 電話青山一二五番

幹事 大山柏 甲野勇 宮坂光次 北條憲政 杉山壽榮男 田澤金吾

會計 岡田義一

投稿規定

寄稿の範圍は史前學研究を主體とし、之に關連する諸學を包括す。寄稿者は會員並に會員の紹介ある者に限る

原稿は返還せず、但し寫眞、圖表等は豫め申出であるものに限り之を返還す

原稿掲載の先後は編輯者に一任されたし

寄稿者の希望に依りては內容に關し相談に應ずることあるべし

寄稿の別刷は豫め申込みある場合に限り、當分所要部數の實費及び送料を申受け需に應ず

昭和六年九月十二日印刷
昭和六年九月十五日發行

本號に限り 定價一册貳圓郵稅四錢

編輯者 東京府豐多摩郡千駄ケ谷町穩田九番地 大山柏

發行者 東京府豐多摩郡千駄ケ谷町穩田九番地 岡田義一

印刷者 東京市神田區表猿樂町二 中村修二
株式會社開明堂東京營業所

發行所 東京府豐多摩郡千駄ケ谷穩田九大山史前學研究所內 **史前學會** 電話青山一二五番 振替東京五八九六九番

發賣所 東京市神田區北甲賀町四番地 **岡書院** 電話神田二七七五番 振替東京六七六一九番

史前學雜誌　第三卷　第四號　目次

資　料

遺跡及遺物

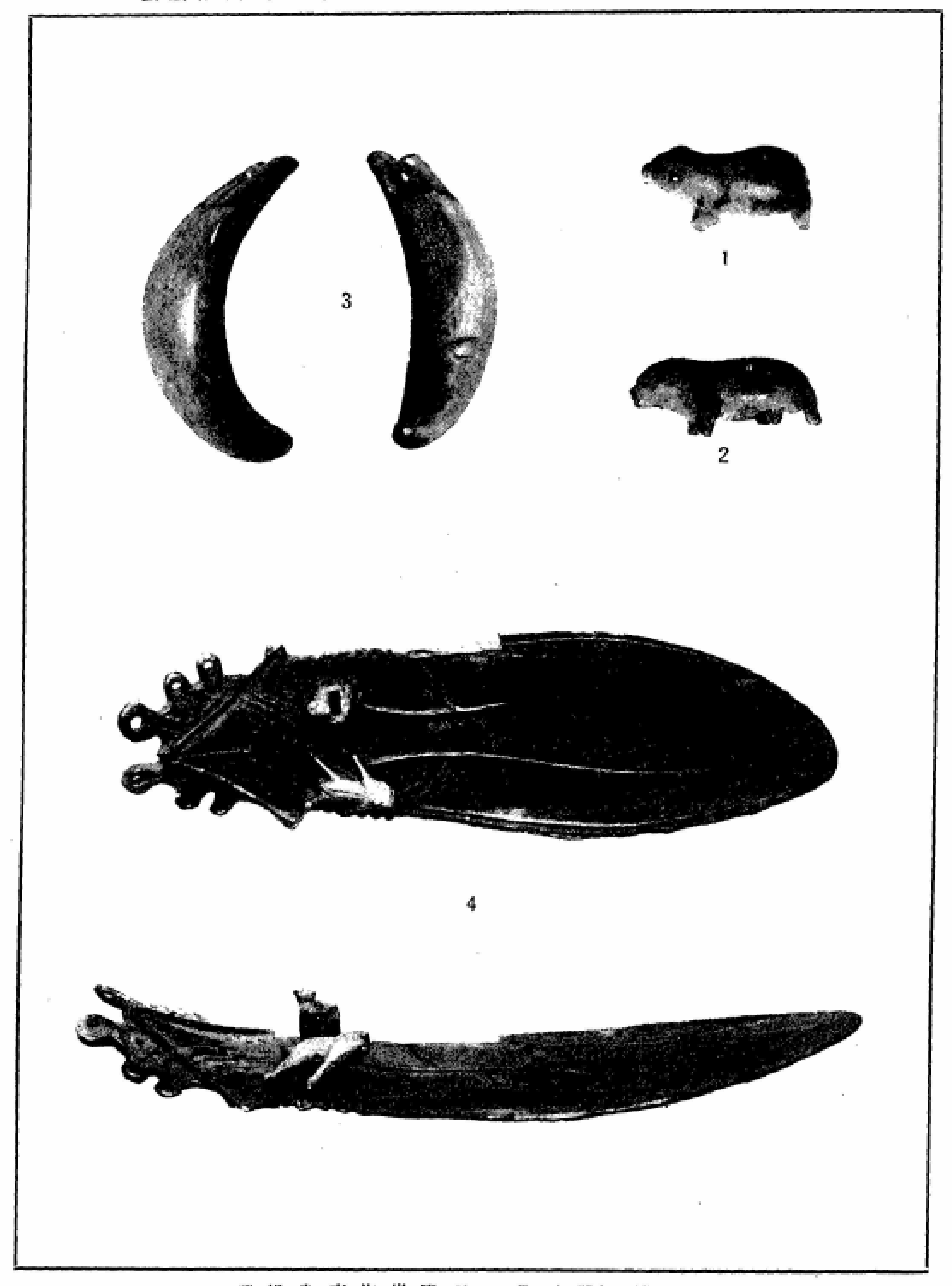
彌生式及其系統

自然遺物

土俗

文献

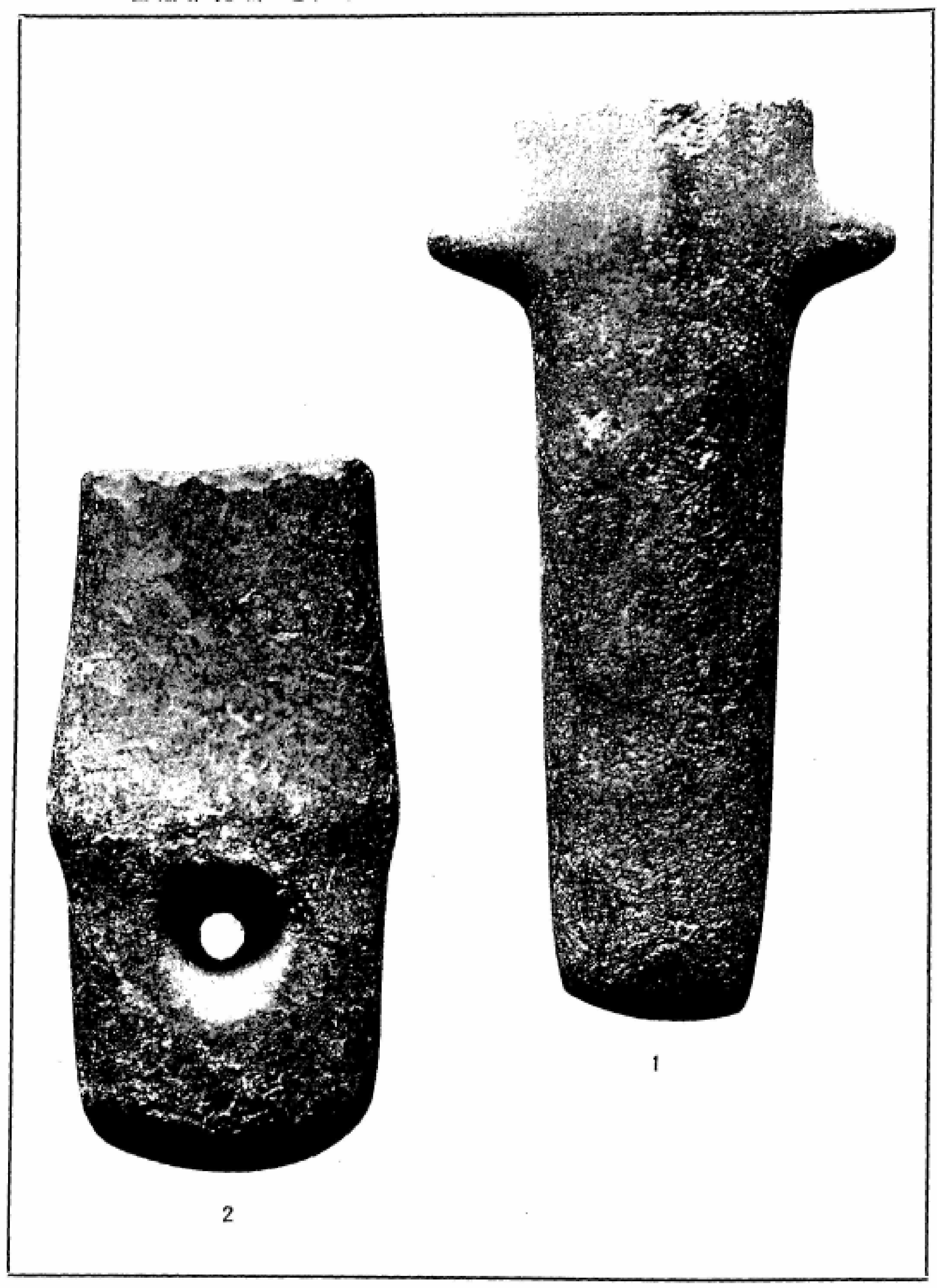
會報



擇捉島東海岸發見の骨牙器（谷附圖）

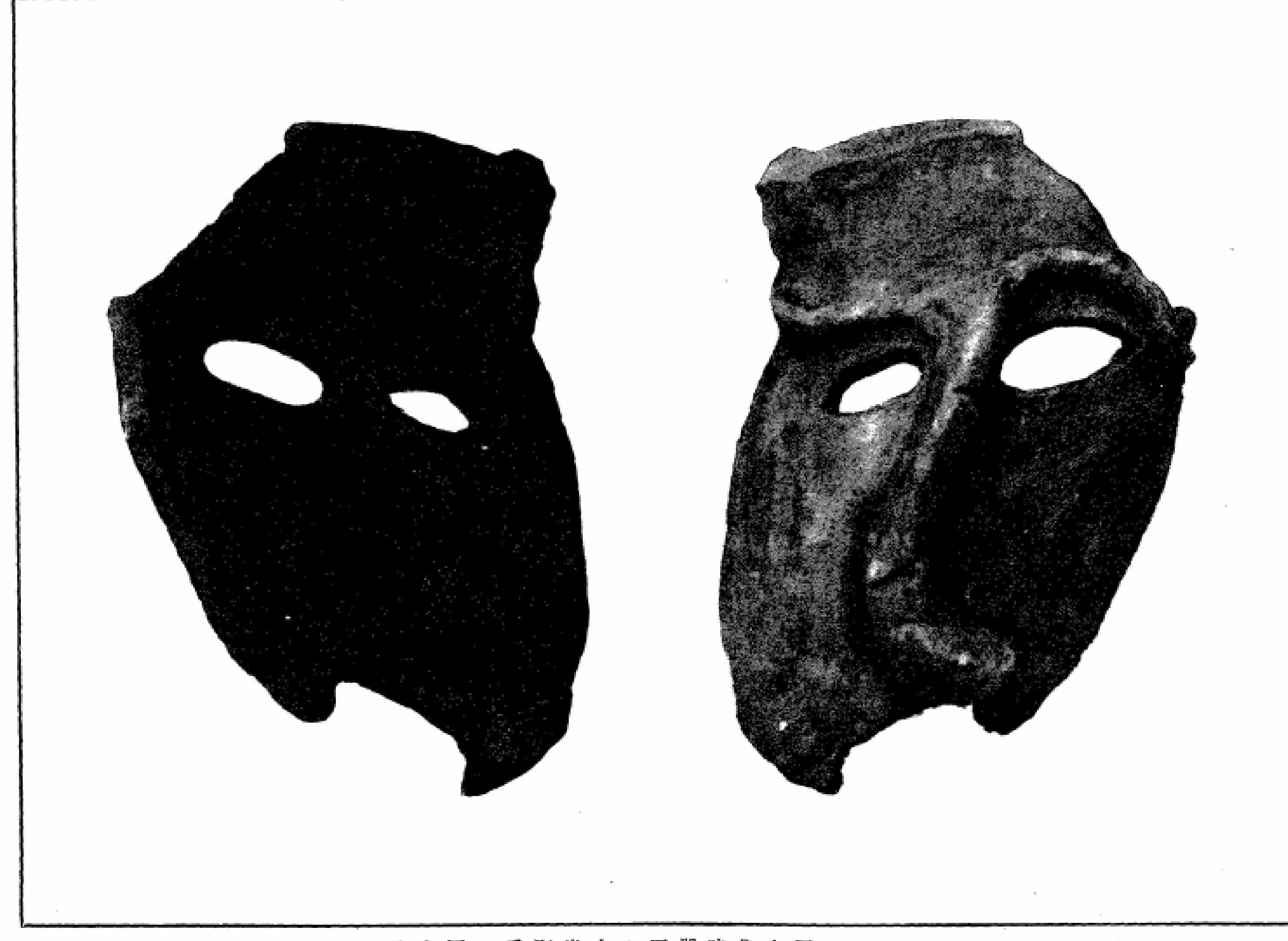
VIII. Knochen-und Zahnwerkzeuge von der Ostküste der Insel Etoroh, Chishima Inseln. (Tani, K.)





霞ヶ浦北岸地方出土の有角石器及石劍（服部附圖）

IX. Praehistorische geschulterte Steinwerkzeuge und Stein-Dolch von der Nordküste des Kasumi-ga-ura Sees. (Hattori, S.)



陸中國一戸町出土の石器時代土面

X. Steinzeitliche tönerne Masken aus Ichi-nohe, Prov. Rikuchu. (Sugiyama, S.)



史前學雜誌 第三卷 第四號

常陸國麻生大宮臺貝塚調査報告

池上啓介

緒言

昭和三年八月早稻田大學に在學中、研究報告として、常陸國麻生大宮臺貝塚の發掘研究を行つた。今回遺物の整理を行ひ改めてこの小品を草して報告となす。發掘に際して親しく東道せられ、終始懇篤な指導の勞を取られた宮坂光次氏、並に故野川元衛、吉田直道、牛堀村々長須田誠太郎諸氏の御厚意に對して深く感謝する。又遺物の整理に際して、魚骨の鑑定の勞をとられた故岸上鎌吉博士、及び史前學研究所諸員の多大なる援助と御敎示を辱うした事を光榮とする。



Fig. 1



Fig. 2

I 遺　跡

貝塚の位置及び狀態

茨城縣行方郡麻生（アソウ）町東北一粁餘鉾田（ホコタ）街道の通ずる大宮臺（オホミヤダイ）と稱する洪積臺地に大麻（オホアサ）神社があり、本貝塚はその西北凡そ二百米を隔



Fig.3　貝　塚　遠　望

て北面せる畑地上にある。即ち麻生町方面より北方に灣入する沖積低地の一部は更に東方に向つて小支谷の錯雜せるを見る。本貝塚はこの一小支谷に面した丘陵上にあつて標高約三十五米を算する。貝殼の散布せる部分は第二圖に見らるゝ如く、大略ＡＢＣＨ四ケ所に存在し、互に相近接し近きは二十米遠きは百米を距れるに過ぎない。これ等各貝塚の表面には何れも貝殼及び多數の土器片が散在し、且つ貝殼散布の面積も略等しく幅十五米內外長さは地形により異なれども二十米――三十米の間にあり、これ等が相集まつて一大貝塚遺跡を形成する。今この遺跡を麻生大宮臺貝塚と稱呼する。

本貝塚構成當時にあつては、霞ケ浦は水深の大きな海水の通ずる一大內灣にして波浪穩にして而も物資に富む惠まれた自然環境にあつたものゝ如くこの地方には本貝塚附近に築地・上戸・猿越・粲呂・石神・矢幡等其他多くの貝塚遺跡の存するを見る。

本貝塚には東京帝國大學理學部編纂の日本石器時代遺物發見地名表第四版（大正六年）に非坂千之介氏の報告がある他、遺跡の內容に觸れた文献は私の知り得る範圍では未だこれを見聞しない。

II 發　掘

今回發掘したのはＨ斷でその附近は灣入せる一小支谷に對し、略北方に向つて傾斜せる畑地にして、臺上耕地と斜面耕地は三米餘の崖狀をなして區分せられ、貝塚構成期に於ける自然傾斜面の舊態を止めない。僅にこの崖狀壁面の一部に純貝層の斷面が露出

してゐて、塞上から斜面にかけて貝塚が形成せられたものと推定される。

H地點は宮坂光次氏の厚意より發掘の前日該地點を撰ばれ、種々御交渉を辱した結果によるもので、前記の貝層斷面露出部との連絡を期し、第四圖の如くL字狀に發掘壕を設け、ローム層を限度として發掘し、遺跡及遺物の性質を分明するに努めた。實際に從事した時日は三日間にして、宮坂氏の指導の下に人夫二名の援助を受けて發掘を行つた。

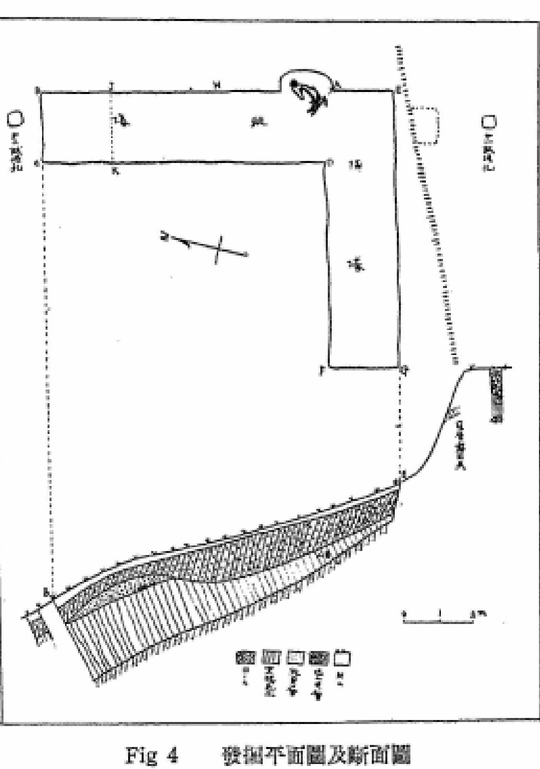


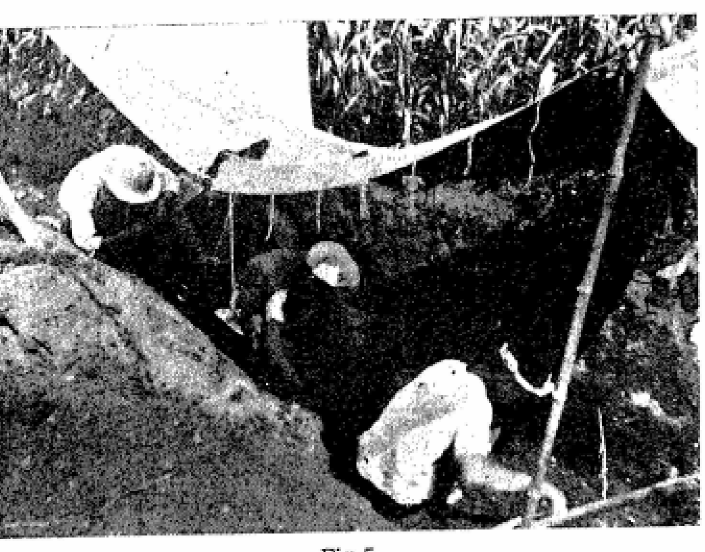
Fig 4　發掘平面圖及斷面圖

横壕　崖下に崖壁面に沿ひて東西に幅二米、長さ八米の面積を發掘した。これを横壕とす。該地點は農耕のため甚しき地表變化を受けてゐる。即ち、耕土（表土）は十五糎乃至十八糎にして貝殼及び土器片を混じ、次に約四十五糎の厚さを有する黑褐色土の混土貝層あり比較的多量の土器片を出土した。混土貝層下部は厚さ十五糎の褐色土層を挾みてローム層に達す。これが發掘に第一日を費す。

縱壕　横壕發掘後、即ち第二日に横壕端A點より斜面の下方に向つて幅二米、長さ八米の發掘壕を縱壕とする。これが發掘に二日間を費し、猶時日の不足を感じた。然れども縱壕發掘により崖狀壁面に露出せる貝層斷面と斜面純貝層との聯絡を確め、且つ横壕に於ける混土貝層との關係を知る事を得た。即ち發掘平面圖及び發掘斷面圖に見らるゝが如く、A點より三米の所にありては純貝層を認めない。（A—H）の斷面を説明すれ耕土二十糎、其の下に貝殼を若干混ずる黑褐色土層厚さ八十糎乃至九十糎あり、次に五十糎の厚さを有する褐色土層を隔てゝ、ローム層に達す。更にA點より六米の箇所の斷面（J—K）は、表土は三十糎乃至四十糎あり、其の下部に十五糎餘の黑土を混ずる貝層あり、更に其の下部は整然たる純貝層をなし厚さ三十五糎乃至四十糎を算ふる。次に一米二十糎の褐色土層ありてローム層に達す。而も褐色土層はローム層と接

する附近で幾分粘土質化してゐた。

斯の如く混土貝層は上層にあり斜面を下るに從つて貝殻は表面に多く露出す。純貝層はA點より四米二十糎附近より深さ約二十糎の所に初まり約二十度の傾斜を存して斜面の下方に及びA點より九米附近で終つてゐる。



Fig・5



Fig・6

以上により本地點の貝塚は北面せる臺上からその斜面にかけて構成せられた遺跡にして後世農耕の爲に甚しき地表變化を蒙つたものである。發掘點は主として斜面の貝殻集積の末端を近くを發掘した事が明にせられた。

遺物出土狀態

發掘點に於ける遺物の出土狀態を述べれば縱壕・横壕兩壕ともに貝殻の外、獸魚骨及び土器片を出土した。然して横壕は前述の如く既往耕作等の爲め人意的攪亂を受けてゐる故、これを除外して主として縱壕に就いて記述する。即ち縱壕に於ては獸魚骨は混土貝層及び純貝層中に主として遺存し又兩貝層中には灰・炭・燒土等の混在するものを見たが、爐並に其の他狹義

の住居跡と認めらるべきものは發見しなかつた。

貝殼の如きも時に一種類のみが集積する様な事もなく又特に注目すべき層位的事實も存しない。

石器類は極めて小數にして主として表面及び泥土貝層の上部に於てこれを發見し、純貝層及びその下部等には一點をも獲られなかつた。骨角器の類も亦極めて僅少で何れも泥土貝層中より發見した。土器片は表土・泥土貝層・純貝層・黒褐色土層等各層に多量に遺存した。而して後述する所の各種類の土器片は各層から混在して一様に發見せられて層位的に檢出すべき何者をも認め得なかつた。唯純貝層下部、黒褐色土層に接する附近に於て表土より九十糎の深さから復原し得べき壺形土器（第六圖及び第十三圖參照）の碎破せるものを出土し、又其の附近に若干の所謂厚手式に類する土器片を得たに過ぎなかつた。

以上の如く、自然遺物及び人工遺物の出土狀態に就ては何等特異の狀件が認識されぬ。

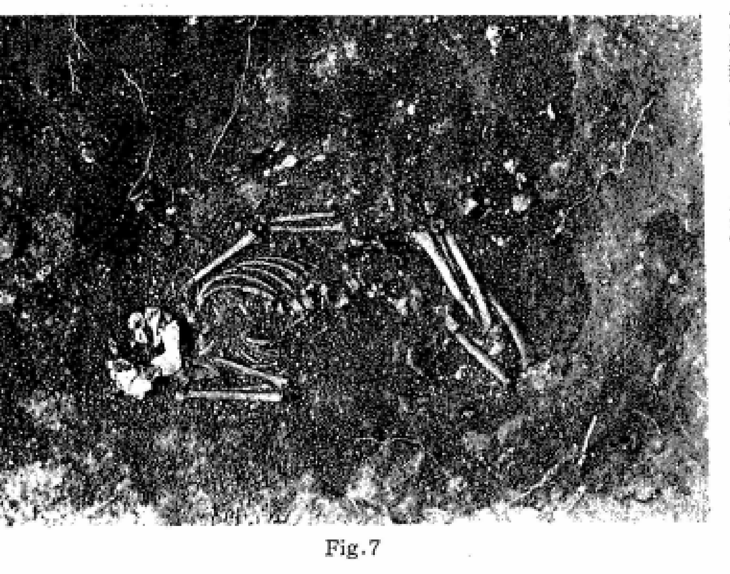


Fig.7

III 遺　物

自然遺物（人骨　獸骨　魚骨　貝殼　自然石）

今回發掘によつて檢出し得た自然遺物は大略次の如くである。

a 人　骨

堅壕のA點附近に於て表土より一米二十糎のところ黒褐土層中に發見さる。頭部を東北にして體軀を西南に向けて稍左斜下に仰臥し、上肢は右肢を極度に屈して手を顎下に置き、左肢は軀幹に添ふて伸す。下肢は膝を強屈して左方に傾け兩足を臀部に接したるが如く、屈臥の姿態を呈して居る。各骨骼は幼弱にして少年期のものに屬し、頭骨（顏面破碎）を始め軀幹の諸骨并に四肢骨等比較的よく舊態を保つて遺存した。（第七圖參照）

b 獣骨

Sus leucomystax leucomystax Temmink.　イノシシ
Sika Nippon Nippon Temmink　シカ
Nyctercus Procyonides　タヌキ
Cetacea　クジラ

獣骨の主なるものは猪及び鹿にして、角・牙歯・下顎骨并に四肢骨等である。狸の下顎骨は一部分焼かれて炭化せるものがあり、数箇の鹿角は人工による切断面を有するものがある。

c 魚骨

Lateolabrax japonicus Cuvier et Velenciens　スズキ
Sparus Macrocephalus Schlegel　クロダヒ
Paralichthys Olvaceus Temmink et Schlegel　ヒラメ
Pagrasomus Major Temmink et Schlegel　マダヒ
Loligo japonica Hogle sp　イカの類
Tetraoden sp　フグの類

魚骨は獣骨に比して甚だしく多量に出土した。上記の六種類は故岸上鎌吉博士の鑑定によるものである、これ等の中最多数を占めるのはフグである點は注意すべきである。

d 貝殻

Meretrix meretrix Linn.　ハマグリ
Mactra sulcataria Reeve.　バカガヒ
Cyclina shinesis Gmelin.　オキシジミ
Paphia philippinarum Ads et Rve.　アサリ
Arca subcrenata L.　サルボウ
Mya arenaria japonica Jay.　オホノガヒ
Mactra Veneriformis Reeve.　シホフキ
Solen gouldi Conrad.　マテ

Ostrea sp	カキ
Anomia Lischkei D. et F.	ナミマガシワ
Polynices didyma Bolten.	ツメタガヒ
Rapana thomasiana Crosse.	アカニシ
Landes sp'	キセルガヒ
Viviparas malleatus Reeve.	マルタニシ
Melania sp.	ニナの類

以上の如く貝類は凡そ十五種である。貝塚の主體をなす貝殼は、ハマグリにして、バカガヒ及びシホフキが之れに次いで多量である。卽ち本貝塚はこれを積成する貝類は若干のタニシ、ニナ類等の淡水產貝類を除く他は總て鹹水產貝類より成る。

e　自然石

球狀又は棒狀の自然石を主として泥土貝層中より屢々發見した。其の中には多く打痕の跡を止めるものあり、明に自然石利用の跡を窺へるものがある。又少量の燧石及び黑曜石の小破片を出土した。これ等は恐らく石器製造の際に生じた石屑であらう。

人工遺物（石器　骨角器　貝器　土製器　土器）

a　石　　器

本地點に於て發見せる石製品はその種類並に數量に於て多量とは稱し難い。

磨製石斧	四　個
打製石斧	三　個
石　　皿	六　片


a


b


c

Fig.8

石　錘　　　　五　個

砥　石　　　　一　個

石斧　打製幷に磨製にして撥形・短册形にして普通見受けられる形式である。磨製石斧bは長さ八糎にして玄武岩質である。aは長さ十一糎にして横斷面殆んど楕圓形に近い太いものである。石質は砂岩である。（第八圖參照）

石皿　何れも破片にして其の中二個は、大破片にして全形を推測する事が出来る。石質は何れも安山岩にして最も大なるものは長徑三十糎あり楕圓形を呈する。

石錘　何れも大體六糎に五糎の大きさにして、扁平な礫石の兩側に打缺きを作れる粗製のもので、石質は安山岩幷に砂岩を主とする。（第八圖參照）

砥石　表面採集による物で、長さ八糎幅六糎高さ五糎あり石質は砂岩にして一面には四條、その背面には三條の淺い擦痕を殘してゐる。

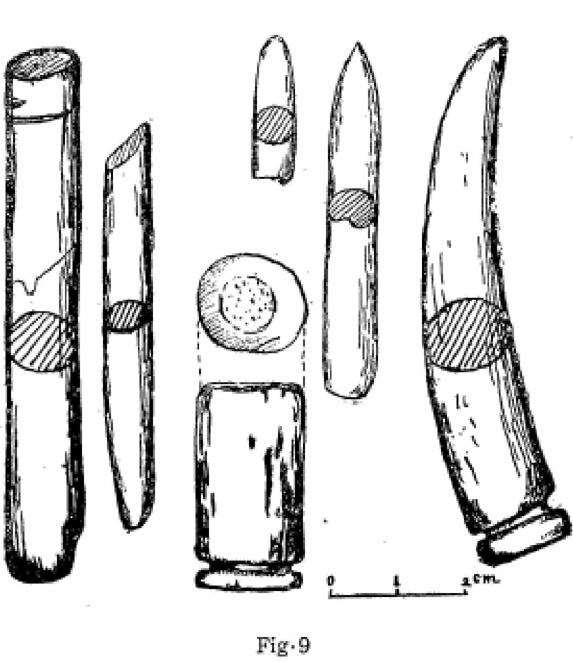


Fig-9

b　骨角器

骨角器の出土量は極めて少なく僅に六個を算ふるに過ぎぬ。

骨鏃　三個あり、一つは尖頭部のみである。

角器未製品　二個あり、何れも「浮袋の口」と稱せられるものの未製品にして、一は鹿角の周圍に切目を附して切斷の第一過程にあるもの、他の一つは切斷せられもので製作の半ばにあるものである。（第九圖參照）

c　貝器

貝輪　未製品六個、磨製せられものゝ破片二個を獲た。何れもベンケイガヒの類を以て製作さる。

d　土製品

土錘　土器の殘片の四周を磨りて歪楕圓形となし、その長徑の兩邊の中央部を兩面より打缺いで糸掛狀を作れるもので二個を出土した（第十圖參照）關東各地の遺跡より出土するものと何等異るところがない。

e　土器

本地點に於いて出土せる土器は何れも繩紋式土器に屬し、出土量は甚だ豐富であつたが完全に近いものは大形の壺形土器一個を得たのみで他は全部破片である。而も大多數は粗製品であつて土質は概して粗く土器の表面は光澤なく黄褐色又は黑褐色を呈し、厚さは凡そ六粍ある。器形は破片をより推察すれば、比較的單調で深鉢形が最も多く、壺形及び椀形これに次ぐ。土器の表面には細條紋・沈線紋及び繩紋磨り消しの手法等によつて意匠せられたものが多い。而して比較的簡粗なる繩蓆紋が口緣部より底部に近く施印されてゐる。今口邊部に表はされた紋様の構成に基いて大別すると次の如く第四種類に區分せられる。



Fig.10

第一類

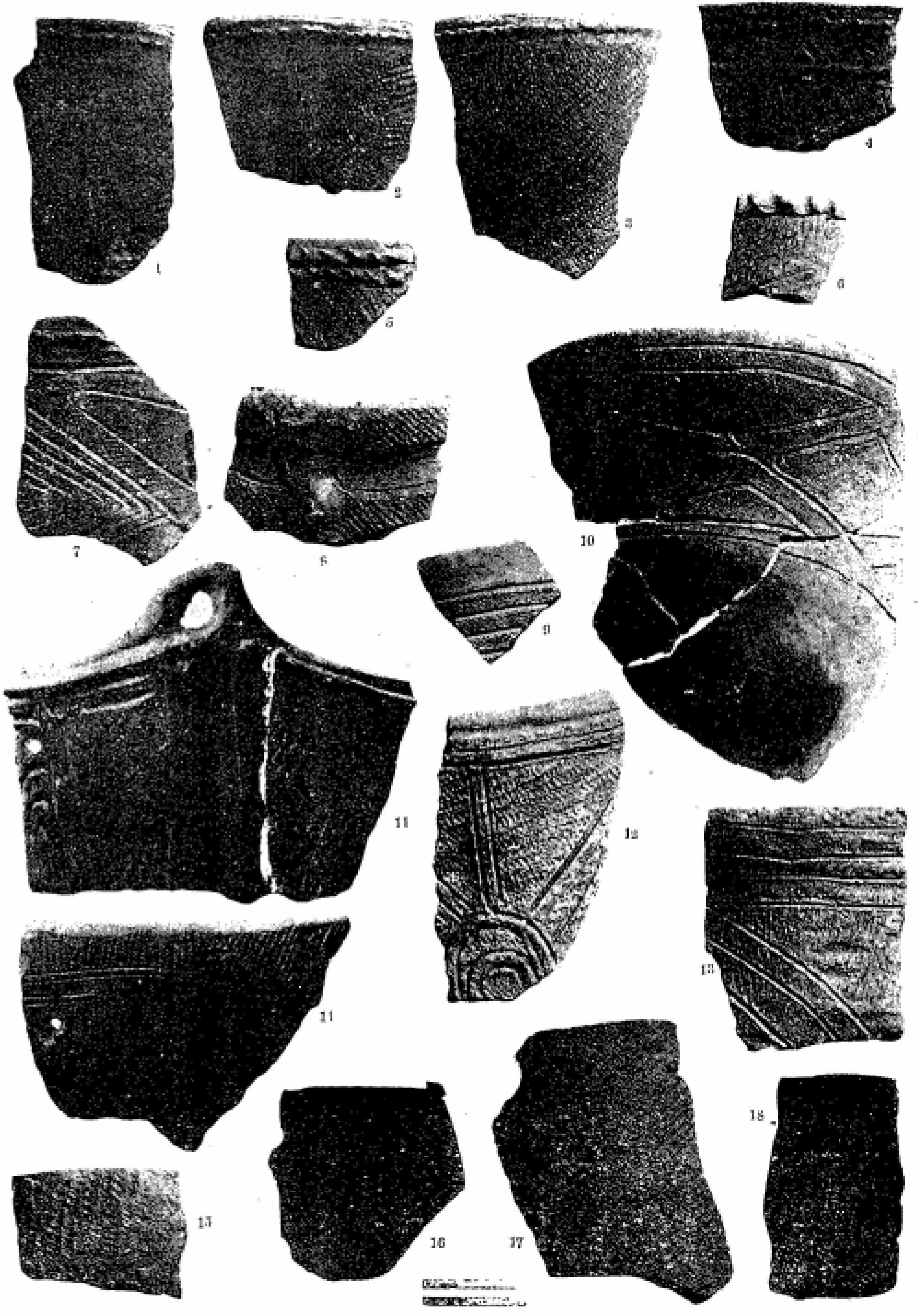
口邊部を廻る隆起線上に小圓狀又は半圓狀の連續的壓痕又は連續的小印刻を有するもので、主として口邊部に近く紋様帶がある。又口邊部の內面に沈線による所謂內紋が多く存する。而して器形は深鉢形のものが多い。發掘土器片はこの種類に屬するものが最多である。（第十一圖一―六）

第二類

口邊部の周圍に繩蓆帶を狹んだ平行沈線と繩紋磨り消しの手法とによつて描かれた紋様帶を有するものである。この平行線は變化に富み且つ磨り消しにより多少紋様部が浮き出して見える。この種の土器片は比較的少なく器形は壺形及び椀形に約束されてるらしい。（第十一圖七―九）

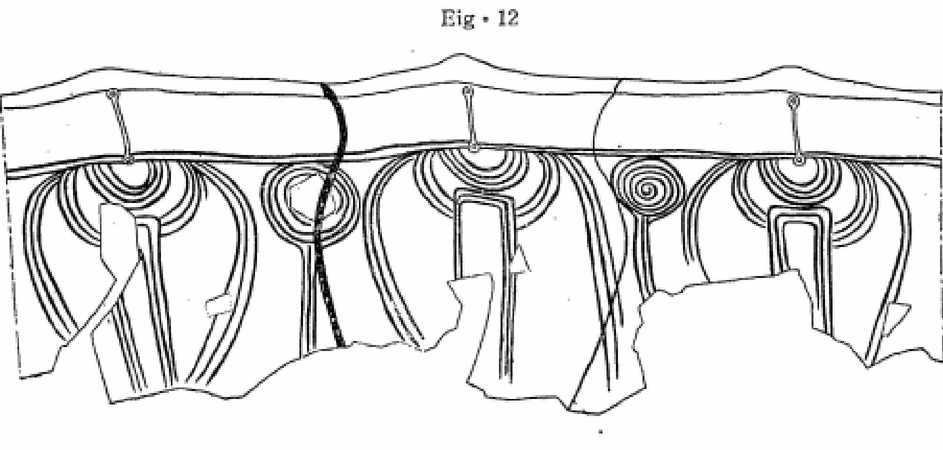
第三類

平行線・渦卷紋・平行斜線等の沈線により意匠せられた物である。而してこれ等は粗雜な施紋法によつた物が多く且つ概して大破



Fig·11

Eig・12



片に富む。器形では不明である。第一類に次いで多量に出土した。（第十一圖十一——十四）

第四類

縄蓆を印するのみで全く裝飾紋を存しないものである。この類の土器片は少數であり且つ器形は椀形にして小形である。（第十一圖十五——十八）

以上は口邊部に表はれた紋様による分類であるが、他の部分の土器片の大部は各々以上の分類の何れかに屬せられるものが多い。即ち胴部の破片は縄蓆紋又は全く無紋のものが多くこれ等は第三類以外の何れかに屬するものもあり、或は第三類に屬すると考へらる沈線紋の發達せる土器片も可成り多く發見された。



Fig・13

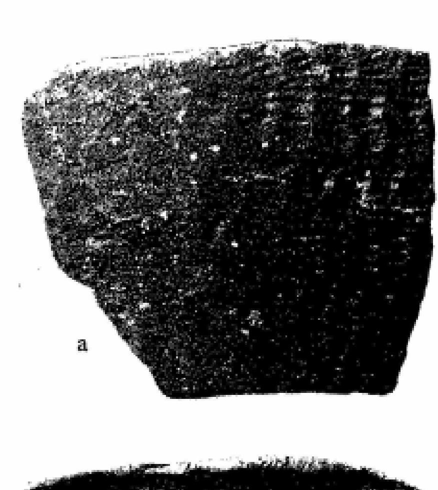
土器底部　圓形で且つ扁平を主として異形を見ない。大さは大小あれども直徑七糎位のものが最も多い。極少數ではあるが所謂網代底を若干出土した。

把手　小形なるものが多く、極めて大形なるもの、複雑なものはない。而して把手は前述の口邊部の分類に於ける第三類及び第二類の土器に伴ふものが多い。

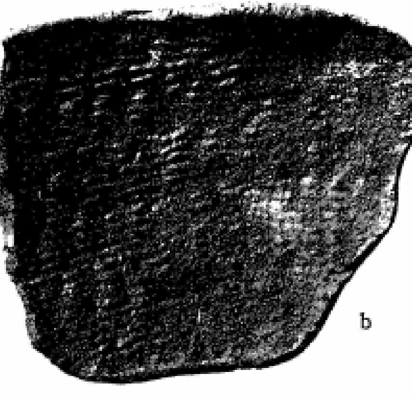
壺形土器　本發掘に於ける唯一の完形に近きもので底部を缺いた大形土器である。高さ三十三糎口徑三十糎あり、口邊部に三個の波狀突起があり、且つ口邊部は稍外曲する。色調は黄褐色を呈し、土質は粗い。紋様は第十二、三圖に見る如く頸部より胴體部に發達

し、沈線による直線及び曲線によつて意匠せられてゐる。口邊部の紋様は少ないが前記の第三類に屬せらるべき土器である。

以上の他、土器中には第十四圖に擧げた籠狀様のものを印するものがある。第十四圖aは實物の寫眞で、同b圖は泥土に印してその原形を示せるものである。



a



b

Fig. 14

以上で本地點出土の土器の記載を終る。

而して本貝塚の土器片は、行方丘陵上に於ける他の貝塚即ち上戸・築地・梶間等の諸貝塚の土器に酷似するものがあり、又、下總國良文村貝塚區貝塚・小文間貝塚等のものの一部と亦近似するものが多い。概して關東地方に於いては霞ケ浦方面の貝塚にこの種の土器が存在するものゝ如く考へられ、本貝塚の文化的位置を暗示するものであらう。

IV 結　　語

終りに各項に述べた結果を綜合すると次の如し。

一、本貝塚の位置は地理的環境に非常に惠まれてゐる。

二、本貝塚は小貝塚よりなる貝塚群にして、其の內容は若干相違あるものゝ、大局に於て當方面の諸貝塚と近似關係にあり、少なくとも特種の貝塚ではない。

三、檢出し得た貝殼及び魚骨を現生のものに就いて其の習性を見れば、二三の例外はあるが、大部は淺海・內灣・淡水の多少流入する等の狀件を一樣に有す。これ等は當時の當地方に於ける地理的環境を暗示する。又特に漁撈方法を推斷するが如き特異な習性あるものも存しない。

四、魚骨は特に河豚が多く然も焼かれたものが多く遺存せる事實は食料に供せられた事を推想せしめ、且つ又彼等の文化は有毒物を或程度まで處理し得たとの企想を抱かしめる。
五、埋葬せる完全なる少年期の人骨一體を出土している。
六、土器以外の人工遺物は尠ない。
七、土器は形態變化に乏しく、紋様の多くが沈紋で直線紋と曲線紋の兩者によつて意匠せられてる。
以上が本貝塚發掘地點に於ける主要なる點にして、關東地方に於ける諸貝塚から全般的に見るなら一般普遍的な條件を有し、特異なる遺跡ではない。而して本貝塚の存する行方丘陵に前述の如く多數貝塚の發達する所以は、全く彼等の生活に適合せる地理的環境によるものと考へられる。今後この同一環境内の諸貝塚を調査する事により、當地方に於ける文化相が鮮にされるであらう。

擇捉島東海岸發見の骨牙器

谷　敬　一

緒　言

昨年四月漁業經營の爲め、初めて擇捉島に渡航し、留別村の程越と云ふ所に上陸した。四月も終りと言ふのに、谷間には雪が二尺も殘つてゐて、春とは思はれぬ寒さである。上陸早々漁場內の雪害の有無を調べんとし、前年漁舍建築の爲め、地均らしをした場所を通つた時、石鏃が落ちてゐるので、不審に思ひ附近を調べしに、竪穴及び貝塚の露出してゐるのを發見した。而して其の傍には土器片、原石の破片、砥石に使用したと想はるゝ平石數個散亂しゐた。これに依つて石器時代遺跡地であることが判明した。

程越の三方は、小田萠山、程越山等の山々によつて圍まれ、前は渺茫たる太平洋に望み、沿岸は斷崖多く、僅かに程越川の左右に平地があるのみである。故に近村との交通は地理的に遮斷され、僅かに船に依つて連絡するより他に方法が無い。現今に於てすら斯く不便な所であるのに、未開野蠻であつた當時、此處に住居を作り生活をしてゐたとは、何人も想像の出來ぬことであらう。されど前述の事實より推して、明らかに原始民が、此處に生活をしてゐた事が證明される。これに依つて考ふるに本島は如何なる山間僻地と雖も、至る所に住居を營み、山に海に食を求め生活してゐた事と想はれる。元來本島は自然の食料豐富にして、河には鮭・鱒の溯上群をなし、海には鱈其の他の魚介・藻類饒產し、殊に彼等にとり必要缺く可からざる海獸は沿岸至る所に游弋し、山野には熊・狐等の野獸群棲してゐる。斯く生活資料容易に得らるゝ爲め、自然人口も增加し、從つて大部落を形成した事は今日各所に遺る無數の竪穴住居跡に依つても明らかなことである。

自分は仕事の關係上程越・ウルモベツ間二十餘里の間を數回往復した。其の都度通路附近で遺跡を發見し、或は探見し、一時間二時間の暇を作り附近遺跡の試掘を行つた。されど充分暇が無く、雜草は丈なす程延び、熊笹は繁りて遺跡を沒し、加ふるに熊の出沒頻繁なるため、調査を妨げられ、組織的な發掘調査が出來なかつた。然し今後毎年漁期には渡島する故、一少部づゝ繼續的に

調査をなし他日完成したいと思ふ。斯る理由で遺物の採集も困難であるが、五年間採集した骨牙器百數十點の内、完全なるものを撰び紹介しようと思ふ。之れに依つて幾分たりとも石器時代遺物研究の資料とならば幸甚の至りである。

遺跡の概略

(一)留別村程越貝塚　海岸より約五間程離れた丘の上に七ケ所竪穴がある。地均らしの爲め遺跡の破壊せられた所約七十坪なるが、此處にも亦竪穴があつた事は、種々の點より推察される。竪穴は圓形にして、貝塚は竪穴內及其の東側にある。貝殼の殆んど全部は卷貝にして、鯨・熊・鳥等の骨が混じ一尺五、六寸位の層をなしてゐる。土器、石器は表土層及貝層下黒土中に一尺内外の層をなして出る。骨製品は鳥骨の先きを尖らしたものが二、三出た丈けである。勿論一坪程の發掘の結果であるから全體の遺物包含狀態は明らかで無い。竪穴內の狀態は大形土器の底部破損せるものを利用して爐を作り、他に二尺程離れ丸石を積みて更に一個の爐を設けてあり、其の二個の爐を中心に大小の平石を放射狀に敷詰めてある。土器は厚手のものである。

(二)留別村大字振別村恩根別貝塚　恩根別川々口の左側、海岸より約八間程離れた高い丘の上に大小三十程の竪穴がある。竪穴の內外、地表面より約一尺位にして貝塚がある。鯨骨其の他の獸魚鳥骨が非常に多く混じ一尺—三尺位の層をなしてゐる。骨器は植別貝塚より少ないが、同形式のものが出る。此處より鯨の脊椎骨を火鉢形に作つたものが出た。表土層及貝層下黒土層より土器石器が出る。

(三)留別村植別貝塚　丁寧川左側平坦な丘の上にある。海岸より約十間程離れて、竪穴大小二十餘り散在してゐる。石器土器は地表面より五寸—一尺五寸の深さの所に層をなして居り、貝塚は竪穴の內外黒土層下に鯨魚・鳥骨を混じて、深さは三尺より四尺、淺きも一尺以上の層をなしてゐる。骨器が夥しく出る。殊に此處より匙形の精巧なる彫刻をなしたる牙器が出た。貝塚の廣さは相當大きいものと想はれる。此等の一竪穴の貝層下より人骨が出た。人骨の周圍には副葬具と想はれる經三寸—五寸高さ五寸—一尺の無紋及直線紋の甕形土器を數個廻らし灰を以て覆はれてあつた。一種の埋葬法であるまいか、未だ灰を以て厚く覆ふてある例を聞かぬ故疑問である。

(四)植別砂山貝塚　植別貝塚より約一粁南方、外洋に面した所にある。緩やかな傾斜をなしてゐる砂丘の斜面に竪穴がある。數年以前まで黒土を以て覆はれ一面の草原だつたそうであるが、今は砂濱となつて浪の爲め年々浸蝕され、竪穴の數も少なくなつ

て來たとの事である。貝塚は砂層下五寸位の所にあるが、風の爲め露出し、或は吹き飛ばされて、只跡のみ存してゐる所もある。骨器、土器は貝層及び貝層下より出る。爐の跡と思はるゝ灰層があり、石器は附近一帶より出る。

(五)振別村トマカラウス貝塚　海岸より約四十間程離れ、高さ十五尺程の高台がある。此處に竪穴十個程ある。且て竪穴附近を開墾した時、土器が夥しく出で、石鏃・砥石・石包丁等も出たとの事である。貝塚は竪穴の周邊に二尺位の層をなしてゐる。土器骨器が出る。

(六)振別村カンケカラウス貝塚　海岸より約五十間程離れ、急斜をなす坂を登れば平坦なる丘となり其の中間を幅四間程の谷川が流れてゐる。川の左側に大小の竪穴がある。大なるは徑三間程あり、貝塚は竪穴の外緣に三尺程の層をなしてゐる。土器骨器が出る。此處より牙製曲玉とも稱すべき膃肭型の装飾品が出た。

遺　物

牙製品

(一)茶匙型牙製品(圖版第八、4)　植別貝塚出土なり。沫香鯨の齒牙を以て作り、茶匙の如き形をなしてゐる。本品類似の品は未だ發掘例を聞かぬ故、其の用途使用は判然とは解らぬが、形態上より考へて装飾品では無く、物を掬ふ箆の如く使つたものと想はれる。全體が均整のとれた一種の装飾品の如き感がある。長一五・七糎幅四・七糎ある、頭部に左右三ケづゝの圓き突起を作り、其の中心に圓孔を穿ち之れより山形の沈線に沈線を以て連結してゐる。山形浮線の中心より縱に溝を作り、其の兩端は丸くえぐり取つてゐる。溝の末端左右斜に各々六個の小孔があり、人と熊とが浮彫されてある。人の像は地面に腰を掛け腕を組み合せて膝の上に乘せ、上を向いて得意然としてゐる態を表現し、其の傍の熊は仰向になつて硬直してゐる態である。横腹には槍傷か矢傷を表はした小孔があり、腹部は胸より生殖器を表はした部分まで割かれてゐる。要するにこの圖は熊を仕止めて其の傍に傲然とひかへてゐる有様を表現したものであらう。像の内側より浮線を以て鏃の如き形を表はしてゐるが、これは多分熊獵をする時使用する鏃か槍頭かの形を表現したものと想はれる。本器全面にニス樣の物質を、塗附してあつた樣な痕迹が所々に遺つてゐるが、本器のみならず後述の装飾品にも同樣の物質が塗附されてあるのを見れば、當時斯る塗料が用ひられてゐた事と想はれる。第一圖2は長さ九・八糎ある。破損してゐるが類似品として比較する爲め掲げた。本品も前記のものと同樣の物質をもつて作り、大體の形狀は同樣で

あるが、裝飾は僅かに頭部のみに施されてあるのみである。構圖の整美なると彫刻の精巧なるとは全く驚嘆すべきことにして如何

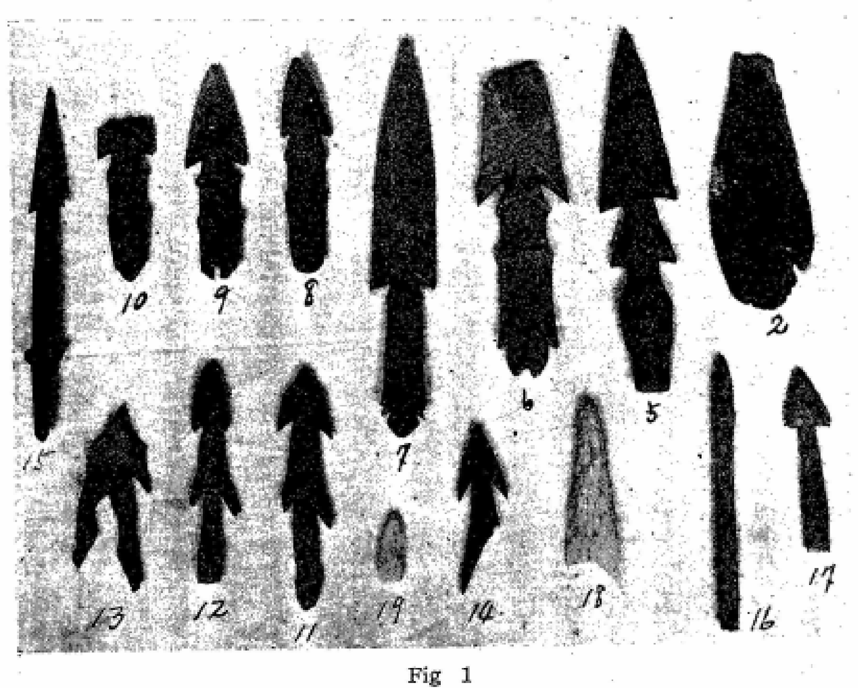


Fig 1

に美術的技工に長けてゐたかゞ窺はれる。

（二）牙製膃肭（圖版第八2）　カンケカラウス貝塚出土品。抹香鯨の上齒の自然に彎曲せるものを利用して加工せるものである。體長五・六糎幅二糎ある。膃肭のまさに水中に跳り入らんとする態を表はしたもので、頭部は小さく腹面に口を表はした横線を刻し、眼の下兩側面には各々九ケの陰點を以て鬚を示してゐる。腹面には簡單なる一對の鰭脚が浮彫りされてあり、背面尾端には後鰭と尾が陰刻されてある。後鰭の中央には〇・五糎程の孔が兩抉りに穿たれ、胴の部分は陰點を以て毛の有様を表してゐる。これは牙製曲玉の如く首飾りに使用したものと想はれる。

以上の外鯨齒を輪切りにして圓形に磨きしもの、或は環を作りて上下に孔を穿ち首飾になせると想はるゝもの、又は齒を縦に斷ち割り齒腔を利用して匙の如く使用せしと想はるゝものあれど、何づれも完全なるものにあらざれば、これ等は後日類品發見の折に紹介する事とする。

骨製品

（一）熊像（圖版第八1）　植別貝塚の出土品で熊の姿態をよく表現し一見して諒解出來る。熊は常時の民族と非常に密接な關係があつたものらしく、貝塚より出る熊の骨の多き事に依つても解る。平常山野にある時は實に愛らしいものであつて、今日に於てもアイヌは仔熊を飼育し、又は裝飾に其の姿を表はしてゐるもの

が多々ある。勿論アイヌのみならずカムサツカ土人も玩具に、装飾に、熊の姿を模してゐるものがある。體長三・五糎程あり鯨骨の良質の部分を以つて作られてある。左側軟質の部分の脚は、磨滅して短かくなつてゐるが、目、口、鼻、耳等は完全に表現してゐる。腰の部分に〇・六糎程の孔が穿たれてゐる。此孔に紐を通し他の装身具と共に首飾の如きものに使用されたものであらう。腰部より後肢の方に黄褐色のニス様の物質が塗られており、其の他にも點々と其の跡がのこつてゐるのは、全面に塗られてあつた事を意味してゐる。

(二)投槍(第一圖5) 忍根別貝塚出土なり。鯨骨にて作り長十四糎あり、二對の鐖を附し其の刄先は薄く鋭利にして、身肉に突入るに便にす。軸末は四面を削りて細くなし柄頭に嵌入する様になつてゐる。其の少しく上方に繋索を通す索孔が穿たれてゐる。これが使用法を考ふるに軸端細き部分を柄頭に、脱落を防ぐ程度に輕く嵌入し、繋索（矢繩の意）を繋孔に結び、目的物の身肉に投刺す時は、柄は自然に脱落し槍頭のみ遺る。而して鐖の働きに依り脱せんとするも脱するを得ざる装置である。斯くして繋索を手操り得物を引寄せ捕獲する。今日各地に於て行はれてゐる突漁(ツキンボ)は漁具構成原料の相違に依り装置使用法に多少の相異あれどもその目的より見れば此の具と同一のものと言ひ得るであらう。

(三)銛頭 銛は其の捕獲せんとする物の種類、使用法により形狀、構造に於て、種々の變化あるは古今を問はず同一である。獵獲物の大にして強力なるものには、大型の頑丈にして容易に破損せざるものを使用し、力弱く容易に捕獲し得るものは逸落を防ぐ程度のものにて足る。本島採集の銛頭は類品少く、構造複雑にして、他の石器時代遺跡より出づる銛頭に比し、進歩してゐる様に思はれる。大型銛頭は索孔無く、小型のものは、鏃の末端に近く横に列んで繋索を結ぶ二孔を有してゐる。然し使用法は同一と考へられる。鏃を附加して使用する銛頭が三ケある。内一ケは中部より破損してゐるが、大體他の二個と同一の使用法と想れる。以上の如き種類のものが九個ある故、之れを四種類に分ち説明する。

A型 甲乙二種に分つ

甲(第一圖6)カンケカラウス貝塚出土。銛端破損し、正確なる長さ不明なれども、破損部分二・五糎と假定すれば、十四・五糎あることになる。鏃の腹面は扁平にして背面は山形をなす。刄部は薄く鋭利にして鐖は深く切り込んである。體の断面は半圓形にして、尾端に近づくに從ひ、腹面を薄く削り取り尖らしてゐる。繋溝は深くして背面に輪溝を設け、柄頭に括り附けたる索の逸脱す

るを防ぐ様になし、尾端には小逆鈎を作つてゐる。頸部には緊索を結縛せる痕迹がある。

乙(第一圖7) 甲を發掘せし貝塚より採集せるものなり。長一五・八糎あり、鏃は細長く扁平なり。鏃の長さ九・五糎あり。體は鏃に比し短かく淺き莖溝を有し輸溝を缺く、尾端に小逆鈎あり。頸部に索を結縛せる痕跡あり。此の銛頭は銛と言ふよりも寧ろ槍に近き構造なり。

以上甲乙二種の銛は構造に於ても且つ使用法に於ても他の小型の銛に比較して非常な相違がある。即ち或る場合は柄に緊縛し槍として使用し、叉銛として使用する場合も索孔無き爲め、自身の力を弱めず、太き緊索を縛し・アザラシ、アシカ等の力强き動物を捕獲するに適してゐる。鏃の體に比して大なるは捕鯨船にて使用する投槍の如く「止どめ」を刺す時使用する爲めであらうとも考へられる。

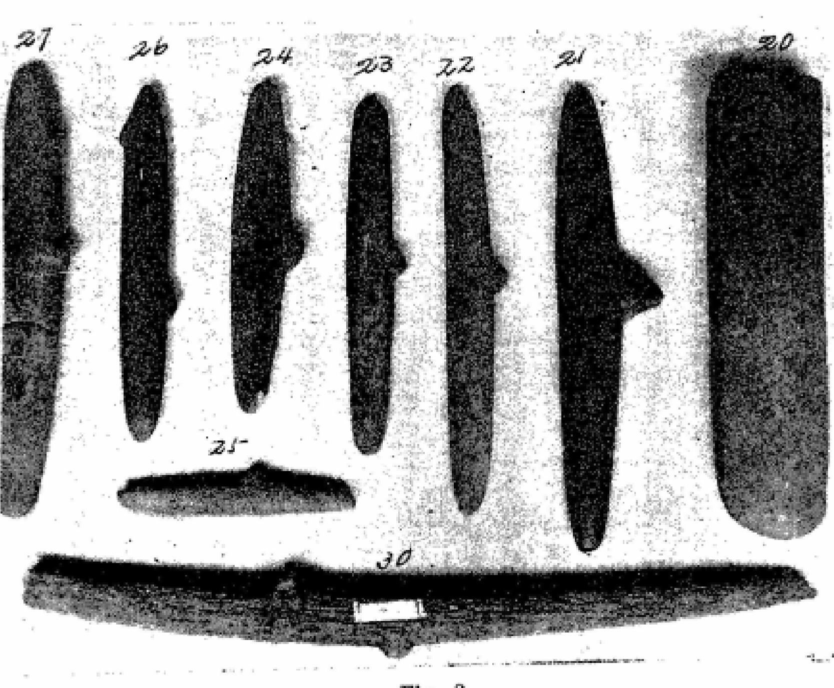


Fig 2

B型(第一圖8・9・10) 第一圖8・9は植別貝塚、同圖10は恩根別貝塚出土である。前者二個は長八・三糎あり。後者も大體同寸法である。圖8の鏃は稍々丸味を呈し、索孔は中央より斜に列んで二孔を穿つてゐる。索孔間を削りて凹みを作り、緊索の隆起を防ぐ樣になし、鏃は深く切り込んである。體は半圓筒形にして輸溝を設け、腹面には柄を當てるに適せる莖溝を作つてゐる。索孔より莖溝まで淺き溝を作り緊索の嵌るに都合よくしてある。この溝は他の二個には無い。尾端は薄く尖らしてある。圖10は大體同樣の構造なるも、尾鈎は第一圖8より鋭利で反りが無い。圖 9は鏃が扁平で刃部が鋭利になつてゐる。尾鈎

を割りて二分し、紋様が陰刻されてゐる。斯く多少の相違點はあれど共の原形は同樣で使用法も亦同法であると想はれる。

今まで發掘發表せられたる銛頭の殆んど全部は、體の中央に索孔を有してゐるのが普通であつて、斯くの如く鏃に索孔を有してゐる例は稀有である。如何なる理由に依つて斯く索孔を附したるかは大いに研究すべき問題である。これ等銛頭の構造、扁平細長なる故獵獲せんとするものゝ身肉に突き入る時は、深く刺り、索繩尖端に近くある爲め速かに横轉し、兩端支障して逸脫を防ぐ利ある事は明かな事である。

C型　鏃を附加して使用せるものである。第一圖11・12は植別貝塚出土、同圖13はカンケカラウス貝塚出土なり

鯨骨を扁平に切り尖端に背腹を兩分する稜を設けてある。明らかに鏃を挿入して使用せるものである。圖11・12は二對の鏃を有し軸の末端近く細長き索孔が穿たれてゐる。末端を柄に篏入して使用せしものであらう。長さ八・一糎（圖11）七・五糎（圖12）あり。圖13は體を缺損して居る故、共の構造明らかで無いが鏃の設け方が他の二個と異つてゐる。卽ち鏃の位置が左右各々異つており、第一鏃は右側に丈けあり左側は單に痕跡丈けある。第二鏃は左右位置を異にし、左側の鏃は中心より稍右によつた所から削り取られてゐる。

D型　二對の鏃を有する投槍型の銛頭（第一圖14）

第二の鏃の一方を殘し體は缺損してゐるがこれと同形のもの二個を見た。それに依り復原して見る。扁平なる骨片を削りて二對の鏃を作り、中心は背腹共稜がある。第二の鏃の基部より一對の細長き索孔と思はるゝ孔を穿つてゐる。類品に依つて推定するに軸は細長く柄に固定して使用せしものと思はれる。

（四）骨斧（第二圖20）頭部破損して長さ不明なるも殘存部のみにて一六・七糎あり。鯨骨をもつて作り、刄部は兩面より磨き鋭利に出來てゐる。頭部は刄部に比し巾廣くなつてゐる。側面は削り取つたまゝにて凸凹があり非常に粗雜である。植別貝塚出土なり。

（五）骨鏃　二種類に分つ

A型　有柄式（第一圖15・16・17）　共の形式鐵鏃に酷似してゐる。長き柄を有し、先端は鋭利に尖らしてある。圖15はトマカラウス貝塚出土にして、總長一三・五糎鏃の長さ五糎ある。刄部は鋭利にして鐵鏃の如く、柄の斷面は圓形にして末端より二・八糎の所に突起を作り矢柄に支へる樣にしてある。圖16は骨片を斷面圓く作り、先端を尖らし右側を少しくふくらして鏃と柄との境としてゐる。

柄の末端は背腹を削り矢柄に挾むに便てゐる。長九・四糎あり。植別貝塚出土なり。圖17は柄の末端缺損し長さ不明なるも殘部のみにて六・五糎あり。鏃は三角形をなし、全體扁平にして双部は鋭からず植別貝塚出土なり。

B型　無柄式（第一圖18・19）　鏃の形をなし矢柄に挾みて使用せしものなり。圖18は年萌より採集せるものにして長五・六糎あり雁股の部分は右左長さを異にしてゐる。圖19は留別出土にして長さ二・三糎あり。

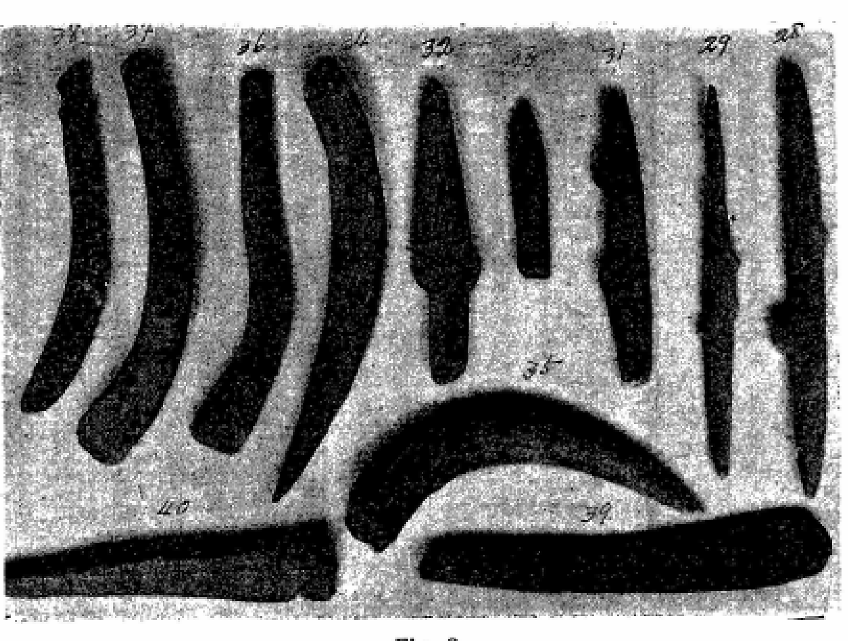


Fig　3

（六）矠（ヤス）の如くに使用せしもの（第二圖第三圖21—33）　漁業に從事せる人以外にはこの呼稱を知らぬ人が多いと思ふので、矠とは如何なるものか、又如何に使用するものなるかに付き少しく説明しよふと思ふ。矠とは尖頭鋭利なる鐵鉾に木製若しくは竹製の柄を付け其の柄を把持して水中の魚貝類を突き捕るの具である。其の鐵鉾は單一のものあり、兩條のものあり、數條のものあり、又其の鉾の三條以上のものは並列せるあり、鼎足狀を爲せるあり、而して之れを使用するに船上よりするあり、水中を縦行して突くあり、或は水中に潜入して用ゐるあり、其の場所と捕へらんと欲する所のものに應じて種々の方法を用ゐる。圖21より31までのものは矠として使用せしものと想はれる。右に説明せる如く鐵製と骨製の差はあれど一條或は數條柄に結縛して用ひたものであらう。圖示せる十三個を形式より大別して六種に分つ。第二圖21—25までは同形式のもので、兩端を尖らせ中央右側に三角形の瘤狀隆起を作り、背腹面は稍々平にしてゐる。長一七・四糎（圖21）一六・三糎（圖22）一三・六糎（圖23）一二・六糎（圖24）

七・九糎(圖25)あり。圖21は恩根別貝塚圖22・24・25は植別貝塚圖23はカンケカラウス貝塚出土なり。

圖26・27は尖端稍々扁平にして鋭利に尖らし、淺き鈎を有してゐる。他の構造前述のものと同樣なり。長は一三・五糎、(圖26)一七・二糎(圖27)あり。圖26植別貝塚、圖27砂山貝塚出土なり。

第三圖28・29は左右兩側に相互に突起を有し他のものに比し細く尖端は鋭利である。圖28は砂山貝塚出土にして、長一七糎あり。圖29は植別貝塚出土にして長一五糎あり。

第二圖30は植別貝塚出土にして兩端欠損せるも長二五糎あり、體は彎曲し突起は相互に九十度の角をなして付いてゐる。第三圖31は兩端缺損してゐるが左側を三糎程削り溝を作り結縛に便じてゐる。植別貝塚出土なり。

圖32はカンケカラウス貝塚出土にして、長十二糎あり、右側に突起を作り末端を削り柄に嵌入する樣にしてゐる。

圖33はカンケカラウス出土にして鏃の如き形をなし末端に徑〇・四糎程の孔を穿つてゐる。製法粗雜にして鏃の如く使用せしものなるやも知れぬが現今使用の錨に同種のものある故錨の種に入れたのである。

(七)觜狀の骨器(第三圖34・35) 熊の肋骨を裁り、外側を削りて先端を尖らしてゐる。使用法明らかならざるも、錨の如くに使用せしにあらざるかと想はる。長一七糎(圖34)一三・五糎(圖35)あり。植別貝塚出土なり。

(八)くの字形骨器(第三圖36・37・38) くの字形に彎曲し肋骨及び鯨骨を削りて作つたもので使用法明らかで無い。一端に渠を作り、縛るか或は紐を結ぶ樣にしてあり、他端は凹所を作つてゐる。圖36圖37は植別貝塚出土にして長一四・八糎(圖36)一五・五糎(圖37)あり。圖38は長一三・八糎あり、先端は薄く他の二個に比し、丸味をおびてゐる。恩根別貝塚出土なり。

(九)磯鑿式骨器(第三圖39・40) 岩石に附着せる貝類を剝ぎ採る際用ふる磯鑿に類似しおる故之の名を附せるなり。39圖は長一四・二糎あり扁平なる骨片を箆狀に作りたるものにして先端は薄く擦つてゐる。圖40は長一一・七糎あり。三角形の骨片の端を擦り刄を附しており使用の跡判然と付てゐる。植別貝塚出土なり。

(十)管狀骨器(第四圖41・42) 鳥の肢骨の兩端を切り管狀になせるものなり。各貝塚より多數出る。植別貝塚出土なり。

(十一)物を釣るすに用ひたと思はるゝ骨器(第四圖43) 體は彎曲し兩端に輪溝を作つてゐる。殊に上下は深く削り取つてある。斷面楕圓形で溝の部分に紐を結び付け物を掛けるか或は釣るしかしたものであらう。長九・三糎あり。植別貝塚の出土なり。

(十二)使用不明なる骨器(第四圖44・45)　圖44は長方形なる扁平の骨板の兩端に横に細長き凸起を作り兩側の角は圓くとり、內方に彎曲してゐる。長九・六糎巾三糎あり。圖45は斷面歪五角形をなし、長さ九・五糎あり。兩側面は軸に沿ふて、幾分凹んでゐる。植別貝塚出土なり。

(十三)U字形骨器(第四圖46・47・48)　のU字形をなし釣り下げるに用ひたものであらう。完全なるものが無いので比較的形狀の明らかなるものを圖示せり。圖46は一邊を缺損せるも他の一邊と同形のものが付いてゐた事は、圖48に依つても明らかなることである。47圖は兩邊梯形をなして居り、圖48は兩邊平行をなしてゐる。斯く三ケ共多少形狀相異してゐるが、使用法は同樣である。圖46・47は植別貝塚出土にして圖48は恩根別貝塚出土なり。



Fig 4

(十四)骨針(圖第四49・50)　針の形をなし先端は鋭く尖つてゐる。圖49は孔のある部分欠損せるも大形の骨針と想はれる。鳥の肢骨を割り先端を尖らしてゐる。函館圖書館所藏のインディアン使用のものと殆んど同形である。長一一・六糎ある。植別貝塚出土なり。圖50は鳥の翼骨の一端を尖らし他端に近く孔を穿つてゐる。長一六・六糎あり。カンケカラウス貝塚の出土なり。

(十五)妻揚子の如く使用せしと想はるゝ骨器(第四圖51・54)　卷貝類の肉を剜し取るに使用せるものと想はれる骨器が多數出る。圖示せるものは共の一例にして、鳥骨を以て作り、一端を尖らしてゐる。長さに長短あれど大體六糎より八糎位なり。

結　語

以上擇捉東海岸より發見せる骨牙器の重なるものゝ記述を終つたが、其の構造の推移、使用の方法等に付いて明らかにすることが出來ぬことは甚だ殘念なことである。殊に北海道本土及び本州諸貝塚より出土する骨牙器との關係に付いては、比較研究する材料にとぼしく、僅かに書籍雜誌に依つて知るのみである故、遺物の比較に甚だ不便を感じてゐる。幸ひ本式骨牙器例御存知の方あらば御指導を願ひたい。

所謂有角石器餘韻

服部清五郎

「有角石斧」なる名稱は中谷治宇二郎氏の命名によるものなりと云ひ、森本六爾氏はそれに命名するに「有角式石劍」なるものを以てした。此の二種の命名いずれが妥當であるかは私淺學徒のよく論及し盡し得べき問題でない。然しながら、「有角石斧」と云ひ「有角式石劍」といひ、その孰れもがその所屬形式を豫め假定しての名命によるものにして、その所屬形式如何、それの考古學的位置如何、又それの文化的價値は如何も審議不詳として學界に投げかけて置きながら、又假令獨り自認せりとしてもその道の是認を未だにして置きながら、かゝる獨斷的命名法は苟くも學徒としての手段としては決して相當しいものでなからうと思ふ。斯く云へばとて、そを論議するとしても、そは何處までも理論として止まり、又如何に相當はしい稱呼を附與せんとしても、そは何處までも現代人の文化的頭腦による憶斷、推量的名命にして、決して該石器そのものゝ持つた名稱ではない。然る故に、如何なる名稱もが現代人の假りに與へた名稱に終るなれば、甲と云はうと乙と呼ぼうと、又丙と稱へやうと、そはその人々の趣好に任ねて何等異議をさしはさむ理由はない譯であらうが、私は素人的にその外形狀からごくあつさりと「有角石器」なる稱呼を踏襲することゝする。そは恰もかの遼の太祖耶律阿保機を吾々日本人が普通ヤリツアホキと呼ぶ様なもので、支那の現代讀みにすればエルーアポチ或はエルーアパォチと讀めるからとて、支那人であればそれでよろしからうが、日本人としては決して相當はしいものでない。太祖自らの稱呼にあらざればこそかゝる理窟も出る譯にして、該石器の持つ名稱亦然りであらう。

去る昭和五年一月、森本六爾氏は「考古學」誌上に「關東有角石器の考古學的位置」なる十數頁に亙る大論文を掲げて、有角石器に關する從來の一切の諸問題を淸算せられて以來、該石器の新資料にも接せず、又それに對する新研究も寡聞それを聞かず。某先生の談に由れば森本氏の示された十例の外に猶ほ數種數へられるとのことである。

私は素より何等專門學を有するものでないが、この種の石器について森本氏から先年注意を促がされたことがあつたので、機會ある毎に多少の注意を拂つてゐた。昨年十一月頃と思ふ。

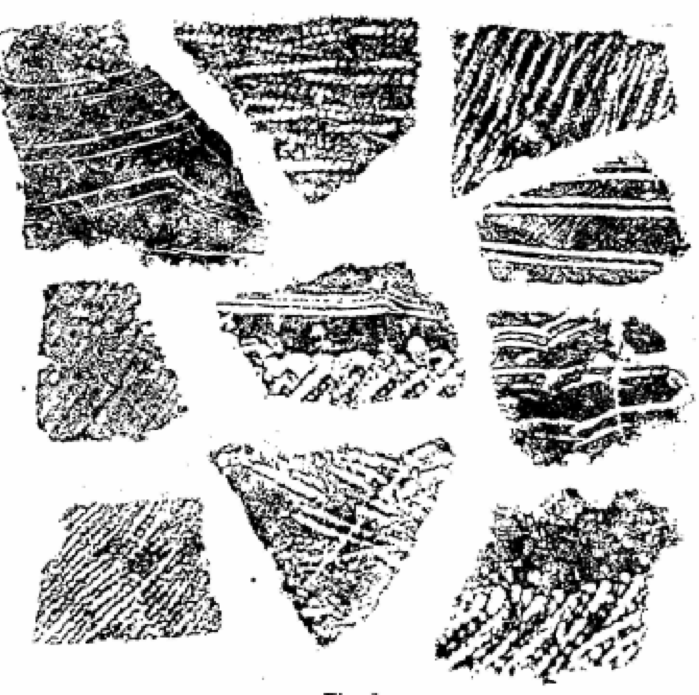


Fig. 1

或る見學團の一行に參加して常陸國分寺址を再訪した時に、同地の篤學者手塚正太郎翁の厚意によつて翁愛藏の古瓦及土器石器類を見覽させ貰つた。然るに圖らずもその石器類中にかねてから注意してゐた有角石器一個と石劍（何れも缺損）のあることを知り、古瓦の拓本を終つてから大體のスケッチをして歸京した。歸つてから旅行記を整理してゐる中にスケッチに不備の點あるを發見し、且つは物足りなくも感じたので、右二個の石器の出土遺蹟の詳細を問合せ旁々現物の拜借方を依頼せしところ、此の變り者の突飛なる申出でに拘らず早速に承諾し下され、三日程して手紙と相前後して届けてくれた。よつて早速に實物大の寫眞を撮り、現物を返しとゞけ、翁への謝辭をかねて更めて報告文を起草しかけたのであつたが、猶ほ出土遺蹟について不安の點があるので、實地調査を遂げて後のことにすべく豫定を變更し、其の機會をねらつてゐたのであつたが、翁と豫約した一月は雜事の爲め遂にお流れになり、去る四月中旬漸くにして寸暇を得たので久々に翁の謦咳に接し、種々高見を拜聽すべく訪れしところ、哀しい哉、翁にはその二週間程前の四月五日遂に病歿せしとの事、萬事は窮せり。されどこの貴重？なる可き新資料をその儘にすべきに非ずと感じ、令孫の案内にて墓參を濟ませし後、該石器の貼紙を唯一の頼りとなし御家中の方から大體の地理を聽き取つて早速その遺蹟を調査すべく向つたのであつた。これを闡明することは翁の靈意にも叶ひ、又生前、石岡調査記を依頼されて遂に果

てざりし申し訛びの一端ともなるであらう、本論と直接關係なき事どもを長々と書き連ねて貴重なる紙面を費せしことを御詑びして置きたい。

此の有角石器出土遺蹟は常陸新治郡田餘村高崎字上高崎台の畑地にあり、上高崎台の畑地と云ふも相當の廣面積を有するものなれば翁亡き後はその出土地點が何處と適確とは分らねど、同地一帯に亙りて薄手の繩紋式土器の分布を見、間々厚手のものをも混じてゐる。散布土器殊に薄手のものは質緻密にして雲母の小粒を含み色は赤褐色のものと暗黒色のものとの二種に大別し得。第一圖は即ちその紋様の拓影である。該有角石器は不幸にして頭部を缺きその全形を知ることを得ないが、左右棘狀突起の工合から見て、森本氏が「考古學」第一卷第一號の口繪に示された三個の有角石器の中、第二の下總古作貝塚出土品に類似を思はせられ、石質は既出土品と同樣閃綠岩より成り、柄部は左右少しく不均齊にして、兩腹部のほゞ中央を棘狀突起の邊より刃部に向つて鎬が直走してゐる。以上は略圖（第三圖a）の拙劣と寫眞（圖版第九）には現れざるものとを補ふための解說である。その大きさ形狀等については寫眞及略圖によつて知られ度い。此處に面白いのは同遺蹟から第參圖cdの如き磨製石斧を出したことである。何れも實地調査の際表面採集によつて得たものであるが、その一は第參圖cの如き形狀大きを有し、扁平片刃石斧にして、石質は黒灰地に黒斑點を有する凝塊岩質のもので、霞ケ浦沿岸の出土石器には餘り見受けぬものである。第三圖dに示せるものは破損の度甚だしく一見打製石斧の如き感あるも、これを熟視するときは諸所に磨きをかけた面

Fig. 2　a繩紋式土器　b祝部土器

a　b　c　n

0　5　10cm

Fig. 3

のありて矢張り磨石製斧なることが首肯出來る。石質は此の地方のものに普通に見る暗灰色の片岩で、通常イハキ石と呼んでゐるもので、兩双式である。

扨て以上を總括して見て、吾人は果して如何なることが推察し得やうか。そこに演譯し得るものはすべて讀者の意に任せよう。ただこの遺蹟の他の例と異る點のみを拾ひ上げて見るならば、森本氏のあげられた十例が或は彌生式遺蹟と云ひ、或は貝塚といひ、或は又單獨出土といふに對し、此の遺蹟が珍らしくも繩紋式遺蹟であることが第一に舉げられる可き特異點であらう。次に舉げられる可きは其の遺蹟から磨石斧、特に一個の片双石斧を出したることで、扁平片双石斧を出したる例は中谷治宇二郎氏の報ぜられた東大人類學敎室倉庫跡の例に見られるが、しかしそは彌生式遺跡であるといふ。森本氏はかつて「考古學」誌上に有角石器を細論して「旣出文献を清算」し、その肯定部分として八ケ條を舉げ、その第四に「しかし殆ど總べてが彌生式遺跡の臭味を持つか、若しくは純然たる彌生式遺跡、又は單獨出土のものである」と斷じ、又その第六に於いては「伴出品や遺跡からして、前の有角石器も彌生式系遺物と見得る可能性が多い」と此言を補つてゐる。然し氏はその論文の最後に自ら「有角式石劍一覽表」といふを掲出し、十例を舉げ、その夫々の遺蹟について二例を不明とし、他の八例の中彌生式遺蹟三・單獨出土三・貝塚二を明記してゐるに拘らず、單獨出土はその何れにも屬し得る可能性ある灰色と見てしばらく問題外とするも、八例の中二例を有する貝塚出土といふを度外視して、さきの論斷あるはそも何故で

あらうか。其處には堂々四千字に垂んとする卓論介在することであるが、そはこの有角石器を以て平形銅劍の變形模造にまで引きずつて行くに役立ちこそすれ、貝塚出土の八對二例を削消するの何等の役割りを演じないであらう。加ふるに今この繩紋式遺蹟の一例を新たに附加するに到りて、氏の貝塚出土例抹殺は、彌々有角石器出土遺蹟を以て青銅器時代遺蹟とかいふものに引きつけんとする英斷と見られもするであらう。人或は此の上高崎の例を以て繩紋及び彌生式兩遺蹟を連結させる一要鎖であると轉用するかも知れないが、要するに後はその人に委ねる。

圖版第九2は同じく手塚正太郎翁の愛藏せし石劍の一部である。第三圖bはその略圖にして、出土地は茨城縣新治郡石岡町字新池臺の畑地と云ふ。閃綠岩質の石材より成り、森本氏が變形鐵劍式石劍とか名づけてゐるのは卽ちこれであらう、私の調べたところではその遺蹟から第二圖aの如き繩紋土器を出し、石皿の破片一個を拾得した。この遺蹟に就いては以上を以て止める。

私達素人の書いた拙論が、識者の一助ともならば望外である。

武藏國野川石器時代遺跡出土の遺物

池　上　啓　介

本會々員伊丹信太郎氏の御好意に依り、今回表記の遺跡出土の土器片數千點、打製石斧數百點及び若干の磨製石斧等を史前學研究所に寄贈せられたが、武藏國橘樹郡宮前（ミヤサキ）村大字野川（ノガハ）所在の野川遺跡に關しては、大場磐雄氏が既に考古學雜誌第十三卷第十號・第十一號に亙つて、所謂厚手式土器の遺跡として詳細に調査せられてゐるから、こゝには該遺物に就いて簡單な記述を試みることゝする。

先づ土器片の紋樣及び形態等に基いて分類を行へば、次の如く大體五種類に分類せられる。

第一類

土質は粗で小砂を混じ所謂厚手である。色は黑褐色又は赭褐色を呈す。紋樣は口邊部に近く胴體部にかけて、簡單な過卷狀をなせる雄健なる隆起曲線紋を基調として發達し、この曲線紋の畫く楕圓・弧・波狀等の空間に繩席紋又は櫛目紋或は彫紋等

を以つて充塡した複雜な紋樣帶をなし、而して底部にかけて繩帶紋が甚しく發達してゐる。把手は極めて雄大で複雜なものが多い。この種のものは口邊部が發達し口徑長く胴部は内曲して

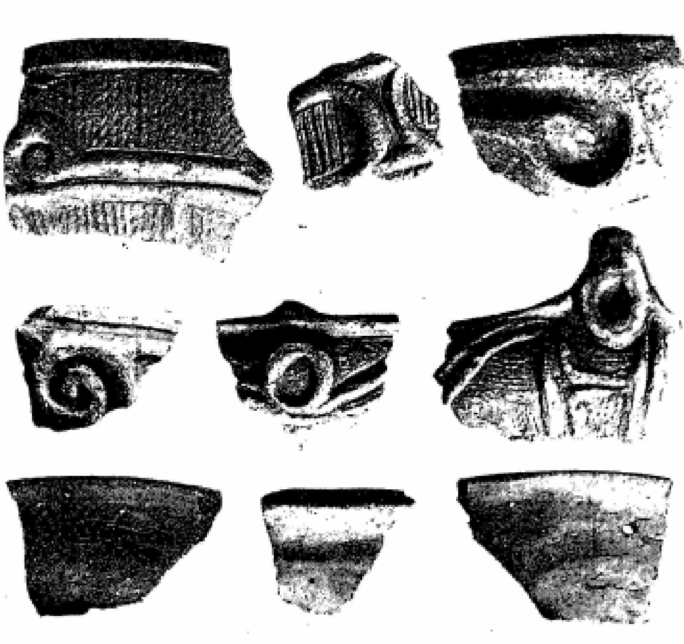


Fig. 1　第一類及び第二類土器片

狭く、長く巧みに器の安定と外觀を整へた器形が多い。土器片はこの類に屬するものが最も多量である。（第一圖上・中段參照）

第二類

土質は小砂を混じよく燒成せられたもの丶如く、比較的密であり且つ堅牢である。色調は赭褐色を呈す。紋樣は何れの部分にも見られない。口邊部は特に幅廣く且つ口邊部上面は平かであり、口邊部内外側面に朱が附された痕跡を往々見受けられる、



Fig. 2　第三類土器片

この種の土器の器形は大體口徑の長い胴部の短い淺鉢樣のものが多い。この類に屬する土器片の量は第一類に次いで多量である。（第一圖下段參照）

第三類

土質粗く雲母末を比較的多量に混じ、色調は黒褐色又は赭褐

色を呈す。紋様は口邊部から底部の近くに及んで略全體的に發達す。紋様の基調とする隆起線紋の一側又は兩側及び隆起線上に箆様のもので施紋した爪形紋を特徴とし、更に爪形紋を點列

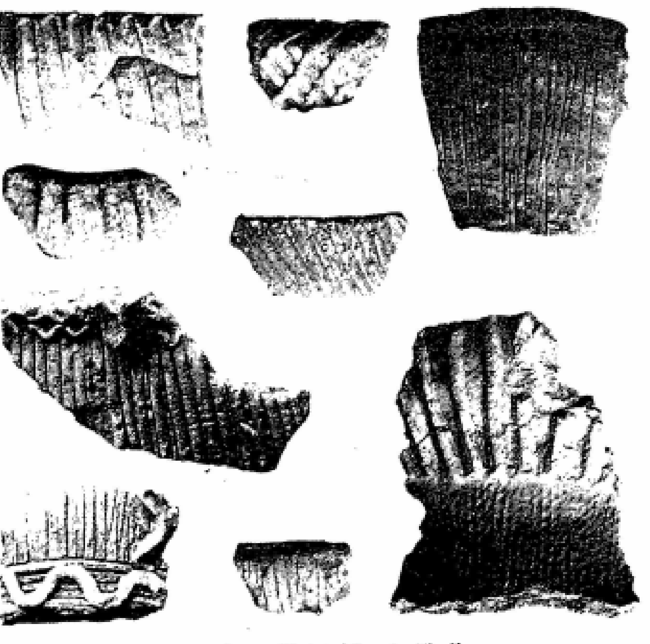


Fig. 3　第四類 土器片

した充塡紋からなり、縄蓆紋は殆ど見られない。器形は今回の土器片で推測せられ得るもの がない。土器片の量は中位である。（第二圖參照）

第四類

土質は粗で赭褐色又は黄灰色を呈す。この種の器形は外曲しつゝ開いた口邊部を有し、頸部は甚しく縊れ、胴部は比較的に膨らみをもつたものである。紋様は口邊部の最上部から直ちに頸部にかけて平行せる隆起線紋が相接して斜走又は縦走せしめ

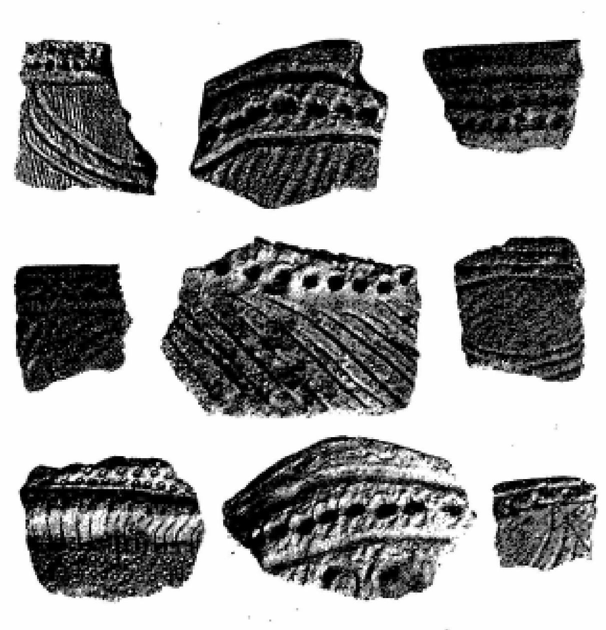


Fig. 4　第五類土器片

てゐる。縊れの部分に紐状をなせる隆起線が施紋せられてゐる。この第四類に屬する土器片は少量である。（第三圖參照）

第五類

土質は粗で色調は大體黄褐色を呈し、比較的薄き土器片であ

る。紋樣は口緣部に沿つて可成り深く直線紋が刻まれ更にこれに沿つて圓形の刺突紋が一列乃至二列横隊に點列す。更に下方に向つた大きな孤線が連續して刻まれた沈線紋によつて意匠せられてゐる。而して繩席紋を有するもの或は櫛齒狀の器具で施紋せられたものと考へられる所の平行斜線又は直線が胴體部から底部にかけて發達する。

この種の器形は大體胴部に膨みをもつた深鉢狀をなしたものが多い。本類に屬する土器量は第四類に次いで少量である。（第四圖參照）

猶この他諸磯式樣の土器小破片及び以上の分類外に屬するものが散點存在した。次に石製品に就いて述べやう。

打製石斧

打製石斧數百點の中、完形品一六七點に就いて形態分類を行ふと大略次の圖式の如くである。

即ち短冊狀をなしたものが多い。猶數多の破片に於ても、此器形のものが大半を占めてゐる。大きさは何れも稍一定して長さ大略十二糎、幅五糎内外のものが多く、特別に大きなものはない。石質は殆ど砂岩質で、製作は甚だ粗であり自然の石片に簡單な加工を行つたものが多い。

磨製石斧

磨製石斧の完形品は僅に二點で而も六糎に四糎の小形のものである。破片は全部で廿五點で、中二個は撥形で方刄をなしたもの、他は蛤刄で全體丸味を帶びた可成りの重量あるもので砂岩質のものが多い。

型	式	量數
短冊型		107
下廣型		36
撥型		21
葫型		3

石斧型式分類

其他

石鏃は黒曜石製無柄のもの十個、有柄のもの一個、サヌカイト質の有柄のもの一個を擧げられる。又・石皿の破片・凹石・石錘等が若干ある。

以上は遺物の主なるものである。將來該遺蹟に就いて實地調査の機會を得て更に伊丹氏の好意に報ひ度いと思ふ。

武藏國菊名宮谷貝塚調査豫報

松下胤信

本貝塚は横濱地方に於ける纖維及び諸磯系統の遺跡として、興味あるものと思考せられるが故に不敢取これを豫報したい。敍述に際して幾多の助力と援助を惜まれなかつた學友柴田敏夫・桑山龍進・黑田善次三氏の厚意を記し、眞心からの謝意を表したい。

省線（東海道本線）及び東横電鐵菊名驛の東北方に近接して淨土宗蓮勝寺の存する一丘陵を見る。本貝塚の所在地は横濱市神奈川區菊名町字宮谷にして、即ち蓮勝寺の北側に深く侵蝕する一支谷の南緣臺地に築積されたものであつて前面に鶴見川の清流を望む形勝の位置を占め、近く篠原・菊名二貝塚と相對し、他方鶴見川貝塚群の折本・吉田・高田・新羽・綱島の諸貝塚と指呼の中に存在して居る。

試堀の作業は貝塚南側の部分を選定して掘鑿を進めたのであるが、其結果は諸磯式竝びに纖維土器の共存を確認する事が出來た。然し兩者の層位的關係は斯如き不完全なる小掘にては到底觀取せられ得ないので後の調査に俟ちたいと思ふ。以下順を追ふて、遺物の記載を試みる事にする。

貝塚を構成する貝類は、アカニシ・ハマグリ・ツメタガヒ・オキシジミ・カガミガヒ・オホノガヒ・ハイガヒ・サルボウ・シホフキ・シジミ等より成り、ハイガヒの埋藏量著大である。其他鹿骨及び鳥骨片等を指摘する事が出來る。人爲遺物中、石器は打石斧らしきものがあり、貝輪未製品と覺しきものには、ハマグリ貝使用のそれがある。土器は色調黑色・黑褐色乃至赤褐色で燒作頗る軟弱從つて燒成不良である。

土器形態は口緣部・腹部・底部片等よりして口部に於いては上斜直口・內曲直口及び外曲等の稍大形の甕形品を推想せしむる。底部は平底・上げ底・圓底を存し時に尖底の存在を檢出する事が出來る。紋樣は種々の分子より構成さるゝも、大體次示の如き要素に其本源を求むべきであらう。即ち竹管紋・貝殼押形紋・曲直紋・點列紋・連點紋・波狀紋・同心圓紋・弧紋・平行線紋・重方形紋・縄紋等であつて、沈線を主とし屢々纖維の痕跡と共に本貝塚の特質は、前述尖底を有

する事、並びに土器の内外面及び底部表裏に、ハイガヒ殼頂其他の部分を利用して壓痕を附し紋様的効果を求めんとする傾向がある。かゝる貝殼押形紋出土量は他の諸紋様に比し極めて著大であり、更にそれ自身の有する價値性と關聯し、軈ては前述諸因素と相俟つて興味ある意義を本貝塚の文化的編年的問題に附與するものと考へる。（昭和六・三・二〇）

佛領印度支那の石器時代（第一回）

――マンスイ氏、ソムロンセンとロングプラオの史前遺蹟――

H.Mansuy; Stations Préhistoriques de Somlong-Seng et de Longprao. 1920.

アグノーエル述

この研究は日佛會館のアグノーエル氏（M. Haguenauer.）の厚意により在京有志者が集まつて同氏より講述を受けたものであつて、今まであまりに知られなかつた佛領印度支那地方に對し研究の資料を得た事は、深く同氏に感謝するところであります。この同地方史前狀態に就てはおそらく本邦の學界に於ても未だ多く知られざるものがあると信じこの講述を發表する次第であります。特に貴重な同地方の文獻を我々のために蒐集せられた努力に對しても重れて敬意を表し度いと存じます。（大山柏）

ソムロンセンの遺蹟

Somrong-Seng の遺蹟はカムボヂヤ Kompong-Leng 地方に存在して居つて Tonle-Sap 湖の附近 Strung-Kinit 河の右岸に位して居る。この附近は年々メーコン河の沖積によつて埋められて居つて、現在はこの遺蹟より Tonle-Sap 湖までその距離三十粁を數へる。Somrong-Seng 遺蹟は歪楕圓形の丘陵の上に在つて、この丘陵は高さ五米、長徑（南北）三五〇米、短徑（東西）一八〇――二〇〇米を有し、その中央に塔（Pagode）が存在してゐる。この部落は四十戸餘の漁村であつて水上住居（Plotis）を作つて居つて、現在の住居は水面と床との間が八米あり、人家は多くは丘陵の北側に散在して居る。塔の附近は椰子・竹・檳榔子等の大植物が繁茂し、その西南には雜草が多繁茂してゐる。この地方は一帶に土地が低濕であつて洪水がしば〳〵襲來する。玆では檳榔子と共に嚙み或は壁を作るために貝塚の貝を採つて石灰を製造してゐるが、その動機や起源の年代等は知り得ない。その石灰は主としてシヾミ（Corbicula）と（Paludina）から作つて Kompong Chnang, Pnom-Penh に於て賣捌かれてゐる。貝を燒く竈は底徑一、五〇米、高さ三米の圓錐形の煉瓦製の物であつて、その煉瓦の間は間隙があつて空氣が流入する樣になつてゐる。この貝を採集するために土民は深さ一、五〇米――五米の底の方が大きい穴を作る、而してこの貝殼は土砂と混じてゐるためにそれを水で洗つて土を去り、干燥して而して後燒くのである。この工事が古くから行はれてゐるために、この丘陵の傾斜面は極めて不規則に凹凸が出

來てゐる。

この遺蹟は一八六七年に Roques 氏によつて始めて發見されて、その後 Moura と云ふ海軍中佐は發掘はしなかつたがその二三の貝類を Toulouse の自然科學博物館に寄贈したのでそれを見た Noulet と云ふ醫師がその事を發表した。一八七九年と一八八〇年に Corre と云ふ海軍々醫がこれを踏査してその日記 "Excursions et reconnaissances" にこの遺蹟の事を發表し、一八八二年には鑛山技師の Fuchs 氏がこの遺蹟に關して、その古さをメーコン河の沖積を數へる事によつて決定せんとした論文を帝國學士院に發表してゐる。次いで一八八七年とその翌年には印度支那研究會委員の Gamme と云ふ人が印度支那雜誌 (Revue Indo-Chinoises) 一八九三年第八號にこの遺蹟の事を記し、一八九七年には發掘を開始してその遺物を全部印度支那研究會に送つたが、その發掘の事に關しては論文を出してゐない。

著者は今回この遺蹟の表面に未發掘の部分を發見したが、玆に於てはその有機土は黑色又は濃灰色を呈する極めて輕い物であつてその厚さ一米に及びその中に多數の現在の土器とは異つた土器の破片を有してゐる。この層の下は粘土と石灰の混合した混凝土狀の層であつて、それは灰色を呈し波狀になり時々切斷してゐる。その中には所々にシヾミ貝、人骨及び他の動物等の骨を混有して居つてその厚さは薄い。玆に面白いのは大雨の季節には河水がその量を增してその水面が恰度この層の所にまで及ぶ事があつて、この事實より、この層は水がその中に溶解して有して居つて氾濫時にこの層の附近に殘して行つた炭酸石灰 (carbonate accide de chaux) が、土の中を透して浸入した空氣の作用によつて炭酸性を消失して石灰分となり、それが永年の間に沈積して出來たものであることを知るのである。

その下の層は硅土 (argilosiceuse) であつて輕石狀を呈し、色は赤味を帶びてゐる。厚さは四、五〇米。この硅土質の層は丘陵の高所にも亦低所にも存在して居つて、共にその中にシヾミ貝多く、時々それ等の貝は塊まつて五〇糎立方位の大さに及びその附近には新石器時代の土器・石器・獸骨が最も多い。この塊狀の貝は當時の人が食べて捨てたものと考へられる。この層の中には爐の跡が所々に存在するが、しかし歐洲に於けるが如き明瞭な物ではなくその限界は不分明であつて、灰は爐の外にまで散ばつてゐる。又燒けた石の存在によつてもこの爐の存在は推知し得るがしかしなほそれでも不明瞭であつて、その中心の如きは全く明かではない。斯の如き狀態は全く雨量の增大に伴ふ洪水の結果であつて、これは骨の場合に於ても同樣であつて人骨等も保存惡く方々に小片となつて散在してゐる。一般にこの層はその土質に浸透性を有して居つて、上部程極く下に及

ぶ程頂くなり、下部は貝の混有量多くなつて幾分ローム性を帶びてゐる。最も層の厚い部分は六米程である。

著者は發掘を二ケ所に於て行つたが二ケ所共その底に於ては水が湧出した。水の湧出した深さは共に五米七〇糎であつたが、この深さは河水の水面とは合致しない。この不思議にも思へる理由は、この層の下に一の水を浸透させない泥土層が存在してゐるかであつて、この泥土層はこれを精しく點檢するにその中よりは遺物を少しも出さない。この事實は非常に大切な事實であると云はなければならない。前述した Corre 氏が一八八〇年に調査したのはその一月廿四日であつて丁度この頃は未だ河水の水面が高い時であつたから、深さ三米にして水の湧出を見たのでそれ以下には遺物なしと考へたのは全く明かな誤謬である。又一八八二年 Fuchs 氏がこの遺蹟の年代について論文を發表してゐるが、同氏は全くこの遺蹟を實査したのではなく、先のコール氏の日記の記載によつたものであるため、今述べた如くこのコール氏の研究は明かに誤謬である限りこの後者フックス氏の所説も亦正しい物ではあり得ないのである。著者は今回の發掘に於てこの遺蹟の年代は今までの諸説よりも新らしい物であることを發見した。先のフックス氏の結論はこの遺蹟の年代は湖の周圍に丘が出來て限界され、それにこの小流が一緒になつた時であらうと云ふのであつた。これに對し著者は約四

〇〇立方米の廣汎な範圍の發掘を精密に行つた結果、次の如き事實を知り得、それによつて先の諸說には反對するものである。卽丘陵はその如何なる部分に於てもこの層は攪亂されて居つて、人骨の如き、その最も强堅である可き下顎骨に於てすら破損して居つた位であつて、他の六十本近くも發見された長い骨等一として完全な物は存しなかつた。これ等の骨が完全に遺存しなかつたのは決してその破損が人爲的に恰も他の動物の骨の場合に於てその髓を取る場合の如きものではなくて自然に破損したものであることを知り得るのである。又木炭が多數に出土したがそれ等も集合せずに粉狀をなして散ばつて居り、土器の如きも細片は數千箇も出土したのに未だ完全な物は僅かに三箇より出てゐない等の事實は此等が洪水の作用によつて出來たものであることを示すものであり、しかもその洪水はすでにこの貝塚の出來た時に始まつて居るものに相異ないのである。石斧に於ても、Angkor 寺院附近の同性質の層より出土した砂岩質 (grès feldspathique) の物十箇位のうち、その二箇は明かにその角に洪水による浸蝕の痕跡を有して居つて、これによつてもこの遺蹟は洪水の始まつた以後に出來たものであることを結論することが出來るのである。今一の證據は、この遺蹟の貝や他の動物の骨の中には海產の物がほとんどないのであつて、假りに海產の貝があつても決して食用に供したものではなくて、例

へばイモガヒ(conus)の如くその底を美くしく磨いて中央に孔を開けて裝飾品とし、寳貝(cyprea)の如くその背を磨り減らして腹の部分だけを頸飾りとし、又 Tridacna や Hippopus の如く帶として用ひられた物等の例の如く、皆遠來の珍品として寳物の如く見做されたもの丶如くである。魚骨も多數に出土したが皆河の物である。すなはち著者は以上の如き諸論據によつて本遺蹟を、この附近が海から可成り遠く距つた時代、すなはちメーコン河とトンレサップ湖とが合湍した後の物であらうと結論するのである。

著者以外の人はあるひはこの丘陵の層が河の泥土とその性質異るが故に丘陵は河の泥土ではないと云ふかも知れないが、しかしこれは兩者が本來的に異つてゐるのではなくして、單に丘陵上の物は化學的の變化を受けて全く異つた如くに見えるに過ぎないのである。

本遺蹟の廣さは決して廣い物ではなくてその傾斜は可成り急であつて、一五——三〇度を算へる。この傾斜の急な理由は、毎年洪水の前には多數の雨が降つて、その雨が强いために傾斜の面に在るその一年間の軟かい土は雨に洗ひ取られて落ちるためである。先に述べたフック氏によれば、メーコン河は一ケ年に百萬立方米の泥土を運般するから今のメーコン河のこのデルタの表面積七千萬平方米が當時より五十米沈積したものとして、三十五億立方米のこの沈積に丁度三千六百年を要するものである。故にその當時の河口はより北方であらねばならない。すなはちこの遺蹟の年代はこのデルタの三千六百年ではなくしてその半分か三分ノ一位の年代のものと考へられる。故に結論は本遺蹟の年代はカムボヂャの磨製と青銅の年代すなはち西洋紀元の少し前である、と云ふのがこのフックス氏の意見である。

この意見の如く本遺蹟の遺物中その磨製の石器は極めて整美であつて、その種類も種々別途の用途を持つた物に分れて居り、又精粗二様式の物が出土してその兩樣式に移行の中間型も見られる。青銅は稀であつて僅かに附近の土民より讓り受けた三箇があるに過ぎない。その中の一には柄が附着して居つて(有肩式青銅斧)これと同種の物は且つて印度からも出土してゐる(Medlicott and Blanford "Geology of India." Calcutta. 1879.) カムボヂャの南方の新石器時代文化と北印度のそれとは連絡が存在した樣に思はれる。元來歷史上印度の佛教がカムボヂャに入つたのは西洋紀元前三百年の頃であつたが、しかしそれ以前に於ても印度とはバラモン教によつて交通が行はれて居つた事が知られるのであつて、かくすればこの遺蹟は石器を使用して居つた僅か數百年後にはすでに高級な文明を現出した事になつて、その間の距りがあまりに少きに失する傾がある。一方又、地

質學上より見て先のフックス氏の出した計數は必ずしも信用することは出來ない。それは、このデルタの計算に於て、例へばサイゴンの附近の如き百八十米も掘り下げたのに地盤に出會はない所もあつて、フックス氏の算法で行けばこれ等はなほ古かる可き筈であつて、これ等はこの様な簡單な方法によつてはそのデルタの年代も同時に遺蹟の年代も決定することが出來ないものである。

この丘陵の遺蹟の遺物包含層はその基盤を成してゐる沖積粘土層よりは後の物であることは事實である。著者が發掘した時には水は深さ五米七十糎の所から湧出したからこの丘の地面上の高さは約五米である。この全體の高さ（すなはち河水面よりの高さ）との差はすなはち河によつてもたらされた泥土の層の厚さである。故にこの基盤をなしてゐるこの泥土の古さを知ればそれの上に人類が住み始めたその年代を知る事が出來るのである。カムボヂャの新石器時代と歴史時代との間は極めて永い物であることを注意しなければならない。

ロングプラオの遺蹟

Longprao はソムロンセンの東南三十粁の地點に存在して居つて河との間約五十米を距てゝゐる。その表面は大いに攪亂されて居つて多數の貝が散在して、こゝは河水の水面が低い時のみ見ることが出來る。しかし數時間の間に多數の遺物を採集することが出來るのであつて、その遺物はむしろソムロンセンの物と同様の性質を有してゐる。

遺物

一　石器

カムボヂャの磨製石器は歐洲各地の新石器時代の石斧や交趾支那、安南地方の物に比してその特色を異にしてゐる。その石器の代表的な物は磨製の石斧であつて、特にその中に有肩石斧或は有柄石斧（erminette）の存在することはその特色の最顯著な部分である。この有肩石斧の中にはその柄又は主體部が他の部に比して著しく大となつて美しく磨かれた物が存在するが、此等の種類はおそらくその石質が軟弱であるから實用に供せられた農耕易等ではなくして一種の宗教的用途に用ひられた物であらう。ソムロンセンには打裂残石（nucleus）や裂片は存在しないが打つ道具（Percuteur）は存在してゐる。又僅かではあるがその表面に磨跟を持つた不純燧石（Petrosilex）や砂岩（gres）の砥石が存在して居る。その表面の磨痕は弱い石質の物を磨いた跡ではあるがしかし、このソムロンセンより多數に出土した磨石器はおそらくはこのソムロンセンならざる、しかもその附近にして洪水の及ばない高地（Kompong-leng 高地？）に於て作られた様に考へられる。

石斧はこれを六種に分類することが出來る。

第一種有肩石斧であつてこれは柄の部分が明確に附着しない發達の過渡にある物も存在するが、しかし大體に於ては柄(tenon)の部分を有してゐる。柄は主體部に直角に交はるものと然らざるもの、又は極めて長い物短い物、巾の廣い物狹い物が存在してゐる。主體部も大小不一定であるが柄の極めて主體部に比して長い物はそれを丈夫にするためにその厚さを大にしてゐる。

第二種刄部の縱斷面が砲彈形を呈する三角形の物であつてこれは歐洲新石器時代の石斧と類してゐるが、たゞその厚さを薄くしてゐる。

第三種變形の片刄を有するものであつて、その平面形は第二種に近い物や、より短冊形に近い物が存在する。その刄部は約五十度に及ぶ樣な物も存在する。たゞこゝに注意すべきはこの型式はその表裏兩面が平滑でその斷面が短形をなしてゐる點であつて、その點デンマークの物にも似てゐる。

第四種第三種の片刄が双刄になつた物である。

第五種刄部と頭部の巾が同大の全く短冊形をなす細長い物である。大體に於て厚く良く磨かれてゐる。その刄部は主體部と明かに區別されて附着し、決して第一種の如くその縱斷面砲彈形を呈しない。

第六種主體部の斷面楕圓形を呈し、刄は先端に半楕圓形に附着してその中央が凹みシャベル形を呈してゐる。しかし中にはその主體部の斷面短形を呈する物もあるがいづれも gouge として用ひられたものであるらしい。極めて細長い物も存在する。

ソムロンセンの石器はその發見の層位に於てその形式を異にしてはゐないが、大體に於て厚い物や三角形を呈する物は比較的下方から出土してゐる。石質はカムボヂヤに多い Phtanite や Jadeite 又は feldspathique grès 或は diorite の類を用ひてゐる。

二　土器

土器はその形紋樣極めて多くかつ精巧である。紋樣は沈紋・浮紋によつて表はされた幾何學紋が存在して居つて、下層から出る物は紋樣簡單で一部に紋樣帶として存在し、上層から出るものは紋樣複雜に土器の全面に存在する。下層の土器は尖つた木の棒の如き物で畫かれた平行線・平行波線等が存在して土器の全面を廻つてゐる。又孔を口緣にめぐらして紋樣の効果を舉げた物も存在してゐる。陶車は無く多くは手づくねである。下層の土器の質は粗であつて平滑ではないが、上層の物は精巧に燒かれて堅緻である。把手を有する物も存在し、土器形態には、高杯形・坩形等が存在してゐる。中にはその表面に植物で作つた籠の如き物の目を有するのがある。土製品にはこの外になほ槌樣の物や綱の錘の如き物が存在する。

三　裝飾品

一　腕輪　多くは Pétrosilex と云ふ堅い黒い石から成つて居つて、外徑九・五センチ、內徑六・三センチにも及ぶ物や又は小さくて指輪と云つて良い樣な物も存在してゐる。この石で作つた物は、一の平板狀の石を大きい圓錐でくり拔いて作つた物であつて、その證據にこの腕輪の內部をなす圓盤が單獨に發見されてゐる。他に石ではなくて tridacna 又は Hippopus と呼ぶ貝で作つた徑一一・四センチにも及ぶ大形の貝輪も存してゐる。又この腕輪の一部分づゝの兩端に小孔をあけてそれを相互連續させて腕輪或は頸輪とした樣な物も存在してゐる。

二　耳飾　土又は骨で作つた小さい玦狀の物と、土で作つた臼形の物が存在してゐる。後者は圓盤狀でその側面の中央凹み、徑は五・三センチに及ぶ物も存在する。表面には多くは十字形の紋樣を有してゐるが、この紋樣はおそらく他の先輩の說く如くやはり火のシムボルとして信仰的な意味で附けられた物であらうと考へられる。又耳飾の一種にはこの臼形耳飾の變種とも考へられる釘狀に長くなり一端に頭を有する物も存在してゐる。

三　頸飾垂飾 (Pendloque) としてその大部分を占めるのは小臼玉樣の石灰岩で作つた小玉である。これには貝で作つた物も多數に存在してゐる。又一の石灰岩で作つた圓筒があつてその表面には平行した節を有してゐる。この孔の作り方を見るに一

方大に他方小であつて穿孔法が知り得る。其他の垂飾には種々複雜な形を呈して孔を有してゐる物が存在する。

四　青銅器

青銅器は發掘したものではないが數箇發見されてゐる。三角形の先端に柄の附着した銅鏃銅・斧・舌附銅鈴等も存在してゐる。

五　骨器

一　骨鏃　石鏃は發見されなかつた代りに骨鏃が發見されてゐる。骨鏃は大きい動物の骨で作られた物であつて、一般に三角形の頸部を有し、その柄の下端に近く左右に突出した抉出しを有してゐる。柄は斷面普通短形であるが稀には圓錐形の物も存在してゐる。中には鏃ではなくて投槍の先の如き物も存在してゐる。

二、骨鈎針鈎針 (hameçon) は二箇存在して高さ五・五センチに及ぶ物もあつて先は內部に一の鈎狀突起を有して居り、その基部も緊縛のために瘤狀突起を作つてゐる。他に石で作つた物も存在する。

六　動物遺骨

Cyrena C. Cyprinoides Grey 等の淡水產貝類を主とし、陸產貝としてはたゞ Orshalicus annamiticus が出たに過ぎなかつた。他に動物としては、Python (蛇の一種)や、コ、ヂナワニ・

カメ類・小鳥・サイ・イノシシ・シカ・ザウ・小犬カワウソ・トラ等の骨が出土した。

七　人　骨

保存が悪かつたが部分骨が多數出土してゐる。一の Humerus を計測して知り得る人類の身長は一米六〇糎位である。骨は一般に强く筋肉も强かつた樣である。顎は Ortho-gnathe が多く歯も强大ではあるが、現在の文明人には見られない未發達の原始的特長を殘してゐる。頭骨に於てもやゝ完全に得た一例は眉弓突出し、頬骨は直角に近くそれは Mesticéphalie と Sons brachycéphalie との中間であらうと想像される。これ等は墳墓として埋葬された物か否かは全く不明である。

結　論

以上著者の記述は全くの事實そのまゝの記載である。著者とカムボチヤの新石器時代の著者との間には意見の相異するところもあるが今は發表することが出來ない。（樋口清之筆記）

一九二九年に於けるソビエット露西亞の考古學的調査

B. Arendt; Soviet Archeoloical Expeditons during 1929.

池　上　啓　介　抄　譯

ソビエットの學術雜誌 V. O. K. S. 一九三〇年一號—三號（五八頁—六十頁）に、B. ARENDT 氏が表記の題目で簡單な學界の動靜を記載してゐる。今回該記事を抄譯する

「中央ロシア」

ソビエット國立歴史博物館は聯邦内の斯學上重要なる地方に發掘調査隊を派遣した。此の調査隊は Gorodtzov 博士が隊長となり、主として舊石器時代の遺跡の調査を行ひ多く好結果を齎らした。即ち博士は歐洲で最初に發見された舊石器時代の部落であると云はれる Briansk 附近の Timonvsk の遺跡の調査を續行して部落の住居者は遊牧民でなく地下住居を營んだ者の遺蹟である事を明にした。猶一千餘箇の燧石製の遺物や若干の興味ある骨製の裝飾に富んだものを得た。而して博士は該遺跡は所謂後期舊石器時代の中葉に屬するもので、石器が小さくなりマンモスや犀が人類と同時代に生存した時期のものであると考

察した。

又、SAMARA 州の地方の考古學者達に依つて二箇所に舊石時代の遺蹟が發見された。

第一の遺蹟はボルガ河々岸の中段の斜面、深さ三米半の地下に發見された。Gorodtzov 博士も調査を行ひ多くのマンモスの骨や所謂『臺所の殘物』"Kitchen refuse" 等を發見した。

第二の遺蹟は同じくヴォルガ河々畔の Postnikovsk の溝の岸にあり、深さ二・四米の所から燧石製の小刀・庖刀其他の石器類、及び獸骨・貝殼等の豐富な資料が黄色の粘土層中に包含されて發見された。

博士はこの他ヴォルガ河に沿ふハバリンスク地方の前半期の調査を終了した。特に Voronya Horoshev 島、Alexeyev 部落等で發見したマンモスの骨の研究は興味がある。獸骨のみでも二・四噸餘を算し、何れもハバリンスク博物館の所藏とした。

骨類は人間の頭骨・指骨・マンモス・リノセルス・北方大鹿・種不名の駱駝・二種の馬・熊・狼・等、又鳥骨・鱘魚の骨等が多く含まれてゐた。人工遺物としては石小刀・黒曜石製の皮剝・馴鹿の角製の斧及び小刀や美しい彫刻のある骨製銛又は圓形の土器の破片で幾何學的模樣のあるもの等がその主なる遺物である。

「カレリヤ」

A. Brussov 氏はカレリヤ地方の考古學的調査を再び昨年の夏から開始せられた。該事業は本年で五ケ年間續行されてゐる事になる。

Vyg 河畔の發掘調査の結果、明に北部ノルウヱーの遺物の形式をもつたスレート製の石器や三個の西歐型のボート型の斧の破片を得た。これは紀前三百年の終末に於ける北カレリヤと北スカンヂナビアとの間の密接な關係を物語るものである。

「コーカサス」

E. Pchelin 氏は一九二四年から Alano-Hozarsk 文化の調査を Osetia に於て續けられてゐる。又 Osetia の考古學上の地圖を作成した。

又同氏はウルドンスク地方を旅行し Alagrisk 峽で未知の石造建築物を發見した。これは多分七八世紀頃のものであらう。又 Kariokhokh 丘で一方の岩に寄りかゝつて厚く石で壁の造られた洞窟住居樣の住居跡を發見した。

Arhonsk の谷では地下に造られたスレートの三つの廊下のある建物の調査を行つた。Urukh 河畔では七八世紀頃の二三の遺跡を發見し、土器片及武器等の多數の遺物を得た。

「ウラル地方」

B. Grakov 氏に依り Orenburg 地方の Sarmat 文化の調査が行はれた。即ち Blagoslovensk の附近で二つの遺跡を調査し

た。一つは既に亂掘されてゐるが他の一つから人骨や埋葬品が發見された。これ等は大移住の時代のものであらう。

又Bis-oba に於て同氏は大古墳群を發見したがその中八個を發掘した。即ち三個は南スキーテン時代紀元前七世紀のものである事を確めた・其他ローマ時代(三世紀)の古墳で人骨、赤皮の被せられた木製の鞘のある劍長さ一〇六糎、幅六・二糎のものや、銀製の繰め金の附された劍等興味ある遺物を得た。

考古學者の D. Eding は上ウラルの古代文化を研究し三年間發掘に從事してゐる。下タギリスク (Lower Taghilsk) では祀禱所や海岸住居の遺跡を發見した。

又興味のあるのは泥炭遺跡で、二米半の深さから建築用材の殘物其他種々の遺物を發見した。中でも木製の馴鹿の像は注意すべきものである。其他桃や樺其他の種々の木器の破片を得た。これ等は金屬器と共に木器の併用された事を物語るものである。この他、磨製の多數の石器・武器・精巧な裝飾のある土器を發見した。D. Eding 氏はこれ等を七世紀 Proto-Ugokrs 期のものであらうと考察した。

「シベリヤ」

考古學者 S. Kiselyev 氏に依りミヌシンスクの北、エニセイ河岸の調査が行はれた。即ち總數二千の各種遺跡が發見された。墓や洞窟住居の跡から彫刻や繪畫が八十も發見された。これ等の遺跡は各時代のものであるが三千年前のものであらう。此の中最も古いものは所謂 Aphanasian と云はれる時代のものである。墓から鹿角が發見される事實は既に當時に於て最早犬を使用する狩獵が行はれた事を證するものである。又最も新しい遺跡は Tagar 時代と稱せられる時期のもので、これに屬する墓石の面には人間の生活狀態・動物・戰爭・狩獵の狀が畫かれてゐる。墓からは戰鬪斧・石鏃・小劍等が多く發見された。

資　料

遺跡及遺物

和歌山縣石器時代遺物發見地名表

藤　井　誠　一

日高郡

上南部村大字晩稲字平(ダイラ)　石鏃、彌生式土器(以下土器とは彌生式)
同　村大字晩稲山ノ上　石鏃
同　村大字熊岡　磨石棒
同　村大字下ノ尾　磨石斧
同　村大字東吉田　磨石斧
同　村大字西本庄　土器
同　村大字東本庄　土器
切目村大字崎山切目川下流　石斧、石鏃
同　村大字崎山切目岬　石斧

西牟婁郡

下秋津村大字矢矧岩倉山　石鏃、石棒、土器
同　村大字大西ヶ谷　土器
三栖村大字中三栖　磨石斧
下芳養村津秦木小字鬚五郎　磨石斧、石鏃、土器、
同　村大字四丁山頂　土器
同　村大字四丁嶺原谷　土器
同　村大字境　土器
同　村大字田川水取山　土器
田邊町大字西ノ谷小字目眞　土器
同　町大字西ノ谷字立戸　土器
新庄村大字跡ノ浦　土器
同　村大字橋谷　土器
西富田村大字堅田後々山　土器
同　村大字才野權現平廻田(貝塚)
同　村大字才野權現平　土器
岩田村大字岡字ヤンタニ　土器

以上は小生等昨年來調査せる遺跡にして中には特に發掘を行へる箇所等もあり。又遺物等に關しても詳細は更に後報いたす筈。權現平貝塚は新發見なり。

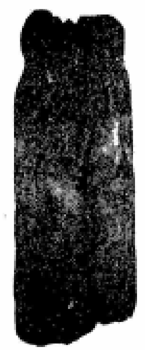
羽後國石名館出土の木製品

武　藤　鐵　城

秋田縣仙北郡六郷町石名館は以前から石器時代遺蹟として知

られてゐたが昨冬は同町小西宗吉氏に依つて發掘せられ數多の遺物の出土を見た。該遺蹟は龜岡式土器製作の絕頂期に相當するものと認められるが、包含層下位が薄い乍らも水邊草の泥炭層を構成し、一部分はトチ、クルミ等の堅果から成る特種泥炭層であることは注目に値する。

本品は楢材を長さ四寸二分、斷面は胴部長徑一寸七分、頭部長徑一寸四分の楕圓を示す棒狀に削つた物である。そして頭部より六分下に前面に於て約一分五厘の深さを有し後部へ廻はるに隨つて次第に淺くなる刻みを付け、その線まで下方から若干削つて頸部を作つてゐる猶前面下部は一寸位を斜に切り下げてある。



地下三尺許かりから土石器破片と共に美しい入組紋を帶狀に廻ぐらした完全な大形壺に接近して出たのであるが、その埋藏狀態が特異で、徑二寸の土器底部の僅か緣の殘存するものに載せられ、その上を薄手の繩紋深鉢の大破片で蔽ふてあつたのである。その破片復原形は樂にその木製品を包藏出來、且つ四邊にあつた破片にもその一部分らしいものが混じてゐたが、その底部とは當初から別物であつたらしい。

猶その出土地點から三四間離れて昨冬、土偶、土版、岩版などの發掘を見、最近更に接近して此の木製品と略同じ大きさの眞に男性生殖器に似て寫眞的に刻まれた小型石棒が發掘されてゐる。

今回で本縣出土の石器時代植物性製品は、仙北郡に於て三種となつた。卽ち土川村殿屋敷の朱漆櫛と荒川村奥山田口竪穴から出た朱色漆壺、最後に石名舘出土のこの木製品である。

繩紋ある土器片

中根君郎

資料として質に於いても量に於いても餘りに零細なものであるが、此等の破片の有する最大範圍に於いて觀察を爲して行きたいと思ふ。小なる破片から種々なる歸納、演繹、逞しき想像、獨り合點はそこに含まれる無理の爲に大小の過誤を生ぜしめるであらう。併し乍ら目前の研究主體となるべきものが完全の姿に於いて、又はそれに近い形に於いて得られない場合はやむを得まい。只以上の缺點を可及的避ける爲には且つ補ふ爲には多くの遺物の資料を集める他に方法はないと考へられる。此の資料欄をかりて注意すべき繩紋ある土器片（勿論此の中には擬似繩紋も含まれる）の資料を集めて行きたいと思つてゐる。次の三片は總て茨城縣眞壁郡伊讃村女方採集の繩紋式土器片である。

一定の間隔をおいて順次に縱列に繩紋が押されてゐる。外面

的には全體の感じが縞の編物となつて吾々に見へる。縞のある一定の大いさの編物を肯定すべきか、それとも細長き編物を押していつたものと解すべきであらうか。吾々は此の土器片に於いては條と條との間の規則正しき間隙に注意を拂ふのである。

規則正しい水平に走るS字のうねり。S字に接して繩目が著しく大きくなつてゐるのに注意する。

編物の末端に起る緊張性の弛緩と見ることは許されぬ事であらうか。末端に於ける編物の弛みとS字のうねりは必然的に不可分の關係にあると見る。卽ち編物の縁どりと見る此のS字のうねりは之に密接せる編物の弛みによつてその縁どりと云ふ性質が確められる樣に思はれる。

自分には不可解な一片である。客觀的に事實をかき述べるとaとbとの外面的には全く異つて見へる二つの條を見るのである。a條はその繩目はbに較べて甚だ大でありほゞ平行に押されてゐるが、一方bはその繩目は小で細長く左上より右下に走つてゐるのである。破片の下端に於いて、破片上部のそれの方向に正しく平行せず不正確に押されたものを認め得るが、之が上部に押された編物と同一型なるを見て、共に一定の大いさの編物と見て差し支へないと思はれるが、しばしかゝる資料を十分に集めなければならない。（昭和六、四、廿五）

淡路國吹上海岸の砂丘地帶遺跡と遺物

直良信夫

淡路には山陰沿岸に多い砂丘地の散布遺跡が二箇所にある。松帆村海岸と三原郡阿方村吹上海岸の遺跡がそれである。そしてこの二例は、極めてよく似た內容をもつた遺跡である。たゞ吹上からは金屬器の發見を聞かないのを異とする。石鏃丼に土器片(彌生式及陶質土器)は寧ろ松帆の遺跡よりは多いといふ。遺物は松帆と同じく砂丘上に於て採集される。私の見た石器に

は石鏃と石錐らしいもの丶破片一箇があつた。石は安山岩であつて、打製品である。詳細は上圖を見られたい。(何れ後日詳細に報じて見たいと思つてゐる。)

彌生式及其系統

東京市麻布仙臺山出土の彌生式遺物

齋藤房太郎

是迄に東京麻布區宮村町通稱仙臺山より彌生式遺物が出土すると云ふ事は餘り知られて居ないだらうと思ふ。筆者の知つて居る範圍では「石器時代遺物發見地名表」其他にも未だ報告されて居ないから東京市内の一資料としてこゝに報告しておく。

圖Aは彌生式土器高杯形の脚部で太さ一二・四糎色は赤褐色を呈してゐる。上部に於て厚度〇・八糎をなし下部に至るに随つて次第に厚度をまし括部に於ては一・六糎となつて居る表面には不鮮明な刷毛目文を付し内部には篦狀のものでこすつた痕跡が認められる。

圖Bは容器狀をなした彌生式土器の底部で器面にはAと同じく刷毛目文を付し燒成の不充分な爲か黒灰色の斑を呈し朱を少しも使用してない。底部の直徑六・五糎厚一・四糎でAと同樣に轆轤の痕跡を少しも有さず内外に篦狀のものでこすつた痕跡を有する故手捏法によつたものと見るべきであらう。

自然遺物

但馬國城崎郡新田村中谷貝塚の貝類

直良信夫

山陰道は貝塚に乏しい地である。その理由は何れ後日記する

ことゝして、私は今、裏日本の石器時代貝塚を代表する處の本貝塚の貝類種名を掲げる。時の豐岡中學の敎頭であつた、堀内文學士によつて、歴史地理二十三ノ一に貝塚種名の若干が擧げられては居るけれども、極く少數に止まつてゐるのであつて、素よりその全部をつくしてゐるのではない。大正二年六月、當時の豐岡警察署長であつた宮崎氏の採取した貝類は、私の調査する所によれば次の如きものであつて、昭和三年八月、私の實査の際採取したものと、略同一のものであつた。後日の參考となすために、その大きさも書き加へて置きたい。

猶この貝塚は、縄紋式土器を多く出し、之に少許の彌生式土器を混じてゐるのであつて、今日では殆ど衰滅に近く、爲にその層序を査證し得ないのであるが、遺物の多くは、大野雲外氏が持ち歸へられてゐることだし、層位の調査も亦氏の發表に俟つより外にこの貝塚の眞實を知る望はあるまい。

鹹水産	(1)	ハマグリ	Meretrix meretrix *Linné.*	(稍多量)
	(2)	オキシヾミ	Cyclina sinensis *Gmelin.*	(少量)
	(3)	カヾミガヒ	Dosinia (Dosinisea) japonica *Reeve.*	(〃)
	(4)	シホフキ	Mactra veneriformis *Reeve.*	(〃)
	(5)	アカガヒ	Anadara inflata *Reeve.*	(稍多量)
	(6)	マガキ	Ostrea (Crassostrea) gigas *Thunberg.*	(〃)
淡水産	(7)	カワニナ	Thiara libertina *Gould.*	(〃)
	(8)	セタシヾミ	Corbicula sandai *Reinhardt.*	(全貝層の主體をなす。)

その大きさを擧示してみれば次の如くである。

(1)	長さ	100 m.m.	高さ	81 m.m.	厚	44 m.m.
(2)	〃	54 m.m.	〃	56 m.m.	〃	34 m.m.
(3)	〃	61 m.m.	〃	57 m.m.	〃	23 m.m.
(4)	〃	48 m.m.	〃	43 m.m.	〃	32 m.m.
(5)	〃	47 m.m.	〃	39 m.m.	〃	42 m.m.
(6)	――		――		――	
(7)	高さ	38 m.m.	直徑	18 m.m.		
(8)	長さ	35 m.m.	高さ	31 m.m.	厚	21 m.m.

土俗

近代の竪穴式住宅に就て

井上藤二

明治三十七年春、予は父に伴はれて神奈川縣雨降山に參詣した際、たま〳〵同縣愛甲郡南毛利村字愛名部落を過ぎた。その大山街道沿の農家は住宅の側に竪穴を大抵一個位宛有し、その中にて草履や草鞋を數人が造つて居るのを見た。予は驚いて父に尋ねた處、父は「此の附近の人は冬期間の寒い間、此の中で藁仕事などするのを常とする。非常に暖いとの由。しかし、こゝで仕事をする人は皆眼が悪くなる」と說明して下された。なる程、出入する人々は、いづれもトラホームに罹かつて居るの

か眼瞼が皆赤くたゞれて居た。夏の使用のことは聞かなかつた。此の土むろ（地方の人はかくいふ）は大凡そ長さ九尺、幅六尺位、深さは五尺もあつたか、上方には前高に南に向けて、普通の住家の如く小麥稈にて屋根を葺き、その三角になつた前方には長さ四尺、幅三尺位の障子をはめて光線を採り同時に又出入口として居た。何しろ二十數年以前の少年時代の記憶であるから、郷里の實兄春山清五郎をして昭和五年二月に實地調査せしめた處「何年以前より此の土むろを使用せるか、又石器を使用せしや否や、此等に關する傳説等は一切不明なるが、此の土むろは南毛利村字愛名及び同郡小鮎村古澤、飯山等の部落に住する部落民が使用せるものなるが、數年前より使用せず。その構造は家族の多少により大同小異にして下は土を掘り周圍は木と竹を用ひ、その外側は藁、小麥稈等にて造り、正面は四尺四方位の障子一枚を用ひ、年毎に造り替へる由。所謂仕事場にて、冬季間の藁仕事を行ふものである。これは藁の乾燥を防ぎ、又寒さを凌ぐによい。故に夏は使用せず。此の土むろは數年前までに次第に減じて、目下は此附近に一個もなし」との事であつた。

なほ予の兄が主として調査の折、質問せる小鮎村飯山長澤富士太郎氏に書を寄せて尋ねた所、その答の要領は次の如くであつた。時は昭和五年三月。

「古老（八十三歳）の話にも極く昔より土むろを使用して居る由、此の部落にては十一月頃より翌年三月末頃まで防寒用兼貧者の仕事場として使用したるも次第にその數を減じ、遂に大正十二年四月を最後として、以後現在まで一戸も此の土室を造らず。これは近年とみに需要が減じ草履や草鞋を造らなくなつた爲め土室の必要なきに至れる由。なほ此の土室は部落民のみならず、一般農民も使用したるにて、足柄上郡山北方面にても以前に使用したることがあり、中郡秦野町方面にても一般農民が以前煙草の葉ののしに使用したる由。其他小鮎村古澤に限らず、各地の部落にて悉く貧民が使用した」

とのことであつた。此の土室の大きさ其他が北海道の各地にある先住民族の竪穴と頗るよく類似して居ることは、郡司大尉の發見にかゝる千島アイヌが占守島ベットフに殘した竪穴（小金井博士著人類學研究三四五頁）と思ひ較べて興味あることゝ思ふ。何等かの關係があるのか、將た偶然か。

予の考ふる所によれば北海道の竪穴は勿論、奥羽地方も、關東地方も、發見せらるゝ竪穴はアイヌ民族の遺物で、石器、土器、貝塚も同様と思ふ。神奈川縣下の土室は長澤氏の言ふ如く貧者が數年前まで使用したる事實から考へて、往昔附近の農民がアイヌ民族の竪穴生活を眞似たものかと思ふ。その理由は

1. 竪穴に生活したる先住民族の時代より今日まで此等農民の

冬期間に於ける藁仕事等に最も適當なりしこと。

2. 何處も同じ富者もあれば貧者もあり、而してその貧者が簡單にして經費少き土室を選びしこと。

3. 貧者は資本少き藁仕事等にて生計を立つるは最も便利で現に最近までその傾向はあつた。

4. 北海道に見る竪穴は大抵平地とはいへ附近より幾分か高い所を選んで作つたやうである。是は竪穴內に雪解けの水とか、降雨などの流れ込まぬ樣にとの注意は勿論、濕潤な際に竪穴內に水が浸み込まない樣にとの用意からであつたらう。竪穴の附近に斷崖を有するか、又は低地に面した小丘に作られて居る。なほその附近には大概水（川など）があるやうだ。これは生活の必要上當然のことであらう。神奈川縣下の土室が南に向き、幾分か高い所に造られて居るのが類似して居る。

5. 後述の如く同地附近には貝塚あり、石器あり、竪穴あるは、現代の土室と關係あるかと考へらるゝこと。

6. 海老名村の木製器具や國分寺の瓦や石斧から考へても先住民族は案外新しいことではあるまいか、新しいとすれば、アイヌ民族以外に考ふべき民族がない樣である。(少くとも我が日本に於ては)

なほ關東附近の僻地には今日もまだ此の土室を使用する處あるべしと信ずる。

附　記

前記長澤氏の言ふ所にては、同地方にも多少貝殼の出土する所ありと。又同郡石田村の寺僧は小鮎村飯山の四五ケ所にある穴（竪穴？）に來りて附近より多數の石器を採集せりと。而も種々の石器を發見せる由。

札幌附近にて石器、土器の出土する所は札幌郡白石村北郷。札幌郡豐平町月寒神社坂下。札幌郡江別町飛鳥山。余市郡余市町等あり。

昭和五年八月七日山形縣博物學會主催の講習員井上藤二外數十名は山形高等學校敎授安齋徹氏に伴はれ山形縣飽海郡日向村に屬する鳥海山中の Asphalt の露出する狀態を見學せしに、その固形の露頭中に縄紋土器の破片が多數混在せるを發見した。こゝには彌生式土器も少しくありしが石器は遂に見當らず。なほ精細の調査を要す。

圖版說明

圖版第一〇に示せる土面は陸中一戸町遺跡より龜ケ岡式土器と伴出せるものである。其の類品の聚成幷にこれが詳細なる記述に就いては次號の杉山壽榮男氏論文を參照せられたし

文獻

Heinrich Quiring, Die zeitlichen Beziehungen der Flussterrassen Europas und Nordafrikas zu den Menschheitskultur. 1930, Stuttgart.

本書は最近入手したものであるが、本著者に就ては、評者は全く聞知したことがない。然し本書表題には、Prof. Dr. Phil. Dr.Ing. とあり、職名も Bergrat a.d. Preuss. Geolog. Landesanstalt Berlin. と附せられて居るから、其人が如何なる方面の學者であるかも推察し得る。本書は表題の如く『人類文化と歐洲並に北阿に於ける河岸段丘との時的關係』の研究であつて、一部地質學上からする段丘研究と史前學上の層位關係との結合に就て、着眼して居る點と、從來より本書の如く、主として舊石と中石文化を對象とする場合は、對象地方が多くは歐洲に限られて居つたに對し、新に歐洲の外北阿を取り入れた所に特色がある。本書は四六倍、僅に三六頁の薄さに過ぎないが、其内容に於ては、可なりに論議せらる可き部分がある。

一、ハイデルベルグ段丘（古き中部段丘）
二、シエル段丘（若き中部段丘）
三、ソルトレー段丘（低段丘）ソルトレー氷期
四、マグレモーゼ段丘（沖積段丘）

以上の如く、夫々の段丘に史前學的編年（ハイデルベルクは同人骨發見に因む）名を冠して述べて居るのであるから、地質學的事情と史前學的のそれとが、結合せられて居るのであるから、兩者夫々の事情に通ぜぬ以上了解困難も伴ふ。まして著者は Landesamt の肩書がある上同所の F. Wieger の考が深く入つて居る所は讀んで行くとよく解る。從つて、舊石史前學に就ても、一般傾向とは稍々其趣を異にして居るから、更に複雜を加へて居る。それ故、本書を一々評論して行くと本書よりも長篇が出來るかも知れない。こゝでは單に地質方面より、より史前學的に歩みよつてきている一傾向の一例とするに止めたい。それにしても、こんな大きな問題を、僅々三四項に切りつめた所は、所謂獨逸學風としては珍らしい。それでも本書末尾の文獻は、三項に亙り數十が掲出せられ、研究者の參考に資して居る。（大山）

Josef Bayer, Die Grundlagen zur Universalgeschichte der Menschheit. 1929. (Sonderabdruck aus Eiszeit und Urgeschichte) Leipzig.

本著者に就ては、本誌でこそ未だ一回も紹介したことがないが、評者は既に屢々紹介をして居るが、本誌讀者の爲、一通り述べる。著者は、オーストリア、ウキーンの自然史博物館の館

長（Direktor am Naturhistorischen Museum in Wien）であつて、同國に於ける史前學、特に舊石研究の一權威であるに止まらず、其舊石研究に於ては獨、佛あたりの研究とは若干異り、獨自の研究を有する點に於ては、世界に知られて居る人である。勿論これ等研究上の內容に就ては、色々是非が存する所は人として止むを得ないが、現に角一派をなして居る。其最近の『氷河時代の人類』（Der Mensch im Eiszeitalter, Teil I. II. 1927）（本書に就ては評者は史學七の二號に紹介して居る）に於て、其獨自の見解を高調して居る矢先き、更に本書に於て規模更に雄大な表題の如き『人類普遍史の原理』とでも云ふ樣な、勇ましいものを發表しで居る。この內容も亦著者獨特の研究であり、前評書と共に近く檢討をして見ることゝするが、一言說明すれば、此書に於ては特に舊石史前學研究の對象が、動もすれば歐洲內に限らるゝ傾向を極力排擊して居る所に著者の特異相が見られる。今はこれが可否に就ては述べないが、これには、相當の動機がある。それは歐洲大戰當時、此著者は從軍（中尉？）して、遠くトルコより小アジアの沿岸地方に出征して居る。其際同地方で發見し、戰後これが研究を發表したのが、本著者の所謂アスカロン文化（Askalon-Kultur-Askalonien）であつて、多くの研究がある。（詳細を他日に讓る）而して、このアスカロニエンとエジプト、北阿等に亘り、歐洲の舊、中石文化を總括して、大なる地的範圍に於ける、石器文化を取り扱ふ爲に、以上の樣な表題の研究が生れたものである。從つて其內容も、これに準じて、とても廣く大きい。只この研究を、いきなり見ても、餘りに廣過ぎるから、本著者の『氷河時代の人類』なり、各雜誌に於ける「アスカロニエン」などを、一通り讀んで、本著者を一通り了解して置くことが必要であることを附加して置く。又本書は、拔刷であつて、本著者より、評者に寄せられたもので、體裁は菊倍版、六四項、圖版二樣が附せられて居る。（大山）

Raymond Vaufrey Le Paléolithique Italien (Archives de l'Institut de Paléontologie Humaine Mémoire 3, 1928.

解題。本書は表題の如く『イタリーの舊石』に就て Vaufrey の近著である。この著作に就ては、私は未だ知つて居らない。瞥見した所、Boule, Marcellin の系統の人らしく、又 Breuil に負ふ所大なる由を述べられても居るから、この著者が、所謂化石人類研究－モナコ大公研究所一派の人であることが考へらるゝ。

このイタリー舊石問題に就ては、多年檢案となつて居つたもので、これを說明しなければ切角の好著、しかも著者の苦心の所以を汲むことが出來難い。このイタリー舊石は、隨分古くよ

り發見研究はせられて居つたものゝ、この研究たるや、佛國を中心とした歐洲舊石時代とは中々一致を見ず、多くがイタリーは特異な文化發展を見たものとして、別扱いにせられたのみならず、研究資料の學術的報告に就ても亦、其數が少なく且つ其學風も異る所から、同國外からは闇黑扱ひを受けたのである。

其特異な發展と云ふのは、第一に洪積時代に於て、氷河の影響が、フランスや中歐方面と異り、全般から甚だひどくなかつたことゝ、同じイタリー內に於ても、アルプスよりの半島基部と、南よりの半島南部並にシシリー島とでは、夫々氣候環境が異るから、文化上にも、夫々地方色も生れてくるから、フランス方面と一致をしない理由も充分見られ、寧ろ佛國平地の編年標準でこれを律するには、無理のある所も理解出來る。こゝが問題を醸する所で幾何まで佛國編年を以てすべきか、夫々の人々の考により大差も出來る。イタリーに於ける或る一派の如く、イタリーは、前期舊石文化が以外に永く發展し、佛國方面に於ける後期舊石文化出現時に於ても、維然前期舊石文化存續し、それが終に中石時代の、所謂カンピニアン文化を生むに至つたものと考へ、且つ若干は佛國方面の後期舊石の影響を認め得るも、大局上大なるものでないにと考へられ、且つシシリー島の舊石文化は、南對岸のアルゼリアに關係あるカプシアン文化と認め或は否定する等こゝにも問題がある。これを佛國側から見ると佛國平地の標準編年に明い目で見て居るから、兎角この標準尺の利用が伊國側よりも多くもなる。其事實に於ては、前期舊石文化の代表遺物である握り槌も相應にあり、其動物群も相違して居る。佛國標準の後期舊石に就ては、石器に於てこそ、相關々係の一部は認めらるゝが、骨角器は貧弱で特徵が足りない。此の如き有り樣であるイタリー舊石に就て、本書は佛國側によつて取り纏められたものである。

本書の內容。本書は菊倍版の大さで、最初に、前期舊石に就て、(37—84) 次に同國の後期舊石に就て、特にこれを Facies Grimaldien の名のもとに (85—155) 其次にシシリー舊石(116—139)及び化石人類研究所のシシリー島の發掘 (140—159) を述べ、最後に、イタリー、カンピニアン (160—174)を研究し、これを總括せられて居る。夫々の章に於ては、著名な個々の遺跡に就て述べ、自然人工の各遺物に亘り、各章ごとに小括せられ、且つ文獻一覽が整備せられ、二百五の文獻を掲げ、猶五四の挿圖中には分布圖をも含み、圖版七葉と共に、了解に資して誠に心地よき見事なものである。

私見。この大冊、しかも私に難讀の佛文であるから、讀了したのでない。從つて私は未だ本書を語る可き資格がないけれども總括的に私の考を述べる。其前期舊石に就ては、多くを述べないが、動物群が何れもより溫暖的のものが多く、特に暖期ム

ステリアンが、より明に見られもする。多くの問題は後期舊石以降にある。本著者の新しき目で、イタリーに於ける後期舊石に就て、グリマルドキアンを創設せられたことを多としたい。それがオーリナシアンに近緣を認められ、イタリーに、ソルートレアンもマグダレニアンも發見せられない事實が、より明確にもなつた。而してこのグリマルドキアンがオーリナシアンに對し石器に多くの近緣は見らるゝが、オーリナシアンの一特徴たる骨角器が違ふ。藝術發展としては、Savignano の彫像があるのみで他に無い。それ故、グリマルドキアンの編設には意義がある。只グリマルドキアンが設定せられたからとて、前期舊石延長論が悉く破れたのではない。平行存立の不可能が證明せられざる以上共存も可能である。まして北よりアルプスよりの地方に、このグリマルドキアンが發展しても、中部以南の部分には維然前期遺承の民の存立は、相伍さずとも共存し得る。從つて、必ずしも佛國編年に當らないかも知れない。根本に於て佛國編年中には、共存平行の考案組織が少しも見えて居らない。この頭で見るのが正しいか否かは、所によつて相違を生ずる。然し本書は、其所論は別としても、個々の事實に就て、簡明なる分類記載に於て、永遠の生命を有し、著者の勞を多とせざるを得ない。而して私共遠方にあつて、文献も少ないものが、かく取纏められて從來知らなかつたイタリーの多くを知ることが出來ることに就ては更に感謝するものである。而して本書の後半等に就ては、讀了の上、更に私見を開陳したいと考へる。(價百法―十圓弱)。(大山)

日本考古圖錄大成　古　墳　島田貞彦著

今回日本考古圖錄大成の第十二輯として島田君が執筆の勞を取られた「古墳」が刊行せられた。

死後の住居としての墳墓、人類の存在と共に其遺骸は何等はの方法を以て處理さるゝ。そは其施設の形式が人類文化の發達と共に改變される。形式の移行推究――特に所謂原史時代墳墓を中心としてこれを考察すると著者は冒頭に說いてゐる。

本邦上代文化が未だその曙光に浴さない以前の原始生活の時期に於ても、既にその原始民は自からの生長に從つて簡粗ながら遺骸の埋葬を行ひ、殊に九州北半より東海以西に於ては或る時期に至つて、その聚落に伴つて特定の共同墓地を遺してゐる。

周末漢初以來その文化の東漸によつて躍進的生長を遂げた我が原始民は、高等文化への搖籃期より漢文化攝取時代の初葉に於て、漸く所謂古墳の築營を見、更に文化の向上に從つて地方豪族の興隆、卽ち氏族制度の發達を促すと共に厚葬の風亦盛行し、壯大なる墳墓の出現を見る。而して時代の文化と共に墳墓

外は部表現より内部表現へと移行し、降つて佛教の渡來國家制度の完成を見ると共に、時代は思想の變化に準じて墓制の革變を齎し漸次先行墳墓の制は消滅し去る。

これ等の時期に於ける墓制の變移推究は我が上代文化の發達變遷移行の心核に觸るゝものであり、所謂原史考古學の一核心をなすものである。

島田君の著は、これ等の時期に於ける墳墓卽ち古墳に就て、極めて簡潔明快正確に記述し且つ多數の撰ばれた圖版が、これ等墳墓の變移を一目瞭然たらしめることに成功してゐる。洵に必讀の好著として、我が上代文化に關心を持つ人々への絶好の贈物として推擧するに吝かでない。(菊版本、圖版四十八葉、解說二十頁、日東書院發行定價二圓)。(田澤)

埴輪集成圖鑑　東京帝室博物館編纂

本書は嚮に刊行されたる埴輪圖集が同館所藏品に限られたるに比して、更に範圍を擴大して一大埴輪聚成を試みんとするもの丶如く、收むるところ單に同館の遺物に止まらず、東西兩大學を始めとして、その他多くの個人襲藏品に及ぼしてゐる。編纂に就いてはこれを男子像・武裝男子像・女子像・男女未詳像等の土偶并に動物・器財・家の七部門を設けて毎集各部門を分載し、別に簡略なる解說を添附する。圖版は菊二倍版となし寫眞頗る鮮明にして、しかもこれを各面より撮影して研究に便せるは、その價格の低廉なると共に、正に好參考書として推薦するに足る。(定價每輯一圓五十錢・第三輯迄既刊・發行所東京神田萬葉閣)(田澤)

明治初年 北海紀聞　清野謙次編

清野博士が專門外の專門として人類學に於て光輝ある業績を擧げられつゝあるは今更辨ずべくもないが、これと因果關係にある考古學特に石器時代の研究并に民俗學方面に於ても、常に異常なる注意を向けられ、獨自の立場にあつて時々有益なる論說を發表されて居るは筆者の私かに敬服せるところなるが、この多方面に亙つて不可ならざるなき博士にして今新に鰲頭の編著を見るも亦同博士が故安場男爵の女婿として、外祖父安場保和男の靈前に捧ぐべく一家一族の私事にのみ卽してなされたものではなく、明治初年に於ける北陲邊土の狀勢を親知し得べき一史料を世に贈るべくものされたと云ふべきであらう。

安場保和の「明治十七年北海道巡回日記」

——特に千島アイヌの色丹島移住事情に就て

明治九年千島三郡取調書

北海道及び千島の沿革

千島警備及び北海道開拓に關する金子堅太郎の七議案

これ等の各項目は本來故安場保和男が北海道方面統治に關して巡察を命ぜられたる時の巡回見聞錄を主文として、これ等と連關せる以下の三部を載錄せるもので、特に巡回日記に就ては博士の詳細なる解注を加へてある。元來爲政方面に關する書であつて一見斯學と關係なきやうなれど、千島諸島の巡遊中に於て逐一見聞の土人の生活狀態等を詳細に觀察記錄せられ、殊に千島アイヌを色丹島に移住せしめたる當時の事情を明白にせる等は、千島三郡取調書中に千島アイヌ幷にアリユート人の生活を詳記せると共に、洵に興味深く民俗學或は人類學等の研究上看過し能はざるものがある。（定價二圓八十錢・岡書院發行）（田澤）

アイヌ人と其の史前　米村喜男衛著

本書は北見郷土研究會より發行される雜誌「郷土研究」の第五輯特編として出版されたものである。其の內容は第一編アイヌ人と其の祭祀、第二編アイヌ人の史前時代等より成り卷末に附錄として同地方の石器時代遺跡及び遺物發見地地名表がのせられて居る。第一編は美幌、藻琴、兩部落のアイヌに依つて行はれた熊祭の狀況を詳記したもので、その記載は本書卷頭に掲げられた當時撮影の寫眞と相俟つて此の儀式の樣子を如實に示して居る。第二編は同地方の考古學研究で、最初にチャシ、住居趾、墳墓等を記し次に石器、土器、骨角器に就ての記載がある。就中著者は該地方より發見せられる土器をA式（厚手繩紋土器）B式（薄手繩紋土器）C式（刻紋土器）D式（浮紋土器）及び別種土器等の諸型式に分類し、各型式土器所在地の地理的條件に基き、此等の時代別を試みられた點は論の正否は別として特に注意す可き一つの試みと云つてよい。又卷末附錄の地名表は同地の遺跡を實地に調査しようとする者に對して絕好の指針となるであらう。（本文四十六頁、圖版十五葉、北見郷土研究會發行定價一圓二十錢）（甲野）

第三卷第一號所載　永澤氏論說正誤表

一〇頁四行目下部に（第三圖12）を附加。
一〇頁十七行目下部に"（及第七圖）を附加。
十一頁十七行目（第六圖Eと）あるは（第四圖E）の誤り。
十四頁七行目 Temmnick を Temminck に訂正。
十四頁十行目 Matumotoi Kishida を抹殺す。
十五頁十行目に（第三圖E）を附加。
六頁と七頁との間の圖版が第三圖に當る。（永澤）

會報

入會々員氏名

住所	氏名
神戸市五番町二丁目二	福島義一
大阪府豐能郡麻田村大字麻田一七三一	石川文彦
東京市神田區小川町五〇	賀古明
金澤市高等工業學校機械工學部	黍野（キビノ）藤二郎
Institut für Vorgeschichte Köln, Ubierring 11.	Prof. Dr. Hebert Kühn
秋田市中龜ノ丁上丁一三	桐生和（カヅ）夫
東京市麴町區有樂町東京日々新聞社	增田
大阪市大阪毎日新聞社	中島秀雄
奈良縣高市郡眞菅村大字曾我眞菅小學校內	崎山卯左衞門
東京府下碑衾町碑文谷一二七	鈴木一
東京市外澁谷町金王七〇大雲館	菅崎三文
函館市谷地頭町八六	谷敬一
秋田市川口下裏町	鎗野目（ヤリノ）粂藏
長崎縣南高來郡加津佐村山崎醫院	山崎重長
北海道北見國網走町	米村喜男衞
仙臺市土樋一五四渡邊方	伊東信雄
栃木縣足利郡御厨町福居五三三	神山美太郎
東京市小石川區音羽町五丁目一七	木村善吉
京都市北白川小倉町五〇	小牧實繁
大阪市東淀川區中津南通四丁目二三廣田方	栗山一夫
大阪市東區高麗橋二丁目松下善四郎方	松下胤信
岐阜縣大垣市東長町一〇四一ノ一	森俊雄
横濱市中區南太田町一七五五	村田義夫
朝鮮釜山中學校	及川民次郎
東京市小石川區小日向臺町二丁目十六番地	大口喜六
東京府下杉並町田端一〇	齋藤房太郎
東京府下世田ケ谷町代田中原九八八	佐野淡一
青森市榮町	佐々木新七
東京市外千駄ケ谷町穩田八	田原鎭雄
東京府下岩淵町下村一四三三	八幡一郎
東京市芝區三田小山町八	横山重

死去

橋田親吉　本莊秀邦

退會

安達佐次郎　松見三郎　赤堀英三

森口奈良吉　坂誠　中谷久彌

江見忠功　中山沖右衞門　福家惣衞

轉居

住所	氏名
大阪市西成區南海道一ノ三五船越政一郎方	船越章
東京市外吉祥寺一九〇一	布施安昌
東京市外井荻町下荻窪三丁目四七	橋本增吉

新田徳之　半田英三　小笠原謙吉

小川永一　洞富雄　飯田恒男

大谷大學圖書館　梶原可吉　佐山融吉

神尾秀二　田代不知　梅村包雄

Abhandlungen

der

Japanische praehistorische Gesellschaft

auf

Europäische Srpache

1929. **Kashiwa Ohyama**

Resume des Ausgrabungsberichts über die Muschelhaufengruppe Kaizuka beim Dorf Yoshibumi, Provinz Chiba.

Praehis. Zeitschr. Bd, I, No. 5, S. 1—4.

1930. **Chiyomatsu Ishikawa**

Professor Edward Sylvester Morse.

Praehis. Zeitschr. Bd, II, No. 1, S. E. 1—E. 3.

Kashiwa Ohyama

Denkmal beim Muschelhaufen Ohmori zum Gedächtnis an Prof. Edward S. Morse.

ibid, S. E. 4—E. 8.

Letter from the Family of Late Prof. E. S. Morse.

ibid, S. E. 9.

Kashiwa Ohyama

Korekawa-Funde, vom Korekama, einer charakteristischen Station von Kame-ga-oka Typus der Nord-Ost Jomon-Kultur.

ibid, No. 4, S. E. 11—E. 41.

Mitsuji Miyasaka

Le gisement préhistorique d'Ichioji prés de Korekawa (Préfecture d'Aomori). (Résumé de l'étude de Mr. Miyasaka) (texte japonais, p. 1 à20) par M. Haguenauer, pensionnaire de la Maison Franco-japonaise.)

ibid, No. 6, S. E. 43—E. 49.

1931. **Kiyoyuki Higuchi**

Resume über die neu gefunden Muschelhaufen Mori (森) unweite von Takada (高田), Prov. Bungo (豐後), Kyushu (九州),

ibid, Bd. III, No. 1, S. E. 1—E. 6.

INHALT

I. Abhandlungen (Japanisch)

II. Mitteilungen (Japanisch)

III. Kleine Mitteilungen (Japanisch)

1. Fundorte und Fundgegenstände

2. Yayoi-Kultur und ihre Familie

3. Zoologische Verhältnisse

TAFELN

Satzungen der Gesellschaft.

1. Der Name der Gesellschaft ist "Shizengaku-Kwai" (Praehistorische Gesellschaft)
2. Der Zweck der Gesellschaft ist das Studium der Praehistorie und ihrer Grenzgebiete und dessen Popularisierung
3. Die Tätigkeit der Gesellschaft erstreckt sich auf
   A Herausgabe kleiner Mitteilungen und Schriften
   B Herausgabe der Shizengaku-Zasshi (Zeitschrift für Praehistorie) (Zweimonatlich) und des Jahresberichts.
   C Veranstaltung von Forschungs-und Studienreisen
   D Veranstaltung von Vorträgen und Ausstellungen
4. Mitglieder
   Die Mitgliedschaft wird erworben durch jährliche Vorauszahlung eines Beitrags von 5 Yen. Personen welche einen einmaligen Beitrag von 200 Yen oder mehr zahlen, werden lebenslängliche Mitglieder. Personen welche sich um die Gesellschaft besonders verdient gemacht haben, können Ehrenmitglieder werden und haben damit die Stellung der lebenslänglichen Mitglieder
5. Die Mitglieder erhalten die Zeitschrift und den Jahresbericht frei, jedoch wird für Zusendung nach dem Ausland das Porto berechnet
6. Rechte der Mitglieder
   Die Mitglieder haben das Recht, die Einrichtungen des Ohyama Instituts für Praehistorie zu benutzen
   Die Arbeiten der Mitglieder sollen in der Praehistorischen Zeitschrift veröffentlicht werden
   Ferner haben die Mitglieder das Recht, an den Forschungs- und Studienreisen der Gesellschaft teil zu nehmen, die Vorträgen und Ausstellungen zu besuchen, sowie die Sammlungen und die Bibliothek der Gesellschaft zu benutzen
7. Ein aus mehreren Mitgliedern, bestehender Vorstand führt die Geschäfte der Gesellschaft
8. Wenn es sich als notwendig herausstellt, können diese Satzungen später geändert werden
9. Das Büro der Gesellschaft befindet sich:

9. Onden Aoyama Tokio
Ohyama Institut für Praehistorie
(Ohyama Shizengaku-Kenkyujo)

für den Vorstand

Fürst Kashiwa Ohyama — Kensei Hohjoh
Isamu Kohno — Sueo Sugiyama
Mitsuji Miyasaka — Kingo Tazawa

ZEITSCHRIFT
FÜR
PRAEHISTORIE

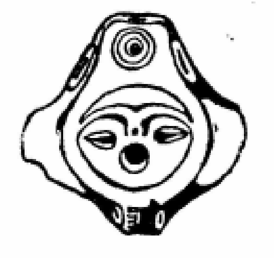
(SHIZENGAKU-ZASSHI)

Organ der Japanischen praehistorischen Gesellschaft

Herausgegeben

von

KASHIWA OHYAMA



Sonder Nummer:

Die Maglemosien-Kultur in Nord-Europa

3. BAND 4 HEFT

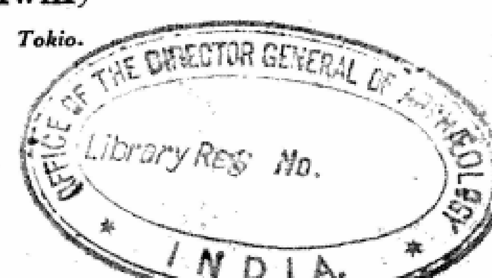
TOKIO

Juli 1931

Japanische praehistorische Gesellschaft

(SHIZENGAKU-KWAI)

9, Onden, Aoyama Tokio.



史前學雜誌

第三卷　第二號・第三號

昭和六年五月十五日發行

北歐に於ける中石時代　マグレモージアン文化概說號

史前學會

史前學會々則

一　本會ヲ史前學會ト名付ケル

二　本會ノ目的ハ史前學研究ヲ主體トシ、併セテコレニ關連スル諸學ヲ考究普及スルニアル

三　本會ノ事業ハ左記ノ通リデアル
研究小報及パンフレツトノ發行
史前學雜誌(年六回隔月發行)及年報ノ發行
調査竝ニ研究旅行、臨時講演會竝ニ展覽會ヲ催ス

四　會員
本會ノ趣旨ニ贊成シ年額金五圓ヲ前納スル者ヲ以テ會員トシ金貳百圓以上ヲ一時ニ納ムル者ヲ以テ終身會員トスル
特ニ本會ニ貢獻シタル會員ヲ名譽會員ニ推選シ、終身會員ニ準ズル

五　本會員ハ隔月發行ノ史前學雜誌竝ニ毎年一回發行スル年報ノ配布ヲ受ケルモノトスル(但海外在留者ハ別ニ郵送料ヲ要スル)

六　會員特典
本會々員ハ大山史前學研究所ニ於テ研究ノ便宜ヲ受ケ其研究ヲ雜誌ニ於テ發表スルコトヲ得ル
本會ノ調査竝ニ研究旅行、講演會及展覽會ニ出席シ、本會所藏ノ資料圖書等ヲ使用閲覽スルコトヲ得ル

七　本會ニ數名ノ幹事ヲ置キ、本會ノ會務ヲ執ル(將來必要ニ應ジテ本會々則ヲ變更スルコトヲ得ル)

八　本會ハ事務所ヲ左記ノ所ニ置ク

東京府豐多摩郡千駄ケ谷町穩田九
大山史前學研究所內　**史前學會**
電話青山一二五番

幹事　大山柏　甲野勇　宮坂光次　北條憲政　杉山壽榮男　田澤金吾

會計　岡田毅一

投稿規定

寄稿の範圍は史前學研究を主體とし、之に關連する諸學を包括す。寄稿者は會員並に會員の紹介ある者に限る

原稿は返還せず、但し寫眞、圖表等は豫め申出であるものに限り之を返還す

原稿掲載の先後は編輯者に一任されたし

寄稿者の希望に依りては內容に關し相談に應ずることあるべし

寄稿の別刷は豫め申込みある場合に限り、當分所要部數の實費及び送料を申受け需に應ず

昭和六年五月十二日印刷
昭和六年五月十五日發行

本號に限り
定價一册貳圓郵稅四錢

編輯者　東京府豐多摩郡千駄ケ谷町穩田九番地　大山柏

發行者　東京府豐多摩郡千駄ケ谷町穩田九番地　岡田義一

印刷者　東京市神田區表猿樂町二　株式會社開明堂東京營業所　中村修二

發行所　東京府豐多摩郡千駄ケ谷穩田九大山史前學研究所內　史前學會
電話青山一二五番
振替東京五八九六九番

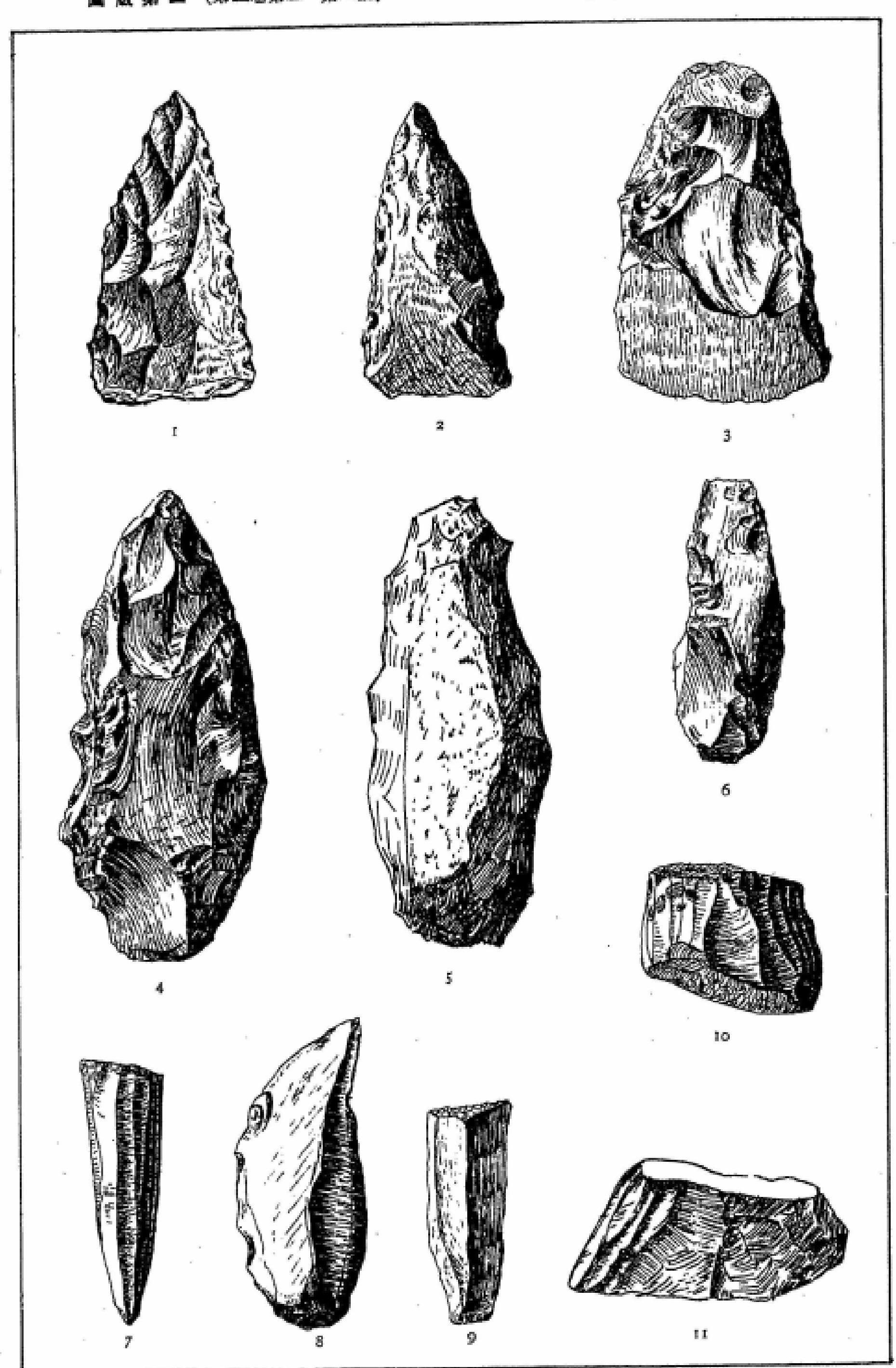
發賣所　東京市神田區北甲賀町四番地　岡書院
電話神田二七七五番
振替東京六七六一九番

史前學雜誌　第三卷　第二・第三號　目次

北歐に於ける中石時代　マグレモージアン文化概説

大山柏

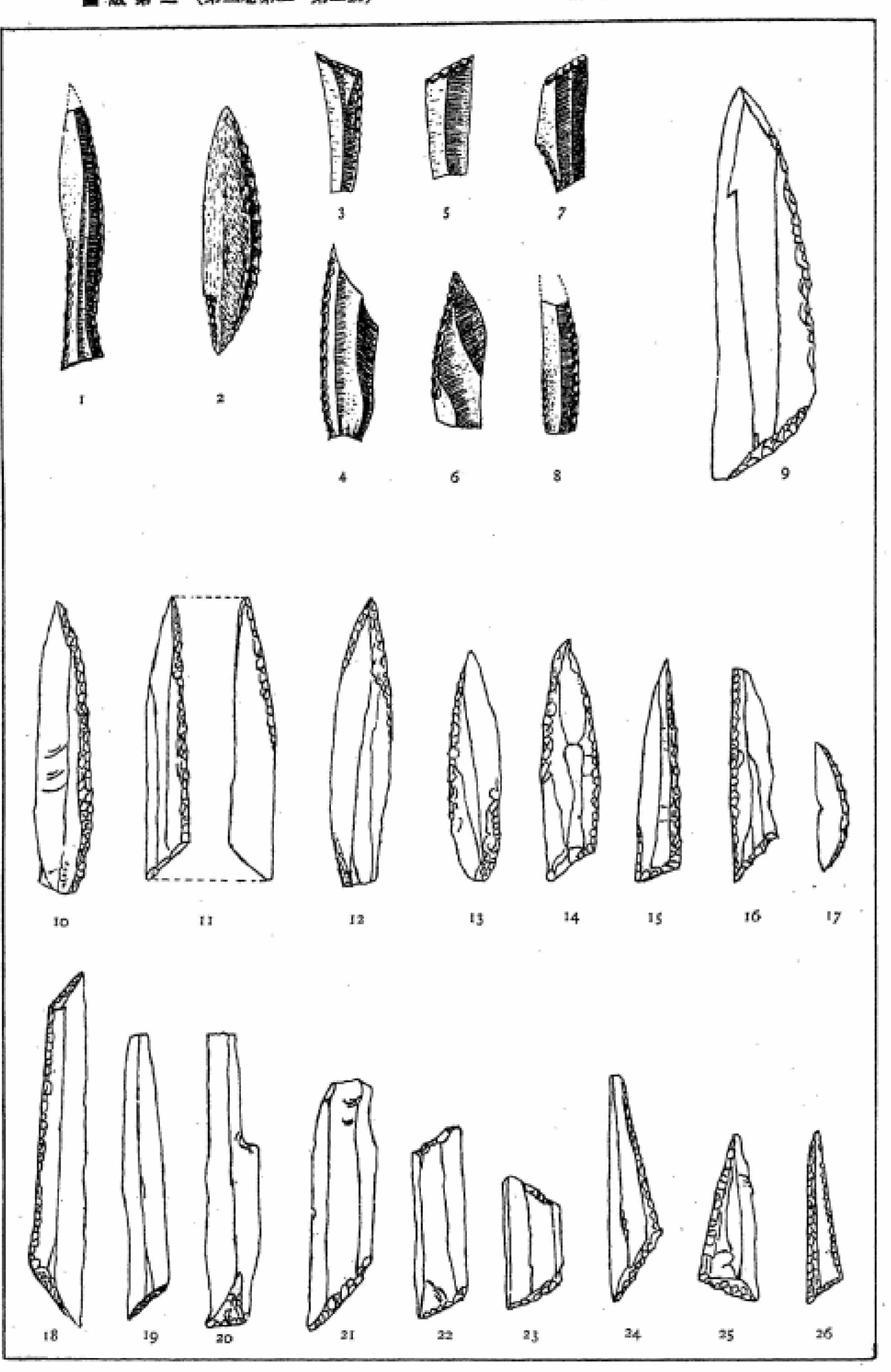
同目次



マグレモージアン各種石器（$\frac{1}{2}$ N. G.）

1. 2.	Maglemose 出土	(nach Sarauw)
3. 4. 6—10.	Svaerdborg 出土	(nach Johansen)
5. 11.	Holmegaard 出土	(nach Broholm)

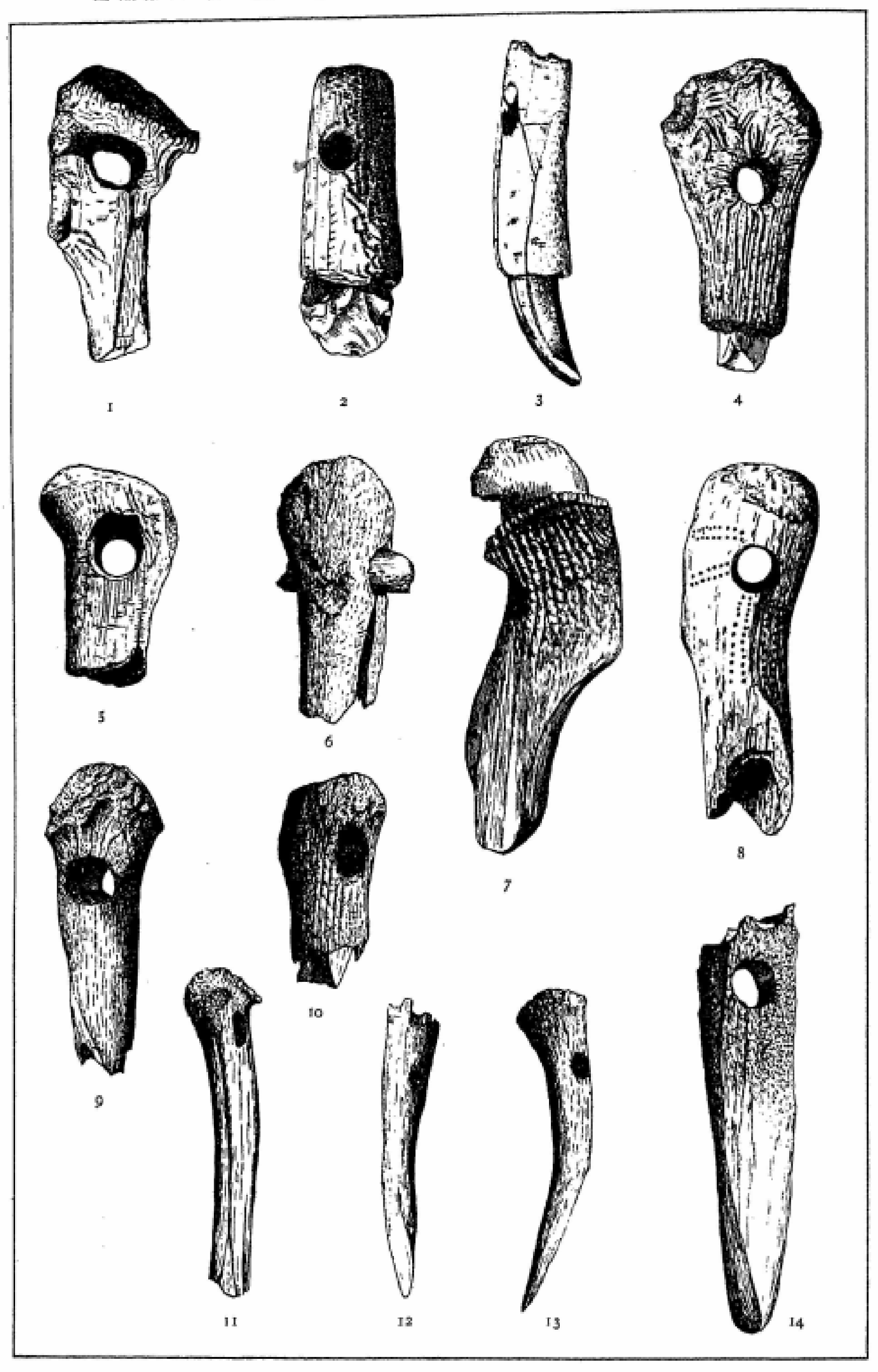




マグレモージアン細石器 (Microlith). (N. G.)

1 — 8. Maglemose 出土 (nach Sarauw)
9 — 26. Svaerdborg 出土 (nach Johansen)

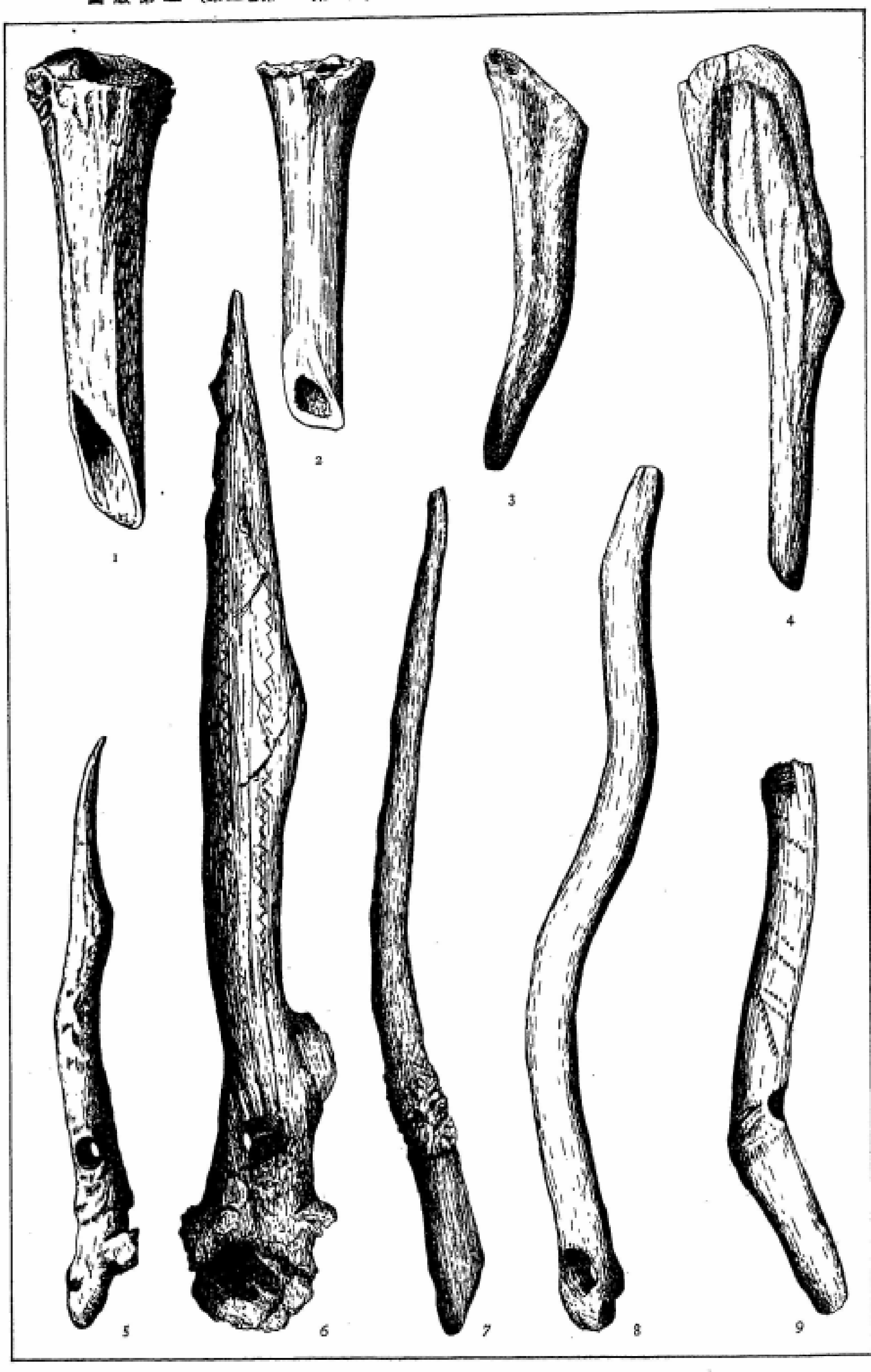




マグレモージアン骨角器 其一（$\frac{1}{2}$ N.G.）

1—3.	5.	8.	Svaerdborg	出	土	(nach Johansen)
6	7.	9.	12.	Holmegaard	出　土	(nach Broholm)
4. 10.	11.	13.	14.	Svaerdborg	第二回出土	(〃)

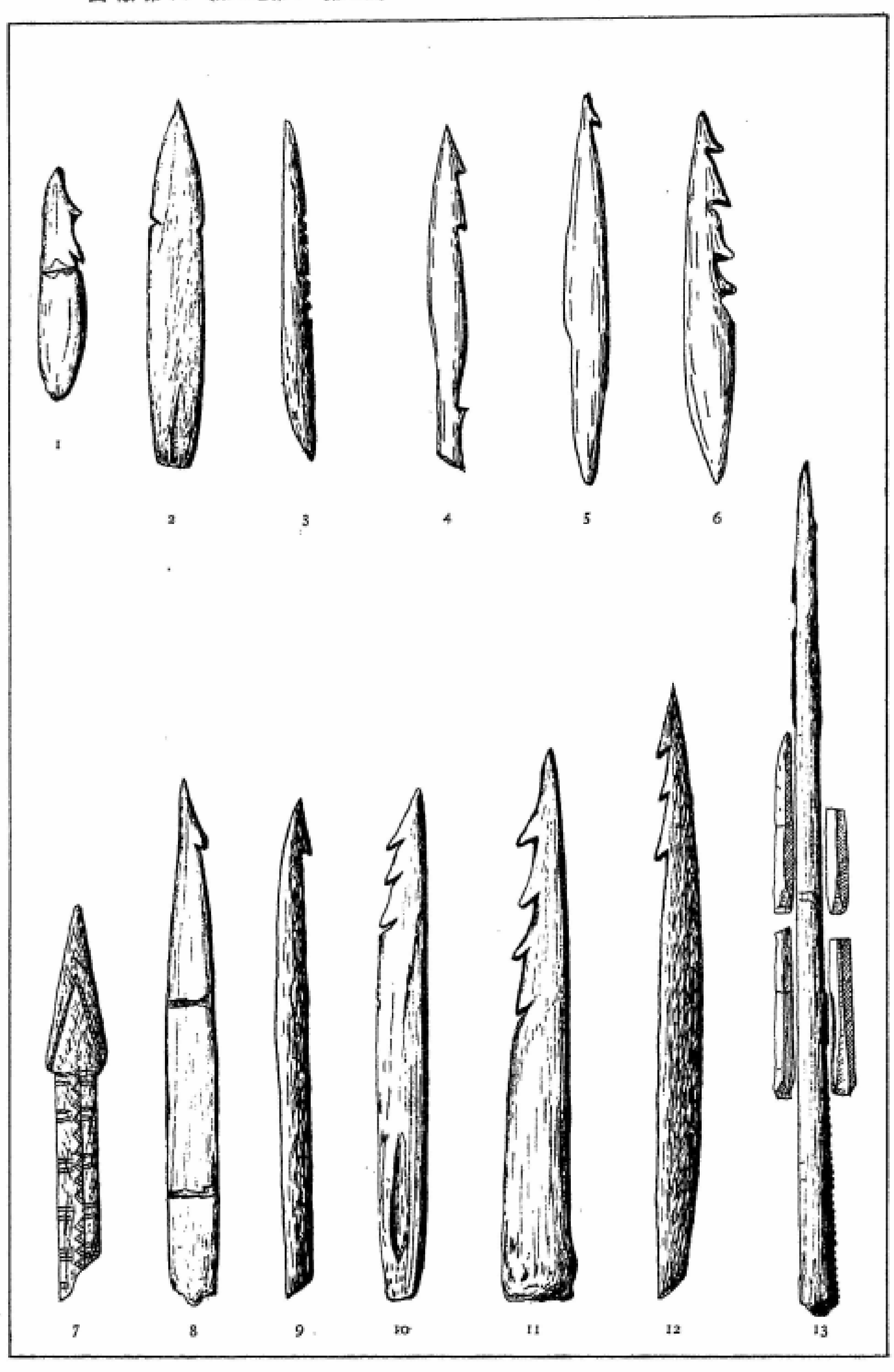




マグレモージアン骨角器 其二（½ N. G.）

1. 3—5. Svaerdborg 出土 (nach Johansen)
2. Holmegaard 出土 (nach Broholm)
6—9. Svaerdborg 第二回出土 (〃)

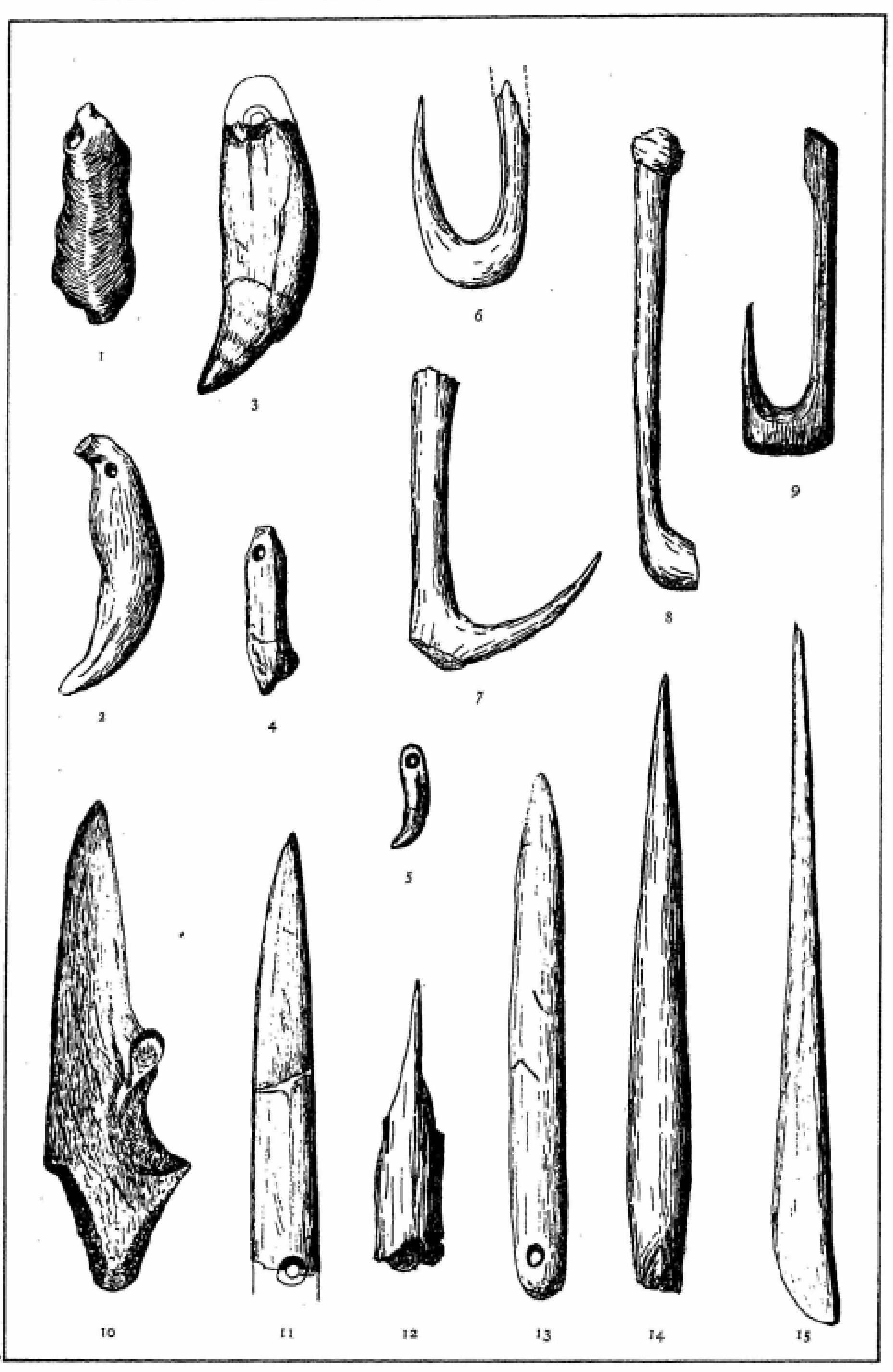




マグレモージアン骨角器 其三（½ N. G.）

3. 7. 9. 12. Maglemose 出土 (nach Sarauw)
1. 2. 8. 10. 11. 13. Svaerdborg 出土 (nach Johansen)
5. 6. Holmegaard 出土 (nach Broholm)
4. Svaerdborg 第二回出土 (〃)





マグレモージアン骨角器 其四（$\frac{1}{2}$ N. G.）

6.　7.　10.　Maglemose　出　土　(nach Sarauw)
3 — 5. 9. 11. 15.　Svaerdborg　出　土　(nach Johansen)
12.　14.　Holmegaard　出　土　(nach Broholm)
1.　2.　8.　13.　Svaerdborg　第二回出土　(　〃　)



史前學雜誌 第三卷 第二・第三號

北歐に於ける中石時代 マグレモージアン文化概説

大山柏

其一 總説

一、はしがき

本文化は、表題にも示してある如く、北歐に於ける中石時代（Mesolithikum）に屬する一文化であり、直接我が國に於ける新石時代とは、時的に見ても、空間的に於ても關係縁故はない。然しながら石器時代に於ける、三大文化階梯として、舊石―中石―新石なる各階梯に於て、中石時代の文化を見るに當つては、缺くことの出來ない大切な文化であるから、何時かの機會を得て、これを紹介して置きたいと考へて居つた。而して私としては、甚だ不完全でもあり、遺漏も多いが、先頃、今述べた石器時代三大階梯の最古である歐洲舊石時代を發表し（1）、又私共の研究所の宮坂氏は、同樣に歐洲新石時代に就て、紹介もせられて居るから（2）、共に不備不充分であつても、兎に角、邦文でもつて、歐洲に於ける舊―新石兩階梯を眺めることが出來るが、其中間にある中石時代に就ては、未だ取り纏つたものがない（3）。只僅に私が中石時代内に於ける一文化であり、本文化と同樣、北歐にある『デンマークの貝塚構成時代』（史學・七ノ二・號昭和三年）（Lit. 31）に就て、其輪廓だけを概説したに過ぎない外、中石文化に屬する文化各個に就ての記載も私は未だ邦文では見出して居らない。從つて歐洲石器時代を見らるゝに當つても、前後の二階梯のみが見られても、其文化移行が全く解らないことになる。これに就ては、數年前より何んとか、これを補ひ度とは考へないことも無いが、諸種の事情でこれを果し得なかつた。實の所、この中石時代に就ては、私の滯獨中、簡單に取り纏めてもあつたが、これも今日まで發表の機を失し、且つ最近、歐洲でも中石時代に就て、著しく着眼もせられ、研究も進むに從つて、其研究上の資料も私の研究當時より

倍加するに至り、私の研究は增補に增補を加へねばならない仕末で、舊稿は手を入れなければ、其まゝ發表出來ない有樣となつた。加ふるに私共の研究所では、目下我が國關東地方の石器時代に對し、或る計畫に基いて多くの發掘調査に從事して居る故、これが整理にも迫はれて、到底この中石研究の更進を、一時に取り纏めて研究し得ない爲、かく切れ切れに一文化づゝ發表して行く次第である。これ等が出整ふて、漸く中石文化全般の文化相が、鮮明ともなるのであり、私自身に於ても、これ等を取纏める時の速に來らんことを期待するものである。

二、マグレモージアンの成立

本文化は、一九〇三年、デンマークのザラウ（Georg F. L. Sarauw）によつて最初に研究發表せられた、同國ゼーランド島に於けるマグレモーゼ（Maglemose）の文化遺物層に因み、かく明名とせられたものである。當初これが發見の動機は、一九〇〇年の春マグレモーゼ直側なるムレルップ村（Mullerup）なる教師マチアッセン（Lehrer M. J. Mathiassen）がマグレモーゼの泥炭採集場附近で、人工遺物を發見、これをコッペンハーゲンの國民博物館に報告した爲、同年六月、ザラウの外、Theodor Petersen, G. A. Rosenberg 等が參加し、三週間に亙つて發掘調査し、これを一九〇三年、同國の Aarbög. f. Nord. Old. o. His. (Lt. 35) 誌上に發表したのであつたが、歐洲に於ける當時の一般的狀勢から云ふても、又其發表が丁翫であつた關係上からも、この重大な發見にも拘はらず、多くの人々の着目する所とならなかつた（4）。然しマグレモーゼに就ては、ザラウは一九〇五年にも發表し (Lt. 36) 其後に於ても引續き唱道もせられたが、これが Prehis Zeitschr. 1911. u. 1914. 誌上にムッヒ（I. Much）によつて譯述せらるゝに及んで（Lt. 37）より普遍化したのである。

何時より、マグレモーゼの發見に因んで、マグレモージアンなる文化階梯が編設せられたものか、私には解らない。而して多くの人々は、最近までマグレモージアンとは云はないで、マグレモーゼ階梯（Maglemose-Stufe）と呼んで居つたが、一九一九年にヨハンゼン（K. Friis Johansen）によつて、スヴェルドボルグ（Sverdborg）の發見報告があり（Lt. 14,15）續いて、一九二四年ブローホルム（H. C. Broholm）のホルメガールド（Holmegaard）の報告を見るに到つて（Lt. 23）、マグレモーゼ階梯なる文化がより鮮明となり、其以降に多くが、マグレモージアンを採用して居る樣に見られ、私もこれに從ふことにしたのである（5）。

三、マグレモージアン文化相の一般

こゝで、中石文化全般に於ける文化相に就ては、述べないけれども【(三)参照】本期文化研究の對照として、同じく北歐方面に於ける中石文化に就て見るなれば、これを最も簡單にして、第1表の樣にすることが出來る。

第1表。北歐方面、中石文化一覽表。(著者)

文化 / 內容		貝塚構成時代 Kjökkenmöddinger-Stufe	← マグレモージアン Maglemosien	← 所謂アンシルス文化 sog. Ancylus-Kultur
遺(文化遺物層)跡 Funde u. Kulturlager	主要地例	Ærtebölle, Jütland Brabland, Jütland Viste, Norwegen	Holmegaard Sværdborg Maglemose (Mullerup)	Lingby, Jütland? Westhavelland, Nord. Deutsch.? u. a.
	性質	貝塚，住居跡，洞窟貝塚	泥炭層 (Torf)	主として粘土層 (Ton)
主要遺物 Reste	人骨	完全人骨	部分	不明
	動物群 Fauna	赤鹿，野猪過半 家犬 鳥，魚，貝等	赤鹿野猪多，エルクあり 家犬 鳥，魚等	馴鹿出土 不明 不明
	植物群 Flora	カシ (Quercus) 樹木及アシ泥炭 (Holz u. Schilf-Torf)	カシ (Quercus) 松 (Pinus) 肝臟泥炭其他 (Lebertorf) U. a.	松 (Pinus) 樺 (Betura) 泥土狀泥炭 (Torfmudde)
	文化遺物 Kultur Reste	粗形直刄斧 (Spalter) 粗形曲刄斧 (Kante) 細石器 (直剪鏃) Microlith (Querschneidige) (打製のみ) 骨針，骨柄，釣針 土器加紋品稀	中形石器 細石器 (長剪鏃) Microlith (Längsschneidige) (打製のみ) 大形骨角器 骨柄,鏃器,有齒骨銛,釣針等 加紋品少なし土器なし	大石器 (Macrolith)? 大形有柄鏃 細石器 (Microlith)? 大形骨角器 有揃骨釣 (Harpun)? 加紋品，岩壁繪畫？

今この表に就て、說明をすれば、北歐方面に於ては中石文化として、三階梯がある。其一番古いものが、掲出してある如く、所謂アンシルス文化と云ふものであり、最近に於て稱道もせられたものである。從つて、これが內容も未だ整はない。議論も多いが數へ方によつては、遺物發見地數も數十箇所を見る。勿論玉石混合とでも云へるけれども、研究に價するものが尠くない。但し今回は、總てこれが內容に觸れることなく、單に、マグレモージアンより、より古き文化も存して居ると云ふに止め、將來機會を見て、存分の意見も發表することゝし、それまでは、保留して置く(6)。其次ぎが本文化であつて、其主要發見地は今日の處悉く泥炭層發見である。他に廣義の本文化と認めらるゝものは、後述して居るクンダ (Kunda, Estland) (其五。二十八及(註四)參照) 位で、今の所他に多くの單獨發見地はあるが、發見地として、確實、顯著なものがない。從つて本表に掲出してある三發見地が、其代表者であり悉くがデンマーク、ゼーランド島內にある。(第一圖參照)

Fig. 1.　マグレモージアン三遺物層位置一般圖

而してこの三發見地悉くが、廣義の所謂沼澤地發見 (Moorfunde)【後述其二。六及び(19) 等參照】であり、より狹く云へば所謂泥

炭遺物層（Torffunde）とでも云ふ可き性質であるから、遺跡學的にこれを見て、他の確たる住居跡や墳墓等の如きものと比較すれば弱い所もあり、一編年期と認むるに於ても、遺跡上、不明確な所を生ずることも亦、免れない。然し此の如き嚴密な目で見て行けば、從來石器時代に於ける文化階梯の多くが、同樣或はそれ以下のものも存して居るから、廣い意味から、見て置く(7)。

次に遺物を見ると、本期に於ては、共自然遺物として、不完全ながらも、人骨の一部があり、動物群に於ても植物群にしても、可なりの出土を見て居るから、これによつて、或る編年準據も得らるゝ。但し本期が地質學上、氷後期編年の何れに屬す可きかに就ては、問題もあり論爭もあつた(8)。然し、この問題たるや、多くが古くザラウのマグレモーゼ發見報告の當初に於て起つたもので、今日、其後發見の二者を加へて見れば、最初にザラウの考へた如くアンシルス末と云ふよりも、どうやらリトリナ始と云ふ方がよい樣にも考へらるゝが、これを大局から見て、アンシルス末と、リトリナ始との間に、どれだけの差を見出し得るか、一方では、本文化それ自身にも、經過時間もあることであるから、餘り窮屈な解釋を下す必要もない。未だ研究の餘地もあることであるから、私は稍々餘裕をおいて、大約アンシルス―リトリナの過渡期と申したいので、これに就ては、後に研究もして居る。又動物群中に示してある如く、家犬の出現は、本文化の一特色である。歐洲舊石時代には、未だ確たる家犬は發見せられて居らない。疑存するものはあるにしても、本文化の如く明確なるものを見ない。西歐方面に於ける、中石時代の古き文化、卽ち西歐中石前期とも云ふ可きアジリアン（Azilien）(9)にも中石カプシアン（Mesolithische Capsien）(10)、の前期にも、北歐の所謂アンシルス文化にも家犬出土の明なものがない。從つて、今日の發見狀態から云へば、人類が家畜を飼育した最古のものであり、獨り本期に止まらず、中石文化全般上からも、飼畜始原なる一特色と觀ることが出來る。文化遺物に於ても、中石文化全般を通じての一特徴である細石器（Microlith）が、本期に於てはよく發育しては居るが、問題の巨石器（Macrolith）は、或る相關々係を想察せしむる外、本文化には見ない。又本期の次に北歐で發展した貝塚構成時代――以下單に貝塚時代乃至貝塚期と略稱――に發展し、一特徴視せらるゝ所の祖形直刃斧及び同曲刃斧も、既に本期に見られ、貝塚期に對する、近接關係の一端も見らるゝ。骨角器に於ては、特に北歐中石文化の一特色でもある、大形中形の各種が、北歐前期より引續き存するに止まらず、大に發展もして、本期文化の特徴視せらるゝものが多い。特に其內で特出すべきものは、骨角製の釣針である。これも新に中石文化に出現したもので、從來から舊石時代に釣針が存したものと想定せられては居るが、確實なものではない(11)。而して單に小なる一釣針に過ぎないと云はゞ云はれるかも

知れないが、釣針の發明は、漁獲上の一大進歩であつて、本期人が未だ全く漁者たる分業に服し得ないものがあるにせよ、少なくとも、獵者でもあり、漁者でもあり得る資格を證すべき貴重なる證據品たる可きもので、次期に貝塚民が生る可き、搖籃は、こゝにあると云ふも敢て過言にも當るまい。更に骨角器中には、僅少例ではあるが、石入骨銛（Vogelpfeile）と稱せらるゝものが、マグレモーゼ並にスヴェルドボルグより出土して居る。この石入骨銛は、既に古くより、北歐の各地に亙つて、僅少ながらも發見せられて居つたが、多くが各個に隨伴物なしに發見せられたり、中には沼澤中より見出さるゝ等、其出土の明確なるものがなく、多年其所屬に就て、學者を惱すものがあつた【〔註三〕參照】大モンテリユス（Oscar Montelius, 1843—1921）の如きは、流石に卓見があり北歐としては、古き文化に屬すべきであることを稱しても居つたが(12)、果して本期に出土を見、一つの問題が解消せらるゝに到つた。又骨角片乃至骨角器中には、往々彫紋の施せるものが、本期に見らるゝ。これに連關して例の氣早やの人々からは、舊石末のマグダレニアンの一遺承とまで喧傳もせらるゝが、其內容は、其四の二十二にも述べても居る如く、其要素を異にして居る。而して遺物全般を見ると、新に出現を見たものも多いが、未だ土器は全くなく、次の貝塚期に始めてこれを見て居る。

以上の如く、これを通觀して見ると、中石文化としても、全般的では無いにせよ、其特殊性のある部分が見らるゝと同時に、この北歐の三階梯、夫々に於ても亦、其個別的な特色一般が、一通り知り得ることゝ考へる。特に本文化の如きは、一面に於て、北歐前期の遺承とも見らる可きものが存すると共に、他には全く新しい文化要素が出現して、次期への直接祖原をなす樣なものも多く、同じく中石文化內にあつても、其中央に位置することが認められよう(13)。

(1) 拙著、歐洲舊石器時代。考古學講座。一九二九年以下單に「拙著、歐洲舊石」と略稱。又卷尾の文獻番號（Lt. 30）を附することもある。
以下括弧を用ひ、同樣の體裁に記載するものは、文獻を意味する。雜誌の略號は、昭和五年、史前學年報所載例に從ふ。
又舊石時代は、獨り歐洲にのみ限つたものではなく、アフリカ、印度、小アジア、支那?等にも發見せられても居るが、其研究が普遍的でない爲、私自身には多くを知つて居らない。然し舊石研究は、歐洲のが今日では、一番研究進展して居り、他の標準ともなるのであるから、以上の樣に、舊石研究の主體をなす、歐洲に於ける舊石時代に就て述べたものである。

(2) 宮坂光治、歐洲新石器時代。考古學講座。(Lt. 21)但し本書は不幸にして未完了である。歐洲と稱しても、獨逸平地の狀態、西歐系新石時代の遺物等が、上稿せられずに終つて居る。
この新石時代に就ては、舊石同樣、獨り歐洲のみでなく、より廣い。我國は勿論、アフリカ、小アジア、印度、南洋、シベリア、支那、アラスカ、南北アメリカ等殆んど世界各地に亙ると云ふも過言でない。而して舊石とは異り、文化階梯か新しいだけ、研究資料も豐富で

あり、從つて研究上も容易でもあるから、夫々の文化相も明となり、地方色も見らるゝし、特に我國を中心として、四周との比較も大切のことであるから、歐洲新石だけでは、我が國の研究の比較資料としては、より不足でもある。然し一面から見ると、舊石こそ、色々簡易に取纏つた研究はあるが、新石に於ては、歐洲に於けるものでさへも、よく取纏つたものが甚だ尠い。從つて、こんな現況であるから、世界の新石を、よく咀嚼して、これを程よく取纏めることが困難であると云ふことも、考へて戴かねばならない。更にこれ等新石研究上の文獻に就ては、拙稿、石器時代に關する歐米の文獻、人類、四一ノ六、七、八參照。

（3）(2)に述べた如く、石器時代としは、最も古くより發見もせられ、引續き研究もせられて居る、歐洲新石すら、取纏つた文獻が稀なのであるから、これに遲れて研究を開始せられた、中石研究が、歐洲に於ても、未だ取纏つて居らないのも、順序から云へば當然である。勿論、Hubert Schmidt, (Lt. 38) 程度に簡潔なものであるなれば、相當に見られもするけれども、それを一歩踏み越したものは、私不學の故か、未だ見てない。空間的に某地方のを取纏つたのなら、あるが、これとて、同じ歐洲でも無い所もある。從つて、これ等を取纏めるには、原報告に依らねばならない。今述べるマグレモージアンの如きも纏つては居らない。只今の所では、其主要發見地が、三ケ所に過ぎないから、丁語に悩まさるゝ所が多いけれども比較的容易に纏まりもする。

又中石時代の一覽とでも云ふべきものは、拙稿歐洲石器時代研究の概要、史前雜、一ノ三、並に北歐石器時代研究史の概要は、拙稿、【(Lt. 31)第一章】參照。

（4）ザラウの一九〇三年の研究も、全く氣付かれないのではない。モンテリユス (Oscar Montelius, (Lt. 23) (1906) ヘルネス (M. Hoernes, 1908) 等の碩學の研究には、夫々立派に引用せられても居る。

（5）私か滯獨研究中は、未だマグレモーゼ階梯と云ふて居る頃であつた。而して、コッペンハーゲンに研究に行き、ザラウに會見して、親しく其敎を受け、獨りマグレモーゼ出土遺物に止まらず、スヴェルドボルグのも、亦當時未發表であつた、ホルメガールド遺物をも、比較對照して說明を受けたことは、拙稿、歐米見聞記。人類、第四〇ノ二。六六項。p.1に概述してある。又スヴェルドボルグもホルメガールドも、文獻で見らるゝ樣、佛文に全譯せられて居るから、速に普遍化もして居る。又ホルメガールドの論文に就ては、私ば、人類、第四一ノ九、第四六七項に簡單に紹介してある。

更にこゝで注意を要す可きは、人々か如何なる程度に、マグレモージアンと云ふて居るかであつて、氣早な人々は、マグレモーゼの報告のみで、編說もして居るから、マグレモージアンと云ふて居る書物が、一九二四年、ホルメガールド報告發表以降であるなれば、確かであり、一九一九年以前なれば、スヴェルドボルグも見ずに編說したものと見らるゝから、よく其人々の、本期に對する考をたしかむ可きである。勿論それ以前は本文の樣に多くが單にマグレモーゼ階梯とのみ云ふて居る。

又蛇足ではあるが注意すべきことは、マグレモーゼもホルメガールドも共に同一地名が、他に二三あるから間違はぬ樣、氣を付ければならない。前者の方は、特にコッペンハーゲンのすぐ北方一五粁の所にも、マグレモーゼがあるから、史前學者でもないと、この方と誤る。それ故マグレモーゼと云ふよりは、Mullerup-Mose と云ふ方が、安全である。後者に於ても、コッペンハーゲンより東南一〇粁の Saltholm 島内にも同名異地があり、文化遺物層のある方は Fensmark に於けるホルメガールドで Næstved 町より北方約一〇粁の所に

ある（第一圖參照）。

（6）私の本表で述べて居る、所謂アンシルス文化に就ても諸論がある。今これを次の樣な一覽として、參考に供する。

1。リングビー（Lyngby）を以て、獨立文化と認むるもの、卽ち Lyngby-Stufe として、アンシルス以前の文化と考へるもの。

2。リングビー階梯を含んで、同じくアンシルス以前とするも、これを强く、ヨルヂア文化 Yoldia-Kultur とするもの。而して、これは舊石であるとも、中石とも見られて居る。

3。この樣な、古い階梯を認める場合、本期文化をアンシルス文化に編入するもの。

4。本期文化は、アンシルス文化外とするも、アンシルス文化より本期に至る過渡期として、デンマークに於けるリキゲ Vig（Lt. 12）等を編設しようとするもの。

等色々ある。今これが詳細に就ては、本文でも御斷りしてある如く、本硏究では述べないが、只後述して居るクンゲとの關係がある故、この點に就て、こゝで說明をして置く。このリングビーなる遺物層は、主として粘土層であり、この粘土層が所謂極寒系のドリアス粘土【本文、其二、六、1（34）等參照】と云はれ、且つ問題視せらるゝ所は、馴鹿（*Rangifer tarandus*）角の出土にある。而してこの馴鹿出土を見る故か、かく古くも云はるゝのである。先づ其出土層たるドリアス粘土に就ても、大局上、氷後期としては古かる可きことは、認められもするけれどもこれを輕々敷は取り扱ひ得ない。これに就て私自身の考へは、次に發表するまでは、保留したい。又馴鹿角の出土は、單に悉くか、其大部であるか等其出土量が、他の哺乳類出土と比較した上でなければ、私としては、決し得ない。もし僅少なる出土のみであつたなら、さまで驚くこともなく、これのみで、馴鹿盛棲時代と決定するは、過早である。E. Geinitz（Lt. 6）S. 13 によれば、氷後期に於ても、其北よりの地方では、尙多くの馴鹿が遺留するものがあり、獨逸地方では、遙に下つてローマ時代のシーザーの時までも、これを見て居り、スコットランドでは、西暦十二世紀の頃までも、其最後の遺留者を見たとのことである。それ故、氣候環境の上から云ふてもまだ今日の程度にもなつて居らないと考へらるゝアンシルス時代【其二ノ五第四表等參照】であり、地理的にも北寄りである、北歐方面に、馴鹿の遺留者が存したからとて、猥りに不當視するには當らない。問題はより多く正確なる資料に基いて考定せねばならない。それ故、この資料の如何によつては、より古く、或はヨルヂア時代に入るかも知れないし、又は存外、新しいかも知れない。只今の所では、少なくとも私自身には、これを考定するだけの資料に缺くものがあるから、硏究の上、此文化を發表する時までは保留するものである。而して、こゝでは、假に一纒めとして、所謂アンシルス文化として、取扱つて置く。

（7）根本に於て、遺跡なるものに就ては、學者により色々と考へられ、我が國に於てすら一致を見て居らない。今こゝで人々の考を吟味する餘裕と必要とを有しない。又獨り我が國で區々であるばかりでなく、歐洲等になると、普遍的に其遺跡觀の甚だ淺薄なるものが多い。歐洲に於て遺跡と云ふのは、例のゼンテリユスの Der Fund 或は Station, Fundstation とも云はれもして居るが、總括的に其意識は弱い。從つて多くが遺物偏重であるから、本期の如き、後述して居る如く、文化遺物に富んで居るから、遺物上の特徵も、捉へ得るから、歐洲で云へば、上の部であると申し得る。又こゝでは、本期に對し特に遺跡と云はず、文化遺物層（場合により文化層乃至遺物層と略稱）と申したことに就ては考もあるが、これは（52）に於て更に述べる。

（8）この氷後期の自然編年、特に植物編年の如きは、甚だ古く、一八四二年 J. Steenstrup, (Lt. 43) によつて行はれ、爾來、動物、植物、地質等の各個乃至綜合編年研究は、多くの諸大家により繼承せられて居る。これが詳細は、H. Hahne, (Lt. 11) の文獻一覽を見られたなら、如何に多くの研究文獻が存するかゞ知られよう。從つて、この研究も非常に進歩してゐるだけ、手輕なものではない。ザラウのマグレモーゼーアンシルス說に對し、リトリナ說のセルナンデル (Lt. 40, 41) の如き、第八圖にも見らるゝ如くこのマグレモーゼを實視研究もして居るのであるから、兩論共に、其根柢は夫々深い。これに就ては、其二、其三で、これ等の內容に就て述べても居る。

（9）アジリアン文化に就ては、私は未だこれを紹介したことが無い。さりとて、こゝでこの文化に就て述べる餘裕がないから、將來紹介する時まで、其詳細に就ては御待ちを願はなければならない。只其要旨を述ぶれば、マグダレニアン文化より引續いて、フランス、北スペイン、南獨地方に、其文化の所謂遺承者（私は單なる遺承のみでなく、カプシアン要素の混入を認める）であると云はれて居る文化で、舊石末より、衰退したものと考へられて居るもので、チーパーマイヤーの所謂續舊石（Epipaleolith）と稱せられて居る文化である。

（10）カプシアンに就ても、（9）で述べたアジリアンと同樣、多くを述べればならぬものがあるが、未だ發表してない。【拙著、歐洲舊石。(Lt. 30) 後編、七一―八八項參照】但し一言注意をして置くことは、このカプシアン內に於ける編年が確立を見ては居らないが、カプシアン文化は、獨り舊石に止まらず中石にまで及んで居る。それ故この中石の部分をかく私が中石カプシアンと呼んで居るので、歐洲では、まだこんな風な云ひ方をしたものを、私は見て居らない。而してこの中石に入り込んで居るカプシアンは、單に中石前期に止まらず、中期以降にも及んで居るらしい。より明確には申されないが、ポルトガル Mugen 貝塚の如きは、其後者たるの一例と考へて居る【(58)參照】。

（11）釣針に就ては、其四の二十。G及び註四、參照。

（12）O. Montelius, (Lt. 22) S. 25……Sie stammen wahrscheinlich aus einer sehr frühen Perioden der Steinzeit.

（13）この中石文化に就ては、最近歐洲では、大に發展を見ては居るけれども、尙一部には舊說を保持して居るものもある。チーパーマイヤーの如きが其顯著なるもので、舊石の外（9）で述べた樣な續舊石（Epipaleolith）と他は、原新石（Proto-Neolith）との二つに分つて中石文化を否定して居る。【H. Obermaier, Mesolithikum. Reallexikon der Vrogeschichte. 1927. (Lt. 32) 參照】而して本期文化の如きは、やはり續舊石に入れ、强いカプシアン終末（Schlusscapsien）の影響が入つて居ると云ふて居るが、證據はなんにも出してない。本文で述べ居る樣な、本文化特徵を何んと見て居るのやら、私には不可解に屬する。何れは、聞いても見たいとは考へて居る。

其二　自然環境の一般

四。姉妹學との關係。

こゝに姉妹學的概要として述べるものは、主として、動物界及び植物界である。特にマグレモージアンの文化遺物を包含するものが、泥炭層である以上、或る所までは、これ等に就ても僞れねば、これをよく解釋し得ない。勿論、こうした姉妹學研究も、其目的とする所は、文化研究の爲であり、文化研究一部を、より明確にするに外ならない。故に本來の自然を對象として研究せらる可き、

夫々の姉妹學とは、自づと其目的を異にして居る。再言すれば姉妹學的研究の結果に基き、これより文化研究に連關せるものを求め、以て文化相を究明するにある所だけは、茲に明にして誤解に備へて置く。又本文化存在地であるデンマーク、ゼーランド島に於ける地形の一般、並に一部の地質關係に就ては、甚だ雜略ではあるが、其一端は既に貝塚時代の研究(Lt. 31) S. 13—20 に於て述べてもあるから今日は、これが重複を避け、主として前に述べ足らない、動植物界の一般を紹介して置く。又地理地質一般に就ては、參考の爲め、第二表に他と共に取纏めて掲出して置く。

第二表。北歐氷後期各科綜合編年。(著者)

文化 Kultur ╲ 自然 Natur	地質 Geologie			動物群 Fauna		植物群 Flora	
	時代 Zeit (Geochronologie)	土地の運動 Erdbebewegung	氣候 Klima	貝類 Muschel	鹿類 Hirsch	樹木 Holz	泥炭 Torf
鐵時代 Eisenzeit ? 青銅時代 Bronze-Zeit 新石時代 Neolithikum	ミャ期 Mya	上昇 Hebung	大陸的 Continentalisch	Mya Limnäa	赤鹿 Rothirsch レー鹿 Reh ダム鹿 Damhirsch	ブナ Buche ハンノキ Erle	新水蘚泥炭 Jüngerer Sphagnum-Torf
? ? 中石時代 Mesolithikum	リトリナ期 Litorina	下降 Senkung	海洋的 Atlantisch 準海洋的 Subatlantisch	Litorina Tape	赤鹿 Rothirsch	ブナ Buche 檞 Eiche	境界線 Grenzhorizont ワタスゲ泥炭 Wollgras-Torf 古水蘚泥炭 Aelterer Sphagnum-Torf 樹木アシ泥炭 Holz-u. Schilf-Torf
?	アンシルス期 Ancylus	上昇 Hebung	北的 Boreal 準極北的 Subarktisch	Ancylus Planorbis	エルク鹿 Elch	松 Kiefer 樺其他 Espe u. Birke	肝臟泥炭 Lebertorf 泥土狀泥炭 Torfmudde.
? 舊石代時? Palæolithikum	ヨルジア期 Yordia	下降 Senkung	極北的 Arktisch	Yordia Astarte Cthrina	馴鹿 Ren	樺其他 Espe. Birke ドリアス Dryas	

本表に就ても、これを詳細に研究すれば、色々あるけれども、簡界に一纏にしてある關係上、以下段々と解説して行く。但し本表に於ける植物編年は、古き研究に依つたものであるが（14）、最近に於て、更に新しき試みがある。所謂花粉分析(Pollenanalyse)研究なる一方法が、主として歐洲大戰以降のスエーデン等に行はれ、今日に於て植物編年に一新機軸を與ふるもの丶由を聞知し、本期のホルメガールド研究中には、既にこの方法を採用もして居る（其二の十及び第十一表參照）が、未だこれが詳細は、私には解らない（15）。

これを要するに、史前遺物なるものが、某地層内に存し、且つ我が國等とは異り、同じく石器時代であつても文化上、相當な隔てを存する各階梯が複在する以上、これ等の石器時代に於ける文化階梯を朴する爲には、先づ以てこれ等の姉妹學的研究に基いて其發見地層の層位學的位置、卽ちこれが自然年代を考察すべきであつて、この考定に基礎づけられて、史前學上の文化階梯が考究せらる丶のが順當と考へる。特に本文化の如きは、三發見地悉くが、泥炭遺物層なる、特異相がある故、これを解明するには解明するだけの植物編年等に對する研究及び知識も必要となつてくる。今この要旨に從つて以下動物植物の夫々關係に就て、其一通りを概說して行く。

五。動物編年

一般に氷後期に於ける動物編年は、次に述べて居る植物編年の樣には、顯著明瞭ではない。勿論、氷後期地質編年の如きは、第二表でも見らる丶如く、夫々貝類名を以て代表せられても居るが、哺乳類の如きは、後述して居る鹿類編年が有名である外、一般的のものは、私は氣付いて居らない。鳥類、魚類等の編年的研究が存するか否か、より不明である。洪積動物に於ける鳥、魚等ですら、私は困んだ所から考へると、研究がありとしても一般的に人々には知られては居らないものと考へらる丶。氷後期に於ては搜出した結果、次の樣な貝動物群（Molluskenfauna）が存して居ることを發見し、漸く第三表の樣に取り纏めることが出來た。

第三表。北歐氷後期貝動物群一覽。

1. *Litorina Litorea* 2. *Tapes decussatus* 3. *Mya arenaria* 4. *Cardium edule* 5. *Tellina baltica* 6. *Mytilus edulis* 7. *Neritina fluviatilis* 8. *Nassa reticulata*	リトリナ期
1. *Ancylus fluviatilis* 2. *Limnaea ovata* 3. *Planorbis marginatus* 4. *Bithynia tentaculata* 5. *Pisidium amnicum* 6. *Neritina fluviatilis*	アンシルス期
1. *Yordia arctica* 2. *Y. hyperborea* 3. *Astarte borealis* 4. *Cyprina islandica* 5. *Leda pernula* 6. *Tellina (Macoma) calcarea* 7. *Lunatia groenlandica*	ヨルジア期

備考。本表は主として、G. de Geer; E. Geinitz 等により作出。

この外、メンツエル【Hans Menzel, (Lt. 20) S. 213—216】は、淡水乃至陸産貝類に就ても、第三表の様な編年を試みても居るが、今回はこれを略し、同氏の試みた、哺乳類中鹿類を以て代表した、鹿類編年を挿出する。

第四表。Menzel 氏鹿類編年。【Zeitschr. f. Ethnol. 1914. S. 218.】

Zone V 現氣候	Rothirsch 赤鹿 Reh レー鹿 Damhirsch ダム鹿來る
Zone IV 海洋的氣候	Rothirsch 赤鹿全盛 Reh レー鹿出現 Elch エルク鹿解消
Zone III 大陸的中庸氣候	Rothirsch 赤鹿全盛 Elch エルク鹿次位
Zone II 準氷河的氣候	Rothirsch 赤鹿出現 Elch エルク鹿全盛 Ren 馴鹿解消
Zone I 氷河的氣候	Ren 馴鹿全盛

備考。メンツエル氏の五帶は、大約第一と第二の前半とが、ヨルヂア期に、第二後半より第三までが、アンシルス期、第四がリトリナ期、第五がミヤ期に相等する樣に考へらるゝ。この關係は、第二表に就て比較して見て戴きたい。

更に本表に就て見れば、一般哺乳動物群に於ても、北歐に於けるヨルジア時代には、主として西歐方面の舊石時代末に於けるマグダレニアン動物群と大差なき程度の、寒系諸動物があり、其代表として、第一帶に馴鹿を出されたものと考へる(16)。其後には、氣候溫向に伴ふて、漸次森林系動物群(Waldfauna)が入り込んできて、アンシルス期を經てリトリナ期に及んで、其高潮期に達し、氣候はこれより寒向して、今日までになつて居る變化が、本表第四、第五帶等で見らるゝ。本文化に關係深い所は、第三帶及び第四帶初にある。而して此研究がある故、本文化三遺物層調査者は、夫々この鹿類、特にエルク鹿の存否に就て、常に注意もせられた次第である。但し一般狀態として、前述した樣、氣候の變化が漸進的であり、且つ舊石時代に於ける各文化階梯の樣に、夫々の文化階梯に於ける其經過時間が比較的長期に亙つて居ると考へられて居るのとは異り、この五氣候帶に於ける夫々の期間が、より短くも考へられて居るから、舊石動物群の樣な、より大きい違いも出てこず、從つて一般哺乳類としても、夫々顯著な動物群も見れず、漸く本表の樣な、鹿類編年が出來たものと私は考へて居る(17)。

六。植 物 編 年

北歐に於ける中石時代の研究、特に其編年學的研究には、この植物編年が、編年根柢を形造ることが多い。其内でも泥炭遺物層等に於ては、殆んど離る可からざる關係がある。これ等に對し、關係緣故がより少なき我國等より眺むる場合には、これ等植物研究等が如何にも不必要にも、亦廻り遠く見へるかも知れないが、史前學上の編年位置をより確實にする爲には、何等か自然法則に基く確實なる基礎によらねばならない。前述した如く、北歐方面に於ける動物編年に準據を求むるにしても、其確實性の不足を補い、乃至はこれに立脚し得ざる場合の如きは、植物編年によらねばならぬ場合も生ずる。而して植物編年として、一通り發育もして居る北歐に於ては特に然りであつて、この北歐石器時代を見る爲めには、一通り研究がしてないと、研究の頓挫も生じ得る。これは單に中石研究に止まらず、新石以降にも、所謂沼澤地發見(Moorfund)乃至は泥炭遺物層は、少なくない。例へば北歐ではないけれども、南獨よりスヰスに亙る、所謂杙上住居(Pfahlbau)系の如きは、遺跡一部が泥炭化もして居る顯著なる一例であり(18)、青銅時代以降に於ても、北歐方面には、所謂沼澤地發見なるものゝ中には、完全人體等まで見らるゝ(19)から、獨り中石研究に止まらず、歐洲史前學研究上、泥炭研究の必要も出來てくる。最今私共も、我國に於ても、泥炭遺物層の發掘研究をなし、是川の如きは、本誌上(二の四)で報告もして居ることは、諸者の記憶せられて居る所と考へる。

１。**樹木編年**。この樹木編年と稱せらるゝものは、北歐氷後期に於ける代表的な樹木(草も含む)の變遷であるが、これ等の樹木は通常泥炭層に含まれ、場合によつては、粘土層に包含せられて居るものを、これ等の變化に從つて編年したもので、最も古く、一八四二年、デンマークの Japetus Steenstrupp により研究發表せられ、今日に於ける樹木編年の或る根柢ともなつて居り、これに基礎づけられて、今日まで、多くの研究がある(20)。

第五表。Steenstrupp 氏、北歐氷後期樹木編年。

4. Erle (*Alnus glutinosa*) ハンノキ
3. Eiche (*Quercus Pedunculata*) 槲
2. Kiefer (*Pinus silvestris*) 松
1. Espe= Zitterpappel (*Populus tremula*) テリセンヤマアラシ

備考。本表はステーンストルップの原報告(文, 42)は見て居らない故、J. Hoops【(Lit. 13) S. 8】に基き作出したものである。

勿論以上は、時代も古く、植物編年の當初でもあるから、今日から見れば、一部の改正も餘儀なきことゝは云へ、第二期以降に就ては、全く今日も用ひられ、それが大約ヨルヂア時代よりミヤ時代なる、貝類に基く地質編年と一致して居る所は、ステーンストルップの研究に、敬服する所以である。只當初の第一期のみ、より狹き、ドリアス(みやまぐるま)(*Dryas octopetala*)を以てせらるゝのが通常である(21)。又これ等の植物編年は、申すまでもなく、各地悉く一樣ではない。こゝではデンマークを中心として、北獨平地及びスカンジナビアの平地地方に於ける編年である(22)。

今第一、第二表及び第五表等に掲出してある、植物編年に於て、夫々の階梯に於ける植物群に就て、先づ其古い方から順次に見て行く。其最初の階梯はヨルヂア時代に於ける植物群で、前述した如く、多くドリアスを以て代表せられ、これをドリアス植物群(Dryasflora)と呼ばれ(23)、これに隨伴する植物としては、次の種類が其主要なるものとせられて居る。

第六表。ドリアス植物群(Dryasflora)一覽表。

1.	ドリアス(みやまぐるま)	*Dryas octopetala Lin.*	Silberwurz
2.	ヒメカバ	*Betula nana Lin.*	Zwergbirke
3.	北極柳	*Salix Polaris Wahl.*	Polarweide
4.	タデの一種	*Polygonum viviparum Lin.*	Spitzkeimende Knöterich
5.	ウキルソン蘚	*Hypnum turgescens*	Nordische Moose

以上は單なる代表的のものだけであつて、外にも多くの植物はある。又これ等は氣候酷烈な時代の代表者であるから、これがヨルヂア期に當ると云ふても其末期ではない。而して以上の植物群も南部スカンジナビアの平地々方、デンマーク、北獨地方に見たものである。

このヨルヂア時代の末になると、氣候は幾分かやわらいでくるので、このドリアス植物群は、これに從つて、漸次北退して、これと伍して、南から樺の一種(*Betula odorata Bechst*=Birke) やテウセンヤマアラシ (*Populus tremula*) 等が生へてくる。これ等樺等は、其氣溫温向に比例して、漸次ドリアス植物群を驅逐して、これと代る樣にはなるが、それでも、まだ〱ドリアス群の遺留者も相應に交り、そこに樺等に稍々遲れて、赤松 (*Pinus silvestris*) も、ぽつ〱交つてき、こゝに樺とヤマアラシとを主體とした、一編年期が設定せらるゝ。丁度、第五表のステーンストルツプ編年の第一期の樣な時代が出來上る。これは一面から見れば、ドリアスより次の赤松に移る、一過渡期とも見らるゝものであつて、ヨルヂア末よりアンシルス始に亙る時代と考へらるゝ。この樺時代に屬する主要なる隨伴植物を例出すれば、第七表の如く揭出し得る。而してこの中には、ドリアス群の遺留者は、除いてある。

第七表。樺時代代表植物の1例。(Birke u. Espenzeit nach J. Hoops u. P. Graebner)

1.	樺の一種	*Betula odorata*	Birke
2.	テウセンヤマアラシ	*Populus tremula*	Espe=Zitterpappel
3.	赤松の一種	*Pinus silvestris*	Kiefer
4.	側柏樹	*Juniperus communis*	Wachholder

5. コケモモの種　*Waccinium myrtillus*　Heidelbeere
6. 胡頽子科の一種　*Hippophäe rhamnoides*　Seedorn＝Sanddorn
7. 柳の一種　*Salix caprea*　Sahl-Weide
8. 同　*S— glauca*　?
9. 同　*S— aurita*　Ohr-Weide, Round-eared Willow
10. 同　*S— cinerea*　Werftweide

この隨伴植物たるや、其過半は、これを溫度上の習性から見れば、尙著しく北的であつて、所謂寒系植物群 (Borealflora) と云はば、云へよう。然しこの樺時代も、氣溫の上昇と共に、漸次北移して、其跡は代つて　赤松が王座を占むることゝなり、こゝに松期が成立する。而してこの時代は地質學上、純然たるアンシルス時代に入る。この松期植物群中には、樺期の遺留者は勿論、地形によつては、ドリアス群までも、殘存するものがあるけれども、これ等遺留者共を除き、新しい松の隨伴者を求めて見ると、次表の樣なものがある。

第八表。松時代主要隨伴植物一覽 (Kieferperiode nach J. Hoops)

1. ナヽカマド(薔薇科)　*Sorbus (Pirus?) aucuparia Lin*　Vogelbeerbaum＝Eberesche
2. エゾウワミヅ(同)　*Prunus padus Lin*　Traubenkirsche＝Ahl
3. エゾイチゴ(同)　*Rubus idaeus Lin.*　Himbeere
4. 忍冬科の一種　*Viburnum opulus Lin.*　Schneeball
5. 鼠李科の一種　*Rhamnus frangula Lin.*　Kreuzdorn
6. ワラビ　*Pteris aquilina Lin.*　Adlerfarn
7. ヤマハンノキ　*Alnus gincana Willd*　Grauerle
8. ハンノキの一種　*Al-　glutinosa Lin.*　Schwarzerle
9. ニレの一種　*Ulmus montana Lin.*　Bergulme

10.	ハシバミの一種	*Corylus avellana* Lin.	Hasel
11.	菩提樹の一種	*Tilia parvifolia* Ehrh.	Winterlinde
12.	ミツキ(山茱萸科)の一種	*Cornus sanguinea* Lin.	Hartriegel
13.	薔薇科の一種	*Crataegus monogyna* Jacq.	Weissdorn
14.	槲の一種	*Quercus pedunculata*	Eiche

本表で見ると、前の樺時代に對しては、遙に溫向して居るもの丶、これを吾人等日本の樣な、より溫暖な所より見れば、この松時代と云ふても、まだ〳〵溫暖とまでは申されない。元々其地理的位置が北歐であるから、北歐として見れば、より溫向して居ることは、よく認められもする。然し氣溫の上昇は、松期をして、永く其王座を占めさせない。この松林の中に入り込んできた槲(*Quercus*)が漸次松と代つて、其優位を奪ひ、終に槲期を形作るに至るのである。卽ち地質年代から云へば、アンシルスの終り頃より、漸次槲が擡頭してき、リトリナ期に入つて、全く槲期として代表せらる丶に至つて居る。而してこの槲期後半が、北歐に於ける氣候の最も溫良であつた頂點であつて、其後に今日の樣にまで再び寒向もして居る。而して、この槲期半ば頃までが、文化上、中石時代である。又この槲期と雖も、槲森林は、北獨平地、デンマーク、南部スエーデンの平地地方を覆ふたに過ぎず、それ以北、並に山地地方では、松、樺等が依然其主位を占めて槲期にまで到達せずに終つて居る【(22)參照】。この槲期に於ける主要隨伴植物は次の樣なものだちである。

第九表。槲期主要植物群一覽 (Eichenperiode nach J. Hoops u. P. Graebner)

1.	モミジの一種	*Acer platanoides* Lin.	Spitzahorn
2.	トネリコの一種	*Fraxinus excelsior* Lin.	Esche
3.	ヤドリギ	*Viscum album* Lin.	Mistel
4.	キヅタ	*Hedera herix* Lin.	Efeu
	以上は主としてスカンジナビア半島		
5.	ニレの一種	*Ulmus montana*	Ulme

6.	樺の一種	*Betura odorata*	Birke
7.	テウセンヤマアラシ	*Populus tremura*	*Espe*
8.	赤松の一種	*Pinus silvestris*	Kiefer
	以上はデンマークにて前々期より殘存の一例		
9.	冬青科の一種	*Ilex aquifolium Lin.*	Stechpalm
10.	ジギタリス	*Digitalis purpurea Lin.*	Rother Fingerhut
11.	金糸桃科の一種	*Hypericum pulchrum*	?
12.	景天科の一種	*Sedum anglicum*	?
	以上が所謂レイツクス植物群 (Ilexflora)		
13.	菩提樹の一種	*Tilia grandifolia Ehrh.*	Sommerlinde
14.	野生のリンゴ	*Pirus malus*	Willde-Apfel
15.	シデ属の一種	*Carpinus betulus Lin.*	Hainbuche
16.	一　位	*Taxus baccata Lin.*	Eibe
17.	モミジの一種	*Acer campestre Lin.*	Feldahorn
18.	ニワトコ	*Sambucus nigra Lin.*	Hollunder

以上の内でも、特にイレツクス植物群が、北歐に於ける最高の氣候溫良期を示すものとせられ、リトリナ盛期より後半に亙る間と考へられて居る。更にリトリナ終末期として、樅の一種 (*Picea excelsa Link*=Fichte) ブナ (*Fagus silvalica L.*=Buche) 等の時代に移つて行くのであるが、リトリナ後半以降は、最早や中石時代に關係がなくなる故こゝでは述べない。

これで漸く、北歐に於ける中石關係の樹木編年の概念を濟すことが出來たが、これを綜合して見ると、旣に第二表に揭出した如き、階梯が出來、古い方から、ドリアス (I) 樺 (II) 松 (III) 槲 (IV) の四期に分つことが出來る。尙一部の研究では、この四期内に於ける、小期分類にまでも進んで行くものもあるが、今回は單に樹木編年としては、其概要を紹介するに止め、尙これと對

陋する泥炭編年も亦、概述せねばならないのであるから、この位で次に移る。而して中石以降の關係に就ては、單に第二表に概示した外、こゝでは略する。

2。**泥炭編年。**北歐方面、特に北獨地方、デンマーク方面は所謂北獨平地であつて、其名の如く山がない。而して其代りに低濕地が多い。從つてこの樣な土地で地質學的研究を行ふにしても、我が國の樣に、色々な地形變化も多く、これに伴ふて、種々な、研究上の對象が見出され得るのとは、自づと異つて居る。北獨平地は、我が國などから見ると、平々凡々で、人工以外には通常大きな斷面露出等、地形上の變化に乏しいから、其地下に向つてする調査も、多くは、最も新しい沖積層より行はれ、又濕地にも出會する機會が多い。從つて、洪積地質學（Diluviale Geologie）だの沼澤地質學（Moorgeologie）などと云はれる研究が發達するのも、一面には、こうした理由に發しても居る。其學術進展の理由は兎に角、これ等の研究が進んで居るだけ、それだけ史前學上の一部で、これ等に觸れて居るものが、推進もせられて居る。よく私共の經驗する如く、一部姉妹學不振の結果、行結りも出來るが(24) 北歐研究に於て、特に泥炭關係に就ては、今述べた樣、獨り地質學方面に止まらず、植物學方面よりも、研究が進んで居るのであるから、自然と史前學上の研究も、これ等により深く觸れてもくる。たゞ以上の樣に姉妹學の進展は、誠に結構である代りに、それだけ史前學も深入りして居るから、さてこれを了解する爲には、一入、勉強もせねばならない、困難も伴ふてくる。實際泥炭遺物層の研究に當つて、私は最初こそ、輙く考へ且つ取扱つても居つたが、段々と其底深いことが解つてきたので、幾度か、匙を投げても居る。又今回も、如何にしたならば、簡略に取纏るものかに就ても、迷がある。從つて不首尾の所も多かる可きことは、豫め御斷りもして置く。而してこゝでは、單に直接中石時代に關係ある泥炭の一部を主としこれが了解を得らるゝ範圍のみに止め、他には一切觸れないことゝする。

a。**泥炭の成生。**こゝで述べんとする成因は、總てゞない。單に地理的に見た成因であつて、化學的のそれの如きに觸れない。

今述べた如く北獨平地には濕地が多い。この多い理由に就て先づ見て行かねばならない。而して、話を氷後期以前即ち氷期にまで返さねばならない。この氷期には、北獨平地地方は、直接氷蓋を受けない所があつたにしても、主としてスカンジナビア氷蓋の影響を受けて、多くが氷結したのであるが、最後の氷期も過ぎて、氷後期に入るに及んで、南方より漸次解氷もしてくる。結氷が段々と溶けてくるに從つて、比高少ない平地々方では、僅かばかりの低地でも、水は低く低く溜つてもくる。一方では遠く南方に

あるアルプス氷河も溶け出す。各方向に、それが増水は流れても行く。アルプスの北側にあり、北獨平地の南方に當る、所謂中獨チューリンゲン(Thüringen)山地地方では、アルプスの様な氷霜はなくとも、こゝに存した小氷塊の解氷する結果、各河増水し、一部は、ウエーゼル(Weser)エルベ(Elbe)等の氾濫谷を作つて、北海に流れる。又この一部は北進するオーデル(Oder)河等によりバルチック海にも注ぐものがある。而して結氷して居る部分にぶつかれば、より氾濫もする。かくして、自からの解氷と、増水とによつて、所謂北獨氾濫地帶が出來、今日に尚所謂北獨メクレンブルグ(Mecklenburg)地方等の沼澤帶が遺存して居る(25)。

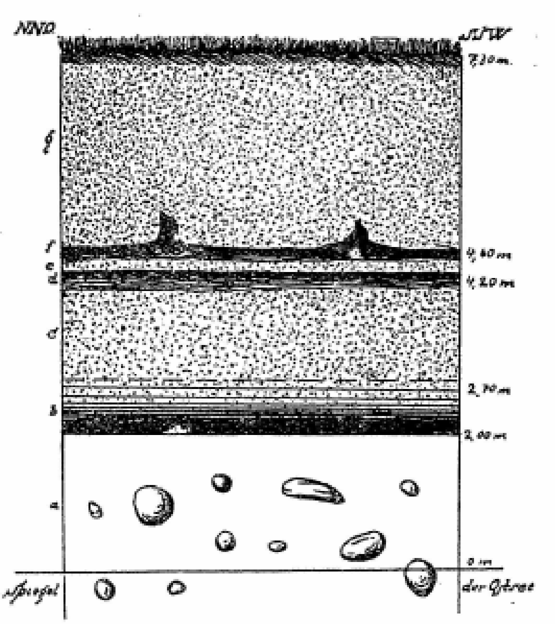


Fig. 2.　ドイツ。Kurischen Nehrung 於ける泥炭層斷面　下より　a. 礫石層　b. 砂質泥質　c. アンシルス時の化石なき砂　d. 砂石層　e. Bleisand　f. 最高リトリナ下降時に於ける森林の株を含む層　g. Dünensand.
〔nach C. A. Weber aus H. Hahne (Lt. 11)〕

この氾濫帶の成立に伴ふて、一面に於ては、氷より土地の解放ともなり、こゝに植物の分布區域を増大するに止まらず、氣候の溫向は、更にこれを助長し、植物帶の北進ともなる。從つて當初單なる氾濫帶であつたものが、其遺留するに從つて、そこに植物の生育するものが出來、こゝに所謂沼澤(Moor)【(39)參照】ともなつてき、かくして泥炭を作る可き植物的要素も成立を見るのである(25)。

加ふるに、單なる解氷に基く氾濫作用に止まらず、氷後期バルチック海方面には、土地の上昇、沈下の運動が行はれて居る。これが要旨は第二表にも掲出してある如く、ヨルヂア時代に下降し、アンシルス時代に上昇、リトリナ時代に再び下降、ミヤ時代に亦もや上昇と、二回共運動が繰り返へされて居る。從つてこの運動に伴ふて、水陸の變化も見らるゝ。現にアンシルス上昇の結果は、バルチツク海を淡水湖にして居り、其證據としては、所謂アンシルス動物群の貝類は、このアンシルス貝を始め皆淡水產である(第三表參照)。此の如き水陸の變化は、よしそれが漸進的であるにした所で、引いて植物帶にも及ぼしてくる。今迄森林であつた所が、漸

次水の浸す所ともなり、終には沼澤となることも有り得る。又其現實例は、これを第二圖で見られよう。このクーリッシエン・ネー」ルング（Kurischen Nehrung）は泥炭遺物層そのものではないが、同圖のｆ層中央には、明に二本の樹根が認められよう。それが甞て森林當時を物語ると同時に、土地の沈降により、今日の地表下に埋沒して居ることを示して居る(27)。從つて此の如き結果より、第一次的に沼澤を生じ第二次的に泥炭も成立するから、こゝに色々の場合に基きそれに相當した泥炭も出來る。即ち泥炭にも種類が出來る。又場合によつては、沼澤が全く上昇して、平地となり、又沈降を見たり、或は土地の昇降に伴ふ氾濫等によつても色々の變化が生ずるし、氣候傾向に伴ふ植物の變化もある以上、泥炭にも層位が出來てもくる。而してこの泥炭層位が、編年せられて、こゝに泥炭編年が生れ、これが樹木編年と結んで、植物編年となり、其層位内に文化資料が埋藏せらるゝ以上、この植物編年に準據して、史前學上の編年位置も求めらるゝのである。

b。**泥炭の種類**。泥炭の種類は多い。見方により色々に區別することが出來る。然しながら史前學上、多く用ひらるゝものは、泥炭の、主要要素をなす植物名を冠せらるゝ區分である。この區分に從へば、アシ泥炭（Phragmitestorf=Schilftorf）水蘚泥炭（Sphagnumtorf）ワタスゲ泥炭（Eriophorumtorf=Wollgrastorf）カヴボウスゲ泥炭（Carextorf=Riedgrastorf）等の各泥炭があり其中でも水蘚泥炭が最も普遍的である(28)。また泥炭中に含まれた樹木が多く、其主要成分をなす場合には、特にこれを樹木泥炭（Holztorf）と呼び場合により森林泥炭（Waldtorf）とも稱し(29)、前述の蘚類泥炭と區別することもある。又二種以上の主成植物がある場合には、二種乃至三種を聯記して、呼ぶこともある。

以上純然たる泥炭に對し、こゝに所謂類似泥炭乃至は、泥炭類似構成物等と呼ばれるものがある。其一は海泥炭（Marintorf=Meerstorf=Strandtorf=Litoraltorf）と稱せらるゝもので、純然たる泥炭が淡水によつて造らるゝに反し、海泥炭は、主として海藻によつて成立するものゝ様ではあるが、本研究には直接關係がない(30)。其二は、多く肝臓泥炭（Lebertorf=Leberschlamm）と云はれるものである。この肝臓泥炭は、前述した純然たる泥炭の一部と共に、本期に於ける主要文化遺物層をなしても居る故其一通りは見て置かねばならない。この肝臓泥炭たるや其成立時機も古いのであるから、それぞれ地層の下部にあり土壓もより多く受けても居る。而して夫々泥炭を成生した植物が、幾分其組織を失つた場合、これをウェーバーの言葉を借りれば「有機土の石化」（„Humusgesteinen" nach C. A. Weber）であつて、これに若干の挾雜物も交へ、其色が恰も獸類の肝臓の如き外觀を呈するもの

を、かく肝臟泥炭と云ふのである(31)。其三には、沈澱層(Mudde)(32)乃至は、泥炭狀泥土(Torfmudde)とも云ふ可きもので、肝臟泥炭以上に、殆んど成生植物の組織が失はれ、且つこの中には、水棲生物の排泄物其他を混入して居るものを指すのであつて通常、肝臟泥炭より古く、其下層に存して居る。只この肝臟泥炭と泥炭狀泥土等の區分は、夫々其素質の極限的場合に於てなし得るもので、肝臟泥炭と雖も、其挾雜物の種と量とにより、或は沈澱層とも乃至は、泥炭狀泥土とも見られ、同樣に植物組織の殘存程度によつても、兩者の區分不可能のことも出來るのであるから、この兩者は、互に複雜なる關係を存するものと見なければならない。而してこの泥炭狀泥土たるや、其挾雜物の量大なるに於ては、泥炭としての性質を失ふことゝもなる。この泥炭狀泥土に至つては、北歐氷後期に於ける泥炭關係の總てを通じて、最も古いものとせられて居るが、獨りこの泥炭狀泥土に止まらず、肝臟泥炭に於ても、必ずしも、各地に見得るのではなく、從つて純然たる泥炭下部は、或は他のものより成ることもある。即ち、この後二者が成生した頃は、まだ〳〵其後の樣に森林其他植物が繁茂したのでなく、其成生が少なかつたに基因する樣に思はれる。

c。**泥炭の層位**。今述べてきた、各種の泥炭が如何なる順序に存在して居るのか、一通り其層位に就て見る。この北歐方面の氷期より氷後期に移る一般狀態は、このaで述べた所であり、沼澤の發生は、泥炭を作る可き、植物的要素であると云ふてもある。それ故、この沼澤なるものが發生以降に於て、主として泥炭が見らるゝのであるから(33)、北歐泥炭の多くが、幾分樹木の存在よりも新しくはなる(34)。この見地から見ると、ヨルヂア期には植物はあつても、未だ泥炭を作るまでには達して居らなかつた樣で、通常泥炭は、アンシルス時代始、これを樹木編年上より云へば、樺時代より初まるのであつて、然も今述べて置いた、泥炭狀泥土を主として見るのである。而してこの發生分布の詳細は、私には未だ解つて居らないが、只今迄私の見た內には、史前學關係の明かなるものを見出しては居らないが、所謂アンシルス文化(三。及び第一表參照)研究發展に伴ふて、或は關係を生じ得ることゝも考へる(35)。次に見るものが肝臟泥炭であるが、前述した如く、場合により、泥炭狀泥土と混同せられ、且つ其境界は不鮮明の場合もあるが、一面には、兩者の間に、他の間層(砂等の)が入つたり、又は夫々の出土生物の差によつても、或る點までは區別の出來ることもあるが、兩者の近似は否まれない。從つて其成生時代も相近接して居ると考へらるゝが、肝臟泥炭は主として、樹木編年上の松期に當り、其末尾は槲期にも及んで居るものと考へられて居る(36)。更に肝臟泥炭として見て置かねばならぬことは、獨り今述べた上限に於ける泥炭狀泥土との連關々係に止まらず、其下限に於て、所謂純泥炭との連關狀態である。肝臟泥炭として

は、其内容植物の種類の如何は大なる問題でなく、其植物組織存在の狀態と、挾雜物泥入の程度によつて、かく云はれるのであるから、其成生上、植物組織存在より良好で且つ挾雜物もより少ないものに於ては、當然、純泥炭に近似し、終には其狀態によつては全く區分不可能のことも、容易に起り得る。もともと肝臓泥炭なる區分が、學術分類上より來つたものでないらしいから、かく不鮮明なことも生ずるのである。特に肝臓泥炭としては、其末尾に成生した場合、即ち榭期に出來たもの等に於て、この現象に就て考へねばならない。又現實に本文化階梯の考察上、後述して居る如き問題もある。

次は樹木泥炭であつて、リトリナ期土地下降に基いて森林地帶の沼澤化を見、第二圖の如く、森林は倒れて相重なり、その基部には、埋れたまゝ泥炭化した樹根をも多く見るのである。而して倒れた樹幹、樹枝等は漸次壓下せられて相膠着して、こゝに樹木泥炭を作つて居る。これが時代は、概ね榭期初めと考へられ、リトリナ期土地下降の最大限時まで續いたと考定せらるゝ。この樹木泥炭に平行乃至稍々遲れて、アシ泥炭がある。これは其名の如く、アシ（Schilf = *Phragmites*）が主體をなすもので、多くが森林帶でなかつた部分の水潤地、乃至は森林倒潰後の沼澤等にアシが茂り、これが泥炭となつたものである(37)。この邊からして、泥炭編年の方は、樹木編年と反比例して、より細な歩みとなり、樹木、アシ泥炭の後に古水蘚泥炭が出てき、泥炭としては、最もよく發育して、細く今日までに、色々の泥炭階梯も生れて居る。只樹木アシ泥炭以降は、最早中石時代でなく、新石以降となる故、第二表で概示したに止め、他は略する。

これで北歐中石關係の泥炭を一通り眺めた事とする。簡單に云へば、一般的に泥炭狀泥土が所謂アンシルス文化に、肝臓泥炭が本期に、樹木アシ泥炭が貝塚期に略相當して居る。而して泥炭編年と云ふても必ずしも泥炭層のみでなく、第二圖の樣な他の間層の入る場合もあれば、後述して居る如く、本三遺物層の如く他の間層ないものもあり一定はしてない。又こゝに述べた、樹木、泥炭編年の外、更に他の植物編年なるものを提唱もせられて居るが(38)、本文化研究に直接關係も少ない樣に思はれる故、これ亦略する。

七。姉妹學的研究の綜合。

これで甚だ簡單ではあるが普遍的な姉妹學的方面を一通り見たのであり、中石時代を中心として見れば、其四圍の自然狀態を見たのである。而して、これ等が綜合せられたものが、第二表であるから、茲にこれを繰り返さない。只本文化研究に當つて、自然界一般が如何なる狀態にあつたか、特にアンシルス終末よりリトリナ始めに於ける一般の有り樣が明でないと、色々な誤解も生ずる。

特に最早や舊石末の様な氷期でない。人類は氷より解放もせられて居り、四周は白凱々の雪でなく、青々たる緑野か、欝蒼たる松や櫚の森林に居る。最早や洞窟に蟠居する必要もない。より良き氣候に惠まれても居る。そこに棲んで居る動物も亦、森林系の諸動物で、氷河時代の様に、廣々した苔原、草原などに、多く集團して生活したものだちとは違ふ。これを、狩りするにも、自づと獵法が異る。即ち武器も當然變る可きである。又この北獨地方は沼澤が多い。從つてこゝには、所謂蒹蘆繁る江畔であり、水禽渉禽の類も多く、これ亦狩獵の一對象となる。而してこれに伴ふ獵法も亦、森林狩獵と必ずしも一致するものでない。更にこれ等の江畔に於ける水産撈取に於て、氷も氷河時代の身をきる様な凍冷ではない。より獲り易く自然が許しても居る。されば、こゝに住んだマグレモージアンの人々は、多く自然から惠まれても居り、從つて生活にも、より餘裕が出來たに違ない。この餘裕こそ、人類として、活躍すべきエネルギーであり、文化發展の根元でもある。この様に大切な、自然環境を直視せねばならないのに、一部の人々からは、以上の様な自然環境を知るに缺くことの出來ない姉妹學的研究を、兎や角云はれもするけれども、私は以上の如く、自然環境が吾れ吾れ研究の主體をなす文化研究の母と考へる。母なくして子供は生れ出でない。而して特に、文化がより低いに從つて、自然の支配は逆に、より大きい。從つて史前文化の諸現象も、この自然環境なる背景あつてこそ、其舞臺に昇つた人々の行爲が、正當に了解もせられ、其微妙な所作までも、時に見出し得るのであつて、背景なき舞臺に於ては、如何なる名優と雖も、よく表現し得ないものゝ存する。それ故、この自然環境の複原が、單に時代標定の準據たるに止まらず、一面には、文化遺物内容の多くにまで、基礎づけられても來ることを併せ考へねばならない。本文化研究の如き、直接我が國新石文化研究等に關係緣故の少ない故、これを正しく了解する爲には、より深くこの北歐氷後期一般の狀態に親んでから、狹義の文化內容に移らなければならないと考へる。

(14) 本文で古き說と云ふて居るのは、主として花粉分析研究を新說として、それ以前の研究を意味して居る。又花粉分析研究と雖も、萬能とも思はれないし、其根柢には、所謂古き說が基礎づけられても居ろう。而して私の古き說と云ふて居るのは、主として、沼澤植物及び泥炭の研究は、C. A. Weber 洪積動植物群研究は E. Geinitz (Lt. 6) 特に樹木編年に就ては、P. Graebner (Lt. 10) と史前學方面より動植物方面に歩んで居る、J. Hoops (Lt. 13) 等を指し、且つこれ等に準據を得て本文の如く述べたものである。

(15) この花粉分析法として、私の聞知して居る所は、花粉の遺留して居る地層、即ち多くが泥炭等より或る一定量を取り出して、其中に含有する所の花粉を檢出し、其含有種を決定すると同時に、百分率を求め、この結果、これ等植物夫々の習性に從つて、其氣候判斷、乃至は新古の判別をも行はんとするものらしい。從つて、この方法により、或る結果が得らるゝものであるなれば、從來隨所に見られた樣な、地

層が明でない場合でも、花粉を包含する以上は、この方法によつて、其時代を考定することも、出來る場合が生ずる。又從來發見せられて居る地層に對し、更にこの方法によつて確かむることも出來る。現に後述して居る如く、ホルメガールドの研究に當つては、マグレモーゼ、スヴェルドボルグ三者に依つて其比較をも試みても居る。

又將來に於て、この方法による結果が、より正しく見らるゝものであるなれば、この方法に基く檢出地域の擴大に伴ふて、夫々の植物分布の狀態をも考定せられ、引いて、時代に基く自然環境一部の複原をもせられ得ること、考へるが、今日、どの程度まで進行して居るものか、私には解らない。又植物方面專門の人々より、これ等に就て、未だ聞知したことも無い。何れは、これも增補し得る時が來ると は考へて居る。而して本方法より相應な結果が得る可きものであるなれば、我が國に於ける泥炭層にも試みて見たら、或は面白い結果も得られはしまいかと考へても居る。本著脫稿後、犬塚潮之助氏、第四紀、（地質、古生物學講座）（岩波講座）に花粉分析に就て、述べられて居ることを甲野氏より注意により增補して置く、（同書第五九項）。猶他に二三史前學上に應用したものを發見したが總て他日に讓る。

(16) こゝにマグダレニアン動物群と云ふて居るのは、所謂マグダレニアン前期で、未だ酷寒な時の動物群を指して居るのである【拙著、歐洲舊石、(Lt. 30) 續S. 46—47.第三十一表參照】。

(17) こゝに注意を要す可きは、氷期の動物群にはよくタンドラ動物群（Tundrafauna）だのステップ動物群（Steppenfauna）などと稱せらるゝ動物群が出てくるが、氷後期に於ては、これ等の區系は、一向用ひられて居らない。それは、これ等の必要とする、寒さの間が短く、僅にヨルヂア期に止まるものであるから、氷後期編年としては、其必要を見ない故と考へる。而して、これ等に連關した研究【A. Jacobi, (Lt. 16)】のあることを紹介するに止める。

(18) 宮坂氏、歐洲新石（Lt. 21）S. 83—等參照。

(19) 沼澤發見として特に有名なのは、沼澤遺骸（Moorleiche）であつて、泥炭に保護せられた結果、恰もミーラの如くなつて居るものがあり、私も其一つをキールの博物館で見ても居る。尙これ等に就ては、Johanna Mestorf, Moorleichenfunde, I. 1900. II. 1907 參照。又單に人類遺骸のみではない。衣類其他の遺物も出て居る。他に沼澤橋（Moorbrücke）と稱せらるゝ遺跡もある【H. Hahne, (Lt. 11)參照】。

(20) 植物編年のみに就ても、既に多くの研究のあることは、（8）に述べた所であり、H. Hahne（Lt. 11）の主として泥炭關係に就ての揭出文獻の如きは、一五〇にも達して居る。

(21) ステーストルップは、デンマークの自然科學者であつたから、この編年も、ゼーランド島に於ける泥炭層の研究より導かれたものである。但しこの研究に當つて實際どれだけの沼澤等が研究せられたものかは、私には解らないが【R. Virchow, (Lt. 41) S. 459—460, Fig. 1—2.】によれば、ステーンストルップの研究としては、Lillemose bei Rudersdal, と Vidnesdapmose bei Holtegaard との二例が揭出せられて居る。前者はコッペンハーゲンの北方にあるが、後者に就ては私は其地點を搜出し得ない。然しこのステーンストルップの研究した沼澤は、其第一期に於ては、本文で後述して居る如く、若干新しい時代、卽ちより暖かとなつた時代を第一期の代表としたものと考へらるゝ。換言すれば、ヨルヂアの終り、乃至はアンシルス始に當る樣な時代を、かく第一期に當てたものと見らるゝ。一面に於て、後述して居る如く、北獨に於ける氷後期泥炭の多くが、以上の樣な時代に多く發生もして居るのであるからステーンストルップが泥炭內の植物から編

年するのであれば、第一期が以上の樣に若くもなつた結果も考へられないことはない。

(22) Axel Blytt(Lt. 45)のノルエーに於ける海拔四〇〇呎の所に於ける植物編年では、第一期は *Populus u. Betula* であり、第二第三期はステーンストルツプに一致し第四期は、*Alnus u. Corylus* が代表的であることを發見して居るから、其位置が變したり或は其高さによつても、當然この樣な差も出來てきよう。特にスカンジナビアに於ては、アンシルス時代まで其中央山系には、一部氷蓋の殘存するものがあつた故、北獨平地やデンマーク乃至は南部スエーデン等に比し、山よりの方が、より寒むかつたことも、併せ見て置かればならない。

(23) このドリアス植物群に就ては、色々の意義がある。中には極北植物群（Arktische Flora）と稱せられたりもする。而してこのドリアス植物群は、單にヨルヂア時代にのみ存したものでなく、現に其一部は今日、北歐の北端、スピツ、ベルゲン（Spitzbergen）地方にも見て居る。又古くは、氷河時代、史前學上から云ふたら、舊石時代の一部にも、これ等の植物群を見て居る。この氷河時代に於ては、往々其代表植物名を以てせず、氷河植物群（Glazialflora）と云はれもする。從つて、單なるドリアス植物群と云ふ時と、極北植物群乃至氷河植物群と云ふ場合には、自づと異る意義も生ずる。私はドリアス植物群とは、其時代の如何を問はず、第六表の樣な植物を以て、代表せらるゝものと考へて居る。而して、それが多く極北植物群と一致もするが氣候の關係と、氷河時代の樣な場合は、より南に下つても、これを見ることがある。又氷河植物群は、必ずしも極北植物群に止まらず、これと對應する高山系のアルプス植物群（Alpenflora）をも含んだ、より廣い意味のものと考へて居る。この外、動物と同樣に、(15)參照)タンドラ植物群(Tundraflora)やステツペン植物群（Steppenflora）と云はれるものがあり、一部はドリアス植物群との相關々係も生じてもくるが、こゝに研究して居る北歐氷後期に於ける植物群としては、タンドラやステツペン植物群と直接、連關して居らないから、これ等には觸れないことゝする。

(24) 我が國石器時代の研究に於て、多く自然科學方面の知識缺乏により、色々行詰りを見ても居るが、其具體的事實を列擧することは、姉妹學に對する厚誼上これに觸れない。

(25) 歐洲氷期及び一部の解氷に關しては、拙著、歐洲舊石、(Lt. 30) 前第三四項、挿第九圖等參照。

(26) 沼澤が泥炭を作る原因に就ても、今回觸れない、只主として後述して居る蘚類によつて作出せらるゝものであると云ふに止める。又同じ泥炭を作出する沼澤に於ても種類がある。Hochmoor; Uebergangsmoor = Zwischenmoor; Niedermoor 等區別もせられ、各書に述べられても居るが、これ亦今回は、これまで觸れない。

(27) この土地の昇降に就ても、これを證明する根據が明確でないと、大なる危險も生ずる。こゝに述べて居るのは、アンシルス動物群の存在、森林陷沒跡の外、デンマークに於ける石器時代の海中遺跡【S. Müller, (Lt. 23) S. 13—20】等の外、尙多くが數へるゝ。然しこの土地昇降說は、簡易にある現象を說明し得るからとて、無暗に應用せらる可き性質のものではない。先づ地質學的に、多くは其專門學者の考定により、これを確認するだけの證據を得て後に、用ふべきで、我が國などにて、矢鱈に、史前學者自から等が考定して昇降說をなすが如きは、最も愼まればならぬ所と考へる。又特に今述べて居る北歐中石時代は、文化上から見て、我國などの新石時代よりも、一桁、桁が古いだけ絕對年代でも、古くもあり得るのであるから、時的經過の長かる可きことも想像せらるゝことも、併せ考へればならない。

(28) 水蘚泥炭は、多くスフアグヌームトルフと云ふてのみ居り、水蘚そのものは、Torfmoose とも云はれて居る。而してこの水蘚泥炭たるや

26)に述べた高沼澤（Hochmoor）性のもの丶樣であるが、こゝでは、これ等の内容には觸れない。又これ等多くの泥炭は、必ずしも一種類の蘚類等よりなるものでなく所謂泥炭植物として、色々ある樣であるが、これ亦、夫々の揭出を略する。

(29) 場合によつては、樹木泥炭内に於ても、其代表植物名を冠して、松泥炭（Pinustorf=Kiefertorf）と云はれることもあるが、史前學上に於ては、單に樹木泥炭と概稱せらるゝ場合が多い。

こゝで揭出した區別は多く史前學關係に於て用ひらるゝものゝみであり、且つ其内でも中石關係を主として居る。これを一般泥炭を立前として見るなれば、獨り學術研究方面に止まらず、泥炭實用方面からも、色々の區分があり、こゝに泥雜もして居る。それ故場合により史前學上の慣例によらない泥炭稱呼も無いではないから、これ等に遭遇した場合は、注意しないと間違も起る。而して史前學上の慣例と云ふても後述して居る如き不統一がある。

(30) 海泥炭の詳細に就て、私は未だ研究したことがない。從つてよく解らない。漸く Karl Andrée; Geologie des Meeresbodens. Bd. II. 1920) S. 58—63 に僅に述べてあるのを見たばかりである。從つて北歐石器時代との關係も私には未詳である。只私がこの海泥炭なるものを特記したのは、我が國に於て、古く佐藤傳藏氏によつて、陸奥龜岡發掘報告、人類、第一一の一一八。及び同氏、陸奥龜岡第二回探究報告、人類、第一一の一二四及び一二五の報告に於て、單に泥炭遺物層であるばかりでなく、土器と共に「モシオグサ」=「アマモ」=大葉藻=*Zostera marina* の出土を報ぜられて居るから、或は將來の參考と、かく例出した次第である。

(31) 肝臟泥炭に就ても、未だ色々解らぬ所が多い。又これが研究書は、純然たる泥炭の多いに引きかへ殆んど見出して居らない。北歐に於ては、泥炭研究と云へば、水蘚泥炭を主體としたものである。この點に就て、植物學方面等泥炭關係の方々より御教示を得たいと考へて居る。

(32) Mudde と云ふ言葉は、邦譯語を見出して居らない。從つて私が前後の關係から、單なるムッデのみの時は、沈澱層、トルフムッデの時には、泥炭狀泥土と譯したのである。それはムッデに就ても、根本に於て肝臟泥炭と同樣以上に解らぬ所が多い。而して充分な解說が見つからないにも拘はらず、隨所に使用もせられて居る。私はこのムッデと云ふ中に色々の意味を發見したから、特にトルフムッデと解り易く書いたのであるに反し、單にムッデは必ずしも泥炭關係のみでない。Kalkmudde, Tonmudde, Sandmudde 等は夫々、石灰、粘土砂の沈澱層と申したなら明瞭と考へる。【更にこれと沠關して居る事項に就ては(35)參照】であるから一般的にムッデと使用せらるゝ場合を願慮してかく沈澱層としたのである。又泥炭狀泥土としたのは、泥炭の場合に沠關して、よく出てくる言葉が泥土（Schlamm）であつて、屢々ムッデと同樣義に用ひられて居る。本文で Lebertorf=Leberschlamm と云ふて居る如く、泥炭と同樣にも通用する。從つて三者の複雜な相關々係も出來てくる。私の研究も不充分は萬々であるが、用語が色々不統一の所から見ると、北歐でも、或はこのムッデの研究には、研究の餘地が多いのではあるまいか。今其例を揭げて見るなれば、Lebermudde もあつて、肝臟泥炭か、泥炭狀泥土か、或は兩者の中間的であるか、甚だ不明瞭である。Schlammige Torf は泥土狀泥炭と云ふ可きであるに對し、ザラウのマグレーモーセ（L. 37）S. 13. にては明にこれを肝臟泥炭の義に使用し、又特にザラウは、肝臟泥炭と云はず、わざわざ水泥炭（Wassertorf）なる新術語まで作つて居る。又ムッデは、デンマークの Gytje=佛の vase=獨の Schlamm と云ふ樣に用ひられ、又 Gytje=Lebertorf もあるから私には區別し得ないことがある。兎に角ムッデ本來の意味は、「水棲生物の排泄物を主體とした沈澱層」であり、より廣く、以上に色々の挾雜物を交へた場

合より、最も廣く、植物質、鑛物質な主體として、これに第一の場合が加はつた樣な場合もあるらしいが、一面では、隨分内容曖昧のまゝで用ひられても居る樣である。

(33) 沼澤なく、海泥炭は出來る。然し私の見足らない故か、北歐方面の氷後期に於て、史前學に連關して、海泥炭を存した遺物層を聞知してない。又森林草木等がなくとも、流水の集積により、所謂樹木泥炭も出來得る。然しこれの存在も、海泥炭と同樣私は史前學關係に於けるものは未だ見て居らない。

(34) 北歐氷後期に於ける植物遺物の大部は、泥炭より發見せられて居るのは事實であるが、往々泥炭下部に存する各種粘土層よりも發見せられて居る。ヨルジア粘土(Yoldia-Ton)中よりは、屢々ドリアス植物群が出土もして居る【この一例は、(6)にも出してある】。それ故、樹木編年と泥炭編年と共始めが轢はなくても、不合理はない。

(35) 所謂アンシルス文化の研究に於ては、必ずしも泥炭狀泥土層に止まらず、(34)にも述べて居る各種の粘土層の研究も必要となつてくる。而してこの粘土沈澱層(Tonmulde)と同樣義に Tuff が出てもき、Kalkmulde の代りに、Kalktuffe と云はれる樣なこともでゝき、こゝに又ムッデなして更に更に複雜ならしめて居る。『この Tuff は、元來地質學上、火山灰關係等色々の火山作用の場合に用ひらるゝのが通常ではあるがこれと關係なく水中に於ける粗なる沈澱物(Lockerer Absatz)を指すにも用ひらるゝ。』【J. H. Rechholtz; Hand-Lexikon der Naturwissenschaft und Medizin, Bd. II. S. 673】であるから、こゝにムッデとの混用も起り、地質判斷を迷はすものも出てくる。

(36) P. Graebner; (Lt. 10) S. 75. によれば、北獨方面に於ては、松期の經過時間は餘り長くなく、櫸期に入つたと述べては居るが、其理由が私にはよく解らない。この說によらなくとも、獨り肝臟泥炭にのみ見る現象でもないが、泥炭成生に對しては、相應な時的經過も見ればならない。總てが時點ではなく時幅を以て示さる可きものである以上、肝臟泥炭の經過に於て、獨り松期に止まらず、櫸期にまで及んだとて、不合理とも思はれない。

(37) アシ泥炭と云ふても、必ずしもアシのみではない。多くのアシが入つて居るからかく云ふのである。特に水蘚の類の如き水上に浮ぶもの迄はアシを中心として、繁茂もするのであり、且つ之等蘚類の加入により、よりよく泥炭も出來るのであるから、アシ泥炭と云ふても多くの植物を包含して居る。又樹木の倒れた跡に出來たものは樹木間に多くのアシを混在し、所謂樹木アシ泥炭(Holz-u.Schilftorf)を造つても居る。

(38) E. Geinitz; (Lt. 6) S. 1. は植物群に對し、陸上植物群(Landflora)淡水植物群(Süsswasserflora)鹹水植物群(Salzwasserflora)の三群に區別し、夫々の編年を見る可きであると云ふて居る。

第三　文化遺物層

八。文化遺物層存在の地理的位置。

本期主要三遺物層は共に沼澤地(39)にある。而して三者を通じ多少の地形變化はあつても、我が國の樣な、變化急に、且つ大きなものではない。地形變化になれた吾れ吾れの目で見れば、漠然とした平凡な地形である。

1。**マグレモーゼ**。本遺物層は、第三圖の如くマグレモーゼ沼澤地中央に文化遺物層がある。而して今日では、この沼澤地は標高四米であつて、表面には水はなく、表土堅く、車輛をも通ずる有樣で、且つ表面には、色々な草が生へ、所謂牧地（Heide）(40)とでも云ひ得る樣な狀態にあり、僅に四周と比較して見て、そこが凹地であることを氣が付く程度である。其西側のムレルップ(Mullerup) 村(41)より、西方一體の海岸中間地帶は、槪ね標高一八—二六米であり、沼地南側も亦略同樣で、標高一八—四五米に至る高地があり、沼地直南にはブョストルップ (Böstrup) 村がこの高地上にたつて居る。然しこれ等の傾斜は甚だ寛であるから、それ程比高がある樣にも見へない。この沼地には、東北方向からきて、北方に貫通するブョストルップ川 (Böstrup Aa) なる小河があり、本沼地北方は、この小河の小溪谷により、沼澤帶をなして、トイススョウ湖 (Tissö) に排水口が開かれて居る。而して本來マグレモーゼとは、大沼澤な古義が今日地名となつたものゝ由であるが、今日では、そんな大きなものでない。東西に約一粁半、南北約三粁に過ぎない大さである。

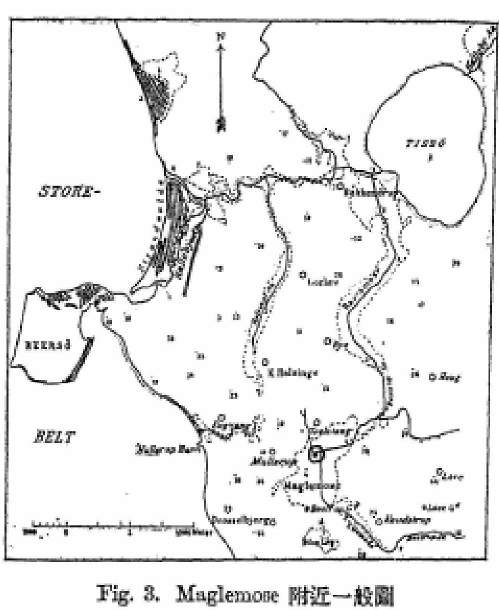


Fig. 3. Maglemose 附近一般圖
(◉が遺物層の位置)
【Nach G. Sarauw(Lt. 37)】

2。**スヴェルドボルグ**。スヴェルドボルグは一小村であるが、其西側にスヴェルドボルグ沼澤地 (Sværdborg Mose) があり、この沼地の中央稍々東寄りの所に、文化遺物層がある(第四圖)。元來この沼地は、沼地東側にあるキョング (Kjöng) なる大村に因んで、キョングモーゼ (Kjöng Mose) と稱せらるゝものではあるが、史前學上では、スヴェルドボルグと稱して居るから、かく慣例に從ふて居る。其沼地標高は、僅々一米內外に過ぎず、沼地の中には、諸所に水潤地も存して居る。沼地南端は海をさる僅に一—二粁を過ぎず、沼地端末の入り込んだ所に於ては、更に近く五〇〇米を間する。然しこの海との間には、標高一一—一六米內外の高地によつて隔てられて居る。沼地の東側は比較的高く、且つ北上するに從つて比高を增し、沼地の東北側で、約一粁を隔てゝ標高四五—五四米を示し、沼地西側はこれに反して低く、槪ね八—一四米內外で、そこにキョング村がある。且つ沼地より西方に向

つた、二條の排水路があり、其北方排水路は、約二粁半を隔てゝ海に入り、南方排水路も他の沼地を經て、近く海に注いで居る。

この沼地も餘り大きくはない。東西に約二粁、南北に約七粁近いから、マグレモーゼより長さに於て約倍もある。而して面白いことは、この兩者とも、南北に著しく長く、且つ海の直側にあり、大約東より西に地盤が傾いて居る所は、互に相似た所がある。

3。**ホルメガールド**。これは前二者とは、稍々其趣を異にして居る。これも村名ではあるが、この村北側に前二者に比すれば、より大なる沼澤地があり、その名は正しく村名と同じきホルメガールス、モーゼ(Holmegaards Mose)である。この沼地の西南側に近く、東西に夫々約一粁を隔てた三個の發掘點がある(第五圖)。この三發掘點の中央に存するものは古く一九〇三年に發掘せられたもので、兩端の二ヶ所が一九二二年に試みられたものであつて、これを東西遺物層に分つて居り、其西遺物層の如きは、沼岸より六〇〇米を隔てた沼中にある。この他理的位置は、第一圖に示した如く、前二者の海に近いに反し、本沼地は、より陸地内にあつて、最も近い西南海岸にも約一〇粁を算する。

Fig. 4.　Svaerdborg 附近一般圖
(◎が遺物層の位置)
【nach K. F. Johansen (Lt. 14)】

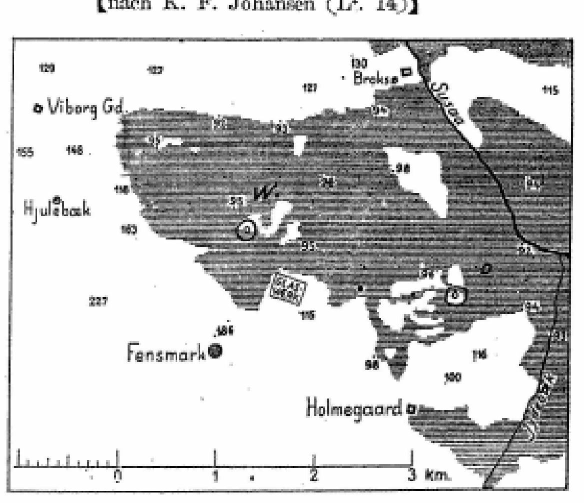


Fig. 5.　Holmegaard 附近一般圖 (O が東遺物層, Wが西遺物層)【nach H. C. Broholm (Lt. 2)】

又本沼地は、前述のスヴェルドボルグより、北方約二〇粁の所にあり、マグレモーゼより東北約五〇粁を隔てるに過ぎない。本沼

地は東西に廣く約七粁、南北は約三粁程あつて、東方よりスース川（Sus Aa）が沼地の東北部を貫き、これを直交して、南よりジデベック川（Jydebek Aa）が、沼地の中央でスース川に合して東北に流れ、沼地の北端には、西方に向ふ掘割りもあつて、スース川と共に排水口をなして居る。この沼地の標高は、甚だ高い、二九米内外を算する。而して沼地内には、地盤稍々高く、所謂島と稱せらるゝ所があり、泥炭が殆んどない部分もあるけれど、これと連關せずに、所々に森林もあるが、この方はやはり直に水も出てき、其下は泥炭層てある。（第六圖）但し沼地の西北側一體は、高く標高六〇―七〇米に達し、東部には大きな森林があり、東より東北に亙つても、標高四〇米内外の高さがある(42)。

Fig. 6.　Holmegaard西遺物層附近【nach H. C. Broholm (Lt. 2)】

以上の三者を通じて、沼澤地であり、文化遺物層存在部の表面には、水はないが、泥炭があり、其發見に遲速はあるが、泥炭採集によつて、文化遺物層を發見せられたことは同一である。而して、これ等沼地附近は、デンマークとして、普遍的な地形であり、附近に高地があつても、傾斜寛な爲、沼地との境も確然としない。從つて其住居地點の判斷など容易でなく、且つ前述した如く、土地にも昇降の存したのであるから、何故此の如き沼地内に、この樣な文化遺物層を發見するのであるかに就て、色々の推想はあつても明確でない。其時代の古さから云ふても、地形の平凡、乃至變化の上から見ても、其確實な所を摑み得ないのも止むを得ないことにも考へられ、其文化遺物層及びこれと連關した所を、全掘でもして見なければ、よく其性質を確め得ないと考へる。

九。發見地層一般の狀態。

この三者は等しく沼澤地發見であり、其主要文化遺物を包含する地層は、三者略一致して、泥炭最下層にあり、地層の狀態も大同小異である。これを個別的に述べてゆく。

1。**マグレモーゼ**。一九〇三年及一九一五年兩回の發掘を通じ約三〇〇平方米の發掘をを行はれたものであるが、第七圖の樣な斷面に於て、五層をなして居り、上よりaは有機土（Grasnarbe）bが泥炭（Torf）cが卷貝を包含する沈澱層（Schneckenmudde）

dは單なる沈澱層（Mudde）eが礫石混入の洪積砂質粘土層であつて、この各層の厚さは、發掘地域内に於ても、變化があり、特に泥炭層の厚さは、一米二四より〇米二〇までの大きな開きがあり、多くが四〇糎内外である。ザラウはこのbの泥炭層を更に三つに區分し、上より草地泥炭（Wiesentorf）濕地泥炭（Sumpftorf）水泥炭（Wassertorf=Vandtörv）の三種に區分することが出來るが、夫々の極限場合であつて、このマグレモーゼに於ては、夫々の境界不鮮明の場合多いことを注意して居る。この注意は甚だ至當なことで、泥炭のみで變化して行く場合、特にそれが除々に行はるゝ場合の如き當然起る可き現象であり、中に土砂等の間層が入るとか、或は比較的變化が短時間で行はれたとか、又は樹木泥炭の密在するもので、判別容易であるとか、何等かの準據が得られない限り、夫々の境界線は、線を以て示し得られないことは、充分に考へられ、反つて境界線を明確に區分してある方が、疑の目を以て見らるゝ程である。それ故、このザラウの着眼には敬服に價するものがあると同時に、一面に於ては、この樣な場合には、泥炭層位のみに基く編年よりは、明確なる準據も得られないことも併せ考へねばならない。【其二。六。2。C。參照】。而してザラウは、特に肝臓泥炭と呼ばないで、水泥炭と稱する【（Lt. 37）S. 63と述べて居るから、文化遺物の主體は、こゝから出土するのである。

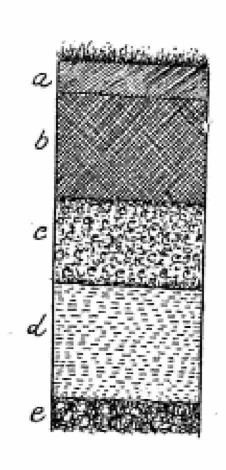


Fig. 7.　Maglemose 遺物層斷面 a. 有機土　b. 泥炭（下部が文化層をなす）　c. 卷貝沈澱層　d. 沈澱層　e. 砂礫質粘土層【nach G. Sarauw（Lt. 37）】

更にこゝで一通り研究して置かねばならない、大切なことは、この水泥炭直下にある、所謂卷貝沈澱層である。ザラウはこの層中より、次の卷貝を檢出して居る。

第十表　マグレモーゼ卷貝沈澱層發見貝類一覽表。【nach G. Sarauw ;（Lt. 37）S. 11】

1.	*Limnaea ovata f. peregra Müll*	Schlamm-Schnecken
2.	*Planorbis nautileus L.*	?
3.	*Valvata cristata Müll*	?
4.	*V piscinalis Müll*	?
5.	*Bythinia tentaculata L.*	?

6. *Sphaerium sp.* ?

7. *Pisidium sp.* ?

ザラウによれば、これ等の貝類は、デンマーク地方に於ける普遍的に見る淡水産であつて、多くが岸近き深さ一乃至二米位な、淺い泥土の所に生棲する種類であるとのことであるから、これから考へれば、前述の文化遺物を含む、水泥炭層發生の以前に於ても、この地點が、以上の貝類が生育に適する淺い水と泥土とが存して居つたことが、考へらるゝ。而して引續き泥炭の發生を見たものであり、泥炭の發生には、水も必要なのであるから、今日文化遺物を發見する水泥炭層も、卷貝沈澱層成生以來、引續いて水潤地であつたことが考察せらるゝ。而して卷貝沈澱層と水泥炭層との間には、特別な間層もなく、直に變化を見て居るとザラウは認めても居るが、それには後述して居る如き異論もある。現に角、この間層の有無は、それ等文化遺物層成生の當時に、それ等の持主が何處に住んで、如何なる結果に於て、今日の樣な、文化遺物層が成立したものであるかに就ての、一基礎的資料をなすものである。



Fig. 8. Maglemose 遺物層【左より, O. Almgren ; R.Sernander ; O. Frödin 一行のスエーデン研究者に對し，最初の發見者 J. Mathiassen 教師(右端)の說明を G. Sarauw の撮影せるもの. (1908年)又背後に見ゆるは，Mullerup 村】【nach G. Sarauw. (Lt. 37)】

【註一】セルナンデルのマグレモーゼ層位

一九〇八年、スエーデン、ウプサラ大學の洪積地質學者であるセルナンデル博士の一行は、このマグレモーゼを調査し、これに就て、發表して居る(第八圖)(Lt. 40)。而して其後ザラウとの間に、激しい論爭も生じて居る【(8)參照】。セルナンデルの層位は、註第一表の樣で、略、ザラウのそれと一致して居るが、只、大なる違は、ザラウの方は、卷貝沈澱層の直上に、水泥炭層があるに對し、セルナンデルの方には、中間に褐色沈澱層(Braune Mudde)が入つて居る。從つてこの層位に從へば、本文で研究した如く、卷貝沈澱層から水泥炭層まで、引續き水潤地であつたかは、一つにこの中間に入つて居る褐色沈澱層の性質によつて決せらるゝものであるけれど

も、この原報告を見て居らないし、ザラウもこの性質に就ては觸れて居らないから、これ以上、私としては如何ともすることが出來ない。但しザラウは『文化遺物層の上方よりは、松幹を發見しない。セルナンデルの層位は、恐らく沼地の北部か、或は中央か、さなくんば諸説を綜合して作出した層位であろうと考へられる』【(Lt. 37) S. 29―32】と云ふて、松の問題＝松期＝アンシルス說＝には着眼して居るが、私の大切と考へる褐色沈澱層には、何等言及してない。只これで見ても、既に兩者の間には、意見の相違がよく見へる。それにしても、この褐色沈澱層は、ザラウの如く文化遺物層直下にないにしても、マグレモーゼ全般が、同一狀態ではなかつたことが知られると共に、其住居位置問題に、一つの疑惑を齎さしむる結果となつた。

註第一表。セルナンデルのマグレモーゼ層位。【G. Sarauw; (Lt. 37) S. 32】

Oberfläche des Moores 沼地表

35cm	Phragmites-torf	あし一泥炭	
25cm	Kiefernstruenke Amblystegium-Moostorf Laubholzstruenke	松樹幹 ?こけ泥炭 濶葉樹幹	
35cm	Cladium-Phragmites-torf	ひともすゝきー あしー 泥炭	文化遺物帶 Zone mit Kulturresten
10cm	Braune Mudde	褐色沈澱層	
20cm	Schnecken-mudde	巻貝沈澱層	
80cm	Gruene Myriophyllum-mudde	綠色 はざきのふさも 沈澱層	
10cm	glaziale Güsswasserton	氷河淡水粘土	
	Moräne	氷河堆石	

2。**スヴェルドボルグ**。本遺物層は第九圖の如く、上より、A B Cの三層悉く泥炭層で、Aは草泥層(Graestörv ＝ formuldet Törv ＝Grastorf)(43)B.は暗褐色泥炭(Mörkebruntörv＝Dunkelbrauntorf)(44)でCが暗褐色な沼泥炭(Kaertörv＝Sumphtorf)であつて其下部が主要文化層を形成つて居る。但し原報告(Lt. 14)に於ては、この沼泥炭下部即ち文化遺物層を包含する部分に就ては、ザラウの如く水泥炭乃至は、肝臓泥炭等明確なる區分を與へては居らない。從つてこれが肝臓泥炭であるか否かに就ては全く不明である。然し原報告者は、マグレモーゼと比較し、夫々の文化遺物層の相互平行關係は認め、同じ地質年代にある【(Lt. 14)S.124】(45)

と云ふて居るから、大約同様乃至近似のものと考へて從く。而して文化遺物を含む沼泥炭層直下には、マグレモーゼと同様に巻貝沈澱層（D）がある。然しこの巻貝沈澱層は甚だ薄く僅に三糎に過ぎないが、多くの *Bithynia tentaculata*; *Valvata cristata*;

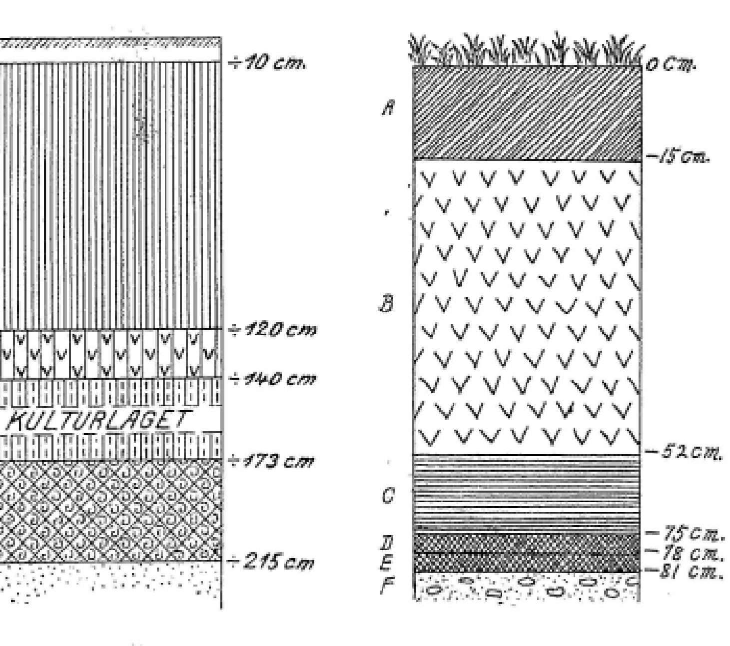


Fig. 9 Svardborg 遺物層斷面
A. 草泥炭 B. 暗褐色泥炭
C. 暗褐色沼泥炭（この下部が文化層） D. 巻貝沈澱層 E. 沈澱層 F. 包礫砂層
【nach K. F. Johansen (Lt. 14)】

Fg. 10 Holmegaard 東遺物層斷面（Dが文化層）【nach Broholm(Lt.2)】

Planorbis stroemi; *Limnaea ovata* 等マグレモーゼ出土と同一の貝類が介在し、僅に *Planorbis* のみが其種を異にして居るのであるから、巻貝沈澱層それ自身の性質も亦、マグレモーゼと同様と認めらるゝ。而してこの層中より松（*Pinus silvestris*）が出土して居る所は注意を要する。但しこの巻貝沈澱層は、必ずしも、總てを通じて、以上の如く薄く存したものではないらしく、所によつては、より厚いが、又全く無い部分もあつたらしいが、詳細は私には解らない。この巻貝層の直下には、褐—綠褐色の浮力ある沈澱層（Gytje）(E)があり、これ亦薄く三糎に過ぎず其中よりヒツジグサ（*Nymphaea alba* = Seerose）イバラモ（*Najas marina* = Nixkraut = Najade）等が檢出せられて居る。而して其下が礫を混じた砂層(F)であつて、これが基底をなして居る。

本文化遺物層は、前述したヨハンゼンの發掘調査は、一九七年の夏であつたが、其後に一九一八年、一九二三年等にこの地が發掘調査せられ、最後のものが、ブロウホルムによつてホルメガールドの報告（Lt. 2）と共に發表せられて居るが、この報告に於ける層位も、最初の報告と大差がない。やはり文化遺物は、巻貝沈澱層の上部にある沼泥炭（Kærtørv）中にありと報ぜられ

水泥炭には觸れてない。

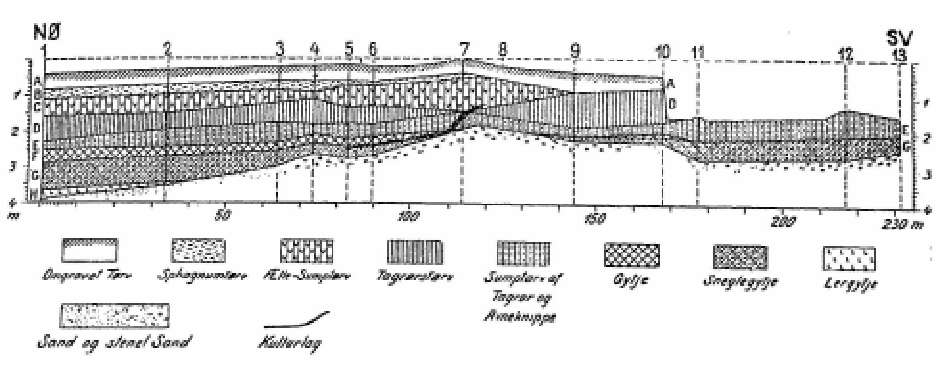


Fig. 11　Holmegaard 西遺物層斷面（中央黒色の部分が文化層）【nach H. C. Broholm (Lt.2)】

3、**ホルメガールド**。本文化遺物層は、一九二二年に二ヶ所を發掘調査せられて居る。（第五圖ＯＷ）。其東方にあるもの—東遺物層＝Ｏ點—と西遺物層＝Ｗ點とでは、約二粁を隔てゝ居るが、其地層の構成は始んど同様である。先づ東遺物層に就て見るに（第十圖）、これは過半泥炭採集によつて、遺物層を破壞せられても居るが現に角表面より、ＡＢＣＤ層までは悉くが各種の泥炭である。而して圖示せられてある如く、文化遺物はＤ層中に包含せられ、Ｄ層はスヴエルドボルグと、同様位置にある濕地泥炭（Sumptörv）(46)、である。この直下は前二者と同様、卷貝沈澱層ではあるが、含有貝類に就ては其記載がない。卷貝沈澱層下は砂層をなしこれ以下は述べられてない。

西遺物層は、層多い所は、第十一圖の如く、Ａ—Ｈまでの八層をなし、Ａ—Ｅの五層が各種泥炭である。而してこの精細な斷面圖によつて、其附近一般の層位狀態を見ることが出來るが、文化遺物は、圖示してある如く、主としてＦ層に於て、幅約四五米程斷面を見せて居る。このＦ層は、褐色沈澱層（brun Gytje）であるが、それがザラウの水泥炭（Vandtörv）と同様組織であると述べられて居るから、このＦ層は、私の云ふ肝臓泥炭と一致をする。この下には前例の如く卷貝沈澱層があり、更に其下は砂層である。只こゝで了解に難むものは、第十一圖で見る様に、文化遺物層の西南端に近く、斜の上方に傾き、文化層を包含する褐色沈澱層の直上にあるアシーヒトモトスゝキを主體とせる濕地泥炭層（Phragmites-Cladiumtorf＝Sumpförv af Tagrör og Avneknippe）（第十一圖Ｅ層）を突破して、更に其上のアシ泥炭（Phragmitestorf＝Tagrörstörv）（同上Ｄ層）の最薄部を貫き、文化層の末端は、ハンノキー濕地泥炭（Erlle-Sumphtorf＝Ælle-Sumptörv）(47)中にまで達して居る點である。何故此の如き層位狀態が成立したものやら、私には全く見當がつかない。今は止

むを得ず、一部に特異相を有するものとして、將來の研究にまで保留せざるを得ないのである。

十、文化遺物出土層の內容。

上述の如く發見地一般の地層狀態を概見したから、更に進んで、文化遺物を包含する所の泥炭層、即ちマグレモーゼとホルメガールド西遺物層主體部の肝臟泥炭、スヴェルドボルグの沼泥炭、ホルメガールド東遺物層の濕地泥炭に就て、其性質を檢討して見る。

ザラウはマグレモーゼに於て、草地、濕地、肝臟泥炭の各層より総計約一二五個を檢出して居るが、其主要出土層は、濕地、肝臟の兩泥炭であり、更に肝臟泥炭中よりは、(*Cladium Mariscus*; *Carex Pseudocyperus*; *Betula sp.*; *Pinus silvestris*; *Quercus sp.* 等が發見せられて居るが、この最後のもの、即ち檞に就ては、これを他よりした混入として、否定もして居る。【(Lt 37)S. 45—46】この外、後述して居る樣な、自然遺物として多くの植物も搜出せられては居るが、其出土地層が、明確に文化遺物層を包含する、肝臟泥炭であるか、否かに就て、私には疑も存するものがある故、こゝでは述べない。

スヴェルドボルグに於ける沼泥炭よりは、*Carex sp*; *Mariscus cladium*; *Phragmites communis*; *Coronaria flos cuculi* 等も檢出もせられて居るが、ホルメガールドの報告には、前述して居る、花粉分析法 (Pollenanalyse)【其二°四°參照】に基き、獨りホルメガールドに止まらず、同樣にマグレモーセも、スヴェルドボルグも併せ研究せられて居るから、これに從つて大要其泥炭の性質とこれよりする所謂地質年代に就て、見てゆく。但し左記備考にも斷つてある如く、この花粉分析なるものに就て、私が餘りに知らないから、大なる不安と、これに伴ふ危險もある所だけは、明に御斷りして置き、これも研究が出來た日には改む可き所は、更に改訂も期して居る。

第十一表。花粉分析法に基く、マグレモージアン三遺層に於ける植物混入の狀態【Nach Kund Jessen aus H. C. Broholm(Lt. 2) S. 32】

遺物層＼番號地層・樹名	番號	地層	樺 Birke	ハンノキ Erle	松 Kiefer	槲（木材） Eiche	柳 Weide	檜 Fichte	ハシバミ Hasel	槲と松との比
スヴェルドボルグ Sverdborg	1	文化層	31	14	44	11	1	0	22	0.26
	2	文化層下綠	56	1	39	3	1	0	9	0.10
マグレモーゼ Maglemose（ムレルツプ）(Mullerup)	3	文化層上綠	32	3	52	12	1	0	55	0.23
	4	同　下綠	39	3	50	7	1	0	47	0.10
	5	同下方七糎	60	0	39	0	1	0	7	0
ホルメガールド西遺物層 Holmegaard West	6	文化層上方五糎	24	28	29	19	微候	0	43	0.70
	7	同　上綠	16	30	37	15	1	1	25	0.44
	8	同　中央	15	21	48	16	0	0	41	0.34
	9	同　下綠	11	3	78	7	1	0	18	0.08
	10	同下方二〇糎	76	0	24	0	微候	0	2	0
ホルメガールド東遺物層 Holmegaard Ost	11	文化層上方二〇糎	16	36	20	28	0	0	27	1.50
	12	同　上綠	4	45	34	17	0	0	10	0.50
	13	同　中央	7	26	52	15	0	0	31	0.31
	14	同　下綠	51	0	47	1	1	0	70	0.02

備考。

一、本表の樹名は、原表では丁語のみで學名を與へられて無いから、本表の如く獨譯し、又和名も只概念を與へる爲に過ぎない。

二、本表中、槲の下に、原表では、『槲の量、木材』とある意義は、他は花粉であり、これだけが木材混入したものと私は解して書いたのであるが、更に詳細に就ては取り調べる。

三、本表中の植物の數は、檢出數と考へるが、松は花粉、槲は木材とすれば、最後兩者の比は、異材量の比となるが、これも解らない。

今第十一表に於て、掲出せられて居る植物の習性は前述してあるが、この第十一表解讀の爲、更に第十二表の様に抽出して見る。

第十二表。第十一表植物習性一覽。（著者）



備　考。

一。（盛）は盛期、（先）先は先驅者、（末）は殘續者を示す。

二。點線の所は、私には未だ明確でない所を示したものであるが、勿論これ等はデンマークを中心として一般大勢上の傾向を示したもので、二三の例外的事態を含まない。

三。柳は種によつて差があるが、總括的に北的であるから、多くの種を含む樺期に假入した。

第十一表と第十二表とを對照しつゝ第十一表を研究して行くと、第一に出てくる植物は樺であり、樺期の代表者であるが、第十二表の如く末尾は檞期にも及んで居る。然し第十一表の2.4.14に於て、文化層の下線であるから、少なくとも、泥炭最下層に當るものと、5.10の如き卷貝乃至單なる沈澱層と覺しき層位に於て、兎に角著しい優位を占めて居る所は、大約其時代に對するヒントが與へらるる樣にも見へるが、然し漸次低下の傾向を見せず、6.11等で文化層より上方層で、稍々量を增してきて居るからこれのみよりする歸納に就ては、相當考慮を要する。特に第十一表は、其採集位置の指示法が、單に文化層を規準としたのみであるから泥炭等の性質が明でない。從つて6.11等の場合に對し、リトリナ最盛時（Litorinamaximum）以降に屬し、氣候再降に於ける樺の復活？とまで、申すだけの準據が足りない。恐らくそれであろふと云ふに止める。ハンノキと飛んでハシバミとは、私にはよく解つて居らないから松に移る。松は其量に於て、殆んど總てを通じて優位にある所から見て、其盛期と云ひ得ないとしても、盛期と餘

り隔てがないことが考へらるゝ。たゞ6.11の文化層上層に於て、より減少して居る點は、前述した、榉とは一致しないが、文化層より下方の5.10.14に於けるものに對し、6.9.13の文化層下縁が何れも増加傾向を見せて居り、且つこの下縁より中央、上縁に向ふに従つて減少傾向がホルメガールド東西兩遺物層では見られるが、マグレモーゼは上縁(3)で稍々增しても居るから、これ亦、編年を明確に說明するだけには、現れては居らない。たゞ松が主要植物の一つであり、且つこれが昔よりして、其盛期乃至これと隔て少ない時代とは、考へられ得る。次は槲であるが、この數量は第十一表備考二。で斷つてある如く、木材數と思はれるから、比較單位を異にし、直接數量的比較が出來ない。只これを單獨に見て行つた場合、其混入狀態が、下より稍々齊然と其量を增して居る點は、着眼に價する。然し前述した如くこの槲の混入に就ては、ザラウは否定して居る程、これが混入は、ザラウのマグレモージアン＝アンシルス說に邪魔になつたのである(48)。それ故、本表の如く明にマグレモージアン各遺物層に其混入を確認する上は、これが編年位置に就ても、考慮せらる可きものである。次の柳は種不明であるし、檜も僅に一例に過ぎないから公算が足りない。これを總括すれば松が主役であり、槲と榉とが相役を務め、他は次役に位置する。これを松を中心として見れば、これにハンノキ、ハシバミ等松期植物群の隨伴者を加へ、榉、柳共に北的の傾向のものも亦、松期認定をより力添へもする。たゞ槲の混入は、其程度の比較が、第十一表末の如く成立するか否かに關せず、一面に於ては溫暖な傾向あることも併せ考へねばならない。

一方この樹木編年と併せ見る可き、泥炭に就ても、尙問題を藏する。卽ちスヴェルドボルグの沼泥炭と、ホルメガールド東遺物層に於ける濕地泥炭との性質明確を缺くものがあるが、萬一これが肝臟泥炭でないとすれば、この四ケ所の遺物層に於ても、よし其文化遺物が全く同一であつても、泥炭編年上からの時的經過の差も生れてき、前後の二期、卽ちマグレモーゼとホルメガールド西遺物層が共に肝臟泥炭であるから古く、次にスヴェルドボルグとホルメガールド東遺物層に於て、沼泥炭と濕地泥炭とが大約同一と見らるゝに於ては、前者より、より新しいと云ふ結果も生れ出で得る。只これは目下私には沼泥炭と濕地泥炭とが解らないから、全く假說とするより外はないが、將來其性質判明した場合、泥炭編年上からも、本文化期の時的位置に就て、有力なる一資料が提供せられ得ることを述べて措く(49)。

これを要するに、樹木編年上からは、松時代であるが槲の混入によつて、純然たる松盛期とは認められない。泥炭編年上からは少なくとも肝臟泥炭の時代以降に屬することが知り得る。更にこれが細位に就ては、文化遺物と併せ、最後に取纏めて述べよう。

十一。文化遺物層の史前學的性質

前條に於ては、文化遺物層の植物的性質と、これに連關して、これに基く時的考察をなしたのであるが、此の如き地層中に、何故かく文化遺物が包含せられたものか、これを史前學上より見て、果して如何なる性質のものであるかに就て見て行く。

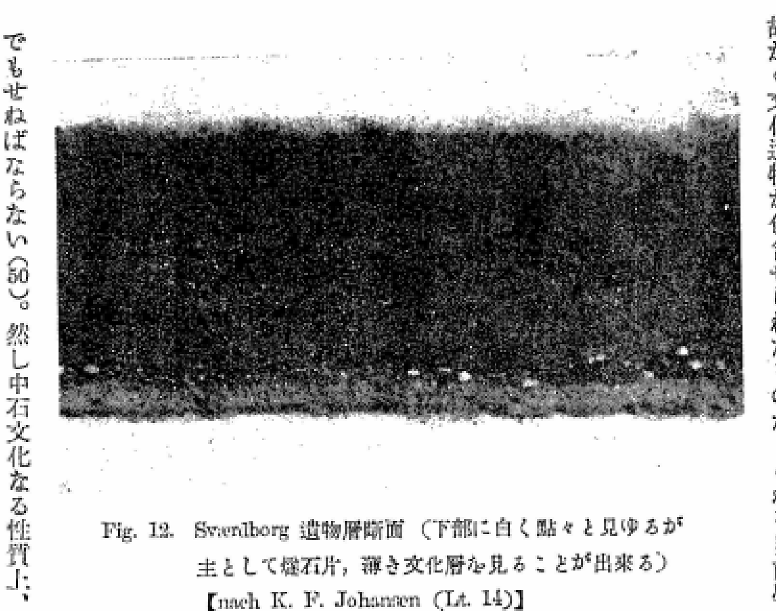


Fig. 12. Svendborg 遺物層斷面（下部に白く點々と見ゆるが主として燧石片，薄き文化層を見ることが出來る）
【nach K. F. Johansen (Lt. 14)】

このマグレモージアン三者四遺物層に於ては、何れも略同樣に、後述して居る如く、多大の文化遺物を、しかも相當密在して、比較的薄き地層中に發見せられて居る(第十二圖)のであるから、これ等文化遺物が偶然に沼澤中に落ち込んだものとは考へられない。必ずやこの現遺物層近くに、其文化所有者が住居し、其遺物が何等かの原因で、かく今日發見せらるゝ樣な遺物層を形成するに至つたものと認めらるゝ。今この文化所有者の住居位置に就て、其有り得べき場合を想定すれば、次の三樣の場合が考出せらるゝ。

A。現遺物層の存在して居る所に、住居の存した場合。

B。遺物層の若干部を含み、或は全く遺物層外ではあるが、その直側附近に住居が營なまれた場合。

C。遺物層に直接關係なく、他に住居が存した場合。

以上の三者に就て見るに、Aなる場合は、前述してきた如く、遺物層直下の卷貝沈澱層は水成であり、泥炭も亦其成生には水を必要とするから、もし卷貝層乃至泥炭層の何れかと同時代にあつても、其位置に住居するには所謂澤上住居(Moorsiedelung)を營むか、さなくんば杙上住居(Pfahlbau)でもせねばならない(50)。然し中石文化なる性質上、既に野外に於ける構築住居を築造し得る文化を有するものであるにしても(51)、杙上乃至澤上住居まで營み得たかは、疑深い。よし其構造が新石時代のそれの如く、發展したものでなく、最も簡易なものであるにしても、事實に見る何物もないのであり、又ザラウの如く以上の三つの場合を踏み越へて、後住居とまで見るのは、更に

公算に乏しい。要するに遺物層中に直接住居跡を示すものがなく、且つ水濱地上の生活が營んだものか疑もある故、Aの場合の確からしさが充分でない。Bの場合を後に廻して、Cの場合を見るに、これ亦後述して居る如く、文化遺物層中よりは、木炭細片も出で、細石器の如き小形な石器や、破損し易い、所謂石入骨鏃（其四。二十。F參照）乃至は木器までが出土するに止まらず、第十二圖の様な薄い部分に、これを上から見れば、第十三圖の様に散在して居るのであるから、住居跡と關係がないとは思はれない。他より土砂等と共に全部が運ばれたものであるなれば、こんなに散在もし得まいし、又これ程薄くも出來まい。即ちAとCとが公算に乏しいとなれば、必然的にBが有力となる。然しBたる可き公算多きが故に、Bなる可しと云ふのではなく、A・Cの公算が共により乏しいから、公算上、乏しさの少ないBが、消極的に優位を占むるに過ぎない。又以上のA・B・C三者の外、工場、狩場其他住居跡以外の事實の存した所と考ふ可き餘地は見出し得ない。尚以上の外、九の【註一】に述べてある、マグレモーゼに對するセルナンデルの層位中に、ザラウと異り巻貝沈澱層と泥炭層の中間に、褐色沈澱層の挿入がありこの褐色沈澱層の性質如何が重要である旨、これを述べてあるが、この性質によつては、必ずしも杙上乃至澤上生活を營まずとも、住居を構築し得る場合も存し得ることを附加して置くものである。然しスヴェルドボルグに至つては全く考察すべき何物もなく、全く解らない。ホルメガールド東遺物層は不完全であるから、取り除いて見ても、西遺物層に於ける、第十二圖の如き文化層の特異構成は、更に判斷を迷はすものがある。只第十一圖に於ても見得る如く高低があり、こゝの沼中には、所謂島と呼ばれる様、基底が一様でないから（第五圖の兩遺物層附近に白く遺された部分）、文化遺物層直側の島に、住居跡が存したとすれば、說明も容易ではあるが、其層位構成上の特異相は全く釋明し得ない。これを要するに、夫々に對し、其附近近くに住



Fig. 13.　Sværdborg 文化遺物出土の狀態（文化遺物層の覆土を取り去つた所）【nach K. F. Johansen (Lt. 14)】

居が存したであろふと漠然と申す以上には、申し得ないのである。即ちB說を以てしても根據は弱い。これが私として、遺跡なりや否やの疑問をも起さしめ、殊更に遺物層なる言葉を以てして居る所以なのである(52)。

この位で、遺物層の研究を一先づ終ることゝする。私の述べ方も不完全であり、研究上足らない所も多いが、其狀態が我が國新石遺跡として、普遍的なものとは全く異つて居るから、一入了解し悪いとは考へるが、一方に於ては、北歐を了解するには、無くてはならない部分も存するから、かく長々と述べた次第である。これで文化遺物層としては、其存在の地理的位置より、發見地の地層、特に文化遺物を包含する泥炭層に就て、其地質、植物編年學上の時的位置に就て、これを見、最後にこれ等の住居跡の考察をなしたのであつて、これで一通り、發見地關係を終り、其出土遺物に進むことゝする。

(39) こゝで沼澤地と稱するのは、マグレモーゼの例の如く、必ずしも今日、表面まで水が溜つたものゝみを指すのでない。降雨季其他には水の溜ることもあろふが、表面に水の有無によつては、區別せられず一樣に Moor＝Mose(丁) と云はれて居る。であるから、或は低濕地とでも云ふのが正しいかも知れないが、一般に沼澤と云ふて居るから、これに從つて置く。但し獨語で區別がないが、事實に於て、水の無いものを特に沼澤地、乃至略して沼地と稱し、年中水のあるものを沼澤として、區別した次第であるが、嚴格な意味ではない。

(40) Heile もモーアと同樣、云ふて行くと、色々の意義もあり、面倒も起るが、こゝでは輕い意味で使つて置く 又これ等に就ては、P. Graebner; Heile und Moor, 1909. 參照。

(41) 北歐方面に於ては、往々この遺物層所在地をマグレモーゼとは云はないで、其行政區畫として所屬して居るムレルップ (Mullerup) を以て、所在地名として呼ぶ人々が少なくない。只本期文化名は、マグレモージアンとして、當初ザラッの報告に因んで編設せられて居る故文化名と其文化發生地名とを特に區別する必要がなく、寧ろ一つにして置いた方が誤解も少ない故、私はマグレモーゼと云ふて置く。但しホルメガールドの報告 (Lit. 2) に於て、イエッセン (Jessen) は、本文化期名を「ムレルピアン」(Mullerupien) とまで稱し、スヴエルドボルグの報告 (Lit. 14) にもムレルップ沼澤地 (Mullerup Mose) 乃至はムレルップ住居跡 (Mullerup-Boplads) と書いてもあるが、恐くマグレモーゼの同一異稱に過ぎない。又同國參謀本部の十六萬分一地圖にも、同沼地にはマグレーモーゼの地名がない。恐らくザラウが但稱を採用したことゝ思はれる。それが爲、デンマークやスエーデン等、これ等の消息に明い人々が、特にムレルップと、解り易く云ふらしく【(5)參照】遠方でよく消足の通じない方面がマグレモーゼと呼んで置く。

(43) ホルメガールドの標高は、私の述べた所と、第五圖とでは一致しない。第五圖は、原著に於て、「參謀本部の地圖による」(efter Generalstabens Atlasblad) とあるが、私の所持して居る、參謀本部地圖 (Generalstabens Kort, i 1 : 160000. 1922) を見ると本文記載の標高である。而してこの地圖とは、第三圖のマグレモーゼ、第四圖のスヴエルドボルグとも一致する。只第五圖とは、甚しい相違がある。この相違たるや、測量に當つて、定めた假定標高を、眞標高に直さずに、其儘揭出したものと私は考へる。私共も測量の際には、

常に假定標高を設け、これより測量し、最後に眞標高と結んで居る。從つてこれも假定標高と考へる。而してこの假定標高に對し大約三分一位の比高が眞標高との間に存する樣に思はれる。

（43）草泥炭と云はれて居るのが、前節。六。2。b。「泥炭の種類」の所で述べてある、何れに當るかは、原報告に說明がないから解らない。又マグレモーゼの草地泥炭（Wiesentorf）に當るとも思はれるが、只私の想像だけである。

（44）暗褐色泥炭が、何物であるかも、草地泥炭と同樣私にはよく解らない。原報告【(Lt. 14) S. 191—192】によれば、其中ににハンノキの一種（*Alnus glutinosa*）や、アシ（*Phragmites communis*）等が入つて居る由であるが、この泥炭は比較の標準がたゝない。

（45）根本に於て、このＣ層をなす、沼泥炭なるものがＡＢ層と同樣、其何物か、區別の標準を私は見出して居らない。只スヴェルドボルクの報告を讀んで見て考へ付いたことは、これ等の泥炭區分は、或はV. Nordmann；(Lt. 29) の『ムレルップ文化に對する地質學的年代の新研究』に準じたものではないかと考へられもするが、この書を私は見て居らないから、何んとも申されない。然し本文に述べた原報告では、特にこのノルドマンを引用し、又ザラウの『水泥炭』"Vanitörven" として比較し、原報告者がこれを採用してない所を見ると、（一）ザラウの區分が當を得て居らない爲、採用しなかつたのか、（二）スヴェルドボルグでは、區分明確を缺き、區分し得なかつたのが、（三）或は區分する必要を認めなかつたのか（四）又は全く水泥炭と稱し得ざる他の泥炭であつたのか（五）乃至は（一）—（四）の複現象を見たのか、其何れに當るか判斷しない。何れ詳細は猶今後究めては見たいと考へて居る。更にこゝでは沼泥炭＝Kærtörv として、ザラウの Sumpftorf＝濕地泥炭と譯語は變へてはあるが、前述の如く、どれだけ差のあるものか解らない。

（46）ホルメガールドの報告者ブロゥホルムは、其泥炭區分中、文化遺物層を含む泥炭をば、濕地泥炭（Sumptörv）として、再びザラウのマグレモーゼに用ひた一つを復活させて居る。恐らく同一のものを指すと思はれる。但しホルメガールド直尾に附せられた、スヴェルドボルグの再調査報告には、ヨハンセン（當初の報告者）に整ふて、沼泥炭＝Kærtörv を採用して居る所を見ると、Kærtörv＝Sumptörv と云ひ切れない何かゞ存するかも知れないが、これ等も將來尙私として、研究して見る考へである。それにしても、この樣に用語の不統一の爲、惱みも多く研究の頓挫もきたすから、これ等も注意すべきことゝ、しみじみ感ずる次第である。

（47）こゝでハンノキ濕地泥炭と稱して居るが、實は、丁語の Elle が明確にハンノキ（*Alnus glutinosa*＝Erle）に當るのか、丁語に未熟な私にはよく解らない。色々研究して見て、恐らく間違はあるまいと考へたから、かく云ふたので、いづれ取調の上、間違つて居つたら改めもする。

（48）こゝでのみの問題ではないが、本論文を通じて、ザラウの缺陷が各所に曝露する樣にも見へる。然し本文當初に述べた如く、ザラウの研究は、一九〇三年に於けるもので、其獨譯時の一九一一年又は一四年時と雖も、三年の研究が骨子をなして居るのであるから、研究年代が、より古い。これとスヴェルドボルグの一九一九年、ホルメガールドの一九二四年の如き新しき研究と對比するのであるから、かく缺陷も出てくるのが當然であり、其間に學術研究の進展が窺はれもするのである。從つてこのザラウの缺陷こそ、二十年間の學術進展事狀として、止むを得ない現象であり、寧ろ學術上から云へば、悅ぶ可きことゝも思はれる。只ザラウ個人に就て見れば、如何にも氣の毒に思はれるが、研究は個人の情義と區別せらる可きものである。而して今日の眼で如何に不備が多かろふと、一九〇三年に於ける研究とし

て、マグレモージアンの名と共に、ザラウの研究は不朽である。而して私のこゝで述べて居ることも、以上の主旨に基くものであり、先輩に對する敬意を表することのやぶさかでないと同時に、過去の缺陷に多く觸れるにしても、それは研究上に過ぎないことを、明にして置く。

（49）スヴェルドボルグの沼泥炭とホルメガールド東遺物層の濕地泥炭に就ては、泥炭そのものとしての研究が私には解らないが、多くが同樣乃至同一に取扱はれても居る樣である。然しこれ等が如何なる性質を有し、其結果、同樣乃至同一としたか解らないから、かく疑問とした次第である。而して、この同樣乃至同一なりとの前提のもとに、肝臟泥炭より新しいとの說は、既に私のデンマークに於て周知もしたことではあるが、文獻上に未だこれを突き留め得ないからかく保留した次第である。

（50）澤上乃至杙上住居に就ては、宮坂氏、新石（Lit. 21）參照。但しこれ等は、新石時代の住居としては、より進んだ構築住居であり、且つその文化階梯も新石末尾に近いものであるから、本文化などからすると一桁、桁が違ふ。又よし、新石時代の澤上乃至杙上住居の樣な進んだ構築住居でなく、もつとより簡單な、澤上乃至杙上住居を營んだとしても、其一部の住居資料は、泥炭なる性質上、若干なりとも殘存を見てもよい。單なる木材は相應に出土もして居るのであるから特に然りである。ザラウもこの住居問題に就ては、隨分惱んだものと見へ、色々述べて居る。特に彼れは、A。に對し、杙上生活と見、且つ杙等住居資料の喪失—天災等によるーと見たり、冬期氷上生活說を歩出もしたか、自然遺物中に存する渡鳥の存在により、自から覆しても居る。而して終に筏住居說を述べ、且つスカンジナビアに於ける沼地發見の數例と共に、夫々の研究者が、筏說を稱へて居ることを紹介して、マグレモーゼも亦筏住居であろふと結んで居る。【ザラウ（Lit. 37）S. 30—50】勿論實證がない假設である。而して餘りにAの場合に固着して主觀した結果とも見らるゝ。然し一般的に北歐方面では、獨りマグレモージアンに止まらず、多くの發見地、それは文化階梯上から見て、中石文化に止まらず新石文化に於ても、この樣な沼地發見があり、これが解釋に惱んで居るのも事實である。

（51）中石時代に於ける構築住居の實例は、西歐方面に於ける中石後期に屬し、文化內容に於て略北歐方面の貝塚構成時代と平行關係を認めるゝカンピニアン（Campignien）には立派な竪穴住居跡を存して居る。又北歐の貝塚には、住居跡そのものはないが、小石で圍んだ爐跡は發見せられて居る【拙稿、デンマーク貝塚（Lit. 31）第三圖參照】。以上の外、西北歐を通じ中石文化に於ては、構築住居は未だ發見せられて居らない。それ故構築住居として、發育過程を示し得るものはないが、カンピニアンの竪穴から考へ、又新石初期の圓形住居等よりしても、このマグレモージアンに於て、特に發育した住居の存するとも思はれない。根本原則として構築住居の樣式は、圓より出發して多角形より四角形へ進む樣に考へらるゝのであるから、この原則より見れば、野外生活としても、未だ充分な發達を見ない本期文化であれば、圓形住居である樣にも想定せらるゝ。而してこの圓形住居は、簡單に構築も出來るが、これに床、柱、杙乃至横桁等を必要とする杙上乃至澤上住居にまで、本文化が達して居つたと考定すべき資料は何んにもない。

（52）この遺跡問題に就ては（7）に於て概述もして居るが、更に私の考へて居る遺跡なるものは『史前當時に於て、某行爲が營まれた結果、其行爲の存在を示し得る場所を、指すのである』と申したい。從つてもし其行爲の營まれた場所に、其存在を示すものがなく、これが其後移動した樣な場合、もしくは其行爲が營まれた結果を示し得るだけの資料不足の場合の如きは、嚴格狹義の遺跡には入り得ない。卽ち

遺物發見地である。こゝに述べて居る文化遺物層の如きは、色々の場合により、遺跡ともなり、又發見地ともなる。今こゝに例出して見るなれば第一に、もしこの文化遺物層の或る所が、其常時に於ける生活地表であり—本文Aの場合—にして其後陥沒其他により、泥炭中に包含せらるゝに至つたものであるなれば、立派な遺跡である。但しそれには、それを明にするだけの證據がなくてはならない。第二には本文Bの場合の如く、直接遺物層には住居がなくとも、不用品の廢棄其他の結果、泥炭中に今日の文化層が出來るに至つたものであるなれば、恰も貝塚の一部と同樣、積極的に構築物等住居を物語るものがなくとも、住居に伴ふ一現象として、稍々廣い意味にはなるが、遺跡と見られないことはない。第三には、第二の場合に伴ふて、文化遺物の一部が、流動其他第二次的に其位置を變じて、直接舊位置にあるものと、第二次移動の部分も共に存する樣な場合は、性質より不明確となり、遺跡と遺物發見地との中間性をも帶びてくる。勿論この場合に於ても、不動の舊位置にある部分と、第二次的移動とが、夫々區分し得、且つこれが區分の理由も明であるなれば第二の如き、廣義の遺跡と、遺物發見地とに分つことも出來る。但し以上は單なる理論であり、實際に於ては、第二の場合か、第三の場合かの判定が通常困難なことが多い。第四の場合は、本文Cの場合で、生活地表が全く他にあり、其遺物層が第二次的移動の結果によつて出來たものと認められ得れば、これは單なる遺物發見地である。第五には、前述第一—第四何れの場合に當るものか判斷不明の場合は、意味廣い發見地と云ふて置けば、もし遺跡と認めらるゝに至つても、この發見地なる中に遺跡も包含せられ得るから、支障は起らない。但し言葉の使ひ方に過ぎないが、單なる遺物發見地には遺跡は包含せられない。兎に角以上の樣な見解から、本文化遺物層を見ると、よしそれが、B説に近いと考へられても、明確ではなく、第五の場合と見て置けば、間違はない。それ故、こゝでは遺跡なる言葉を避け、遺物發見地と同樣義に考へて、文化遺物層と漠然たる言葉を以てしたのである。

其四　遺　物

十二。遺物一般並に出土狀態

この三遺物層を通じて、出土遺物の總量は、甚だ多い。自然遺物に於ても、石、骨角の外、各種の植物が檢出せられ、骨片中に於ける動物の種も、後述して居る如く相應に見らるゝ。然し人工遺物（53）の種と量とに於ては驚く可き程の數に達して居る。マグレモーゼに於ては二〇三七一個の人工遺物が採集せられ、其内八八一個の燧石製石器、二九四個の骨角器を得て居る、スヴェルドボルグに至つては、八三〇〇個の加工燧石片出土し、其内約一一〇〇個の細石器を得て居り、骨角器も亦、二〇〇個餘に達して居る。ホルメガールドに於ても亦、東西兩遺物層を併せ約四〇〇〇個の加工石片を出し、骨角總數、約四五〇〇個に達する有樣であるから、其出土量が、如何に多いかゞ想像出來よう。從つて石器、骨角器共に、其出土量が多いから、自然其種類にも富んでく

る。特に骨角等の一部は、泥炭によつて保護せられた結果に基き、かく多量に殘存し得た所も、亦この種遺物層としては、當然の現象である。

これ等出土の狀態は、特異なものはない。たゞホルメガールド西遺物層の一部に於ては、加工石片と骨角とでは、其出土位置が相異るものが存して居るとのことであるが、加工石片集在、骨角集在と云ふた狀況の外、特別の意義もないらしい。只これ等マグレモージアン三遺物層を通じて、人工遺物が甚しく密在すると云ふことが、一特徴として認めらるゝのであつて、特にスヴェルドボルグの如きは、燧石片密在の狀態は、所謂『燧石の敷物』（Tapis à silex）(54)である【第十二、十三圖參照】。

これより、この出土遺物各個に就て見て行くが、先づ自然遺物を概述してから、人工遺物に入ることゝする。



Fig. 14. Maglemose の發掘【nach G. Sarauw (Lt. 37)】

一　自然遺物

十三。自然遺物一般

自然遺物に就ては、其出土の狀態に於ても、特異の意義を存する樣なものもなく、又これ等の一部、特に植物に就ては、既に其一部も研究してあるから、こゝでは其重複を避け、多く列記するに止める。又こゝで自然遺物と稱しても、主として動植物に就てのみであつて、其他に就ては、資料不足で述べ得ない。

十四。動物の遺骸

動物としては、昆蟲、魚類、爬蟲類、鳥類及び哺乳類等が發見せられて居るが、貝類に就ては、三遺物層共に出土が明確でない。少なくともマグレモーゼには列記せられてない。勿論貝類ありとするも、淡水關係のものではあるが、文化階梯を一歩昇れば、貝

塚時代となるに拘はらず、こゝに何物も見出し得ない所を見ると、未だ捕食にまで至らなかつたと考へる。前述して居る第十表の如き卷貝沈澱層の貝類の様なものでは、貝類捕食に經驗無き、或は少なきこのマグレモージアン人には、食料對象にまで達し得なかつたことも、當然の様にも見らるゝが、それにしても、漁獲に對しては、一通り進んだ釣針まで所持して居る本期人が、まだ貝類捕食にまで達し得ない所は次に來る貝塚時代と對照して面白くも見らるゝ。

1。**昆蟲。** 昆蟲はマグレモーゼより單に出土して居る外、他の二箇所に就ては、私には解つて居らない。而してザラウは次の二種を擧げて居る。

1. Hylesinini } Borkenkäfer
2. Tomicini }

これ等の習性に就て、私は研究したことがないが、我が國新石泥炭遺物層からも、同様、昆蟲類を發見した關係上(55)、泥炭遺物層中には、昆蟲類までの殘存可能であることが知らるゝと共に、獨り新石時代に止まらず、より古き中石時代に於ても、殘存し得ることが立證せられたものである。

2。**魚類。** 魚骨も相應に出土しては居るが、種の決定が困難と見へ、僅に、*Esox Lucius*=Hecht（だつ?・淡水魚）が三遺物層共に出土を報ぜられて居る外、魚の種類に就ては、單に魚骨とある外、私には解らない。

たゞ後述して居る様な、釣針でこの Hecht が漁獲し得るとするも他の魚獲法も、亦併せて考へねばならぬと同時に、一面ではこの外の魚の種類に就ても想察せねばならないものがあるが、只今多くが解らいのであるから、これ亦將來に待たねばならない。

【註二】 Hecht に就て。Brehms; Tierleben. 3. Fische. S. 307—311 に本魚に就て記述せられて居る。これによれば、其大さも一米以上に達するものがあり、釣り得るとのことであるから、以上の釣針で釣ることが出來るとは考へらるゝ。又同書には古くローマ時代よりこの肉を稱美したとあることも面白く見らるゝ。

何れにせよ、マグレモージアン人が、よしそれが純然たる漁者としてでなくとも、本格的な漁撈を試みたことは、事實上動かぬ所であると共に、文化上人類が水により親んできた現象だけは、見逃し得ない所である。

3。**爬蟲類。** これも三遺物層を通じて、*Emys orbicularis*（*E. europaea*）=Sumpfschildkröte（イシガメの類?）出土したことを

報ぜられて居るのみではあるが、前述の如く水に親みが出來れば、この樣なものも亦、採獲せらるゝチアンスも自然と出來てくる樣に思はれる。

十。**鳥類**。鳥類は前三者から見ると、著しく多い。これは事實多くもあつたが、又立派な鑑別家のこの國に居ることも、結果に於て多數の種が見出され得るに由るのでもある(58)。今表示すれば次の種類が見らるゝ。

第十三表。マグレモージアン出土鳥類一覽表。(三原報告を綜合)

1.	かもの類	*Anas acuta*	Spitzente	(M)				
2.	同	*A—boscas*	Stockente	(M)	(S)	(H)	(舊.1)	
3.	同	*A—clypeata*	?			(H)		
4.	同	*A—penelops?*	?		(S)			
5.	おほはくてう	*Cygnus olor*	Hœckerschwan	(M)	(S)		(舊.3)	
6.	?	*Pagonetta glacialis*	Eisente	(M)				
7.	かいつぶりの一種	*Podiceps cristatus*	Grosser Lappentaucher	(M)	(S)	(H)		(貝)
8.	あびの一種	*Colymbus arcticus*	Polar-Seetaucher	(M)				(貝)
9.	くろづる	*Grus cinerea*	Kranich	(M)	(S)	(H)	(舊.17)	(貝)
10.	かもめの一種	*Larus ridibundus*	Lachmöve	(M)				
11.	同	*L—marinus*	?		(S)			(貝)
12.	あほさぎ	*Ardea cinerea*	Fischreicher	(M)	(S)			(貝)
13.	さんかのごゐ	*Botaurus stellaris*	Rohrdommel	(M)	(S)			
14.	?	*Phalacrocorax carbo*	Scharbe	(M)	(S)	(H)		(貝)
15.	とびの類	*Milvus ictinus*	Gabelweihe	(M)				
16.	をじろわし	*Haliaëtus albicilla*	Seeadler	(M)	(S)	(H)		(貝)

17. くまげら	*Picus martius*	Schwarzspecht	(M)			
18. かけす	*Garrulus glandarius*	Fisch-Hehers	(M)			
19. きんくろはじろ	*Fuligula cristata*	Tauchente	(S)		(舊.5)	
20. あいさがも	*Mergus merganser*	Säger?	(S)			(貝)
21. はいいろがん	*Anser cinereus*	Graugans	(S)		(舊.4)	(貝)
22. をほらいてうの一種	*Tetrao urogallus*	Auerhuhn	(S)		(舊.11)	(貝)
23. みさご	*Pandion haliaëtus*	Flussadler	(S)			
24. おほばん	*Fulica atra*	?		(H)		
25. こうづる	*Ciconia nigra*	?		(H)		

備考

1　本表の和名は、大略の見當をつける爲めであつて多くを市村氏、動植物学典によつて居る。
2　學名中にも、或は改訂を加ふ可きものがある樣ではあるが、こゝでは原報告通り書いてゐる。
3　獨逸俗名は、マグレモーゼ以外は、市村氏によつて居る。
4　後尾にある(M)はマグレモーゼ、(S)はスヴェルドボルグ、(H)はホルメガールド東西兩遺物層出土を意味する。
　又其次の括弧の舊は舊石出土を意味し、舊の字の次の番號は、【拙著、歐洲舊石、(Lt. 30) 番號, S. 127】に於ける舊石時代鳥類動物群一覽表中に於ける夫々の番號である。又其次ぎに括弧内に貝とあるは、貝塚時代の出土を示したもので A. P. Madsen. u. a.(Lt. 19) によつたものである。但し鳥類に就ては、私自身が全く不案内であるから、舊石にしろ、中石にしても、遺漏の多かる可きことゝ思はれる。

以上の鳥類に就て、夫々個別的に、共習性研究も、環境復原上、大切のことであり、ザラウの如きは、この中に渡鳥あるを以て住居問題に連關して觸れても居るが(57.)、私には、根本に於て鳥類に對する知識貧弱の爲、未だ多くに觸れ得ない。又舊石鳥類動物群乃至貝塚期出土のそれとの比較よりも、歸納し得るものもあろうが、前述の次第であるから、一覽表を作出したに止める。只概見した所、これ等出土の鳥類中には、水禽等の外にも、水に親しみ多き種類が比較的多いと云ふことを注意して置きたい。それは獨り鳥類に止まらず、魚もイシガメも淡水に緣が深いから、これ等多くの水に緣あるものが、其住居近くに多く存したことが考へられ、よし現遺物層所在地が沼澤でなかつたとしても、少なくとも手近に獵獲し得るに都合よき、これ等動物の生棲した所の存

したことだけは、動かぬ所と考へる。更に考へねばならぬものは、これ等の鳥類を如何にして獵獲したのであろうかの問題であるが、これは人工遺物の所で再考するとしても、其獵獲法の如何を問はず、これ等水に親しみある鳥類を捕獲するには、人類も亦、他少なりとも水に入る様な、場合も生じ、人類をして水に親しむ機會も、より多くなる點だけは特に考慮を要す可き點と考へる。

5。**哺乳類**。これは、其遺骨保存の狀態よりしても、前述してきた他の諸動物に比し、人目にも觸れ易くもあるから、一番多いのも、普通に見る現象ではあるが、それにしても其種に富んでも居る所は、注意を要する。

第十四表マグレモージアン出土哺乳類一覽表。(三原報告を綜合)

1.	のうさぎ	*Lepus europaeus*	Hase	(M)			(舊17)	(貝1)
2.	りす	*Sciurus vulgaris*	Eichhörnchen	(M)	(S)		(舊5)	(貝.2)
3.	うみだぬき	*Castor fiber*	Bieber	(M)	(S)	(H)	(舊.12)	(貝.3)
4.	はりねづみ	*Erinaceus vulgaris*	Igel			(H)	(舊.20?)	(貝)
5.	をほかみ	*Canis Lupus*	Wolf		(S)		(舊.23)	(貝.5)
6.	いぬ	*C—familiaris*	Hund	(M)	(S)	(H)		(貝)
7.	きつね	*C—vulpes*	Fuchs	(M)	(S)	(H)	(舊.24)	(貝.4)
8.	やまねこ	*Felis catus*	Wildkatze	(M)	(S)	(H)	(舊.28)	(貝.6)
9.	あなぐま	*Meles taxus*	Dachs	(M)	(S)	(H)	(舊.34)	(貝.11)
10.	てんの類	*Martes sylvatica*	Baummarder	(M)	(S)	(H)	(舊 ?)	(貝.9)
11.	かわうそ	*Lutra vulgairs*	Fischotter		(S)	(H)	(舊.39)	(貝.12)
12.	ひぐま	*Ursus arctos*	Baer	(M)	(S)		(舊.41)	(貝.8)
13.	ゐのしし	*Sus scrofa*	Wildschwein	(M)	(S)	(H)	(舊.42)	(貝.10)
14.	をろくじか	*Alces machlis*	Elch	(M)	(S)	(H)	(舊.45 ?)	(貝.19)
15.	あかしか	*Cervus elaphus*	Edelhirsch	(M)	(S)	(H)	(舊.46)	(貝.18)

16. ろーじか　*C.—capreolus*　Reh　(M) (S) (H) (許.47) (貝.17)

17. のうし　*Bos taurus urus*　Ur　(M) (S) (H)　(貝.20)

備　考

1 本表も前表と同一要領により作出した。

2 舊石の括弧内に?を附したのは、學名の相違の點あるも、同一のものと思はれるが、まだ研究してないから?を附したのである。

3 貝塚の括弧内の番號は拙稿 (Ld. 31) に於ける番號であり、番號の無いのは、拙稿に上稿しなかつた分である。

この表で見ると、特別に抽出する樣な種類はない。それの殆んどが舊石時代より遺承し、只本文當初にも述べてある如く、家犬の出現のみが、大きな違ひとも見られよう。舊石にも、西歐方面の中石前期にも(58)、北歐の中石前期も確實な家犬出土の報告はないから、今の所では、人類最初の家犬と認めらるゝ。而して本期以降の文化には傳承せられて居るのであり、人類としては共生活に忠實なる隨伴者が出來たことは、文化上特筆すべきことゝ考へる。

家犬の外、舊石時代に見ないものは、牛（同表17）であつて、これが家牛の祖と周知もし、又家牛始原問題もあるが、今回は略する。又鹿類中、特にゑるく鹿は、メンツエルの鹿類編年（第四表）にもある如く、北歐氷後期に於ては、古種に屬して居り、貝塚期までは見らるゝけれども、この地の新石時代には殆んど解消して居るから、北歐中石時代に於ける一特種とも見らるゝ。又各種哺乳類の出土數量は、其全骨角出土量に比して、甚だ少なきものがあるのは、判別困難なものが大部を占めて居ることが考へらるゝ。然し三遺物層を通じて、赤鹿と野猪とが多い樣ではあるが、貝塚時代の如く、それ等が九〇%に達する(59)樣にまでは達して居らない所に、差が見らるゝが、これが詳細も略する。

十五。人　骨

人骨は完全なものが出土したのではない。一部分である。それも特殊の狀態に發見せられたのではなく、他の遺物と同樣に出土して居る。マグレモーゼよりは、成人の Schenkelknochen, Fingerglied と小兒の Unterkiefer とが出土し、スヴェルドボルグよりは、成人の Ober-Unterkieferfragment 其他若干が出土を見ても居るが、其出土狀態に於て、埋葬其他の特異相がないから、單なる骨角出土と變りがない。この人骨の帶ぶる性質研究は、既に史前學研究の範圍を超へ、これを自然人類學的の研究に待つ可きものであり、史前學としては、其自然人類學的研究の結果に基き其歸納すべきものゝ如何を糺す可きものであるが、上述の如き僅

少部分の骨格よりして、幾何の歸納を求め得らるゝものか、尚研究の餘地あることゝ考へる故、こゝに多くを觸れない。たゞ自然人類學的研究文獻を註記して參考に供する(60)。

十六。植　　物

植物界の概要に就ては、既に述べた所であるから、重複を避け、こゝでは單にマグレモーゼより檢出せられたものを列記するに止める。

第十五表。マグレモーゼ出土植物一覽表。【Nach G. Sarauw(Lt. 37)】

1.	ま　つ	*Pinus silvestris*	Kiefer		(松—槲—)
2.	はしばみ	*Corylus Avellana*	Haser		(松—)
3.	に　れ	*Ulmus montana*	Ulme		(松—槲—)
4.	てうせんやまあらし	*Populus tremula*	Espe		(樺—松—槲—？)
5.	樺	*Betula cfr. odorata*	Birke		(樺—松—槲—？)
6.	？	*Rhamnus Frangula*	Faulbaum	？	
7.	ぶ　な	*Fagus silvatica*	Buche		(槲—)
8.	槲	*Quercus Pedunculata*	Eiche		(松—槲—)
9.	？	*Aspidium filix mas*	？	？	
10.	？	*Polystichum thelypteris*	？	？	
11.	多孔菌科の一種	*Polyporus igniarius*	Feuerschwamm	？	
12.	ひともとすゝき	*Cladium Mariscus*	？	？	
13.	からぼふすげ	*Carex Pseudocyperus*	Riedgras		(槲—)

備　考
和學名等前例による。

111 —

只これ等出土層位が、若干不明確なものもあり、必ずしも肝臟泥炭出土か否やが私には解らぬものがある故、單に參考にするに止める。

(53) こゝで文化遺物 (Kulturreste) と人工遺物 (gearbeitete Reste) との關係に就て其概要を述べる。私の考へて居る文化遺物なるものは、より廣く、文化に關した總ての遺物を含み、自然遺物と對應すべきものである。人工遺物に至つては、人爲加工を加へた遺物のみを指すのであるから、文化遺物より狹く且つこれに包含せらるゝ。文化遺物中には人工遺物でない、自然物を其儘利用したものゝ樣なもので含んでくるがこれは、人爲加工せられて居らなければ、人工遺物には含まれなくなる。更にこれに連關して、こゝで用ふる術語に就て、次の樣に區別して置く。人工遺物中には、器物作出等に當つて生じた所の打製片、(geschlagene Absplitterung) 剝取片 (retuschierte Absplitterung) 等は、人工を加へても果して器物、卽ち石器として用立つたか不明のものがある。此の如きものは加工石片＝人工石片＝加工片等と總稱し其中に、石器と加工石殘片＝加工殘片とを含ませて置く。同樣に骨角齒牙の場合に於ては、人工が加へられたるものを加工骨角と總稱し、自然骨角と對應せしめ、加工骨角中に於て、人工顯著なるもの骨角器と稱する。又自然骨角と稱する中には、完全なる骨角の外、單に打碎乃至割斷せられ、或は自然作用に基き破損した樣なものを含ませて置く。而して、加工自然の骨角を通じて、骨角と總稱する。

(54) 燧石の敷物なる稱呼は、元來原石 (Eolith) 研究に當つて、ベルギーのルトウ (A. Rutot) が、其發見數多きを形容して云ふた言葉ではあるが、これが元となつて、この樣な多數出土の場合にも應用せらるゝ。

(55) 我が國新石器時代の泥炭遺物層よりは、私共の發掘した埼玉縣柏崎村眞福寺よりも、青森縣是川村中居よりも私共に甲蟲の類を發見して居る。前者に就ては、未だ發表してはないが、後者に就ては、鹿野忠雄、是川泥炭層出土甲蟲の一種に就て、史前雜、第二の四(是川研究號)參照

(56) この三遺物層を通じて、主として鳥類及び哺乳類の遺骨を鑑定したのは Herluf Winge である。尙マグレモーゼの鑑定に關しては、ザラウは、このウヰンゲの研究を引用【(Lt. 37) S. 48. 註2】して居るが私はこれを見たことがない。

(57) (50)參照。

(58) 西歐方面の中石前期に就ては、(9)(10)參照。特に(10)で述べて居る如く、ポルトガル Mugem の貝塚は、私は西歐方面中石前期と考へて居らない。それ故これからよし家犬の出土を見たからとて、本文に述べて居る所と牴觸しない。而して實際に於て、この貝塚は古く一八八〇年に發表せられた調査であるから、進步した今日の目から見れば、遺漏多かる可きことも考へらるゝ。而して同報告 Ribeiro, C.: (Lt. 33) には單に Canis sp. としかないから、犬か否かは不明ではあるが、家犬の出土と見ても、不當ではない。今これが內容には觸れないが、既に土器が出ても居るのであるから、本文化よりは、より進んだ文化階梯にあると考へて居る。

(59) 拙稿、(Lt. 31) S. 28. 參照。

(60) マグレモージアン人の人骨の綜合研究は、Nielsen, H. A.; Fund i Sværdborg og Mullerup Moser af Skeletdele af Mennesken fra den ældste Stenalder. Aarbøg. f. Nord. Old. o. Hist. III Række. 11. Bd. 3—4. Hf. 1921. S. 205—218. にある。

二　人工遺物

十七。人工遺物一般

人工遺物の出土總量の多大であることは、既に十二に於て述べた所であり、これ等の詳細に亘つての研究は、到底、僅少な紙面に盡し得るものでもなく、表題にも斷つてある如く、概述して居るに過ぎない。一面に於ては、獨り本文化に止まらず外國文化にして邦語に紹介せられて居るものが甚だ尠ない上に、中石文化の如きは、其存在すらも疑はれたり、或は知られなかつたりして居る有様であるから、こゝでは部分的細部に亘るにしても、一般大局上の趨勢をも加味して、一方では中石文化相をより鮮明に紹介すると同時に、他には、本文化に連關した部分に就ても、將來の研究に對する手掛りを作つて置きたいと考へる。この考へに出發して、直接本文化の人工遺物に入る以前、舊石終末より中石前期を經て、本期に亘る一般を概述し、其大局を明にしてから本文化人工遺物の內容を見て行く。

十八。人工遺物より見た、舊、中石文化推移の一般

舊石終末期である、マグダレ＝アンに於ては、其人工遺物として、特に大小の骨角器が著しく發展して、石器としては、殆んど見る可きものがなく、僅に小形な刃器 (Klinge) 尖頭器 (Spitze) 等が存するのみで、一部には細石器 (Mikrolith) と認めらるゝものも存するが、これとて其多くは發育良好とは申されない (第十八圖B参照)。又同じく西歐方面に於ける舊石カプシアンに於ては、骨角器に顯著なものがなく、石器は相應に發育して居ることは認めらるゝが、これとて其多くが、小形器に過ぎず、其內で細石器のみが、マグダレ＝アンに比し、より進んでは居るに過ぎない有り様である。

これが中石文化に入ると、西歐方面に於ける中石前期であるアヂリアンに於ては、大界マグダレ＝アンを遺承もして居るが、著しく退縮の傾向を見せ、同じく骨角主要器であつても、其特徵視せらるゝ有拘骨銛 (Harpun) に於ては、甚しい退嬰の姿と變り、他に見る可き骨角器も少く、石器に於ては、僅に細石器のみが、退縮を見ないと云ふよりも、更に角、進展とも云ひ得る樣な狀態にあつた (第十九圖)(61)。これに對し、同じく西歐方面に於ける中石カプシアンに於ては、骨角器の有無不明な程度にあるに對し、細石器のみが著しい發展をなし、タルデノアシアン (Tardenoisien)(62) の如きは、細石器文化 (Mikrolithen-Kultur) とまで稱せ

られ得る位である。たゞ中石カプシアン後期に入つては、Mugem 貝塚（63）の如きは、細石器が存續するに止まらず、所謂直剪鏃(Querschneidige Pfeilspitze)（後述、十九のC及び第二十圖B參照）にまで到達して居る所は、面白くも見られ、他に新に大中形石器等を加へ面目を改めては居るが、磨石器、土器等も存し、本文化に比しては、より進んだ階梯にありと認めらるゝ故、こゝに多くの關係がない【（58）參照】。又同方面に於けるカンピニアン文化も、Mugem 貝塚乃至北歐の貝塚期と平行關係を有する、本期より、一歩進んだ文化と認めらるゝ故、今回は觸れない。北歐方面に於ては所謂アンシルス文化に於ては、文化それ自身が未だ確立して居らないから（三及び第一表參照）明確には申し得ないが、骨角器が發育して居る樣であるのと、一部には細石器の一類形？と云はれもする樣な（64）ものも發見せられて居るが、詳細は保留して置く。

又マグダレニアンに於ては、藝術の異常な發育をなして居るのは、有名である。これとは若干其趣きを異にするものがあるけれども、舊石カプシアンに於ても、繪畫の發育を見て居る。それが中石前期のアジリアンに入ると器物の退化に比例して、藝術も殆んど消滅し、僅に彩礫（Bemalte Kiesel）に其名殘りを見せて居るのみであつて、中石カプシアンに至つては、今日果して、藝術の遺承を見るか否かも判明して無い程度に解消して居る。これに對し北歐方面に於て、問題を醸しつゝある岩壁繪畫（65）の存するものがあり、只今其所屬不明であるが、人々によつて所謂アンシルス文化乃至はそれ以前に於けるものと想定せられ、これと本文化に於ても、後述して居る如き、彫刻紋樣等藝術的要素が發見せられて居る所を、大きな目で眺められ、色々云はれもして居るのである。

以上の如き一般大勢にあつて、本文化に於ては、器具の方では、著しく骨角器が優位を占むるものが多く、それが爲に人々によつて、藝術的要素を有することゝを併せ、舊石文化に近ひ關係を想察せられても居る。又一般的に西歐方面の中石前期には、著しい舊石よりの退化傾向が認めらるゝ外、顯著な特徴がないに反し、北歐方面、特に本文化の如きが、活力ある發展をなして居る、大勢推移を辨へて、果して人々の考へて居る如き文化內容を有するか否か、本文化に於ける細部の吟味をして行き度いと考へる。特に本文化內容が明になると同時に、それが著しく舊石遺承者である西歐中石前期たるアジリアンや中石カプシアンに比し、相違の大なることが明になつてき、これに對し中石文化として、ある共通點こそ見出されもするが、其文化進展のエネルギーは、恰も冬に向つて枯れて行くものと、春に芽へて伸びて行くものとの違い程、大きな素が見出さるゝのである。從つてこゝに西歐中石前期と本文化との間には溝渠があつて、直接文化移行を示して居らない。それ故、人々によつて前述して居る所謂アンシルス文化なるも

のが提唱もせられ、本文化直接の始原をも說明し、併せて、舊石との文化連絡をも釋明しようとするのであるが今回は其是非に就ては保留し、本文化內容をより鮮明にして、以て大局に本文化の占むる位置を明にしたいと考へる。

十九。石　器

本文化に於ける主要人工遺物は、石器と骨角器とであるが、先づ石器より見て行く。而して先づ總括的に本文化石器の特性を列擧すれば、石質の過半が燧石であり製作は打製のみであつて、未だ磨製はない。其大さも概ね中小形であつて、今の所、大形な石器―巨石器（Macrolith）―は發見せられては居らない。特に細石器が典形的によく發達して居る。

今これ等に就て、其大小に基き順次述べて行くが、巨石器それ自身は、發見せられて居らないが、連關するものがある故、これより始めて行く。

A。巨石器（Macrolith）は北歐石器時代に於ける謎の一つである。久しい以前から、同じく所屬不明であつた、後述して居る石入骨鋸と共に、多くが單獨出土し、其何れの文化に屬するものか、今日でも尚色々と取沙汰せられて居る。其古いと考へるものになると、遠く舊石前期のアシュレアンと考へ、モンテリユスすらも、舊石後期のソルートレアンに類形を求めた程であり、新しく見るものは、新石時代第二―三期頃となす程、見方の差がある。今こゝで述べんとするものは、この巨石器自身の研究ではない。巨石器それ自身がこのマグレモージアンより未だ出土して居らないことは、前述しても居る。然しこの巨石器なるものは、若干の變差はあつても、概ね其形は相近似した、兩端に尖端を有する長楕圓形をなし、恰も舊石前期の特徴である握り槌をして、兩頭を帶ばしめた樣な形であつて、又これが扁桃（Mandel）に似て居る所から、これを扁桃形石器（Mandelförmige Steingeräte―通常これを略して扁桃形=Mandelförmige とのみ云ふ―）とも云ひ、大さは通常二〇―三〇糎であるから、其大さから巨石器の稱呼も出てくる（第十五圖）。而して私のこゝに述べんとするものは、巨石器それ自身ではないが、より小形な一類形が本文化にも存すると云ふにある。其大さから云へば、尚中形器であり、其石器分類上から見れば、後述して居る靴形曲刃斧でもあるが、形態類似は否まれない所で、小形扁桃形とでも稱したいのである（圖版第二の4長さ約一二・六糎）。只これ以上に强き因果關係にまでは、今回一齊觸れない(66)。

B。中形石器。こゝで中形石器と稱するのは、特別な區分に依るのではなく、前述した巨石器と、後述する細石器とを除いた中

間の大さの各種石器を一纏にかく、臨機假稱したに過ぎない。從つて雜然色々の石器が入つて居るから、更に細分して行く。

a。**祖形斧**。この祖形斧なる言葉も私の名づけたもので、歐洲で云ふて居るのではない。而してこの祖形斧たるや、主として次期貝塚時代の特徵であり、拙稿【(Lt. 32)第六及び第七圖】に於ても、簡單に說明もしてはあるが、この祖形斧は、貝塚時代に發展

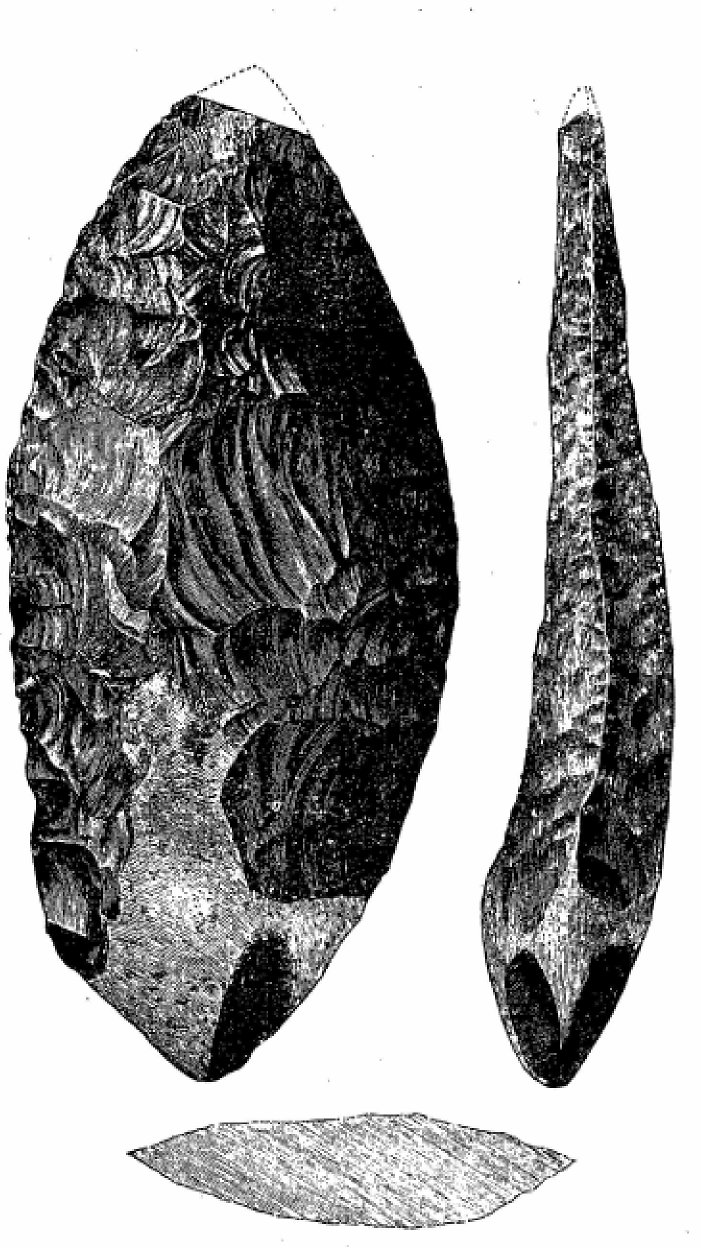


Fig. 15.　巨石器 (Macrolith)＝扁桃形(Mandelförmige)
スエーデンBohuslän 出土。$\frac{1}{2}$ N.G.
【nach O. Montelius, (Lt. 22.)】

こそして居るが、其發生は今日の所、本期にまで遡り得る。この祖形斧には二種あつて、夫々特徵を有して居る。其一つが私の云ふ祖形直刃斧（Spalter）（圖版第二の1—3）(67) であつて、圖の如く其刃は部打裂に基く直刃であつて、概して粗製である。他は長楕圓形で、刃は多く、數回の打裂乃至剝取によつて、曲刃をなし、其多くが兩端使用が出來る樣、雙刃であるから必然的に前

述した扁桃形にも近似してくるものを、私は祖形曲刃斧（Kante=Zweikantige Beile)(圖版第二の4―6）と稱して居る。既述の如くこの曲刃斧に於ても研究の餘地ある如く、直刃斧の發生に就ても考ふ可きことが存するが、これ亦今日取急いで研究すべき必要を見ないのみならずこゝに述べねばならない他の多くがある。これ等祖形斧をも含めて、一般に石斧と稱せらるゝ利器は、新石時代に至つて、完全に發育し、而して殆んど到る所に、石鏃―其内でも、我が國石器時代等に普遍的に見る、尖端を有する、所謂尖形鏃―と共に新石時代石器の一特色をなして居るが、翻つて舊石時代を見れば、石斧と稱し得る樣な利器がない。元來斧なるものは刃十重量十臂力なる三者併用の利器、卽ち打割具である。これと似た、舊石前期に握り槌は存するが、これは尖端十重量十臂力の併用の所謂打突具であつて、斧とは尖端と刃利用との差があり、しかも舊石後期に消滅もして居る。舊石後期には、ソルトレアンの月桂葉鎗の如く、尖端十臂力の利用、卽ち刺突具はあり、他に單なる刃部のみの利用である刃器、刃部に若干の加力を以て壓截するクラツアー（Kratzer）樣のものはあるが、斧の如き打割利器は、未だないのである。西歐方面に於ける中石前期たる、アジリアンにも、中石前期カプシアンにも未だ無い。北歐の所謂アンシルス文化にも、今日では、打割利器は明でない。もし萬一にも前述の扁桃形が所謂アンシルス文化に含まるゝものであるにしても、其多くは、やはり舊石の握り槌と同樣、打突具ではあるが其亞形に屬する尖端尖鋭でなく、鈍化したものに於ては、或は打割とまで稱し得なくとも打突と打割の中間性を有し得べきことは有り得るけれども未だ不明瞭である以上、今日私の知つて居る限り、このマグレモージアンの祖形斧が、最も古き打割具であると申し得るのである。而して次の貝塚期に入つて、より進展もし、終に新石器時代に立派な石斧とまでなつて大發展するのである。

祖形直刃斧は、マグレモーゼより代表的のもの二個、スヴェルドボルグより約三個、ホルメガールドより約八個出土して居るに過ぎず、他の出土量に比して甚だ尠ない。其大さも圖版第二の3が最大に近く、長さ一三・三糎、最大巾五・四糎で、他は最小八糎までの間にあつて、貝塚時代のそれより幾分か大形に思はれるが、大差はない。これが作出には、一打裂面を利用して、刃部を作出するのが通常であり、數回の打裂を以てするものは稀でもあるから、作出上、大さもある制限を受け、且つ刃部作出が重要な役目を有する關係上、他部の粗惡も免れない所である。

祖形曲刃斧は、直刃斧に比すれば、其出土量は、甚だ多い。マグレモーゼより一一個―但し内三個は疑があり、他の三個は破片――スヴェルドボルグより約二〇個、ホルメガールドより約五〇個出土を見て居る。其形に於ては前述して居る扁桃形に似た、其側

稜の張つたものよりも側稜の張らない、直線的に相平行した、所謂小判形（圖版第二の3・4）とでも云ふた形の方がより多い。其大さは大小可なりの差があり、最大は長さ一四・五糎（圖版第二の5）に達し、最小は七糎内外であるが、多くが一〇糎附近の長さを有する。幅は大約三—五糎の間にあつて、長さと相關々係を有する。これが作出法は、尙粗であつて、直刃斧作製と大差がない。其刃部は、直刃斧と同樣一打裂面を利用し、これに若干の加修を試みた結果が、曲刃となつて居るのであるが、未だ刃部作出が精良となつて居らない所は、前述した打割用として、發生後、程經て居らぬ所を物語つて居る。又これ等祖形斧使用上の現實を物語る出土も見て居るが、これは骨角器の所で再述する。

尙この祖形曲刃斧に就て考ふ可きは、直刃斧に比し一打裂作刃なる一條件がない故、作出も容易であることも、或は出土量の多い一面を物語つて居る樣にも思はれ併せて、打割具出現に當つて兩祖形斧の何れがより早くより生れ出づ可き公算大なるやも考へねばならない。且つ同じ祖形斧に於ても、比較的小形のものは、後述して居る骨角器と併用せられて、一利器を形成する以上、これによつて、其大さの制限を受く可きことも、考へねばならない。

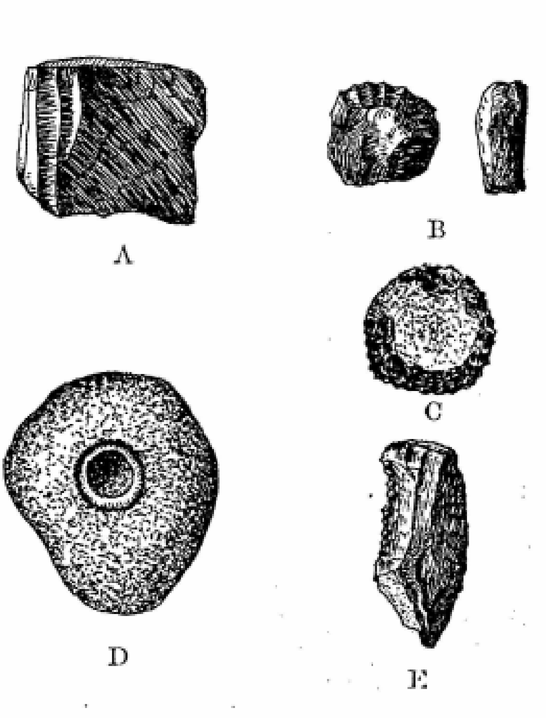


Fig. 16. 各種中形石器 （$\frac{1}{2}$ N. G.）
A. B. Sværdborg 出土【nach, K. F. Johansen (Lt. 2)】 C.—E. Maglemose 出土【nach, G. Sarauw (Lt. 137)】

b。**其他の中形石器。** 所謂中形石器であつて、主要なる直曲兩祖形斧を除いた、殘部であり、其數から云ふたなら、主要量を占む可きものではあるが、特出研究する樣な、顯著なものが無い。これも理論から見れば、平凡なる數の統計こそ、よく其性質を寫し且つこれに基く特徴をも見出し得るのであるが、記事簡に過ぎ、充分な研究の出來ないのを遺憾とする。

こゝに入る可きものは、所謂刃器（Klinge）と稱せらる、圖版第二の9の如きものや、掻形皮剝ぎ（Schaber）によりよく附刃せ

られて居る、附刃皮剝ぎ（Klingenschaber=Flekker）（圖版第二の8）（第十六圖E）圓形の平板狀をなして居る平圓板皮剝ぎ(Scheibenschaber=Skiveskraber)（第十六圖B C)等の外、打裂乃至剝取を試みた結果、殘存した原石─被裂殘石＝Nucleus＝Blok＝Kernがあり、これが尖頭器樣をなしてをるもの(圖版第二の7及第十七圖上)と尖頭なく一頭の厚形皮剝ぎ(Kratzer)樣の用途に服すと考へらるゝも(圖版第二の10 11第十六圖A)石錐乃至これが大形の所謂尖頭器(Spitze)と稱せらるゝもの等がある。又第十六圖D第十七圖下の如き、凹石と見らるゝものを、こゝの研究者は、石槌＝Steinkeule と考へて居る樣であるが、凹石と云ふても、それ自身が何物であるのか、研究の餘地ある以上、この石槌說の批判も積極的には出來ない。以上の外打裂によつて生じた打裂片にして銳利な刃が、自然と附せられた樣な所謂刃器片とでも云ふ樣な、加工意志明確を缺くものが多數出土して居る。これ等は其刃を利用すれば、立派な刃器でもあろふが、積極的に作出したと認めらるゝ跡がない。もしこれに剝取其他の第二次加工があれば、一部の自した刃器とするけれども、前述然石利用と同樣謎に、加工乃至使用痕跡なきものは、石器より取り除いて見て置くのが、安全であり確實と考へる。これを要するに、以上は本文化に於ける中形石器としての、種々相の釋明に資すべき夫々を列擧したに過ぎない。

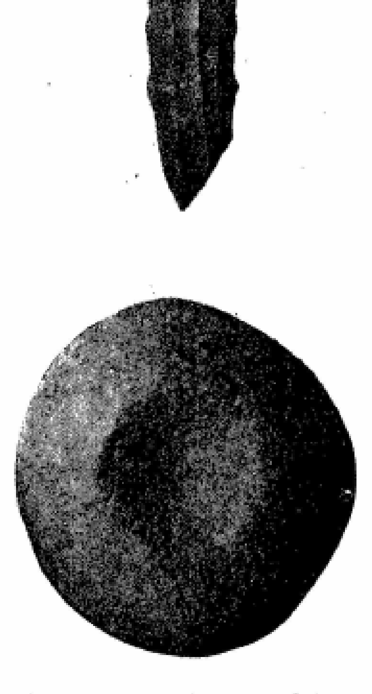


Fig. 17. 上 .Holmegaard 出土の被裂殘石 (Nuculeus) $\frac{1}{2}$ N. G.
下. Sv.ердborg 第二回出土の凹石. $\frac{1}{2}$ N. G.
【nach, H.C. Broholm(Lt. 2)】

C。**細石器**。(Microlith＝Zwerge＝Silex pygmées＝Petits silex＝Flekkenspidser) 本器は中石文化に於ける石器として、一特色ではあるが必ずしも中石文化のみに特有せらるゝものではない。舊石文化にも、新石文化にも見らるゝ。特に舊石文化に於ては、其後期始のヲオリナシアンに於ける小形な尖頭器 (Point)に、其端を發し、舊石カプシアンにもこれを見て居る。このヲオリナシアンの尖頭器は其形こそ一部の細石器狀をなし、一側に打裂刃を有し且つ其背後は、剝取 (Retusche) も行はれては居るけれども、其大さは通常七─八粍に達し、其小形なものでも猶三─四粍を算し、これ以下は通常稀でもあるから、全般から云へば未だ完全な

る細石器とまで云ひ得るものが少ない。大形なる細石器類形が多い。而してこれ等が漸次縮少傾向を帶び終に完全なる細石器に到達したと考へられて居るから、この考が正しいならば、ヲォリナシアンのそれは、多くが祖形細石器（Proto-Microlith）とでも云ふことが出來よう。第十八圖A—但し右端二個が通常の小形で左端三個は特出した小形のもの—。通常細石器と稱せらるゝものは、圖版第三に揭出してある樣な、長さ二—三糎を通常とし、それ以上の圖版第三の右上の一個の如きは特大型である。これが小形になると、一糎弱のものも少なくない。其形は一定して居らない。これは、この樣な小形器は其種類の如何を問はず等しく細石器としてしまう故、これに色々の形態とこれに伴ふ名稱も附されて居る。一例を擧げたなら形が直線的に出來て居るのを、幾何學的(Géométrique)と稱し、又形に從つては、三角形(Triangle)（圖版第三の24—26）四角形(Trapez)（圖版第三の22・23）菱形(Rhombus)偏菱形(Rhomboid)弧形(Segment)等と多くが內容區分に幾何用語を以てせられて居る。一方に於ては、本文化には見ないが、次の貝塚期に最もよく發育して居る直剪鏃（Querschneidige Pfeilspitze）【第二十圖及び貝塚期の他の一例は插稿(Lt. 31)第八圖參照】も細石器の一類である。マグレモーゼの研究に當り、ザラウは圖版第三の1・2等の如き長形にして尖頭あるものを、この直剪鏃に對し、新に長剪鏃(Längsschneidige Pfeilspitze=Flèches à tranchant longitudinal)なる稱呼を與へて居る(68)。此の如く、細小な石器を抽出して、細石器と呼んで居るのであるが、それでも輪廓的に、或る種の範圍はある。即ちこの細石器には、形は前述の如く色々あるけれども、通常刃乃至尖端を有し、且つ其一部—多くが刃の脊部に—微細な剝取を行はれて居るものを指すのであつて(69)、新石時代に普遍的に存する、石鏃（Pfeilspitze）即ちより明確に云へば、尖形鏃とは、區別もせられて居る。元

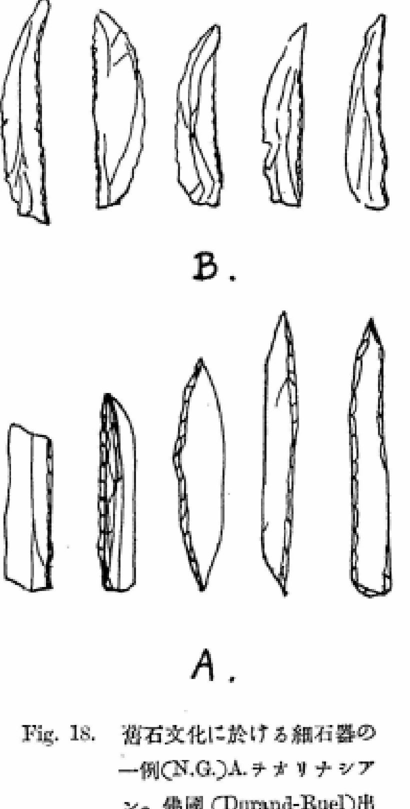


Fig. 18. 舊石文化に於ける細石器の一例(N.G.)A. ヲオリナシアン。佛國(Durand-Ruel)出土【nach R. Montandon, u. a.(Congr. Geneve.1912)】B. マグダレニアン。佛國(Grotte des Scilles, niveau B.)出土【nach R. de Saint-Périer ; (L'Anthr. 1926)】

來舊石カプシアン繪畫の示す所によれば、弓矢が當時既に行はれて居つたに拘はらず、各遺跡の出土物を見ると、新石時代の尖形鏃の様なものは、稀に類形的のものが無いではないが(70)、一般的には出土はして居らない。骨角鏃にこそ尖端を見るけれども、これとて石鏃に代る程の骨角鏃とは認められない。それ故この弓矢使用の際、この細石器の一部が、鏃として使用せられたものと考定せらるゝのである。而して中石文化の如き、多くが新石の様な尖形鏃がなく、この細工器が異常な發達をなし、其出土數の多い上、本文化の如きは、前揭した様な、多くの鳥類を出土し、これが獵獲の一手段として、弓矢の使用がより有効でもあるから、かく細石器の一部か、鏃に使用せられものとの考察を裏書きするものである。又利器として大切なる一任務を有する弓矢研究の一端をなす以上、細石器の研究が、より重要視もせらるゝ所である。又獨り鏃の關係に止まらず、後述して居る石入骨銛(二十のF參照)の如きは、其挿入せられて居る石片はこの四角形細石器に外ならない様、其途用の明瞭なるものも存して居る。

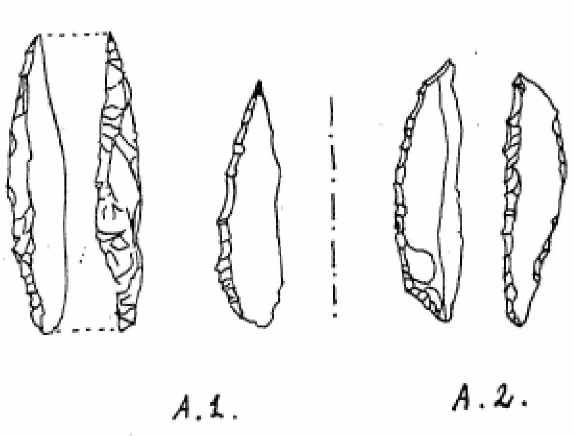


Fig. 10. 西歐中石文化(アジリアン)に於ける細石器の一例(N.G.) A.1. 佛國 Mas d'Azil 出土【nach E. Piette; Les Galets Coloriés】A.2. 佛國 Abri Dufaure 上層出土【nach H.Breuil u. a. aus M. Hoernes, 1903】

さて當面の本文化に於ける細石器は如何なるものかを見れば、概ね圖版第三に示してある如き、其形から見れば三角形、四角形長莖鏃等が多く、弧形は少なく、代表的直剪鏃と認めらるゝものが無い。其出土を數見ると、マグレモーゼより總計三一個、スヴェルドボルグより完全なるもの約一一〇〇個の多數が出土し、ホルメガールドよりは、一九二個があり、多くが製作精良で、其大さは、細石器としては稍大形に屬するものが多いが、多くが薄く最厚部約三粍内外を通常として居る。

D。石製垂飾。 ここに述べんとする石製垂飾なるものは、只一個スヴェルドボルグ第二回發掘の際出土したものであつて、然かもそれは琥珀製である。(圖版第七の1)勿論今日でも北歐平地は琥珀の名産地でもあり、又新石以降にも、色々見らるゝけれど

も既に本期人より裝飾に使用せられたことは、面白くも見らるゝが、數萬出土中の一點であるから多くの歸納をなし得ない。

E。石器の綜合。 石器を綜合して見ると、巨石器はないが、これに近似した扁桃形中形石器があり、特に小形ではあるが、祖形直刃斧が、祖形曲刃斧と共に出土し、打割利器の出現を見せて居る。又細石器が多出し、且つよく發展を遂げて、祖形斧の如き打割利器等の近戰器と相俟つて、遠戰器の威力をも發揮して居る如くに見らるゝ。然し一面から見ると、石器としては、刺突利器が一向に見當らない。祖形斧以外の中形石器の中には、尖頭器、石錐等の刺突具はあるが、石鏃の樣なものがない。近戰器としては

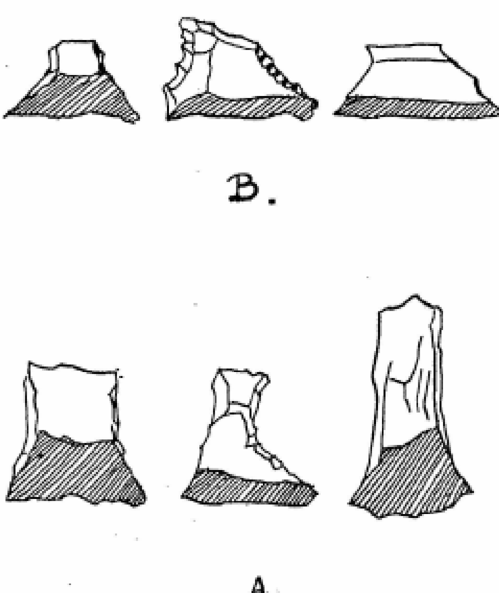


Fig. 20. 中石文化に於ける直剪鏃の一例 (N.G.)
A. デンマーク貝塚出土。【nachMadsen u. a. (Lt. 19)】 B. ポルトガル Mugen 貝塚出土。【nach Ribeiro (Lt. 33)】

打割主用であるか否か、猶これに就ては、所謂同目的異材料として、骨角器中にこれを存するか否か、この石器の狀態を含んで、骨角器に進まう。

二十。骨角器

骨角器は、其出土の量に於ても、其種の多い點でも、石器には劣らない。或は優つて居ると云へよう。而してこの骨角器に於ても、本文化の一特異相が認められ、且つ前述した石器と併せて始めて、本文化相がより鮮明となる。

十八に於て述べた如く、舊石末のマグダレ＝アンに於ては、骨角器が著しく發達し、所謂骨角文化である。而して其主役を占むるものは、有拘骨銛(Harpun)が演じて居り、精良にして、藝術的でもあり、申分のない立派なものがある。【拙著 (Lt. 30)續挿第五五―五七圖參照】この外、所謂投擲器(Wulfstange)や指揮杖(Baton de commandement)等の大形器は、骨角利用の最大限に近くまで利用せられ、これも有拘骨銛に劣らぬ程の立派さがある。尚骨角を利用した數々の美しい藝術品もあり、又垂飾其他所謂身體裝飾の一部と考へらるゝ多くを存し、外に精巧な縫針までもある。この樣に立派に發育して居つても、これを文化全般から藝術によつて、カモフラージせられた中をば冷靜に見ると、懷疑も起る。特に石器として見る可きものも殆んどなく、この

骨角器も果して遠戦近戦等の利器として、どれだけ有効のものか、それが藝術的であるだけ、それだけ優雅の反面には、生活の力强さが足りない。恰も文化爛熟とでも云へ様けれども、其裏には、民族としてのエネルギーが既に下降の瀬戸際にある様にも見へる。從つてこの文化より傳承する西歐方面のアジリアンが、退嬰するのも當然の様にも考へらるゝ。この様な爛熟したマグダレ＝アン文化に對し、西歐方面の中石前期であるアジリアンも中石カゾシアンも殆んど見る可きものが無いに對し、北歐方面は如何と云ふに、所謂アンシルス文化には、若干の骨角器もあるが、文化それ自身明確を缺くものがあるから、暫く除外すれば、こゝに本期との關係が問題となる。然し本期文化に於ては、前述してある如く、石器としても、相應に發展して居る點に於ても既にマグダレ＝アンとは或る文化發展方向を異にして居るがこの骨角器に就ても、果して兩者如何なる傾向を有して居るかこの點に就て着意しながら見て行く。

本期に於ける主要骨角器は、後述して居る如き、有孔骨柄有孔嘴器、骨匕、大形骨針等の所謂大形器と共に、有歯骨銛中形骨角尖頭器、釣針及び齒牙製垂飾の様な中小形器とが主體をなしてゐるから、其殆んどが純然たる實用品であつて、最後に述べた若干の垂飾のみが、以上の大中形器中の一部に施された彫紋と共に、藝術的要素をなすに過ぎない。今これ等に就て個別的に述べて行く。

Fig. 21. Svardborg 第二回出土. 有孔骨柄. $\frac{1}{2}$ N.G.
【nach. H. C. Broholm (Lt. 2)】

A。**有孔骨柄**。圖版第四及び第二十一圖でこれが一般を見ることが出來よう。其大さは、圖版第四の7の如きは、長さ十八糎に達し、太く直徑五糎もあり、赤鹿角の根元を利用して居る。而して中央より稍々端に近く、大きな孔が通つてこれに長柄が挿入せらるゝ。此孔は往々數方向よりも穿孔せられて居る（第二十一圖）。これが他の端に於ては、直斷、斜斷、不規斷等區々であるが、

こゝにも穿孔せられ圖版第三の2—4・10等で見らるゝ如く、刃部たる可き部分に、石器—第四の2・4・10—牙器—第四の3—等が挿入せらるゝ。卽ち本器は其刃部をなす利器を一端に固着し、一方これと長軸とを連接せしむる横軸たるの作用をなすもの故、かく骨柄と稱したのである。又本器は角なる性質を利用して、容易に穿孔し、刃部の薄弱を補ふ爲、硬度高き利器を巧みに使用したもので、本文化以前—所謂アンシルス文化は未詳—には未だこれを見ない。卽ち今日に於ては、本文化に最初に出現した一骨角器で次の貝塚期以降にも及んで居り、本文化の一特徴をなすものである。

其出土數は以下續いて述べて居る本器の一亞形と見らるゝ如きものを含む總數は、マグレモーゼ未詳(71)、スヴェルドボルグより五二個、同第二回發掘に於て四七個、合計九九個、ホルメガールドより二三個の出土を見て居るから、出土總數に對しては、多くはないにしても、決して稀なるものではない。旣に相當に利用せられて居つたことが考へらるゝ。又本器中には、往々彫紋を施されたものもあるが、これに就ては、取纏め後述する。

A′。有孔骨角斧。(Knochen-Geweihäxte)?。骨柄と略同一構造であつても、往々其一端に利器を挿入すべき穿孔を有しないのみならず、其二三に於ては、其末端が斜斷せられ、恰も附刃せられた如きものがある(圖版第四の7等)。これ等は、强ち骨柄作出に於ける未製品とのみ見ることが出來ない。これを刃として使用する所謂骨角斧と認めざるを得ない。たゞそれが果して利器として、利器挿入の骨柄と同樣に用立ち得るものかは、若干の疑もあるけれども、兎に角、否定すべき多くがない。たゞ前者の利器挿入せるものと、この後者の骨角直接附刃せるものとが、併用せらるゝものであるなれば、分業上、これが使用目的に對し、夫々極限的には區別も可能と考へられもするが、今の所、これ以上に考察し得ない。但し前者にせよ、後者にせよ、打割或は打突の用途に服するにしても、骨角なる性質上、石器のそれに比しては、より輕くもあるから、石器の附柄せられたものと同一効果を求むるには、重量の輕いだけ、これに臂力を增して用ひなければならない點を生ずる。特に後者に於て然りである。又挿入利器と雖も特別に細き柄部でも作出せぬ限り、其大さが挿入孔によつて制限もせらるゝから、大さにも限度を生ずる。從つて石製のみのそれに比しては、刃面も狹くなるし、打突用としても、構造上深度に制限も出來てくる。それ故、前後者共に果して何んの用途に服したか、解らぬ點が多いが、石器に於て打割具を生じたと云へ、未だ其當初であれば、附柄法も未だ充分發育した居るとも考へられないし、小形な祖形斧は、骨柄端に挿入使用もせられても居る所から見ると、これ等前後者に多少の差はあつても、未だ土に親しみ少ない本期に於

ては、共に石斧と同樣の用途に服したのではないかとも考へらるゝ(72)。

A''。有孔嘴器。 これも私の區分した稱呼であつて、歐洲に於ては前述した、A、A'と共に廣く角斧（Hornäxte）と云はる中に含まれる樣ではあるが、一部は曖昧な所もあるから、かく特別に區分したのである【(72)參照】。然らば如何なるものを指すかと云へば、圖版第四の12—14及び第二十二圖等の如きもので、一見A'の骨角斧と同樣ではあるが、骨角斧の刄部に代るに、尖端を以てしたものを云ふのである。尖端—重量—骨力の利用即ち打突具である。但し本器と雖も、其末端作出乃至使用の結果に於ては、變化し尖端鈍化も生じてくる。從つて單なる尖端利用の外、刄と尖端との兩者中間性を帶ぶ可きことにもなる。即ち骨角斧と嘴器との間には區分困難な、所謂形態連絡も生じてくるが、極限的には、夫々獨立する。又嘴器になると最初から尖端使用の目的で作出せられもするから、多くが角の端、即ち天然の刺突具たる角の尖端を利用するから、幾分細めであり、且つ長い。又長い方が有効でもある。但しこの第一次的に作出した嘴器に於て、尖端の磨滅、折損等によつても第二次的にA'の骨角斧が生じ得ることも併せ考へねばならない。この嘴器なるものは、其短いのでも長さ一五糎、其長いのになると、二三糎にも達するものがある。



Fig. 22. 彫紋ある有孔嘴器
A. Holmegaard 出土($\frac{1}{4}$ N.G.)
B. Sværdborg 第二回出土
($\frac{1}{2}$ N.G.)
[nach, H. C. Broholm, (Lt. 2)]

B。骨角ヒ。（Hornmeissel）本器原名通りに云へば角鑿かも知れないが、この類形をかく呼ばれて居るから、新しい言葉を避けて、かく云ふたのである(73)。圖版第五の1—4第二十三圖等の如きものを指すのであつて、多く角の一端を斜斷して、狹少な刄を附したもので、大形なものが多く、長さ二〇糎を超へ、大なるものは二八糎に達する。又同じく骨角ヒと稱せらるゝけれども、前者に比して、短少なる一群が存する。即ち第二十三圖等がそれであつて、短少なるものは、一二糎に過ぎない。嚴密に云へば、前者と區分して、一亞形とすることが出來るかも知れないが、前後者共其外形が所謂鑿形をなす故、歐洲では角鑿と呼ばるゝに過ぎないのであつて、實際の用途は解らない。後者の如きは、A'の骨角斧に似て、單に穿孔が無いだけの相違だけである。前者ならば相當に長いから握つて使用も出來るが、後者にあつては、それには餘りに短に失するが、さりとて

其用途は考察し得ない。

C。骨劍。これも私が勝手に附した名で、北歐では、尖頭利器(Spitzwaffen = Spidsvaaben)と稱せられて居るが、あまり漠然として居る故、かく云ふたものである。三個出土し圖示せられたのが圖版第五の5及び6の二例である。兩者共上端に穿孔せられて居り前者は鹿角製で長さ五五糎もあるから、骨角器としては、最大限に近き長さであり、且つ末端に近く弱い三稜形の横凸が附せられて居る。而してこの方には鋸齒樣の彫紋が施されてある。後者は長さ三一糎で、圖示せられて居らない第三のものが、長さ二六・五糎であり、これは穿孔の有無不明であり、三者悉くスヴェルドボルグの出土である(74)。

たゞこゝで氣掛りなのは後者の有孔部が、前者に比すれば、僅ではあるが末端より內方にあり、孔部も大きい。從つて或は骨劍として手中に握つて使用するのみでなく、A″の有孔嘴器とも見れば、見得る點にある。勿論有孔嘴器であつても、長さの最大限に近く、例外に近きものでもあるし、孔部が著しく上端に偏在するから、嘴器とするも重心配置上、打突に當つて、加力方向が、正しく尖端と同一方向に



Fig. 23. 短き骨角匕。($\frac{1}{2}$ N.G.) A.C. Holmegaard 出土
B. Sværdborg 第二回出土【nach, H. C. Broholm(Lt. 2)】

行はれないと、基部弱く、孔部より折碎の恐れがあるから、私はこれを骨劍と見たのではあるが、嘴器との間に形態連絡は否まれないと同時に、この孔部が垂孔其他の用途に服するものであるなれば、或は嘴器と認めた中にも骨劍の存在が可能となつてくる。

C′。骨棒。これも私の新名稱である。圖版第五の7・8・9の三個が圖示せられて居り、他は私には不明であるが、この三個はブロ

ーホルムの發掘の際、スヴ゛ルドボルグより出土したものである。これも鹿角製で大きく長い。7の如きは長さ四四・五粍もあり、8は長さ四六・六粍、9は折れて居るが二九粍ある。三者共に穿孔せられて居るが夫々違ふ。7は孔が小で二個あり貫通して居るが不明であり、且つこれが末端は折れても居るから或は骨劍かも知れない。8は完全であるが、孔は甚しく上端に偏して居るから全く垂孔と見らるゝ。9も7と同樣折れて居るし、且つ孔部がより中央に近いから、こゝにも疑はあるが、孔部より上縁が、輕い曲度を以て、如何にも握り狀をなして居るから、かく骨棒に編入した次第である。たゞ骨棒と稱しても、全く其用途に就ては考察し得ない。この點は、マグダレ゛アンの指揮杖と同樣、乃至は稍々趣きを異にして居るが、我國新石時代の石棒と共に、將來の研究に待つ所が多い。

以上が所謂大形骨角器とでも云ふ可き部類に屬し、且つ人工遺物としては、長大でもあるから人目にも觸れ易くこれが爲睦感せられ易くもある。

D。骨角尖頭器。(Glatte Knochenspitze＝Les point en os Lisses)これは、多くが滑らかによく研かれた、細く比較的銳利な尖端を有する尖頭器を指すので、從來我が國では往々大針と云はれるものも含むけれども、針の概念を含ますには、餘りに大形に過ぎる故、私は舊石文化の際にも尖頭器（Spitze＝Point）と云ふても居るから、これを襲用したものである。概ね圖版第七の10乃至15までの樣なものを指して居るのであるから、最早C以上の如き大形器ではない。中小形器に入る可き大さである。それでも15の如きは長さ一八粍にも達して居る。

本器はマグレモーゼよりも出土はして居るが、其數は未詳。スヴ゛ルドボルグよりは、八五個、ホルメガールドより約九個の出土を見て居る。

E。有齒骨銛（Fischgabel＝Gezähnte Fischsper＝Point d'os barbelés)。本器も今回新稱であつて、從來有拘骨銛（Harpun）(第二十四圖a・c)と云はれて居るものに對し、其拘部の發育が充分でなく、爲に拘部（Wiederhaken）と稱し得ない程度のものに對し、これを齒部（Zahn）と云はれる故に發して、有齒骨銛（圖版第六の1・3—6・8—12第二十四圖b）と稱せらるゝのである。有齒骨銛と有拘骨銛とでは、其起原を異にするものがありと云はれもするが、極限的の相違であつて、其中間性を帶べるものを生じ、相互間には形態連絡も存するものもあるが、現に角、歐洲一部に於て以上の區分が存して居るから、其例に從ふた次第である(75)。

本器の出土量は、マグレモーゼより三四、スヴェルドボルグ四五個、ホルメガールド五一個を數へ得るから骨角器總量から云へば、僅かな樣ではあるが、決して少ない方ではない。勿論この有齒骨銛と稱するものは、圖版第六に於て、下段右端及び左端の二個の石入骨銛を除いた悉くが、それに含まるゝものであるから、細く分類すれば、一側にのみ齒を有する所謂偏齒であり、其齒數によつても、單齒より二、三、四齒等に分れ、其形の丸形乃至偏平等によつても色々區分も生ずるけれども、こゝでは細部の研究を畧する。又これ等の製作は多く精良でありDの骨角尖頭器と共に、本文化に於ける一刺突具を代表して居る。

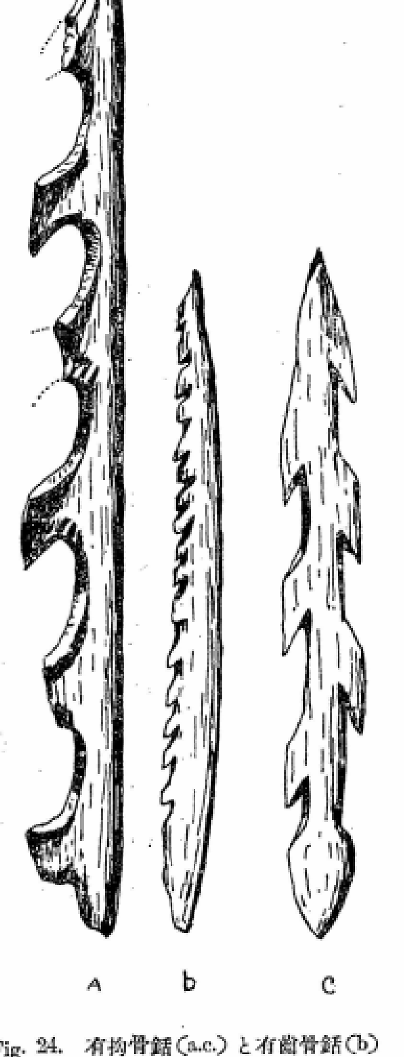


Fig. 24.　有拘骨銛(a.c.)と有齒骨銛(b)
($\frac{1}{2}$N.G.)
a.b.デンマーク出土(細位未詳)
【nach H. Shetlig (Lt. 42)】
c.ドイツFernewerder 出土
【nach C. Schuchhardt;
Alteuropa. 1926】

F°　石入骨銛　(Vogelpfeile=Knochenspitze mit Feuersteinschneiden=Flèches à oiseaux=Pointes en os à tranchant de silex=Fugleplle)。本器は圖版第六の7及び13に見る樣な、二通りの形があるが、共に側面に縱溝が穿たれ、これに細石器―主として四角形―を一列に挿入して、黑色な樹脂樣のもので固着し、一面には刺突に際する側刄ともなり、これが亦拘部乃至齒部樣の働きにも服する樣な、一種の骨銛であつて、本文化それ自身に於ても稀なものではある。此の如き骨の一部に所謂植石をなし、以て互に其缺陷を相補ふ樣な器具は、これとは稍其趣を異にするが、Aに前述している骨柄の樣なものも含め廣い意味で骨石共用と云ふた器具として見ても、石器時代各文化を通じて其類例が乏しいのであり、從つて、Aの骨柄と共に、本器が本文化の一大特色と認めらるゝと同時に、中石文化としても一特色として數へらるゝのである。

其出土は稀であつて、マグレモーゼより圖版第六の7—これをA形と假稱（恐らく一個）が出土しスヴェルドボルグより圖版第六の13—これをB形と稱す—が三個、同第二回一個、ホルメガールドよりは發見せられて居らない。而してマグレモーゼ發見のも

Fig. 25. 北歐各地出土石入骨銛（$\frac{1}{2}$ N.G.）
1. スエーデン Skäne出土【nach O.Montelius; 1917】
2. ポーランド Potwiecie【nach L. Kozlowski. L'Anthr. XXXVI. 1926】
3. デンマーク出土未詳【nach S. Müller(Lt. 24)】
4. ノルウエー a 出土未詳; b. Viste 出土【nach H. Schetlig (Lt. 42)】
5. ドイツ Fernewerder 出土【nach C. Schuchardt; Alteuropa. 1926】

のには、其軸部に幾何紋が彫られて居る所は注目に價する。

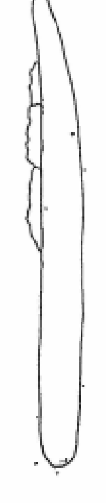
【註三】石入骨銛概說。石入骨銛も解り易く云ふたもので、原名に因めば、鳥形鏃乃至鳥形銛とも云ふ可きであろふが、實物を見ないと形の想像

に困難であるからかく云ふたものである。又何故かく㔾形と云はれたものか、其起原は不明ではあるが、最初ザラッによつて發見せられたA形が嘴狀をなして居るから、かく云はれたとも想像せらるゝ【(71)參照】。但し本器は、マグレモーゼ發掘よりも、より早く所謂主なき銛として發見せられて居つたが【其一の三。參照】、多くがB形であり（第二十五圖）、A形は甚だ稀である。

本器の分布は、デンマークを中心として、北獨、ポーランド、バルチック地方、スエーデン等より發見せられて居り、北はノルウエーに及んで居る(76)。然し從來の發見は、多くが單獨發見か乃至は、學者の發掘に際する出土でもなく、所謂主なき銛であつたのである。

本器の形態に就ては、本文に述べて居る如く、ABの二樣式であり、細く見れば、B形に於て、植石法に若干の差違もあり、單列も雙列もあり又軸の構造に於て、稍々太くA形との間に形態連絡を想起せしむるものもあるが、略すことにする。又この太き軸を有するものに於ては、往々彫紋せられたものがある。これ等石入骨銛の殆んど總てが、植石溝を細く深く穿ち、且つ石列を整へる爲めには、細心の注意もいる爲か、精良に作出せられて居る。

本器は本文化以外に若干の問題を藏する外【(76)參照】特に本文化以前に於ては、今日余く見てない。將來所謂アンシルス文化に見らるゝかも知れないが、それ以外、西歐方面の中石前期にも、各舊石文化に於ても、全く見ない。より廣く單なる植石器具すら、本文化以前には確實なものが無い。文化下限に於ては、デンマークの貝塚より全く出土がなく、(76)の疑問を藏するのみで、貝塚期と平行關係を認めらるゝカンピニアンにも無い。從つて今の所、本器は、本文化に於ける獨特のものと云ふことが出來よう。而して歐洲方面に於ては其新石文化に於ては、私は未だ見たことが無い。有つても稀なるものと云ひ得よう。只唯一の特例とでも申し得る



Fg. 26.
支那甘肅省西寧縣朱家寨出土
(1/4 N.G.) (nach Andersson
甘肅考古記)

ことは、本器の一樣式とも見らるゝものが、遙に遠く飛んで、支那甘肅地方に發見せられたことは（第二十六圖）注目に價する(77)。其報告者に從へば、文化も所謂仰韶文化に屬するとのことであるから、新石末乃至は金石時代とも見らるゝ。從つて文化上からも、地理的分布と同樣に、甚だしく飛び離れても居るが、只今の所、餘り隔てが多く、これが考察上、何んの手掛りもない。

更により廣く、植石器具となると、色々の種類もあり我國東北地方の新石文化に於ける、尖端に石角牙等を挿入したもの等はこの一例でもあるが、これ等に就てもこゝでは述べない。

G。釣針。(Angelhaken = Hameçons de pêche = Fiskekroge)申するまでもなく骨角製であつて、圖版第七に例出した四例中一個は拘部不明であるが、他の三例共に拘端に逆拘がない。其大さは完全なる9に於て、長さ約九糎、幅二・五糎程あるから、骨角製としては、大形に屬する。其上端を知ることの出來るのは、8・9の二個であるが、共に稍々太くなつて居るに止まり、こゝに紐を止むる可き横溝乃至特別に作出せられた突起等もない。全形に於ても、6が程よい孤形を取つて居るのみで、7の如きは、餘りに開き過ぎて居る。要するに、釣針としては、形こそ備へて居るが、發育したものとは認められない。其出土は甚だ稀であつて、マ

グレモーゼ三個、スヴェルドボルグ三個、同第二回二個、ホルメガールドよりは、出土して居らない。

【註四】。**釣針始原考。** 石器時代のみに於ける釣針の研究としては、既に先學によつて行はれても居り、又私にも貧しながら、幾分の研究もしてあるが、こゝに述ぶ可き餘白なきを遺憾とし、他日取纏めて發表を期して居る。從つて、こゝで述べようとするのは、表題の如くこれが一般的な概説では無く、本文化に連關して、主として舊石器時代の釣針有無論である。

こゝでは先づ決定して置かればならぬことは、こゝで私の云ふ釣針なるものは、圖版第七の四例の如く、絲に對し平行した長軸と、これに連絡した弧形—これを拘部と云ふ—を有する通常の形をなしたもので、其他の形式のものに及んで居らない(78)。勿論この形式であるなれば、長軸と拘部とは、必ずしも一個體でなくとも、第二十七圖Aに例出しある、舊ロシア、オカ河畔、ウヲロソワ (Wolosowa am Ufer des Oka-Flusses im Gouvernement Wladimir)新石器時代遺跡出土の様なもの—假に結合釣針と云ふ—であれば、支障はない(79)。これが同圖B・Cになると報告者は釣針の拘部と認めて居つても、其出土狀態に於て長軸が認め得なければ、無條件では承認は出來ない。否疑を持つ。それが、更に第二十八圖A—Dの様な稍々弧形を帶び、尖端を有する細石器様のものが、長軸に連關なく出土した場合も同然であつてこれを釣針拘部と認むることは、前者より以上に獨斷に過ぎる。勿論この釣針の原料は問ふ所でない。全部が石、骨角製何れかであつても、又一部が角で他が石であつても問題ではない。

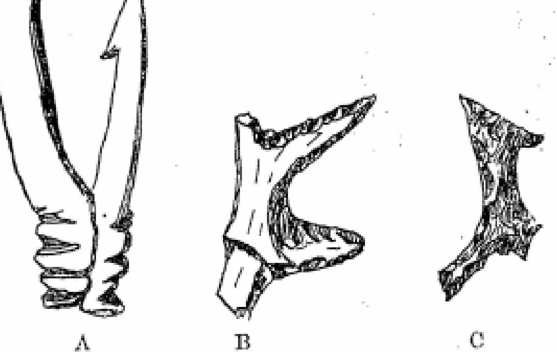


Fig. 27 ロシア Wolosowa 出土(N.G.) A. 結合釣針
B. C. 發見者の釣針の一部と考へたる石製品
【nach P. Koudriavtsev ; Congr. Moscou. 1893】

以上の如き考を以て、釣針を見ると、私の述べて居る様な釣針は、本期に始まり、それ以前には明確なものは、出土して居らない。前期舊石器時代に於ける魚骨の出土は Taubach 其他二三を算へることが出來るが、單に出土したのみで、獸骨が主體をなして居る。從つて當時捕食はなしたであらふが、主體は狩獵にある。後期舊石器人は、ソルゲル(80)によれば、オォリナシアン人も其一部に漁者を存し、骨角製の釣針を有すると述べて居るが、其圖も其出土地も掲出してないし、私も一應捜索して見たが、發見し得なかつたから、疑問として置くより外にない。又マグダレニアンにも釣針があると書いてもあるが、これ亦同様である(81)。次には有名なクラウゼの研究『史前時代の漁撈具と新時代に於ける比較資料』(82)に於ては、釣針を以てする漁獲に對し「釣針は、舊石器時代より見て居る」【同書二〇八項】と述べられ、第二一一項には、佛伊國境にある Mentone 洞窟より出土した舊石器時代—階梯未詳—に屬するものとして、第二十八圖A—長さ三六粍—を示され、同樣例として、同圖B・C・Dを掲出せられて居るが、Aと同樣、其出土狀態の記載はない。前後から判斷すると、個々の出

土であるらしい。これを直に第二十七圖Aの例、(ウヰテロ・ツァは新石文化)乃至は第二十九圖に於ける土俗例等からして、釣針也との決定は公算が足りない。單に可能を示すに止まり、積極的の證據は、それ自身が其出土乃至は結合の可能を明示する等これが事實を示されば確からしさがない。危險も多い。この程度のものを釣針と認むるのであるなれば舊石時代には、類例は甚だ多い。たゞそれにしては、出土魚骨が餘りに貧弱でもあり、且つそれだけの漁者であるなれば、今少しは水に親む、食料殘骸があつてもよい筈ではあるが、事實は餘り見出せない。【(81)參照】從つて私は、以上のものでは舊石時代の釣針は肯定し得ない。而して果して如何なる動機からかく釣針が生れ出でたものかは、解らない。理論としては、クラウセの結合說もよいとは考へるが、事實には未だ見られない。

更に本期所產の釣針で、如何なる種類の魚が漁獲し得たか、遺骨中にある Hecht を主として釣つたものかこれ等の釣針なら隨分大きな魚でなくてはならないと思はれるが、未だ充分研究しては居らない。

又釣針は本期以降には多く見らるゝ。貝塚時代にもあるし、新石時代になると大に發展もし、特に我が國東北地方の如きは、精良なるそれを、多く出土もして居るのであるが、これ等に就ては他日に讓ることゝする。



Fig. 28. Krause の釣針鉤部と認めた石器(N.G.)

A. イタリー Mentoe 洞窟出土(舊石)

B. ドイツ Gudenushöhle出土(階梯未詳)

C. ドイツ出土未詳(階梯未詳)

D. ベルギー Wanzin 出土　(舊石)

【nach E. Krause ; (82) 參照】

H。**齒製垂飾** (Zahnanhänger=Perles en dents=Tandperler)。

裝飾品として、其性質明かなるものは、前述した例外的な琥珀製の一個を除くの外、齒牙製の垂飾のみである。圖版第七の2乃至5がそれであつて、悉くがスヴェルドボルグ—第一回五個、第二回三個—より合計八個を出土して居る外、他に見ない。其齒牙は2・3が熊、4が野牛、5が川獺であつて、特定の動物より撰出するのではないらしく、上端に垂孔を有する外、別に加飾は行はれて居らない。

他に二三骨角製裝飾品と報告せられたものがあるが、明確を缺く故、これを略する。只今迄の發見より見れば實用品の種と量との甚だ多きに達し、裝飾品と見る可きもの丶餘りに貧弱であり、且實用品中、加飾せられたものを併せて見ても、尙著しく藝術的傾向に足らざるものが存する點は、注目に價する。然し、これは獨り本期のみに見らるゝ現象ではなく、次の貝塚期の如きは、更により貧弱であり、本期と貝塚期とを通じて見れば、藝術より次第に背馳して行く傾向が窺はれる【二十二。參照】

I。**骨角器の總括。**骨角器は、其種に於ても、其量にしても、甚だ多く、且つ大形、中形器がよく發展して居るから、注目を引き易い。特に其大形器の如きは、骨角なる性質上、原料として限度があるに對し、殆んど其最大限に近くまで利用せられて居る(83)。第二には、これ亦骨角なる原料關係上、骨角利器としては、刺突具に作出せらる可き可能性多きに拘はらず、本文化に於ては有孔な骨柄、骨斧、骨匙の一部には、直接間接に打割具の生じて居る所は、石器のそれと共に新しみを覺ゆる。この外有孔せられた骨柄、骨角斧、嘴器等と共に、石入骨銛、釣針等舊石文化に見ない、本期初現の骨角器、しかもそれ等は全く實用品である可き性質を有するものが、多く出でゝ居る。又有歯骨銛もよく發育し、一部の骨角尖頭器と共に、刺突具をなし、他の嘴器、骨劍等の近戰刺突具と併せて、石器に於ける、それの不足を補ふて居る。只小形な骨角器としては、釣針を除いては、特に發育したものがなく裝飾品としては、貧弱な垂飾を見るのみである點は、注目を要する。

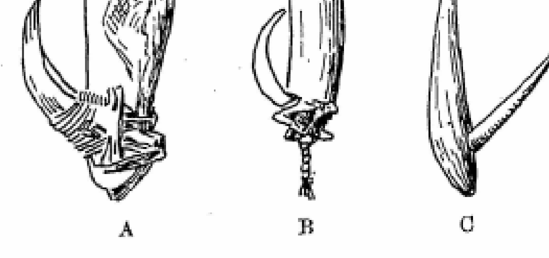


Fig. 29. 結合釣針の土俗例。 A. マーシアル島　B. Salomon 島 Simbo　C. Alaska Kuskwogmut-Eskimo　E. Alaska Kotzebuesound【nach E. Krause ;(82)參照】

總括して見るのに、骨角器としては、實用方面のものが雄大であり、中に精良品もあつて、よく發育したものと認めらるゝ。又中には特別な加工も見ないで自然其儘の骨角利用も多かつたと思はれる節もあるが、多くが其使用痕跡が明でなく、爲により大きな歸納は下し得ないものゝ骨角利用に就ては、流石に哺乳類により親み深い大陸民であることが、よく見らるゝ。

二十一。木　器

木器としては、第三十圖B・C・E・Fの木棒とでも稱すべきものと同圖A・Dにある不明の加工品等が主なるものである。この全部がホルメガールド出土である。其內B・Cは木製尖頭器とでも云ふ樣に見へるが、圖版第四の6の如く、有孔骨柄類の長軸として使用せらるゝ一端の如くにも思はれるが、或は單獨使用に供せ

Fig. 30, Holmegaard 出土木器の一例。【nach Broholm (Lt. 2)】
(A. B. C.($\frac{1}{4}$ N. G. ; D. ca $\frac{3}{10}$ N.G. ; E. F $\frac{1}{2}$ N.G.)

られるものかは解らない。同圖B・Cは、報告者はこれを木槌(Holzkeule)と云ふても居るが解らない。外形から云へば、有頭木棒とでも云ひたいものである。他のA・Dは何物であるか見當がつかない。

要するに木器と云ふても、棒狀をなした實用品と不明のA・Dを加へて見ても、顯著なる形態衛工等を見ることの出來ない。泥炭によつて保護せられた結果、此の如きものも、出土し得ると云ふ例證の外、これより歸納し得べき多くを見出し得ない。

二十二。遺物に在する紋樣

裝飾品それ自身は、前述の如く甚だ稀であるけれども今迄に述べ來つた、骨角器中には、若干の彫紋の存するものもある。多くは大形な有孔骨柄、(圖版第四の8.) 同嘴器 (第二十二圖) 骨劍 (圖版第五の6) 骨棒 (圖版第五の9) 並に石入骨銹A形 (圖版第六の7) 等に見る外、其用途不明の骨角中片にも彫紋の施されたもの(第三十一乃至三十二圖)が存して居り、三遺物層夫々より發見せられて居る。これ等施紋器は

總括的に見れば、若干の例外はあるにしても、多くが精良品である。從つて其全骨角器數より見れば、僅々其何十分の一にしか過ぎない少數ではあるが、施紋器が精良品に多い所から、兎角人目を眩惑もする。これに對し私をして忌憚なき想像を許さるゝに於ては、彼れ等の精良品に對する愛着心の一發露とも見られまいか。其施紋法を見ると、悉くが彫紋であつて、浮彫等はない。紋樣の種類は各施紋器に就ても亦、第三十三圖等に掲出した紋樣例から云ふても、悉くが幾何紋であつて、しかも紋樣要素としては、點列紋、點線紋、平行線紋、鋸齒形紋等硬化した要素のみであつて、軟い曲線分子を認め得ない。而してそれが複雜に複合せられて第三十三圖に見る樣な、一部は格子紋と云ひ得る樣なものがあつても、紋樣分子は單調であり且硬化して居る。

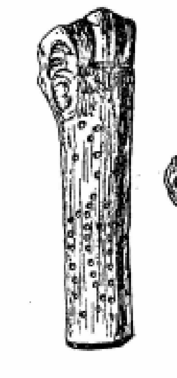


Fig. 31. 有紋不明骨角（$\frac{1}{2}$ N.G.）Sv.erdborg出土【nach Johansen (Lt. 14)】

以上の紋樣から考へると、本期人が人々によつて、喧傳せらるゝ如き程、藝術的に秀でた持主であつたとも思はれない。中には廣い意味の本期中には、動物硬化紋まで存すると云はれもするけれども(84)（註第一圖）本期三遺物層からは何等の出土が報ぜられてない。又よし存するとしても、以上一般の傾向に對し、特殊的位置にあらねばならない。從つて動物實寫の繪畫を主體とし、彫紋、浮紋、彫像まで存するマグダレニアン藝術とは、全く其性質を異にして居る。勿論マグダレニアンに於ても抽出して見たならば、硬化紋も繪畫の直化した所もあり且つ其終末期（マグダレアン後期）【拙著、歐洲舊石、(Lt. 30) 譯. S.56. 101—103. 參照】に於ては、著しく急轉直下的に退化も見て居るけれども、それから紋樣系統を編設せんとするなれば、中間に其移行階梯がない以上、如何にしても連絡がつかない。今日の所では、マグダレニアン藝術と本期藝術との間には、大なる溝渠が存して居る。一部の人々に云はれる樣な藝術連絡はない（十八。參照）。さりとて、本期幾何紋の直接始原に就ては全く解つて居らない。西歐方面のア

A　B

Fig. 32. 有紋不明骨角器（$\frac{1}{1}$ N.G.）Sv.erdborg第二回出土【nach Broholm. (Lt. 2)】

ジリアン藝術との關係も認められない。(85) たゞ前述した如く、ノルウェーには疑問の岩壁繪畫もあり【(65)參照】、又本期乃至は前期に、動物硬化紋の存在想定【(84)參照】等、北歐中石文化に於ける藝術研究には尙未開の分野も廣いのであるから、取り急いで確からしさの足りない道を歩む必要もない。

本期以降、卽ち貝塚時代の藝術は如何と見れば、一口に云へば殆んど解消して居る。勿論全然無いのではない。拾出すれば相應な數にも達しようが、貝塚期は本文化と異り遺跡總數も發掘調査數も多いから、寄せ集めれば數量上からは相當數に達しもするがそれとて、決して多數ではない。然かもそれ等總てが、簡單な彫紋で、紋樣分子も本期と同一な幾何要素で、僅に藝術的面影を止むるに過ぎない【拙稿(Lt. 31) S. 39—40】。

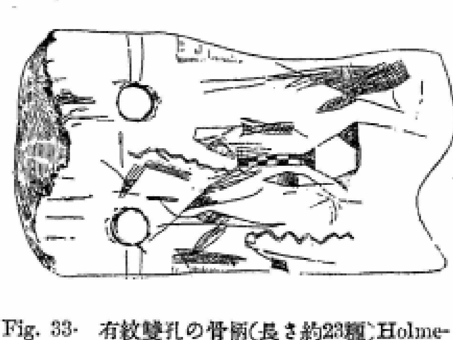


Fig. 33. 有紋雙孔の骨斧(長さ約23糎) Holmegaard 出土【nach Broholm (Lt. 2)】

二十三。遺物の術工

石器、骨角器、木器等に亙り、これを術工學 (Technologie) (86)的見地より總括的に眺めて見るが、特出研究すべき樣なものはない。石器に於ては、祖形直刃斧の刃部は、主として大きな一打裂によつて作出せられて居ることは、前述もして居るが、この一打裂に基く刃部作出法—これを打裂刃と假稱する—は獨り祖形直刃斧にのみ限らない。中小形器の中にもこの打裂刃が見らるゝ。例へば刃器 (Klinge) や小刀 (Messer, Messerchen) と呼ばるゝものにも、これが見出される。細石器の刃も、打裂刃とは云はれないが所謂剝取刃であり、作法から見れば、同方式でもある。これ等は燧石打裂の結果、其裂片中に尖鋭な刃部が生ずるのを利用したに過ぎないのであるから舊、中、新石を問はず應用せられ、從つてこれを以て、本期の特徵とすることは出來ないが、只祖形直刃斧の場合は、大形な且つ厚みもある刃部を、特に意識作出して居る所は認めねばならない。更に細石器の作出に就て見るに、形が細小であるから、多くが他の大なる石器作出に當つて生ずる所の打裂片乃至剝取片の利用である。而して其不具合の部分を更に小打裂乃至は剝取を加へて、整形して居る。而してこの小形な細石器に應じた小なる剝取があつてこそ細石器たるの見分けも分明となるのであり、それによつて、細石器としての精粗も生ずる。本期細石器中には、單に一側剝取に止まらず屢々兩側剝取も行はれて居る結果、其形も整い、精良品とも稱せらるゝのである。

更に本文化に於ては、磨製石器は無い。只一例外とも見らるゝものが、ホルメガールドより出土して居る。(第三十四圖)其實物を私は見たことがないから、果して磨製であるか、或は所謂啄製(87)であるか、私には判斷がつかない。且つ半碎して居る所に、穿孔痕が明に認めらるゝし、石質は Granulit＝白花崗岩の一種＝であるが、果してこの石が、穿孔容易か否かも、私には不明であるから總てを例外として、將來に保留して置く。

骨角器の作出に就ても、同様特記すべきものが無い。只多くの骨角が出土して居るのであるから、これ等に就て調べたなら、或は未製品等によつて、何等かの手掛も得られまいかとの希望はある。只こゝで一言、申し度ことは、骨角器なるものゝ性質上、其殆んど全部が磨製であると云ふ點である。これ亦獨り本期に限つた現象ではなく、石器時代全般を通じてのことではある。從つて舊石時代と雖も骨角器は磨製であり、單なる磨製始原は甚だ古い。たゞ石器の磨製のみが、以外に遅れ、主として新石時代に盛行して居る點は、考察を要し且つ石器の磨製始原が奈邊まで遡り得るかに就ても着眼に價するものがある。本文化の如きも、前述の一例外を除いては、悉くが打製石器ではあるが、面白いことには、ホルメガールドより砥石と覺しきものゝ發見を報ぜられたことである―圖示せられてない―。石器の磨製は第二に考へても、骨角磨研には、砥石も用ひられたと考へ得る。して見ると、其砥石の石質によつては、石自からも磨損する部分をも生じ得べきことも有り得、これが或は石器磨製の一動機を生まんものとも限らないが未だ事實に於ては、何んの手掛も發見はしてない。

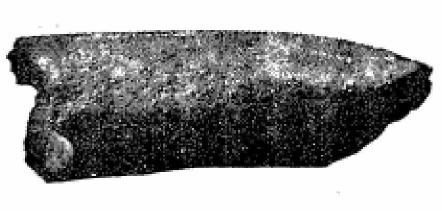


Fig. 34. 磨製乃至所謂啄製の疑ある石器
Holmegaard出土($\frac{1}{2}$ N.G.)
【nach Broholm(Lt. 2)】

木器と云ふても、本遺物層出土のものは、特別の術工を施されたものではない。其原料より割斷、加工の工程に就ても特出考慮すべきものがない。其尖端を有するものゝ如きが、果して如何に作出せられたものか、或は骨角器と同一手段に基き作製せられたか、乃至は木材は燒切り等其性質を利用して、他と異る作法を用ひたものか總てが解らない。これも他日に待つものである。

二十四。人工遺物の總括

人工遺物を總括して、其大局から見ると、本期文化は石器と骨角器が主體をなし、これに僅少の木器を加へ得るに過ぎない。こ

れを其性質上から見れば、實用品が殆んど全部で、微少なる裝飾品が存する。然し其實用品と認むるものには、加飾せられたものも存するが、全數から見れば、少數である。從つて藝術的要素の存在は、よく認められもするけれども、これを以て、本文化に於ける、缺く可からざる特徴とまで、强く認め得るかは問題である。寧ろ特徴の主體は實用品の發展にある。

實用方面より見ると、石器は部分的に發育したものがあるけれども、綜合すれば骨角器の方がより著しい發育を見て居る。更に各々の內容を比較して見るに當つて、先づ利器と利器以外—日常品と假稱—に分ち、利器と認めらるゝものより見て行く。其利器と稱せらるゝ中には、更に遠戰器と近戰器と兩者の中間的性質を有する銛の類—投銛の場合を含む—中戰器とに分つことが出來る。この目で本文化の石器中より、先づ遠戰器と覺しきものを摘出すると、細石器があり、よく發達して居る。骨角器中には所謂骨鏃類形(88)と認めらるゝものはない。

次に近戰器を見ると、近戰格鬪に際する、打割、打突、並に刺突具等が、この中に含まれる。石器中には、打割具として、祖形斧の出現を見て居るが、其直刄斧の方は、未だ發育上から充分でなく、曲刄斧に於ては、直刄斧に比すれば、より發育もして居るけれども、これが小形な一部は、骨柄に附刄せられ、石骨併用器として、始めて其効力を發揮し、單獨なる石製打割具としては、巨石器の發見もなく、未だ其發育は充分でない。勿論不充分であつても、打割具なるものは、本文化以前に見ない、新しき所産ではある。この石製打割具の發育不充分に對し、有孔骨柄が、石骨併用器として、これを補ふて居るに止まらず骨斧も亦これに加つて、打割具を補力して居るから、本文化全般より見れば、一通りの打割具が整ふて居る。

打突具として、石器中に求めたなら、祖形曲刄斧中に於て、雙端を有するもの丶中で其一端が、尖頭をなすもの丶が打突に用立つ外、全く見られない。骨角器中には、有孔骨柄（牙挿入器—圖版第四の3等）有孔嘴器等があつて、これが一部を滿して居るが、特別に發育とまでは云はれない。次は近戰刺突器であるが、石器として、北歐新石時代に見らるゝ樣な、立派な石劍等は勿論、これが祖形的なもの等の發育は全く缺き近戰に對する刺突具の尖端。—附柄近戰刺突器—と見る可きものもない。これ亦、骨劍、無柄の骨角匕等僅少ながらも、骨角器によつて、整備せられて居る。附柄近戰刺突器としては骨角尖頭器中に於ても、それが可能を示すものもあるが、果して實在したか否かは、確言出來ない。要するに、打突具、近戰刺突具の多くが、骨角器の發育を見て居り、石器には殆んどない。以上の外、木器の所で述べた如く、一部の原報告者は、木槌卽ち近戰打碎具と考へらるゝもの丶存在も報じ

では居るが、確かなものとも思れないからこゝでは保留して置く。

中戰器と認定し得るものは無い。其効能を示すものは一部の有歯骨銛(89)乃至は骨角尖頭器のあるものが、それではあるが、旣に遠戰器と近戰格鬪の諸器が一通り備はる以上、中戰器までが、發育良好であつて、三者兼備の域にまで到達したかは、考慮を要する。此の如き目を以て夫々の文化に就て見ると、其發育方向がよく知り得る場合が多い。而して本文化の如きは、利器として、遠戰近戰器の發育は、共に圓滿であつて、特別な偏りが無い。特に云へば、近戰器の原料の上からは、骨角器が多く用ひられ、石器使用に優れると云ふ點にある。其内でも、長大な骨角器は、よく巨石器と比肩すべきものであり、私の比喩を以てすれば「骨角器に於ける巨石器である」と申し度い。一面からは、廣義の異材並同目的とも見られ、將來巨石器研究進展と相待つて、更に多くの歸納を下し得べき日の來るを待つものである。

日常品、即ち利器以外の諸器に就ては、こゝで取纏めて述ぶ可き多くがない。利器の發展に奪はれて、内容すら不鮮明の點も生じて居る。從つて實用品は利器を以て代表せらるゝ。それ以上、裝飾品も殆んど問題にならないから、人工遺物は、利器が主體をなす結果を生ずる。而して利器に於ては、細石器の發展の外、石器骨角器併用、乃至、骨角單獨の利器が發育し、總括して、其差は、甚しくはないにしても、骨角主、石從の文化と稱し得る。

又本文化の藝術要素に於ても、利器主體にあつても、石器發育の上からしても、人々の云ふが如く、細石文化たるマグダレニアンとは、著しい相違がある。これにも拘はらず、中間缺除せるものを假設し、乃至は未だ確からしさの足らざるにも拘はらず、其主觀の先行する結果、無理な編年を試み、或は中間階梯を編設する等は、史前學研究上、私として執り得ない道である。從つて今日これ等の相互關係を云々するは過早である。マグダレニアンが以上の如き關係にあるに對し、一部の人は、本文化を以て、遠く西南歐洲及び一部はアフリカに分布を見るカプシアンの影響大なるものがありと云ふて居るのは、【(13)參照】より隔て多い文化の結合である。これ亦結ばるものであるなれば、マグダレニアンの場合、より以上に多くの事實なき假空の中間階梯の挿入を必要とする。而して、この樣に、容易に總てが、結び合され得るものなれば、史前文化の闡明は、より容易なものとも云へよう。

(61) 拙稿、細石原人の盛衰。科學知識。第七の一。(昭和五の一)參照

(62) タルデノアーシアンは、佛國 Fere-en-Tardenois の發見地名により、アー、ド、モルチエー (A. de Mortillet) が編年したものであるが、殆

んど細石器のみ出土して他が不明でもあつた爲、孤立的に取扱はれても居つたが、最近ブロイ(H.Breuil)チー パーマイヤー(H.Obermaier)等のカプシアン研究の結果、このタルデノアーシアンもカプシアン文化に含まる可きことが明にせられた。

(63) Mugen 貝塚に就ては、(10)(58)參照。原報告(Lt. 23)。

(64) 所謂アンシルス文化に於ける細石器類形?と云はるゝものは、私が第一表に揭出してある大形有柄鏃を指すのであつて、私はこれを細石器とは考へては居らない。もし細石器一部の目的と同樣、鏃であるなれば、其目的共通の點は、勿論認めもする。而してこの大形有柄鏃は、問題のリングビー (Lyngby)【(6)參照】より出土して居るのである。尙これに就ては(70)參照。

(65) この疑問の岩壁繪畫の一例は、ノルエーにある。これに就ても今回は觸れない。たゞ文獻のみを示して置く。Shetelig, Haakon ; (Lt. 42) S. 123—152

(66) 巨石器に就ては、總てを將來に讓ることゝする。叉本文化の圖版で示したのたは、スヴェルドボルグの一例に過ぎないが、同書にはこの一例しか揭出してなく、ホルメガールドの方は、廣く云へば、亞形とでも云ふ可きものが、揭出せられて居るに過ぎないが、私自身では、コッペンハーゲン國立博物館で猶數例を見ても居るが、私自身の不注意から、複雜な寫生をしたのみで、寫眞もない。この寫生も今から手を加へると自然誤りも出來るから揭出し得ない。

(67) 細形直刄斧に就て、拙稿【(Lt. 31) S. 33】に於て、丁語の Spalter に對し、獨語の Kernbeile を附したことが大なる誤であつたことに氣付き、こゝに訂正するものである。事の起りは、拙稿起稿に當り、私の師事したシユミット【(Lt.38) S. 36】を見たが單に sog. Spalter とのみあり、獨語名がない故、何氣なく、手近にあつた Schuchhardt, Carl ; Alteuropa. 1919. S. 41. により明白に Kernbeile とあつたので、深く研究もせず、發表したのである。然るに今回この細形直刄斧に就て、二三を見て見ると、一向 Kernbeile と云ふたものを見ないに止まらず、後述して居る細形曲刄斧、卽ち Walzenbeile と同樣義に使用せられ、寧ろ Kernbeile=Walzenbeile が正しい樣である。これに驚いてザラウ(Lt.37)を見ると、やはり同樣義に使用して居り又 Ebert, Max u. a ; Reallexikon der Vorgeschichte 1925—28 を見ても兩者明白に同一とは云ふては居らないが、直刄斧ではない。差があつても曲刄斧内の差の如く讀まるゝから、こゝでは Kernbeile も Walzenbeile も共に避けて、シユミットに從ひ、丁語名のみをとることゝし、曲刄斧にも丁語の Kante とシユミットの zweikantigen Beile を採用することゝした。然るに、今回偶然にも、Schuchhardt の前文獻の一九二六年に出された第二版を見たのであるが、ふと氣が付いて讀んで見たら、直刄斧は Spalter, 曲刄斧は Kernbeile ときれいに改訂して、初版過失の斷りも無い(S. 38)。然しなんと云ふても私が輕々に採用したのが、此過を生じた元をなして居るのであるから、人は咎められないが、輕卒の結果が、こんな誤まで起した次第を述べて前過失を改めて置く。

(68) ザラウ(Lt. 37)S. 6—18 參照。こゝでザラゥは、細石器の殆んど全般に對する研究をなし、各地のそれを、研究し共分布も歐洲を越へ、アルゼルア、エジプト、印度に亘ることを述べて居る。而してザラウのマグレモーゼに於ける石器研究の主體が細石器にあると云へる程、細說して居るのであるが、一九〇三年當時としては、この着眼は敬服に價する。

(69) 細石器として殆んど例外として數へらるゝものは本文に述べたと異り、小圓板形の薄きもので、周圍に多くの剝取を行つた、直徑一糎內

外の細石器がイタリー Termini-Imerese 等のカプシアン遺跡より出土もして居る。【拙著、(Lt. 30)後 S. 84. 第九十一圖參照】この樣なより多くの細石器研究をして行つたなら、尙色々のこともあるが、こゝでは本文化を中心としてのみ見、他日に於て、細石器として改めて研究して見たいと考へて居る。

(70) 我々の通常石鏃と稱して居るものは、尖形鏃であると共に、それには有柄と無柄の二通りが見らるゝ。この無柄の方は、特徵視すべき所が足りないが、この類形は特徵視すべき所が足りないだけ、それだけ漠然として、舊石乃至中石中に、存するとも、存しないとも云ひ得る。それ故、これを除外して、有柄鏃を見ると、これが類形は、遠く舊石のチリナシアン、或は最近稱へらるゝプロトソルートレアンの所謂フヲン・ローベル形尖頭器【拙著、(Lt.30)後 S. 18—19. 後挿第十七—十八圖參照】に求められソリユトレアンの側缺鏃 (Point a cran)【前掲拙著、後挿第三十四—三十六圖參照】そのものは、側缺ではあるが、中には兩缺【同上後、挿第三十六圖右】があり、こゝに第二の類形が求められ、マグダレニアンに於てすら、例外的ではあつても、見ることが出來る。外にアフリカに於けるカプシアンにして、所謂アテリアン形 (Aterien-Typus) なるものも亦、有柄ではあるが、以上の舊石類形全部は、殆んど悉くが大形であつて、長さ五糎内外であるから、通常石鏃としては最大に位置し、石鎗との區別が全然困難である。

中石に於ても(6)(64)に述べて居る所謂リンビーから、この樣な有柄大形鏃とでも云ふ可きものが出て、又問題の所謂イタリー・カンピニアンなるものゝ中にも見らるゝが、兩者共に其文化自身に就て、問題があるから、詳細には觸れない。單に大形有柄鏃類形存在の一例となすに止める。而してこの場合も猶、舊石と同樣大形である點だけは、斷つて置く。而して以上の樣に、類形を搜出することが出來るとしても、悉くが大形であつて、眞の小形な、一乃至三糎の間にある樣な普遍的な大きさ有する尖形鏃は、私は舊、中石には見出しては居らない。又此の如き類形は、決して普遍的のものでなく、夫々の文化に於ける一特徵でもあり、同時に系統立つて、新石に及ぶか否かは、今の所、全く解つて居らない。中には、細石器と通常の尖形鏃との形態連絡を想定せしむるものも、見ては居るが、これは、大形鏃關係とは、別問題である。

(71) ザラツのマグレモーゼ獨譯 (Lt. 37) 末尾は一九一四年に石器まで、途切れ、それ以後上稿せられてない。又原報告 (Lt. 35) は手元にないから、かく骨角に就て不明な所を生じて居る。從つてこれ等はスヴェルドボルグの報告其他より寄せ集めて記述したものである。

(72) 歐洲に於ては、Aに述べた骨柄もA′の骨角斧も同一に取り扱はれ、合せてこれを角斧(Hornaxt)と呼んで居るが、私の云ふ骨柄なるものは、利器を挿入してこそ、角斧ともなる可きもので、利器の挿入なき單獨品は、利器ではない。况や尖頭を缺くことにもなり、A′の骨角斧と區別の必要もあるからかく新しく名を與へたものである。

又これ等の發生に就て、最初に骨角斧が生れ、ついで其單所を補ふ可く、利器挿入を見るに到つたものと考へられて居るが、理論としては、申分がないが、この理論を實證すべき樣な出土はないから今日の所は、單なる形態學 (Typologie) 上に於ける一考說と見るを妥當とする。又骨角斧なるものは、中石文化の樣な未だ農耕も起つて居らない文化にあつては、容易に利器と認定も出來るけれども、それが新石文化に入り、農耕始原を見るに於ては、單なる利器と見る外、土掻きなる用具も併せ考へねばならない。(拙著、神奈川縣新磯村字勝坂遺物包含地調査報告、第二〇—二五項參照)

(73) 骨角匕なる稱呼は、既に長谷部言人博士、骨角匕。人類第四〇の一一、(大正十四) に發表せられたことがある。細く云ふたら若干の違も

あるかも知れないが、大體似て居る故、これに從つたものである。

（74）圖版第五の5及び圖示せられて居らない長さ二六・五糎の骨劍二個が最初 Johansen, K. F.; (Lt. 14)報告せられ、圖版第五の6が、Brøholm, H. C.; (Lt. 2) Fig. 49に報告せられたもので、合計三個となる。

（75）從來私は、これ等の銛に就て、餘りに不用意であつたことを後悔する。最近聞知した所によれば、我國の石器時代に於ける、所謂銛と概稱せらるゝ内には、其拘部の有無に拘はらず、卽ち無拘であつても、有拘のものも等しく銛として、總括せらるゝらしい。只東北地方に見る、或る形式のものに對しては、長谷部言人博士、燕形銛頭、人類、四一の三、大正十五。にかく區分せられた外、多くを知らない。所が本來漁撈に關してはと、誇りを有する私共日本人は、牧者の子孫とまで極言せられもする大陸民である、一部の歐洲に於て、直接漁撈に就ても Kraus, Eduard; (82參照)の樣な研究があり、且つこれと連關して、上述の如く、有拘有齒の區分までも出來て居るのに對し餘りに迂濶であつた樣に考へるのである。而して有齒骨銛なるものは、本文の如く Fischgabel とも云はるゝのは元來西洋食のフォーク(Gabel) に發したもので、形が二叉乃至三叉等の所謂叉銛とでも云ふ可きものを指したのが、廣く單叉であつても稱せらるゝに至つたもので、有拘骨銛 (Harpun) とは、其出發點を異にして居る。又全く有拘 (Widerhaken) 有齒 (Zahn) の無い一般的な銛は、無拘骨銛と、私は云ひたいが、歐洲では Fischspeer と云はれて居る。

（76）ノルウエーに於ける石入骨銛に就ては Shetelig, H.; (Lt. 42)がこれを述べて居るが、少々問題がある。それはこの石入骨銛の一發見地は、有名な Viste の洞窟貝塚にあり、從來デンマークの貝塚よりは、石入骨銛が未だ發見をせられたことが無い故、こゝに色々の問題が起つてもくるのであるが、今回は總てこれ等に就ては觸れない。保留する。

（77）安特生(J. G. Andersson) 甘肅考古記（地質專報甲種第五號、一九二五年）第一圖、西寧縣、朱家寨出土。

（78）通常の形式以外の釣針としては、紐に直交した、兩尖端を有する棒狀のもので中央にくびれを有するものが、歐洲新石時代スキスの代上住居跡より發見せられ、朱閣土俗例にも、同樣のものがあつて、これを傍證もして居る故、こゝでは之等に觸れない爲にかく云ふたのである。

（79）P. Koudriavtsev; Les vestiges de l'home préhistorique de l'âge de la pierre près du village Volossvo, district et gouv. du Vladimir. Congr. Inter. Arch. e. Anthr. Moscou. T. II. Fig. 29 u. 30. 1893. 更に本報告に就ては、我が國石器時代研究上、面白き研究が揭出せられて居るけれども、これも他日に讓り只注意をして說くに止める。

（80）Soergel, W.; Die Jagd der Vorzeit. 1922. S. 40—44.

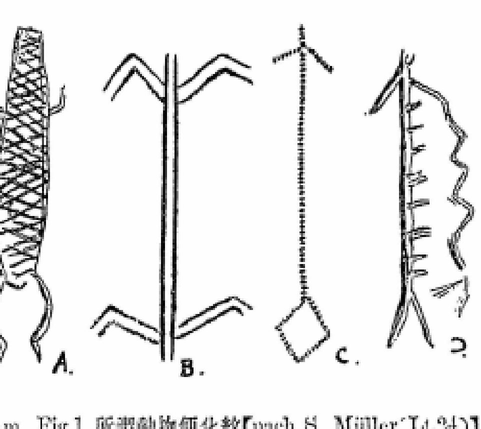
（81）マグダレニアンに於ける魚骨出土の1例は【拙著、(Lt. 50)前 S. 141】參照。

（82）Krause, Eduard; Vorgeschichtliche Fischereigeräte und neuere Vergleichstücke. Zeitschr. f. Fischerei u. ieren Hilfswiss. Bd. XI. 1904.

（83）本文化に於ける骨劍骨棒の如く、長さ四〇糎を超過した樣なものは、他の階梯に於て殆んどこれを見ない。マグダレニアンの指揮杖ですら多くが三〇糎内外であつて、それ以上は例外に近い。又歐洲各新石文化に於ても、この樣な大形器は、私は未だ見て居らない。

（84）所謂動物便化紋として、人々より注目せらるゝ所の紋樣は、註第一圖に揭出した樣なものである。同圖**A**は如何にも動物便化紋ではあるが、他の**B**－**D**は人像と云はれるが、便化系統の明でない以上、容易に肯定出來ない。確からしさが足りない。以上は Müller, Sophus;

（Lt. 24）Fig. 25—28. によつたものであるが、元ミユラーは北歐石器時代の文化區分を新き石器時代＝新石時代＝に對し、單に古き石器時代（Ältre Stenalder）とのみ區分し、貝塚期以前總てを含ませて居るから、この四例が夫々何れの文化所離か明ではない。且つAの如き動物便化紋をより廣く北獨より英國にまで亘つて、廣義のマグレモージアンとして搜出して見た所で、僅々二三例を算し得るに過ぎないから、例外的に見ても、支障がない。もしB—D類形を以て動物乃至人像と認めれば、尚數例を加へ得るかも知れないが、根本にそれが動物乃至人像かゞ問題であるのみでなく、それとて決して多くはない。



Am. Fig.1 所謂動物便化紋【nach S. Müller（Lt.24）】

（85）アジリアンに就ては（9）等で述べて居る如く、私として考へて居ることを發表してないから、其藝術と本期文化のそれとの比較に就ても、比較資料を提出してない以上、對照せられ得ないことゝは考へるが、さりとてこゝに詳說する餘白がない。何れは發表もする考へではあるが、其時期に就て確言は出來ない。從つてそれまでは不問に附せらるゝか、さなくんば、原書に就て對比を御願する。而して、アジリアン藝術に對する要旨は、その彩礫（Bemalte Kiesel）研究にある。この彩礫に就ての原報告は Piette, Ed.; Les Galets Coloriés du Mas d'Azil. 1896. があり一通りの彩礫を揭出せられて居るが、これに對し研究したのが Abbé H. Breuil であるが、これが述作が甚だ多く、相連關するものがあるから、將來改めて、これが紹介を期して居る。

（86）史前術工學に就ても、未だ私の考を發表したことがない。尚これ以前に發表を期して居る、史前形態學（Praehistorische Typologie）に就てすら、近々發表の豫告をしながら、色々の事情で遅延もして居るが、史前形態學や史前術工學乃至史前藝術學等の方面が整ふて、これ等に基礎づけられて、遺物學研究も、より正しく研究せられて行くことゝ考へて居る。

（87）この壓製（drücken od. pressen）なることは、北歐に於ては、よく用ひらるゝ言葉であり、主として貝塚期末に於て、砂岩等の比較的軟質の石に對し、壓力を加へて、加工するものを指すのであり、打製より磨製に進む一過程とも考へられて居るが、詳細は、より多く貝塚期にも觸れてもくるから、こゝに述べない。

（88）骨鏃類形と稱するのは、獨り我が國新石文化に存する樣な、所謂骨鏃と稱せられ、各種の形態を存するけれども、十九のC。細石器の所で述べてある如く、これ亦骨角製の尖形鏃なのである。然るに骨角製の鏃であつても、尖形鏃でない、斜尾骨鏃乃至骨銛（Pointe du sagaie à base en biseau）【揷畫、（Lt. 30）後. S. 38. Fig. 38—40 參照】乃至個缺骨銛等が新石時代にもある故、こゝでは廣い意味で、骨鏃類形と云ふたのである。

（89）有齒骨銛は、本來漁獵主要具とは考へるけれども本文化の如き中賦刺突具と認めらるゝものがなく他に可能な認め得るものが少ない樣な

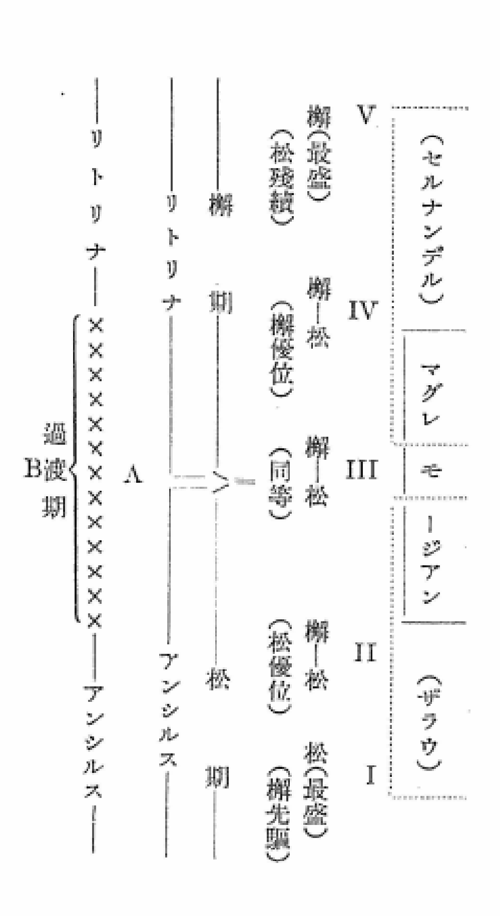
場合に於ては、或は應用し得るものとして、取扱つたものである。マグダレニアンの有拘骨銛（Harpun）に於ても私は、單なる漁獲主要具たるの外、刺突器たる可きものであることを、力說したことがある【拙著、(Lit. 30)後、52 頁】。こゝでも、これと同一主旨で刺突應用の可能を申して居る。

其五　總　括

二十五。文化と自然環境

史前學上の事實研究に於ては、直接狹義の文化現象の研究に入る以前、先づ其文化が生る可き母でもあり、背景でもある可き、其四周を環る所の自然環境の研究が、甚だ大切なことは、既に述べた所である【七。參照】。而して本期文化の北歐地質及び植物編年上に於ける所の位置に就ては、これ亦各所に觸れてもき、特に十。に於て、大約松時代の後半に當り、槲の混入量が漸次增加傾向を見て居る時代と考へらるゝことを述べて置いたが、更にこの考を簡單に且つより明瞭に示す爲、これを次表の如くにした。

第十六表。マグレモージアンの地質植物編年上の位置一覽。（著者）



備　考

1。本表は、松より櫟への移行を、理論的に示したもので、事實上よりしたのではない。從來は中央の如く大束に櫟期と松期とを分類せられて居るのみである。
2。同樣に地質上も、Aの如く、アンシルスより直にリトリナに移つて居るが、これも私はBの如く考へこゝに一過渡期を考へた。
3。以上の如く大束で行くから、ザラウとセルナンデルとの考へが圖の樣に分れてくる。もしこれを最初から五期分類を設けるか、或は過渡期を考へてでも居れば、本表程、兩者の考の差が起るまいと考へる。
4。本表は、デンマーク、ゼーランド島に於て、本期三遺物層を立前として、作出したのであつて、同じ北歐と云ふても、其地的範圍は狹い。

此の時代に於ける自然界一般の狀態に就ても、既に述べてある如く、氣候溫向して人類は野外に解放せられた時代である。これが文化を見ると、氷期に鎖された舊石末期や、同じく中石文化であつても西歐方面に於ける、退嬰しつゝある中石前期などゝも異り、色々の新しき文化要素を加へ生活も著しい活氣が見らるゝ。例へば家犬の出現（十四。5。參照）は、人類最初の旅伴であつて飼畜の始原をなし(90)狩獵も容易となり、又保安上にも良果を齎しても居る。他の一面に於ては、釣針の發明は、漁獲に對する一大革命であつて（二十。G參照）狩獵の容易と相待つて、人類生活に著しい安定性を與へるものと認めらるゝ。卽ち、狩獵と漁撈の併用進步は、食料範圍の擴大であるに止まらず、未だ土器もなき彼等は、容器としても不充分であろふから(91)、貯藏心も未だよく芽へなかつたことゝ考へる故、如上の併用進步によつて、不獵不漁の機會をより短縮する結果ともなる。彼等の生活の多くが、所謂其日暮しである以上は、饑に遠ざかり得ることが、如何に大なる安隱を齎し得るかは私共の想像に餘ることゝも思はれる。而して彼等の願望でもあつた、隨時に食を滿す、卽ち定食慾の要求も、より滿されて行くのであるから、そこに生活の餘裕も生じ、この餘力に基いて、文化も向上して行くのである。かうした生活にまで到達し得たことも、其元をたゞせば自然環境の溫向の御蔭でもある。氷河時代の環境では、生活に追はる可きことも、今日極地に於ける、一二民族の生活を見ても容易に考へらるゝ。而して舊石末のあの氷河環境にあつて、兎に角も、あれだけの文化を生んだことが、既に異常でもあり、マグダレニアン藝術なども所謂氷河藝術であり、其背景のもとに成立を見たものが、氷河去るに從つて、其藝術も亦解消して行く有樣は、一面からは當然にも見られ、獨り藝術に止まらず、環境の變化に基く生活樣式の變化も亦、當然生ず可きである。卽ちそこに文化樣式の違ひも起つてくる。それが氷河環境に慣れた彼等の一部が、變化して行く環境に順應しきれないで、依然多くの氷河環境其儘の生

活樣式を遺承する結果、環境に適應しない生活現象も起り、こゝに生活の退嬰となり、これが文化の退嬰として、見らるゝのである。もし、自然環境の變化に基いて、これに順應した生活樣式を生み出すだけのエネルギーを有するものであるなれば、決して退嬰現象などは起らない。特に本文化の場合の如きは、地的環境上可なり變化の多かつた、ヨルヂア末よりアンシルス初期を經過した後のことであり、本文化人の直接祖源は今日明白ではないにしても、彼等の祖原の人々は、以上の環境變化を乘り切つて、本期文化の基礎を與へた以上、自然環境に對する順應性の保有者でもあり、本期に見る樣な、色々新しい文化要素の生ずる所以でもある。而して自然環境に順應した文化要素の保有は前述して居る如く、彼等の生活に必須の條件である所の、食料の充實、保安の好果を齎す結果ともなり、一面に於ては、それが今日、文化特徴として數へられもするのである。今これ等の細部を尙見て行かふ。

二十六。遺跡上に於ける檢討。

マグレモージアン文化として、遺跡上の特徴として見らる可きものは無い。其狹義の構築住居跡それ自身も未だ發見せられないし、墳墓と認めらるゝものも、其他の構築物も全く搜出せられて居らない。この中で、文化上、まだ墳墓(92)として發育不充分であり、遺物發見地の性質上、これが保存の良否も存するものであるなれば、全く研究の手掛りがない。同樣に構築住居外の構築物しかも、それが發掘地に見得るか否かも、問題である。第一には、其樣なものが存したかが疑問であるから、これ亦檢討の對象にはなり得ない。

殘る問題が、構築住居である。本遺物層の如く、各種遺物の多量出土は、附近に住居の營まれたものとの、想定は、十一に於て述べた所であるが、其位置すら細位不明であるから、其住居の樣式に就ても、直接研究すべき資料がない。從つて間接ではあるけれども、一般狀態より判斷すれば、所謂水草を追ふ放浪民の假住地とも考へられない。期間は兎に角としても、ある定住者が生活を營んだものゝ樣に考へられ、この推論を許さるゝものとすれば、何等かの住居に對する術工を生じてもよいと考へらるゝ。勿論事實の示す所によれば、舊石時代に於ても西歐方面の中石前期であつても、所謂アンシルス文化でも、未だ確たる狹義の構築住居跡は發見せられて居らない(93)。而してこれを必要方面から觀察すれば、氷河環境の如きは、最も必要も多く、本文化の如き、惠まれた氣候環境にあれば、より少なくもあるけれども、これを文化進展の上から見れば、北歐の如き、洞窟等自然住居を營み得る地形に乏しく、人々が野外生活を營む以上、そこに何等かの術工が芽へてもよいと考へらるゝ、或る矛盾?も起つてくる。それ

故、樓築住居が行はれたとするも、甚だ簡易なものとは思はるゝ。而して地的時代より見れば、森林時代でもあることであるから或は森林の一部を住居に利用せられて居つたかも知れない。

以上から見ると、何等文化上に歸納を齎し得ない様でもあるが、更に見て置く可きものがある。其遺跡としてこそ、何等見る可きものが無いにしても、この様な地方に本期人が住んだと云ふことが、既に或るものを物語つても居る。即ちこの地方は、森林も茂り、沼澤も多いから、鳥獸の棲所ともなり、水產も豊である。氣候は温向もして居るから、本期人は其食料充實し、保安良好な地點に位置したものと見らるゝ。この生活に都合よき所に住居の撰定が、食料保安に對する先決條件であつて、しかもこれに適應した文化內容を有する以上、發展もすべきである。而してこの様な環境に惠まれた位置に住居する以上は、其文化發展が、如何なる方向に向ふ可きかに就て、更に遺物內容を檢討して見る。

二十七。遺物上に於ける特異相

出土遺物に就ては既に夫々に就て述べた際、小括し又綜合もして居る。而して第一表には一覧表まで揭出してもあり、重複もするけれど、次の様に列擧して、將來中石文化研究に對する、或る準據を造つて置く。

1。人類の旅伴として家犬が飼畜せられて居る。（十四の五）

2。人工遺物の出土量は三遺物層を通して甚だ多い。（十二）

3。人工遺物の主體は、利器にあり、藝術的要素が附隨して居る。（二十四）

4。石器は、中小形が多く、巨石器はない。（十九）

5。直曲の祖形斧が生れ、近戰打刺の利器をなして居る。（十九のBA）

6。細石器がよく發育し、其出土數も多く、主要遠戰器と認めらるゝが、未だ尖形鏃はない。（十九のC）

7。石器には中小形な刺突利器と認めらるゝものが無い。（十九及び二十四）

8。石器は打製のみで、未だ明確なる磨製がない。（二十三）

9。骨角器は、種も量も多いが、其内で大、中形の諸器がよく發育してゐる。（二十の1）

10。有孔な骨柄、骨斧、嘴器の類が出現し、石器と相待つて近戰打刺乃至打突具をなして居る。（二十のAA′A″及び二十四）

11。骨劍・骨棒の類は、稀ではあるが、雄大なものがあり、且つ其一部には加飾せられたものがある。（二十のC）
12。有齒骨銛がよく發育し、骨角尖頭器の一部と共に、石器に缺けた刺突器を補ふて居る。（二十のD・E及び二十四）
13。稀ではあるが、石入骨銛が新に出で、他に類例も甚だ稀である。（二十のF及び【註二】）
14。明確なる釣針も新に生れ、漁撈の一革命を見て居る。（二十のG及【註三】）
15。裝飾品としては、僅に垂飾を見るのみである。（二十のH）
16。木器の一部が殘存して居る。（二十一）
17。裝飾紋樣を存するものがあるが、其要素は純然たる幾何紋である。（二十二）
18。術工學的に見て、8の外特出すべきものがない。（二十三）
19。石器と骨角器と互に長短相補ふものがあり、利器としては、遠戰・近戰の兩器を備へ、且つ中戰器としての可能を示すものがある。（二十四）
20。全般に於て、骨角器が石器よりも發育優位にある。（二十四）
21。未だ土器を所有して居らず、漁撈を主とし或は農耕を物語るものもない。

これ等が本文化遺物上に於ける主要なる特徵であつて、これと二十六に於ける遺跡上のそれとを併せ、本文化に於ける特徵が生れ得る。これを簡單に纏めて見れば、遺跡上、特異の發展を見るものが無い。卽ち構築術工の發育不良である。この基く所は、當時の自然環境に惠まれた結果住居位置の撰定により、其不備も幾分か補はれ、且つ其生活の餘力が殆んど人工遺物に集中せられた結果とも考へらるゝ(94)。

而して遺物上に於ては、例出して居る如き、色々の特徵、其内でも本文化乃至は、中石文化として新出現のものを見、狩獵、漁撈に於ても亦、利器家犬の兼備等からしても、舊石文化より一步進んでも居る所が見らるゝと共に、一方に於ては、文化上大切な土器がなく、磨石器も明確でないし、住居、墳墓等の構築術工も進まず、未だ農耕始原も考へられない。卽ち舊石文化よりの距離がよく見らるゝと同時に、新石文化特に北歐方面の巨石墳を構築したり、立派な磨石器其他を有するものとは、亦隔てが存する。

而して舊新兩文化の間に蟠つた、文化溝渠なるものゝ如何に深かつたかも、本文化研究を通じて考へられもしよう。又これを滿す

ものが、中石文化であり、其一部をなす本文化によつて、これが文化相の一端も考察し得るものと信ずる。

二十八。本文化の分布相

今迄は、本文化の基本遺物層に就て研究し、これを取纏めて、本文化の文化相を決定したのであるが、この基本文化相に基いて北歐其他各地に於ける、所謂本期文化と概稱せらるゝものを、最も簡單に見て行く。

根本に於て、本期文化なるものゝ解釋如何によつて、廣くもなり得ることは、三にも述べた所であるが、前條に述べた主要特徴の全部乃至大部を具備するものと云へば、殆んど他には見られない。然し大部の特徴を備へないにせよ、同じ中石文化の內より、本文化に最も近き文化を抽出して見るなれば、北歐と云ふても殆んど其東端とも云ひ得る北エストニアのクンダ(Kunda)がある。只クンダそれ自身の詳細が私自身に不明である爲、こゝに多くを述べ得ないが、先づ一通りを見て置く。

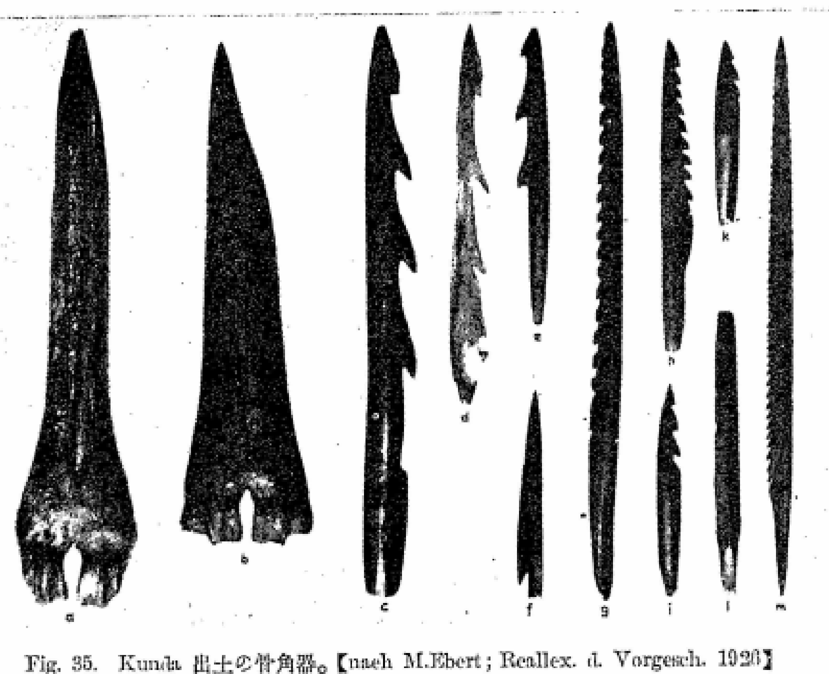


Fig. 35. Kunda 出土の骨角器。【nach M.Ebert; Reallex. d. Vorgesch. 1926】

【註五】 **クンダ泥炭遺物層。** 本遺物層は甚だ古く一八八二年に地質學者 (C. Grewingk) によつて研究せられ、同年 (Lt. 8) 及び一八八四年(Lt. 9)に報告せられたものであるが、私は兩報告共に見たことがない。其位置は海に近く、河口の兩側に發生して居る泥炭層中にある。遺物層よりの上方には厚さ三米もある位の泥炭層があり、其下は粘土と泥灰岩 (Mergel) である。

この粘土乃至泥灰岩層より問題を釀して居る馴鹿 (Renn) 角が出土したのであるが、直接文化層の中ではないらしい。それがよし文化層出土であつても驚くことはない。【(6)參照】ましてこの遺物層の地理的位置が東北に偏しても居るのであるから、アンシルス時代或はこれ

以降に於て、馴鹿の遺留者が殘つて居つても、それ程不合理でもない。從つてこの遺骨に、大なる歸納を下し得る程、重大なものとも思はれない。この外遺物層それ自身の性質等多くが解らない。

人工遺物としては、僅に二個の石器の外、悉くが骨角器であつて、骨角匕、有拘有齒の骨銛、骨角尖頭器等が共主要なるもので、特に有拘有齒の骨銛が過半を占めて居る(第三十五圖)。有孔骨柄、骨斧、嘴器より石入骨銛、釣針等もなく家畜も土器も共にないらしい。其出土自然遺物に就ても全く私には不明である。

以上の有り樣であるから、比較資料として缺くる所多いが、骨銛の發育と骨角匕乃至骨角尖頭器の共在が共通するが、クンダには有拘骨銛を存し、本文化にはない。本文化は骨角器優位の文化であるが、クンダの以上の發見では純然たる骨角器文化と云ふことが出來、それ程兩者間に共通點はない。

而してクンダの地質時代も文化階梯も、大局に於ては中石文化と認められては居るが、細位は區々である。例へば Tallgren はアンシルス文化、Ebert はリトリナ時代(エーベルトはマグレモージアン＝リトリナ期と考へて居るから、クンダをマグレモージアンに編入して居る)ヌーバーマイヤーは相變らず續舊石時代【(13)及二十四。參照】と稱し、ザラッは【(Lt.37) S. 39】に、本期文化と比較せられ得べき唯一の近緣ある遺物層であると云ふても居るが、以上の事實では、私には不可解の所が多い。


Fig. 36　一種の骨柄　($\frac{1}{2}$ N. G.)
デンマーク Roskilde Fjord出土
【nach, K. F. Johansen (Lt.14)】

本期文化に最も近いと認め得るクンダが、以上の有り樣であるなれば、更にこれよりも近緣を認められないものに就て、より廣くマグレモージアンと解して見ても、公算が足らなくなるに止まらず、本期文化の特徴が、範圍擴大に伴ふて漠然となつて行くことも併せ考へねばならない。それにも拘はらず、デンマークの各地(95)乃至スエーデン等から主として石入骨銛【第二十五圖參照】の出土―多くが單獨發見―を以て、直に本期文化の分布範圍を歸納することは、過早にも考へらるゝ。他に植石せられた石器(第三十六圖)乃至は、施紋骨角等の出土或は更に單なる有齒乃至有鉤骨銛等を基礎として其分布を廣く見て居るものになると、北歐に止まらず、ベルギー、北佛を經て英國諸島にも及ぶものと云はれても居る(96)。而して、こゝに述べて居る三遺物層乃至はクンダ程の發見地は未だ他にない。若干片鱗の出土、

中には出土狀態不明のものすらある。從つて公算が足りない。私は今の所、本期の分布が或は人々に云はるゝ如く、廣く北歐に存することも或は然らんと申し得るのみで、今日の發見狀態では公算の上から、これ以上に申し得べき資料がない。解らないと申し、極限的に三遺物層のみをとつて、總ては今後の發見研究に待つものである(97)。

二十九。本文化の文化系統

前條に於て、本文化の分布相、これを換言すれば、空間的に本文化の範圍を見たのであるが、こゝに更に、これを時間的に見て、果して本文化に於て、時的連繫、卽ち文化系統の存するものか否かに就て、概見する。

先づこれを文化上限に向つて見て行けば、本文化は已述の如く、私は地質編年上アンシルスーリトリナ過渡期と見て居るから、北歐に於ては、本文化以前として、所謂アンシルス文化【三。及び第一表參照】が、時的に近い。然し今日では、公算上少なくとも私は、これを一文化として完全なものとは考へられない。未成品と考へる。從つて比較資料も不足である。これを飛んで、舊石文化との文化移行を云々することは、地理的にも餘りに隔てが多く、又事實に於ても文化內容を異にし、直接連絡の無いことは述べても居る【二十四。二十七。等參照】。從つて將來に於て、所謂アンシルス文化が確立せられたならば、或はこれとの關係も生ずるやも知れないが、今日では、これに觸る可き時機でない。只今は上限不明とするを、確實なる申し分であると、信ずる。

次には、本文化それ自身に於ける時的經過の問題である。それが絕對的な期間は知り得ないにせよ、幾何の經過時間を存したものか、本文化開始の當初より、終末に至る間の長短に關する考察である。これと連關して生ずる所の問題は、三遺物層相互間に於ける先後の關係である。これに就ても諸說がある。多くが、マグレモーゼ、スヴエルドボルグ、ホルメガールドの順に、且つ斜交して、マグレモーゼ中期にスヴエルドボルグ初まり、この終り頃ホルメガールドを見る等云はれもするが、其理由の根柢が私には明確でないから、諸說もあると云ふ點を紹介し、其時的經過も亦、不明と申するに止める。(十。參照)

第三には、本文化下限に於ける文化修行關係である。北歐に於て、本期直後の文化は、第一表其他の如く、貝塚期である。これを廣義に見れば文化系統の存在を認めらるゝけれども、嚴格狹義に云へば、中間に若干の溝渠はある。然し大局上、よし其文化が直接系統連絡がないにしても、相互に可なりに近接して居る所は、認めらるゝ。二十七の條件を一々檢討して見ても、共通條項は多い。1。2。3。4。までは略同樣であり5の兩面彫斧は貝塚時代の主要石器となり、6の細石器に於て、同樣に發展して居つ

ても、貝塚期には直剪鏃【十九。C及び第二十圖A參照】が特徴である。7。8も同樣、9に於て貝塚時代は本期程には骨角器の發展なく、10の諸器も貝塚期に存しても居るが、11の如きものがなく、12の有齒骨銛は殆んどなく、尖頭器のみとなり、13の石入骨銛も見られないが、14。15。16。は同樣、17。に於ては、より少なく、18。19も略同樣であるが、20に於て本文化と轉倒して、石器が骨角器より稍々優位を占め、21。の土器は貝塚期に出現して居るが、農耕始原の顯著なものはない。

而して貝塚民は純然たる漁者でないにしても、漁撈主業者であり、本期民は狩獵主漁撈從である所に、大きな違いもあるし、文化上、貝塚民は土器を有するのであるから、これ等と今述べた違とに胚胎して、そこに幾つかの小溝渠も存するもの丶、普遍的に近緣の存することは認容せらる丶。又或る一部では、本文化と貝塚期との中間に一階梯を偏設して、文化系統を確立しようとするものがあるが、其例證たるや甚だ薄弱で、事實として肯定し得ることが出來ない（98）。從つて其意ある所はよく了解もせらる丶けれども、事證不足である以上、今日無理な文化系統を樹立するにも及ばない。要するに、こ丶に若干が將來補塡せらる可く、發見の餘地を存して居る。

三十。結　　語

これで一通り概論として、マグレモージアンの紹介をなした心算である。これを一言にして云へば、文化上北歐に於ける中石文化の中央に位置する一文化階梯であり、其地質學上の編年位置は、アンシルスよりリトリナに移る過渡期にありと思はれ、遺跡上に於ては、確からしさの足らざるものを見るが、遺物上には相應なる特徴を發揮して居る、一文化階梯と考へる。而して今日の所は確實なる範圍に於ては、三遺物層のみであつて、上限は不明、下限は貝塚文化に近緣を見らる丶が、そこにも若干の小溝渠を見ると云ふことが出來る。其細部に就ては、不備不足も多々存すべきは、私の不熟に發する所も多いと考へるが、要するに本文化の概要を知つて戴ければ、それで私としては、一目的を達成したものである。又本文當初に述べた如く、最近歐洲では獨り本文化に止まらず一般に中石文化に就て、著しく研究の機運に達して居ることでもあるから、この時機に當り、從來の如く或は中石文化に就ても、或疑惑を持たれては居らぬかと考へらる丶方々に對し、中石文化存立に對する釋明の一つとしての目的もある。

もし舊石文化より文化進展を見る場合、それが順當なる發育を辿るものなれば、其踏まる可き文化階梯の一つに本文化の樣な、中石文化の存すべきことは、歐洲及び其の他の例を以てすれば（99）、本文化其他の如き中石階梯が舊石と新石との間に存してこそ、

文化移行の狀態がより明ともなるのである。それが舊石より直に飛んで新石文化に到達するには、これを時的經過の上から見ても、文化內容からしても、餘りに隔てが多く、到底一躍進を以て躍進し得ざることは、今更私の云ふ可き限りでない。數十年來、先學によつて、新舊兩石文化間に於ける溝渠問題（Hiatusfrage）として、兩者間の溝渠を認められても居る。これに對し、本文化の發見鮮明は、從來暗黑であつた溝渠に中央に、一つの光明を投じたものであり、こゝにザラウ共他の功業が錄せられ、今日に於ける中石研究の一起動力ともなつて居る。たゞこの光明たるや、一路闇なき街燈の如く、脈絡として輝くものではない。尙多く斷續もし闇路もある。これとて獨り中石文化にのみ存する現象ではない（100）。細かく見れば、舊石にも新石にも多くの闇黑は存する。我が國新石文化研究上に於ける或る部分の如きは、全闇に近いとも云ひ得る。それ故中石文化の不備不鮮明のみを、猥りに指摘するにも當るまい。五十步百步である。それであつても尙、私自身では、確からしさ多き範圍のみに於ても、中石文化の存立を確認もして居る。今回は單なるマグレモージアン自身のみの研究であり、石器時代一般大勢上に就ては、言ひ足らない部分も存する外、尙多くの他の中石文化には、觸れても居らない。更に將來發表も期して居る。而して私の最も恐るゝ所は、研究の未知不熟より來る曲斷である。私自身に於ても幾度かこの過ちを犯しても居り、資料にも、文獻にも缺けた所多き、この中石文化研究に於て、特に然りである。本研究が私自身のものであるから、或はこの曲斷も重ね、乃至は遼東の豕たるの愚も亦敢てして居るやも計り難い。たゞ私としては、私自身不可解の點に於ては、成し得る限り告白もした考へではあるが、これに對する嚴正なる讀者の批判と推稿とを得て、よりよき研究に進めたきものと、御願する次第である。

（三月二十二日再稿了）

（90）私共日本人は、（75）にも述べて居る如く、漁撈については、魚食者だけに進んだものを有して居る代りに、飼畜にかけては大陸民に對しより暗い所が多い。且つ大陸の今日に於ける牧者生活すら、或る所までしか解つて居らないのであるから、この樣な飼畜始原に就ても兎角關心が足りない。而して歐洲に於ては、新石時代に入つて、牛其他の飼畜が開始せられ、牧者の分業起原をなして居る樣であるからこの飼畜始原に就ても、重要視せらるゝのである。

（91）單なる容器の存在は、旣に舊石時代にも、これが片影を認めることが出來る【拙著、（Lit. 30）後 P. 193—199. 後篇第四十七圖乃至同第四十一圖】。それ故、本文化に於ても、何等か天然物利用等の簡單な容器の存在は考へらるゝが、それでは充分な貯藏用の作には就き得まいと考へる。

（92）根本に於て墳墓なるものは、解釋の仕方によつて開きも生ずる。今これが詳細は保留するが、廣く「遺骸の埋葬せられたと認めらるゝもの」を墳墓」として見れば、墳墓なるものは、旣に舊石時代にも見らるゝから、文化上、より進んだ本期に、これが存してもよい筈ではあ

るが、十五に述べて居る如く、人骨の部分的出土を見たのみで、墳墓研究資料がない。

(93) 舊石時代には、未だ確たる構築住居跡がないが洞窟の樣な自然住居以外にも、遺物發見地はあるから、或は將來、確たる構築住居の發見を見ないとも限らないが、根本に於て歐洲に於ける學風が遺物偏重に傾いても居るから【(7)參照】果して何時にこれを見らるゝやは保し難い。又中石文化に於ける構築住居に就ては、(51)に述べて居る。

(94) 遺跡として見らるゝ樣な構築術工の發育が、人工遺物の發展と伴はない例は、獨り本文化にのみ見る現象ではない。我國縄紋式石器時代に於ても、何れかと云へば、遺物發育の、より優秀なるものゝ存し、構築墳墓のごとき、發育が惡い。勿論一樣ではない。北歐方面の新石文化においては、所謂巨石墳(Megalithgrab)が甚だよく發達しては居るが(拙稿、北歐の巨石墳、人類、第四一の九。參照)其構築住居は、貧弱である。又スキス杙上生活では、其家屋は立派に構築せられても居るが【宮坂氏、(Lit. 51)參照】北歐と反對に、墳墓は今日明確でない程度にある。以上の諸例は多く新石文化ではあるが、夫々の文化に於ける、發育上の特徴も個別的に見らるゝから、中石文化に於ても、これだけ明には見得ないにせよ、或るものが見らるゝことも考へて居る。

(95) 石入骨銛、彫紋ある骨角器等、所謂本期文化所産と認めらるゝ人工遺物各個の發見地及び其報告等は、餘りに複雜でもあり、又どれだけ必要なのか解らないから、總て略した。只デンマークに於けるものは、ミュラー(Lit. 53)を見られたならば、大約發見地の見當はつく。

(96) マグレモージアン英國分布説に就ては、嘗て本誌第一の四、第六四—六五項に亘つて、ガロードの『英國に於ける上部舊石時代』を紹介した際、一部は觸れても居る。其多くが有鈎骨銛乃至單なる骨角尖頭器に幾何紋等の彫紋があるものを指して居る。(同書、一八七—一八八)たゞ用語上の注意に過ぎない樣ではあるけれども、それがマグレモージアン式(Maglemosien type)と云はれるのは差障がないけれども、本文化それ自身が英國にまで及んで居るのを立證するには、骨銛乃至類品だけでは、其特徴として不足である。何故こんなことをガロードともある可き人が申さるゝのかと思へば、同書一八八項にはブロイ師の『マグレモージアン文化は、ベルギー及び北佛に亘つて見られ、英國にのみ孤立的に存在するのではない』と云はれたのを引用して居る。又ブロイ師自身にも、Harpon maglemosien, L'Anthr. 36. No. 3—4. p. 303—312. 1926. 其他に於て同樣の考を述べられて居るから、有鈎骨銛の發見に基いて、其分布を考察せられて居る。一般歐米の史前學上の歸納は、私とは其立場を異にし、必ずしも公算の上からのみ見て居らない。それが多く想察であつて、考定でない。從つて、片鱗より、全般が大きく歸納せらるゝから、これを私共の樣に、公算の上から見れば、前提に不足も出來てくるが、一般の學風である以上、止むを得ない。特に私の尊敬して居る碩學に、私と異る考を持つて居らるゝことは、私には大なる苦痛であると同時に、私は私自身に於て持つて居る所の、同師に對する敬意の念の、常に變化のないことを告白すると同時に、もし萬一、云ひ過ぎと認めらるゝ點があつても、それは純正なる學術上の問題であつて、私的の感情問題でないと云ふ所を、酌量して戴きたいのである。而して私自身に於ては、大なる歸納を下し得なくも、確からしさ多き道を歩むのが、私共の進む可き道であると、確く信じこれを動かすことは出來ない。

(97) 北歐一般に於て、マグレモージアン三遺物層發見に刺激せられ、最近に於ては、過古發見の所屬未詳の人工遺物の整理は勿論、これに基き其出土地の研究まで行はれて居る。一部の石入骨銛其他の出土地を、今日の目で見て再調したならば、或は本遺物層の樣な、發見は可能であるから、近き將來に於ては、或は其分布相もより廣くなる可きこと、も考へて居るし、更に後述して居る樣な、文化系統問題にも

連關してくるものゝ發見も期待せらるゝのである。

(98) こゝでマグレモージアンと貝塚期の所謂中間階梯なるものと云はれて居るのは、デンマーク Falster 島に於ける Taaderup の沼澤に於ける泥炭中より一匹のエルク鹿と、これを刺突したものと判斷せられて居る有齒骨鏃?との出土であつて、恰も Vig【(6)の4參照】に於けるウーロックスと其殺傷器なりと稱せらるゝものとの共出出土と其事情を同ふして居る。而してこのエルク鹿出土の泥炭層は、本期より稍々新しい泥炭と認められた結果、これを中間期とせられた樣である。單に中間期存在の一例證としては、一本の有齒骨鏃だけでは、其文化相を明にし得ない。

(99) 歐洲に於ける舊石文化より中石以降に及ぶ文化移行は、其自然環境特に氷河現象に基く所が多いから、氷河現象の影響が少ない地方で果して歐洲の如き文化移行を見るかは、大なる疑問である。これに就ても研究すべき內容を有するけれどもこれは、本研究以上に亘ることであるから、今回はこれに觸れない。

(100) 文化溝渠を史前文化の上で求めて見るなれば、大小はあつても、餘りに多い。試みに、舊石文化に存する一二例を揭げるなれば、前期舊石－後期舊石間の如き、オーリナシアン－ソルトレアン－マグダレニアンの如き大きな溝がある。新石に到つては、溝渠の存否を決すべき編年すら出來て居らない文化郡すら、歐洲に見て居る。例へばスヰスを中心とした湖上生活系の如き、新石內に於ては、末期に近く、金石期に近接して居るに拘はらず、其祖原全く不明である。此の如く數へ來れば溝渠の方が知られて居る部分より多いかも計り知り得ない。

マグレモージアン參考文獻一覽

A.

Ascherson, P.

× 1. 1884. Alfred Nathorst's Erforschung der fossilen Glacialflora in Deutschland und der Schweiz. Zeit. f. Ethnol. Bd. 16. S. 463—465.

B.

Broholm, H. C.

2. 1924. Nye Fund frà den aeldste Stenalder, Holmegaard og Sværdborgfundene. Aarbög. f. Nord. Old. o. His Bd. 14. S. 1—144.

3. 1926—27. Nouvelles trouvailles du plus ancien âge de la pierre. Mem. d. l. Soc. Roy. d. Antiq. d. Nord. p. 1—128.

Blytt, Axel.

× 4. 1876. Essay on the immigration of the Norwegian flora during alternating rainy and dry periods.

× 5. 1890. Kurz Uebersicht meiner Hypothese von der geologische Zeitrechnung. Geologiska Föreningens i Stockholm Förhandlingar. Bd. 12. S. 35

G.

Geinitz, E.

6. Die Flora und Fauna des Quartärs.

Geer, G. de

× 7. 1888—90. Om Skandinaviens niväforändningar under Kvartärperioden. Geologiska Föreningens i Stockholm Föhandlingar. Bd. 10. u. 12.

Grewingk, C.

× 8. 1882. Geologie und Archæologie des Mergellagers von Kunda in Estland. Archiv für Naturkunde Liv-Est Kurlands. I. Serie Bd. 9. Liet. I.

× 9. 1884. Verhandlungen der gelehrten esten. Ges. zu Dorpart. Bd. 12. S. 13—73.

Graebner, Paul

10. 1912 Die Entwicklung der deutschen Flora.

H.

Hahne, Hans

11. 1918. Die geologische Lagerung der Moorleichen und Moorbrücken.

Hartz, N. u. Winge, H.

× 12. 1906. Om uroxen fra Vig. Aarbög. f. Nord. Old. o. His. S. 225—236.

Hoops, Johannes

13. 1905. Waldbäume und Kulturpflanzen im germanischen Altertum. Strassburg.

J.

Johansen, K. Friis

14. 1919. En Boplads fra den aeldste Stenalder i Sværdborg Moes. Aarbög. f. Nord. Old. o. His. Bd. 9. S. 106—235.

15. 1918—19. Une station du plus ancien âge de la pierre dans la toubièredu Sværdborg. Mem. d. l. Soc. Roy. d. Antiq. d. Nord. p. 1—359.

Jacobi, Arn ld

16. 1919. Das Naturbild Norddeutschlands zur ausgehende Eiszeit.
Zeit. t. Ethnol. Bd. 51. S. 205—233.

K.

Krause Ernst H. L.

17. 1900. Das alter der Heidefelder in den Ostseeländern.
Globus, No. I. S. 14.

Koch, Lange

× 18. 1916. Mullerup-Kulturens geologiske Alder.
Meddelelser fra Dansk geologisk Forening, Bd.5. No. 6.

Madsen, A. P. u. a.

19. 1900. Affaldsdynger fra Stenalderen i Danmark.

Menzel, Hans

20. 1914. Die geologische Entwickelungsgeschiechte der älteren Postglazialzeit im nördichen Europa und ihre Beziehung zur Prähistorie.
Zeitschr. f. Ethnol. Bd. 46. S. 205—248.

Miyasaka, 宮坂光治

21. 1929. 歐洲新石器時代
（考古學講座）

Montelius, Oscar

22. 1906. Kulturgeschichte Schwedens. Leipzig.

Much, Ilse

(Siehe Sarauw; 37.)

Müller, Sophus

23. 1896. Nordische Altertumskunde.
24. 1918. Stenalderens Kunst i Danmark.

Munthe, H.

× 25. 1892. Studier öfver baltiska hafvets kvartära historia.
Anhang z. k. svenskaVet. Vereins zu Hamburg, Bd. XI.

× 26. 1894. Preliminary report on the physical geography of the Litorina-See.
Bull. geol. Upsala, II.

N.

Nathorst, Alfred

× 27. 1873. Om Skånes nivåförändringar.
Geologiska Föreningens i Stockholm Förhandlingar. Bd. I.

Nehring, A.

28. 1884. Die quartäre Flora Deutschlands.
Zeit. f. Ethnol. Bd. 16. s. 461—463.

Nordmann, V.

× 29. 1916. Nye Bidrag til Mullerupkulturens geologiske Alder.
Meddel fra Dansk geolog. Forening. Bd. 5. No. 6.

O.

Ohyama, K. 大山柏

30. 1929. 歐洲舊石器時代
(考古學講座)

31. 1928. デンマークに於ける貝塚構成時代
史學. 七ノ二. S, 1—48

Obermaier, Hugo

32. 1927. Mesolithikum.
Reallexikon d. Vorgeschichte Bd. 8. S. 154—155.

R.

Ribeiro, Carlos

33. 1880. Les Kjökkenmöddings de la vallée du Tage.
Cong. Int. Anthr Arch. Prehis. Lisbon. p. 279—290.

S.

Sarauw, G.

× 34. 1898. Die Baltische Calluna-Heide im Altertum. (Dänisch)
Aarbög. f. Nord. Old. o.His.

× 35. 1903. En Stenalders Boplads i Maglemose Ved Mullerup (Saland.)
Aarbög. f. Nord. Old. o. His.

× 36. 1905. Sur les trouvailles faites dans le Nord de
l'Europe datant de la Periode dite de l'Hiatus.
Premier Congr. Préhis. d. France. Périgueux. p. 244—

37. 1911—14. Maglemose.
Prehis. Zeitschr. Bd. III. S. 250—104. Bd. 6. S. 1—28.

Schmidt, Hubert

38. 1924. Vorgeschichte Europas.

Sernander, R.

× 39. 1897. Zur Kenntnis der quartären Säugetierfauna Schwedens.
Bull. geol. Upsala, III.

× 40. 1908. Om Ancylustidens Människa och tallperioden i södra Skandinavien.
Geologiska Föreningens i Stockholm Förhandlingar. Bd. 30. S. 399

× 41. 1909. De scan odanska torfmossarnas stratigrafi.
Geologiska Föreninges i Stockholm Förhandlingar.
Bd. 31 H. 6. No. 265. S. 423

Shetelig, Haakon

42. 1922. Primitive Tider i Norge

Steenstrupp, Japetus

× 43. 1842. Geognostisk-geologisk Undersögelse av Skovmoserne Vidneslam og Lillemose i det nordlige Sjælland.
Det kgl. danske Videnskabsselskabs naturv og mathem. Afh. IX.

Virchow, R. (übergiebt im Namen Japatus Steenstrup)

44. 1884. Pflanzenreten aus dänischen Waldmooren.
Zeit. f. Ethnol. Bd. S. 458—463

備考　番號の前に×のあるのは，著者未見のもの

Abhandlungen

der

Japanische praehistorische Gesellschaft

auf

Europäische Srpache

1929. **Kashiwa Ohyama**

Resume des Ausgrabungsberichts über die Muschelhaufengruppe Kaizuka beim Dorf Yoshibumi, Provinz Chiba.

Prähis. Zeitschr. Bd, I, No. 5, S. 1—4.

1930. **Chiyomatsu Ishikawa**

Professor Edward Sylvester Morse.

Prähis. Zeitschr. Bd, II, No. 1, S. E. 1—E 3.

Kashiwa Ohyama

Denkmal beim Muschelhaufen Ohmori zum Gedächtnis an Prof. Edward S. Morse.

ibid, S. E. 4—E 8.

Letter from the Family of Late Prof. E. S. Morse.

ibid, S. E. 9.

Kashiwa Ohyama

Korekawa-Funde, vom Korekawa, einer charakteristischen Station von Kame-ga-oka Typus der Nord-Ost Jomon-Kultur.

ibid, No. 4, S. E. 11—E. 41.

Mitsuji Miyasaka

Le gisement préhistorique d'Ichioji prés de Korekawa (Préfecture d'Aomori). (Résumé de l'étude de Mr. Miyasaka) (texte japonais, p. 1 à20) par M. Haguenauer, pensionnaire de la Maison Franco-japonaise.)

ibid, No. 6, S. E. 43—E. 49.

1931. **Kiyouyki Higuchi**

Resume über die neu gefunden Muschelhaufen Mori (森) unweite von Takada (高田), Prov. Bungo (豐後), Kyushu (九州),

ibid, Bd III, No 1, S. E 1—E 6.

INHALT

Sonderausgabe
Die Maglemosien-Kultur in Nord-Europa

von

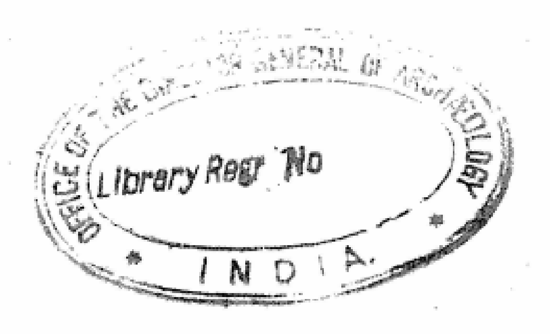
Kashiwa Ohyama

Die Maglemosien-Kultur, zum Mesolithikum gehört, ist in Europa schon seit langem bekannt, aber im räumlich sehr entfernten Japan noch ziemlich unbekannt. Deshalb ist diese Arbeit hauptsächlich für die Japaner geschrieben, und ein ausführliches europäisches Resume nicht notwendig.

In Japan fanden wir bis jetzt noch keine sicheren palaeolithischen- oder mesolithischen Funde, trotzdem über 10000 neolithische Fundstätten bekannt sind. Aber das japanische Neolithikum muss auch irgendwo seine Vorfahren haben. Ob räumlich auf den japanische Inseln selbst oder auf dem nahen Continenten enstanden ist, ob es zeitlich direkt auf das Palaeolithikum folgt oder allmählich über das Mesolithikum entstanden oder auch noch neolithische Vorläufer hat, das ist bis jetzt noch ganz unklar. Aber wir müssen uns in Zukunft nach und nach mit dieser Vorfahrenfrage beschäftiegen, und dafür sind palaeolithische und mesolithische Kenntnisse auch für die japanischen Praehistoriker notwendig. Zu diesem Zweck habe ich diese beiden Hefte ausgearbeitet; das Maglemosien selbst ist nur Beispiel.

Ich möchte bei dieser Gelegenheit nicht versäumen den Maglemosienforschern, besonders den Herren Georg F. L. Sarauw(+), K. Friis Johansen, H. C Broholm und anderen zu danken.

TAFELN



Satzungen der Gesellschaft.

1. Der Name der Gesellschaft ist "Shizengaku-Kwai" (Praehistorische Gesellschaft)
2. Der Zweck der Gesellschaft ist das Studium der Praehistorie und ihrer Grenzgebiete und dessen Popularisierung
3. Die Tätigkeit der Gesellschaft erstreckt sich auf
   - A Herausgabe kleiner Mitteilungen und Schriften
   - B Herausgabe der Shizengaku-Zasshi (Zeitschrift für Praehistorie) (Zweimonatlich) und des Jahresberichts.
   - C Veranstaltung von Forschungs-und Studienreisen
   - D Veranstaltung von Vorträgen und Ausstellungen
4. Mitglieder

   Die Mitgliedschaft wird erworben durch jährliche Vorauszahlung eines Beitrags von 5 Yen. Personen welche einen einmaligen Beitrag von 200 Yen oder mehr zahlen, werden lebenslängliche Mitglieder. Personen welche sich um die Gesellschaft besonders verdient gemacht haben, können Ehrenmitglieder werden und haben damit die Stellung der lebenslänglichen Mitglieder
5. Die Mitglieder erhalten die Zeitschrift und den Jahresbericht frei, jedoch wird für Zusendung nach dem Ausland das Porto berechnet
6. Rechte der Mitglieder

   Die Mitglieder haben das Recht, die Einrichtungen des Ohyama Instituts für Praehistorie zu benutzen

   Die Arbeiten der Mitglieder sollen in der Praehistorischen Zeitschrift veröffentlicht werden

   Ferner haben die Mitglieder das Recht, an den Forschungs- und Studienreisen der Gesellschaft teil zu nehmen, die Vorträgen und Ausstellungen zu besuchen, sowie die Sammlungen und die Bibliothek der Gesellschaft zu benutzen
7. Ein aus mehreren Mitgliedern, bestehender Vorstand führt die Geschäfte der Gesellschaft
8. Wenn es sich als notwendig herausstellt, können diese Satzungen später geändert werden
9. Das Büro der Gesellschaft befindet sich:

9. Onden Aoyama Tokio
Ohyama Institut für Praehistorie
(Ohyama Shizengaku-Kenkyujo)

für den Vorstand

Fürst Kashiwa Ohyama	Kensei Hohjoh
Isamu Kohno	Sueo Sugiyama
Mitsuji Miyasaka	Kingo Tazawa

ZEITSCHRIFT FÜR PRAEHISTORIE

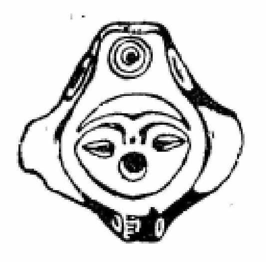
(SHIZENGAKU-ZASSHI)

Organ der Japanischen praehistorischen Gesellschaft

Herausgegeben

von

KASHIWA OHYAMA



Sonder Nummer:

Die Maglemosien-Kultur in Nord-Europa

3. BAND 2/3 HEFT

TOKIO

Mai 1931

Japanische praehistorische Gesellschaft

(SHIZENGAKU-KWAI)

9, Omote Aoyama Tokio.

史前學雜誌

第三卷　第一號

昭和六年一月十五日發行

史前學會

史前學會々則

一　本會ヲ史前學會ト名付ケル

二　本會ノ目的ハ史前學研究ヲ主體トシ、併セテコレニ關連スル諸學ヲ考究普及スルニアル

三　本會ノ事業ハ左記ノ通リデアル
　研究小報及パンフレットノ發行
　史前學雜誌(年六回隔月發行)及年報ノ發行
　調査並ニ研究旅行、臨時講演會並ニ展覽會ヲ催ス

四　會員
　本會ノ趣旨ニ賛成シ年額金五圓ヲ前納スル者ヲ以テ會員トシ金貳百圓以上ヲ一時ニ納ムル者ヲ以テ終身會員トスル
　特ニ本會ニ貢獻シタル會員ヲ名譽會員ニ推選シ、終身會員ニ準ズル

五　本會員ハ隔月發行ノ史前學雜誌並ニ毎年一回發行スル年報ノ配布ヲ受ケルモノトスル(但海外在留者ハ別ニ遞送料ヲ要スル)

六　會員特典
　本會々員ハ大山史前學研究所ニ於テ研究ノ便宜ヲ受ケ共研究ヲ雜誌ニ於テ發表スルコトヲ得ル
　本會ノ調査並ニ研究旅行、講演會及展覽會ニ出席シ、
　本會所藏ノ資料圖書等ヲ使用閲覽スルコトヲ得ル

七　本會ニ數名ノ幹事ヲ置キ、本會ノ會務ヲ執ル(將來必要ニ應ジテ本會々則ヲ變更スルコトヲ得ル)

八　本會ハ事務所ヲ左記ノ所ニ置ク
　東京府豐多摩郡千駄ケ谷町穏田九
　大山史前學研究所内　史前學會　電話青山一二五番

幹事　大山柏　甲野勇　宮坂光次　北條憲政　杉山壽榮男　田澤金吾

會計　岡田義一

投稿規定

寄稿の範圍は史前學研究を主體とし、之に關連する諸學を包括す。寄稿者は會員並に會員の紹介ある者に限る

原稿は返還せず、但し寫眞、圖表等は豫め申出であるものに限り之を返還す

原稿掲載の先後は編輯者に一任されたし

寄稿者の希望に依りては内容に關し相談に應ずることあるべし

寄稿の別刷は豫め申込みある場合に限り、實費及び送料を申受け需に應ず

昭和六年一月十二日印刷
昭和六年一月十五日發行

定價一册壹圓　郵稅四錢

編輯者　東京府豐多摩郡千駄ケ谷町穏田九番地　大山柏

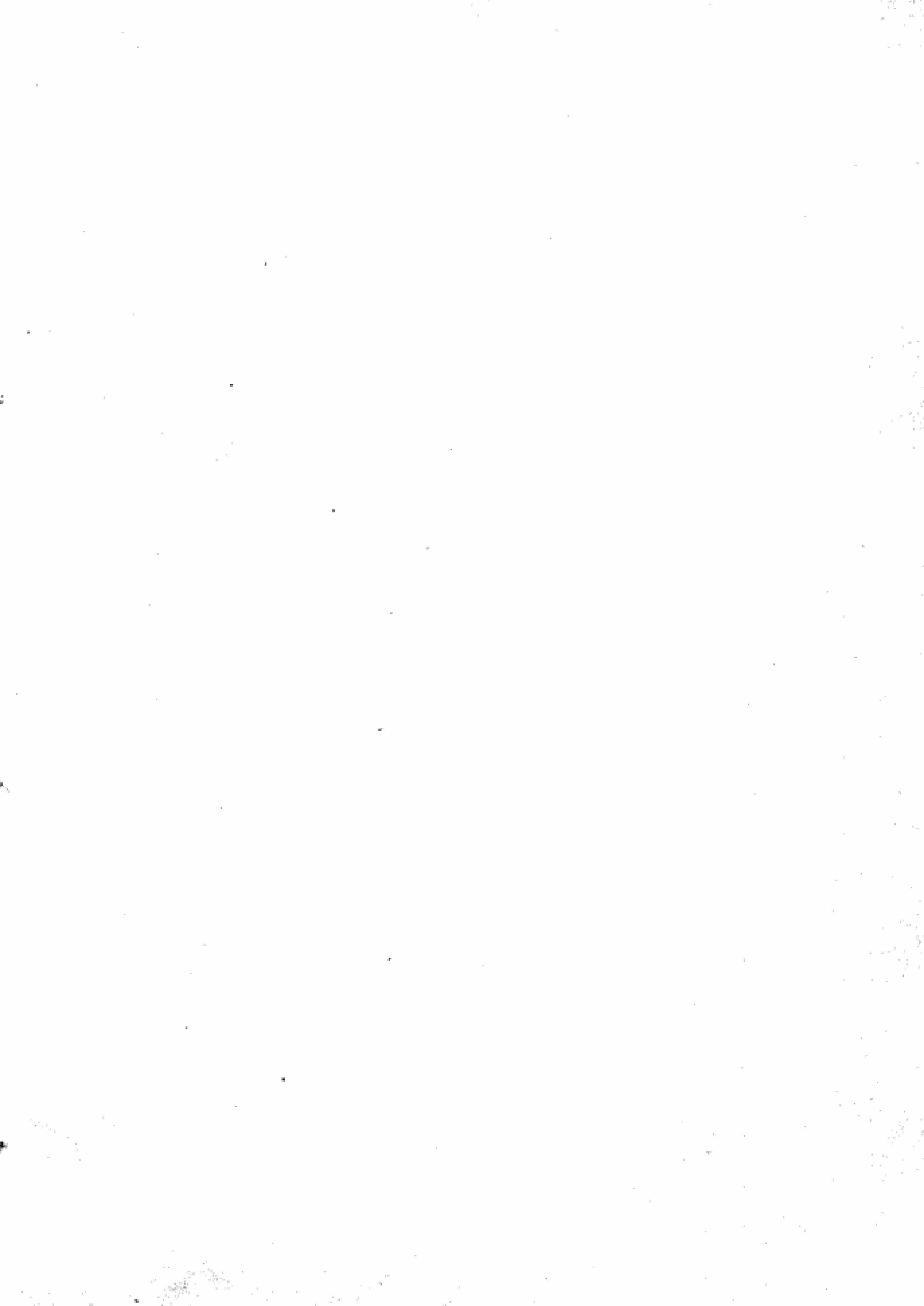
發行者　東京府豐多摩郡千駄ケ谷町穏田九番地　岡田義一

印刷者　東京市神田區表猿樂町二　中村修二
株式會社開明堂東京營業所

發行所　東京府豐多摩郡千駄ケ谷穏田九大山史前學研究所内　史前學會
電話青山一二五番　振替東京五八九六九番

發賣所　東京市神田區北甲賀町四番地　岡書院
電話神田二七七五番　振替東京六七六一九番

史前學雜誌　第三卷　第一號　目次





千葉縣大柏村姥山貝塚及び同地人骨の出土狀態



Ausgrabung und Skelettfunde aus den Muschelhaufen Ubayama bei Dorf Oh-kashiwa Prov. Chiba.



史前學雜誌 第三卷 第一號

史前學と我神代

大山 柏

一 はしがき

史前學研究と我國神代との關係に就ては、私自身としては、既に本誌『史前學研究と年代及び民族問題』(第一の四)に於て、直接これに觸れなかつたものゝ、間接には解消せられたものと考へて居つた。所が、今日に及んでも、尙色々と、これに連關した問題も起り、又中には誤解、曲解までが加はるに於て、止むを得ず、こゝに再び同樣の問題に就て述ぶることは、讀者には御迷惑も多いとも思はぬことも無いが、問題が問題である以上、捨てゝもをけず、かく上稿する所以である。勿論、其立論の要旨は前文獻に於て述べて居るのであるから、今回は、前回に於て盡し得なかつた點を、補ふと同時に、成る可くこれが重複する部分は避ける故、本文は前文獻の一延長に過ぎないのである。それ故、本文に於て、不足を生ずる所は、重ねて前文獻の再讀を煩し、根本に於て、少なくとも私自身の考へて居る、史前學研究上の立場を諒解せられ度いのである。

二 我神代と史前學との結合誘發の起因

實際に於て、多く直面する所の問題は、史前學上の出來事に對し、前文獻で述べた如く『年代の古さ』『史前民族の性質種類』等と相連關して起つてくる所の質議に、今述べんとする所の、『我神代と史前事情との關係』がある。勿論これ等は、史前學的考古學的專門見地に立つての問題ではなく、多くが一般社會民衆によつて、なさるゝものである。而して此樣な質問者の多くの、歷史觀念なるものは、其時に關した標準が、絕體年代のみであつて、相對年代などを汲み入れる餘裕が、殆んどない。まして文化編年の如

ろから、更に後に述べよう。而して更に尙述べねばならないものがある。

五　國體風教等との關係

玆に注意を要すべきは、よしそれが純正なる學術研究であつても、直接、間接に、國體や風敎等に觸れる場合、乃至は、純正學術研究の立場を、よく了解が出來ず、これを以上の樣な道義問題に結合せらるゝが如きこともあり得るから、特に史前學や原史學上から、我神代史に觸れる樣な場合には、豫め愼重なる考慮と用意とがあつて欲しいのである。これも決して道學家の樣な堅苦しいことを申して居るのではないが、偶々、神代史、皇祖、建國神話等に連關して、其研究上の立場を確立しなかつた、不用意の結果は、既に先例もある。今これが內容に就ては憚るが、先年新聞紙上で、喧傳せられたことは、一部讀者には、回想も出來ることゝ考へる。これ等は、豫め純正學術の立場と、國民風敎との相關々係に對する、考慮が不足、不充分に發して居る。もし萬一、純正學術研究上の立場として、是非ともこれ等の關係に就て發表せねばならぬものであるなれば、其研究に對し、これを了解、消化し得る、限定範圍の人々に向つてのみ、發表すべきであり、より廣く發表するには、以上の點に誤解、曲解等の起らざる樣、豫めこれに對する釋明を試みて置く可きである。これを、理解の程度をも顧慮することなく、一般社會に向つて發表する爲、如上の結果をも生ずる。又甚しいのになると、神話、傳說等の多くは、全く假空の說話として、頭から葬る樣なものがある。私自身は、神話學や、民間傳承等を研究したことがないから、肯定、否定、何れも出來ない。解らないのである。これを自己の研究の歸納からでもなく一時の出來心から、簡單に否定するのであるから、こゝにも不用意があり、前者と同樣の結果をも生じてくる。而して偶々それが考古學者、史前學者としてゞもあるなれば、引いて、考古學や史前學に及ぼす處も生じ、迷惑も被ることゝなる。それ故、以上の樣な、心使いがあつて欲しいのである。

六　む　す　び

以上で、今回述べんとする要旨は盡きたが、四の終りに殘して置いた、神代と史前學との相關々係の釋明に就て、一言加へて以て、むすびとして置く。四で云ふた如く、單なる學術的說明のみでは、或る程度の人々以外には、中々了解が困難であるから、一

般民衆に向つては更に說明も加へねばならない。それには、「史前學上の研究は、主として、文化史的歸納であつて、政治史的內容をも多く存する神代史に對しては、多くの交渉を有しない」と云ふて見ても、人々によつては、了解困難なこともあるから、「神代史の如きものは、昔より我國祖先の傳承した、我開闢の物語りであつて、これは、これとして別に研究する方面がある。私共のしている方は、史前學であつて、實地實物に就て、研究して居るのだから、果して神代とどれだけ交渉を見出すものやら、まだまだ解らない。段々と研究でも進んで行つたら、解る時代もくるかも知れないが、今日では、未だ見當がついて居らない」とでも云ふより致し方がない。又私自身に於ては、以上の樣に云ふてもきているのであるから、御參考にでもなれば、との考へから、かく述べたものである。

（昭和六年一月九日稿了）

（1）「しらす」と「うしはく」に就ては、明治聖德紀念學會紀要中に於て見た記憶があるが、今其卷號を見出して居らない。
（2）史前學、考古學及び史學。史前雜、二の一、第九項、政治史、文化史と考古學、參照。
（3）同右、第一—六項參照。

陸前國鹽釜港字崎山圍洞窟の石器及び古墳時代遺跡に關する略報

永澤譲次

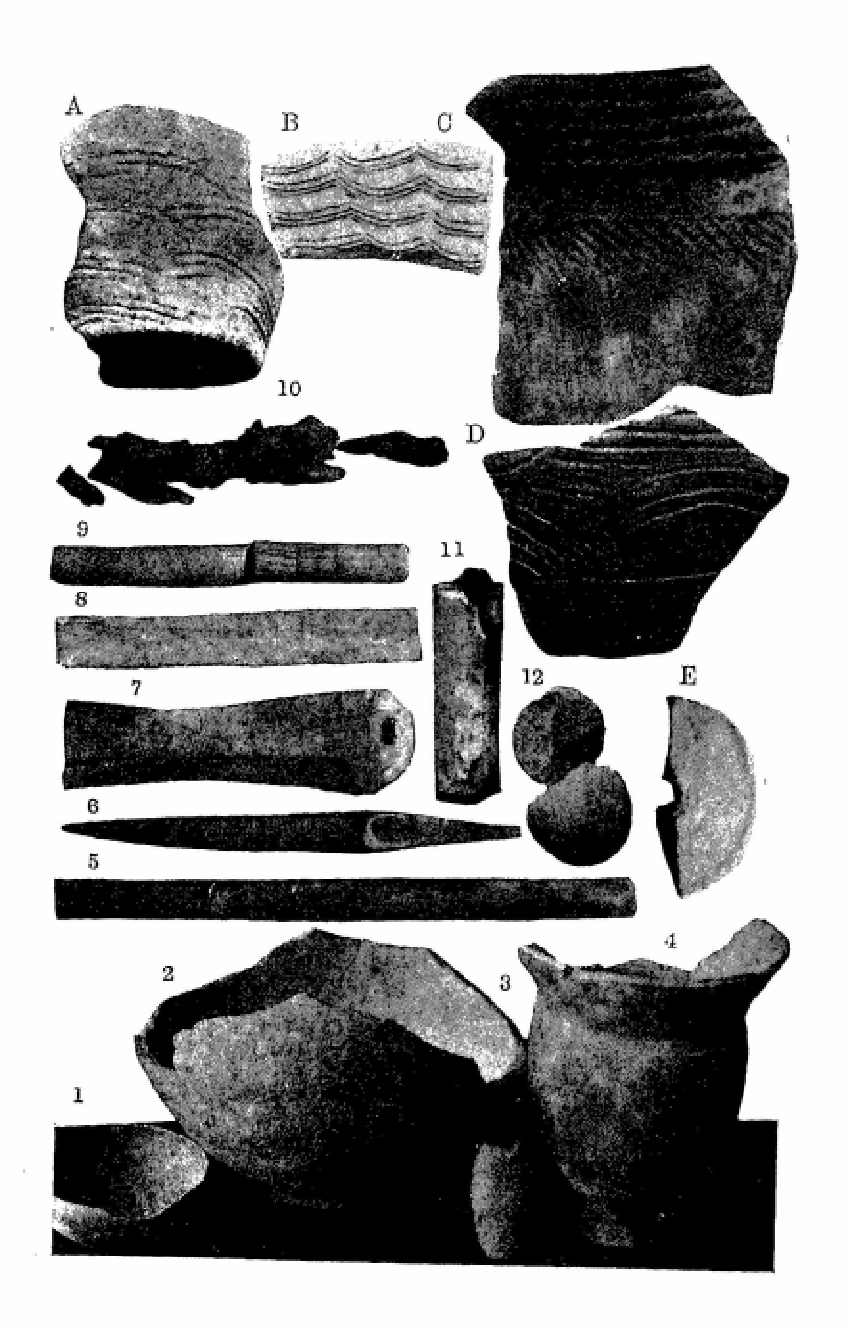
余は昭和五年の春、鹽釜港字崎山圍の一洞窟內遺跡及び之に接して前面に存する貝塚に就きて數回に亘り調査を行つた。茲には只だ余の調査の梗概を簡單に報告するに止める。

此の洞窟は入口の前部に貝塚と認むべき一貝層を有し、而して洞內より所謂古墳時代の人骨及び遺物と認むべきものを發見せり。且此等遺物は金屬器使用の痕、明な時代のもの（骨角器、石器）多く、反之貝塚よりは繩紋ある土器出土し、窟內及び貝塚との兩者の遺物關係に就きては猶ほ今後の調査を必要とする。然して窟內遺物の發見は他の目的の爲めに該洞窟の居住者なる鈴木吉左衞門氏の發掘に依りて行はれたるもので、余自身の發掘にあらざる故、余自身が此等人骨、遺物の埋藏狀態の實際を詳報し得られないのは甚だ遺憾なり。此の點は只だ鈴木氏の談話に基づくより外はないのである。而して此の洞窟は今現に同氏の住居となつてゐる故貝塚の詳細なる發掘研究は之を他日に待たねばならない。

要するに此の洞窟は所謂石器時代に於て貝塚人の住居であり、其の後古墳時代に住居となりしものなることは洞內出土の遺物に依りて證明せらるゝ所なるが今復た現代人の住居となりしことも一奇と謂ふべきである。而して斯く此の洞窟が異る時代に於て人の住居に使用せられることは畢竟其の自然の位置、形狀等が四圍の環境と相俟つて人の住居に適合せる所あるが故であらねばならぬ。（第一圖洞窟の寫眞參照）

A　洞窟及び同發見遺物

(1)　遺跡の地形及び地質（第二圖）


A
B
C
10
D
9
11
8
7
12
E
6
5
4
2
3
1

遺跡所在の地點は陷沒の結果生じたと思はるゝ鹽釜灣の西岸に位し、第三紀砂岩層より構成せらるゝ所で、洞窟は一匹嶋を包擁する小さき入江に面し、水際より數米突乃至二十米突程離れて、高さ二十米突足らずの削立する斷崖面の下部に穹隆狀を爲して東南向きに開口し、其の間口十六米突、最大奧行五米突前後、同高さ六米突程あり、周壁ほゞ南北の方向に延長し、奧に向つて半穹隆狀を呈し、基底部は略ぼ平坦である。

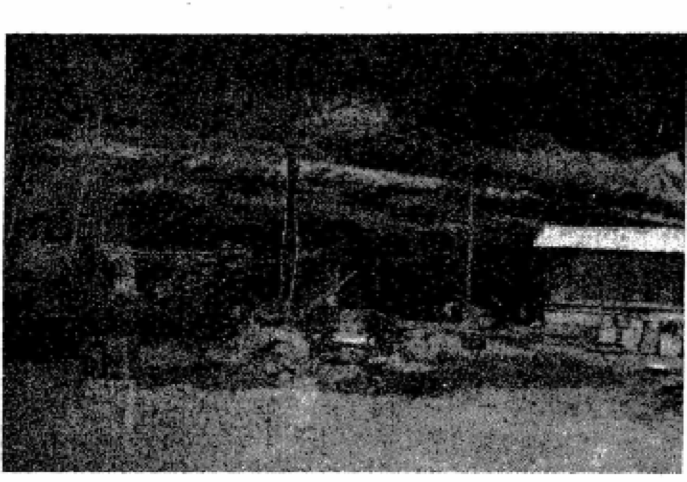


Fig. 1

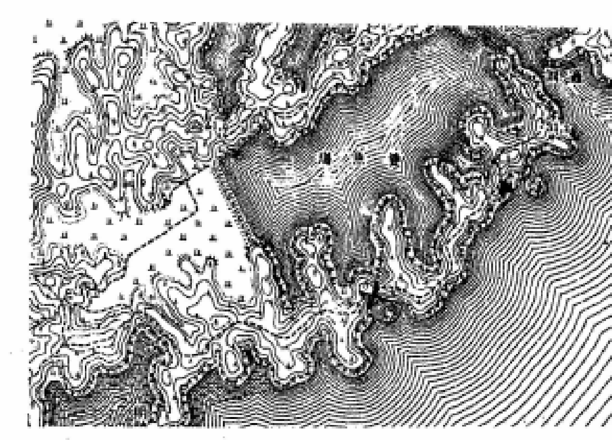


Fig. 2　五万分ノ一地形圖

此の洞窟の入口外面の直ぐ上部及び主として内壁の各所に水蝕を蒙つたと認むべき痕跡が殘存せること及び洞窟の形態から推して一の海蝕洞窟であると想定せられ通常の横穴の如く穿掘された形跡は毫も認められない。只だ殘念なことには其の基底が鈴木氏の發掘に因り既に攪亂されて居るのと床板が張りつめられて居るため海成層の有無を檢し得られなかつた。内壁は今幾分人工を加へられてゐるが猶よく原形の儘を保存してゐる。發掘者鈴木氏の言に依るも當時洞窟内の周壁には何等人工的穿掘の痕跡を認めなかつたと云ふ。洞窟の基底は現在の水準面より僅か上方にあるに過ぎない。

鈴木氏の發掘前には大體洞窟の入口上部まで Talus 式の土砂が水邊からのしかゝつて居り且此の土砂の上部に近い所に牡蠣殼が帶狀をなして多數散在してゐたさうである。勿論此の貝殼は話の樣子から推して第二次的のものに過ぎないことが分るが、此の土

砂及び貝殻が眞に「Talus 式のものか或は海嘯の結果打上げられたものであるか何れとも實地を見ないから判斷は出來ない。更に角洞窟の入口が土砂にて大部分掩蔽されてゐたのは事實である。此の洞窟を實際海蝕洞窟だとすれば、その結果は海水面の退却を考へねばならず、鹽釜灣陷沒後此の地點の隆起に一証を與ふることが出來ると思ふ。因に此の洞窟の對岸なる要害附近の土地にも多數の貝塚あり、此等貝塚散布の狀勢よりして觀るも此の附近土地の隆起を想像し得らるゝ如く思はれる。猶此の洞窟を北東に去る數丁の所、同じく一島を圍む入江の崖横中部に一の横穴あり、その開口七十糎、縱横二米突、高さ一米突の大きさを有し、其の內部を檢したるに遺物は一も見當らなかつた。思ふに是は陸前の海岸地方に多く散在する所謂横穴に過ぎないもので洞窟との關係は不明である。（第二圖×印は洞窟、△印は横穴の位置を示す）

(2)　出土人骨及び其の埋葬狀態

鈴木氏の談話に依れば發掘前には洞窟の內部は南方は半分程、北方は七八分目まで高く土砂に埋もれて居り、此の土砂の上方には所々圓礫が散布して居り、人骨は此の土砂の上方に近い部分より出たのであるが猶詳しく言へば窟內南側の隅より三體（北枕、體の屈伸等不明）、入口の中央部より一體、（方位不明）、中央より稍ゝ南寄りの奧壁に近き所より一體、（南枕伸葬）を出し、此の奧壁近き所より出た人骨の胸部の邊より所謂瑠璃色石製管玉一個、外に小さき鐵刀の破片、有紐多角狀石器一個、尺度型の骨製品三個を伴出し、猶ほ北側の隅に近き所より三體を出した。此の三體は孰れも南枕にて屈伸は不明なるが此の中の一體は稍ゝ完全に近き黃褐色の頭蓋骨（下顎不明）を有してゐた。

今右の完全に近き頭蓋骨に就きて觀察すれば矢狀縫合は未だ癒着の度著しくないが數個所に閉塞あり、右側冠狀縫合下部は消滅してゐる。齒牙は左第一、第二小臼齒殘存し、咬消度著しからず。他は齒槽のみにて、左第一大臼齒の前單根跡殘り、其の後方內側に直徑七粍、深さ六粍の閉鎖凹地あり、其れより後方の齒槽部は全部閉鎖してゐる。右第一小臼齒槽も閉鎖し、第二小臼齒槽は殘存し、それより後方の齒槽は全部閉鎖してゐる。上面觀はOvoides にして眉上弓稍ゝ弱く、最大頭長（Grösste Hirnschädellänge）一八〇、五粍、最大頭幅（Grösste Hirnschädelbreite）一三九、五粍、バジオンブレグマ高（Basion—Bregma—Höhe）一四四、五粍、にして Mesokephal, Hypsikephal, Akrokephal に屬す。

他に頭骨として出でたるは前頭骨の大破片一箇及び下顎七箇にして、此等の下顎骨は齒牙より見るに若年及び老年のものに屬し

其の中の或るものには右側枝に赤色の物質附着せるものあり（此の附着物は埋葬當時のものなるや或は其の以後の或る作用に依りて生じたるものなるや不明なり）又或るものには大臼齒上面に鱗齒孔の存せるものもある。鈴木氏の言に依れば此等の骨片は全部にて八個體分と云へど實際殘存の下顎骨數より計算すれば七個體分しかない。

大腿骨は Pilaster の形成左程著しからず、且つ其の色、帶黃色にして骨質緻密ならざるが如く認めらる。

是等人骨の軀幹、四肢骨等は相當によく保存せられて居れど鈴木氏の發掘後混合されて居るため各片は所屬不明の點が多い。

(3) 洞窟內發見遺物

洞窟內出土品中には自然遺物として二三片の獸骨がある。その一例はてん Martes melampus melampus(Temminck 1842)の頭蓋骨にして、洞內中央部の入口に近き覆土下八寸位の所より出た由である。此の頭骨の全長八十九粍で現在生存のものと何等差異が無い。其の外食肉類 Carnivora に屬する頭頂の破片が二箇發見されてゐる。

人工遺物には前記人骨の副葬品と思しきものに加へて猶ほ次の如き品あり、即ち前記 Carnivora 出土點附近より朝鮮土器の大破片赤色盤狀土器（第三圖1）、魚網用錘（第三圖3）數箇が發見され、又中央部より北寄りの奧壁に近い覆土から大型土器の底部（第三圖2）が發見され、其の他尚多くの土器破片及び石器（第三圖7）骨器（第三圖5、6、8、9、11）等が窟內より發見された。今此等に就いての說明を左に揭げる。

(1) 石器

a 有紐多角柱狀石器

長さ百粍、幅三十粍にして切斷面五角形を呈し中央部細く稍ゝつゞみ狀を呈し其の一端に緒を透し得る紐あり、懸垂裝飾品と云ふよりも寧ろ實用品に屬し恐らく砥石ならん乎、其の石質は硬質 Liparitic tuff にして色白し。

b 瑠璃色石製管玉

長さ十粍以內、直徑二粍程度の管玉で所謂瑠璃色なり。

(2) 土製品（土器以外）

a 魚網用錘

赤褐色粗製素燒にして五個以上出づ。長さ七十乃至八十粍、中央部直徑五十粍。直徑二十粍内外の孔にて貫通され管狀にして全型態現代のものに酷似す。（第三圖3）

b 球狀有孔土製品

直徑三十粍の褐色素燒製球にして直徑數粍の小孔に依り貫通さる。二個出づ、錘？。

(3) 骨角器

a 小刀柄

哺乳動物の長骨に鐵刀身を挿入せるもので其の骨柄は長さ四十粍、幅二十粍にして横斷面楕圓形也。刀身は扁平にして先端缺損す。一個出づ。（第三圖11）

b 銛　頭

細長き紡錘形の其の後半が斜めに截斷されたるが如き型態を有し長さ百三十八粍、最大直徑十二粍にして尾鉤に近く線紋彫刻あり。先端圓錐形にして索孔なく、尾鉤基部より細棒を挿入し得る孔穿たる。表面は長軸に平行して刻まれた密に並列せる細線の多數列ありて、此の銛の製造に際して金屬器使用の痕明なり。又尾鉤近く三條の絲を卷きし痕跡明に殘れり。

c 尺度型骨器

三個出づ卽ち

一、長さ五十粍、幅十二粍、厚さ五粍内外の破片二個よりなり、其の裏面は平坦、表面は輕く凸出し、横に一定間隔を置いて直線が刻まれ各間隔間には縦に線紋刻まる。且裏面の兩端は斜に截斷され製造に際して金屬器使用せりと認めらる。（第三圖9）

二、長さ百七二粍、幅十二粍、厚さ四粍其の表面凸にして滑澤。裏面は平坦なり。

三、長さ百九粍、幅十七粍、厚さ五粍、表面凸にして裏面平坦なり、裏面中央部に幅八粍乃至五粍の淺い溝が縦に走つてゐる。表面には短軸に平行して刻まれた密に並列せる細線の多數列あり。（第三圖8）

(4) 鐵　器

鐵刀破片數個

前記骨製刀柄(3の a)に挿入されしものの斷片ならん腐蝕甚しくして形態不明なるがその中に長三角形狀の尖端と思しきものあり(第三圖10)

(5)土器

(1)祝部式土器

鉢型、內口徑百三十粍、厚さ六粍、鼠色なり。

(2)朝鮮式土器

大甕の破片にして內壁には雲紋の壓痕あり。他に頸部破片ありて表面には波狀の沈刻帯あり。

(3)彌生式風土器

(1)盤狀土器　赤褐色、緻密質で轆轤作り無紋にして內口徑百四一粍、高さ六十粍、最大厚さ八粍、底直徑三十粍なり。他に一個これより厚手の類似土器底あり。(第四圖 d)

(2)大型甕口部破片　淡黃色、粗質、無紋にして內口徑百五十粍、厚さ十粍也(第五圖 b)

(3)內赤色塗盤狀土器　內口徑百六粍高さ五十粍、褐色粗製無紋にして內部に赤色塗料を施したるものと見ゆ、是は所謂縄紋式土器に酷似す。(第三圖 1)

(4)壺型土器　帯黃色、粗製軟質、無紋にして內口徑八八粍、胴部最大徑百二粍、中部厚さ五粍で縄紋式土器中に類品あり。(第六圖 e)

A　B　C　D　E

0 — 50 mm.

Fig. 4

(5)大型土器底　帯黃灰色、無紋にして胴部最大徑二百八十粍、底部直徑十粍、厚さ八粍也(第三圖 2)

(6)甕型土器　帯黑淡赤色、手作り、無紋にして燒方並通也、內口徑百二十五粍、高さ百三十七粍、底部直徑五十七粍、厚さ四粍也(第四圖 c)

(7)甕型土器　同色、手作り、外面に縱に刷毛紋あり、內口徑百六十二粍、高さ百九十五粍、底直徑四十粍、厚さ五粍也(第四

圖 a)

(8) 甕型土器　同色、手作り、縦に刷毛紋あり、内口徑百六十二粍、高さ百九十五粍、底直徑四十粍、厚さ五粍也(同圖 b)

(9) 甕型土器　同色、手作り、無紋にして内口徑百六十七粍、高さ百九十五粍、厚さ五粍なり(第三圖 4)

(10) 土器口部破片

△帯黄色、無紋、軟質にして内口徑百三十粍、厚さ五粍。前記(4)に類似の破片也(第五圖 a)

△淡赤褐色、無紋にして内口徑百四十粍、厚さ五粍なり(第五圖 c)

△淡色大型、厚さ七粍。内口徑二百粍(同圖 d)

△暗帯赤色、中型、厚さ五粍。内口徑百六十粍(同圖 e)

△帯黄灰色、硬質、厚さ九粍、外面に縦走刷毛紋あり。所謂彌生式土器破片と思はる。

△暗灰色、硬質にして内面に横走刷毛紋あり、厚さ九粍乃至六粍也。

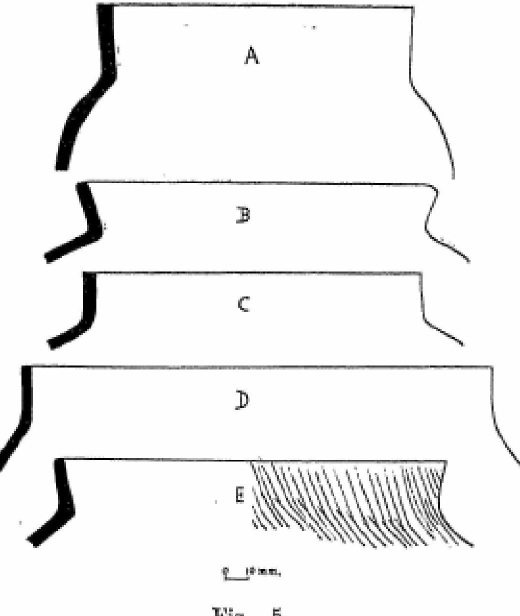


Fig. 5

右の中(6)(7)(8)は今鈴木氏が所有して居られる。此等三箇の中の或るものは窟内の隅より半ば貝層に埋もれて出でたと鈴木氏は云つて居る。(6)(7)(8)(9)は孰れも所謂縄紋式土器に類似してゐる。是に由て觀るときは前に記載した覆土中の土器は所謂彌生式と縄紋式とを混じてゐるものと思はれる。

B　貝層及び出土遺物

(1) 貝層の狀態

貝層は所謂古墳時代遺物を含む覆土の基底より下方に發達して居り試掘に依る層位は次の如くである。洞窟内にて入口に近き南側隅に於いて其の底砂岩まで約四十糎にして、上から牡蠣殼の層二十糎に次ぎ Paphia の層二十糎の厚さあり、後者の層には猶多くの牡蠣殼を混じてゐる。洞窟入口の中央部に於ては上から牡蠣殼、次に Paphia 其の次に牡蠣の層序を有し、此の所にて素燒製車(紡錘車)の半片を得た。

洞窟外に於て入口中央部と北側隅との間の地點の層序を見るに、上から日本鹿の齒、魚骨、炭の破片を混ぜる牡蠣殼の層約三十糎あり、次に牡蠣殼を混ぜる Paphia の層十五糎、又其の下に牡蠣殼の層二十五糎あり、此の牡蠣層の下部より無紋赤色土器の破片僅少を得た、牡蠣殼層の下部には猶十糎の灰層ありて、此れは漸次粘土層となり、約五十糎下に至れば極めて小なる貝殼破片を混ずる層に突き當り、間もなく基底砂岩となる。卽ち此の地點に於ける層の厚さは著しきものである。洞窟内入口の北側隅にて試掘せるに、基底砂岩まで四十五糎あり、其の層序は上から Paphia の層、其の下に薄い牡蠣殼の層ありて此れまで約十五糎あり其の下に薄い灰層あり、又其の下に十五糎の厚さの牡蠣殼の層がある。

Fig. 6 土器拓影

右洞窟入口北側隅の貝層に於ては中部からむさゝびの頭骨、日本鹿の角、齒、肢骨を出だし、直ぐ其の下方灰層に混じて黒色、赤色、薄手繩紋土器の破片を得、又其の下から少量の無紋赤色土器片を得た。洞窟入口の中央から入江の水際の方に向ひ數米突行つた處に井戸がある。鈴木氏の話に依れば此の井戸は地表下九尺にして水底に達し、地表より水底までの地層中には貝殼及黒色、

赤色の土器片が散布してゐるといふ點に由て觀れば現水準面より下方二米突位まで猶土器及び貝殼片が存在して居るものと思はれる。洞窟内のほゞ中央部に當る地點に於て試掘せるに此所は殆ど貝殼も、土器片も見出さず、隆起に依る堆積層なるか基底層なるかは不明なれど砂層より成る所を以て觀るときは此の貝塚の分布は先づ洞窟の入口か或はそれより少しく外方に寄つた所が其の中心の箇所であらうと推定される。

(2) 貝層中より發見せる自然遺物

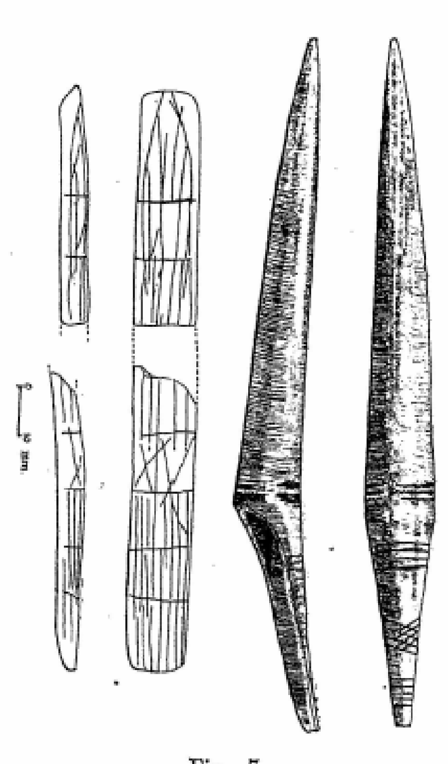


Fig. 7

a 哺乳動物の遺骸として出土せるは既記の如く、むさゝび Petaurista leucogenys subsp. Temmick. の頭蓋骨(下顎を缺く)にて基底長五三、七粍、頭骨最大幅四三粍に達するもの（むさゝびは今も東北地方に現存す）次は日本鹿 Cervus (Sika) nippon matumotoi Kishida. と認めらるゝ下顎骨破片及鹿角及肢骨の縱斷されたるもの（此の肢骨は骨髓を食用に供したと思はれる）である。鹿の角は下顎の附近より出でたるものなるが此の下顎に比し少しく小型である。玆に注意すべきは野猪の骨の見當らなかつた事である。

b 魚骨

既記の如く洞窟外、入口中央部と北側隅との間の地點より日本鹿の齒、炭の破片等と共に出土せり。これ等は魚頭の左右の Operculum. 及び左下顎の Articulare 等にして其の種名不明也。

C 貝類

貝層が Ostrea gigas Thun. 牡蠣及び Paphia phillipinarm (Adams et Reeve) あさりの二層よりなること既記の如くなるが此の二層中より他の遺物と共に少數發見せらるゝ貝殼左の如し。

	陸前荒濱海岸(現存)	鹽釜及松島灣内(現存)
Pecten laetus ges.	+	△
Polinices ampla phil.	△	○
Rapana thomasiana Crosse.	△	+
Batillaria multiformis Lks.	△	+
Cyclina chinensis Chem.	△	+
Mactra veneriformis Desh.	+	+
Mactra sachaliensis Schrend.	△	+
Mytilus grayanus Dkr.	+	+
Mya arenaria japonica.	+	△
Monodonta labio L.	△	△
Thais luteostoma Dil.	△	○
Turbo coronatus Gmelin.	△	○

+は現存△は余が採收せざるもの○は漁夫が現存すと云ふものを示す。

上表に依りて觀れば本貝層中の貝殼は鹽釜及松島灣内及荒濱近海に現存の貝類と殆ど同種であることが分る、但し松島灣に現存の Arca に屬する貝が一個も出なかつた事は松島灣諸島に於ける多くの貝塚と異る點である。猶ほ、はまぐり及しじみの見當らぬ事も注意に値する。

松本教授は青島貝塚出の貝に就いて現存種に比し殼が厚手であると云はれたけれど本貝層中の貝殼には然か認む可き形跡は無い。

(3) 貝層中より發見せる人工遺物

a. 紡錘車　洞窟入口の中央部に於ては上から牡蠣殼、次に Paphia 次に牡蠣の層序を有し、此の所にて素燒製紡錘車の半片を得たり直徑四十粍。中央部厚さ八粍。

b. 加工ある獸骨

長さ一四五粍、幅二十粍、厚さ八粍乃至四粍にして哺乳動物の長骨を縱斷せしもので短刀様のものなり。

c. 土　器　貝層中より出でた土器の破片は少數ではあるが是等を大別して三種に分類する事が出來る。第一種は何れも長さ數糎の小破片で數も十個足らず主として貝層下部より出づ、赤褐色で左程軟質ではなく、極めて粗製で、表面は粗鬆なり。厚さ九粍。雲母の小破片とまがふ透明なる石英粉を多量に混ぜるを其の特徴とす。無紋。

第二種は貝層中部の灰層に混じて出で、第一種より輕く又精巧である。模樣には次の如き種類あり。

第一は一個、小破片で、厚さ五粍、黑色、質緻密なれど堅硬ならず、透明石英粉を含有して光り、外面に繩紋を圍む弧と直線の沈刻模樣を有す。(第三圖D)

第二、は恐らく甕型土器に屬するものの底部と思ぼしき破片數個よりなり燒、厚さ、質共に前者と殆ど同じ、然し石英粉が見えない。繩紋一或は三條が青海波式に刻まれてゐる。底部直徑七糎。糸尻なく平坦である。(第三圖A)

第三、は甕型土器の口緣部破片で個數は十個足らず、燒、厚さ、質、色等第二種土器と同じなれど模樣が異る。即ち外面口部に六條の荒い繩紋が取り卷き其の下部に幅一糎半を有する平坦な一帶ありてその下部は斜走繩紋と縱走繩紋とに分れてゐる。口部の繩紋は荒き太いもので然も繩紋一本はそれ自身三本撚りの糸から成る事土器面に明かに其の痕跡を留めてゐる。且繩紋は直線でなく波形を有して居る爲め土器の口緣部自身も共れに應じて上方に出張つてゐる。(第六圖1) 猶ほこの土器中には質、色、模樣、が同じで色のみ赤色を呈してゐるものもある。(第三圖C)

第四別は甕形土器底部の大破片と思ぼしきもの一個よりなり、其の性狀は大體に於て前者に似れども幾分粗製で赤色である。外面には亂雜な斜走繩紋を有し模樣、質等の點から見て最も普通に見る土器である。厚さ五粍、底の直徑七糎。極めて原始的の糸尻を有す。

第三種は何れも小破片で數も少い。質は第二、第三種に同じで且石英粉を少量包含し、色は灰黑(厚さ五粍)帶赤灰(厚さ三粍)等で外面には交錯した刷毛目模樣を有し中には內面に粗なる刷毛目模樣を有するものもある。

此の土器は貝層上部に近き攪亂された部分より得た。(第六圖第二及び第三)

第四種は前述の三種に比し稍々精巧で聊か製作の趣を異して居る樣であるが貝層の中から出たものなることは事實である。余が發掘の際には同種のものを何處からも得られなかつたけれど思ふに鈴木氏は多分貝層の最上部から得たものであらう。口部破片二個よりなり、何れも前三種に比し重量大且緻密で、表面は滑である。其の中の一は暗褐色の口緣部破片で石英粉を少量混じ外面には各々三條からなる波狀帶が現存部に四條並列してゐる。(第三圖B) 內面には同樣の波狀帶が二條刻まれ口緣は鋸齒狀凹凸が付されてゐる。(第六圖第四)

其の二は前者と同質なれど赤褐色で波狀模樣以外猶ほ四條の凸出帶が附されて居り、土器の彎曲度大で此の部分の直徑七糎半位である。(第六圖第五)

以上を通覽するに第一種は厚手粗製の原始的土器を思はしめ、第二、第三、第四となるに隨ひ次第に加工進步の傾向を示

し即ち上層に赴くに從ひ次第に精巧となる樣であるが斯の如き傾向に關しては鈴木氏に依る層序不分明の採收及余の僅か數個所に於ける試掘の結果得たものなる故未だ確固たる斷定は許されない。寧ろ貝層の薄い事實より考察して此の貝層中の土器は一群として或る一の時代相を表すものと判定する方が妥當であらう。然して洞窟內遺物中の土器の一部にはその質、焼に於て貝層中の土器に類似せるものあれど多くは厚手にして焼の稍〻進歩せるもの及びろくろ痕を殘せるもの、單純な刷毛目紋或は無紋にして形態の彌生式的なるもの多し。

東北帝國大學の松本彥七郎教授の發掘に係る陸前國登米郡南方村青島出土の土器と本貝層發掘の土器とを比較するに前者には鉢形土器多く且一般に厚手、凹凸裝飾紋著しきを見れど、後者には斯る特徵を示せる事實なし。又同國桃生郡小野村川下り響貝塚及び同國名取郡增田町の西方の一貝塚採收の土器との比較に就いても同じなり。又大山柏公爵の發掘に係る陸前國宮城郡松島村通珂崎石器時代遺跡出の土器に比較するに詳細の點不明なれど所謂無花果底及び木葉紋を有する土器底を發見し得なかつた事異る。又陸前國宮城郡七ケ濱村大木貝塚出の土器を見るに一般に厚手にして凸線紋を有し且把手等に於ける浮彫乃至透浮彫の精巧なるもの多きを見る。

抑て松本彥七郎教授發掘の陸前國宮城郡宮戶島里濱貝塚出の土器に比較するに著しき羽狀繩紋を出だす事及假令少數なれども凸線紋、把手等を存する土器片並びに壺形及鉢形土器を出だす事は兩貝塚の主なる相違點なり。

終りに臨み本稿を草するに當り種々援助を與へられたる現滿洲教育專門學校教授大森志郎氏、東北帝國大學醫學部解剖學教室の山內清男氏及び遺跡地を發掘し本稿の資料を供與されたる同地居住の鈴木吉左衞門氏に深く感謝の意を表す。（一九三〇、一〇、一八）

大分縣西國東郡河内村森貝塚の研究

樋口清之

一、序説

本文は九州島の東北、國東(クニサキ)半島の西基部、大分縣西國東(クニサキ)郡河内村森字井手ノ口に所在する繩紋系土器、人骨、石器等を出した貝塚の記載及び、その附近所在の類似の貝塚との間に見られる關係及び其他の考察を記述するを以て目的としてゐる。

筆者が本遺蹟の存在を知つたのは昭和五年四月吉成安親氏によつてもたらされた本遺蹟出土の人骨と土器とを見る事が出來たのに始つて、遂に八月四日には滿洲旅行の歸途別府より四國に渡る前の三日を割いて發掘を行はしめるに至つたものであるが、しかし吉成氏はこれより早くすでに同年三月には本遺蹟を發見し、一小試掘をも試みて人骨等を得て居られたのであつて、この筆者の擧全く同氏の誘導によるものに外ならなかつた。八月四日早朝門司より西國東郡高田町に到着した筆者は、直ちに吉成氏及びその實兄安文氏に伴はれて同遺蹟を訪ねたのであつたが、當日は偶然にも彌生式土器包含層に於て甕棺及び石蓋式土壙等を發見してその調査に大部分を費やしたゝめ目的地森に於ては數時間にして日沒に會ひ、ために當日は充分な調査をする事が出來なかつたが、しかし、人夫二名と土地の青年團長の援助によつて、大體の貝層の分布や其他の性質を究める事が出來、かつ遺物も少からず採集する事を得たので、一先づ發掘を打ち切つて、翌日の發掘のプランや又關係方面の交渉等を議して吉成氏宅に引き上げたのであつた。五日は拂曉吉成安文、安親、安治氏及び高田町の有志三名、人夫一名、河内村青年團長及び土地の人七名の多勢を以て前日の計畫に基いて發掘を進めたのであるが、特にこの日には、親友森貞次郎君が、わざ〳〵福岡縣築上郡から自分等のため來援されて附近地圖の原圖を作製し、かつ發掘を援助されたのは感謝にたへない所であつた。發掘は大體に於て全體を三班に分ち、貝層露出面にＡＢＣの各担當區域を定め順次周密な注意を以て始めて、樋口は担任區域を定むることなく全般の連絡係の任についた、發掘

は種々困難な條件の所もあつたが、日沒に及んで大體の目的を達成しかつ周到な注意は相當多量の遺物を採集する事を得て、僅か一日の發掘としては全く豫想外の成績であつた。六日は一部は後片付けと、他は附近遺蹟の調査に分れ、樋口は先の吉成安之氏の東道によつて附近遺蹟の試掘や調査に費やした。すなはち以上三日間によつて自分等の調査は一先づ終了したのであつて、後は遺物の整理、分類、記帳等に當て、又附近の地理學的考察に送つて僅か數日にして高田町の吉成氏宅を辭したのであつた。

本調査は右にのべた如き地方篤志家の援助によつて始て完成し得たものであつて、この點、吉成安之、安親、安治氏を始め、國東鹿島茂久郎氏、青年團長安部宏氏高田町の有志田原勇、安藤政隆、香丸親光氏等各位に深甚なる謝意を初に當つて表すものであり、又本文執筆に當つては貝類の鑑別を始め絶へざる指導と援助を與へられた大山柏先生、甲野勇氏、宮坂光次氏並びに第二圖の原圖を作製された森貞次郎君の好意を銘記して感謝の意を表はすものである。

二、遺　跡

九州島はその東北方、瀬戸内海に面する部分、瀬戸内海に對して一の瘤狀突起を出して、周防灘(北)と別府灣(南)とを分つてゐる。所謂國東(クニサキ)半島と呼ばれるものがすなはちこれであつて、本文述べる所の豐後國西國東郡河内村森の遺蹟はこの國東半島の北基部、周防灘斜面に位して、高田町を流れる桂川の本流田染(タシブ)川西岸に存在するものであつて、高田町より約四キロ、高田町へは日豐線宇佐驛より宇佐參宮輕便鐵道によつて到達する事が出來る。高田町遺蹟間は縣道を走る乘合自働車によつて約十分、森部落南端に下車して直ちに到着する事が出來る。

本遺蹟の存在する國東半島は全く一の阿蘇火山系に屬する壯年期死火山塊であつて、その中央には兩子山を有して大部分は兩子山噴出岩である安山岩より成り、その表面には模型的整美な放射狀浸蝕谷を有し、その一部北側の物は海に溺れて數十米の海蝕段丘をすら作つてゐる。この兩子山塊西側山麓を洗ふ田染(タシブ)川と、その西方寄藻(ヨモ)川との間にはやはり兩子山塊と同性質を持つ應利山が聳立し、遺蹟はその東北麓、田染川の蛇曲がその山麓に當つて方向を東北に變へる邊りに位してゐる。應利山塊もやはりその大部分は安山岩を主體としてゐるが、その山麓に於ては、廣く東西に汎つて續く洪積海岸段丘を發達させ、本貝塚亦その海岸段丘の一部に、田染川が運んだ砂利粘土が集積して出來た一丘陵上、東側斜面に位して標高二十五乃至三十米內外を算へる。この貝塚の存在

する丘陵の北側は、山麓の洪積層露出帶に續く一帶の肥沃な高田平野であつて、地理學者によつて廣く豐前平野と呼ばれてゐる物の東端を成し、その表面は一面に田染、寄藻等諸川の運んだ沖積土壤であり、その下は、花崗岩及び集塊岩の平坦面上に出來た洪積層であつて、この平野は現在に於ける附近人文交通經濟の基底を成し水田の良好な發達を見てゐる。現在の高田平野の周防灘と接する海岸線は一帶に平滑單調であつて、極めて僅か弓狀彎曲を呈するに過ぎない。しかし、今假りに、本貝塚の存在する二十五米標高線の次、二十米標高線を參謀本部地圖上にたどる時には獨文摘要第二圖に示す如き、現在の海岸線に對し、一の彎入線を得るのであつて、自分は種々の理由より、この線を以て往時の海岸線であらうと想像し假りに之を假定舊海岸線と命名して森貝塚に對する海岸の關係を、現海岸ではなく、この假定舊海岸線に求めやうとするのである。然る時は、この假定舊海岸線は、高田平野南方、應利山麓の海岸段丘の連續とほゞ一致して、森貝塚の附近に於ては一度輕く南方に反轉して半島狀小端を作り、その中に田染川河口を抱いて北、都甲川河口と對し、茲に、田染都甲兩河の合流によつて出來た、おそらく半淡半鹹の部分も出來たであらうと想像される小灣入が出來、全體の彎入(自分は之を舊森灣と呼ぶ)に對し、第二次灣が形成されるのである。假りにこの假定が事實であつて、貝塚形成當時の海岸線がこの二十米標高線もしくはそれに近いとするならば、おそらく當時に於ける森貝塚は、外海の波濤等を直接受ける事少い安住の地であつたと云ふ事が出來る。又現時に於ける附近海流の方向は、東北より西西南に向ふ暖系の弱い物であつて、これは瀨戸內海地形の基礎的變化が現、往二時間に存しない限り、大なる變化を認める事が出來ないであらうと考へられる。

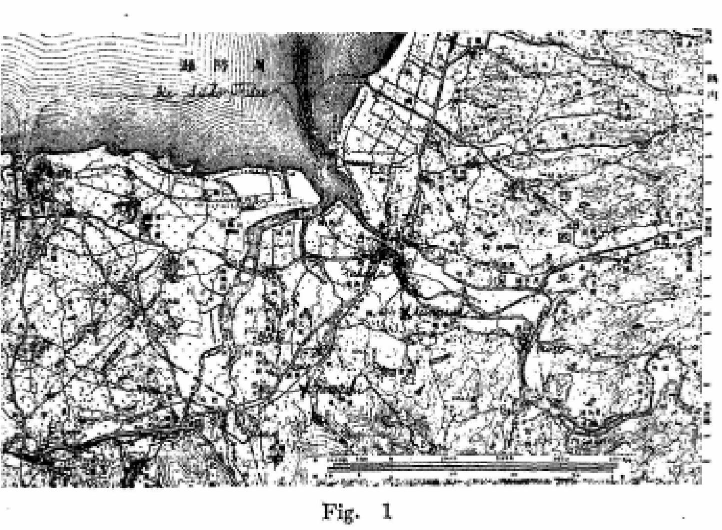


Fig.　1

なほ注意すべきは、現在に於ける附近(豐前の東部及び豐後)氣候環境は、他の九州各地とその雨量、温度、風速等に於て著しく

趣を異にして、全く九州としては特殊な性質を示して、他方、愛媛縣北部、山口縣南部、廣島縣、岡山縣、香川縣等の瀬戸内海沿岸地方の物とその性質を一にして地理學者によつて瀬戸内海沿岸區域の氣候區の中に入れられて居る。この事實は後の遺物の考察の上にも忘れられない暗示を與へるものと云ひ得まいか。

以上の如き地形、環境の中に在る遺蹟は、河内村字森小字井手之口（イデノクチ）と俗稱する部分に位して、現在貝殼の散布する地帶並びにかつて貝層の存した事の明かな地域を合せて僅かに三百平方米に過ぎない小地區であつて、現在の高田杵築間の縣道の西側に當り、その中心點はほゞ安部米藏氏宅地内に當つてゐる。貝層の上には現在縣道と安部氏宅と、その西方の小寺院とが營まれて居つて特に安部氏宅は貝層を崩壞させて床下げし、作つたものでその作業中には一米五十糎にも及ぶ貝層及びその下から多數の人骨や土器石器が出土し、現在でもその家屋の床下の一部には人骨が埋藏されてゐて

Fig. 2

不愉快である旨の話を聞かされたがこれによつて本貝塚は可成り舊狀を破壞されて居る事を知り得るのである。大體に於て其の擴がりは、安部氏宅を中心として、田染川に面した馬蹄形の物であつて、安部氏宅の西方寺院の附近に至つて西は終り、東は縣道に及んで止まつてゐる。土民の話によれば、この馬蹄形の田染川に面する一邊を除く他は、その地下に、馬蹄狀にこの貝層分布地域を圍むが如き岩石が存在して、その中に貝層は作られた物であると云ふ事であるが、不幸かゝる事實は自分等には確める事が出來

なかつた。又この附近に於て穿井した事の有無を正して、その時の地層の狀態を聞いたのに對し、次第に下に及ぶ程砂礫の粒を大にし、かつ所々に層の變り目が明瞭に示されて居つて、又多くの竹や竹の葉の黒く炭化したと覺しきものがその間に介在し、約三間程に至つて、やうやく平坦な岩石に相遇したとの事であつて、おそらくこの岩石とは花崗岩か集塊岩の基岩を指すものであり、植物質の物を介在した砂礫層は先述の如く目染川が運般した洪積土砂であらうと考へられる。この想像にして誤なければ、この土民の經驗は先述の地形、地質學的事實を裏書きするものに外ならない。現今河水氾濫の時にはその水の一部は本貝層最下部にも達するそうである。本遺跡は第二圖に示すAB線の間其層が切り取られて露出して居るために、其層の觀察は極めて便利であつて自分等の發掘もこの線より始められた。



Fig. 3

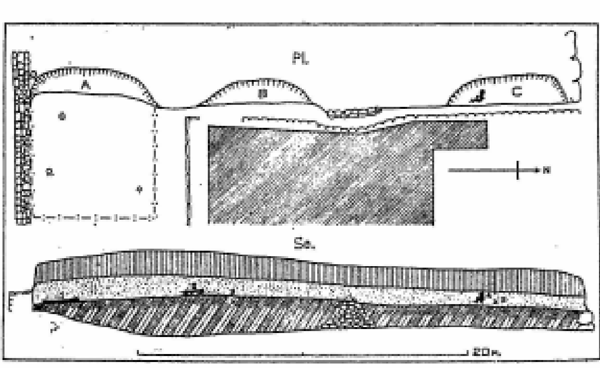


Fig. 4

最初に述べた如く發掘はA、B、C三班に分れて大體三つの中心點によつた方法を採り、先づ表土を取り除いて次第に上より下へ及んで行つた。たゞC點に於ては自分等の發掘に先立つ約四ケ月前一九三〇年三月に吉成安親、古澤勘左衞門二氏が小試掘を試みて人骨を得、發掘を中止された部分が暫復されて存在したゝめ、先づその部分を綿密に取り去つて處女部分に達するのを俟つて發掘を續けた。A地點に於ては、表土正しく一米、貝層又一米數糎を示し、貝層下は直ちに粘質の黒褐色粘土砂利混合土層であつて、この粘土砂利層はその上部五、六十糎の間は黒色が强いが次第に下に及んで全く紅黄色に變つて行く、遺物もこの初の數十糎の間に含有されて居つて、どちらかと云へば貝層との境界に近づく程その數を增してゐる。丁度この砂利粘土層の直上、貝

層の下より（第四圖1）自分等はおびたゞしい燒土と灰及び燒貝の層を發見した、その厚さは四十糎にも及ぶものであるが、その中には大形の土器破片や燒けた河原石等が不規則に、但し集つて存在して一種の焚火の趾である事を想像させるのに充分であつた。貝層の中からも土器破片や石屑は多數出土したが、これも下に及ぶ程その數を増す樣であつた。貝類は後掲の淡鹹多種出土したが、所々に同種の貝類ばかりが集つて層を成して居る所も存在し、又、カワニナやカノコガヒの如き淡水產の貝類が層の上半部に極めて多く集合して居つた事實は、鹹水產の物が下半部に比較的數も多く發育も良好な物が多く集合して居つた事實と併せて最も注意すべき事實である。表土は、多數の有機物を含有して黑灰色を呈し、Aの部分にてはその中に石器時代土器石器は勿論の事後世の遺物をも見る事は出來なかつた。B地點は表土約一米、貝層約九十糎に及んで、遺物の出土狀態並びに、貝層に於ける淡鹹貝類の存在狀態亦同樣であつた。たゞその南寄りの一部、貝層下部にやはりA地點に於けると同樣な焚火の趾が存在し、（第四圖2）この場合にはこの焚火の趾の燒貝層に續いて附近一帶の貝殼は壓搾されて閉くなり一見その斷面を見る時には特殊な中間層の如くにも見えるものであつて、これはA地點内にまで及んで消滅してゐる。なほB地點からはその貝層下の砂利粘土層中より一の打製石斧が、その長軸を東西にして完全に遺存して居つた。（第四圖3）C地點は前述の如く一部試掘を試みられた跡であつたが、その表土は八十二糎に及び貝層は七十五糎、次第にA、B點と順を追つて薄くなる傾向を有してゐる。この地點に於ては表土の中から三片の小祝部土器破片が出土し、貝層内に於ては淡水產貝類が著しくその上部に多く、又一部の鯨骨片も出土した。貝層下の砂利粘土層はA、B點と順を追つて次第に低くなる傾を有し、C點に於ても初め數十糎の間は土器石屑片を包含してゐる。こゝに注意すべきは、自分等の發掘に先立つて行はれた吉成、古澤二氏の試掘の時、あたかもこの點に於て偶然にも一體の屈葬せる人骨が存在した事であつて、二氏の發掘は全くの試掘に過ぎなかつたゝめ僅かに人骨を取り出し得る穴をこの斷層面に作り、表土等をそのまゝにして取り出されたゝめ人骨の發掘法としてはまことに遺憾な點が少くはなかつた。かつその人骨にしても吾人等の再掘の時にはその同一主體に屬するものと考へられる骨片を檢出した程であつて、從つて折角の人骨の出土に關しても完全な記述をなし得ないのを遺憾とする。人骨は發掘者の一人吉成氏によれば、大體に於て頭位を西北にし、著しく下肢を屈折して膝蓋骨は下顎骨と近接して存在し、骨盤、頭骨、顏面骨が粉碎せる外大體各骨片は整然として居り、かつその腰部に當つて一個の皮剝用黑曜石製石器が出土してゐる。埋沒の位置は吉成氏によれば、貝層下の砂利土層に觸れることなく、全く貝層の中間、やゝ下位に存在したそうで、この事實は特

に精密に正したが相異ないそうであつて、もしかくの如しとすれば多くの人骨出土の例とはいさゝか趣を異にしてゐる樣である。その表土の狀態や周圍の狀態に後世第二次的攪亂等の存在は全然認められなかつたそうであり、又、自分等が、殘されて居つた人骨出土位置直上の表土を檢した時にも後世の攪亂を認める事は出來なかつた。要するに頭位を西北にしたこの屈葬の一人骨は貝塚と切り離して考へる可き何等の證左をも有してゐない。以上ＡＢＣ三點の發掘は、この土地が、村有地に屬してあまり發掘地域を西方に延ばす事を許されず勢ひ南北に長い形狀を呈するに至つたが、それ等は大體に於て本貝塚の垂直的性質を示すには充分であつた。この三點を通觀して本斷面露出地に於ては表土はほゞ一米內外、貝層亦それに近く、貝層下の砂利粘土層はＡＢよりＣに至るに從つて低くなり、貝層亦薄くなる傾向を有し、遺物は貝層及びその下の砂利粘土層より出土してその一部には一種の焚火の趾をも有して居つた。なほこの斷面露出地は大體に於て全貝塚の南北位置でのほゞ中心を占めてゐると同時に、東西の位置の中心でもあるが、しかし、決してこれが最も貝層の厚い所でも、又遺物の豐富な所でもなく、むしろかゝる意味での中心は現在の露出地の二、三米東側安田氏宅の中心邊りに在るらしく、この地點からはより多數の土器石器や人骨が出土し、其層の厚さも二米に近く及んだそうである。これに反し本貝層の西端とも目される小寺院の附近に於ては貝層僅かに一尺內外に過ぎない事實より、大體本貝塚は西より、東、すなはち高位より低位に及んで貝層の厚さを增す傾を有する事を明かに認めるのである。その南北の性質は不幸第二圖に於ても見られる如く切り下げられて不明である。

三、遺　物

以上述べて來た森貝塚は、國東(クニサキ)半島の基部、周防灘斜面に面して、自分の云ふ「舊森灣」の內部、田染(タシブ)川河口に位し、海岸段丘上に運ばれた田染川の砂利層の上に堆積された貝層より成り、その擴がりは三百平方米の比較的狹い物であり、大部分破壞されて現在その一部が斷層を露出してゐる。貝層は一米下、大體一米內至二米に及ぶものであつたらしく、焚火の趾を有し、その下方よりは土器石器を出し、又その中より人骨を出してゐる。その各遺物については次の記述を見られ度い。

Ａ、自然遺物

一、人骨

人骨は先述の如く自分等の發掘點Cより出土した西北頭位の屈葬であつたが、保存は貝層の中に存在したゝめか極めて良好であつたが、頭骨、顔面骨は初から粉碎し、骨盤は發掘時に破壊し、其他肋骨、脊椎骨に於て數箇の不足骨を出し、其他に於ても小破損を被つてゐる。下顎骨等より成人骨である事を知り得る外、その年齡、性別を始め他の自然人類學的性質は自分等には不明であつてこの點についてはいづれ專門家の手を煩はし度いと思つてゐる。

二、哺乳類骨

哺乳類骨としては僅かに端平な一箇の徑八寸に及ぶ海棲哺乳類の脊椎骨の盃と、數個の鹿の四肢骨並びに下顎骨、上顎骨を出したに過ぎない。前者はおそらく鯨の一種であらうとは想像されるが何分骨片が一小部分であるためにその種名等不明である。

三、魚骨

所屬の不明な小骨片が可成り多數出土した、多くは貝殼の間に挾まつて破碎してその種名等は明かでないが、一箇鯛の下顎骨が出土してゐる。

四、貝殼

貝殼より知り得る貝の種類は大體次の如くである。

(1) かわしんじゆがひ　Margaritana margaritifera
(2) かわにな　Thiara (Semisulcospira) libertina
(3) かのこがひ　Theodoxus (Clithon) sowerbyanus
(4) いぼうみにな　Potamides pennalis
(5) かわあい　Tympanotomus cingulatus
(6) つめたがひ　Polinices (Neverita) didyma
(7) あかにし　Rapana thomasiana
(8) ながにし　Fusinus perplexus
(9) れいし　Thais(Mancinella) bronni

(10) すがい　Turbo (Lunella) coronatus coreensis
(11) はまぐり　Meretrix meretrix
(12) おほのがひ　Mya arenaria japonica
(13) さるぼう　Arca subcrenata
(14) はいがひ　Anadara granosa
(15) しほふき　Mactra veneriformis
(16) おきしじみ　Cyclina sinensis
(17) あさり　Paphia(Ruditapes)philippinarum
(18) かき　Osterea(Crassostrea)sigas

(以上大山柏先生による)

右の貝類はその中に於ても例へばかわになの如く幾多の小變種が存在してこれを一々列擧する時にはこのヴァラエティはなほ一層その數を增すであらうし、又一種かわあいに良く類似した不明種も存在して、必ずしもこの十八種が本貝塚貝類のすべてゞはない事明かであるが、しかしほゞその大様は示して居るものと見る可きである。自分の知見に觸れた範圍内では本貝塚に於ては右の十八種のうち、はまぐり及び、かのこがひ、かわになが最も多く、概して淡水產は貝層の表面に近く存在し、又、つめたがひ、あかにし、蜷が、はまぐり、あさり、おほのがひ等の如き淺海の貝類に比し著しく少かつた事實は共に附近海灣の性質を知る上に必要な一事實を呈示するものと云ふ可きである。大體に於て淡水產は鹹水產に比してその約三分ノ一の量を占めて居つて少量であつた。なほ卷貝の中に於て、例へばねこがひ、かわになの如き小形の物はいづれも皆明かにその螺頂を取り去られて居る。これは自然に浸蝕せられて螺頂を失ふものもあるが一種の食べ方を知り得る資料ともなつてゐる。試みに現在高田町附近の人々の間に於けるこの種の小型卷貝の食べ方を手傳の人夫に正した所、彼等は先づこれを殼のまゝ熱湯の中に入れて良く煮沸させ、然る後に、その殼頂を小刀にて指の間で取り去つて、口の方から中の肉を吸ひ出す方法を一般に用ひて居つて、之は釘や竹串を以て口の方から肉を引き出す方法よりもはるかに容易である旨を答へた。一種の土俗的方法として本遺蹟の殼頂なき卷貝の考察の上に參考となるものである。

あかにし等のや丶大形の物にはこの殼頂を取り去る方法ではなく、その腹部に孔を開ける方法が行はれてゐる。

B、人工遺物

一、石器

第五圖に示す如き一箇の打製石斧と、皮剝とが石器として擧げ得る主要な物である。勿論本遺蹟からは、圓形や楕圓形の河原石が少からず貝層や貝層下の粘土砂利層の上部に存して居つて、あるひは何かハムマー等として用ひられたかも知れないが、これは加工等の痕跡がなく明かな石器とは斷定し得ない。打製石斧は前述の如くB地點南寄りの貝層下の砂利粘土層に横位に存在したのであつたが、その形式端平な撥形を呈し、長さ十九糎餘、刃幅八・五糎程を有して居る灰黒色安山岩質の物である。風化が激しく明瞭ではないが、ほゞ刃に沿つては兩面の小打裂が加へられて居りこの加工は次第に中半以上に及んで少くなり、上半部はその兩側に刃としての加工のない斷面端平な楕圓を呈して掌握等に便に出來てゐる。全體を通じての反轉等は認められない。皮剝は先述の如くC地點より人骨に伴つたと思はれる様な人骨と近接した位置から出土した物であつて、黒曜石製。形式は半圓形と云ふか、中

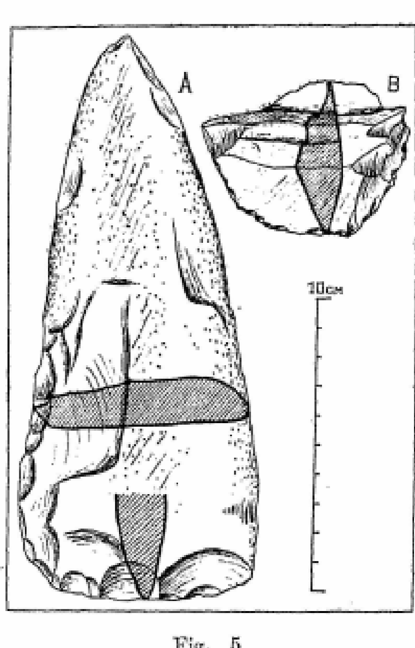


Fig. 5

谷治宇治郎氏の所謂 wooman's knife 形に類して居つて、刃部と目される部分には兩面よりの精良な小加工を有し、背部は刃等の特殊加工を有しないものである。大さはその長軸に於て約八糎。先の打石斧の原料は大體に於て安山岩の一種と目されるが、この安山岩は國東半島の基底を成す主要岩石であり、現在附近の岩石もこの安山岩に屬して居る物が少くはないのでその原料は容易に附近に求められると考へられるが、この皮剝の黒曜石は、伊豆、北海道等の物といさゝか性質を異にして、灰白色を帶び、結晶虫の並列等の事實は肉眼にては認め難く、全體亞半透明に屬してその斷口も伊豆、北海道の物の如く精良ではない。この種の黒曜石の石器としての分布は九州、特にその北、東部分に多く見られる所であるが、この原料の産地は、本遺蹟の東々北約三十粁、國東

半島の東北の離島姫島ではないかと自分は考へる。姫島は良く知られて居る如く阿蘇火山系に屬する島嶼であつて、その中に顯著な黒曜石の露出を有して居る。この本遺蹟に最も近く、且つ附近に原產地が無いのであれば、同一の性質の黒曜石を出す姫島と本遺蹟との關係は不可分の物として考へられる可きであり、又それは單に本遺蹟のみの問題としてゞはなく、廣く附近石器時代文化研究上忘れる事の出來ない性質を有してゐる問題ではなからうか。以上の外本遺蹟からは未だ磨製石器の發見は知り得ない。

二、骨　器

長さ五センチ内外、直徑五ミリ内外の針狀骨器の破片二個を發見した、共にその先端の一部であつて、全形を知り得ないのみならず、その骨も如何なる種類に屬する動物の物であるかも不明である。しかし要するに骨器の存在はこれによつて本遺蹟には明かである。

三、貝　輪

自分等の發掘C點より貝殼の間に混じて三箇出土した。共に破損してはゐるが、原形はおそらく直徑十センチ内外に及ぶやゝ圓に近い楕圓形の物であつて、貝はさゝぼうかあかがいの種類であるらしいが磨きが加つて居つて特色が明かに出來ない。本遺蹟にも貝輪の存在はこれによつて明かにされる。

四、土　器

本遺蹟出土の土器破片はその數極めて多く自分等の發掘に於ても石油箱二箇に餘る程であつて、すべては繩紋系統の物に屬し、未だ明確な彌生式系統の物は一片も出土してゐない。

(1)製作——成形法には卷上げと輪積の二法が行はれて居つて、卷上げの方は比較的小形で紋樣等の良く發達した、かつ黑色を呈するもの(後說A類土器)に多く、輪積の方は、比較的大形で硬化した曲線紋が斷片的に散在する褐色又は紅色を呈するもの（後說B類土器）に多く、そのいづれの場合にも接合部は綿密に密着せられてゐる。多くの場合特にその卷上げによるものゝ中には普通の石英、硅岩の小粒子を含有する粘土層の主體の表面に、精良な粘土の別層を極く薄く貼着させて居る事實が知り得る。又、特に大形で、紅褐色を呈するものゝ中にはその裏面(稀には表面にも)篦目かと疑はしめる樣な粗い刷毛目が横に亂雜に存在してゐる。厚さは厚薄種々であるが、薄手の物は黑色小形紋樣の良好に發達した物に多く、厚手の物は紅褐色大形硬化散在曲線紋の物に多かつ

た傾向は否まれない。土質は一般の粘土の中に多數の小石英粒子や硅砂粒子を含有して居つて、その粒子は黒色の物に大きくかつ少く、紅褐色の物に小さくかつ多かつた傾向を持つてゐる。しかしいづれも粘土は良く精練されてゐる。燒成は燒上り堅密な黒色を帶びるものと、粗しような紅褐色又は、黄灰色を帶びるものとが存在し、前者は曲線紋繩紋の良く發達した土器に主として見られ後者は硬化散在曲線紋の土器や擬繩紋の土器に主として見られる。研磨法は土器の表裏に加へられて居るが、これも黒色の物に良く發達し、そうでない物には存在はするが、精良ではない。研磨は、多分幅五分位の狹い板を以て磨いたであらう事はその條跡によつて知られる所である。以上製作に於ては、成形、土質、燒成各性質の相異や、刷毛目、研磨の存在等多様ではあつたが、しかし、以上の記述によつて大體その相異つたグルッペが、各々顯著な性質の別を有して存在する事が明かにされるのであつて、これは次の各項の事實と相俟つて重要な一事實を自分等の研究に呈示するものである。

(2)型態——完全型態を示すに足る資料は一箇も出土しなかつた。しかし大體の破片を綜合して、その大部分が鉢形もしくは壺形の物が主であつたであらう事は否定出來ない所である。壺形の物は著しく肩の張る物や、腹部で急に屈折して著しく腹部の張り出した感を與へる物等が存在してゐる。部分型態としては特色の顯著な底部と口縁部とを擧げる事が出來る。底部は第六圖に示す如く徑約七——一三糎の物であつて、その中には平底が上げ底に對して約一對二の割合で存在してゐる。平底にも、全く底部が、兩側の中に入り込んでゐるのと、底の部分が兩側より喰み出して

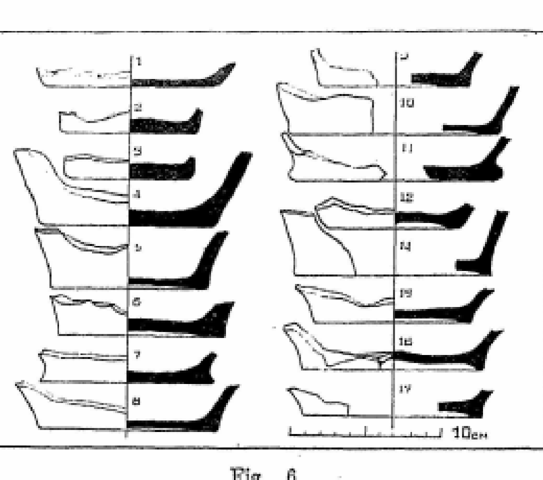


Fig. 6

圓板を底に附着させたが如き感の物とが存在してゐる。上げ底の底は約四ミリ位上昇する物を限度として皆極く僅かな上昇に過ぎない。その裏面には一種の網代紋を有して居つた事がかすかに知り得る物も存在してゐる。口縁部の型態は、第七圖に示す如く極めて多種多様であつて、繩紋式土器の特色である口縁把手もしくはその退化した物と認められる樣な三角隆起が、良く發達してゐる物と、著しく形式化し、退化した物の存在や、又、全く隆起を有せずに、平滑になつた物、又、その上緣に鋸齒狀の凹凸を有し

それが口縁をめぐつたであらうと考へられる物、口縁部が帯狀に厚さの厚い部分を有してゐるもの、內部に屈折するもの、外方に反轉するもの等々幾多のヴアラエテイが認められる。特に注意すべきは、上縁に鋸齒狀の切れ込みを有する物や、口縁に沿つて連點紋もしくは横列平行直線紋を有する一類(２５—１３　１５　１６　２１　２４—２７等)がいづれも先の製作の條に於てのべた紅褐色硬化散在曲線紋の土器のみであり、又、３の如く良好な山形隆起と、これに沿ふ發達した曲線紋、繩紋を有する一類が、黑色の堅密の一類の土器である事である。又、１４　１７　１８　１９　２０　２２等の切れ込みのない、しかし不發達な山型紋もこの前者の一類に屬し、２８　２９等の口縁變化はなくとも、繩紋の良好に發達した物は後者の製作に屬してゐる。口縁の紋様は、いづれも土器外部で終つて內面にまで及ぶものは存しない。以上の如き土器型態はその資料が皆破片であるために完全な型態資料を示す事は出來なかつたが、しかし大體に於て、壺鉢の類が多數存在し、その口縁型態の如きも、三角隆起の良く發達したもの、退化したもの、なくなつたものが存し、それ等のグルッペは亦、先の製作上より分けられたグルッペと相一致する部分も少くない事を示して居つた。



Fig. 7

(3) 紋様——以上土器について自分は製作、型態を敍述して來た。而して今やその特色の最も顯著にしてかつ重要なる紋様の記載に

入らんとするのであるが、その前に一應極く簡單に以上の記述を收約する必要を認める。すなはち

製作、型態

A類——卷上げ法、器形小、薄手、堅密、黒色、砂粒大にして少、研磨精良、刷毛目なし、口縁隆起發達上縁切れ込みなし。

B類——輪積法、器形大、Aよりも厚手、粗しよう、紅褐色又は黄灰色、砂粒小にして多、研磨不良、刷毛目あり、口縁隆起退化形、口縁切れ込みあり、

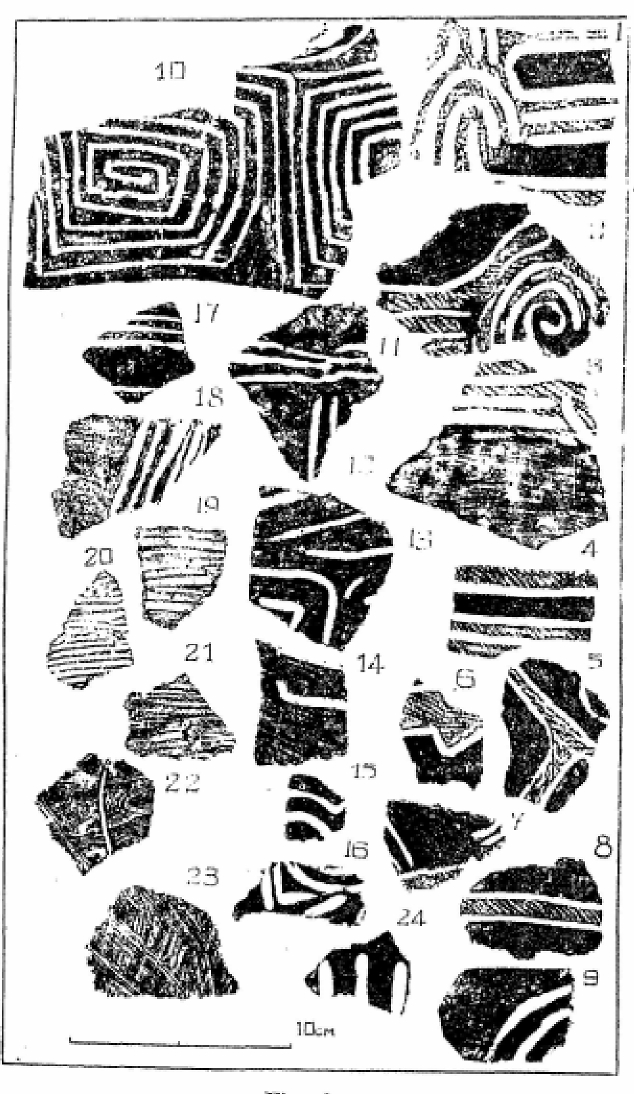


Fig. 8

右の如きA、B二類性質の相異は本貝塚土器の中に於て否定すべからざる事實であつて、この相異はたゞに製作型態の上に於てのみならず、又今のべんとする紋様中にもこの二種間に存する相異を明かに認め得るのであつて、自分は便宜上、このA類の性質を有する土器の紋様とB類の性質を有する土器の紋様とを、當初より分けて記載し、最後に至つて之を綜合比較せんと欲するのである。

A類——A類として擧げ得るものは第八圖1—9及び第九圖2 6 7 12—17の十九箇であるが、其他小部分の紋様を有するものや類似の紋様を有する物は一切省略した。第九圖の物は全部口縁部紋様であり、第八圖の物は肩部腹部の紋様に屬してゐる。その型

能製作より特にA類として撰んだ此等の紋様は、拓本の示す如く、大部分は縄紋が良く發達してゐる事を先づ第一の特色とする。次に流麗な曲線を發達させてゐる物の少くないのを以て特色の第二とする。又その縄紋の間には全數の半分に近い數の赤色顔料(Fe_2O_3)を塗布して居る物の存するのを第三の特色とする。而して第一の特色たる縄紋は、多くが、線と線との間に充塡文として用ひられ、この縄紋帶を生かすためにその縄紋帶間、もしくはその隣接區域は縄紋等の紋様を消滅させて効果を擧げてゐる。この縄紋帶はそれを挾む線の性質によつて、あるひは直線となり、又は曲線となつてゐるが、口縁部の物は多くは口縁に沿つて走つて直線をなすこと多く、腹部の物は多くは複雜な曲線を構成してゐる。その縄紋に用ひられてゐる織物は、大小精粗硬軟各一様ではなく多くの異つた變種を有してゐる。第十圖集成圖に示す如くその粒子の極めて大にかつ大さの不統一な、従つて列の幅の不揃ひな物や、粒子の細小な整然たる物や、又、粒子の形状が丸い物と細長い物等の差を有し、又、粘土型に之等を撮つて檢するに、その捻絲を構成する纖細に硬軟大小の二種が存する事を明かにし得る。(12のみは後述の如く擬縄紋)次に線であ

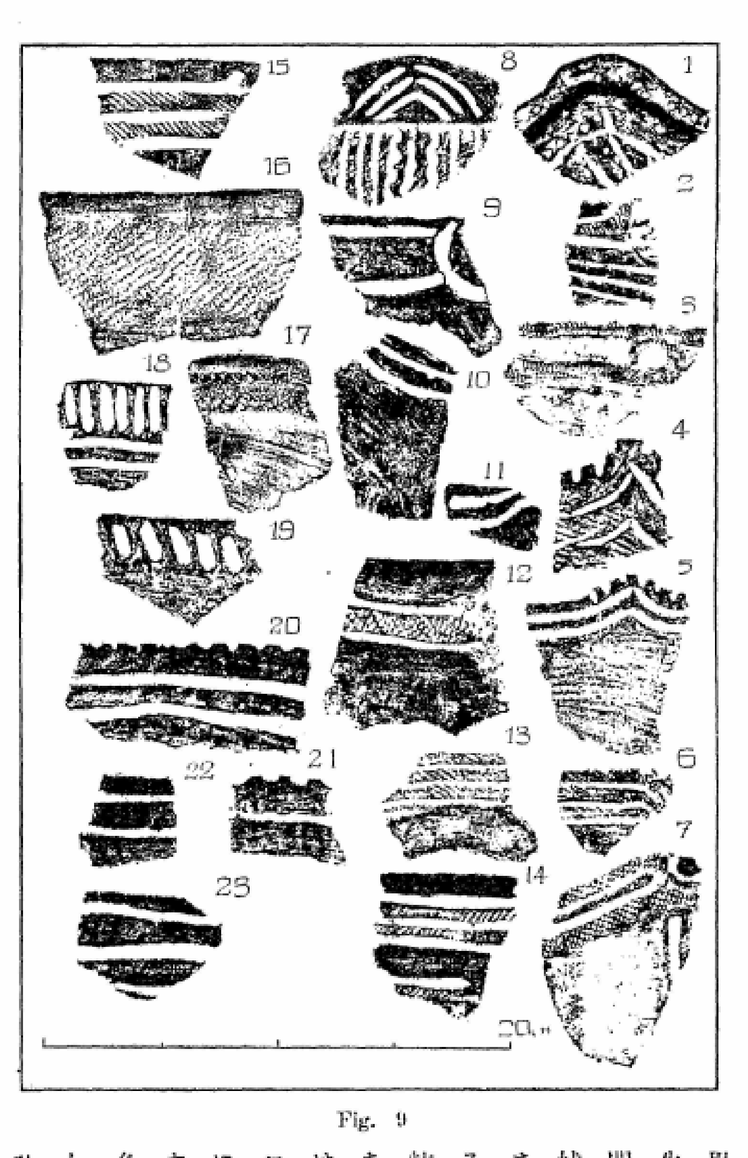


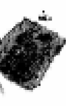
Fig. 9

るが、線は多くの場合その間に縄紋帯を挾み、口縁に沿ふ物は口縁隆起等の無い部分に於ては直線を、口縁隆起の部分に於てはそれに沿つて曲線を成し、肩部又は腹部に於ては曲線紋最も良く發達して、あるひは渦紋を成し、又はそれに近い複雑な構圖を作つて流れてゐる。第八圖5 6の如き例はあまりに小破片であつてそれ等が如何様な構圖の一部であるかは明確に出來ないがしかし、この種の線の存在も亦渦紋等と共に本A類の持つ一様式として注意を拂ふ可きものである。赤色顏料はFe_2O_3に屬して、鮮明な原色を保存し、多くは縄紋の間に遺存してゐる。本A類に限つてこれが存する事は注意を拂ふ可き事實である。

Fig. 10

B類——B類の代表的な物は第八圖10—24及び第九圖1 4 5 8—11 18—23等であるが、この一類の紋樣の特色として擧げる可き特色の第一は硬化散在曲線の存在である。第二は口縁部の切れ込み紋と横列平行直線紋の存在である。第三は口縁又は腹部に於ける平行直線の存在であり、第四は内面に於ける刷毛目紋の存在である。第一の特色である硬化散在曲線紋と稱するのは、第八圖13—16の如き連續せざる角張れるしかし一種の曲線より轉化したと考へられる紋樣を指し、之は主として肩部、腹部に良好な發達を見てゐる。相互は連絡することなく統制を有することなきが如く見られて紋樣としては全く効果少きむしろ退化的の物に屬してゐる。次に口縁部の切れ込みは、先に形態の條に於てのべた如く土器口邊を周つて存する物多く、又特に山形隆起の上に限つて存在する物もあつて第九圖4 5 20 21の如き例である。これは一種の篦樣の物を以て口縁に切り附けた物ではあるが、その切れ目の深さや間隔は土器相互に可成りの相異を有してゐる。又口縁部に横列する縦の平行線は第九圖18 19の如き物であるが、これは、その製作心理に於ては口縁切れ込み等と連絡あるものであらうが、相當太い線より成つて居つて、むしろ連點紋の感が強い。それもその大さ間隔等土器相互に

よつて不統一である。平行直線紋は二本乃至數本並び、又數本づゝが集つて一定の間隔を距てゝ並ぶものが存する。これはたゞに口緣部附近のみならず、又肩部胴部にも存在するが、口緣の物は概して線が太く出來てゐる。內面に於ける刷毛目は第八圖19—23に示す如くその條痕大小强弱不同一であり、美しく横に平行するものと、亂雜に走るものとが存在してゐる。この刷毛目が果して紋樣であるや否やは勿論考慮の餘地の充分に存するところであつて、むしろその動機ははるかに他の物よりも實用的ではあるが、假りに本文に於ては紋樣の條に含めて記述するのである。繩紋は假りに存しても精小な物であつて稀である。以上の如き諸特色を有する本類の土器各々については別に取り立てゝ記述を要しないのであるが、たゞ第八圖10に示すものは特殊な一例として注意すべきものである。これは以上の如き記述のいづれに於ても觸れなかつた物であるが、その製作的性質は、明かにB類に屬するものゝ樣ではあるが、なほA類の性質を可成り有してゐる、例へば、薄手であり、堅緻であり、かつ研磨の良く發達してゐる點等はそれであるが、しかしそれも完全に之をA類に含め得る程顯著ではなくやはり、Aの性質を充分に有するB類土器と見做すを適當とするものである。その紋樣的特色は八圖10の拓本に示す如く肩部より、腹部へかけての大形の雷紋式連續打線紋であつて、おそらく全面を周つて完全な時には三單位横列したであらうと想像されるものである。各一箇の雷紋は細い線を以て良く內部にまで小さく屈折して大體六重を成してゐる。この雷紋はその例僅かにこれ一に過ぎず、從つてA類には同樣の物が存しないのか否か、又はこれがB類の特色を示してゐる紋樣であるのか否か明確には定め難いが、將來同樣の例をより多くB類の中に發見してB類の特色ある紋樣の一を成すのではないかとの想像は禁じ得ない。又これと同樣第九圖に示すものもB類土器としては特色あるものであつて、その燒成はB類としてはより粗しようであり、色も赤色が勝つて居つて、吸水性は少く堅牢である。これはA類に比しては勿論Bにはるかに近い物ではあるが、B類としては可成り特殊な物であつて、むしろ次に自分が、C類として特に抽出して述べんとしてゐる一形式の群に製作等の性質は著しく類似して居つて、B、Cいづれに屬せしむるか實は迷ふのであるが、假りに今B類に含めて記述するのであつて、これも僅かに類例が一であつて、これを以てABCに異る一種類として特に分類する事は危險であるため敢へてその最も近い性質の物の中に含める次第である。その紋樣の特色とする所は口緣部に稍く退化した半圓狀の突起を作り、その口唇帶を一段厚くしてその上に、三本の平行線が山形に向ひ合つて作る紋樣を有し、それに續く頸部には縱の平行直線と、その間に挾まつて口緣突起の直下に當つて一種の波線を縱に三條平行させて居る。この樣な、彌生式土器にでも見る樣な口緣部の紋樣や、



關東繩紋式土器の一種に見る樣なこの縱の平行波線は他に本遺蹟に於ては類を見ないところであつて、本遺蹟としては特殊な物に屬してゐる。

右の如きA類、並びにB類は、全くその製作や型態上の區別による二種の土器表面の紋樣であつて、それ等は幸にも同時に紋樣上の差異もこのA類、B類の間には存する事を知り得たのであつて、すなはち、A類、B類は相互に、製作、型態及び紋樣の三點に於て明かに相異してゐるのであつた。しかるに今自分が述べんと欲する一類の土器は、以上のAB二類のうち、その製作型態上の性質に於てはB類の一種と見做さる可きものではあるが、しかも紋樣上の性質はB類とも、同時にA類ともその趣を全く異にしたものであつて、自分は之を稱して假りにC類と呼ばんと欲するものである。自分が今假りにC類として摘出した一類の土器は、先述の如くB類とはその製作形態に於ては一般的な意味に於ては異るものではないが、しかし傾向としては次の如き性質をB類のティピカルな物に對してより強く有してゐる。すなはち、器形大にしてその型態に於て第七圖口緣聚成の44に示すが如く頸部のくびれた壺形の物が存し、より厚手であり、堅らうであつて紅黄色もしくは黄灰色を呈し、砂粒大にして多く、口緣隆起や切れ込みを見ない。以上の如き特色はB類の物の中にも充分見出し得るところであり、このC類の製作型態上の性質は全くのより此等を強く有すると云ふ傾向に過ぎないものであつて、敢へて先の製作型態の條に於てC類を獨立に取り出さなかつた所以である。而して本紋樣の條に於て特にC類を抽出する基礎である紋樣的特色については次の如き點が數へられる。第一、擬繩紋を有す、第二、實體繩紋がない、第三、幾何學的紋樣が發達してゐる、第四、櫛目紋樣が發達してゐる。第五、無紋の物が多い、及び全體を通じて繩紋式土器の特性は少くなり反對に彌生式土器の臭氣が著しく加はつてゐる。元來このC類土器は本遺蹟に於ては最も稀な土器であつて、しかも土器自身が紋樣の比較的少いのを以て特色の一としてゐる關係上完全な性質は本遺蹟の例のみを以ては示す事が困難であつて、これは次の第四、第五章の記述によつてこの不足を補はれ度いと思ふ。而して本遺蹟出土のC類土器の有する擬繩紋は第九圖3及び第十圖12の如きものであつて、これは一種の櫛樣の物でつゝいて作られてゐる。第九圖3の例は口緣部に當り、繩紋式土器に見る一種の口緣把手の退化紋樣をその一部に止めて居つて、擬繩紋はその極くわずかな隆起の上に輕く附けられて居る。實體繩紋は自分は本遺蹟もしくはその附近に於ては一片も見なかつた、しかし、本C類と同一系統に屬する他地方他遺蹟の多數の例を檢した所によれば極めて稀にやはり實體繩紋が存在する事實を知つたので本遺蹟に存在はしなかつたが、未だ知見に觸れざる所に

存在するかも知れないことは考慮の中に入れる可きであらう。幾何學的紋樣は第八圖18の如き平行直線（特にB類よりもその線の細いのを特色とする。）や、斜交線（斜格子目紋）や圓紋（竹管紋）等が多い。櫛目紋には擬繩紋の粗い樣な物や、半圓形に彎曲したもの等も存在する。無紋の物は極めて多く、B類に見た如き口緣切れ込みや、口緣の橫列平行線等は見られない。

以上の記述が土器紋樣についてゞあつた、それ等は紋樣の立場からＡＢＣの三類に明かに分類され得るものであつて、そのうちＡ、Ｂは製作型態上の分類と相一致するものであり、Ｃ類亦その點に於てはＢ類の一般の物と大體に於ては似て居ても傾向的相異は示して居つた。又中にＢ類の如きは注意すべき雷紋樣の紋樣を有するもので、又、第九圖８に示す物の如き特殊な物も存在して注意をひいた。

以上によつて森貝塚遺物のうち最も重要な部分を占める土器の記載を不完全ながら終了して、最後に自分は之等を綜合して本項を閉ぢる必要に至つた。自分は前來繰り返へし〳〵して記述して來た土器の各性質を綜合して次の三つのグルッペに分つ事の可能であるのを認める。

Ａ類土器

主として卷上げ法による。器形小。薄手。質堅緻。色黑色。挾有砂粒は大にして少。表裏の研磨は精良。刷毛目を見ず。口緣把手良く發達。口緣切れ込みなし。繩紋良く發達す。曲線紋良く發達す。赤色顏料 Fe_2O_3 を有するもの多し。

Ｂ類土器

主として輪積法による。器形大。やゝ厚手。質粗しよう。色紅褐色又は黃灰色。挾有砂粒は小にして多。研磨は不良。裏面に特に多くの刷毛目あり。口緣把手退化式。口緣切れ込みあり。繩紋少し。硬化散在曲線紋あり。口緣部に上緣の切れ込みと橫列平行直線紋の存するものあり。平行直線發達す。

Ｃ類土器

Ｂ類に製作型態似る。器形特に大。くびれた頸部の壺形土器あり。Ｂよりも厚手。堅牢。紅黃又は黃灰色を呈す。挾有砂粒大にして多し。口緣變化なし。擬繩紋を有す。實體繩紋なし。幾何學紋發達す。櫛目紋發達す。無紋の物多し。

右の如き三つの土器の貝層等での層位的關係等は一切不明であると稱するより外なき事は初に述べた通りである。又その土器破片の出土量は自分等の發掘の範圍に於ては、A類とB類ほゞ同量であつて、C類最も少く、約45:45:10の比例を示して居つた。

四、舊森灣附近の他の貝塚

先に自分が第二章の初に於て提稱した舊森灣に沿ふ附近には、森貝塚以外に新發見の貝塚（日本石器時代地名表第五版及その追補一にも記載なく、假りに過去にその遺物の一部等採集されたかも知れないが、貝塚としての綜合的な發表のないため特にかく見做す）が二箇と、其他考古學的遺蹟としては、高田町來繩に彌生式土器出土遺蹟が一となほ附近に多くの古墳等が存在してゐる。今は森貝塚研究に必要な貝塚についての記述のみを簡單にのべるに止める。

高田町下來繩貝塚

下來繩の聚落は、高田町字高田の南方に位する、數群の農家を含む寒村であつて、高田町よりは、一帶の沖積層の水田の中を走る里道をたどつて達することが出來る。遺蹟の存在する所は、下來繩の聚落でも最東端の人家の群集の北側であつて、丁度二十米標高線の通る高さ三米程の低い海岸段丘が、小斷涯を成してゐるその上より、現在の水田の上までの間に存在したものであるが、近年石灰製造の目的を以て大仕掛に貝塚が破壞されたために、現今では全く舊狀を損じて僅かに土器破片と、貝類の多數が土に混じて桑畠となつてゐるのを見るに過ぎない。丁度この海岸段丘はそれ自身が、雨水の浸蝕を受けて沖積層に對してリアス式の小半島を無數に作つてゐる洪積層であつて、本貝塚も亦その一半島の西端北斜面、すなはち舊森灣に直面して位置するものである。自分等の試掘の結果、おそらく貝層はこの海岸段丘の洪積土壤の直接上に存した物であらうとの想像は許されて可なる樣であつた。貝層の厚さや分布については現在破壞しつくされて居るため不明であるが、吉成安文氏によれば、「原は非常に貝層も厚く到底現在の自分等の森貝塚發掘點での貝層の比ではなく、又その分布も相當廣大なものであつた」との土民の言であつた由である。その貝の種類については自分等は表面での採集に於ても、又、小試掘に於ても特殊な貝は見出す事が出來なく、その種類は全く前出の森貝塚の物に含まれるものであつた、しかし前述の如く本貝塚はすでに貝殼を取るのを目的として破壞されたものであるから、あるひは特殊なスペイシスが存在して居つたかも知れない。その遺物は全く土器のみであつて石器や其他の物は發見する事が出來なかつた。

土器は第十一圖に示す如き物を以て代表的なものとするものである。1は大形黒褐色土器の口緣部であつて、表面並びに裏面には

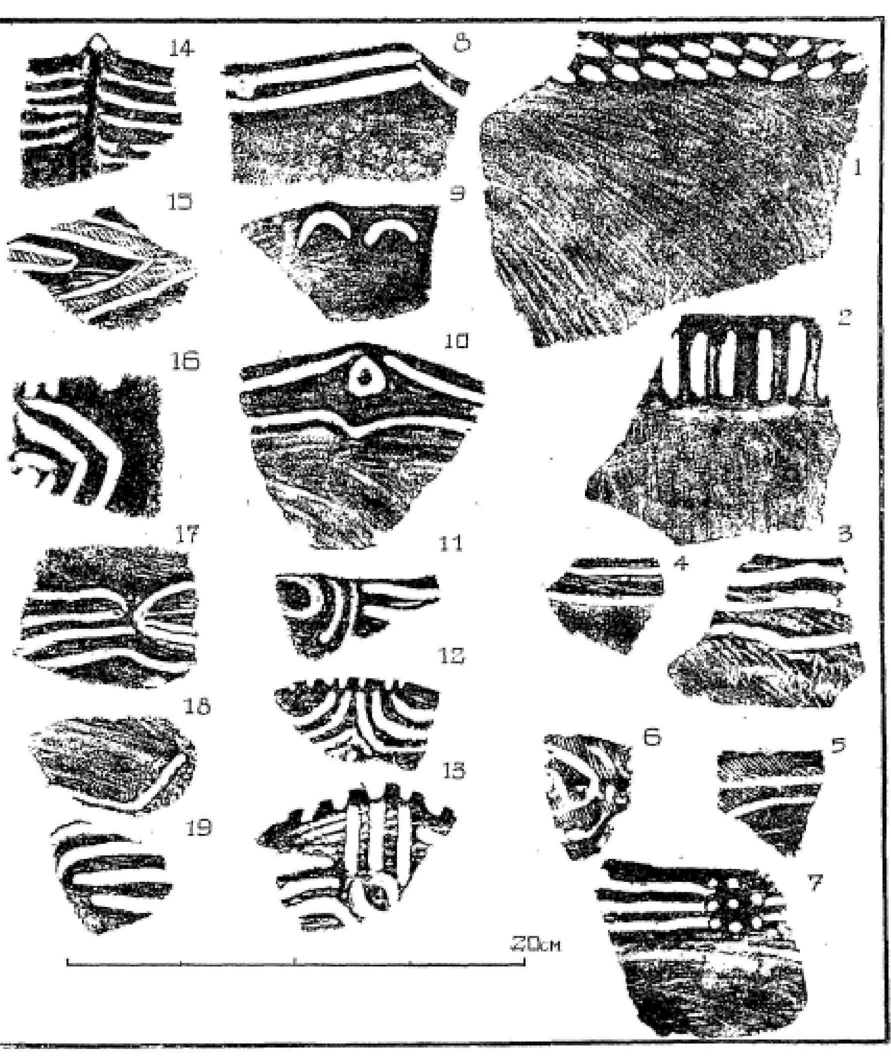


Fig. 11

刷毛目を明かに殘し、研磨は精良ではなく、その口緣に近く、二列の横に平行した櫻花瓣形の連點紋を有してゐる。この種の連點紋は、先の森貝塚に於ける口緣紋樣にも點と線との區別の明かでないものが存したのを參照して少くとも同一系統の構想に成つた事が明かに出來る。その性質、全く先のB類土器に屬せしむ可きものである。2の物はその性質同様であつて、B類土器の代表的の物の一であり、口緣に横に並ぶ縱の平行直線紋を有してゐる。3 4 共にB類土器の特色の一である平行直線紋の一に屬し、その裏面には刷毛目を有してゐる。5、6共に繩紋を有するものであつて、その

性質は明かにB類に屬し、6の如きその線の性質に於てもBの特性を良く表現してゐる。たゞ、これが表面に繩紋を有するのは大いに注意すべく、むしろB類としては稀な一例である。5 6二箇は同一箇體の破片とすべての點より見られるが、その繩文は共に極めて細かく、精巧な物であつて、A類土器に於けるものと著しく趣を異にし、擬繩紋とも誤られ易い様な狀態を示してゐる。この種の繩紋のB類土器に於ける存在はたゞに本遺蹟に於てのみならず、次章に於て觸れる九州南部の遺蹟に於てもしば〳〵自分は發見した所である。次に7の物は、やはり褐紅色を呈し僅かに研磨された裏面刷毛目を有するものであつて、その紋様は口緣部の三平行線と、數箇の點の集合から成つてゐる。點の集合は八箇程、三平行直線の切れ目に挾在して、おそらくバスケットリックモチーフの口緣結目の如き物、もしくは、把手の跟趾としての紋様として作られたものであるらしい。8の物はやはり黒褐色を呈する代表的B類であつて、口緣は僅かに山形に隆起し、それに沿つて二本の平行線と一本の線が走つてゐる。同一口緣に沿ふて一は一本の線であり、他は二本の平行線であるのは奇異の感なきにしもあらずであるが、しかし、一般の他の例より考へてB類にはこの様な不整頓さは許されて然る可きものであるかも知れない。9はやゝ黄色を帶びる褐色、口緣部の破片であつて、僅かに山形隆起の退化した様な跟趾を認め得られ、その部分に一箇とその右に一箇の半圓形の紋様が獨立して附けられてゐる。あるひは不整頓に口緣に横に並んだ物であるかも知れないが、知る事が出來ない。10—14いづれも皆B類土器の口緣部。10は山形隆起をかすかに示す上に、一の圓紋と、それを挾むが如くに左右より寄る一對の口緣に沿つた平行線より成り、圓紋を挾む線はこの圓紋によつて上下に退けられてゐるが如き形をなしてゐる。11の物は紅褐色を呈して口緣に於ける變化なく、平滑であるが、先の7の例の如き把手紋様の退化した如き物を圓と、それを抱く曲線とそれより出發する口緣の平行線とによつて作つてゐる。12はゆるやかに隆起した一種の口緣隆起であつて、その上緣には、B類に特有の切れ込み紋を有し、その中心には左右より口緣の平行線の末端が數箇集つて他に見なかつた特殊な構圖を成してゐる。13は山形にて隆起するものであるが、その上緣はやはり同樣に切れ込んで、その中央に縱の三本の平行線を有し、亂雜な斷片的な曲線がこれに集つてゐる。14はやゝ趣を異にするものであつて、口緣把手もしくは隆起に當る部分には、縱に一本の隆起線を附着させ、その先端を僅かに口緣部より上に出してその上の中央を下に凹ませてゐる、口緣に沿つて走る五條の平行線はこの中央の隆起線を境として左右に分れてゐる。同じB類土器の中に於てもこの存在は特殊なかつ興味深い事實であると云ふ可きである。15は本遺蹟出土のA類土器である。本遺蹟に於けるA類土器はその數極めて稀であつて、僅

かに數片を數へるに過ぎない。本土器片は、A類特有の線の中に挾まれた縄紋帶であつて、菱形の如き角を示してゐる。表面黒く研磨されて、堅くA類の特色を充分に示してゐるものである。その縄紋等先の5 6に比しはるかに本來的であると云ふ可きである。16に示すものはやはりB類土器の口縁部であつて、上縁に切れ込みを有し、又その一部に、先の箭紋に近い感のする様な角のある曲線の紋様を有してゐる。17—19は共にB類土器の腹部であつて、17は裏に刷毛目を有するものであり、その紋様は不規則な切れた曲線が、左右より一點に集らんとしてゐるものゝ如く想はれるものである。18は一本の角のある曲線であつて、19はほゞ平行した線の一部である。以上の如き土器を出す本貝塚は、本文中述べた如く、全體を通覽してB類土器の最も多數である點は否定されない所であり、しかもこのB類土器が、森貝塚に於けるよりもよりB類として固型した代表的な物を多く含んでゐる點も首肯し得るところである。B類に次いでほゞ同數に近い多數を占めてゐるのはC類土器であつて、その多くが、紋様としての特色を有すること少く、無紋に近い物が最も多い。最後はA類土器であつて僅かに自分等の知見の範圍内では數片に過ぎなかつた。

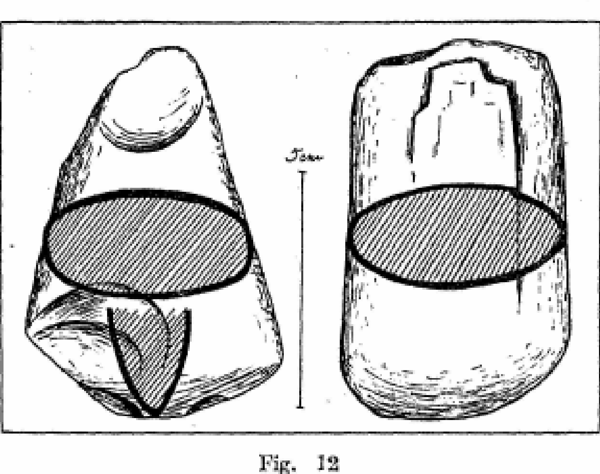


Fig. 12

封戸村立石貝塚

來縄貝塚と共に舊森灣に沿ふ今一の貝塚に立石貝塚が存在する。立石は、豊前國宇佐郡封戸村立石であつて、森や來縄等とは僅かの所で國郡を共に異にしてゐるが、全く行政的の區分に過ぎないのであつて、來縄を距ること約三粁、高田宇佐間の縣道の東側に當り、附近神社の境内に立石を有することよりその名稱が起つてゐる。

交通機關はむしろ、日豊線宇佐驛に下車して、歩行か自動車の便によるのが便利である。立石貝塚も全く過去の文獻にその名を見ないところであつて、おそらく森、來縄と共に新發見に屬するものと考へられる。現在は來縄同様破壞されて居つて、表面よりその存在を窺ふ事は困難であるが、過去貝殻採掘の起らなかつた以前は可成りの擴がりと、深さを有したものである如く考へられる。丁度、高田宇佐間の縣道は、宇佐驛より約一粁東北にて東方宇佐參宮輕便鐵道を横切る幅二米位の里道を分岐してゐるが、この

里道に添つて東に進み、立石部落の北端、寺院の附近、標高約十八米位と考へられる邊りに貝塚は現在存在してゐる。やはりその基底は杵築灣沿岸に發達した海岸段丘の砂礫層であるらしく、貝層の厚さや擴がり等一切不明である。その貝類も、小破片となれるもの多く、特殊なスペイシスの存在は不明であつたが海産の物を主とする以外に、淡水産のかのこがひ等をも混じてゐる事實は注意に價する。土器は小破片となつて多數散布して居つたし、その中に二箇の磨製石斧をも混じて居つた。磨製石斧は第十二圖に示す如きものであつて、共に表面極度に風化して居つて不明であるが、右は灰綠色を呈し、左は灰青色を呈して共に硬砂岩、又は安山岩かとも思はれるものであつた。右方のは大さ約八センチ刃幅約五センチ断面右左端の尖つた楕圓形を呈し、短冊形双蛤刃である。上端は一部缺損もするが大體に於て圓みを帶びて手當り良く、全體完好な感を與へる。おそらく風化しない前には精良な研磨を加へられて居つたものと思はれる。左方の物は、右とは異つて撥形を呈し、その断面も角の取れた三味線胴形の二種を呈して、刃は双蛤刃に屬してゐる。所々に缺損の箇所を有してゐるがやはり原は良く研磨されたものと考へられる。以上二箇の石斧は共にその型式を異にしてゐるが、共に石質を等しくし、小形完好な物であつた。土器は第十三圖に示す如きものであつて、縄紋式土器以外に、明かな彌生式土器をも多く混じて居つた、1に示す物は、黄灰色を呈する

Fig. 13

やゝ厚手の土器であつて、口縁部の一部に屬し、表面に二條の口縁に平行した線と、その間に一定の間隔を以て横に並ぶ一種の櫛目紋とを有してゐる。これは先のC類の一種に屬せしめて可なるものではあるが、C類全體がそうである如くに、彌生式土器との類似が濃厚である。2に示すものはやはりC類土器の一種に屬せしむ可きものであつて、口縁部の一に屬し、その口縁に沿ふ一條の横の連點紋と、少し離れて一條の直線、更にその下にそれに沿ふ連點紋が並んで存在してゐる。色はやゝ赤色を強く帶びてゐる。

3はC類土器の口縁部、口縁に沿つて、粘土を以てした縄狀の隆起を附着させたものであつて、その隆起は一般のC類土器に見るものよりはやゝ大きな方に屬してゐる。この種の口縁上部の縄狀隆起や、單に口唇部を外に折り返へした樣式はこのC類土器に往々存するところである。4もC類土器口縁部であつて、表裏共に刷毛目を有し、口縁の近くに口縁に沿つて一本の凹線が附けられてゐる。5—11は共にB類土器に屬し、5はB類の特色の一を成してゐる口縁切れ込みであり、6は肩部に於ける硬化曲線紋の一部である。7は5と同樣の口縁切れ込みであつて、これはその表裏共に斜の幅の廣い刷毛目紋が附けられてゐる。8はやはり口縁切れ込みを有する口縁部破片であつて、小破片であつて明かではないがこの口縁に沿ふ一本の線と共他B特有の例の曲線紋樣の物が存在する樣である。9は胴部の破片で一本の硬化曲線と、二三の直線から成つてゐる。10はやはり口縁部であるが小破片であるため明かでないが、圓形の凹みを二三集合させて有してゐる。11は縄紋を主とする紋樣であつて、あたかもA類の一種の如くも想はれるが、實はその性質全くB類に屬し、白味を帶びた褐色に裏面に刷毛目を有してゐる。縄紋はB類としては稀な發達の良好な物であつて、線に限られて帶狀を成してゐる。12—15は共に、C類に屬せしむ可きものであるか、又は全くの彌生式土器に屬せしむ可きものか、この破片のみを以ては到底決することの出來ないものである。共に平行直線を主體となす紋樣であつて、大小多少不同一である。16は純然たる彌生式土器であつて、大形壺の腹部に當り、一本の凸帶とその上に押しつけられた連點紋とを有してゐる。この種の彌生式土器は、先の來縄貝塚の存する舊海岸段丘の臺地の上に於て甕棺や石蓋式土壙と共に包含狀態に於て存在し自分等が之を發見して多數發掘した物と全く同一であつて、その紋樣、燒成、製作に於て何等相異する所を認めない。この種の彌生式土器は本遺蹟には多數存在して居る。以上の如き土器を出す貝塚は、それ等土器の數量に於て、自分等の知見の範圍内を以てすれば、C類土器最も多數を占めB類土器並びに彌生式土器はほゞ同量發見されてC類に次いでゐる。

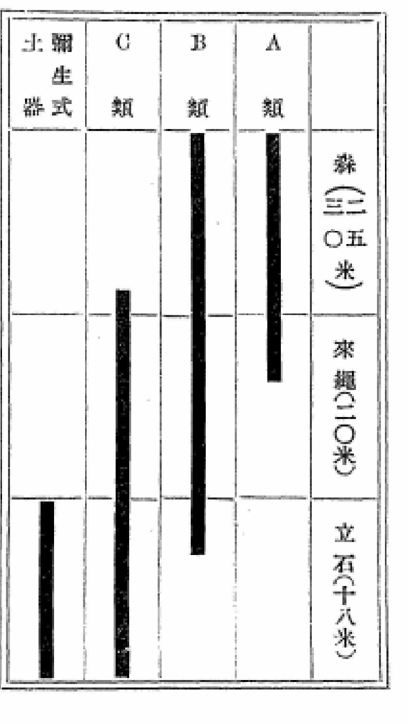
五、結　論

以上第二章より始まつて第四章に至るまでの間に於て自分の記述した所は、豐後國國東半島の北基部、西國東郡高田町附近に於て、自分の提稱する所謂「宥森灣」に面する、森貝塚の遺蹟的、遺物的事實の記載と、それが考察に必要なる關係を有すると考へられる來繩、立石の二貝塚遺物に對する簡單なる報告とであつた。

森貝塚は、宥森灣に於ても、更に一層灣入の深い部分に位して、あたかもこゝは田染川の河口に當り、その貝塚の基底を成すものは、花崗岩、もしくは集塊岩の上に出來た洪積海岸段丘に、更にこの田染川の運んだ砂利粘土層の被覆したものであつて、その標高は約二五―三〇米に及ぶものであり、貝層分布の範圍も決して廣いものではなかつた。而してこの森貝塚の面した當時の海灣は、田染川のみならず、その北にある都甲川が共に年々多數の土砂と共に淡水を注入しつゝあつたものであつて、附近海水の性質は全く半淡半鹹に近い狀態を呈して、おそらく、その深位も小なるものであつたであらう事は、本貝塚出土の貝類に淡水の流入する海濱、もしくは遠淺の海濱に棲息するスペイシスの少くなかつた事によつても知られるところであり、又、淡水產の貝類の數が極めて多かつた事も、この田染川との關係によつて明かに解し得るところであつた。すなはち森貝塚は、海波平穩なる宥森灣の奥、田染川河口に面した、平和なる住居地であつたと考へる事が出來る。而して自然遺物の中には單に魚骨貝類のみならず、陸棲哺乳類である鹿等の遺骨も發見されて、それ等は當時に於ける生業の一部を暗示するものゝ樣である。石器としては單に、石斧皮剝の二箇が發見されたに過ぎないが、しかしそれ等は單に本遺蹟に於ける內容を物語つてゐるのみならず、その原料產地であると思はれる姫島との興味深いつらなりを暗示するものゝ如くである。出土の人骨もその葬法が我國石器時代の一葬法である屈葬に屬し、その占める自然人類學的位置は將來を俟たなければ明かでないとは云へ、吉成古澤二氏により貴重な一資料を提示し得たと云ふ事が出來る。貝輪、骨器共に本遺蹟の內容を決定することに役立つてゐる。土器は最も多數に發見されたものであつたが、それ等は全部が繩紋式系統の土器に屬して、それ等の特色を注意して觀察するときには大體之をA、B、C三類に分つ事が可能であつた、それ等の特色については再びこれを列擧する煩は避けるがそれ等の層位的關係等一切は不明であつたとは云へ、それ等三つの別を本遺蹟の中に於て見得られた事は今後本遺蹟と類似の遺蹟の研究上にも或は必要なことにもなり得まいか。この三つの有する關係や

其他については次を參照され度い。

森貝塚は、更にこれを附近類似の貝塚と比較することによつて、その有する性質がより明かにされ得る。自分は第四章に於て舊森灣の他の貝塚として來繩、立石の二例を擧げて簡單にこれを説明した。來繩、立石の貝塚は森貝塚と均しく舊森灣沿岸に發達したものであることに於ては同様であつたが、一方森の貝塚が、同じ舊森灣に於ても更に深く奥に彎入した部分河口に存するに反し來繩、立石は共に廣く森灣の主體部に直接面して居る點に於て先づそれ等は存在の地形に於て一は內灣、他は外灣の差を有して居る。又先來度々述べた如く森貝塚は標高二十五―三十米の地點に存するに來繩は約二十米、立石は十八米に存して居る點、この三者は同一灣內に於てもその存在の標高を異にしてゐる。而してこの舊森灣背後一般の地勢上、南方の諸山嶽より大なる傾斜に伴ふ流出土砂は、田染川其他をして、大なるデルタを造らしむるものがあり、現に森貝塚直下が標高約二十米であり、現田染河口まで僅に五吉に過ぎないのに沖積比高二十米も算する様な大なる差を見、又一部の地理學者によれば、この附近一般は土地の變動にも富む地方であると云ふても居るから、森貝塚築成時には、意外に未だ沖積隆起をを見て居らなかつたかも計り知られない。勿論これが細位は地形學的專門の檢討を經て確立もすることであるけれども、自分には、これが、三貝塚成立の時代に對する或る暗示が與へらるゝ如くに感ずる。而して一方には、前述の如くそれ等自身の中に於て發見される土器の性質に於ても、上掲の表の如くA類は森に主體を有して來繩に及んでその一部に姿を止め、B類は森より發して來繩に至り森來繩に主體を有して立石に至つてその一部に姿を止めC類は僅かに森にその一部の姿を出して、來繩、立石、特に立石に主體を有して居り、彌生式土器は僅かに立石に始つて森、來繩をオミツトしてゐる。而して最も普遍的に各遺蹟に存するのはB、C類であつて、この二者はその配合に於て最も緊密な關係を有し、A類と彌生式土器とはその配合に於て全く直接の關係を示さない。而して彌生式土器はその配合に於てC類とB類の一部とに關係を結



び、A類はB類とC類とに關係を示し、而してA類と彌生式はBC類を挾んで始めて間接の關係を有してゐるに過ぎない。右の如き四種土器の配合が同時にもつとより內容的なものに觸れ、又は編年の根據として存立し得るや否やは問題であるが、しかし、少くとも先述の如く三箇の遺蹟は共に貝塚であるのを幸として、同時に、又、相對的な傾向——すなはち最も古い始源を持つ遺蹟にはどの型が最も多く、最も新らしい始源の遺蹟にはどの型が最も少い等の如き——を示す上に於て土器配列の一準據とするものに外ならない。勿論編年の準據として完全ならしめんがためには、遺蹟內に於ける異種土器間の層位的性質が明かであり、土器の新古を決定そる自然的條件が明かに定まり、又、本地方の如き場合には遺蹟の數がもつとより多く、かつより高低の差を大にして集り存し、土器自身の有する相互のパーセンテージがより明確に（更に、型態學的立場からの配列が明かに）定まらなければならないが、しかしこの最後の物を除く以外は本地方の遺蹟の如き場合には前述の事情によつて全部は望まれない所であり、從つて本文に於てはたゞ相對的な傾向を通じて、最も可能性多き推想を土器の型態的階梯の上にめぐらすに過ぎないのである。然らば最も可能性多き土器型態的階梯への推想とは何か、すなはち、本地方に於ては、最も古い始源を有すると考へられる森遺蹟に最も多く、來縄に少くなり立石に見ないA類を以て型態的階梯の第一に置くものであり次に最も新しき遺蹟に最も多く、最も古き遺蹟に最も少きC類を以て第三位に置くものであり、B類はその始源に於てはA類との前後關係は不明であるが、少くともその盛行の時、すなはち主體部をAC類の中間に置かんとするものであつて、彌生式土器は、立石に於て始て出現し、BC類と同一の存在を示すためこのABC三類の次に第四位に置かんとするものである。しかし、これは全くの可能性多き推想に過ぎないものであり、彌生式土器に對する縄紋式土器の關係もたゞこの遺蹟に存した一類の物に對する關係であるのに過ぎないものであつて、これが、彌生式土器全體に對する關係は先づ本遺蹟に存在した彌生式土器が全彌生式土器のいづれに位置すべきものであるかゞ明かにされて後始めて知り得る問題であり、又、縄紋式土器相互の關係も全くこの地方に於ける既出遺物のみによつたものであるため、その配合が他の地方に於ても同樣であるか否かは全く不明なところであるが、たゞ他地方の物の考察の場合この地方のこの關係は暗示として役立つであらうかは附け加へられまいが。而してこのA、B、C三種の縄紋式土器は、大體に於てA類が、その製作、紋樣等に於て概見した所關東縄紋土器の所謂薄手派のあるものに近い性質を有してゐる感を催すものがあり、特にその表面に於て赤色顏料を有する等の點は興味深い事實として相互に拆出比較もされ得る。B類土器は、A類とその存在狀態に於ても近似の關係を有して居つ

た如く、その製作紋様に於ても最も接觸した部分は認め得るが、しかし、全體にA類等よりも著しく、硬化、退化して居る樣に見へる點、この兩種の土器の前述の系統的關係と對照して、興味淺からぬ所であつて、後說の如く、あるひは、九州に於ける縄紋式土器のローカルフェイズの一として固型したものと云ふ事が出來るかも知れない。C類は、その存在狀態に於てB類と近密な關係を有して居つたと同時に、又彌生式土器とも接觸して居る事實が明かであつた如く、その製作紋様はB類とも類似はして居るが、著しく更にそれが變化して、より本來の縄紋式土器とは遠ざかり、彌生式土器に近迫した性質を多分に有するに至つた如く考へられるものであつて、その中には彌生式土器との區別が困難な樣な物も多數存在して居つた。以上の如く、ABC三類の縄紋式土器はその製作紋様に於ても、又系統階梯に於ても異つて居る如く考へられるのであるが、しかし、それ等は勿論各破片等各々について見ても歴然たる區別を絕へず認め得るのではなく、中間にも位す可き明瞭ならざるものも混在して居る。それが兩種土器間の過渡に屬するものであるか否かは斷定はすべくもないが、しかし、兩種土器が截然と切り離れてゐるのではない事を示す資料として注意すべきである。

要するに森の遺蹟は、同じ舊森灣に沿ふ他の二遺蹟に比べて、その始源の最も古きものと考へられ、而して、おそらくは森貝塚と共に、來縄貝塚の居住地は起源したものであるらしく、その時は、すでに森貝塚附近は淡鹹水の混合した遠淺の河口であつて、その捕獲し得る貝類も次第に鹹水產の物が少くなり、淡水の物が增して行つたものであるらしい。一方來縄貝塚よりやゝおくれて營まれ始めた立石貝塚が出來て、森、來縄、立石の三貝塚が共に貝塚として居住された年代はおそらくは極めて短かい間に過ぎなかつたであらうと考へられ、やがては森の聚落が貝塚としての築成をやめて、遂に、來縄、立石が專ら貝塚聚落としての隆盛を極めたものと想はれる。森貝塚が貝塚として築成されることの止まつたのはおそらくは、土地隆起により海岸線との距離が大になつたためではなからうかとの推想は近き將來に於て、これを純正なる地理學的に實証せらるゝの日を帝に筆者は期待するものである。

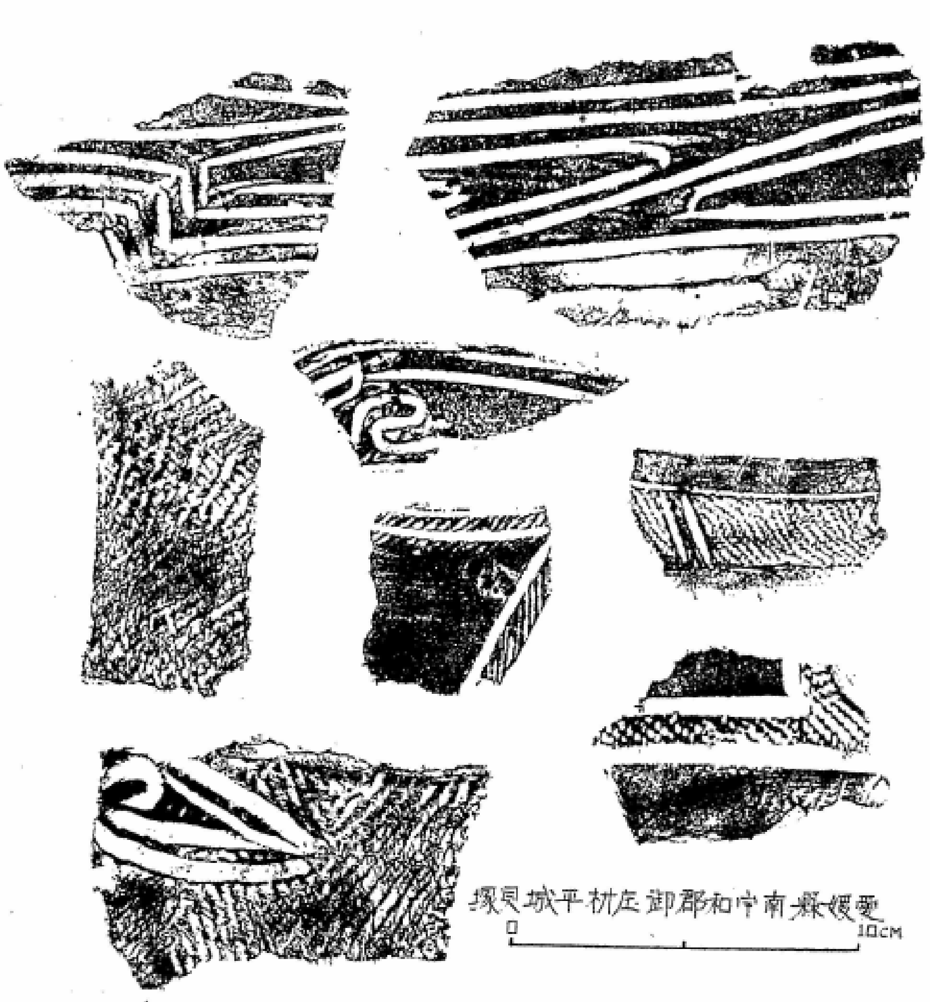


Fig. 14

附記

本文に於て自分が、A類土器として述べた一類の繩紋式土器に最も近い物、又は同一系統に屬するものと考へられるもの、西日本、特にこの舊森灣附近に於ける分布を瞥見して先づ第一に注意すべきは、彼の肥前有喜貝塚に於て濱田耕作博士等によつて絡繩席紋土器と呼ばれた一類の繩紋式土器であらう。有喜貝塚はあたかも四種の土器を出して同博士等は之を次の如く表記し、分類して居られる。

(1)。而してこの有喜貝塚に於ける2 3はあたかも舊森灣沿岸に於けるB、C類と自分が稱へた物に一致するものであつて、丁度この有喜貝塚は、ABC三類を出す點に於て本文述べる所の遺蹟の考察上最も必要なる遺蹟と云ふ可きであり、又、この濱田博士等は新古に關する推定を下す時機では無いと述べられて居るが、自分として

土器種類	性状	紋様	類品發見地	
1 絡縄席紋土器	稍粗鬆	曲線的直線、席紋	備中津雲等	貝塚式石器時代土器
2 太形凹紋土器	粗鬆	指頭連點、曲線直線絡縄紋	肥後阿高	
3 細形刻紋土器	堅緻	連點幾何學的紋様	薩摩出水、同指宿肥後轟、大隅横山	
4 素焼點紋土器	緻密	(刷毛目)	河内國府	彌生式系統土器


Fig. 15 廣島縣加茂郡御園宇村字新明附近

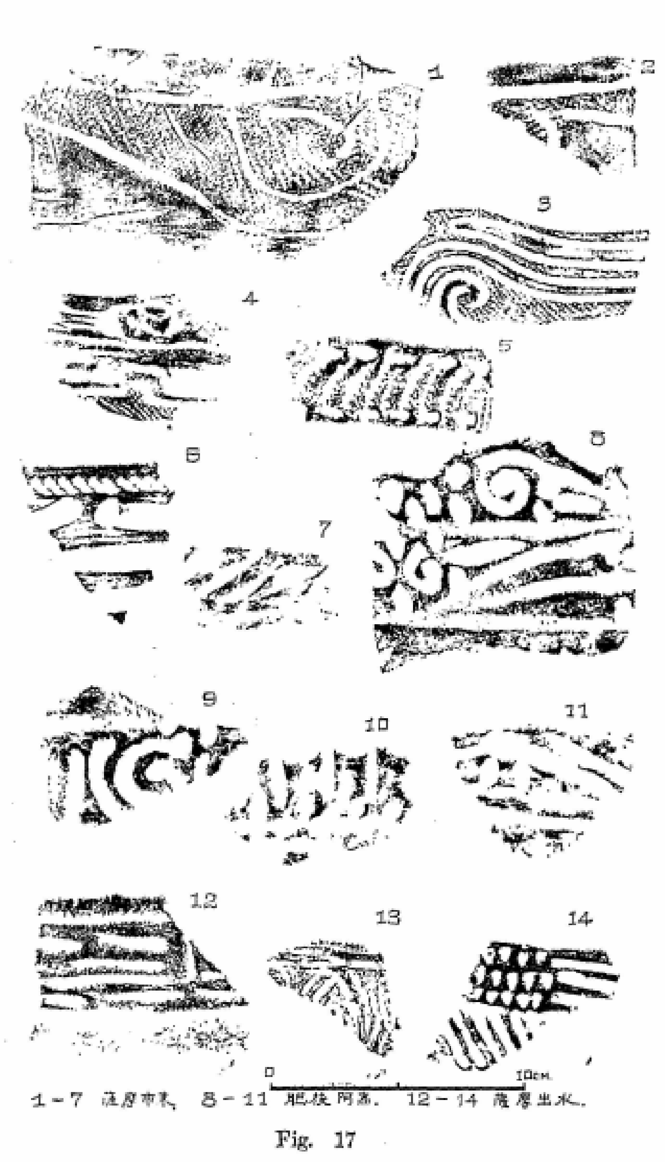
は、本文に述べた所と一致する様に考へられもする。A類に近い土器は他方薩摩國日置郡西市來村川上貝塚に於てC類等と共に發見されてゐるし(2)、豐後柞原村にも出で(13)又、海を距てゝは、伊豫國南宇和郡御庄村平城貝塚に於ても代表的な物が發見され(3)、又安藝國加茂郡御園宇村字新町(4)、伊豫國溫泉郡道後町字祝谷土居ノ段(5)を始め、濱田博士の稱へられる備中國大和國磯城郡三輪町雲津貝塚等の物に類し、又遠くは、金屋天理敎會附近(6)の物にまでも連絡を認めることが出來る。而して之等の九州に於ける分布は他のB類等に比し、遺蹟も少ないし遺物の量も稀である如く管見の範圍にては想像される。次にB類土器と自分が稱するものは、九州特に中部に於て多數發見されるものであつて、あるひは九州特有の物であるかも知れない。

山口縣吉敷郡秋穗村岩屋
見能ヶ濱遺蹟
5cm.

Fig. 16

その最も代表的なのは肥後阿高特に西阿高貝塚の物であつて、この地は多年先學によつて研究せられ、自分も亦昨年之を發掘し特殊な感興を覺えたのであるが、其他先出の有喜貝塚に於ても、又、大隅國肝屬郡鹿屋町中ノ名中ノ原(7)や薩摩國出水郡出水町上智識貝塚のあるもの、又は、日向國東諸縣郡綾村北方尾

立(8)及び福岡市箱城郭池溝中出土のもの(9)や又は築紫平野出土の例(10)等いづれもこれが一類に屬するものであつて、更に海を距てゝは周防國吉敷郡見能ケ濱遺蹟のあるもの(11)もこの一と考へられるのである。C類に至つては、薩摩出水、及び指宿、肥後國轟貝塚を始め、大隅國肝屬郡鹿屋町中ノ名中ノ原出土の物、薩摩國日置郡西市來村川上貝塚や日向國宮崎郡瓜生野村柏田(12)又は前出の有喜貝塚等に於て發見されてゐるものであつて、可成りの廣さある分布を示してゐる。



1−7 薩摩市來、8−11 肥後阿高、12−14 薩摩出水。

Fig. 17

以上の如き分布を有するA、B、C三類の縄紋式土器は、その中に於ても遺蹟、又は地方ごとに幾分の相異はあつて、全然同一とは申され難いが、大體に於てA類はたゞに九州のみならず廣く瀬戸內海沿岸を始め中國近畿に存在するものゝ如くB類は主として九州、特に西南方に多く分布し、C類もほゞ同樣な分布を示して居るものゝ如くであつた。右の如き三種の土器が、九州に存在する縄紋式土器の全部であるとは自分は勿論考へても居らず、又現に他の類として存在すべき一二類の存在も知つて居るが、しかし、少くともこれ等三類は九州縄紋式土器の主體部を成してゐる事實は否まれない。その意味に於て之等三類の土器を共に出し、かつその間に關係の存する樣に思ばれる森貝塚並びに

他の二貝塚の存在は、意義あることゝ考へる。　（完、一九三一、一、一五）

註　記

(1)濱田耕作、小牧實繁、島田貞彥氏「肥前國有喜貝塚發掘報告」人類學雜誌四十一卷二號八四頁
(2)山崎五十麿氏「薩摩國日置郡西市來村貝塚に就て」考古學雜誌十一卷十二號二八頁
(3)早稻田大學文學部所藏標本による（西村教授採集）
(4)安藝郷土研究會「安藝郷土史料集」第一輯
(5)拙稿「伊豫に於けるアイヌ式土器發見の二遺蹟」考古學雜誌十六卷十號三八頁
(6)拙稿「大和三輪山麓の石器時代遺蹟」考古學雜誌十五卷一號六七頁
(7)杉山壽榮男氏「日本原始工藝」二三二圖版
(8)宮崎神宮徵古館所藏標本による
(9)中山平次郞氏「福岡城西大堀發見のアイヌ式土器片」考古學雜誌十六卷一號一頁
(10)坂本眞鈴氏「朝倉通信五」（筑紫平野に於ける繩紋土器系統文化、筑前國朝倉郡宮野村下須川石器時代遺蹟續篇）考古學雜誌十七卷一號六六頁
(11)島田貞彥氏「周防國吉敷郡美能濱遺蹟」考古學雜誌十五卷十二號一四頁
(12)註(8)に同じ
(13)長山源雄氏「豐後國直入郡地方の石器時代の遺蹟と遺物」考古學雜誌十七卷一號四四頁。本文中長山氏は先の豐後國西國東郡高田町來繩に貝塚があつて繩紋式土器を出す事を記されて居る。

リサン師と姥山

大山　柏
甲野　勇

先頃東亞考古學會で、京都に招聘して、支那に於ける舊石時代に就て開いた後、更に人類學會の爲めに東都で、支那の新石時代の講演をなした、天津在住のリサン師は(1)、私共の研究所にも見へ、且つ私共に見塚案内方を委囑せられてきた。突然のことでもあつたし、其意圖もプログラムもよく解らない。仕方がないから、吾れ吾れ相談の結果、姥山と定め、約束の日、十一月十九日に案內したが、本紀行なのである。而して同日は、田澤氏、甲野、池上、竹下、馬橋、峯田と筆者總動員の形で出かけたのであつたが、姥山に最も御馴染深い研究所の宮坂君が、時機惡しく、缺席中でこの行を共にせられなかつたことを遺憾とする。

出發　午前八時にルサン師の宿舍である上智大學に御誘する約束をした。西洋人のことであるから軍隊時間だ。それから師と同乘して、日佛會館に本日同行せらるゝアグノーエル氏、ガスパードン氏を誘ふ。今日は豫め計畫をたて、筆者と荷物持の峰田とが案內役で、他の一同は先行して、發掘をし、丁度よい頃に、私共の後發隊が現狀に到着しよう。發掘も、表土を殘してある部分(1)。表土を取つて貝層上面を表した部分(2)。全く貝層を發掘して瘢たる赤土に達した部分(3)の三部分を見せ、且つ共後に掘擴して行ふと云ふのであるから忙しい。又主要出土遺物も、自然遺物、人工遺物と整然と分ち貝などには札を付け、一方には、發掘位置の測定、主要出土に對する寫眞等、總てベストを盡した所を見せる考であるから、時間も人もいる。從つて後發隊は成る可くゆつくりと行けばよい。

日佛會館でも時間がとれた。中山まで押上げから電車で來たが、こゝは今日、何んとかの御祭とかで、市が立つてる。氣早のアグノーエル君、何か掘り出し物と、店々を覗く。何んにも無い。研究欲深いリサン師は、しきりと青物屋の店先きで、質問する。最後に葛餝を指す日本通のアグノーエル君も、これには閉口する。こんな風に筆者はいそがせないで、十時半頃、姥山に着いた。

(1)　リサン師に就ては、同氏講演に當つて、親しく邦譯の勞を執られた。松本信廣先生が『リサン師の印象』と題して、ゆかしい

小文を、史學、九の四、一二六項にものせられて居るから、同氏に興味を持つ御方には、一讀を御勧めする。

姥山貝塚　曾てスエーデン皇太子殿下に御供して、この地に來て以來、最早四年もたつ。（2）それ以來來たことも無かつたが、思ひ出で深い、あの斜坂を登つて、先年の發掘地に來て見れば、これは驚いた。あの發掘地は、發掘當時のまゝではあるが、胸まで、達する様な草蓬々たる有り様で、如何にも廢墟でも見る様な荒涼たる有り様であつて、昔をしのぶ面影もない。指定も何んの故か運んでも居ないとのこと、さりとて復舊も、出來ないのが現狀だ。早く何れにかに定めて、地主の岡本氏の迷惑を輕減したいものと、しみじみ感ずる。

　こゝでリサン師に色々と説明もし、同所の西方約五十米程の發掘地に到着する。こゝはどうやら先發隊の大努力によつて略豫定の通り、發掘が行はれて居る。たいしたものも出土はして居らないが、自然人工一通りの遺物も、キチンと列んで居る。見へて居る貝層斷面は、豫期した様に立派ではなく、混土貝層で厚さも三〇—四〇であるが、灰が見へかけて居るのも面白かつた。而して、一通りの説明を終つてから、筆者もリサン師も發掘の仲間入をする。

（2）スエーデン皇太子殿下に御供したことは、拙稿、スエーデン皇太子殿下の御發掘に御供して、人類、第四一の十一號にある。

（大山　柏）

貝塚にて　リサン師を御案内する前日、私は馬島、竹下兩氏と共に姥山に岡本喜一氏を訪ね、貝塚發掘の交捗を御依頼した。岡本氏は快く我々の希望を容れられ、色々地主諸君と接捗せられた結果、貝塚の西端に近い畑地を掘る事になつた。そこで翌日リサン師が來られた時、直ちに貝層の斷面を御目に掛ける事が出來る様に、我々は約一坪ほどの竪穴様を掘つて置く事にした。時間がない爲めこの發掘は相等亂暴なものであつた。表土中には可成り貝殼を混じて居るし、貝層中にも亦比較的多くの泥土を混へて居る。部分的には明かに後世の攪亂を受けたと思はれる所もある。試掘地としては餘り好ましい場所ではない。然し農作物の關係上他に適當な發掘地も見當らない爲め翌日も之を擴張する事に極めた。たゞ此の地點で注意す可きは、發掘區域の中央より稍々東寄りの部分に於て、貝層の基底を爲す黒褐色土層が急に階段狀を呈する爲め、該層上に堆積する貝層の厚さも部分的に非常な差が見られる事であつた。斯様な現象は從來此の貝塚に數多く發見された竪穴に見られたものと類似して居る爲め該部の調査は特に注意して行つた。然し何分にも發掘面積が僅少であつた爲め、その局部のみを窺ひ得るに過ぎなかつたのであるが、恐らく此部分は竪穴側壁の一部と考へて大差のないものであらう。此の穴の底面はほゞ水平を爲すも、底面には謂所柱穴、燒土等の存在は認められなかつた。たゞ貝層上部

には灰層の狭在する所があつたが、此層下の貝層は全然火熱にあつた影跡が窺はれないから、此の灰層は此地で焚火が行はれた結果生じたものでなく、當時既に灰として此地に遺棄したもので考ふ可きである。

遺物は表土、貝層中に最も多く、褐色土層中にも少數ではあるが發見された。

翌日我々一行（田澤、池上、竹下、島島、諸氏と私）はリサン師一行より一足さきに出發した。發掘に關する諸種の順備をしたり前日の區域の擴張作業を行つたりする爲めである。田澤氏其他と相談の結果前日の區域を更に東南の方向に掘り進める事にし、發掘の順序は表土、貝層、褐色土を調べつゝ順次はいで行く事にした。表土の發掘が大體終つたとき、リサン師一行が見えた。リサン師、アグノーエル氏、ガスパードン氏、大山公爵。名々穴に入つて發掘される。（圖版第一、上、參照）午後までには多量の土器破片、磨製、打製石斧、角器等の人工遺物、及び獸魚骨、貝類其他の自然遺物等が可成り多く採集せられた。

午後三時頃貝層下部と褐色土層との接觸部から一體の人骨が發見された。（圖版第一、下、參照）此の出土狀態に就ての精しい記載は田澤金吾氏に執筆を御願ひしてあるから此處では省略して置く。

人骨を全部掘り出した頃は既に眞暗になつて居た。マッチの光を頼りに、骨の殘片を一つ〳〵拾ひ集めるのだから頗る心細い。この心許ない「骨上げ」を了つた一行は、異樣な御土産を持つて一里餘の暗路を元氣よく中山驛に向つた。

× × ×

かくして此日のエクスカーションは終つた。貝塚に於けるリサン師の熱心なる研究態度には學ぶ可き多くのものがあつた。しかも師は所謂學者的陰鬱性を持つ人でなく、あくまで朗かな性格の持主である。此の點我々は人としてのリサン師に深い親しみを感じた。

× × ×

前後二日を通じて我々の發掘した面積は十二尺×八に過ぎなかつた。層の狀態は所によつて多少違ふが、一例として西側中央部に於ける層序を示せば次の如くである。表土、八寸、（多少貝を混ず）土を混へた貝層　寸、純貝層、三寸、褐色土層、寸、ローム。

自然遺物　獸骨、シカ、イノシヽ。魚骨、クロダヒ、スヾキ、タヒ、其他不明。貝類。ハマグリ、カキ、シホフキ、サルボウ、アサリ、ハイガヒ、マテ、アカヾヒ、オホノガヒ、アカニシ、キサゴ、ツメタガヒ、バカガヒ、ミルクヒ、イタボカキ、カガミガヒ、オキシヤミ、レイシガヒ、オキアサリ、バイ、スガヒ、アラレガヒ、カワニナ、カワシンジユガヒ？　カタツムリ。

人工遺物の主要な品は全部リサン師に差し上げたから今精し

い記載をする事が出來ないが、私の記憶をたどつて品名だけを擧げて置く事とする。石器としては、磨製石斧破片、打製石斧、(所謂短册形の粗製品)が發掘されて居る。(表面採集品としては石皿破片、砥石等があつた。)角器は、鹿角基部を切斷し之に穿孔した一種の裝飾品と推定されるもの一個があつたが、これは此種遺物に乏しい本貝塚としては特に重要な品と云つてよい。

土器　我々の發掘地點出土の土器は大體三種に分類出來る。此等に就ては他日機を見て詳述し度いと考へて居るが、今簡單にこれを云へば、第一類は土質粗く(屡々雲母末を混ず)色調は黑褐色乃至赭褐色を呈し、紋樣は比較的簡單な陵起曲線紋に屬し、この陵起樣の兩側に篦狀器具を以て附した爪形棘突紋を伴ふ事が多く、此類の土器には繩席紋を殆んど見ず、把手の如きも餘り壯大なる物を見受けない。第二類のものは、土質は第一類より細かく、且つ雲母末を混へたるもの少く、色は前者とほゞ類似するも紋樣はより複雜である。紋樣の基調を爲す物は前者と同樣陵起曲線紋であるが、此線は種々の彫みに依つて複雜化し、更に線樣間の空間は彫刻的なる充塡紋によつてうづめられて居る。而して此種紋樣は主として土器胴部に施され、口頸部は無紋なる物が相等存在する。繩席紋は第一類に比して稍々發達し、把手は極めて雄大繁雜なる物が多い。第三類は土質第二類と近似し、色調赭褐色、紋樣は雄健なる陵起渦紋にして、主として口頸部に帶狀に施されて居る。胴部には施紋されて居る物もあるが、第二類のそれの如きものを見ない。繩席紋は甚だよく發達し、複雜なる環狀把手の附せられる場合もある。

扨、此の三類の土器が如何なる關係を有するかは、現存の所不明である。今回の發掘では、その區域が狹少であつた事と、發掘に當つて私自身が不注意にも斯の如き土器の變化のある事を看過した爲め、分層的に之を採集する事を怠つた結果、此間の消息を窺ふ事を得なくしたのを深く後悔して居る。然し此の三類の土器は他の遺跡では種々なる「組み合せ」を以て發見されて居る。或る遺跡では第一類と第二類が共存し、他の遺跡では第二類と第三類とが伴出する。又此地の樣に三者共に(その存在狀態は不明なるも)存在する所もある。卽ち此の三樣式の土器及びその共存遺物の關係が、より明瞭になつたなら謂所厚手式文化なるものも、更にはつきりと認識されるに至るに相違ない。幸にして、東大人類學敎室の八幡一郎氏は、本貝塚に於てかつて爲された大規模にして精密なる發掘の結果を近き將來に於て發表されるとの事である。氏は山內淸男氏等と共に此種土器に就て常に注意深き觀察を行はれて居る方である。それ故に此等土器の相互關係も氏の研究によつて判明するであらう事を信じて疑はない。此の意味に於て私は八幡氏の報告を心から期待して居る。

(甲野　勇)

資料

遺跡

北海道石器時代遺物發見地名表

渡島國二ケ所

龜田郡龜田村大字龜田村字谷地頭　土器、石槍、打石斧、石鏃、石製品。

同　郡湯ノ川村岩船吳服店別莊內　石鏃（竪穴らしき跡あり）。

千島國拾二ケ所

擇捉郡留別村大字內保村字ウルモベツ谷流場內　土器、打石斧、石鏃、石製品（竪穴住居趾あり）。

同　郡同　村字イラミザル谷流場內　人骨、獸骨、石製品（竪穴約五十ケ所あり）。

同　郡同　村字十五夜崩（貝塚）。

同　郡同　村大字振別村字カンケカラウス　土器、骨製品鯨齒製臚腑（竪穴貝塚）。

同　郡同　村字トマカラウス　土器、骨器、石製品（竪穴貝塚）。

同郡同村字ウエン尻（俗稱砂山）　土器、骨器、石製品（竪穴、貝塚）。

擇捉郡留別村大字振別村字植別　土器、石鏃、打石斧、石皿、鯨齒製熊及人の浮彫裝飾付柒匙型品、骨製熊、骨製、銛、槍、鏃、人骨（竪穴貝塚）。

同　郡同　村字鼠根別　土器、石器、骨器（主として鯨骨、鳥骨製）。（貝塚竪穴）

同　郡同　村字獵虎島　（貝塚）。

同　郡同　村字年萠舊年萠川邊　土器、土版、石製品、砥石、樺太玉、骨製品（竪穴貝塚）。

同　郡同　村大字留別村字程越谷流場內　土器、石器、骨製品（竪穴貝塚）。

同　郡同　村字ルイビラ（西海岸）　土器、石器。

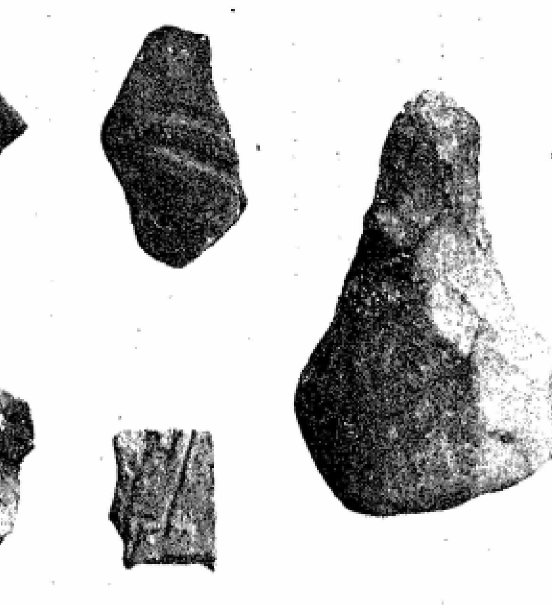
註　貝塚としてあるは通行の際貝塚のみを發見せしものにて遺物は採集せずルイビラを除く他は東海岸なり。　（谷　敬一）

遺物

宮崎縣梅北村發見の遺物　舊冬のことであつた。突然と上原元師から、鄉里より新に、繩紋式土器を發見したとて、送つてきたからとの事で、打製石斧一個、土器破片四個、窯質（石器、土器）二葉とが届けられた。而してこれ等は、最近火山灰の下から發見したものであると附加せられた以外に、この遺跡の性質に就ては、明でない。而してこの發掘遺物の大部は、同村の小學校に保管せられて居る樣である。

この梅北村は、都の城平地の南端にあつて、丘陵地と接觸地帶であるから、遺跡としての存在も、普遍的である。而してこの發見地に就ては、地名表第五版で見ると、村名、大字等に多少の違いはあるが、同村內に於ては既に瀨之口氏によつて、報告

もせられて居る。但し都の城平地に於ける從來の發見報告は、十一箇所を算するが、共内三ヶ所の土器出土は、悉く彌生式と明記せられ、他に土器の記載がないから、前述した如く、縄紋式の新發見と云はれたのではないかと考へる。又地名表以外に、この地方に關し、最近どんな報告があつたのか、夫々に就て調査したこともないことは、豫め御斷りして置く。



宮崎縣梅北村發見遺物

打製斧（梅北村嫁坂、昭和五、七採集）は、寫眞の如く、所謂撥形であつて、長さ一二糎、長幅八珊弱であり、普通によく見る形である。而して送付寫眞によると、尚同様の撥形斧の外、所謂古鏡形二個まである所は面白く、既に所謂有肩石斧と形態連絡が考察せらるゝ。猶この寫眞中には、約四個の磨石斧があり、内三個が尖頭斧である所も、將來調査の一着眼點で、果してこの地方に、以上の特色を見出すか否か、類例を待つものである。

次に土器は、僅に四個の小破片であるが、寫眞のとを加へて見ると、悉くが、縄紋式であることは疑ないが、こゝに一つの疑問がある。それは、これ等の土器片中に甚だしく、出水貝塚—市來貝塚の土器に近似したものと、他の類、拜宿包含地に類するものとの二つがある様な氣がする。勿論資料不足で、明言に云ふことは出來ないが、現品四個中、出水相似のものは、確に千手院と出土地があり他の拜宿類形の三個は共に大浦內山であるから、出土地を異にして居る點も考へねばならない。これは獨りこの都の城平地に止まつた現象とも思はれず、少なくとも、薩隅日地方に於ても見られ得るとも、考へるが單なる臆測に過ぎない。これに就ては、同地方を常に研究して居らる、山崎五十麿氏等の御意見も伺い度ものである。

（昭和六年一月十日）（大　山柏）

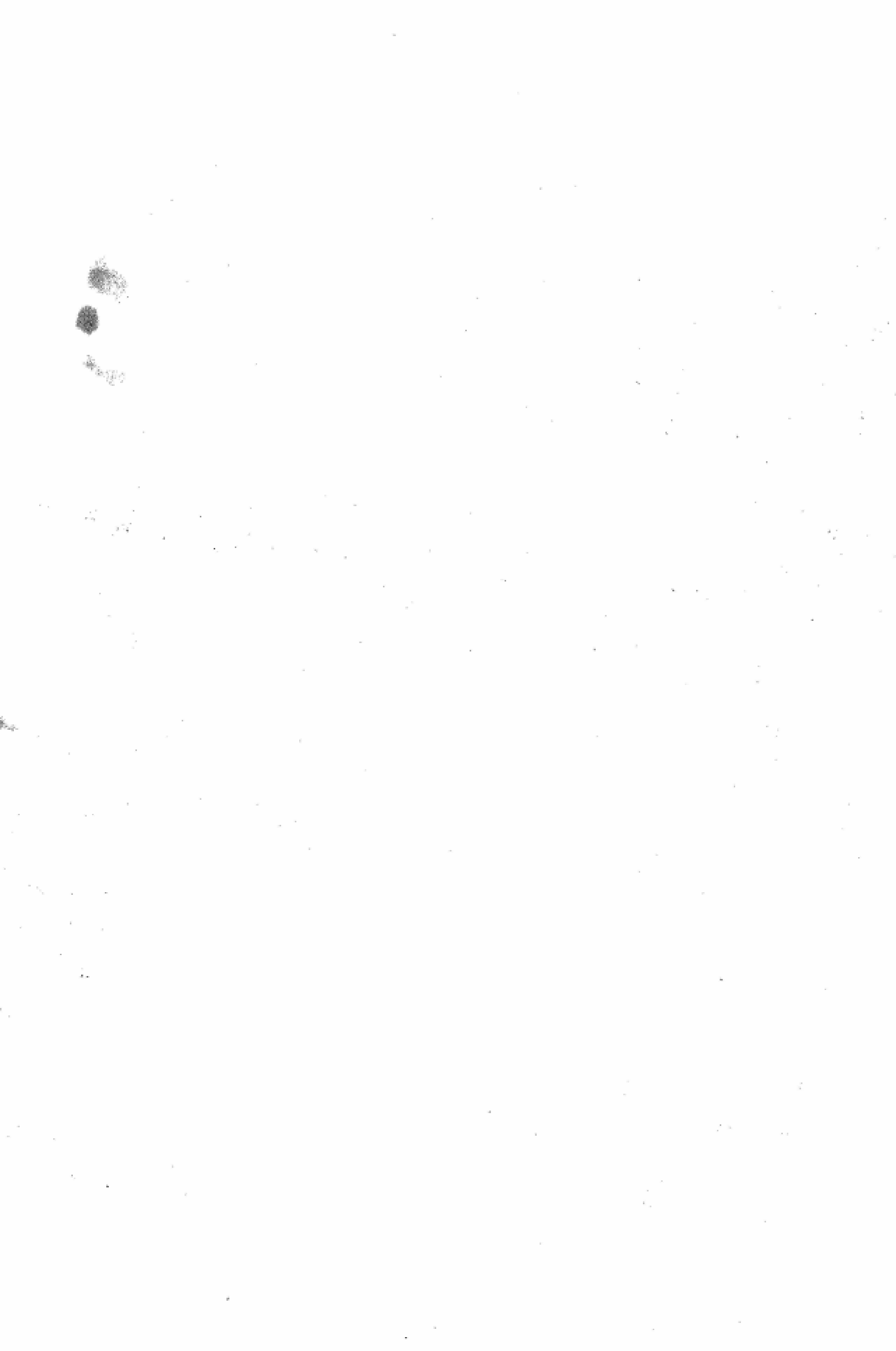
武藏國都筑郡折本發見の磨石斧　圖示した磨製石斧は武藏國都筑郡折本にて採集したものでありまして、有名な折本貝塚の約百五十米許西北によつた傾斜面にて、偶然發見したものであります。

普通石鑿とも云はれておりますもので、材料は牛麗閃綠岩で、やゝ黑味を呈した淡綠色をなし、左程緻密ではありません。長さ六糎、幅四・七糎の略長方形を呈し兩側は中部に於ては、殆んど平行でありますが、上部下部に至るに隨つて、相當の曲線をもつて平行をかいて居ます。厚さは上部にては、一糎弱下部にては、〇・八糎となつて居ます。兩面とも大體平行で一面は片刄をつくる爲、尖端より一・五糎（中央部に於て）のところより傾斜をなしてやゝ弧を張つた片刄をつくつて居ます。尙同地は彌生式遺跡でありますことは、大場磐雄氏が報ぜられてをられます。

（齋藤房太郎）

松田蟻氏寄贈の石製裝飾品　過日本會々員松田蟻氏から蛇紋岩製の弧狀を爲す石製品の寄贈を受けた。此の石製品は全長　　粍幅　　粍、全體灰白色を呈し、一部に藍黑色の斑紋があり、斷面形態は楕圓形、上下兩端は比較的粗雜に磨製され、各端に近き部分に一個づゝの穿孔がある。穿孔法は所謂「兩えぐり」に屬する。出土地は、常陸國新治郡とのみ記してあるがそれ以上の精しい事は解らない。從つて出土遺跡の性質及びその發見狀態等は全く不明に屬する。然し此の穿孔法から推測すれば、此品は石器時代のものゝ樣にも思はれるが、私の知つて居る判團では斯の如きものゝ類品は現在の所、同時代遺跡からは發見されて居ない。大きさ形態から見ても玦樣耳飾の破片でない事は確かである。寧ろ質の差こそあれ、貝製、猪牙製、の新月狀を爲す腕飾の類に比較す可きものかも知れない。何れにせよ今は此品の屬する時代を決定する事をさけ、將來の發見に待つ事にしたい。終りに此の興味ある遺物を贈られた松田氏に對し感謝の意を表する。

（甲野　勇）



Gruppe C. Parallel mit Yayoi-Keramik. (jüngster Typus ?)

6. Der Muschelhaufen Mori u. a. liegen in einem Gebiet aus dem bisher Muschelhaufen nicht bekannt waren.

Für die Mithilfe bei der Ausarbeitung und für die Verbesserung der Uebersetzung danke ich meinem Lehrer Fürst K. Ohyama und Herrn Dr. C. von Weegmann Tokio.

Ammerkugen

(1) Siche: Fürst K. Ohyama: Korekawa-Funde, Zeitschr. f. Praehis. Bd. 2. H. 4. 1930. S. E. 13 u. E.Fig. 1. (auf deutsch)

(2) K. Hamada, u. a.: The Excavation of the Shell-mound at Tsukumo, a Neolithic Cemetery. Report upon Archaeological Research in the Department of Literature, Kyoto Imperial University. Vol. V. 1919—1920 (auf englisch)

(3) K. Hamada, u. a.: The Excavation of the Shell-mound at Todoroki in the Province of Higo. (ibid.)

(4) A. Matsumura: The Shell-mounds of Ogido in Riu-Kiu. Papers of the Anthropological Institute, College of Science, Imperial University of Tokio. No. 3. 1920. (auf englisch)

Ammerkungen

5. Etwas dick gearbeitet und hart gebrannt
6. Schwarzbraune Farbe auch manchmal Oberrand poliert

Gruppe C.

1. Wenige Muster, manchmal findet sich ein sog. "gebürstetes Muster" (刷目紋)
2. Keine echten Mattenmuster, nur "Pseudo-Matten" (擬縄紋)
3. Keine rotbemalten Scherben
4. Glatter Rand
5. Dick und roh gearbeitet
0. Schwarzbraune oder gelbrote Farbe, und nicht poliert

In diesen Muschelhaufen findet sich aber keine stratigraphische Schichtung, und der grösste Teil der Scherben, Gruppe A. bis C., kommt gemischt vor. Die Einteilung der 3 Gruppen ist also nur typologisch. Doch finden wir identische Keramik mit Gruppe A. in der Gegend der Seto-Inlandsee, besonders in den Prov. Yamaguchi (山口) (Fig. 16), Hiroshima (廣島)(Fig. 15), Okayama (岡山), (2), und Ehime (愛媛) auf der Insel Shikoku (四國) (Fig. 14); mit Gruppe B. im Gebiet von Süd-West Kyushu, nämlich in den Prov. Kumamoto (熊本) (Fig. 17. 8—11) (3), Kagoshima (鹿兒島) (Fig. 17. 1—7, 12—14) und bis nach den Ryukyu Inseln. (琉球諸島) (4). Ueber die Gruppe C. kann ich noch nichts bestimmtes sagen ; doch kann man zu einem Teil der Keramik aus dem Muschelhaufen Tateishi (wie oben erwähnt, Jomon-Keramik gemischt mit Yayoi-Keramik) im Süsswasser-Muschelhaufen Higashi-Ataka (東阿高), Prov. Kumamoto parallele Keramik finden. Ich möchte Gruppe C. degenerierte Jomon-Keramik, das heisst spätere Jomon-Keramik nennen.

IV. Schluss

Die Ergebnisse dieser Untersuchung sind kurz zusammengefasst :

1. Der Muschelhaufen Mori gehört in die Zeit, in der das Flussdelta von Tashibu (田渋) schon begonnen hatte, sich anzuhäufen.
2. Die Naturumgebung von Mori ist ähnlich der Umgebung der anderen steinzeitlichen Funde im Seto-Inlandsee Gebiet.
3. Von Naturresten kommen Menschenskelette, Tierknochen, See- und Süsswasser Muscheln vor.
4. Steinwerkzeuge sind selten, und zeigen keine besonderen Merkmale. Knochen—und Muschelgeräte fehlen.
5. Keramik konnte ich in 3 Gruppen teilen :

   Gruppe A. Parallel mit dem Ost—und Mittel Seto-Inlandsee Gebiet. (älterer Typus ?)

   Gruppe B. Parallel mit Süd-West Kyushu. (jüngerer Typus ?)

8. Theodoxus (Clithon) souerbynus
9. Mya arenaria (Linné) japonica
10. Arca subcrenata
11. Anadara granosa (Linné)
12. Mactra veneriformis
13. Meretrix meretrix
14. Cyclina sinensis
15. Paphia (Ruditapes) Phillippinarum
16. Margaritana margaritifera
17. Osterea (Crassostrea) sigas

Die Muschelarten, besonders die Mischung von See-und Süsswassermuscheln zeigen, dass die damaligen Seeküsten noch tief ins Land einschnitten und eine Bucht bildeten. So konnten die Muschelhaufenleute leicht See-und Süsswassermuscheln sowie Fische fangen.

2. Kulturreste

Die Haupt-Kulturreste sind nur Keramik; andere, Stein-, Knochen- und Muschelgeräte gibt es sehr wenig. Ausser dem Messer, das ich oben erwähnte, fand ich nur einige geschlagene Steinhacken (Fig. 5. A), welche gewöhnlich zu der Jomon-Kultur in Süd-West Japan gehören. Dazu eine Menge von Natursteinen, von denen ein Teil auch als Schlagsteine oder keulenartig gebraucht werden konnte.

Die Keramik war nur reine Jomon-Keramik ohne Yayoi Spuren, trotzdem der nahe Muschelhaufen Tateishi, (auch neue Funde) Jomon-Keramik gemischt mit Yayoi-Ware lieferte. Da die Keramik fast nur in Scherben war, kann ich ihre Formen nicht fest bestimmen. Meist war sie nur einfach becherartig (Fig. 6). Typologisch konnte ich aber 3 Gruppen unterscheiden:

Gruppe A.

1. Entwickelte Kurvenmuster (Fig. 8. 1 — 9)
2. Feine Mattenmuster (sog. Jomon 縄紋)
3. Gut ausgebildete Zacken am Rand (Fig. 7. 1 — 18)
4. Manchmal Stücke mit roten Mustern bemalt
5. Meist dünn gearbeitet und hart gebrannt
6. Schwarzbraune Farbe und häufig Oberrand des Gefässes poliert

Gruppe B.

1. Etwas verwinkelte Kurvenmuster
3. Rohe Mattenmuster
3. Schlechte entwickelte Zacken
4. Keine rot bemalten Scherben

a). Menschliche Skelette

Wir fanden ein Menschenskelett am Ausgrabungpunkt C. in den Muschelschichten. Es liegt in Hockerstellung in der Richtung Nord-West nach Süd-Ost, den Kopf nach Nord-West, und ist sehr gut erhalten. Nur ein einziges Messer (Fig. 5. B) aus Obsidian lag auf seiner Lende. Ich vermute dieses Messer gehört zum Skelett. Aber weitere Beigaben fand ich nicht. Die physische Untersuchung des Skeletts wird später von anderer Seite veröffentlicht.

b). Tierische Knochen und Muscheln

Tierknochen waren nicht zahlreich, doch konnte ich folgende Arten feststellen:

Säugetiere:

Shika nippon nippon

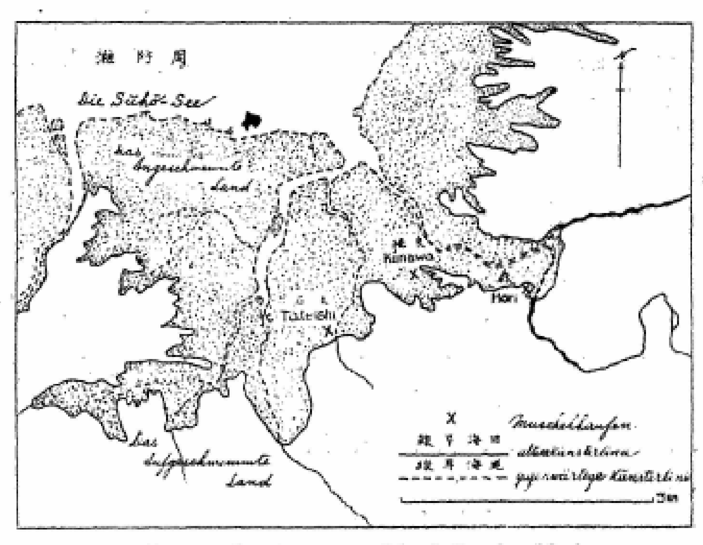
Balaenortera velifer ?

Fische:

noch nicht festgestellt

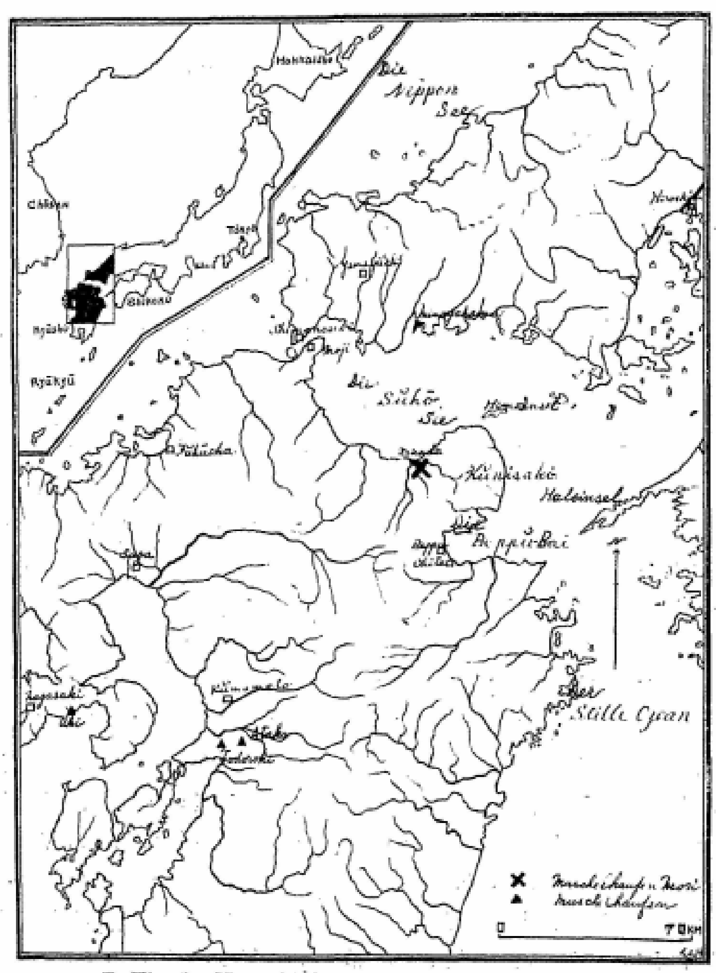
Muscheln: (Bestimmung nach Fürst K. Ohyama)

1. Pòlinices (Nveerita) didyma
2. Rapana thomasiane
3. Fusinus perplexus
4. Thais (Mancinella) bronni
5. Turbo (Lunella) coronatus coreensis
6. Thiara (Semisulcospira) libertina
7. Tympanotonus cingulatus



E. Fig. 2. Umgebung von Muschelhaufen Mori.

Muschelhaufens wurde von der Strasse etwa 30m lang von Norden nach Süden angeschnitten. So kann man leicht dessen Schichtung sehen, weshalb die Ausgrabung auch keine besondere Mühe machen kann. Die Humusschicht ist zwischen 80 — 100cm dick und hat keine steinzeitlichen Reste, sondern nur einige Scherben von sog. "Iwaibe-Ware", (祝部土器) die in unsere japanische protohistorische Zeit gehört (schon Bronze-Eisenzeit). Die Muschelschichten sind ca. 75 — 100 cm dick, und darin fand ich die Haupt-Menge der Kulturreste und habe im unteren Teil dieser Schichten drei Feuerplätze angetroffen. Unter den Muschelschichten ist etwas toniger Sand, doch konnte ich im oberen Teil dieses Sandes bis zu 30cm Tiefe auch einige Kulturreste finden.



E. Fig. 1. Uebersichtkarte der Umgebung der Mori

III. Fundgegenstände

1. Naturreste

Resume ber üdie neu gefunden Muschelhaufen Mori (森) unweit von Takada (高田), Prov. Bungo (豐後), Kyushu (九州).

von

Kiyoyuki Higuchi

I. Allgemeine Bemerkungen

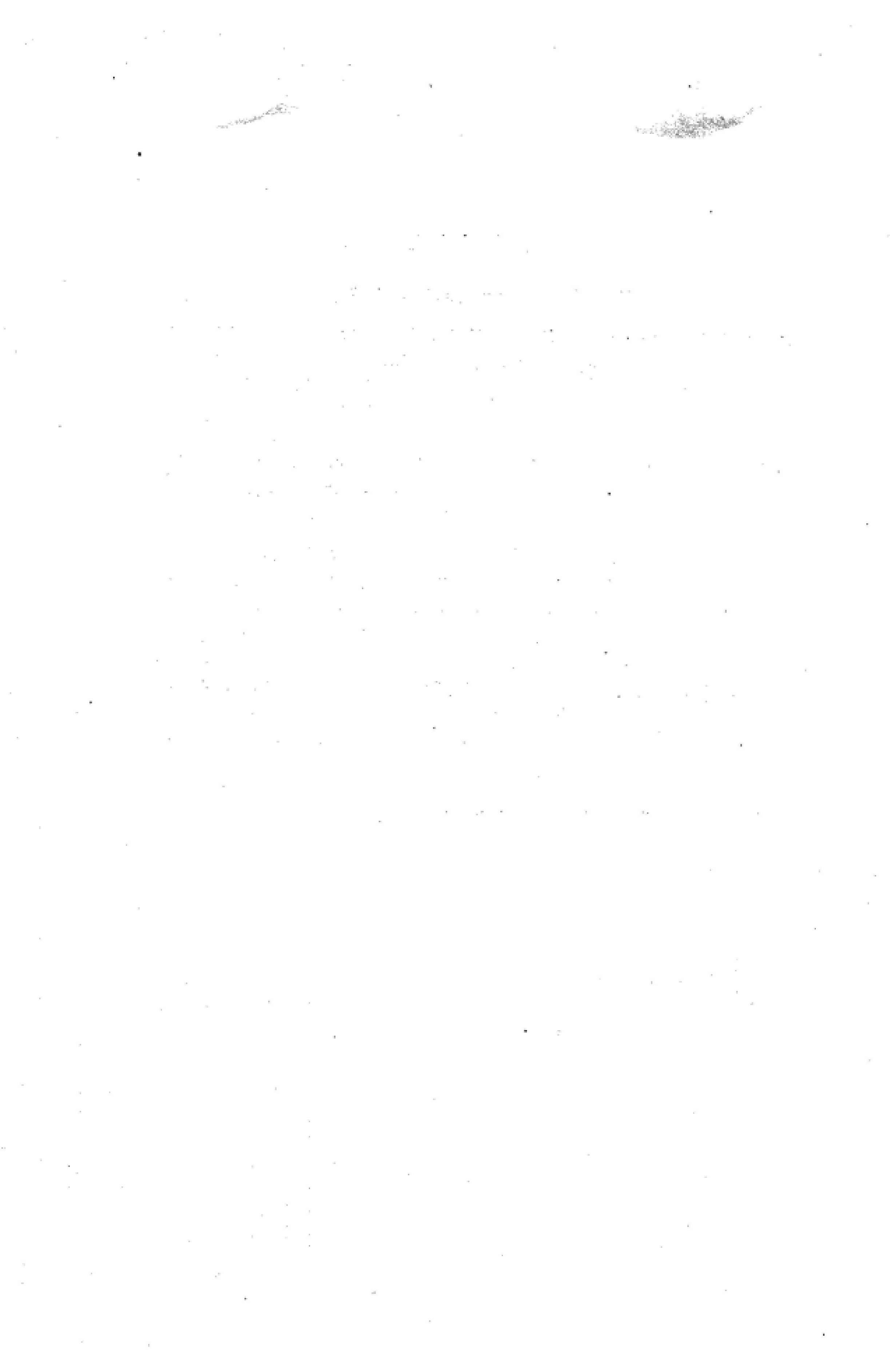
Die Hauptverbreitung der Jomon-Steinzeitkultur (繩紋式石器時代文化) auf der japanischen Hauptinsel ist in Mittel bis Nord-Ost Japan (1); in der Gegend der Seto-Inlandsee (瀬戸内海) ist ziemlich wenig gefunden. Die Funde sind meist nur sogenannte Freilandfunde. Muschelhaufen (貝塚) sind nicht häufig und besonders in der Gegend der Nord-Ost Küste von Kyushu bisher fast unbekannt, trotzdem man dort ziemlich viel Yayoi-Kultur (彌生式文化) sowie protohistorische Hügelgräber u. a. fand. Doch an der Südküste von Kyushu sieht man zur Jomon-Kultur gehörige Muschelhaufen u. a. nicht selten.

Im Sommer 1930 bereiste ich in den Sommerferien die Nordküste von Kyushu, und fand zufällig den Muschelhaufen von Mori bei der kleinen Stadt Takada. Sogleich habe ich eine kleine Versuchsgrabung gemacht, über welche ich hier berichte. Dabei fand ich noch zwei Muschelhaufen, Kunawa (來繩) auch bei der Stadt Takada und Tateishi (立石) bei dem Dorf Hube (封戸村), beide nahe bei einander (siehe E. Fig 1. u. 2.). Diesmal berichte ich nur über Mori, über die anderen zwei bei nächster Gelegenheit.

II. Der Fundort und die Ausgrabung

Der Muschelhaufen Mori liegt auf der Westseite der Basis der Halbinsel Kunisaki (國東半島). Die Umgebung östlich und südlich des Muschelhaufens ist vulkanisches Gebirge und steigt von dem Muschelhaufen nach und nach empor bis zum Mittelgebirge von Kyushu. Am Nordrande dieses Gebirges findet sich eine schmale diluviale Terrasse, meist zwischen 20—30m hoch, und mit verschiedenen Erosionsrinnen. Von der Terrasse bis nach dem Meer sind ungefähr 4—6 km aluviale Ebene, welche sich durch die Wirkung der verschiedenen kleinen Flussdeltas nach und nach angehäuft hat.

Es finden sich in diesem Gebiet fast alle praehistorischen sowie protohistorischen Funde auf den diluvialen Terrassen. Der Muschelhaufen Mori ist auch ein Beispiel dafür, wie die Karte zeigt. Er ist etwa 25m hoch. Die Grösse des Muschelhaufen Mori ist ca. 300 qm, was ich durch meine Profilausgrabungen (Grube A bis C) feststellte. Ein Teil des





INHALT

I. Abhandlungen (Japanisch)

II. Kleine Mitteilungen (Japanisch)

TAFEL



Satzungen der Gesellschaft.

1. Der Name der Gesellschaft ist "Shizengaku-Kwai" (Praehistorische Gesellschaft)
2. Der Zweck der Gesellschaft ist das Studium der Praehistorie und ihrer Grenzgebiete und dessen Popularisierung
3. Die Tätigkeit der Gesellschaft erstreckt sich auf
   - A Herausgabe kleiner Mitteilungen und Schriften
   - B Herausgabe der Shizengaku-Zasshi (Zeitschrift für Praehistorie) (Zweimonatlich) und des Jahresberichts.
   - C Veranstaltung von Forschungs-und Studienreisen
   - D Veranstaltung von Vorträgen und Ausstellungen
4. Mitglieder

   Die Mitgliedschaft wird erworben durch jährliche Vorauszahlung eines Beitrags von 5 Yen. Personen welche einen einmaligen Beitrag von 200 Yen oder mehr zahlen, werden lebenslängliche Mitglieder. Personen welche sich um die Gesellschaft besonders verdient gemacht haben, können Ehrenmitglieder werden und haben damit die Stellung der lebenslänglichen Mitglieder
5. Die Mitglieder erhalten die Zeitschrift und den Jahresbericht frei, jedoch wird für Zusendung nach dem Ausland das Porto berechnet
6. Rechte der Mitglieder

   Die Mitglieder haben das Recht, die Einrichtungen des Ohyama Instituts für Praehistorie zu benutzen

   Die Arbeiten der Mitglieder sollen in der Praehistorischen Zeitschrift veröffentlicht werden

   Ferner haben die Mitglieder das Recht, an den Forschungs- und Studienreisen der Gesellschaft teil zu nehmen, die Vorträgen und Ausstellungen zu besuchen, sowie die Sammlungen und die Bibliothek der Gesellschaft zu benutzen
7. Ein aus mehreren Mitgliedern, bestehender Vorstand führt die Geschäfte der Gesellschaft
8. Wenn es sich als notwendig herausstellt, können diese Satzungen später geändert werden
9. Das Büro der Gesellschaft befindet sich:

9. Onden Aoyama Tokio
Ohyama Institut für Praehistorie
(Ohyama Shizengaku-Kenkyujo)

für den Vorstand

Fürst Kashiwa Ohyama	Kensei Hohjoh
Isamu Kohno	Sueo Sugiyama
Mitsuji Miyasaka	Kingo Tazawa

ZEITSCHRIFT
FÜR
PRAEHISTORIE

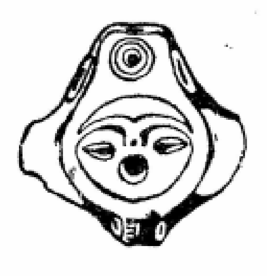
(SHIZENGAKU-ZASSHI)

Organ der Japanischen praehistorischen Gesellschaft

Herausgegeben

von

KASHIWA OHYAMA





3. BAND 1. HEFT

TOKIO

Januar 1931

Japanische praehistorische Gesellschaft

(SHIZENGAKU-KWAI)

Ohyama Tokio



